

中野市 ^{Kawakubo} 川久保・^{Miyaoki} 宮沖遺跡

千曲川替佐・柳沢築堤事業関連
埋蔵文化財発掘調査報告書
—中野市内その2—

2013.3

国土交通省北陸地方整備局
長野県埋蔵文化財センター



川久保2区 全景（東より）



弥生時代中期土器集中川久保SQ12 土器出土状況（北より）

はじめに

長野県の山河を代表する千曲川は、土地に住む人々の生活に関わり、その心や文化にも深く刻まれてきた存在であります。しかし、千曲川は長い歴史のなかで多くの洪水を引き起こし、数々の被害を与えてきました。これら千曲川が引き起こす洪水被害から人々の生命と財産を守るため、無堤地区であった中野市替佐地区で築堤事業が計画されました。この度、その対象地に川久保遺跡、宮沖遺跡がかかったことから、長野県埋蔵文化財センターでは平成16年から19年にかけて、記録保存のための発掘調査を実施しました。

発掘調査では、さまざまな遺構・遺物の発見があり、さらに発掘調査中にも洪水に2回遭遇するなどの困難もありましたが、多くの方々からのご協力とご支援を受けて、発掘調査を無事終了することができました。そして、その成果を本報告書にまとめることができました。

本遺跡は千曲川、斑尾川沿いに立地した遺跡で、古くからこの土地の人々が水田を営み、川で漁業を行うなど、この土地の人々が川の資源を利用し、自然の恩恵に頼りながら生活していた痕跡が残されていました。その一方で、千曲川の洪水の痕跡も数多くみつきり、時代毎に洪水のようすが違うことも知られました。川久保・宮沖遺跡はそうした千曲川と人々の関わり方の歴史が垣間見える遺跡といえます。

また、遺跡が所在する場所が長野県北部の中野市にあって近畿や東海地方のほか、北陸地方などさまざまな地域の人々の交流のようすも知られました。こうした発掘調査の成果が、今後地域の歴史を描く際の資料として活用されるよう願っております。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただいた国土交通省北陸地方整備局、長野県教育委員会、中野市・旧豊田村、中野市教育委員会・旧豊田村教育委員会、長野県立歴史館、地元的地権者や関係者の方々に深甚なる謝意を申し上げます。

例 言

- 1 本書は長野県中野市（旧豊田村）豊津に所在する川久保遺跡、宮沖遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は千曲川替佐・柳沢築堤事業に伴う事前調査で、国土交通省北陸地方整備局からの委託事業として、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』19～24・27・28ほかで紹介したが、内容において相違がある場合は、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書に掲載した図は、国土交通省国土地理院発行の地形図「替佐」（1：25,000）、「中野」（1：50,000）をもとに作成した。
- 5 本書で扱った国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準点としている。座標は日本測地系（旧測地系）による。
- 6 発掘調査にあたって、以下の機関・諸氏に業務委託や協力を得た。
測量・空中写真撮影：（株）こうそく
川久保遺跡 珪藻・花粉、プラントオパール分析、樹種同定、放射性炭素年代測定
：（株）パレオ・ラボ
川久保遺跡 珪藻、プラントオパール分析：（株）バリノ・サーヴェイ
宮沖遺跡 プラントオパール分析：（株）古環境研究所
遺物写真撮影：（株）信毎書籍印刷
報告書編集業務：（有）アルケーリサーチ
報告書印刷：（株）第一企画
- 7 発掘調査および報告書作成にあたり、以下の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜った。御芳名を記して感謝の意を表します（敬称略）
赤羽貞幸 石川日出志 上條信彦 茂原信生 千野 浩 土屋 積 中島庄一
長野県遺跡調査指導委員会（戸沢充剛、会田 進、小野 昭、桐原 健、工楽普通、笹澤 浩、高橋龍三郎、丸山敏一郎）
- 8 発掘調査の担当者は第1章 第2節3に掲載した。
- 9 本書は、市川隆之が編集を行い、調査第1課長上田典男が校閲し、調査部長大竹憲昭が総括した。執筆は第1章 上田典男、その他は市川隆之が行った。
- 10 本報告では遺跡記号、遺構記号は調査時のまま用いることを基本とし、変更していない。
- 11 添付 DVD には本文 PDF ファイル、自然科学分析の報告、遺構・地点別出土土器計測表、遺物観察表を収録した。
- 12 本書で報告した遺物と記録類は中野市教育委員会で保管を予定している。

凡例

- 1 掲載図の縮尺は原則として以下の通りである。これ以外の調査区全体図・基本土層柱状図・調査区土層図などは任意の縮尺を用い、各図に縮尺を掲載した。
竪穴住居跡・掘立柱建物跡 1:80 土坑・竪穴住居跡内施設 1:40 水田跡 1:500
溝跡 1:100 遺構割り付け図 1:250、1:500
- 2 土層色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』(2004年度版)を基準とした。
- 3 遺構の計測値は以下の通りである。
長さ・幅：竪穴住居跡はカマドや煙道を除く主軸方位と直交方向で計測し、掘立柱建物跡は柱痕跡か、柱穴中央を結ぶラインで計測した。土坑・焼土跡は長軸と直交短軸方向の長さを計測した。
主軸方位：隅を結ぶ対角線の二等分線を、旧測地系の北方向からの東(E)か、西(W)方向への傾きで計測した。
深さ：検出面から床面、底面までの深さとし、最も残りの良い部分を計測した。
- 4 掲載した遺構写真は任意の縮尺である。
- 5 本文及び付編DVDに用いた遺構図のスクリーン・ドットは文末に例示したとおりである。これ以外の場合は、当該項目中で説明するか、図中に凡例を示した。
- 6 遺構番号は基本的に調査時のものをそのまま用いている。
 - ・竪穴住居跡内のピットは「Pit」と表記した。また、重複するか帰属関係が不明な土坑は「SK」を冠して表記した。掘立柱建物跡柱穴は「SK」を略してアラビア数字のみで表しているが、竪穴住居跡では出土遺物が多く、アラビア数字のみでは掲載遺物番号と区別しにくいと考えてPitを用いた。
 - ・掘立柱建物跡の柱穴は、調査時に認定したSTでは「Pit」、平成16年度調査時の小型ピットに用いた遺構記号Pitは「P」で表す。また、調査時にSK番号を付された遺構の配置を整理作業で検討して認定した掘立柱建物跡柱穴は「Pit」と表現した。
- 7 掲載した遺物実測図の縮尺は以下の通りである。
土器立面1:4 (一部1:6) 土器拓本1:3 石器1:3 (一部1:2、2:3、1:6)
鉄製品1:2
- 8 掲載した土器のスクリーン・ドットは文末に例示した通りである。
- 9 遺物写真はおよそ実測と近似した縮尺で掲載したが、厳密には同じではない。
- 10 遺物の掲載番号は時代・出土遺構・材質に関わらず、すべて通し番号としている。
- 11 遺物観察表と遺構・地点別出土土器計測表は添付DVDに収録している。

本文内のスクリーントーンは以下のものを用いた。

遺構図	被熱赤変部分		礎断面	
	炭化物分布範囲		柱 痕	
遺物図	赤彩土器		不明瞭な赤彩処理	
	黒色土器		不明瞭な黒色処理	
土器断面	縄文・弥生土器		灰軸・緑軸陶器	
	須恵器		中近世陶器	
	軟質須恵器		中近世磁器	

ドットは以下のものを表す

土器	●
石	○

目次

口 絵
例 言
凡 例
目 次

第1章 調査の経過と方法	1
第1節 調査に至る経緯	1
1 替佐築堤の事業概要	1
2 埋蔵文化財の保護協議	2
3 築堤工事に伴う川久保・宮沖遺跡の発掘調査に係る基本協定及び受委託契約	5
第2節 調査の経過と体制	6
1 調査の経過	6
2 整理作業の経過	8
3 調査の体制	8
4 調査日誌抄	9
第3節 調査の方法	11
1 発掘調査の方法	11
(1) 発掘作業の記録方法 (2) トレンチによる遺構調査面の確認と調査範囲の設定	
(3) 遺構調査の方法 (4) 遺構の記録方法	
2 整理作業の方法	18
(1) 基礎整理作業 (2) 本格整理作業	
第2章 遺跡の地形・歴史的環境	19
第1節 遺跡の位置と地形環境	19
1 長野盆地西縁断層と河岸段丘	19
2 河川の移動	21
3 土層堆積	22
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	23
第3章 検出された遺構と遺物	32
第1節 基本土層と遺跡地形	32
1 基本土層	32
2 遺跡の地形	38
(1) 遺跡の地形区分 (2) 段丘I上面の千曲川・斑尾川の浸食地形と河道跡	
(3) 地震痕跡	
第2節 縄文時代の遺構と遺物	52
1 縄文時代の概要	52
2 縄文時代の遺構	52
3 縄文時代の遺物	54
(1) 縄文土器 (2) 縄文時代の石器	
第3節 弥生時代の遺構と遺物	58
1 弥生時代の概要	58

2	弥生時代の遺構	58
	(1) 土器集中 (2) 土坑 (3) ビット (4) 溝跡 (5) 焼土跡・炭化物集中 (6) 青銅器埋納坑の切り取りと遺構保存	
3	弥生時代の遺物	70
	(1) 弥生時代前期末～中期初頭の土器 (2) 弥生時代中期後半の土器 (3) 弥生時代中期末～後期初頭の土器	
4	弥生時代のまとめ	80
第4節	古墳時代前期の遺構と遺物	99
1	古墳時代前期の概要	99
2	古墳時代前期の遺構	99
	(1) 竪穴住居跡 (2) 掘立柱建物跡 (3) 土坑 (4) 土器集中	
3	古墳時代前期の遺物	115
	(1) 古墳時代前期の土器 (2) 古墳時代前期の土製品 (3) 古墳時代前期の石製品	
4	古墳時代前期のまとめ	137
第5節	古墳時代後期～奈良時代の遺構と遺物	140
1	古墳時代後期～奈良時代の概要	140
2	古墳時代後期～奈良時代の遺構	140
	(1) 竪穴住居跡 (2) 掘立柱建物跡 (3) 土坑 (4) 土器集中	
3	古墳時代後期～奈良時代の遺物	200
	(1) 古墳時代後期～奈良時代の土器 (2) 古墳時代後期～奈良時代の土製品 (3) 古墳時代後期～奈良時代の石製品 (4) 古墳時代後期～奈良時代の金属製品	
4	古墳時代後期～奈良時代のまとめ	274
第6節	平安時代の遺構と遺物	277
1	平安時代の概要	277
2	平安時代の遺構	277
	(1) 竪穴住居跡 (2) 掘立柱建物跡 (3) 土坑 (4) 焼土跡	
3	平安時代の遺物	299
	(1) 平安時代の土器 (2) 平安時代の土製品 (3) 平安時代の石製品 (4) 平安時代の金属製品	
4	平安時代のまとめ	326
第7節	中世の遺構と遺物	327
1	中世の概要	327
2	中世の遺構	327
	(1) 掘立柱建物跡 (2) 竪穴建物跡 (3) 土坑 (4) 墓跡 (5) 溝跡 (6) 焼土跡 (7) 畑跡 (8) 水田跡	
3	中世の遺物	392
	(1) 中世の焼物 (2) 中世の土製品 (3) 中世の石製品 (4) 中世の金属製品	
4	中世のまとめ	403
第8節	近世の遺構と遺物	405
1	近世の概要	405
2	近世の遺構	406

(1) 川久保1区近世屋敷跡 (2) 川久保2・4区の溝跡と土坑	
(3) 川久保1区1～5面水田跡 (4) 宮沖1区1面の水田関連遺構	
(5) 川久保6区と宮沖3・4区の斑尾川氾濫原内の水田跡	
3 近世の遺物	428
(1) 近世の焼物 (2) 近世の土製品 (3) 近世の石製品 (4) 近世の金属製品	
4 近世のまとめ	434
第4章 結語	437
引用・参考文献	439
遺構割り付け図	443
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 川久保・宮沖遺跡の位置・遺跡周辺の地形	1	第27図 川久保4区土器集中の分布	62
第2図 平成14年度トレンチ調査位置図	3	第28図 川久保4区土器集中周辺の土層1	63
第3図 年度別調査区	7	第29図 川久保4区土器集中周辺の土層2	64
第4図 平成16年度洪水の浸食範囲	12	第30図 川久保2・4区2面検出の土坑、溝跡、焼土跡分布	66
第5図 川久保・宮沖遺跡の範囲	13	第31図 弥生時代の土坑1	67
第6図 グリッド設定図	15	第32図 弥生時代の土坑2	68
第7図 トレンチ配置図	17	第33図 弥生時代の土坑3	69
第8図 川久保・宮沖遺跡周辺の地質図	20	第34図 川久保SB13	71
第9図 中野市周辺遺跡分布図	27	第35図 弥生時代中期後半土器の器種分類	73
第10図 川久保・宮沖遺跡土層柱状図1	34	第36図 弥生時代中期後半の壺・甕法量分布	74
第11図 川久保・宮沖遺跡土層柱状図2	35	第37図 弥生時代中期後半土器1	81
第12図 南西からみた河岸段丘模式図	39	第38図 弥生時代中期後半土器2	82
第13図 斑尾川氾濫原内の土層と遺構	41	第39図 弥生時代中期後半土器3	83
第14図 川久保遺跡浸食地形・帯状窪地地形分布	42	第40図 弥生時代中期後半土器4	84
第15図 NR1b・NR1c 土層断面図	44	第41図 弥生時代中期後半土器5	85
第16図 NR1b 出土土器	46	第42図 弥生時代中期後半土器6	86
第17図 NR1b・NR1c、NR02 出土土器	47	第43図 弥生時代中期後半土器7	87
第18図 NR1a・NR02 土層断面図	49	第44図 弥生時代中期後半土器8	88
第19図 NR04・05・06 土層断面図	50	第45図 弥生時代中期後半土器9	89
第20図 縄文土器の出土重量分布	53	第46図 弥生時代中期後半土器10	90
第21図 縄文時代の土坑	54	第47図 弥生時代中期後半土器11	91
第22図 縄文土器、縄文時代の石器1	56	第48図 弥生時代中期後半土器12	92
第23図 縄文時代の石器2	57	第49図 弥生時代中期後半土器13	93
第24図 弥生時代中期後半土器の出土重量分布	59	第50図 弥生時代中期後半土器14	94
第25図 弥生時代後期土器の出土重量分布	59	第51図 弥生時代中期後半土器15	95
第26図 弥生時代の主要遺構分布概略	60	第52図 弥生時代中期後半土器16	96
		第53図 弥生後期土器・他地区出土の弥生土器	97
		第54図 古墳時代前期土器の出土重量分布	100

第 55 図	古墳時代前期の主要遺構分布概略	100	第 96 図	川久保 SB59・61・62、宮沖 SB01	176
第 56 図	宮沖 SB11・20・22・24・31	102	第 97 図	宮沖 SB02・03	177
第 57 図	古墳時代前期の土坑	104	第 98 図	宮沖 SB05・06	178
第 58 図	川久保 SL04	106	第 99 図	宮沖 SB08・12・15	179
第 59 図	川久保 SL04 の水口	107	第 100 図	宮沖 SB09・13	180
第 60 図	川久保 SL06	107	第 101 図	宮沖 SB10・23	181
第 61 図	川久保 1 区 12 面水田跡	108	第 102 図	宮沖 SB14	182
第 62 図	宮沖 1 区 3 面水田跡	110	第 103 図	宮沖 SB16・17・18	183
第 63 図	宮沖 SD10・14～17	111	第 104 図	宮沖 SB19・28	184
第 64 図	川久保 SQ26・27 土器出土重量分布	114	第 105 図	宮沖 SB27	185
第 65 図	NR1b 土層と川久保 SQ27 土器出土 垂直分布	115	第 106 図	宮沖 SB25・29・30	186
第 66 図	古墳時代前期土器の器種分類 1	117	第 107 図	川久保 ST01・02・08・09	192
第 67 図	古墳時代前期土器の器種分類 2	118	第 108 図	川久保 ST10・11・12・13	193
第 68 図	古墳時代前期土器 1	125	第 109 図	宮沖 ST02・03・04・34	194
第 69 図	古墳時代前期土器 2	126	第 110 図	宮沖 ST35・36・37・38	195
第 70 図	古墳時代前期土器 3	127	第 111 図	古墳時代後期～奈良時代土坑	196
第 71 図	古墳時代前期土器 4	128	第 112 図	古墳時代後期～奈良時代土器集中 1	198
第 72 図	古墳時代前期土器 5	129	第 113 図	古墳時代後期～奈良時代土器集中 2	199
第 73 図	古墳時代前期土器 6	130	第 114 図	古墳時代後期～奈良時代土器の器種 分類 1	201
第 74 図	古墳時代前期土器 7	131	第 115 図	古墳時代後期～奈良時代土器の器種 分類 2	202
第 75 図	古墳時代前期土器 8	132	第 116 図	古墳時代後期～奈良時代土器の時期 区分 1	235
第 76 図	古墳時代前期土器 9	133	第 117 図	古墳時代後期～奈良時代土器の時期 区分 2	236
第 77 図	古墳時代前期土器 10	134	第 118 図	古墳時代後期～奈良時代土器 1	238
第 78 図	古墳時代前期土器 11	135	第 119 図	古墳時代後期～奈良時代土器 2	239
第 79 図	古墳時代前期土製品、石製品	136	第 120 図	古墳時代後期～奈良時代土器 3	240
第 80 図	古墳時代後期～奈良時代土器の 出土重量分布	141	第 121 図	古墳時代後期～奈良時代土器 4	241
第 81 図	古墳時代後期～奈良時代の主要遺構 分布概略	141	第 122 図	古墳時代後期～奈良時代土器 5	242
第 82 図	同所でのカマド造り替え	142	第 123 図	古墳時代後期～奈良時代土器 6	243
第 83 図	近接場所のカマド造り替え	142	第 124 図	古墳時代後期～奈良時代土器 7	244
第 84 図	住居跡拡張に伴うカマドの造り替え	142	第 125 図	古墳時代後期～奈良時代土器 8	245
第 85 図	位置を替えるカマド造り替え	142	第 126 図	古墳時代後期～奈良時代土器 9	246
第 86 図	川久保 SB05・06・07・08	166	第 127 図	古墳時代後期～奈良時代土器 10	247
第 87 図	川久保 SB15・17	167	第 128 図	古墳時代後期～奈良時代土器 11	248
第 88 図	川久保 SB16・28	168	第 129 図	古墳時代後期～奈良時代土器 12	249
第 89 図	川久保 SB30・32・33・40	169	第 130 図	古墳時代後期～奈良時代土器 13	250
第 90 図	川久保 SB35・36・37・38	170	第 131 図	古墳時代後期～奈良時代土器 14	251
第 91 図	川久保 SB41・42・49	171	第 132 図	古墳時代後期～奈良時代土器 15	252
第 92 図	川久保 SB50・54	172	第 133 図	古墳時代後期～奈良時代土器 16	253
第 93 図	川久保 SB51	173	第 134 図	古墳時代後期～奈良時代土器 17	254
第 94 図	川久保 SB53・58	174	第 135 図	古墳時代後期～奈良時代土器 18	255
第 95 図	川久保 SB55・60	175			

第136図	古墳時代後期～奈良時代土器 19	256	第178図	川久保 ST04・17・18・19	348
第137図	古墳時代後期～奈良時代土器 20	257	第179図	川久保 ST21・22・23	349
第138図	古墳時代後期～奈良時代土器 21	258	第180図	川久保 ST24・25・26	350
第139図	古墳時代後期～奈良時代土器 22	259	第181図	川久保 ST27・28・29	351
第140図	古墳時代後期～奈良時代土器 23	260	第182図	川久保 ST30・31・32	352
第141図	古墳時代後期～奈良時代土器 24	261	第183図	川久保 ST33・34・40	353
第142図	古墳時代後期～奈良時代土器 25	262	第184図	川久保 ST35・36・37・38・39	354
第143図	古墳時代後期～奈良時代土器 26	263	第185図	宮沖 ST01・05・06	355
第144図	古墳時代後期～奈良時代土器 27	264	第186図	宮沖 ST07・08・09・10・11	356
第145図	古墳時代後期～奈良時代土器 28	265	第187図	宮沖 ST20・21	357
第146図	古墳時代後期～奈良時代土器 29	266	第188図	宮沖 ST13・14・15・16	358
第147図	古墳時代後期～奈良時代土器 30	267	第189図	宮沖 ST12・17・18・19	359
第148図	古墳時代後期～奈良時代土製品、 石製品 1	270	第190図	宮沖 ST22・23・24・25・26	360
第149図	古墳時代後期～奈良時代石製品 2	271	第191図	宮沖 ST29・30・31・33	361
第150図	古墳時代後期～奈良時代石製品 3	272	第192図	宮沖 ST27・28・32	362
第151図	古墳時代後期～奈良時代石製品 4、 金属製品	273	第193図	川久保 SB21・22・57	365
第152図	平安時代土器の出土重量分布	278	第194図	川久保 SB23・29・31・39・48	366
第153図	平安時代の主要遺構分布概略	278	第195図	川久保 1区 10面の中世土坑	371
第154図	川久保 SB01・02	288	第196図	川久保 1区 10面、同2区 1面、同5区 2面の中世土坑	372
第155図	川久保 SB09・10・11	289	第197図	川久保 3区 1面、同5区 1面の 中世土坑	373
第156図	川久保 SB11・12・18A・18B	290	第198図	川久保 5区、宮沖 1区 1・2面、同5区 の中世土坑	374
第157図	川久保 SB19・20・24・43	291	第199図	宮沖 5区の中世土坑	375
第158図	川久保 SB25・26・27・47	292	第200図	川久保 1区 10面の墓跡	377
第159図	川久保 SB44・45・56	293	第201図	川久保 SL09	381
第160図	川久保 SB34・46・52	294	第202図	川久保 1区中世水田用水の変遷	384
第161図	宮沖 SB04・07・21	295	第203図	川久保 1区 6・7面水田跡	386
第162図	川久保 ST07・41、平安時代の土坑	296	第204図	水田内の用水跡	387
第163図	平安時代竪穴住居跡出土杯 A 法量分布	301	第205図	上層水田畦跡の転写痕水田跡	387
第164図	平安時代土器器種分類	302	第206図	川久保 1区 8面水田跡	389
第165図	平安時代土器の時期区分	313	第207図	川久保 1区 9面水田跡	390
第166図	平安時代土器 1	314	第208図	用水内の堰 (川久保 SD62)	392
第167図	平安時代土器 2	315	第209図	川久保 1区 10面水田跡	393
第168図	平安時代土器 3	316	第210図	川久保 SD61・62	394
第169図	平安時代土器 4	317	第211図	中世焼物 1	399
第170図	平安時代土器 5	318	第212図	中世焼物 2	400
第171図	平安時代土器 6	319	第213図	中世土製品、石製品 1	401
第172図	平安時代土器 7	320	第214図	中世石製品 2、金属製品 1	402
第173図	平安時代土器 8	321	第215図	中世金属製品 2	403
第174図	平安時代土製品、石製品	322	第216図	近世の主要遺構分布概略	406
第175図	平安時代金属製品	323	第217図	川久保 1区近世屋敷跡	407
第176図	中世の主要遺構分布概略	328	第218図	川久保 ST05・06・14・15	408
第177図	川久保 ST03・16	347			

第219図	川久保 ST20	409	第257図	割付遺構図(1:120)7 宮沖1区2面 2古墳時代後期~平安時代	462
第220図	川久保1区近世屋敷跡内の近世土坑	411	第258図	割付遺構図(1:120)8 宮沖1区2面 3古墳時代後期~平安時代	463
第221図	川久保 SH02、川久保4区の近世土坑	412	第259図	割付遺構図(1:120)9 宮沖1区2面 4古墳時代後期~平安時代	464
第222図	同所に重なる近世水田跡	413	第260図	割付遺構図(1:120)10 宮沖5区1面 5中世	465
第223図	川久保1区1面水田	416	第261図	割付遺構図(1:120)11 宮沖5区1面 6中世	466
第224図	川久保 SD42	417	第262図	割付遺構図(1:120)12 宮沖5区1面 5古墳時代後期~奈良時代	467
第225図	石を芯材とする畦	418	第263図	割付遺構図(1:120)13 宮沖5区1 面6古墳時代後期~奈良時代	468
第226図	稲株痕検出状況	418	第264図	割付遺構図(1:120)14 川久保5区2 面7中世	469
第227図	川久保1区2面水田跡	419	第265図	割付遺構図(1:120)15 川久保5区2 面8中世	470
第228図	川久保1区3面水田跡	421	第266図	割付遺構図(1:120)16 川久保5区2 面9中世	471
第229図	足跡痕	422	第267図	割付遺構図(1:120)17 川久保5区3 面7古墳時代後期~奈良時代	472
第230図	畝間の溝跡状溝跡	422	第268図	割付遺構図(1:120)18 川久保5区3 面8古墳時代後期~奈良時代	473
第231図	川久保1区4面水田跡	423	第269図	割付遺構図(1:120)19 川久保5区3 面9古墳時代後期~奈良時代	474
第232図	畦復旧に関連する溝跡	424	第270図	割付遺構図(1:120)20 川久保1区10 面12中世	475
第233図	川久保1区5面水田跡	425	第271図	割付遺構図(1:120)21 川久保1区10 面13中世	476
第234図	鳥形土製品	430	第272図	割付遺構図(1:120)22 川久保1区10 面14中世	477
第235図	近世焼物・石製品1	432	第273図	割付遺構図(1:120)23 川久保1区10 面15中世	478
第236図	近世石製品2、金属製品	432	第274図	割付遺構図(1:120)24 川久保1区10 面16中世	479
第237図	時期不明石製品、金属製品	433	第275図	割付遺構図(1:120)25 川久保1区11 面10古墳時代後期	480
第238図	水田面毎の水田面積グラフ	435	第276図	割付遺構図(1:120)26 川久保1区11 面11古墳時代後期	481
第239図	川久保・宮沖遺跡遺構全体図	443・444	第277図	割付遺構図(1:120)27 川久保1区南東部 ・2区1面17古墳時代後期~中世	482
第240図	遺構割付図の位置	445	第278図	割付遺構図(1:120)28 川久保1区南東部 ・2区1面18古墳時代後期~中世	483
第241図	割付遺構図(1:500)1	446			
第242図	割付遺構図(1:500)2	447			
第243図	割付遺構図(1:500)3	448			
第244図	割付遺構図(1:500)4	449			
第245図	割付遺構図(1:500)5	450			
第246図	割付遺構図(1:500)6	451			
第247図	割付遺構図(1:500)7	452			
第248図	割付遺構図(1:500)8	453			
第249図	割付遺構図(1:500)9	454			
第250図	割付遺構図(1:500)10	455			
第251図	割付遺構図(1:120)1 宮沖1区1面 1・2中世	456			
第252図	割付遺構図(1:120)2 宮沖1区1面 3中世	457			
第253図	割付遺構図(1:120)3 宮沖1区1面 4中世	458			
第254図	割付遺構図(1:120)4 宮沖1区2面 1・2中世	459			
第255図	割付遺構図(1:120)5 宮沖1区2面 3中世	460			
第256図	割付遺構図(1:120)6 宮沖1区2面 4中世	461			

第279図	割付遺構図(1:120)29	川久保2区1面	2面27	弥生～古墳時代前期	492
	19	古墳時代後期～中世			
第280図	割付遺構図(1:120)30	川久保2区1面	2面28	弥生～古墳時代前期	493
	20	古墳時代後期～中世			
第281図	割付遺構図(1:120)31	川久保2区1面	2面29・30	弥生～古墳時代前期	494
	21	古墳時代後期～中世			
第282図	割付遺構図(1:120)32	川久保2区1面	2面31	弥生～古墳時代前期	495
	22	古墳時代後期～中世			
第283図	割付遺構図(1:120)33	川久保2区1面	2面32・33	弥生～古墳時代前期	496
	23	古墳時代後期～中世			
第284図	割付遺構図(1:120)34	川久保2区1面	2面34	弥生～古墳時代前期	497
	24	古墳時代後期～中世			
第285図	割付遺構図(1:120)35	川久保3区1面	2面35	弥生～古墳時代前期	498
	25	縄文時代～中世			
第286図	割付遺構図(1:120)36	川久保3区1面	2面36	弥生～古墳時代前期	499
	26	縄文時代～中世			
第287図	割付遺構図(1:120)37	川久保2・4区	2面37	弥生～古墳時代前期	500

挿表目次

第1表	発掘調査遺跡諸届けなど提出状況	5	一覧表	165
第2表	受委託契約一覧	6	古墳時代後期～奈良時代土坑一覧表	191
第3表	川久保・宮沖遺跡調査体制	8	竪穴住居跡別古墳時代後期～奈良時代土器食器具計測表	206
第4表	中野市周辺遺跡一覧表(1)	28	第23表	竪穴住居跡別古墳時代後期～奈良時代土器貯蔵具計測表
第5表	中野市周辺遺跡一覧表(2)	29	第24表	竪穴住居跡別古墳時代後期～奈良時代土器煮炊具計測表
第6表	中野市周辺遺跡一覧表(3)	30	第25表	北信地域の古墳時代後期土器編年対応表
第7表	中野市周辺遺跡一覧表(4)	31	第26表	平安時代竪穴住居跡一覧表(1)
第8表	弥生時代中期後半土器集中出土土器計測表	61	第27表	平安時代竪穴住居跡一覧表(2)
第9表	弥生時代中期前後の土坑一覧表	62	第28表	平安時代掘立柱建物跡一覧表
第10表	弥生時代中期前後の焼土跡一覧表	65	第29表	平安時代土坑一覧表
第11表	弥生時代後期初頭竪穴住居跡一覧表	70	第30表	中世掘立柱建物跡一覧表(1)
第12表	平安時代前期竪穴住居跡一覧表	70	第31表	中世掘立柱建物跡一覧表(2)
第13表	古墳時代前期土坑一覧表	101	第32表	中世竪穴建物跡一覧表
第14表	古墳時代前期水田跡面積計測表	105	第33表	中世土坑一覧表(1)
第15表	川久保SQ26出土土器計測表	113	第34表	中世土坑一覧表(2)
第16表	川久保SQ27出土土器計測表	113	第35表	中世焼土跡一覧表
第17表	古墳時代後期～奈良時代竪穴住居跡一覧表(1)	143	第36表	中世水田跡面積計測表
第18表	古墳時代後期～奈良時代竪穴住居跡一覧表(2)	144	第37表	近世掘立柱建物跡一覧表
第19表	古墳時代後期～奈良時代竪穴住居跡一覧表(3)	145	第38表	近世土坑一覧表
第20表	古墳時代後期～奈良時代掘立柱建物跡		第39表	近世水田跡面積計測表

写真図版目次

- PL 1 川久保・宮沖遺跡調査区全景 1
PL 2 川久保・宮沖遺跡調査区全景 2
PL 3 川久保・宮沖遺跡土層
PL 4 縄文・弥生時代遺構 1
PL 5 弥生時代遺構 2
PL 6 弥生時代遺構 3、古墳時代前期遺構 1
PL 7 古墳時代前期遺構 2
PL 8 古墳時代前期遺構 3
PL 9 古墳時代後期～奈良時代遺構 1
PL 10 古墳時代後期～奈良時代遺構 2
PL 11 古墳時代後期～奈良時代遺構 3
PL 12 古墳時代後期～奈良時代遺構 4
PL 13 古墳時代後期～奈良時代遺構 5
PL 14 古墳時代後期～奈良時代遺構 6
PL 15 古墳時代後期～奈良時代遺構 7
PL 16 古墳時代後期～奈良時代遺構 8
PL 17 古墳時代後期～奈良時代遺構 9
PL 18 古墳時代後期～奈良時代遺構 10
PL 19 平安時代遺構 1
PL 20 平安時代遺構 2
PL 21 平安時代遺構 3
PL 22 平安時代遺構 4
PL 23 中世遺構 1
PL 24 中世遺構 2
PL 25 中世遺構 3
PL 26 中世遺構 4
PL 27 中世遺構 5
PL 28 近世遺構 1
PL 29 近世遺構 2
PL 30 近世遺構 3
PL 31 縄文時代土器・石器
PL 32 弥生時代中期土器 1
PL 33 弥生時代中期土器 2
PL 34 弥生時代中期土器 3
PL 35 弥生時代中期土器 4
PL 36 弥生時代中期土器 5
PL 37 弥生時代中期土器 6
PL 38 弥生時代中期土器 7
PL 39 弥生時代中期土器 8
PL 40 弥生時代中期土器 9
PL 41 弥生時代前期末～後期土器
PL 42 古墳時代前期土器 1
PL 43 古墳時代前期土器 2
PL 44 古墳時代前期土器 3
PL 45 古墳時代前期土器 4
PL 46 古墳時代前期土器 5
PL 47 古墳時代後期～奈良時代土器 1
PL 48 古墳時代後期～奈良時代土器 2
PL 49 古墳時代後期～奈良時代土器 3
PL 50 古墳時代後期～奈良時代土器 4
PL 51 古墳時代後期～奈良時代土器 5
PL 52 古墳時代後期～奈良時代土器 6
PL 53 古墳時代後期～奈良時代土器 7
PL 54 古墳時代後期～奈良時代土器 8
PL 55 古墳時代後期～奈良時代土器 9
PL 56 古墳時代後期～奈良時代土器 10
PL 57 古墳時代後期～奈良時代土器 11
PL 58 古墳時代後期～奈良時代土器 12
PL 59 平安時代土器 1
PL 60 平安時代土器 2
PL 61 中世焼物 1
PL 62 中世焼物 2、近世焼物 1
PL 63 土製品、石製品 1
PL 64 石製品 2
PL 65 石製品 3・金属製品

第1章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経緯

1 替佐築堤の事業概要（第1図）

千曲川は長野県の北半分の河川の水を集めて北流し、新潟県境で信濃川と名称を変えて日本海へ注ぎこむ。斑尾山を源とする斑尾川は、飯綱町から流れる斑尾川と合流し、千曲川にそそぎ込む。斑尾川は、高野辰之作詞、唱歌「ふるさと」で「こぶな釣りし、かの川」と歌われた川で、斑尾川も含めて現在でも魚類や水生生物が数多く生息している自然環境豊かな川である。中野市の替佐地区（旧豊田村）は、この斑尾川と千曲川の合流点に位置する。

替佐地区は無堤地区であったこともあり、昭和57・58年（1982・1983年）の出水により多数の家屋が浸水被害を受けた。こうした浸水被害を解消し、生活する人々の生命や財産を洪水等の被害から守るため、国土交通省北陸地方整備局千曲川工事事務所（千曲川河川事務所）は、平成10年（1998年）から築堤事業に着手した。まず、千曲川本川の改修に着手し、事業地に所在する遺跡の調査と築堤事業を並行して進めながら、平成18年（2006年）より千曲川からの逆流の影響を受ける区間の斑尾川の改修に着手した。ただ、この間の平成16・18年（2004年・2006年）にも台風等による洪水が発生したが、平成18年の出水に際しては、家屋移転が進み、被害も大幅に減少した。



第1図 川久保・宮沖遺跡の位置と遺跡周辺の地形

2 埋蔵文化財の保護協議

川久保・宮沖遺跡は長野県北部、中野市(旧豊田村 2005 年合併)の豊津地区の根添・宮沖地籍に所在する。千曲川・斑尾川合流付近の左岸に立地し、合流地点付近左岸が川久保遺跡、その斑尾川上流側が宮沖遺跡となる。川久保遺跡は明治 30 年代に襲い入れられた石斧 12 本の発見から、宮沖遺跡は赤彩の高杯(器台)の発見からそれぞれ存在が知られていたが、調査歴もなく、厚い千曲川洪水土層に覆われた遺跡の詳細は不明であった。この遺跡にかかって千曲川替佐築堤工事が計画され、記録保存のための発掘調査を実施することとなり、長野県埋蔵文化財センターが担当した。長野県埋蔵文化財センターでは平成 14 年度から築堤工事にかかる千田遺跡の調査と並行して川久保遺跡の試掘調査に着手し、平成 16～19 年度に川久保遺跡と宮沖遺跡の試掘調査と本調査を行った。その結果、川久保・宮沖遺跡は千曲川・斑尾川に面して洪水の様相や変遷と共に、弥生時代中期、弥生時代後期初頭、古墳時代前期、古墳時代後期～奈良時代、平安時代、中世、近世にいたるまで、長期の人間の活動が残された遺跡であることが明らかになった。

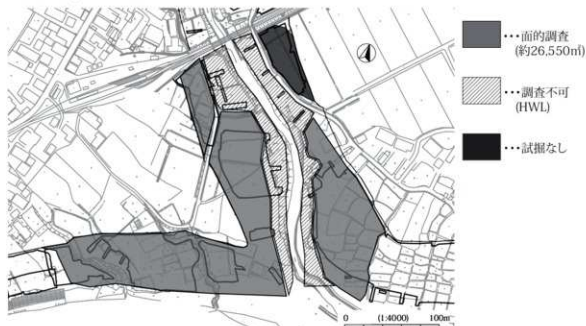
平成 13 年度(2001 年度) 10 月 22 日に、国土交通省北陸地方整備局千曲川河川事務所(以下、千曲川河川事務所)と長野県教育委員会(以下、県教委)による替佐築堤事業に関わる埋蔵文化財の保護協議が現地で行われた。千曲川河川事務所からは、築堤に関わる工事は上流側から着手し、斑尾川沿いは JR 飯山線まで行う計画だが、飯山線の上流側も協議中で、いずれ事業化する見込みであること、本堤より内側部分は流路断面を確保するために掘り下げるので堤防部分とその内側が事業地となることが示された。そして、協議の結果、平成 14 年度に千田遺跡から発掘調査に着手することとし、調査主体は長野県埋蔵文化財センター(以下、当センター)が担当すること、調査対象が 10 万㎡に近い面積となることから、可能な範囲の確認調査を実施すること、15 年度以後の調査は 14 年度の調査成果を踏まえて協議することとなった。

平成 14 年度(2002 年度) 年度当初から千田遺跡の調査に着手した。また、14 年度には対象地内の確認調査を実施し、川久保遺跡については千曲川沿いの 3・4 区周辺の場所で確認調査を行い、段丘上の 3 区東側と段丘直下で遺物が採取されたが、千曲川沿いは調査の必要はないとされた。この確認調査の結果を受けて、翌年 1 月 17 日に千曲川河川事務所・県教委・当センターの三者協議で、築堤にかかわる調査は 18 年度までに終了させること、15 年度から工事を着手するので、15 年度は千曲川の上流側にあたる千田遺跡の 1,000 ㎡の調査を行うこと、斑尾川右岸を中心とした確認調査を実施することが確認された。

平成 15 年度(2003 年度) 15 年度には千田遺跡の 1,000 ㎡を調査し、8 月 20 日に千曲川河川事務所・県教委・当センターの三者で協議した。その席で豊田村集落排水事業とあわせて川久保遺跡側で築堤工事を早期に進めるため、川久保遺跡の斑尾川沿いの場所についての確認調査の要請があった。それを受けて、12 月に川久保遺跡で確認調査を実施し、12 月 17 日に千曲川河川事務所・豊田村教育委員会・県教委・当センターの四者で次年度以後の調査について協議を行った。当センターから川久保遺跡の確認調査結果では、斑尾川沿いの 1・2 区にあたる 15,000 ㎡について本調査が必要なことを提示した。これに対して、千曲川河川事務所側から工事は豊田村集落排水事業との調整事業と関連して早期に着手したいため、平成 16 年度早々には川久保遺跡から調査を開始してもらいたい趣旨が示された。これについては、当センターの体制や工事工程の調整が必要であることなどから、再度協議を実施することになった。翌年 1 月 20 日に千曲川河川事務所、県教委、当センターの三者で、次年度調査についての再協議が実施された。そこで平成 16 年度は川久保遺跡の調査を優先すること、対象地は 15,000 ㎡で、調査は川久保 2 区を優先して順次 2 区から 1 区へ調査を進めることとされた。

平成16年度(2004年度) 年度当初より川久保1・2区にあたる部分の調査に着手した。調査の進行に伴って、平成14年度の確認調査で遺跡から外れるだろうと判断した範囲(2区東側)まで遺構が続く可能性が判明し、トレンチを入れたところで弥生時代中期の完形土器が複数出土した。そこで、8月27日に千曲川河川事務所、県教委、当センターで、調査の期間延長の調整と、川久保2区東側(4区)の扱いについて協議が行われた。その結果、4区は9月末、2区は10月中旬を目途に調査を終了すること、1区については調査を中断して次年度に送ることになった。4区の調査を開始したところ、当初の予測を超える遺構・遺物が検出されたため、9月30日に千曲川河川事務所と当センターで協議し、4区の調査終了期限を10月8日まで延長すること、2区については早期の施工箇所となる4区側から調査を終了させていくこと等が確認された。10月20日には台風23号により洪水が発生し、調査区内も完全に水没する災害にあったものの、2区、3区とも12月には調査を終了することができた。翌年1月17日に千曲川河川事務所、県教委、当センターの三者で次年度調査に関する協議が行われた。平成17年度には築堤用の土砂が入るようになることから、本堤盛土とする千曲川沿いの川久保・千田遺跡の調査を同時に進めてもらいたい旨、示された。それを受けて当センターでは2班体制で2遺跡の調査に臨むこと、斑尾川沿いの千田10～12区、川久保5・6区は平成18年度に調査することとされた。その後、1月28日に千曲川河川事務所から、斑尾川兩岸の調査については斑尾川が急流河川で降雨から出水が早いこと、雨量・流量観測並びにパトロール等の体制が整っていないことなどから、以下の条件が県教委あてに提示された。

- ① 現況地盤高が斑尾川HWL(計画高水位)より低い場所での発掘調査は行わない(第2図)。
- ② 現況地盤高が斑尾川HWL以上の土地について発掘調査を行う場合、支川計画の流量規模における築堤相当(計画流量500ml/s未満の堤防相当)の地山を河川側に残すこと(斑尾川岸法肩から3m離して掘削を行うこと)。
- ③ 上記②によらない場合は、同程度の仮締め切りを設け、出水に備えること。
- ④ 地盤掘削において、掘削深度が現地盤より2m以上になる場合は安全衛生法に定める作業責任者を配置すること。
- ⑤ 上記④において、掘削は法面を45度で切り下げ、なおかつ法長が10mを越える場合は小段を設けること。



第2図 平成14年度トレンチ調査位置図

- ⑥ 掘削底標高は排水を考慮した高さ以上（海拔326.0m以上）とし、それ以上掘削は行わないこと。
また、排水勾配は5%とする。なお、条件的に上記をクリアしたとしても、現況の斑尾川最深河床標高より深く掘削してはならない。

- ⑦ 村道近くで掘削を行う場合、舗装保護のため舗装路肩より0.5m以上離して掘削すること。

県教委では調査の安全を第一優先とし、上記の条件で調査を進める方針を選択し、当センターでもその方向で対応策を練り、2月9日に三者で再協議を実施した。その結果、千曲川河川事務所が提示した条件を順守し、川久保1区は平安時代の遺構が検出される標高327mまで面的調査を実施し、それ以下については川久保6区も含めてトレンチ調査で対応すること、川久保5区は確認調査を実施した後、取扱いを協議することとなった。

平成17年度（2005年度）4月12日に千曲川河川事務所と当センターで当該年度の工事工程と調査工程のすり合わせを行い、川久保5区については、周囲の水田に水が無い時期にトレンチ調査で面的調査の要否を判断することなどが確認された。千田・川久保両遺跡の調査を並行して進め、川久保1区は12月22日に調査を終了した。川久保5区については住居跡が検出されたため面的調査が必要となり、北部の面的調査を終了した。12月27日に千曲川河川事務所、当センターで17年度の調査状況の確認と次年度の計画について協議を行った。平成18年度に千曲川沿いの千田9区まで本堤防を完成させ、斑尾川沿いの川久保5区と千田10～12区の調査が終了次第、工事に着手する予定が千曲川河川事務所から示された。当センターからは、プレハブ用地・排土の搬出場所の確保が課題で、それらを解決するためには斑尾川に仮設橋を設置する必要があること等を要請した。また、替佐築堤事業に係る発掘作業が概ね18・19年度で終了する見込みが立ち、今後、出土した膨大な資料を整理し報告書を作成していくには多くの人出と期間が必要となってくるため、発掘調査に係る基本協定を千曲川河川事務所、県教委、当センターの三者で締結すべき旨を県教委が提案した。協定締結に向けての作業を開始し、11月11日の三者協議では、千曲川河川事務所から、18年度からは柳沢築堤事業に係る中野市柳沢遺跡の調査対応も求められ、柳沢遺跡についても基本協定の中に位置付けていくこととなった。この協定は、「替佐築堤及び柳沢築堤工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」として翌年3月17日付けで締結された。

平成18年度（2006年度）4月25日に千曲川河川事務所と当センターで当該年度の工事工程と調査工程のすり合わせを行った。その結果、千田遺跡の調査を先行し、川久保5区については、周囲の水田から水が落ちた9月から着手すること、宮沖遺跡の確認調査及び柳沢遺跡の調査は、川久保・千田遺跡の調査が終了する10月以降に着手することとなった。また、18年度は築堤工事が広域かつ大規模に展開するようになり、埋蔵文化財調査も同時併行で進めていくことから、工事業者でつくる「替佐築堤護岸工事関係者連絡会議」に調査担当者も加わり、安全かつ円滑にそれぞれの事業が進むよう連絡調整を図った。この年も、7月に梅雨末期の豪雨で調査区が水没したが、当初の計画通り調査は終了した。翌19年1月12日に千曲川河川事務所、県教委、中野市教育委員会、当センターの四者で、平成19年度以後の調査について協議し、19年度には宮沖遺跡の調査を終了させ、JR飯山線以北の千田遺跡の確認調査、柳沢遺跡の本調査を実施すること、20年度には千田・柳沢遺跡の調査を完了させることとした。

平成19年度（2007年度）4月9日に千曲川河川事務所と当センターで当該年度の工事工程と調査工程のすり合わせを行った。その結果、宮沖遺跡の調査を主体に進め、状況に応じて千田遺跡のJR飯山線以北の確認調査を実施することとした。なお、本年度は、埋蔵文化財調査終了後に工事着手となるので施工業者との「連絡会議」等は必要ないこととなった。9月21日に宮沖、千田遺跡調査終了に係る現地協議

を千曲川河川事務所と当センターで行い、千田遺跡については、段丘上では遺構が検出されず、氾濫原内は堆積土層が薄く近世の水田層が部分的にしか認められないことから調査の必要はないことを確認した。

平成20～24年度(2008～2012年度)19年度に調査が終了したことや19年度に柳沢遺跡で銅戈・銅鐸が発見されたことなどから、川久保・宮沖遺跡に限った保護協議は行わず、年度の初めに事業計画、終わりに実績報告を提出することで対応した。ただし、17年度末に三者で締結した基本協定の期間が21年度末までであったことなどから、22年2月10日から協定変更に向けた協議を開始し、同年3月30日に千曲川河川事務所、県教委、当センターの三者による新たな協定を締結した。

3 替佐築堤工事に伴う川久保・宮沖遺跡の発掘調査に係る基本協定及び受委託契約

替佐築堤工事に伴う川久保・宮沖遺跡の発掘調査は、斑尾川対岸に位置する千田遺跡と柳沢築堤工事(いずれも事業主体は国土交通省北陸地方整備局千曲川河川事務所)に伴う中野市柳沢遺跡の発掘調査とともに、千曲川河川事務所、長野県教育委員会、当センターが所属する長野県文化振興事業団の三者により、発掘調査の実施に関する協定(「替佐築堤及び柳沢築堤工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」)を平成17年度末に結び、実施された。ただし、平成17年度以前の調査面積(千田遺跡は平成14年度から、川久保遺跡は平成16年度から調査着手)を含んでいないことや各遺跡の調査対象面積が確定していないことなどの整理については、三者による継続協議とした。

平成19年度には柳沢遺跡において弥生時代の青銅器埋納坑が発見され、全国的にも注目を集めたが、千曲川河川事務所・県教委・中野市教委等による協議の末、柳沢遺跡は記録保存することと決定した。これに合わせ、調査経費が計上され、4遺跡の調査対象面積及び調査経費の整理が行われ、平成21年度に変更協定が結ばれた。

千曲川河川事務所と当センターは、この基本協定に基づき年度ごとに埋蔵文化財発掘調査業務の受委託契約を結び、遂行した。契約期間と契約額は第2表のとおりである。

第1表 発掘調査遺跡諸届けなど提出状況

遺跡名	発掘届		発掘通知		埋蔵物発見届		埋蔵文化財保管証		発掘調査報告		拾得物預り書		文化財認定及び出土品の帰属	
	日付	番号	日付	番号	日付	番号	日付	番号	日付	番号	受理届出日	番号	日付	番号
千田	14.4.1	14長埋第11号	14.4.11	14教文第4-11号	15.2.21	14長埋第77-14号	15.2.21	14長埋第14号			15.2.24	M-3号	15.3.7	14教文第6-92号
千田	15.4.1	15長埋第11-15号	15.4.14	15教文第4-9号	16.1.29	15長埋第138号	16.1.29	15長埋第138号	16.1.29	15長埋第138号	16.1.29	M-3号	16.2.23	15教文第10-132号
千田	17.4.1	17長埋第12-8号	17.4.11	17教文第4-8号	17.12.28	17長埋第13-18号	17.12.28	17長埋第14-18号	17.12.28	17長埋第14-18号	18.1.10	M-5号	18.1.16	17教文第6-123号
千田	18.3.23	17長埋第12-21号	18.4.6	18教文第4-2号	18.10.26	18長埋第2-9号	18.10.26	18長埋第3-9号	18.10.26	18長埋第4-9号	18.10.26	M-3号	18.11.14	18教文第6-86号
千田	19.3.9	18長埋第1-19号	19.3.15	18教文第4-34号	19.9.28	19長埋第9-11号	19.9.28	19長埋第10-11号	19.9.28	19長埋第11-11号	19.9.28	M-2号	19.10.24	19教文第6-71号
川久保	15.4.1	15長埋第11-15号	15.4.14	15教文第8-15号	16.1.29	15長埋第138号					16.1.29	M-4号	16.2.23	15教文第10-133号
川久保	16.7.16	16長埋第58号	16.8.12	16教文第4-9号	16.12.27	16長埋第144号	16.12.27	16長埋第146号	16.12.27	16長埋第145号	16.12.27	M-3号	17.1.17	16教文第6-112号
川久保	17.4.1	17長埋第12-7号	17.4.11	17教文第4-2号	17.12.28	17長埋第13-17号	17.12.28	17長埋第14-17号	17.12.28	17長埋第15-17号	18.1.10	M-4号	18.1.16	17教文第6-124号
川久保	18.3.23	17長埋第12-22号	18.4.6	18教文第4-3号	18.10.26	18長埋第2-10号	18.10.26	18長埋第3-10号	18.10.26	18長埋第4-10号	18.10.26	M-4号	18.11.14	18教文第6-87号
宮沖	18.9.6	18長埋第1-9号	18.9.19	18教文第4-21号	18.12.19	18長埋第2-17号	18.12.19	18長埋第3-17号	18.12.19	18長埋第4-17号	18.12.19	M-8号	19.1.5	18教文第6-127号
宮沖	19.3.9	18長埋第1-18号	19.3.15	18教文第4-32号	19.9.8	19長埋第9-8号	19.9.8	19長埋第10-8号	19.9.8	19長埋第11-8号	19.9.8	M-1号	19.10.18	19教文第6-67号

第2表 受委託契約一覧

年度	契約期間	契約額			作業内容
		総額	替佐	柳沢	
平成14	14.3.26～15.3.31	49,991,197	49,991,197	-	千田遺跡の発掘作業、川久保遺跡の確認調査 上記遺跡の基礎整理作業
平成15	15.3.26～15.12.24	10,000,000	10,000,000	-	千田遺跡の発掘作業、川久保遺跡の確認調査 上記遺跡の基礎整理作業
平成16	16.4.7～17.3.31	90,169,235	90,169,235	-	川久保遺跡の発掘作業・基礎整理作業
平成17	17.4.15～18.3.31	182,259,000	182,259,000	-	千田・川久保遺跡の発掘作業 上記遺跡の基礎整理作業
平成18	18.3.29～19.3.31	110,777,100	93,181,200	17,595,900	川久保・宮沖・千田遺跡、柳沢遺跡発掘作業 上記遺跡の基礎整理作業
平成19	19.3.30～20.3.31	114,481,500	53,854,500	60,627,000	宮沖・千田遺跡、柳沢遺跡発掘作業 柳沢遺跡青銅器埋納坑室内調査 上記遺跡の基礎整理作業
平成20	20.3.29～21.3.31	123,165,000	2,856,000	120,309,000	柳沢遺跡発掘作業・基礎整理作業 千田・宮沖遺跡本格整理作業
平成21	21.4.1～22.3.31	45,297,000	38,711,400	6,585,600	川久保・宮沖・千田遺跡、柳沢遺跡本格整理作業
平成22	22.4.1～23.3.31	37,632,000	32,161,500	5,470,500	川久保・宮沖・千田遺跡、柳沢遺跡本格整理作業
平成23	23.4.1～24.3.31	42,388,500	30,246,923	12,141,577	川久保・宮沖・千田遺跡、柳沢遺跡本格整理作業 柳沢遺跡報告書刊行
平成24	24.4.1～25.3.31	23,814,000	23,814,000	-	川久保・宮沖・千田遺跡本格整理作業 川久保・宮沖遺跡、千田遺跡報告書刊行

第2節 調査の経過と体制

1 調査の経過

川久保・宮沖遺跡の調査は平成14・15年度に川久保遺跡の確認調査、平成16年度から川久保遺跡、平成18年度から宮沖遺跡の本調査を実施した。

平成14年度（川久保遺跡確認調査）

平成14年8月26日～8月29日に、千曲川沿いの下流域（川久保3・4区以東）の未買収地を除く範囲の確認調査を実施した。確認調査は幅2m、長さ10～30m、掘削深度1～2.5mほどのトレンチ18本を重機で掘削した。ほとんどのトレンチからは遺構・遺物は確認されなかったが、トレンチ1・2から平安時代や弥生時代の土器が出土した。トレンチ1では現水田造成土下層の粘質土層より平安時代と思われる土師器裏口縁部や須恵器片・砥石が出土し、トレンチ2最南端の現地地表下0.4～0.6m下の灰黄褐色土層から弥生時代の鉢等が出土したが、土質からトレンチは窪地地形内にあたり、土器は隣接高地からの流入品と捉えた。次年度にトレンチ1・2に隣接した北側高地部分の確認調査が必要と捉えられた。

平成15年度（川久保遺跡確認調査）

平成14年度に調査を実施できなかった川久保遺跡の斑尾川左岸上流側の約15,000mを対象（川久保1・2区）とし、平成15年12月1～5日に前年度に引き続いて確認調査を実施した。確認調査は立地や地形を考慮しながら、重機による19本のトレンチを掘削した。トレンチの最深掘削深度は現地地表より2.6mである。トレンチ1・6～10・14・19では遺構・遺物が確認されず、トレンチ2・5・13・18で古墳時代後期～平安時代土器や土坑、トレンチ3で古墳時代後期～平安時代土器や水田跡、トレンチ4で水田跡土壌、トレンチ11で甕、トレンチ12で奈良・平安時代住居跡、トレンチ17で奈良・平安時代土器と土坑や焼土を確認した。これ以外にトレンチ15で自然流路、トレンチ16の地表面下80cmで直径1mの巨礫を含む礫層、トレンチ17で噴砂を確認した。平成14年度の確認調査では明確に捉えられていなかった水田跡・土坑・溝跡・竪穴住居跡の存在が知られ、検出面も2面以上ある可能性が捉えられた。トレンチは12月8日に埋め戻し、重機を撤出した。

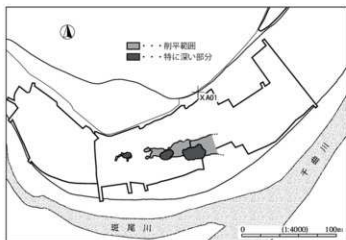
平成16年度（川久保2・3・4区の本調査）

前年度の確認調査で面的調査が必要とされた川久保1・2・3区の調査に着手した。調査は川久保2区から開始したが、ここは千曲川に隣接して浸食地形が形成され、しかも堆積土層が厚く複雑な土層の様相から遺跡の構造が把握しにくかった。調査を進めるなかで弥生・古墳時代前期までは凹凸が著しい地形だったが、古墳時代後期には埋没して平坦化していること、調査面が2枚以上存在することが判明した。さらに、遺構が東側に広がる可能性が捉えられたことから2区東側へ新たにトレンチを追加し、そこで完形の弥生時代中期土器が複数出土して調査の必要が捉えられた。一方、当初調査が予定されていた1区に入れたトレンチでは現地表面下2m以上も中近世の水田跡が連続していることが判明したことから、川久保1区の調査を次年度に送り、新たに調査4区を調査範囲とすることとなった。川久保2区1面の調査終了後、10月には川久保4区、3区の調査を終了し、2区2面の調査へ移行した。その間、10月21日に台風23号による洪水で調査区が完全に水没し、現地プレハブが流失する事態が発生した。記録類・遺物は前日に搬出して無事であったが、発掘器材の一部やプレハブは流失し、調査区内にも千曲川の水流で抉られた浸食地形や洪水土の堆積が認められた。そこで、1週間作業員の出勤を止め、発掘器材を揃え、プレハブを設置しなおし、調査区内の排土搬出道路などを整備して10月末日から発掘作業を再開した。11月には川久保3区・2区2面調査を終了させ、11月下旬には最後の川久保2区西端の調査に入った。ここには千曲川による大きな浸食地形が存在し、その中に2区1面に相当する古墳時代後期や平安時代遺構も残存していたが、順次調査を進めて下層の古墳時代前期土器集中を調査し、12月20日には調査を終了した。

平成17年度（川久保1区、5区北部、6区の本調査）

前年度に見送られた川久保1区を中心に、JR飯山線脇の5区と現斑尾川氾濫原内の6区を調査対象とした。川久保5・6区のトレンチ調査から着手し、5区では住居跡の存在を確認して面的調査の必要性を把握した。6区は斑尾川のHWL（計画高水位）以下の標高であるため、調査上の安全からトレンチ調査のみで終了したが、中近世水田跡が重なっていることと、南東端で川久保2区NR1aの延長先と思われる窪地地形が確認された。川久保1区は前年度確認調査により南東と北西部が微高地で、その中央付近に窪地地形があり、中近世の水田跡が2m以上重なっていることが把握されていた。そこで、前年度のトレンチを再掘削して、洪水土層が比較的厚く水田面が良好に遺存する調査面を選択し、面的に掘り広げることとした。広域が洪水土層に被覆される1～4面水田跡と下層の8～10面水田跡を面的に調査し、さらに1区南部の浸食地形NR1d内に残る4～8面水田跡中間の5～7面水田跡を調査した。また、川久保1区の南部はNR1dに浸食されているため北部のみ古い土層が遺存するが、1区の北部で11面として古墳時代後期の住居跡群、12面で古墳時代前期の水田跡を調査した。最後の調査最終日にNR1dと1区北部の下層土層を確認するトレンチを設定する予定であったが、大雪により断念した。

川久保5区は川久保1区の調査と平行して10月から実施した。川久保5区は排土搬出が難しいことから半分ずつ分割調査することとなり、北側から調査を着手した。調査面は中世の掘立柱建物跡群の1面と古墳時代後期～奈良時代の住居跡が検出される2面の調



第3図 平成16年度洪水の浸食範囲

査となったが、予想以上に住居跡が多く検出され、調査に手間取り、排土を移動しての年度内調査が難しいことから調査区南半分を翌年に持ち越した。なお、翌年の5区南部調査では更に上層に中世畑・水田面の遺構面が捉えられ、本年度調査1面を5区2面、同様に2面を5区3面に修正した。

平成18年度（川久保5区南部の本調査・宮沖遺跡確認調査）

7月の梅雨前線の大雨によって千田遺跡調査区が水没し、若干調査が遅れたが、9月中旬から川久保5区の調査を開始した。川久保5区南部のみに洪水土で埋没した中世畑跡や水田跡の存在が判明し、新たに調査面を1枚加えることとなった。遺物出土はないが、土層から川久保1区8面水田跡に対応する遺構面と捉えられた。その後、2面で中世柱穴、3面で古墳時代後期～奈良時代の住居跡を調査し、10月18日には終了した。宮沖遺跡の確認調査は10月下旬～11月中旬まで継続した。

平成19年度（宮沖1・2・3・4・5・6区の本調査）

前年度確認調査を実施した宮沖1～5区の調査と、前年度確認調査を行えなかった宮沖6区のトレンチ調査を実施した。河岸段丘上にある宮沖1・5区は面的調査を実施し、氾濫原内の2～4・6区は斑尾川のHWL（計画高水位）以下の標高であるためトレンチ調査のみ行った。段丘上の宮沖1区では1面で中世柱穴、2面で中世の柱穴と古墳時代前期～平安時代の竪穴住居跡、3面で古墳時代前期水田跡を調査したが、宮沖5区は調査前の建物基礎や攪乱が深く入って調査面を分けての調査はできなかった。また、宮沖5区では宮沖1区3面の土層分布域から外れて3面に当たる調査面はない。それ以外の氾濫原内では調査の安全上からの面的調査ができず、地形形成過程の把握と、前年度確認調査で確認された水田面の区画方法や水田面の耕作痕及びそれらの遺構時期を把握するトレンチ調査を実施した。前年度の確認調査で水田面が確認されていなかった2区については新たに追加トレンチを掘削し、さらに北端の6区にトレンチを設定したが、遺構は検出されず、斑尾川の堆積土層のみが確認された。3・4区ではそれぞれ洪水土層に被覆された水田跡が確認されたが、ほぼ近世前後の所産と捉えられた。

宮沖遺跡の調査は9月7日には器材撤収を行って、柳沢遺跡へ作業員は移動し、一部の作業員により記録と写真撮影を行って9月12日には調査を終了した。

2 整理作業の経過

平成16～19年までの各調査年次の冬期には、後述するような基礎整理作業を行い、平成20年度冬期から本格的な整理作業を開始した。ただし、平成21年度には柳沢・千田遺跡の本格整理作業を優先し、川久保・宮沖遺跡の整理作業は平成22年度から本格化した。

平成22年度は、本格的に遺物の選別・接合・計測などの整理に着手し、平成23年度からは遺物の実測作業と遺構のトレース、原稿の執筆を進めた。平成24年度には、報告書作成のために編集を業者に委託し、印刷製本を経て報告書刊行に至る。

3 調査の体制（第3表）

第3表 川久保・宮沖遺跡調査体制

年度	所長	調査部長	担当課長	本書関連作業の担当調査研究員
平成14年	深瀬弘夫	小林秀夫	土屋 積	西山克己・黒岩 隆
平成15年	深瀬弘夫	市澤英利	廣瀬昭弘	西山克己
平成16年	小沢将夫	市澤英利	廣瀬昭弘	鶴田典昭・黒岩 隆・市川隆之・中島英子・山崎まゆみ
平成17年	仁科松男	市澤英利	廣瀬昭弘	鶴田弘実・久保光男・市川隆之・入沢昌基・柳沢 亮・山崎まゆみ
平成18年	仁科松男	市澤英利	平林 彰	鶴田弘実・市川隆之・入沢昌基
平成19年	仁科松男	平林 彰	上田典男	鶴田弘実・市川隆之・白沢勝彦・廣田和穂・大沢泰智
平成20年	仁科松男	平林 彰	上田典男	鶴田弘実・市川隆之・白沢勝彦・廣田和穂・大沢泰智

平成 21 年	仁科松男	平林 彰	上田典男	綿田弘実・市川隆之・廣田和徳
平成 22 年	窪田久雄	大竹憲昭	上田典男	綿田弘実・市川隆之・廣田和徳
平成 23 年	窪田久雄	大竹憲昭	上田典男	綿田弘実・市川隆之・廣田和徳
平成 24 年	窪田久雄	大竹憲昭	上田典男	綿田弘実・市川隆之
平成 14 年度～平成 19 年度 発掘作業員				
青木洋子 新井さち子 池田道保 池田 睦 大井晴美 大内秀子 大口直明 大塚加津美 大原保之 荻原敬蔵				
萩原千代子 小畑山貞子 木村嘉光 木村ミヨシ 久保 昇 小池美香 小嶋善太郎 小林英一郎 小林英子 小林喜久子				
小林弘茂 小林靖男 小林幸雄 坂本清一 佐藤 進 佐藤市次朗 佐藤禮子 鈴木亜紀子 鈴木友江 関谷道雄				
田井中志保子 高野武剛 田口雅美 竹内啓剛 武田保夫 田中邦男 田中元宣 田中有希 田中エツ 田村桂子				
田村多恵子 土屋美晴 俣田良廣 徳武知從 徳永 門 中澤ヒデ子 水澤由美子 中島伸雄 永原春男 西澤良治				
西野孝治 野村善和 原山竜雄 平尾恭子 藤澤正美 松木拓宏 松木 武 松木たつ子 松野クライレーネ 丸山ハツ子				
丸山豊松 丸山優治 三井貴美 宮川和久 宮沢アヤ子 宮沢才二 宮沢よい子 宮本和子 村田宗之 森山キミ江				
山上知也 山口武利 横田与志子(中野広域シルバー人材センター) 池田泰造 石井 博 鈴木金三 高橋栄蔵				
土屋三郎 土屋富司 徳竹一義 徳永徳一 松野登喜雄 水野利彦 藤藤良助 村上 治				
平成 22 年度～平成 24 年度 整理作業員				
池田豊一 片岡義郎 倉島由美子 小林知子 坂田恵美子 佐藤 進 塩野入奈菜美 高野和子 中島裕子 西島典子				
半田純子 藤井裕子 待井 聖 柳原澄子 山崎みな子 渡辺恵美子				

4 調査日誌抄

平成 16 年度

4 月 1 日	千曲川河川事務所と調査受委託契約締結	8 月 27 日	協議により調査終了時期の優先順位を 4 区、3 区、2 区とする
4 月 21 日	器材搬入	9 月 1 日	川久保 2 区古墳時代後期～平安時代住居跡単点測量
4 月 22 日	駐車場造成	9 月 7 日	川久保 4 区 2 面土坑・柱穴精査
4 月 23 日	プレハブ設置、2 区トレンチ掘削	9 月 10 日	川久保 4 区地形測量 NRO3 検出・掘り下げ 水田跡 SLO4 検出
5 月 6 日	作業員勤務開始 近世水田跡検出	9 月 16 日	川久保 2 区 1 面空中写真撮影・調査終了
5 月 18 日	川久保 2 区トレンチで住居跡確認	9 月 17 日	川久保 3 区西部で遺構検出
5 月 21 日	川久保 2 区住居跡検出・精査開始	9 月 20 日	川久保 4 区 NRO2 掘り下げ
6 月 3 日	川久保 2 区自然流路伏の窪地確認	9 月 21 日	川久保 3 区西部遺構単点測量
6 月 11 日	川久保 2 区で千曲川と平行する細い微高地確認	9 月 22 日	川久保 3 区西部調査終了
6 月 14 日	トレンチ下層で古墳時代前期土器出土、窪地地形は古墳時代後期までに平坦化と推定	9 月 23 日	川久保 4 区弥生時代中期土器集中を検出
6 月 16 日	川久保 2 区 1 面で古墳時代後期住居跡等検出	9 月 28 日	川久保 4 区 2 面遺構単点測量
6 月 29 日	川久保 2 区 1 面畑跡 SLO2 検出	10 月 2 日	川久保遺跡現地説明会開催
7 月 1 日	川久保 2 区 SQ01 ～ 03 検出	10 月 7 日	川久保 3 区東部表土掘削
7 月 6 日	調査区内への仮設工事用道路敷設に関する協議	10 月 8 日	川久保 4 区全景写真撮影
7 月 9 日	川久保 2 区 1 面畑跡 SLO3 検出	10 月 12 日	川久保 2 区 2 面掘削
7 月 13 日	川久保 2 区東部皿厨遺物集中 SQ04+05 精査	10 月 13 日	川久保 4 区調査終了、川久保 3 区遺構精査
7 月 16 日	川久保 3 区東部表土掘削	10 月 14 日	川久保 2 区 2 面水田跡 SLO6 検出
7 月 21 日	川久保 1 区トレンチ掘削、川久保 2 区 NR1a 掘り下げ	10 月 19 日	川久保 3 区東部調査終了
7 月 30 日	川久保 2 区平安時代 SB10 から鉄滓出土	10 月 21 日	千曲川増水によりプレハブ等流失
8 月 5 日	川久保 4 区トレンチ掘削 弥生時代中期土器検出	10 月 22 日	作業員作業一時中止、川久保 3 区排水作業
8 月 10 日	協議により、1 区の調査を中断し、新たに 4 区の調査着手・終了という計画変更となった	10 月 27 日	川久保 2 区 2 面 SLO6、洪水による浸食範囲単点測量
8 月 11 日	川久保 1 区トレンチ記録後埋め戻し	10 月 28 日	補充プレハブ 2 棟設置
8 月 12 日	川久保 4 区拡張部調査区設定	10 月 29 日	作業員勤務再開、川久保 2 区 2 面遺構検出
8 月 17 日	川久保 4 区掘削開始	11 月 2 日	川久保 3 区単点測量
8 月 20 日	川久保 4 区で弥生時代中期土器複数出土	11 月 4 日	川久保 2 区 2 面遺構検出・NR1b 検出

第1章 調査の経過と方法

11月5日	長野県遺跡調査指導委員会視察、長野放送取材	9月8日	川久保1区8面水田跡南部写真撮影・単点測量
11月8日	川久保2区NR02掘削	9月9日	川久保1区8面水田跡北部写真撮影・単点測量
11月10日	川久保2区NR1bの1層で平安・古墳時代後期住居跡検出・精査	9月14日	川久保1区南部下層水田跡確認トレンチ掘削
11月16日	川久保2区NR1b トレンチで古墳時代前期土器集中SQ26確認	9月15日	川久保1区9面水田跡掘削
11月19日	川久保2区NR02 完掘写真撮影	9月20日	川久保1区9面溝跡精査
11月30日	川久保2区NR1b 西部で古墳時代前期土器集中SQ27検出	9月29日	川久保1区9面水田跡底面検出土坑等精査
12月9日	川久保2区NR1c 掘り下げ	10月7日	川久保1区9面土坑・柱穴単点測量
12月14日	古墳時代後期土器集中SQ28検出	10月11日	川久保1区9面水田跡北部単点測量
12月16日	川久保SQ28土器取り上げ NR1b・1c 完掘写真撮影	10月17日	川久保1区9面水田跡写真撮影、川久保1区10面北部掘削
12月17日	器材撤収・作業員作業終了	10月18日	川久保5区北部掘削開始
12月20日	川久保2区埋め戻し、プレハブ・トイレ撤去	10月19日	川久保1区9面水田跡南部単点測量、川久保5区北部2面検出、柱穴精査開始
		10月24日	川久保1区10面北部検出
		10月27日	川久保5区北部2面土坑・柱穴単点測量
		11月1日	川久保1区10面遺構・5区2面土坑・柱穴単点測量

平成17年度

4月15日	千曲川河川事務所と調査受委託契約締結	11月7日	川久保1区10面空中写真撮影
4月20日	千曲川河川事務所と発掘調査に関する協議	11月8日	川久保1区10面遺構単点測量
4月21日	川久保5・6区トレンチ掘削、土層図作成	11月10日	川久保1区南東部平安時代住居跡精査
4月25日	川久保5区トレンチで住居跡検出	11月17日	川久保1区11面竪穴住居跡検出・精査
5月9日	川久保1区トレンチ掘削、調査面の決定	11月24日	川久保1区11面掘削、竪穴住居跡検出
5月10日	作業員勤務開始、川久保1区1面掘削開始	11月25日	川久保5区北部3面竪穴住居跡単点測量
5月13日	川久保11区1面水田跡検出	12月1・2日	川久保1区11面竪穴住居跡単点測量
5月31日	川久保1区全景写真撮影	12月5日	川久保1区南東部竪穴住居跡単点測量
6月7日	川久保1区1面水田跡単点測量	12月7日	川久保5区北部竪穴住居跡単点測量
6月8日	川久保1区2面掘削開始	12月12日	川久保5区北部3面空中写真撮影再撮影
6月16日	川久保1区近世屋敷跡検出	12月14日	川久保5区北部調査終了、埋め戻し
6月21日	川久保1区2面水田跡全景撮影	12月21日	川久保1区12面精査・単点測量
6月22日	川久保1区2面水田跡単点測量	12月22日	土壌サンプル採取、作業員作業終了
6月29日	川久保1区3面水田跡検出	12月26日	器材撤収、調査終了
7月8日	川久保1区北部3面水田跡写真撮影・単点測量	3月17日	県教委、千曲川河川事務所、当センターで埋蔵文化財調査に関する協定締結
7月11日	川久保1区北部4面水田跡掘削開始、近世屋敷跡測量		
7月15日	川久保1区南部4面水田跡検出		
7月22日	川久保1区4面水田跡空中写真撮影		
7月25日	川久保1区4面水田跡測量・1区5面水田跡掘削開始		
7月27日	川久保1区5面水田跡検出		
8月1日	川久保1区5面水田跡写真撮影・単点測量		
8月3日	川久保1区6面水田跡検出		
8月6日	川久保遺跡現地説明会開催		
8月8日	川久保1区6面水田跡単点測量		
8月11日	川久保1区7面水田跡検出		
8月22日	川久保1区7面水田跡写真撮影・単点測量		
8月29日	川久保1区8面水田跡検出		

平成18年度

3月28日	千曲川河川事務所と調査受委託契約締結
4月22日	プレハブ設置
9月15日	川久保5区1面掘削開始
9月16日	川久保5区中世水田跡単点測量
9月22日	川久保5区1面全景写真撮影
9月23日	川久保5区2面掘削
9月26日	川久保5区2面全景写真撮影
9月27日	川久保5区2面中世柱穴単点測量
10月3日	川久保5区3面検出・遺構精査、プレハブを宮沖へ移設
10月10日	川久保5区SB60から須臾器大撰出土、柳沢道

	跡へ器材搬出	5月31日	宮沖5区全景撮影
10月14日	川久保5区3面空中写真撮影	6月4日	宮沖1・5区SB01～03精査開始
10月17日	プレハブ撤去	6月11日	宮沖1区北端中世土坑・柱穴測量
10月18日	川久保5区3面調査終了	6月15日	宮沖1・5区SB01～05精査着手
10月26日	宮沖トレンチ掘削	6月20日	宮沖1・5区SB06～10、ST02・03精査
10月27日	宮沖1区で古墳時代後期竈穴住居跡、中世土坑・柱穴確認	6月27日	宮沖1・5区SB11精査、SB12～14検出・精査
10月30日	宮沖3区トレンチで水田層確認、土層断面図作成	7月6日	宮沖1・5区SB12～20精査
11月7日	宮沖4区トレンチで水田層確認、土層断面測量 トレンチ位置の単点測量	7月10日	宮沖1区SB21精査
11月15日	宮沖3・4区土層からプラント・オパール分析 試料採取	7月13日	宮沖1区SB22、SD11精査
12月5日	宮沖遺跡調査結果をもとに千曲川河川事務所・ 出張所・埋文センターによる現地協議	7月18日	宮沖1区SB23・24精査
12月11日	トレンチの埋め戻し	7月25日	宮沖6区トレンチ掘削・記録作成
12月13日	器材・遺物搬出 作業員作業終了	7月28日	宮沖遺跡現地説明会実施
12月14日	プレハブ・トイレ撤去 発掘調査作業終了	7月31日	宮沖1区全景撮影、6区トレンチ埋め戻し
平成19年度		8月1日	宮沖4区トレンチ掘削
3月29日	千曲川河川事務所と調査受委託契約締結	8月6日	宮沖3区トレンチ掘削
4月17日	宮沖5区建物基礎撤去、安全柵設置	8月7日	宮沖4区1面精査、1区SB25・26精査
4月19日	器材搬入	8月9日	宮沖3区1面精査、4区1面写真撮影
4月20日	宮沖1区排水溝を兼ねるトレンチ掘削	8月10日	宮沖1・5区空中写真撮影、3区1面・4区1面 単点測量
4月21日	プレハブ設置	8月17日	宮沖3区1面写真撮影
4月23日	宮沖1区1面掘削開始	8月21日	宮沖3区2面掘削、4区2面精査・写真撮影
4月25日	作業員勤務開始・遺構検出	8月22日	宮沖3区2面・4区2面単点測量
4月26日	中世土坑・柱穴精査	8月23日	宮沖2区トレンチ掘削・測量
5月7日	宮沖5区掘削	8月24日	宮沖4区3面掘削、1区SB06～22床下精査
5月8日	宮沖1区1面単点測量	8月27日	宮沖3・4区中間トレンチ掘削、4区3面写真 撮影
5月11日	宮沖1区1面全景写真撮影	8月29日	宮沖2区トレンチ延長、断面図作成、写真撮影 宮沖1区SB30・31精査
5月15日	宮沖1区北部拡張掘削、宮沖5区遺構検出	9月3日	宮沖1区3面掘削、遺構検出
5月22日	宮沖1区2面掘削、宮沖5区遺構精査	9月4日	宮沖1区3面遺構精査
5月28日	宮沖1区2面中世遺構精査、宮沖5区中世土坑・ 柱穴平面図作成	9月10日	宮沖1区3面全景撮影、単点測量
		9月11日	宮沖1区3面下層トレンチ掘削、測量
		9月12日	調査終了

第3節 調査の方法

1 発掘調査の方法

(1) 発掘作業の記録方法

ア 遺跡名称と記号 (第4図)

川久保・宮沖遺跡について、豊田村教育委員会による遺跡分布図では調査区周辺に堰添遺跡、川久保遺跡、宮沖遺跡がそれぞれ別遺跡として記載されていたが、今回の試掘調査から本調査の間にJR飯山線以南は川久保遺跡、JR飯山線以北は宮沖遺跡にまとめられた。さらに、本遺跡の所在する豊田村は2005年に中野市と合併したが、中野市教育委員会の『長野県中野市遺跡詳細分布図』(2006)では、すべて「替佐

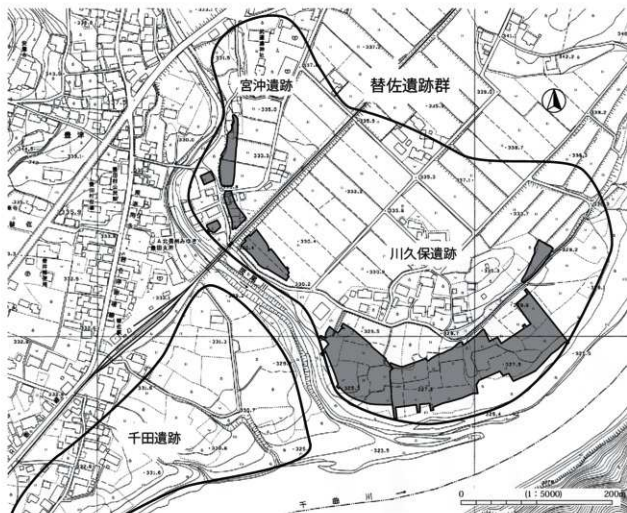
遺跡群」にまとめられている。遺跡内容も類似し、遺構も連続するが、本報告では調査時の遺跡記号や遺構記号、各種文書類に「川久保遺跡」、「宮沖遺跡」を用いたことから、調査時の遺跡名称をそのまま用いた。

当センターでは遺跡名を3字のアルファベットで簡便に表記する遺跡記号を用いており、今回の発掘調査に関わる各種記録類から遺物注記等もこの遺跡記号を用いた。遺跡記号は1文字目に長野県内の遺跡所在地区の中野・飯山市地区を現わす「A」を冠し、遺跡名のローマ字表記「川久保=KAWAKUBO」、「宮沖=MIYAOKI」の2文字を組み合わせて、川久保遺跡:AKK、宮沖遺跡:AMOとした。

イ 調査地区の呼称 (第5図)

今回の調査では、調査年次毎、また道路や用水等で区切られた調査範囲を遺跡名にアラビア数字を組み合わせた地区名で呼称し、川久保1区、宮沖1区のように表記した。川久保遺跡では築堤工事工程との関係から平成16年度に調査予定地であった斑尾川と千曲川合流地点周辺は用水を挟んで川久保1区、川久保2区とし、段丘上の地点を同3区と呼称した。平成16年度の調査で新たに調査が必要と判明した川久保2区東側を同4区、さらに、平成17年度は斑尾川沿いの段丘上のJR南側を川久保5区、沓瀬原を川久保6区と呼称した。川久保5区は平成17・18年度に北部と南部において分割調査したが、地区名はそのまま川久保5区で総称している。

宮沖遺跡は平成18年度の試掘調査時に、道路で区切られた地点毎に地区名称をつけた。段丘上の北部



第4図 川久保・宮沖遺跡の範囲

を宮沖1区、その西側の氾濫原を同2区、さらに道路で隔てられた氾濫原の南側は調査前まであった私道を挟んで北側を宮沖3区、南側のJR飯山線隣接地を宮沖4区、段丘上の南側を宮沖5区とした。平成19年度は斑尾川沿いの北端のトレンチ調査を実施した地点を宮沖6区と呼称した。

ウ 遺構名称と遺構記号

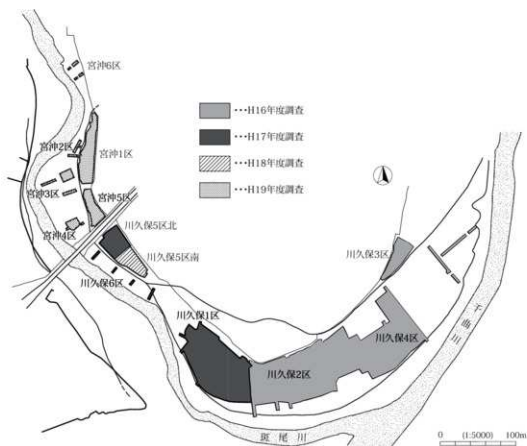
個々の遺構は、検出された形状別に遺構記号を冠し、アラビア数字を組み合わせた番号で指し示した。この遺構記号は概略の性格を踏まえたものだが、調査の遺構検出時に付与されるために厳密な性格までは表していない。そのため同じ性格の遺構でも異なる遺構記号を付したものがある。例えば、畑跡の畝間溝が断片的に検出され溝跡と捉えられた場合はSD、連続する場合は畑跡SLとしている。このような異なる遺構記号で同じ性格と捉えられた場合でも、混乱を避けるために遺構記号は変更せず、本報告では個々の遺構の性格を竪穴住居跡、掘立柱建物跡、水田跡、墓跡などにまとめて掲載した。また、遺構の番号は検出順に付けたが、複数地区の並行調査時に混乱を避けるために「100」番台を用いたものがあり、精査により遺構でないと判明して欠番とした番号がある。

以下には遺構記号の種類と概略の性格を示す。

SB：3m以上の方形・円形・楕円形の落ち込み。(竪穴住居跡)

SK：単独で存在するSBより小型の方形・円形・楕円形の落ち込み。建物跡として組めない柱穴や、建物跡の検討を実施できていない場合は柱穴にもSKを用いた。(土坑・柱穴)なお、平成16年度調査時のみは柱穴と捉えられた落ち込みはPitと呼称した。

ST：SBより小型の落ち込みが円形、方形、長方形に配置されるもの。(掘立柱建物跡)



第5図 年度別調査区

- SA：SBより小型の落ち込みが線状に配置されるもの。(柵列)
- SD：単独の細長い溝状の落ち込み。(溝跡)
- SC：連続する堅い面や、帯状の盛土。(道跡、畦跡)
- SL：溝状の落ち込みや、細長い盛り上がり連続するもの。(水田跡・畑跡)
- SF：単独で存在する地面が被熱で赤化するもの。火を焚いた痕跡と捉えられる炭化物の集中も含めた。(焼土跡)
- SH：掘り込みを伴わず、単独で石が集中して出土したもの。(集石遺構)
- SQ：掘り込みを伴わず、土器などの遺物が集中して出土したもの。(遺物集中・土器集中)
- SM：人骨の出土や構造から墓と捉えられるもの。(墓跡)
- SX：上記以外の不整形や規模の大きな落ち込み。(性格不明遺構)
- NR：河道跡や谷状浸食地形など規模の大きな自然地形の帯状の落ち込み。

上記が基本的な遺構記号の種類だが、調査年次の調査状況や担当者によって若干扱いが異なるところがある。例えば、平成16年度は柱穴と思われる小型落ち込みをPit、それより大きい落ち込みをSKとしたが、平成17年度以後はすべてSKで扱った。また、宮沖遺跡では柱穴の重複が著しく、竪穴住居跡の床面検出であっても、重複する柱穴と竪穴住居跡施設が識別できなかった柱穴はSKとした。さらに、水田跡は川久保2・5区で部分的に残存する場合はSLと呼称したが、川久保1区では調査区全体に及ぶため、地区名毎に各調査面の水田跡と呼称した。このように遺構記号・番号は、個々の遺構の単位を指し示すものばかりでなく、施設や遺構の一部と断定できない場合は個別遺構として記号・番号を付したのものもある。これらは上記の原則から外れたものだが、混乱を避けるために整理作業でも変更していない。また、川久保遺跡と宮沖遺跡として調査したことから、遺構番号は川久保遺跡、宮沖遺跡でそれぞれ01番から付けている。例えば、川久保遺跡と宮沖遺跡にはそれぞれSBO1が存在するが、本報告では記述上誤解を生じにくいと思われる場合以外は、遺跡名を冠して「川久保SBO1」「宮沖SBO1」と呼称した。遺構内施設については、竪穴住居跡内部施設の落ち込みをPit、焼土はF、複数の造り替えのカマドが認められた場合は「カマド1・2・・・」あるいは「北カマド」「西カマド」と呼称し、調査時に掘立柱建物跡と認定できたものは個別柱穴をPit1・2・・・と呼称した。

エ 調査グリッドの設定 (第6図)

調査での測量基準線や遺物取り上げに際して調査用の方眼として、千田・川久保・宮沖遺跡にかかる範囲を同じ基準線による調査グリッドを設定した。調査グリッドは、遺跡周囲を通る旧国家座標の区切りの良い数値のライン $X = +85,200$ (XVI地区は $+85,400$)、 $Y = -15,800$ (I・XVI地区は $-15,600$)を北・西限の基準線とし、調査域全体にかかる範囲内を200m四方の方眼「大々地区」で区切って、北西隅からそれぞれローマ数字I・II・III・・・地区と呼称した。宮沖遺跡は当初設定した調査グリッド範囲から外れたため、XV、XVI地区を新たに追加した。「大々地区」内は40m四方の「大地区」 5×5 個の25個に分割し、北西隅からアルファベットA・B・C・・・Y地区と呼称した。この「大地区」内は8m四方の「中地区」 5×5 個の25個に分割して北西隅から01・02・03・・・25地区と呼び、この「中地区」は「大々地区」からの番号を冠して「I A01」等と呼称した。「中地区」はさらに 2×2 mの「小地区」 4×4 個の16個に分割し、北西隅から01・02・03・・・16地区と呼称し、「小地区」の一つは、例えば「I A01-01」と呼称した。本報告では遺構の遺跡内位置を、原則として全体図は中地区、個別遺構図は小地区の表記で示した。



第6図 グリッド設定図

オ 図化記録

図化記録は遺構の平面・断面を計測して図化した記録で、平面図と断面図がある。平面図は個別遺構毎に作図したものと、調査グリッドの中地区毎に作成した割付図があり、平面図の測量は測量基準線を元にした手測による図化記録と、作業の簡便化を測るために実施した測量業者委託の単点測量図に調査担当者が結線した図化記録、仮のポイントを基準に手測し、ポイントを単点測量した図化記録がある。個別遺構は平面図と土層断面図を作成し、必要に応じて遺物出土状況図、施設の詳細図を作成した。遺構図の縮尺は1/20を基本とし、個別詳細図は1/10、水田域など広域に及ぶ遺構は1/100で作図した。

カ 写真記録

写真記録は6×7のモノクロとリバーサルフィルム、35mmモノクロとリバーサルフィルムを用いて作成し、必要に応じてデジタルカメラを用いた。撮影時には撮影日時、撮影対象、撮影方向を記入する撮影記録簿を作成し、後にアルバムへ収納した際にアルバム等に転記した。

(2) トレンチによる遺構調査面の確認と調査範囲の設定 (第7図)

本遺跡は千曲川・斑尾川に面した洪水土層の堆積が著しい場所に立地し、遺構面は厚い堆積土に埋没していると共に、調査地点ごとに土層の様相が異なる。しかも調査対象地が広大であったため、調査地点毎に確認調査のトレンチを入れて調査面を決定した。多くの調査地区では比較的浅い場所で遺構が確認できたが、洪水土層が厚く堆積する川久保1区などの低地では中近世水田跡が数多く残存していた。中近世の水田跡の変遷が継続的に捉えられることから、できる限り水田跡の変遷と洪水状況の変化を捉えることを課題として臨んだが、洪水土層に被覆される全ての水田跡を調査することは調査期間からも困難で、しかも洪水土層が部分的にしか堆積せず、水田跡耕作による削平・攪はんを受けて遺存状態も異なる。そのため、川久保1区中央のトレンチの土層観察により、比較的厚く広範囲に及ぶと捉えられた水田面を選択して調査した。川久保1区以外では、川久保2区と同5区の一部で中近世水田跡が捉えられたが、遺存状態が悪いことなどから一部のみしか調査は実施していない。なお、斑尾川沿いの氾濫原内は、洪水時に調査区内に本流が流れ込む危険があるため、HWL(計画高水位)より深く、調査掘削深度が及ぶ場合はトレンチ調査のみとした。

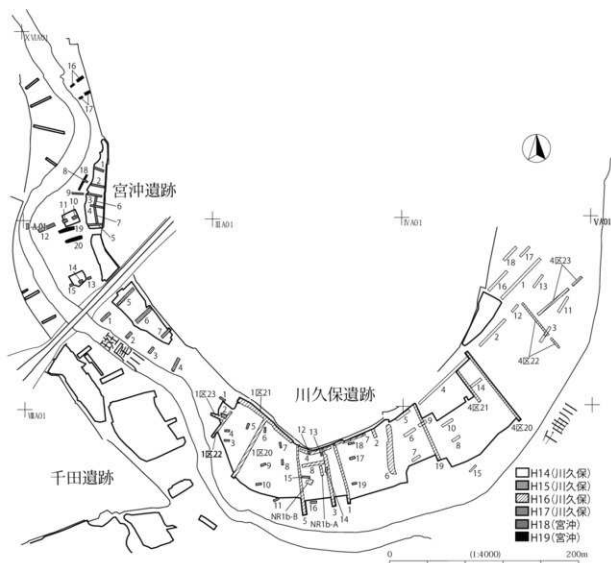
(3) 遺構調査の方法

遺構の検出面は、後代の耕作や土地改変で地面を掘り込んだ部分のみが残存したものと、洪水土層などで埋もれて地表面がそのまま遺存するものがある。旧地表面が遺存する遺構は、被覆洪水土層を除去して地表面を露出させるように調査し、必要に応じて土層断面の観察や記録を行った。その後、下層に掘り込みがある遺構は掘り込みが遺存する遺構同様の調査を行った。掘り込まれた部分のみが遺存する遺構は、遺構が見つかる土層まで掘り下げ、その土層上面をきれいに削って土の違ひから落ち込みを探す検出作業を行った。検出遺構は、平面形や重複遺構を確認して遺構番号を付し、遺構内に入る土層の断面図を作成する位置を設定した。大型土坑や竪穴住居跡では、中央を通る直交十字方向に断面図作成箇所を設定し、小型土坑は1方向、溝跡は横断面1方向のみ断面図記録を作成する位置を設定した。この断面図作成ラインに沿ってトレンチを入れて埋土の状況や底面を確認し、その所見に従って遺物を残しながら遺構埋土を掘り下げた。土層断面や、遺物・礫の出土状況の図や写真記録を作成し、遺物は番号を付して取り上げ、

掘り上がった状態でさらに図化記録と写真記録を作成した。竪穴住居跡では床面上で施設を検出して図化記録と写真記録を作成し、さらに掘方の断面図の追加後に、掘り上げて個々の遺構調査を終了した。

(4) 遺構の記録方法

遺構毎に図面記録と写真記録を作成した。図面記録は掘り上げた状態での平面図、土層断面図を基本として、必要に応じて遺物出土状況図や、個別の施設の図面を作成した。また、写真記録は各遺構の掘り上がった状態を基本とし、遺物出土が多い場合は遺物出土状況、竪穴住居跡では床面上の施設を掘り上げた状態、掘方の写真記録を作成した。



第7図 トレンチ配置図

2 整理作業の方法

(1) 基礎整理作業

発掘調査年度の冬期には、記憶が鮮明なうちに各種記録類の不備を補い、調査所見をまとめる基礎整理作業を行った。あわせて、各種記録類や遺物の台帳や、図化記録間の矛盾を調整した2次原因と呼ばれる図面を作成した。

図面記録：調査で作成された各種記録類について記載漏れの有無を確認し、台帳に記載した。この調査で作成された図を原図として、基本的に加筆しないものとしている。そして、1つの遺構について作成された平面図・断面図・遺物出土状況図・個別施設詳細図などの2次原因図を作成し、調査所見は文章にまとめた。

写真記録：調査で撮影されたフィルムについてはアルバムに収納し、1コマずつ遺跡名、撮影年月日、撮影対象、撮影方向等を記載した。また、写真の台帳を作成した。

台帳記録：調査中に作成した遺構台帳や基礎整理で作成した台帳類をパソコンで入力した。

遺物：遺物は保存や扱いが異なる素材別に分類し、金属器を除いて洗浄を行った。金属製品は乾燥材シリカゲルを入れた密閉容器に入れて仮保存した。土器・石器類は洗浄後に乾燥させてビニール袋に入れ、木製品は乾燥による収縮や破損を避けるために水漬けとした。これらの遺物は図面類に記入された取り上げ番号等との照合を行い、台帳を作成した。その後、土器・石器類は遺跡名や出土遺構などの出土場所の情報を書きこむ注記作業を行った。

(2) 本格整理作業

基礎整理作業で整備された記録類から報告書にまとめる本格整理作業を行った。

ア 遺跡

遺跡の位置、調査範囲や遺跡周辺の地形・歴史的環境に関する必要な図面類を作成した。これらの図はパソコンによるトレースや手でトレースした図をスキャンし、必要を一覧表を作成した。

イ 遺構

図面記録：基礎整理作業で作成された2次原因図からトレース作業を行い、編集委託によってスキャンしてパソコン上で編集した。これと併せて、遺構の規模や形状などを一覧表にまとめた。さらに、2次原因図を作成した個別遺構図を集めて1/100の全体図を作成し、これについてもトレース作業を行った。

写真記録：報告書に掲載する写真を選択し、写真をスキャンして編集した。

台帳記録：本格整理では改めて個別遺構毎の計測などを記載した表を作成した。

所見：基礎整理で作成された所見を元に、遺物整理によって得られた情報を加味し、総合的に所見をまとめて原稿執筆を行った。

ウ 遺物

土器：個別遺構出土及びグリッド別に取り上げられた土器を台帳と合わせて確認し、取り上げた袋から土器を出して遺構毎に接合作業を行った。接合作業後に、時代・焼物種・器種別に分類し、破片数と重量、肉眼観察による推定個体数、口縁部と底部の遺存度を計測した。遺構・グリッド毎の土器量の計測では、破片数は割れ方に左右されて個体数を示すことが難しく、重量は焼物種や器種毎の器の大きさの違いがあって個体数は比較しにくい。推定個体数は主観的などころが多く誤差を生じやすい可能性がある。各方法は一長一短があってDVDには3種類の計測数値を併記した。ただし、本文中の出土量は重量を中心に

記述した。また、遺存度は口縁部と底部の破片で、円を8分割したなかでいくつ残るかを計測したが、これは遺存度が高いほど直接遺構へ遺棄された可能性が高いと仮定しての作業である。ただし、底部は比較的厚く、割れにくい破片が多いため他の破片の遺存傾向をそのまま表現しているとは言い難いことや、底部が丸い土器は範囲を捉えにくいことがあるなどの課題が残った。そのため、出土土器の遺存状態は口縁部破片のほうが表示するのが適当と考え、口縁部の残り具合を中心に遺存度として報告した。

土器は遺存状態が良好なものを中心に、小破片でも特徴的な土器を図化し、写真を撮影して掲載した。石器・石製品：選別した石器・石製品については、石材と重量、器種を記載した台帳を作成した。特徴的な石器や石製品を選択して図化、写真撮影を行った。

金属製品：錆落としを実施せず、X線撮影を行った後に観察と図化を行った。シリカゲルを入れて封入して収納した。

木製品はわずかだが、柱材や礎板と思われる木片や近世末以後の用水跡から出土した漆器類、中世の溝跡から出土した杭等がある。本来の形状を残すものが少ないことから、洗浄し台帳記録を作成した。

エ 編集作業

上記までに作成した遺跡・遺構・遺物に関するトレース図と原稿・表や写真を集めて配置を決める仮組を作成した。それに従って図をスキャンし、併せて必要な文字やスクリーントーンを入れる編集作業を委託で行った。

第2章 遺跡の地形・歴史的環境

第1節 遺跡の位置と地形環境

川久保・宮沖遺跡の所在する中野市豊津地区は、中野市西部丘陵内を流れる千曲川左岸沿いに広がる狭い沖積地で、豊津地区の中央西寄りの場所を斑尾川が流れる。川久保・宮沖遺跡は千曲川と斑尾川の合流地点付近の左岸に位置する。斑尾川との合流地点付近で千曲川は大きく東側へ蛇行し、千曲川東岸は丘陵を侵食する崖となる。本遺跡周辺の地形は丘陵を形成した長野盆地西縁断層による隆起活動と、それを侵食し、土層を堆積させる千曲川・斑尾川の活動が大きく関与している。この点を中心に地形環境について述べる。

1 長野盆地西縁断層と河岸段丘（第8図）

長野盆地西縁には新潟から信濃川（千曲川）に沿って連続する信濃川活断層帯の一部となる長野盆地西縁活断層系断層（仁科ほか1985）が走る。この断層は東西から押される力によって、西側が隆起して丘陵や山地となり、東側が沈降して盆地となる逆断層である（赤羽ほか1992）。隆起する丘陵部には断層と並行して褶曲が発達し、複数の小規模断層が存在する。

千曲川は、上流側の長野市周辺までは沈降する盆地の東側を流れる理由として、中野市西部の立ヶ花地籍で断層を横断して本遺跡地のある丘陵地帯を縫うように流れ、下流の飯山市と中野市境で再び断層を横断して盆地内へ移る。中野市域のみ千曲川が断層を横断して丘陵内を流れる理由として、中野市域の夜間

瀬川扇状地が断層面まで延びて高い地形をつくりだしたことにより、千曲川が東側の盆地内を流れにくくしたことが挙げられる。また、断層西側の隆起スピードが千曲川の浸食スピードを上回らないため、隆起する丘陵内を千曲川が流れられたと考えられている。千曲川が断層を横断する中野市立ヶ花では、断層が隆起する度に下流側の河床が高くなって水が堰き止められ、それが溢れて「延徳田んぼ」と呼ばれる低地に流れ込んだとされる。一方で、下流側で断層を渡る飯山市連では下流側が沈降して、千曲川が上流側へ河床を浸食して段丘を形成していったと思われる。

本遺跡周辺は隆起する丘陵地を千曲川・斑尾川が浸食して形成した河岸段丘が認められる。中野市西部の丘陵地帯での千曲川が形成した段丘面については、高所から赤塩面、長丘面、草間面、高丘面（原面）、栗林面の5つの面がとらえられている（中村 1981）。旧石器時代遺跡が確認されるのは高丘面以上であり、遺跡近くでは高丘面にあたる牛出窯跡の最上段丘部で始良・丹沢火山灰（AT）下位の石器群に相当する石器群が出土し、栗林遺跡の高丘面にあたる地点の18,000年前頃とされる3層上面の2層から旧石器が採取された。この高丘面の段丘化は、高丘面下層の旧低地底部に堆積した土層出土の木片の¹⁴C年代から約27,000年前と推測され、その後、12,000年前頃河道の移動があり、10,000年前～9,000年前に自然堤防の形成、6,000年前頃に栗林面が形成されたと推測されている。年代については資料が少なく、今後修正される可能性はあるが、少なくとも栗林面で縄文時代前期土器が認められるので、この頃には離水していたと考えられる（渡辺 1994）。本遺跡で採取された最も古い縄文土器も前期前葉のもので、遺跡が川に面した低位段丘にある点からも、中村氏の栗林面に相当するとみられる。

ところで、千曲川沿いの段丘面は断層に伴う隆起活動によると考えられているが、長野盆地西縁断層の活動は1,000年～2,500年周期とされ（塚原 2011）、最も短く見積もるところでは950年周期説がある（佃・栗田・奥村 1990）。950年周期説は、長野盆地西縁断層を横断する千曲川に近接した飯山市連での通商産業省地質調査所によるボーリング調査で、周囲の丘陵部の河岸段丘面数とほぼ一致する枚数の沈降時の窪地に形成された泥炭層が見つかり、その¹⁴C年代測定から推定されたものである（佃・栗田・奥村 1990）。この活断層が起こした最後の地震が1847年の善光寺地震とする点は諸説で一致している。それより前の地震痕跡として長野市篠ノ井遺跡群・屋代遺跡群（高速道地点）で捉えられた9世紀中頃とさ



第8図 川久保・宮沖遺跡周辺の地質図

れる噴砂がある。善光寺平南部という離れた場所の事例で、長野盆地西縁断層活動に直接関連する証拠は得られていないが、約1,000年周期の活動の可能性を示唆するようにも思われる。その一方で、先の渡辺氏の検討のように隆起活動をより長く捉える説もあり、具体的な周期は考古学的には確定できていない。

ちなみに、年代測定は1990年以前のもので現在のものと単純に比較できないが、地質調査所による蓮地点のボーリング調査での泥炭層の¹⁴C年代は1,400 y.B.P.、2,600 y.B.P.、3,900 y.B.P.、4,800 y.B.P.、6,200 y.B.P.、7,800 y.B.P.、8,200 y.B.P.である。地質調査所は別地点でトレンチ調査も行っているが、参考に、トレンチで捉えられた土層変形と¹⁴C年代を列挙すると、イベント1 (1,800y.B.P.以降)、イベント2 (5,400-2,820y.B.P.)、イベント3 (7,340-6,310y.B.P.)、イベント4 (8,640-7,220 y.B.P.)、イベント5 (9,490 y.B.P.以前)、イベント6 (年代不明)である。ボーリング調査で捉えられた泥炭層の枚数と、トレンチ調査で捉えられたイベント数を比較すると、トレンチ調査のほうが少ないが、それはトレンチ設定場所が副断層にあたり、主断層の活動に伴ってすべてが変位していないためとしている。

この断層の1回の活動に伴う隆起は1～3mとされ、1847年の善光寺地震に際して飯山市域では主断層そのものは動いていないが、断層から東約1km離れた千曲川河床中に2～3mの段差が発生したことが知られている(塚原2011)。また、地質調査所が調査した蓮に近接した中野市古牧での河岸段丘調査結果では単位隆起量が平均1.9—2.3mと算出されている。1,000年弱の周期で隆起したとすれば、段丘面はもっと数多く存在し、川久保・宮沖遺跡の調査区内や周囲に2～3面の段丘が存在することになるが、遺跡周辺では大きく段丘Ⅰ・Ⅱの二つしか捉えられなかった。上部に千曲川の洪水土が覆っていることや、浸食地形で削られて段丘崖が見出しにくい状況によるかもしれない。

ちなみに、通商産業省地質調査所による中野市地質図では千田遺跡の縄文時代遺構が検出された周辺と、川久保5区以北の宮沖1・5区などの北部は完新世の段丘域、川久保1区～2・4区が谷底平野堆積物分布域と表記されている(第8図)。千田遺跡の縄文時代遺構が検出された地点は現河床面から比高差5m前後の場所で、川久保遺跡の1・2・4区とあまり標高差はないが、地形分類上は完新世の段丘にあたり、川久保1・2・4区で縄文時代後期以前の土器があまり出土せず、宮沖1・5区で縄文時代前期前葉土器が出土した点と対応すると思われる。

川久保遺跡内の段丘域と谷底平野堆積物分布域の境界となる川久保5区南部周辺から川久保集落周辺にかけては徐々に比高差の増す段丘崖が存在し、この崖をもって段丘Ⅰ・Ⅱに区分し得る。この川久保遺跡内にある二つの段丘の形成推定時期を、地質調査所による蓮のトレンチ調査で捉えられた土層変形のイベント年代と比較すると、イベント2は川久保1・2・4区で土器出土が増える縄文時代後期を含む年代、イベント3は川久保5区と宮沖1・5区出土の最も古い縄文時代前期前葉土器に近い年代ではある。上記から、段丘形成を引き起こす断層活動は4,000年前後の周期となるが、遺跡内でも小規模な隆起があった可能性もあり、今回の調査では断層活動の明確な周期について捉えきれなかった。

なお、信濃川活断層帯では新潟—三条市、三条市—長野盆地の中間域でこれまで地震発生が知られておらず、今後地震発生ポテンシャルが極めて高い地域と予想されていた(大竹2002)が、平成16年に中越地震、平成23年の東日本大地震直後に長野県栄村で地震が発生した。

2 河川の移動

河川は一般的に蛇行して流れ、蛇行するカーブ外側を浸食作用で削り、流速の遅い内側は堆積作用で蛇行洲(ポイント・バー)と呼ばれる緩斜面を形成する。川久保遺跡周辺は斑尾川との合流地点付近で、大

きく千曲川が東側に湾曲するが、遺跡は巨視的には湾曲する蛇行洲側にあたり、東側の対岸は千曲川の攻撃面となって丘陵を浸食した急崖となる。千曲川はこの浸食・堆積作用により徐々に外側へ移動していくが、本遺跡のある蛇行洲は時代を追って南側へ拡大し、この蛇行洲を浸食して流れる斑尾川もより低い傾斜下方の南西側へ徐々に移動したと推測される。

3 土層堆積

遺跡内の遺構・遺物が含まれる土層はシルト・粘土・細砂といった細粒堆積物を中心とし、これらの細粒堆積物は段丘形成以後に洪水により堆積したと捉えられる。細粒堆積物のなかで、比較的粒度も細かく均一に堆積するのが千曲川系の堆積土層、山地由来と思われる小礫やバミス状の粗い粒子を含む土層は斑尾川系堆積土と捉えた。本遺跡地は両河川の合流地点付近にあって両者の堆積土が混じるが、基本的に千曲川系堆積物が主体で、氾濫区内や局所的土石流として斑尾川系の堆積土層が認められる。

遺跡内に堆積土層をもたらした洪水について、斑尾川の洪水の記録はないが、千曲川は中世以後に古文書に記録される洪水がいくつか捉えられている。中世の古い例では1141～1151年頃と推定される『僧定寛書状』に遺跡地から少し千曲川上流にあった太田庄で、大洪水によって麻呂が流された記述がある(福島2000)。また、飯山市誌では中世の水害として応永十三年(1406年)、文安五年(1448年)、永正十四年(1517年)、天文十九年(1550年)、永禄八年(1565年)、天正十三年(1585年)を挙げている(佐藤1993)。各洪水を示す根拠史料は明示されていないが、応永十三年の洪水は夜間瀬川が移動した伝承、文安五年は高梨氏の篠井川改修伝承からの推測と思われる。参考に藤木久志氏編『日本中世気象災害史年表稿』(藤木2007)から隣接地域の災害記録を拾うと、応永十三年(1406年)越中(旧暦6・8月)、文安五年(1448年)尾張(同6月)、永正十四年(1517)上野(秋)・遠江(旧暦5月下旬)・甲斐(同7月)、天文十九年(1550年)上野ほか(同8月)、永禄八年(1565年)信濃諏訪地域に複数洪水記録(同3月)、天正十三年(1585年)に美濃(同8月)・武蔵(同8月)の洪水記録がある。いくつか年代的に一致する洪水があるが、16世紀の洪水の多さは遺存文書の多さを反映しただけかもしれない。ただし、16世紀以前でも古文書数に比して洪水記述が少ない時期もあるようで、时期的に洪水発生の多寡はあるようだ。

発生季節は信濃で旧暦3月例があるが、旧暦6月頃か8月頃が多い。旧暦3月は現在の4月下旬で雪解け、旧暦6月は現7月下旬頃から梅雨末期の前線に伴う降雨、旧暦8月は現9月下旬頃から台風が原因と推定される。雪解けの洪水は信濃に限られるかもしれないが、ほかの洪水要因は広域に及ぶ気象条件のものであるため、信濃も洪水に遭っている可能性は考えられる。

近世の洪水記録は数多くあり、個々には取り上げられないが、中野市年表を参考に洪水記録を整理した小林暉暉氏によると1629～1710年は旱害が多く、1699～1772年は水害記録が多く、1773～1860年は水害記録が少なく、1860～1920年まで水害記録が多いとしている。小林氏はマツの年輪幅の変化を洪水の多寡からの気象条件との関係で捉えているが、佐藤平八氏は飯山市域の洪水の多寡を千曲川の河道移動や、飯山藩での治水事業(盆地北端での河床の浚渫)との関係で捉えている。洪水が自然要因によるものばかりとはいえないが、時期毎に洪水発生に多寡があるようだ。なお、近世最大の洪水として寛保二年(1742年)の「戊の満水」があり、その被害は千曲川上流域からも中野・飯山地域に及び、本遺跡にも大きな影響を与えた可能性がある。また、中野市柳沢地籍の八幡塚塚塚(一字一石塚)は石碑の造営年代が洪水多発の不安定な時期に当たることから、天候不順が造営の契機とする説がある(檀原1986)。

上記以外に平安時代、仁和四年(888年)の千曲川洪水がよく知られており、対比される洪水土層が善光寺平南部を中心に確認されている。今回調査でも間わたると思われる洪水痕跡NR1dが捉えられた。

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

川久保・宮沖遺跡の所在する中野市は信濃北端に位置して越後に近く、隣接する飯山市と共に北陸地域との繋がりが強い土地柄である。また、千曲川沿いに立地する本遺跡は、遺跡の成り立ちや変遷にも川との関わりが強い。こうした点を踏まえて本遺跡周辺の遺跡について触れておく。

旧石器時代 本遺跡では旧石器時代の遺物は認められなかったが、周辺では中野市長丘・高丘丘陵に立ヶ花表、がまん淵、沢田鍋土、浜津ヶ池、牛出窯跡など、千曲川西岸では南曾峯遺跡などの旧石器時代遺跡がある。牛出窯跡では千曲川に面した3段の段丘の最上部、高丘面にあたる面から始良・丹沢火土灰（AT）降灰より下位にあたる石器群、栗林遺跡南端の高丘面縁にあたる地点では18,000年前頃とされる3層の上に位置する2層から旧石器が採取された。千曲川から100mの至近距離にある中野市立ヶ花土川端遺跡で旧石器のブレイドが出土したとされるが、詳細は不明である。

縄文時代 草創期～早期の遺跡は旧石器時代の遺跡同様に丘陵部や河岸段丘、山間地にあり、千曲川沿岸では牛出窯跡の2段目段丘で押型土器、牛出遺跡の最下位段丘で縄文時代早期土器がわずかに採取されている。前期からは千曲川沿い低位段丘に中野市立ヶ花遺跡、南大原遺跡、飯山市田草川尻遺跡、有尾遺跡、上野遺跡などが現われる。本遺跡でも前期前葉の土器が認められ、この頃から川沿いで人間の活動が本格化したとみられる。中野・飯山市域の縄文時代前期の遺跡は5～7km間隔に遺跡が集まって群を形成するような分布にみえる。千曲川をやや遡った旧豊野町上浅野遺跡では集石遺構が発見され、大量の浅鉢形土器や1点ながら南信地方の中越式土器が出土した。中期の遺跡は前期から増加して川沿いや山間地の平坦地に集落遺跡が分布し、あまり偏在せず分布する。一部は、ところどころ千曲川から山地側へ約2km間隔で遺跡が並ぶようにみえるところがあり、関連した遺跡と思われるものもある。また、土器からみると当該期に交流が活発化することが指摘されている（寺内2003）。寺内氏の整理によると、中期初頭に地域独特の土器が生み出されて上越地域へ流入し、やがて中期前葉に千曲川上流域や関東の土器が影響を強め、期中葉では一旦影響が弱まるが、後葉では関東方面の土器に加えて越後方面の土器、東北の大木式土器も入るとされる。この時期に斑尾川を挟んで対岸の千田遺跡が盛期となる。後期は遺跡数が減るが、周辺では中野市栗林遺跡、柳沢遺跡、千田遺跡、本遺跡を含めて川沿いに遺跡が点在して認められる。栗林遺跡では水さらし場遺構や貯蔵穴が発見され、あわせて台・脚を付けた石皿が出土し、当該期にトチの実加工技術や溝状の陥穴が出現したようだ。晩期の遺跡はわずかしか知られていない。周囲では飯山市山ノ神遺跡、牛出遺跡第2地点など千曲川沿いの遺跡や、中野市に隣接する山ノ内町の晩期前半の標式遺跡である佐野遺跡がある。山ノ神遺跡ではサケともされる絵が描かれた土器が出土している。これ以後の晩期後半から弥生時代の条痕文土器の時期まで遺跡は不明瞭である。

弥生時代 条痕文土器は中野市・飯山市周辺では出土があまり知られておらず、本遺跡で採取された条痕文土器は北信濃の数少ない出土例といえる。ただし、条痕文土器は上越市まで出土しており、本遺跡が出土の北端ではない。弥生時代中期後半では、当地域を代表とする栗林式土器が成立し、その成立に北陸方面からの影響も指摘されているが、成立前後の土器は長野市・須坂市周辺で知られているものの、弥生時代中期前半までの遺跡は知られておらず、当地域の様相が不明瞭である。しかし、栗林式土器の盛行期の前半では標識遺跡となる栗林遺跡をはじめとして中野・飯山市域に数多くの遺跡が知られる。

本遺跡周辺の栗林式期の遺跡は千曲川に沿って1~2km間隔に分布し、柳沢遺跡を境として以南では千曲川の東岸、以北では千曲川西岸に遺跡が多い。また、遺跡範囲が広く、多くの管玉や木棺墓、礎床木棺墓が見つかった飯山市小泉遺跡、同上野遺跡、中野市栗林遺跡、銅戈・銅鐸を出土した柳沢遺跡など代表的な遺跡が5~7km間隔に位置する。この代表的な遺跡である小泉遺跡や栗林遺跡周囲には小さな遺跡も散在しているが、柳沢遺跡周囲にはない。現時点で知られる中期後半の遺跡すべてが同時期のものでなく、さらに飯山市・木島平村の千曲川沿いの自然堤防地帯や中野市扇状地帯に知られていない遺跡が存在する可能性も想定されている。そのため、現時点の遺跡分布から断定的なことは述べられないが、現時点の遺跡分布は列状に並ぶようにみえる。これは個々の集落が千曲川と同方向の交通路に沿って位置し、個々の集落の活動領域がそれと直交する千曲川低地から山地までを含む範囲として設定されていた可能性を示すように思われる。交通路に沿っていることは黒曜石や石斧などの物資流通との関連が注目されるが、その詳細は捉えきれていない。なお、栗林式後半期の長野市松原遺跡など善光寺南部で巨大集落遺跡が盛行する時期では、小泉、栗林遺跡など北部の大きな集落遺跡は減少するようだ。そのなかで本遺跡は南部の巨大集落遺跡が出現する時期に重なる時期の土器が出土し、当地域は本遺跡のような小集落跡が散在する様相となっていたと思われる。

弥生時代後期の遺跡は中期後半の遺跡と分布が重なりながら、千曲川東岸の木島平村、中野市の夜間瀬川扇状地の先端付近など、栗林式土器の時期に遺跡が認められない場所にも分布する。また、当該期の遺跡は列状に並ぶというより、低地を含む一定地域に面的に広がるようにみえる。後期は前半の吉田式と後半の箱清水式期に分けられているが、吉田式土器を出土する遺跡が長野盆地北部に比較的多いように見受けられる。周囲で吉田式土器を出土した遺跡には中野市月岡遺跡、柳沢遺跡、千田遺跡、栗林遺跡、西条・岩船遺跡などがある。長野市吉田高校グランド遺跡では当該期に東北地方の天王山式土器やアメリカ式石鏃、中野市では間山遺跡でアメリカ式石鏃が出土している。今回、本遺跡で天王山式土器が確認できた。

箱清水期の遺跡は点在して認められる。当地域の弥生土器は襲口縁部が丸く折り返し、壺も口縁部にやや受口状に面取するような独特な形状で、笹澤 浩氏は中野・飯山市域が同じ形態の土器を用いる地域と括っている(笹澤1986)。また、木島平村根塚遺跡では朝鮮系ともされる鉄剣が出土し、古墳時代初頭にかかる頃では中野市安源寺遺跡1号住で鉄鏃、間山遺跡Ⅲ36号住から鉄鏃の出土など鉄製品出土が多い。

弥生時代後期の墓には、著名な木島平村根塚遺跡があり、中野市安源寺遺跡で円形周溝墓と思われる円形溝に囲まれた土坑や、飯山市針湖池遺跡では四隅が切れる方形周溝墓と、溝が途切れる円形周溝墓、飯山市須多ヶ峯遺跡で鉄鏃を出土した方形周溝墓が見ついている。古墳時代初頭にかかる方形周溝墓は飯山市上野遺跡でみつかった。上述した弥生時代の方形周溝墓の派及の状況については十分整理できていない。

古墳時代 弥生時代後期から古墳時代への移行期の土器は、弥生時代後期の箱清水式土器主体→北陸系土器の流入→東海・畿内系土器流入→弥生時代後期以来の在来系土器の消滅と多様化・畿内系土器要素の増加→畿内系小型精製土器の盛行への変遷と捉えられている。外来系土器に代表される情報や人間の移動に伴って、弥生時代に独自の土器を用いた地域社会が解体・変容して古墳時代に移行したと思われる。その過程では墓制も連動しながら、当地域が北陸、東海・畿内地方の勢力のそれぞれ最前線と位置づけられた可能性が指摘されている(土屋1998)。北陸系土器の流入期では中野市七瀬遺跡、安源寺遺跡、間山遺跡、丘陵上に溝を巡らせた、がまん淵遺跡がある。このなかでは、がまん淵遺跡を代表として東海系土器流入の動きに対する緊張状態を想定する意見がある(土屋1998)。また、飯山市上野遺跡9号住は北陸系土

器で占められ、住居跡形態も北陸と類似するという。木島平村の根塚遺跡もこうした動きと関連するものと思われる。次の東海系土器流入期では七瀬遺跡、安源寺遺跡、間山遺跡、栗林遺跡、沢田綱土遺跡があり、その後は牛出遺跡、牛出窯跡などの遺跡が出現している。この東海系土器の流入期では、北へ向かっての最前線として善光寺南部よりも直接的な東海の影響が及んだと想定されている（土屋 1998）。ハレス壺は中野市安源寺遺跡、間山遺跡、七瀬遺跡、本遺跡などから出土し、東海のS字襷のハゲ目を模倣した襷、畿内のタキを意識したと思われるハゲ襷など、影響を2次的に受けた土器も指摘されている。中野市域周辺では、その後の畿内系小型精製土器が派及してくる時期の遺跡はあまり知られておらず、逆に善光寺平南部で遺跡数も増えているようだ。本遺跡は東海系土器の派及期に千曲川沿いに遺跡が増える時期に出現し、畿内系小型精製土器が派及する遅い時期まで存続する数少ない遺跡の一つとみられる。当該期の可能性がある古墳では中野・飯山市域に前方後方墳の飯山市有尾1号墳、法伝寺2号墳、勘介山古墳、中野市蟹沢古墳があり、安源寺城跡では前方後方墳型墳丘墓が報告されている。畿内系の影響が強まる時期では中野市安源寺遺跡の前方後方墳型周溝墓、さらに古い前方後円墳とされる高遠山古墳がある。

その後の古墳時代前期の集落遺跡や高遠山古墳以後の古墳は不明瞭だが、近接地域では銅鉄を出土した伝承から古墳の可能性が指摘されている長野市（豊野町）石村將軍塚、タキ成形された埴輪が出土した飯綱町庚塚古墳（前方後円墳）などがある。古墳時代中期には祭祀遺跡として新井大ロフ遺跡、古墳時代中・後期の集落遺跡では中野市新野遺跡や神宮寺遺跡、千曲川下流の飯山市田草川尻遺跡、同有尾遺跡などがある。5世紀後半からの古墳では円筒埴輪を出土した中野市七瀬双子塚古墳（前方後円墳）や馬具・鉾留短甲を出土した中野市畔野1号墳など七瀬古墳群、そして中野市金鍬塚古墳、山ノ内町紫岩古墳が続く。割竹形木棺などの七瀬古墳群と、合掌型石室をもつ金鍬塚古墳などが同地域に存在している。積石塚古墳は小布施町から中野市南東部、須坂市、長野市大室古墳群など千曲川東岸に多く分布し、中野市よりも北部では合掌型石室をもつ古墳は木島平村にもあるが、数は少ない。この中野市域に古墳が増える時期は新潟県南魚沼地域にも古墳群が現われることが知られている。厳密には信濃川支流の魚野川沿いの地域ではあるが、同じ信濃川沿いにあり、関連も想定される。

古墳時代後期以後の様相はあまり明らかにされておらず、遺跡の状況が不明であるが、本遺跡周囲では象嵌入罫が出土した長野市南曾峯遺跡、7世紀後半の中野市風呂屋古墳がある。

古代 当地域では奈良時代の集落遺跡はあまり知られていないが、窯跡や窯業関係遺跡が分布する。本遺跡のある千曲川西岸は水内郡に含まれるが、水内郡内では長野市・飯綱町の境の髷山周辺に窯跡群があり、本遺跡南西2kmの中野市今井地区にも寺窪窯跡がある。千曲川東岸の高井郡となる中野市域では、高丘丘陵の窯業遺跡や工房遺跡が知られている。高丘丘陵の窯跡は茶臼峯窯跡、清水山窯跡、池田端窯跡、大久保窯跡、中原窯跡、坂下窯跡、立ヶ花表遺跡、安源寺遺跡、牛出窯跡等があり、操業期間は茶臼峯窯跡の7世紀後半からはじまり、8世紀を中心に9世紀前半までとされる。また、平安時代の土師器焼成遺構が中野市栗林遺跡、安源寺遺跡で報告され、髷山北麓の西浦遺跡でも粘土採掘坑とされる土坑内から軟質須恵器杯Aが大量に出土し、遺跡周囲で生産された可能性が想定されている。栗林遺跡の土師器焼成遺構と報告された遺構からは越後と類似した砲弾型の土師器襷が出土している。なお、高丘丘陵では縄文時代、古墳時代前期の粘土採掘坑が捉えられており、川久保遺跡の北西段丘上の飯綱平遺跡でも縄文時代中・後期とされる粘土採掘坑が報告されている。

集落遺跡は奈良時代の遺跡が不明だが、9世紀には千曲川沿いから山間地まで広範囲に遺跡が認められ、

遺跡数も多い。小遺跡が近接して遺跡群のようなまとまりを構成するようにみえるが、大きな遺跡はなく、小さな竪穴住居跡から構成される遺跡が多い。そのなかで飯山市北原遺跡では掘立柱建物跡や井戸跡がみつきり、ここでは鍛冶を行った可能性が捉えられ、本遺跡を含めて中野市宮反遺跡、安源寺遺跡などで鍛冶を行った遺構や遺物が検出されている。他に木棺墓の検出例として飯山市小佐原遺跡、上野遺跡などがある。10世紀の遺跡は不明瞭だが、11世紀は本遺跡や中野市牛出遺跡、間山遺跡、新野遺跡などの遺跡が点在して認められている。

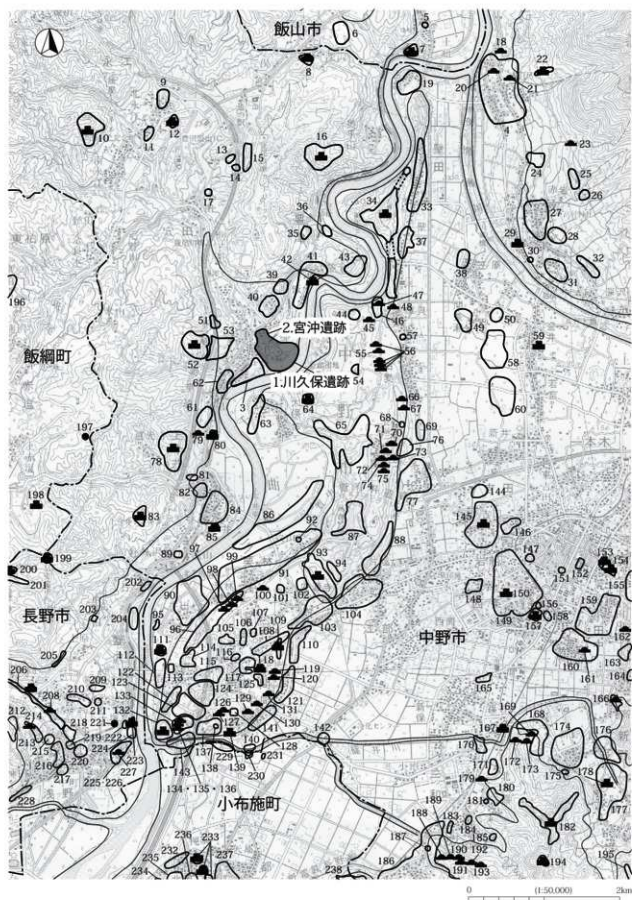
中世・近世 『和名類聚抄』にみえる本遺跡に近い水内郡内の郷として太田郷があり、嘉暦四年(1329年)諏訪神社五月会頭役に替佐南隣の「今井」が太田庄内と記される。しかし、南北朝期以後に遺跡周辺の地名「加佐」、「かいさ」が文献に現れるが、若槻新庄内加佐郷とみえて平安時代に本遺跡周辺が太田郷に含まれていたかは不明である。また、南北朝～室町時代にかけて加佐飯岡村や同じ豊田村永江に所領があった高梨氏と、守護小笠原氏から元中五年(1388年)加佐郷内新屋分、応永七年(1400年)加佐郷内庶子分、同年加佐郷内新居分阿跡等をあてがわれた市河氏が争ったが、室町時代には高梨氏が飯山市南部までを手中に収める。高梨氏の居館跡は現中野市市街地の小館にあったが、遺跡周辺の千曲川沿いは1～2km間隔で居館跡が分布し、本遺跡周辺では上今井に内堀館跡、笠倉に笠倉館跡がある。その後、武田氏、上杉氏の争い時に当地域は緊張した状態となり、高梨氏本拠の中野市東部の山地や、遺跡周辺の千曲川西岸の山地には山城が多く分布する。本遺跡に近いところでは替佐城跡があり、その山麓の対面所遺跡では五輪塔が数多く出土した。その後、戦国時代末には上杉氏が支配するところとなり、元高梨氏家臣であった岩井氏が「かいさ」をあてがわれているが、移封に伴って転出し、江戸時代には当地域が飯山藩領となる。

文献史料からは南北朝期以後の武士所領としての地名しか現れないが、所領の地名からも当地域に集落が存在した可能性が知られる。しかし、集落遺跡は千曲川沿いの牛出遺跡などが断片的に知られているのみで、地域全体の動向は捉えられていない。

なお、斑尾川対岸の千田遺跡では、斑尾川沿いの段丘上にあたる千田12区で中世の掘立柱建物跡の柱穴多数が検出され、斑尾川沿いの右岸段丘上にも居住遺構が分布することが捉えられた。また、斑尾川氾濫原内の千田10区では中世の3～5面水田跡、2面の戦国時代頃の畑跡や掘立柱建物跡、1面の近世水田跡と畑跡が検出された。中世には水田域だった場所が16世紀には畑地と居住地になり、近世には一部ながら水田が造成される変遷が捉えられた。千田遺跡10区の2面の16世紀頃は洪水が少ない環境であること、近世に新たに水田造成が行われた可能性が知られた点は、川久保遺跡の調査所見と一致する。

この千田遺跡10区3～5面水田跡の時期は出土遺物がなく時期は不明だが、千田遺跡と同様に厚い洪水土層で埋没している川久保遺跡1区の中世水田跡に対比すると、概ね川久保1区8～10面水田跡に対比し得る可能性がある。千田10区1面の近世水田跡については、16世紀の1面～2面間に大きな洪水土層が認められないことや、傾斜方向に通る畔で大きく区画し、その間を等高線方向の畦で区画する様相が川久保遺跡1区4面水田跡に類似することから、千田遺跡10区1面水田跡は川久保1区4面水田跡に対比し得ると思われる。

また、斑尾川流路は千田遺跡10区中世5面水田跡時には大きく千田遺跡側に蛇行していたが、砂礫で埋積した後は東側へ移動し、千田遺跡10区2面では現位置に近い場所に位置していたことが捉えられた。



第9図 中野市周辺遺跡分布図

第4表 中野市周辺遺跡一覧表(1)

掲載番号	市町村	市町村番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
1	中野市	206	川久保(替佐遺跡群)		○	○	○	○	○		2004～2007調査(川久保・宮沖・塚添・小宮総称)
2	中野市	206	宮沖(替佐遺跡群)		○	○	○	○	○		2004～2007調査(川久保・宮沖・塚添・小宮総称)
3	中野市	203	千田		○	○			○	○	2001～2003・2005・2006調査
4	中野市	176	柳沢		○	○					2007～2009調査銅戈・銅鐔出土
5	嵐山市	146	上組			○					
6	嵐山市	147	深沢		○						1963(1)、1964(2)、1965(3)、1993発掘
7	嵐山市	306	蓬城						○		
8	中野市	242	深沢城跡						○		山城
9	中野市	217	鞠田		○						
10	中野市	228	赤江城址						○		山城
11	中野市	216	北永江		○						
12	中野市	241	赤江館跡						○		屋敷
13	中野市	214	八号堤		○	○		○			1994調査
14	中野市	213	大谷地		○	○					1994調査
15	中野市	215	稲沢		○						
16	中野市	237	松の城の峯跡						○		山城
17	中野市	238	名立				○	○			
18	中野市	179	小丸山古墳				○				古墳
19	中野市	166	古牧			○					
20	中野市	177	八幡塚古墳				○			○	古墳
21	中野市	178	塚六古墳				○				古墳
22	中野市	180	棚平旗塚						○		
23	中野市	175	赤岩古墳				○				古墳 推定位置
24	中野市	174	セツ鉢		○						
25	中野市	173	村林	○							
26	中野市	172	神宮寺				○	○			寺院
27	中野市	171	神宮寺下			○	○				1948・1971調査
28	中野市	170	梵天	○	○						
29	中野市	5	笠原の立						○		
30	中野市	169	きつね塚								塚状遺構 時期不明
31	中野市	168	屋敷添		○						
32	中野市	167	関上		○						
33	中野市	163	壁田(含、壁田宮下遺跡)		○	○		○	○		1971調査
34	中野市	161	壁田城跡						○		山城
35	中野市	211	袖久保(含、日向遺跡)		○	○					
36	中野市	212	大日影	○							
37	中野市	162	ねごや						○		
38	中野市	82	笠原			○				○	石積み遺構 中・近世か?
39	中野市	208	飯綱平北		○						
40	中野市	207	飯綱平(含、袖山遺跡)		○			○	○	○	1992・2004調査
41	中野市	209	笠倉(含、川陣遺跡)		○	○					2011調査
42	中野市	236	笠倉館(森の家)跡						○		屋敷
43	中野市	210	琵琶島(滝脇)		○	○					2011調査
44	中野市	158	峯	○							
45	中野市	156	山の神古墳				○				古墳 1948調査
46	中野市	157	陣場	○	○	○					
47	中野市	160	赤沼古墳				○				古墳
48	中野市	159	永峯古墳				○				古墳
49	中野市	80	間長瀬				○				
50	中野市	81	笠原向ノ原				○				
51	中野市	205	飛山(含、飛山古墳)		○	○			○		1994調査
52	中野市	204	替佐城跡						○		山城
53	中野市	235	対面所						○		1995調査
54	中野市	153	三ツ又		○						
55	中野市	154	中畝1号古墳				○				古墳 消滅
56	中野市	155	中畝2号～5号古墳				○				古墳 1986・1987調査 消滅
57	中野市	231	田麦						○		
58	中野市	79	新井向原						○		
59	中野市	6	金井陣屋						○		
60	中野市	78	新井大口フ				○				1969調査
61	中野市	200	風呂原		○	○		○	○		1994調査
62	中野市	202	南大洞		○	○					
63	中野市	149	宮反		○	○		○			1983・1984調査

第5表 中野市周辺遺跡一覧表(2)

掲載 番号	市町村	市町村 番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
64	中野市	150	大塚城跡						○		原館
65	中野市	148	姥ヶ沢		○	○	○				1982 調査
66	中野市	152	林野 2号古墳				○				古墳 1948 調査
67	中野市	151	林野 1号古墳				○				古墳 (市史跡)
68	中野市	144	七瀬北原墓址						○		七瀬 4号古墳改称。1987 調査消滅
69	中野市	147	棚畑					○	○		
70	中野市	145	七瀬 5号古墳				○				古墳 1987 調査 消滅
71	中野市	143	七瀬 3号古墳				○				古墳 1987 調査 消滅
72	中野市	141	七瀬 2号古墳				○				古墳 1986 調査消滅
73	中野市	142	前山古墳				○				古墳 1985 調査 消滅
74	中野市	140	七瀬 1号古墳				○				古墳
75	中野市	139	七瀬双子塚古墳				○				古墳 (県史跡)
76	中野市	146	寿徳寺跡						○		中世寺院
77	中野市	138	七瀬	○	○	○	○	○			
78	中野市	199	北城城址				○		○		
79	中野市	233	風呂屋古墳				○				古墳 1994 調査 消滅
80	中野市	201	風呂屋旅館址								原館
81	中野市	198	寺窪家址					○			1991 調査
82	中野市	227	西山根	○							
83	中野市	234	南城城址				○		○		山城
84	中野市	197	山根		○	○	○				1991 調査
85	中野市	232	内巻館跡						○		原館
86	中野市	196	南大原			○	○	○			1951・1956・1979 調査
87	中野市	135	浜津ヶ池	○	○	○	○				1987・1994 調査
88	中野市	137	大徳寺			○	○				
89	中野市	195	葎山	○	○	○	○			○	鬼坂遺跡を改称
90	中野市	122	牛出	○	○	○	○	○			1994～1996 調査
91	中野市	134	栗林	○	○	○	○	○	○	○	1948・1950・1965・1969・1980・ 1981・1983・1987・1991・1992・1994 ～1999 調査
92	中野市	133	光海寺跡 (三ヶ寺跡)						○		
93	中野市	126	安源寺城跡	○	○						山城
94	中野市	125	から池				○	○			
95	中野市	119	立ヶ花・上川端	○							
96	中野市	121	牛出塚跡	○	○	○	○	○			1993・1997 調査
97	中野市	132	栗林 3号墳				○				古墳
98	中野市	130	栗林 1号墳				○				古墳
99	中野市	131	栗林 2号墳				○				古墳
100	中野市	129	小丸山古墳				○				古墳
101	中野市	128	安源寺館跡				○				原館 1990 調査
102	中野市	127	安源寺跡								
103	中野市	124	安源寺	○	○	○	○	○	○	○	1951・1976・1986・1986・1985・ 1994・1995・2002 調査
104	中野市	136	片塩					○			1960 調査
105	中野市	113	中原塚跡				○				1984 調査
106	中野市	114	裏池田塚跡		○		○				2004 調査
107	中野市	115	坂下塚跡								
108	中野市	112	茶臼峯家跡								1963・1964・1971 調査
109	中野市	106	茶臼峯遺跡・茶臼峯看 跡 (含、茶臼峯墳塚)		○			○	○	○	1969 調査
110	中野市	123	風呂								1989 調査
111	中野市	117	牛出城跡	○					○		1994・1997 調査
112	中野市	116	立ヶ花	○	○	○	○				1962・1989・1990・1993・1997・2000 調査
113	中野市	118	本誓寺						○		寺院
114	中野市	120	草間西原塚跡				○				
115	中野市	110	池田塚跡				○	○			1991・1992 調査
116	中野市	107	林野塚跡				○				
117	中野市	111	大久保塚跡				○				1964・1983 調査
118	中野市	105	大久保館跡								原館
119	中野市	103	高山 2号古墳				○				古墳 消滅
120	中野市	102	高山 1号古墳				○				古墳 消滅
121	中野市	100	高屋敷		○	○					
122	中野市	108	立ヶ花表山塚跡					○			1970 調査
123	中野市	229	沢田鍋土	○	○	○	○	○	○	○	1991・1992・1995・2009・2010 調査

第2章 遺跡の地形・歴史的環境

第6表 中野市周辺遺跡一覧表(3)

掲載番号	市町村	市町村番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
124	中野市	109	清水山遺跡		○			○	○		1992・1994 調査
125	中野市	104	上の山竪址					○			1993 調査
126	中野市	96	西山古墳				○				古墳 消滅
127	中野市	95	涼塚古墳				○				古墳 消滅
128	中野市	230	上の山					○			1994 調査
129	中野市	97	秋葉山古墳				○				古墳
130	中野市	99	御嶽山古墳				○				古墳
131	中野市	101	社宮司古墳				○				古墳
132	中野市	87	立ヶ花城跡	○	○	○	○		○		城跡 1980・1984 調査
133	中野市	91	立ヶ花表	○		○		○			
134	中野市	88	立ヶ花1号墳				○				古墳
135	中野市	89	立ヶ花2号墳				○				古墳
136	中野市	90	立ヶ花3号墳				○				古墳
137	中野市	92	がまん淵(含、西山竪跡、西山中世墓址)	○	○	○	○	○	○		1991・1993 調査
138	中野市	93	竜徳寺跡						○		
139	中野市	94	草間城跡						○		
140	中野市	85	川端								
141	中野市	98	草間中組			○		○			
142	中野市	84	殿橋			○		○			
143	中野市	86	島軒割			○		○	○		
144	中野市	77	屋裏			○		○			
145	中野市	76	吉田富船(含、吉田屋敷下、吉田立道遺跡)			○		○	○		
146	中野市	75	五里原						○		
147	中野市	74	寿町			○					
148	中野市	72	岩船			○		○			
149	中野市	69	西条・岩船遺跡群			○		○			1989～1995 調査
150	中野市	9	岩船氏居館					○	○		
151	中野市	70	三好町					○			
152	中野市	56	中野泉行跡(中野陣屋跡)							○	
153	中野市	55	高梨氏城跡						○		1989～1994、1998・1999 調査
154	中野市	8	中野小籠						○		
155	中野市	52	替代	○	○	○	○				
156	中野市	68	西条長屋敷					○			
157	中野市	67	西条東屋敷			○	○	○			1998 調査
158	中野市	66	五加					○			
159	中野市	46	上小田中	○	○	○	○	○	○		1971・1997・1998 調査
160	中野市	44	下小田中			○	○				
161	中野市	45	光念寺古墳				○				古墳
162	中野市	50	姥塚山古墳				○				古墳 1967 調査・消滅
163	中野市	47	北越巻	○							
164	中野市	41	中郷		○			○			
165	中野市	22	新保								
166	中野市	38	高遠山古墳				○				古墳(前方後円墳) 1997・1999 調査
167	中野市	21	藤井居館跡						○		居館
168	中野市	26	行人塚					○			
169	中野市	25	新野2号古墳				○				古墳
170	中野市	20	通茶			○	○				
171	中野市	19	三ツ和			○	○	○	○		
172	中野市	23	金輪山古墳				○				古墳(大正14 調査)
173	中野市	24	新野1号古墳				○				古墳
174	中野市	28	新野	○	○	○	○	○	○		1990・2002 調査
175	中野市	29	新野陣屋跡							○	近世陣屋
176	中野市	30	新野上東					○			
177	中野市	31	間山	○	○	○	○	○			1958・1983・1991・1992 調査
178	中野市	10	間山館					○	○		
179	中野市	18	えびす山古墳				○				古墳
180	中野市	17	専福寺跡					○			
181	中野市	16	大熊日影					○			
182	中野市	27	小曾崖城跡						○		山城
183	中野市	11	大日前								時期不明
184	中野市	12	大熊日向			○		○			
185	中野市	13	大円寺			○					

第7表 中野市周辺遺跡一覧表(4)

掲載番号	市町村	市町村番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
186	中野市	3	桜沢遺跡群		○	○	○	○			1965・1989 調査
187	中野市	4	桜沢塚				○?		○?		古墳か中世の塚
188	中野市	5	桜沢1号古墳				○				古墳
189	中野市	6	桜沢2号古墳				○				古墳
190	中野市	7	桜沢3号古墳(桜沢古墳)				○				古墳
191	中野市	8	桜沢4号古墳				○				古墳
192	中野市	9	桜沢5号古墳				○				古墳
193	中野市	10	桜沢6号古墳				○				古墳
194	中野市	15	西山街跡						○		山城
195	中野市	33	真山城跡						○		山城
196	三水村	10	東柏原	○							
197	三水村	8	宿屋敷					○			
198	三水村	11	黒田城						○		
199	三水村	12	黒田のろし山						○		
200	豊野町	1	鎌ヶ崎城						○		
201	豊野町	1	塚上		○			○			
202	豊野町	3	ニツ石		○						
203	豊野町	49	稲葉寺跡						○		
204	豊野町	46	小鞍井					○			
205	豊野町	58	真羽田					○			
206	豊野町	7	立石ヶ丘		○	○	○	○			1978 調査
207	豊野町	3	鐘撞堂						○		
208	豊野町	66	立石ヶ丘古墳				○				古墳
209	豊野町	4	八幡社					○			
210	豊野町	5	板橋					○	○		
211	豊野町	6	下坂	○							
212	豊野町	81	松ノ木下		○		○	○			
213	豊野町	14	上浅野		○	○	○	○			
214	豊野町	78	山崎古墳				○				
215	豊野町	15	大川端		○		○	○			
216	豊野町	17	大道浜		○		○				
217	豊野町	16	町尻		○		○	○			
218	豊野町	12	観音堂		○	○	○				
219	豊野町	13	橋場			○					
220	豊野町	10	中島		○						
221	豊野町	101	坊瀬						○		
222	豊野町	47	手子塚	○							
223	豊野町	89	上ノ山二号古墳				○				
224	豊野町	77	藤堀					○			
225	豊野町	8	南管峯	○	○	○	○	○			1980・1993・2005～2007 調査
226	豊野町	11	峰の畑					○			
227	豊野町	9	南管峯古墳				○				古墳
228	豊野町	18	西沖			○					
229	小布施町	66	北久保			○	○	○			
230	小布施町	67	土橋・川端			○					
231	小布施町	68	焼野								
232	小布施町	1	東郷			○	○	○			
233	小布施町	1	くぬぎ原庄 高梨氏屋敷						○		
234	小布施町	2	向屋敷				○	○			
235	小布施町	3	西蓮坊			○	○	○			
236	小布施町	4	三木			○	○	○			
237	小布施町	5	六川		○	○	○	○			
238	小布施町	25	二十曜城跡						○		

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 基本土層と遺跡地形

1 基本土層（第10・11図）

遺跡内の土層は斑尾川・千曲川の洪水土や腐植・耕作によって変容した土層から構成され、調査区内では風成火山灰層は認められなかった。最下層に段丘礫層があり、その上部に広域に分布する千曲川・斑尾川の堆積土層、さらにその上部に小規模な洪水土層や土石流堆積層を挟む腐植土の黒褐色・暗褐色土層、最上部に水田耕作土層が載る。段丘の隆起活動による離水過程を反映した土層の構成とみられる。

千曲川の堆積土層はシルトや細砂など比較的均一な細粒堆積物を中心として、広く分布するが、遺跡全体に均一に堆積していない。低地のみや本流に近い場所にしか堆積しない土層、後代の水田耕作等で削平されて水田数筆程度の範囲や畦内や溝跡埋土中にしか残存しない洪水土層もある。

斑尾川堆積土層は、風成火山灰や火山噴出物が堆積した山地を斑尾川が浸食するためスコリアなど火山噴出物を含んで粒度も粗い傾向がある。斑尾川氾濫原や段丘縁辺部の下層に所々認められ、段丘上では角礫を含む土石流堆積層が3枚確認できたが、土石流堆積層以外の斑尾川堆積土層は特定できなかった。

基本土層は調査区毎に捉えられたものを整理作業で検討して統一した。その際に、どの程度の分布域をもつ土層を基本土層と捉えるかの課題はあったが、千曲川脇に位置して各時代の堆積土層があり、最初に調査された川久保2・4区の土層を基準に大枠の基本土層を設定した。基本土層はローマ数字で表記し、調査時のⅠ～Ⅶ層はそのまを用いたが、地区毎に異なる段丘形成前後の土層は新たにⅧ層以下の番号を付した。また、狭い範囲のみに堆積する土層も多く存在する。これらは類似環境下で形成された土層と思われる複数の土層をまとめ、基本土層に枝番号を付した細分土層番号で呼称した。この細分土層はすべての土層を捉えきれておらず、分布域が限られる土層もあって土層番号が堆積順序をそのまま表していない。

Ⅰ層：現耕作土層

大部分はⅡ層を基調とした水田耕作土層で、川久保3区は畑耕作土層、宮沖5区は宅地造成土層となる。

Ⅱ層：褐色土層 Hue10YR4/1～6/1 とにぶい黄褐色～黄褐色砂層 Hue10YR6/4～6/6 の互層

Ⅰ層とⅢ層中間に位置し、中近世の水田化により形成されたと思われる還元化した水田耕作土層と、それを覆う小規模な洪水土層をⅡ層と捉えた。Ⅱ層は川久保3区を除く広範囲に分布し、多くは洪水土層の堆積もわずかで、還元化した褐色土層が数層重なるのみである。川久保1区のみは中世以後の耕作土層と洪水土層の堆積が約3m弱に及ぶ。川久保1区と他地区のⅡ層の対比では、川久保5区1面を被覆する洪水土層は被覆範囲と枚数の対比から川久保1区8面被覆洪水土層、川久保2区1面の川久保SDO1は出土遺物から川久保1区1面に対比し得る水田遺構の一部と思われる。

なお、川久保1区のⅡ層群の土層として川久保1区中央ベルトの南西部の土層（第10図 PL3）を例示したが、NR1dの窪地内のみ遺存する川久保1区5～7面水田跡の土層は中央ベルトにかからないため、一部にNR1d土層の土層を別に示した。また、この柱状図で示した土層以外に水田数筆にしか分布しない洪水土層、あるいは水田耕作土層もあり、川久保1区内に存在する洪水土層すべてを示したものではない。

Ⅱ層中の洪水土層は時期によって枚数や層厚が異なる。川久保1区8～10面まで比較的厚い洪水土層が認められるが、川久保1区5～7面まではNR1d内にわずかな洪水土層が認められるのみで、1～4面

前後に再び厚い洪水土層が認められる。時期毎に洪水土層の堆積状況が異なり、洪水の頻発する時期と少ない時期があると捉えられる。Ⅱ層中では川久保1区で1～10面水田跡と川久保2区SD01と川久保5区1面を検出し、斑尾川沿いの氾濫原内はトレンチで近世水田耕作土層を検出した。他の調査区では連続耕作によって洪水土層が残存せず遺構は調査し得なかった。

Ⅲ層：黒褐色・暗褐色土層 Hue10YR3/2～3/4

Ⅱ層とⅣ層の間に位置する黒褐色・暗褐色土層をⅢ層と捉えた。Ⅲ層はⅣ層上部に形成された腐植土層というだけではなく、小規模洪水土堆積を繰り返すなかで腐植土層が形成され、腐植土層自体の雨水等による移動や植物の根や川久保SLO2・03等の畑の耕作による攪はんも加わった土層と思われる。このⅢ層と同じ腐植土層のⅤ層は、Ⅳ層を挟む場所ではⅢ層と別に捉えられるが、川久保2・4区微高地や川久保3区、宮沖1区北部などⅣ層が分布しない場所ではⅢ・Ⅴ層が連続して分層できない。

その一方で川久保1・2区の窪地地形NR1a～1cではⅢ層内の洪水土層が数層認められ、Ⅲ1～7層に細分し得る。この細分土層はⅢ1・2層が川久保1区北部や2区西部・NR1d周辺やNR1c上部、Ⅲ3層はNR1c、Ⅲ4層はNR1b、Ⅲ5～7層はNR1a内の狭い範囲に分布する土層で、遺跡全体には分布しない。細分土層の堆積順序は、NR1cでⅢ3→Ⅲ2→Ⅲ1層が重なり、NR1cがNR1bのⅢ4層を切っているのでⅢ4→Ⅲ3→Ⅲ2→Ⅲ1層の層順で、NR1aではⅢ7→Ⅲ6→Ⅲ5層の層順と認められる。斑尾川系の土石流堆積層も堆積するNR1aと、千曲川の堆積土層を基調とするNR1b・1cでは窪地地形自体が重複せず前後関係が捉えられない土層もある。なお、NR1b・1cでは調査時に別の土層番号を付し、遺物注記や記録類はその番号を用いている。本文でも細分土層内の個別土層はこの土層番号で呼称している。

Ⅲ層は古墳時代前期Ⅳ層の堆積以後からⅡ層の中世前期の水田化される以前に形成された土層で、多くの遺構・遺物が含まれる。出土遺物と検出遺構からは、Ⅲ1層が平安時代中期～中世、Ⅲ2層が平安時代前期、Ⅲ3層が平安時代前期を中心として奈良時代を含む可能性がある。Ⅲ4層はⅣ層の古墳時代前期以後～古墳時代後期を中心に奈良時代を含む可能性があり、Ⅲ5層は古墳時代後期～中世、Ⅲ6・7層はⅣ層以後の古墳時代前期と捉えられる。NR1bのⅢ1～4層はNR1aのⅢ5層に収斂し、NR1aのⅢ6層はNR1b内には対応土層がなく、Ⅲ7層はNR1bのⅢ4層の一部を含むという対応関係と思われる。Ⅲ4層の古墳時代前期～古墳時代後期（奈良時代）、Ⅲ1層の平安時代後期～中世前期には洪水土層が認められない。

Ⅲ1層 黒褐色土層 Hue10YR3/2～2/3

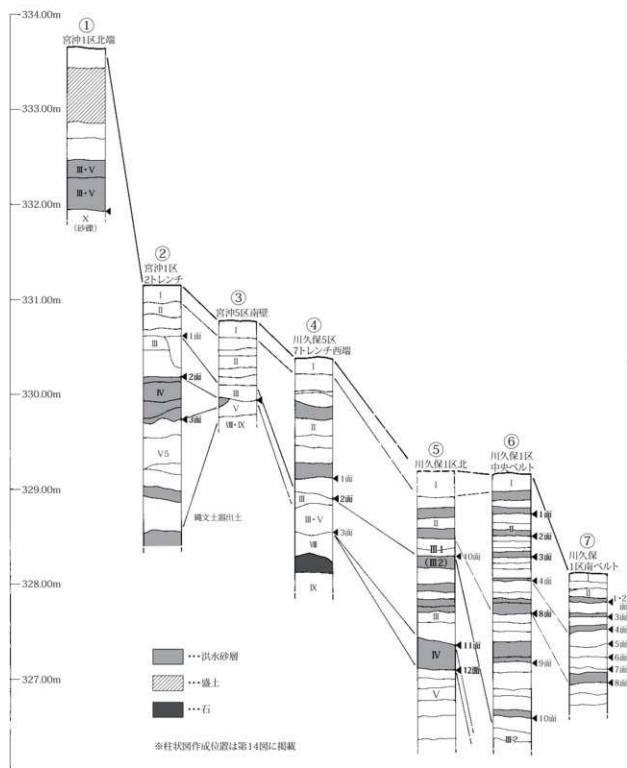
黒褐色を基調とする腐植土層と捉えられ、川久保2区NR1c土層や川久保1区などNR1d周辺のⅢ2層土層にしか認められず、他地区はⅢ層内に収斂する。川久保2区NR1c上部では暗褐色土と黒褐色土層が交互に認められるが、黒味の弱い暗褐色土層には洪水土堆積が含まれる可能性がある。川久保1区北部の微高地域では平安時代後期～中世前期までの遺物が含まれる。同時期の土層ながら川久保1区のNR1dやNR06内の上層水田耕作土層とはⅡ層に含んだ。

Ⅲ2層 にぶい黄褐色砂層 Hue10YR4/3

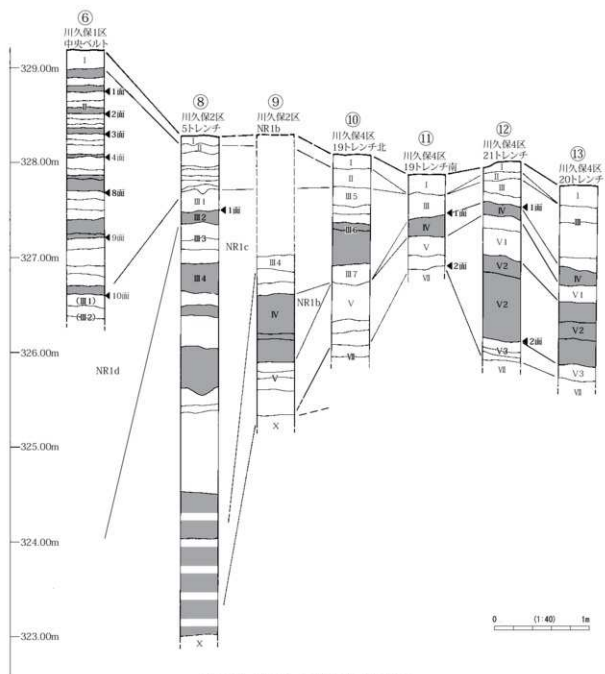
Ⅲ2層は川久保1・2区西部のNR1cの最上層1a層と川久保1区10面北部の中世前期遺構検出面にあたり、NR1d周囲に分布する。Ⅲ2層上面で平安時代後期川久保SB10・11、川久保1区では中世の遺構や川久保SB44・46を検出した。

Ⅲ3層 暗褐色砂質シルト層 Hue10YR3/3～3/4 とにぶい黄褐色シルト Hue10YR4/3の互層

NR1cの1b～1h層にあたり、洪水土層と腐植土層が互層に堆積する。土層の時期は奈良時



第10図 川久保・宮沖遺跡土層柱状図1



第11図 川久保・宮沖遺跡土層柱状図2

代に遡る可能性があるが、平安時代前期を中心としてNR1d形成までの間と捉えられる。

Ⅲ 4 層 黒褐色土層 Hue10YR2/2～Hue10YR3/2

NR1b 上部では灰黄褐色細砂 Hue10YR5/2 を混じるが、黒褐色を基調とする腐植土層である。NR1b のⅢ 4 層下部のやや腐植化が弱い4c層(灰黄褐色シルト Hue10YR4/2) 上面で古墳時代後期川久保SB16・17を検出した。

Ⅲ 5 層 黒褐色土層 Hue10YR3/2

川久保NR1a 上部に位置し、1枚の土層と認められるが、Ⅲ 1～3層とⅢ 4層の一部と対応すると思われる。Ⅲ 5層では川久保SQ01～06を検出し、中世の川久保SLO2・03耕作土層に当たる。また、川久保2区周辺の古墳時代後期～奈良時代住居跡埋土の基調となる。

Ⅲ 6 層 灰黄褐色～褐灰色土層 Hue10YR5/2～5/1

10～20cmの角礫を多く含む斑尾川の土石流堆積土層で、上層はシルト質となる。NR1aの下流側のみ分布し、水田跡の川久保SLO4を覆う。SLO4出土土器から古墳時代前期と捉えた。

Ⅲ 7 層 黒褐色土層 Hue10YR3/2

NR1a内のⅣ層上部に位置する腐植土層で、NR1aの最低部の川久保SLO4水田耕作土層の黄灰色土 Hue2.5Y5/1 を含めた。

Ⅳ層：にぶい黄褐色～明黄褐色砂層 Hue10YR4/3～6/6

古墳時代前期の洪水土層で、NR1b内では褐色シルト Hue10YR4/4 を挟むが、他地点は1枚の土層と認められ、斑尾川上流側の宮沖1・5区ではシルト質である。広範囲に分布する洪水土層だが、NR1a・1b、NR02・04など窪地地形内を中心に分布し、川久保2区でもやや高い地点には認められない。Ⅳ層上面で宮沖SB20・22・31とSK1801、SD10を検出し、川久保SQ26・27とSLO6、川久保1区12面水田跡、宮沖1区3面水田跡はⅣ層に覆われるⅤ1層にある。

Ⅴ層：黒褐色土層 Hue10YR3/2

Ⅴ層はⅦ層上部に位置する腐植土層で、川久保4区北東低地、NR1a、宮沖1区3面下層の土層群に部分的な洪水土層を挟む。川久保1・2・4区の微高地ではⅦ層上部に1枚の黒褐色土層としか認められず、宮沖1・5区東部の段丘Ⅱの上部ではⅢ・Ⅴ層が重なって分層できない。一方、川久保2区のNR1a・NR1b内や川久保4区北東低地などの窪地地形内では部分的な洪水土層を挟んでⅤ層が細分される。川久保4区北東低地ではⅥ・Ⅶ層上部の土層が洪水土層Ⅴ2層を挟んでⅤ1～3層に細分され、Ⅴ3層→Ⅴ2層→Ⅴ1層の層順と捉えられた。Ⅴ3層に川久保4区の弥生時代中期後半の土器集中が含まれ、その上のⅤ2層は弥生時代中期後半～古墳時代前期の間に形成されたと捉えられる。このⅤ2層の形成時期に弥生時代後期初頭頃と思われるNR1bの形成が重なる。弥生時代中期後半～古墳時代前期Ⅳ層以前の大きな洪水土層は他に認められないので、NR1bとⅤ2層は関連して形成され、NR1bのⅣ層(6層)以下の土層がⅤ1層に対応すると思われる。また、NR1a内では川久保SLO6の耕作土層のⅤ1層とⅦ層の間に、Ⅴ2層は特定できなかったが、小規模な洪水土層が数枚認められた。川久保4区の弥生時代中期土器集中に近接した場所ながら土器が出土せず、Ⅴ3層より下層にあたる弥生時代中期後半以前の土層としてⅤ4層と捉えた。また、宮沖1区3面の古墳時代前期水田耕作土層Ⅴ1層より下層に細礫土層やシルト層を挟んで縄文時代後期土器を含む黒褐色土層が認められた。細礫が混じる砂層やシルト層がⅤ2層かⅦ層のいずれに該当するか断定はできなかったが、川久保2区で縄文時代後期の土器がⅦ層以上で出土していることから、Ⅴ4層に相当すると捉えた。このⅤ層は段丘形成以後の段丘上が安定化した時期の土層と捉えた

が、段丘形成の時期が異なるためV層形成開始の時期が異なる可能性がある。川久保1・2・4区ではV層に縄文時代後・晩期土器を含むが、宮沖1・5区ではそれ以前の縄文時代前期～中期の土器も含む。

V 1層 黒褐色シルト層 Hue10YR3/2～2/2

黒褐色を基調とする腐植土層で川久保4区北東低地とNR1b、NR1aや川久保1区、宮沖1区のIV層直下に位置する。NR1a内ではSLO6耕作土層にあたり、NR1b内で川久保SQ26・27が検出された。NR1b内はV1(NR1b6層)より下層にNR1bの7層(にぶい黄褐色砂層 Hue10YR5/4)、8a・b層(黒褐色シルト層 Hue10YR2/2)、8c層(褐色砂層 Hue10YR4/4)、8d層(暗褐色シルト層 Hue10YR3/3)等の土層がある。NR1bの形成以後からIV層堆積までの弥生時代後期初頭～古墳時代前期に形成されたと捉えられる。

V 2層 にぶい黄褐色シルト～細砂層 Hue10YR4/3～5/3

川久保4区北東低地を中心に分布する洪水土層で、層厚は約80cm前後を測る。上部にIV・V1層があり、下部に弥生時代中期後半の土器集中を含むV3層が位置する。NR1b・NR02と類似時期の弥生時代中期後半以後～古墳時代前期に形成された可能性がある。V2層中でSQ09を検出したが、洪水時に巻き込まれた土器を捉えた可能性がある。

V 3層 暗褐色土層 Hue10YR3/4

川久保4区北東低地のV2層下部とVII層の間に位置し、V4層やV5層に対応する。遺構は川久保4区土器集中川久保SQ10～22とNR03内の土器集中を検出し、川久保4区V3層のプラント・オパール分析から水田跡の可能性が知られた。

V 4層 黒褐色土粘土層 Hue10YR3/1 とにぶい黄褐色細砂層 10YR6/4の互層

川久保NR1a内の川久保SLO6耕作土層より下層に位置する土層群を便宜的にまとめた。粒度の細かい粘土を基調とするやや泥炭質の黒褐色土層と薄い洪水土層からなり、湿地に近い環境であったと思われる。NR1a内にはV2層がないためV3層との前後関係は不明だが、土器が出土しないことからV3層より古い時期の土層群と思われる。

V 5層 黒褐色砂質土層 Hue10YR3/1 と暗灰黄色細礫層 2.5Y5/2・黄灰色シルト層 2.5Y4/1の互層

宮沖1区3面水田跡の耕作土層より下位にある土層群をまとめたが、VII層との前後関係は捉えられなかった。黒褐色砂質土層に斑尾川の堆積土層である細礫層や、千曲川の洪水土層が交互に堆積する。下部の黒褐色シルト層から縄文時代後期土器が出土した。

VI層：にぶい黄褐色～暗褐色シルト層 Hue10YR4/3～3/4

川久保4区微高地先端付近のVII層上面に分布する土石流堆積層で、直径1cmから1mほどの礫が混じる。NR1a内には対応する土層は認められなかった。VI層と類似した土層に川久保2区や宮沖1・5区や川久保5区に分布する土石流堆積層IX層があるが、関連がないと思われる。遺構・遺物の検出はない。

VII層：褐色～にぶい黄褐色シルト・細砂層 Hue10YR4/4～5/4

川久保1・2・4区の段丘IのV・VI層下に位置する褐色～にぶい黄褐色のシルト・細砂からなる洪水土層をVII層と捉えた。広範囲に分布し、川久保2・4区ではVII層上面でV層から掘り込まれる遺構を検出した。VII層からの遺物出土はなく、縄文時代後期・晩期の土器はVII層より上層、あるいは上面遺構から出土した。川久保1・2・4区の最終遺構検出と捉えたが、宮沖遺跡では対応する土層は捉えられなかった。また、川久保2区のNR1bの脇にある土石流堆積層IX層上部にVII層と思われる黄褐色シルトが載り、川久保4区ではVI層の下にVII層が位置する。

Ⅷ層：細かい砂礫層

宮沖1・5区や川久保5区など斑尾川沿いの段丘Ⅱ縁辺のⅤ層下部に分布する拳大以下の小礫を含む砂礫層である。旧斑尾川の河床時に形成されたとみられ、Ⅸ層の上部に位置する。宮沖1区3面下層トレンチでⅤ4層中に分布域の狭い細かい砂礫層が捉えられたが、対応関係は捉えられなかった。

Ⅹ層：黒褐色土層 Hue10YR3/2

直径1mを越える巨礫を含む土流堆積層で、宮沖1・5区～川久保5区の段丘縁辺と川久保1・2区境周辺の千曲川脇に分布する。両地点は離れているが、巨礫を含む類似点から関連土層と捉えた。遺構・遺物は検出されていない。川久保2区では上部にⅦ層と思われる土層が覆う。

Ⅹ層：砂礫層

千曲川・斑尾川の段丘礫層で、礫を中心とする。段丘Ⅰで地表面下3～5m、段丘Ⅱの斑尾川沿いの調査地点では地表面下1～2mの深さに段丘礫層がある。

上記のように遺跡内には数多くの堆積土層があり、分布域が狭い洪水土層や、洪水土層の被覆状況や段丘離水時期の違いで連続した土層ながら形成された時間差が想定できる黒褐色土層もあり、遺跡内の土層は複雑な様相を示す。さらに、段丘Ⅰ・Ⅱの形成時期差と関連して離水前後に形成されたとと思われる宮沖遺跡のⅤ層と川久保遺跡のⅤ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅹ層の関係など、十分な整理ができなかったところもある。

細部を詰め切れなかったところもあるが、概略では下層から段丘礫層→Ⅶ～Ⅹ層の比較的広い範囲に及ぶシルト・細砂を中心とする千曲川・斑尾川の洪水土層群・土流堆積層→Ⅲ・Ⅴ層の腐植土層群と、そこに挟み込まれる分布域が狭いⅣ層などの洪水土層→Ⅰ・Ⅱ層の中近世の耕作土層群が堆積し、段丘の離水過程を反映したと捉えられる。それは、河床面の離水以後、細粒堆積物が堆積して地表面が上昇し、小規模洪水土層の堆積と植物繁茂による腐植土層の形成が始まり、その後は耕作地に利用された過程と捉えられる。このなかで、遺構・遺物はⅤ層から認められる。

Ⅴ層以後の洪水土層は、地表面上昇に比例して単純に減少しておらず、時期毎に洪水土層の多寡が認められる。洪水土層が顕著に認められるのは古墳時代前期、平安時代前期、中世前期、近世後期で、NR1bが形成された弥生時代後期初頭もその可能性がある。古墳時代前期の洪水土層はⅣ層とⅢ6層の土流堆積土層を代表とするが、他にも川久保SD31・34が砂層で埋没して造り替えられているように小規模洪水が複数あったと思われる。平安時代前期では千曲川浸食地形NR1c・1dがある。その窪地埋積土層中にも数多くの洪水土層が認められ、NR1cはNR1bに比べて短期間に洪水土層で埋没している。中世前期では13世紀後半～15世紀中頃と思われる川久保1区8～10面水田跡を被覆する洪水土層があり、近世では18～19世紀と思われる川久保1区1～4面水田跡を被覆した洪水土層がある。

上記以外の弥生時代中期後半頃、古墳時代後期～奈良時代、平安時代後期～中世初頭は厚い洪水土層がなく、千曲川から100mほどの場所まで居住遺構が分布する。また、15世紀後半～17世紀の川久保1区5～7面水田跡は被覆洪水土層も薄く、NR1d内のみに残存し、上記の時期は洪水が少ないと思われる。

2 遺跡の地形

(1) 遺跡の地形区分

ア 河岸段丘 (第12図)

川久保・宮沖遺跡は斑尾川・千曲川合流地点左岸の河岸段丘と氾濫原に立地し、大部分は河岸段丘上に

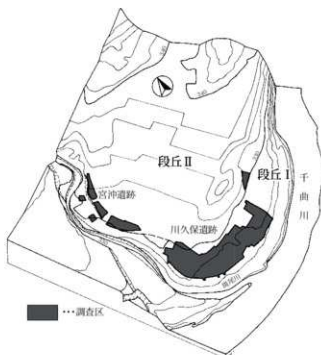
ある。河岸段丘は千曲川・斑尾川の氾濫原に沿って形成されており、川久保5区南端の現川久保集落から千曲川下流側へ向かって比高差が大きくなる段丘崖があり、段丘崖下から斑尾川下流域に広がる下位段丘と、段丘崖上部から斑尾川上流側に広がる上位段丘にわけられる。本報告では前者を段丘Ⅰ、後者を段丘Ⅱと仮称する。川久保5区より斑尾川上流側は段丘崖が視認しにくい、上流側ほど段丘の比高差が小さく、段丘Ⅰから段丘Ⅱ端部までの表面を千曲川の細粒堆積物が覆うことによる。この段丘区分を『中野地域の地質』（赤羽ほか1992）（第8図）に照らすと、段丘Ⅰが現氾濫原内を含む完新世の谷底平野堆積物、段丘Ⅱが後期更新世～完新世の段丘堆積物分布域に当たる。

河岸段丘内の隆起・離水の時期は出土土器から、段丘Ⅱの調査区域が縄文時代前期頃、段丘Ⅰは縄文時代後・晩期頃と推測される。なお、現氾濫原内では平安時代以前の遺構・遺物が確認されなかったが、これは氾濫原内の斑尾川の移動によって削平されたため、段丘形成によるものではないと思われる。

この河岸段丘は長野盆地西縁断層の活動で形成されたと思われる。段丘Ⅰ内の旧斑尾川河道跡と思われるNR1aとNRO6は高低差があり、浸食地形NR1b～1d・NRO2～05と同様の地形は平安時代以後には認められないなど、段丘Ⅰ形成間の複数の隆起活動の可能性も考えられる。これは長野盆地西縁断層の活動周期の問題に関わるが、NR1aとNRO6の下層礫層の確認ができず詳細は捉えられなかった。

段丘Ⅰ 段丘Ⅰは川久保5区南方の現川久保集落の西・南縁の道路付近から認められる段丘崖下から、千曲川と合流する斑尾川の河口周辺に形成された三日月形の河岸段丘面と捉えた。川久保1・2・4区が含まれ、川久保5区より上流側は不明瞭ながら、段丘Ⅱの段丘縁に接するようにわずかに残存する。段丘上面は斑尾川や千曲川へ向かって緩やかに傾斜するが、全体的に平坦で千曲川河床面との比高差は最大8m弱ほどである。段丘Ⅰの千曲川に面した縁に2段の段差が認められるが、下段は現千曲川の浸食崖で、上段は川久保4区南東隅で検出されたNRO5の位置と一致する。NRO5は弥生時代中期土器集中を覆う洪水層V2層を切っており、段丘形成以後の浸食地形と捉えられる。段丘Ⅰ内の土層は、川久保2区で地表面下約3mの標高325.10m前後、2区西端のNR1c底のトレンチで地表面下約5mの323.40m前後に段丘砂礫層が確認され、その上部に千曲川系細粒堆積物や一部に斑尾川系の土石堆積土層が載る。また、この段丘Ⅰ上面では千曲川・斑尾川の活動によると思われる千曲川の浸食地形NR1b～1d、NRO2～05、斑尾川旧河道跡かその一部と思われるNR1aとNRO6が検出された。

この段丘Ⅰで、土器を伴う明確な遺構は弥生時代中期後半から認められる。出土した最も古い土器は川久保2区出土の縄文時代前期後葉と思われる土器1点があり、川久保1・2区で出土した縄文時代後期・晩期土器9点が続く。川久保2区NR1a内Ⅶ層上面検出の川久保SK51から出土した炭化材の¹⁴C年代は2710±30y.B.P.周囲の離水後の高植土層と思われるV層最下部出土炭化物年代は2,485



第12図 南西からみた河岸段丘模式図

±30y.B.P.、2,560±30y.B.P.との結果を得た。これらの3つの年代はBC. 5・6世紀以前で、BC. 8世紀の縄文時代晩期に遡る可能性も示す（添付DVD参照）。出土した縄文時代前期土器は1点のみで、宮沖1区のように後続する縄文土器は出土しておらず混入と思われる、川久保1・2区で複数出土した縄文時代後・晩期土器や¹⁴C測定年代から、段丘Ⅰの離水時期は縄文時代後・晩期頃と推測される。

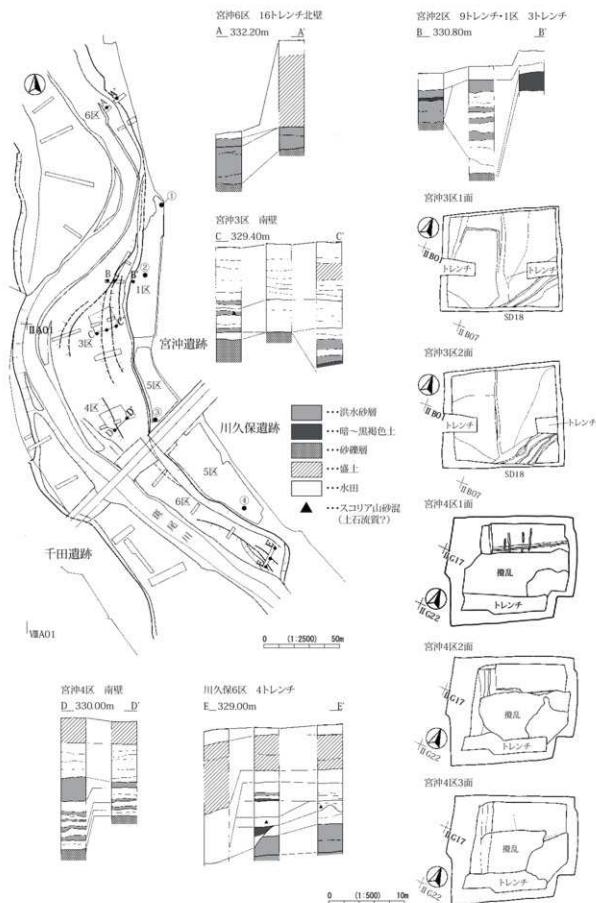
段丘Ⅱ 段丘Ⅱは、現川久保集落の西・南辺をめぐる段丘Ⅰを画する段丘崖上部から、斑尾川上流側の平坦面と捉えた。調査域北方のやや離れた地点に段丘頂部の平坦面があり、遺跡のある南西側は湾曲ぎみに斑尾川へ傾斜する緩斜面となる。調査区はその下端にあたる斑尾川沿いに川久保5区と宮沖1・5区が位置し、千曲川に面した段丘の高所には川久保3区がある。段丘Ⅱ東部の現川久保集落周辺が尾根状に小高く、東側の千曲川に面した側は比高差の大きな段丘崖となり、川久保4区東部の段丘Ⅰと段丘Ⅱでは比高差は約7mを測る。斑尾川側の傾斜は緩やかながら比高差もかなりあり、湾曲するようにみえる緩斜面は斑尾川が移動しながら浸食した可能性がある。段丘Ⅱでは斑尾川上流側ほど上層の千曲川堆積土層が薄く、宮沖1・5区の浅い場所では旧斑尾川の砂礫層が露出する。この段丘Ⅱでは、川久保3区で縄文時代と思われる陥穴が検出され、宮沖1・5区では縄文時代前期前葉～後期までの土器が出土している。このことから、縄文時代前期には段丘Ⅱの先端近くまで離水し、斑尾川沿いに直径1mを超える巨礫を含む土石流堆積層やⅠ層が堆積した後に、現氾濫原と段丘Ⅰが形成されたと思われる。

イ 斑尾川氾濫原（第13図）

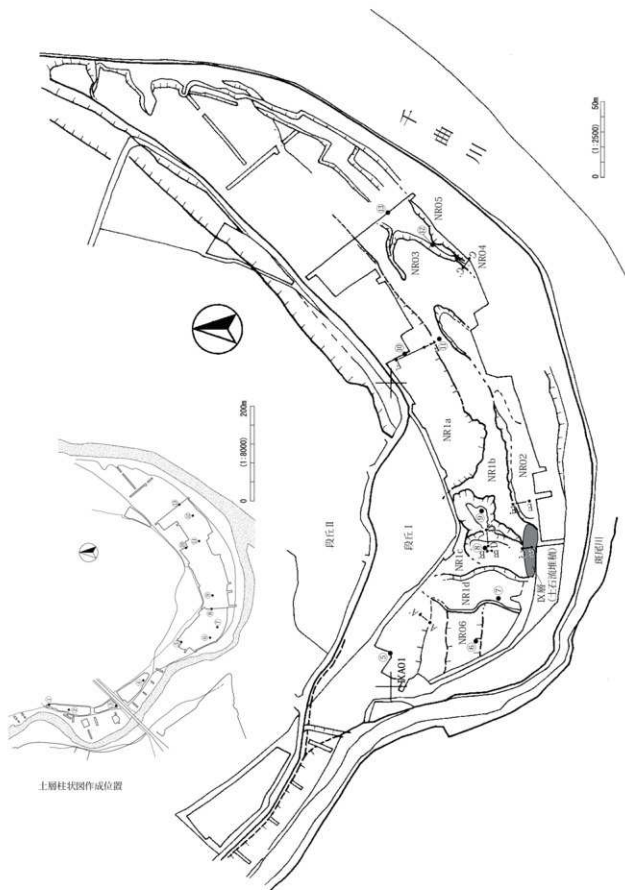
斑尾川沿いには、上流側の宮沖1・5区で1m弱、下流側の川久保1区付近で段丘崖直下の斑尾川現河床面との比高差約5mの段丘崖で画された最大幅約80mの氾濫原が形成されている。氾濫原内を流れる現在の斑尾川は、宮沖2・3・4区周辺で大きくS字を描いて蛇行して広い蛇行洲を形成し、下流側の川久保1区沿いは狭い氾濫原内を左岸側に寄りながら緩やかにカーブして千曲川に合流する。この氾濫原内は洪水時に本流が流れ込む危険があるためトレンチ調査のみ実施し、宮沖6区に2本、同2区に2本、同3・4区で水田面の様相を探るため広めのトレンチを含めて3本、川久保6区で4本のトレンチを設定した。

トレンチ調査の結果、斑尾川上流部の宮沖2区北部、宮沖6区トレンチでは、現川床面に続くまじりのない砂やシルト層のみ捉えられた。やや下流側の蛇行洲にかかる宮沖2区の一部から宮沖3・4区のトレンチで砂礫層上面にシルトや細砂などからなる灰色や褐色を呈する細粒堆積物と、それらを母材としたⅡ層の水田耕作土層が重なって検出された。地表面から砂礫層までの深さは浅いところで約80cm、最も深い宮沖4区で地表面の盛り土を除いて約1.7mである。礫層上の細粒堆積物層は、垂直方向では上部ほど細粒堆積物が増え、斑尾川近くほど細砂やシルトなどの洪水土層の枚数が多い。また、下流側は千曲川堆積土が加わって、土層が厚くなる傾向がある。礫層上部に堆積する細粒堆積物にはバミスや山砂等の粗粒を多く含む斑尾川の堆積土層と、粒度が細かい細砂やシルトを中心とした千曲川堆積土層があるが、場所毎に残存状態が異なって統一的に土層は捉えられなかった。また、その下流側の川久保6区は宮沖4区同様に還元した水田耕作土層と洪水砂層が交互に堆積するが、南端4トレンチで段丘上の5区と同じ黒褐色土層が最下層で確認され、その上の褐色粘質土層が緩やかに傾斜して底面がやや平坦となることから、窪地地形と捉えられた。位置的に川久保2・4区で検出されたNR1aの北西端部にあたる可能性がある。

氾濫原内の遺構は宮沖2区北部と宮沖6区では認められず、蛇行洲にかかる宮沖2区南部から宮沖3・4区、川久保6区でⅡ層の水田跡が確認された。水田耕作土層は砂礫層の20cm前後上部から認められ、砂礫堆積からあまり時間を経ずに水田化されたとみられる。その時期は、宮沖3区2面水田跡に伴う



第13図 斑尾川氾濫原内の土層と遺構



第14図 川久保遺跡浸食地形・带状窪地地形分布

SD18出土の陶磁器や、宮沖4区水田跡の耕作痕から近世と推測される。中世水田跡は捉えられなかったが、宮沖5区には氾濫原側へ延びる用水SD09があり、氾濫原に浸食された水田跡があった可能性がある。

(2) 段丘I上面の千曲川・斑尾川の浸食地形と河道跡 (第14図)

段丘I上面では千曲川・斑尾川の段丘形成以後の洪水による浸食や、旧河道跡などの窪地地形が検出された。遺構ではないが、局所的な堆積土層が認められ、遺物も出土したことから「NR」と呼称して調査した。河川による窪地地形には浸食地形NR1b・1c・1d、NR02・03、洪水時に千曲川本流が段丘縁部を浸食したと思われるNR04・05、斑尾川と平行する旧河道跡と思われるNR1aとNR06がある。NR1aは調査区内の高所であってⅦ層に覆われながらも窪地地形と視認できる最も古い窪地地形で、NR03が弥生時代中期以前、NR1bとNR02が弥生時代後期初頭、NR1cとNR1dが平安時代、NR04・05が弥生時代以後と捉えられた。NR06は下層の調査を実施し得なかったが、NR1d以前のもので、NR1aより斑尾川寄りの低い場所にあるので後出すると思われる。

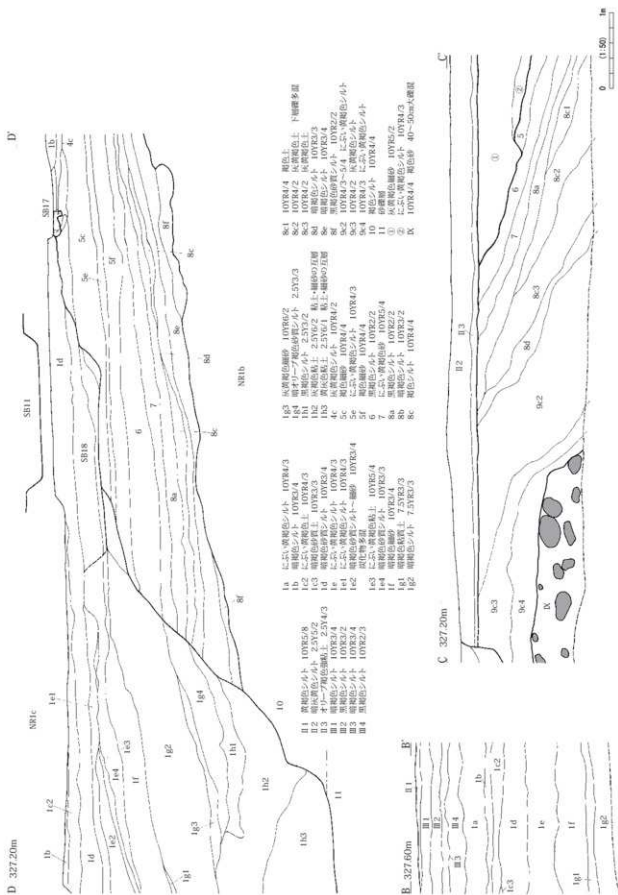
ア 千曲川系の浸食地形

NR1b・NR1c・NR1d (第15～18図 PL3)

斑尾川・千曲川合流地点左岸の川久保1区南東部～2区西部にかけて、重複する細長い谷状の窪地地形NR1b・1c・1dが検出された。調査1面でも窪地と認められるが、上層は千曲川の堆積土層に覆われて、NR1b・1cの全形は2面のⅦ層上面で捉えた。いずれも幅約18～25mで、千曲川側から入って、段丘側へ延びて先端は湾曲しながら急速に立ち上がる。深さはNR1b・1cの確認し得たところで、2面検出面から約1.6～4.0mを測る。平成16年度の台風23号による出水時に千曲川本流が流れ込んでできた浸食地形と類似し(第3図)、NR1b～1dも洪水による浸食地形と思われる。形成以後は窪地として残り、徐々に埋没している。ただし、平成16年度に形成された浸食地形は千曲川と平行するが、NR1b・1c・1dは段丘側へ湾曲する違いがある。通常の洪水とは異なる条件が加わったと思われるが、その様相は明らかにし得なかった。なお、調査当初はNR1aとNR1bは関連した地形と捉え、NR1の枝番号と呼称し、続いてNR1bに隣接するNR1c・NR1dも同様の枝番号と呼称した。しかし、NR1aは斑尾川の旧河道跡、NR1b～1dは千曲川の浸食地形で別の地形と判明した。これらの千曲川浸食地形では川久保1区10面に窪地として残ったNR1dが最後の所産で、重複する関係から形成順はNR1b→NR1c→NR1dと捉えられる。形成時期はNR1bが弥生時代中期後半～後期前半、NR1cとNR1dが平安時代前期9世紀前後と捉えられ、それぞれ異なる時期に近接場所に形成されている。NR1d以後の浸食地形は認められない。

NR1bは、浸食地形群東端に位置し、西側をNR1cに切られる。平面形は千曲川側から北東方向に延びた細長い楕形で、くびれた部分で一旦浅くなるが、先端が低くなって急速に立ち上がる。埋土上層にNR1cから続く暗褐色・黄褐色砂質土の1層、その下に3・5・7・8c層の砂層と、4・6・8a・8b層の黒褐色土～灰黄褐色土層などの腐植土層や細粒堆積物層が交互に堆積する。埋土4層までが基本土層Ⅲ3・4層、5層がⅣ層、6～9層がⅤ1層に該当し、8・9層は両岸際にあつて別番号を付したが、同一層である。

遺構は、NR1cから続く1e4層からNR1bの4c層上面で平安時代前期の川久保SB18が検出され、平安時代後期の川久保SB10・11はNR1bが捉えられる以前に検出したが、検出標高からNR1bの1a層(Ⅲ2層)に当たる。古墳時代後期川久保SB16・17と川久保SQ24は4c層上面、古墳時代後期の川久保SQ25が5e層、古墳時代前期の川久保SQ26・27が6層上部検出である。川久保SQ25と同時期の遺構



第15図 NR1b・NR1c土層断面図

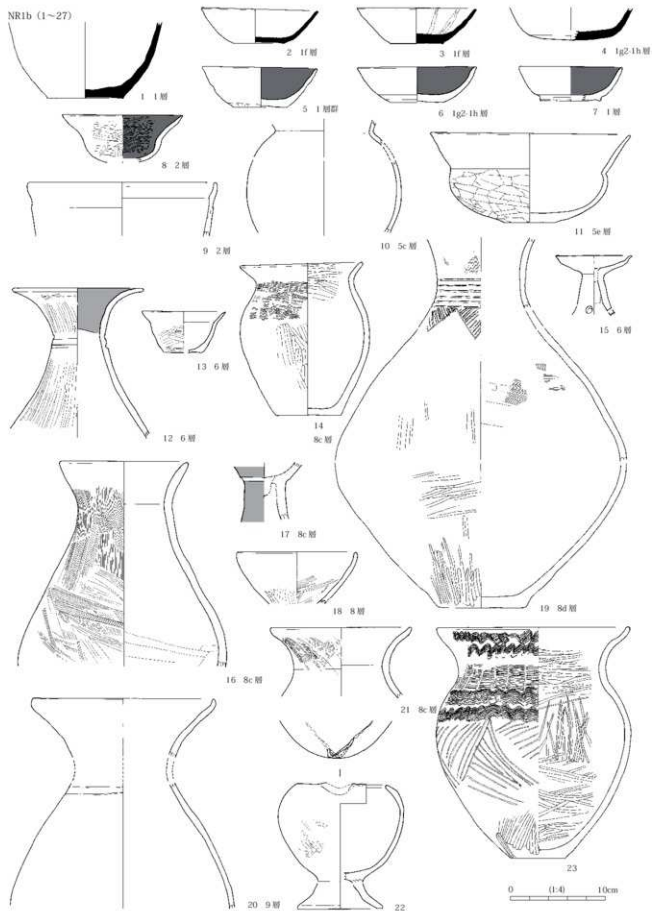
は4c層で検出されており、川久保SQ25は根の攪乱等で紛れ込んだ土器を捉えた可能性がある。

遺物（第16・17図 PL41・46）は埋土1層から須恵器壺（1）、同杯A（2・3）、黒色土器杯A（5・6）、同杯B（7）等の平安時代土器や奈良時代須恵器杯A（4）や混入と思われる縄文時代前期と思われる土器（26）、2層から古墳時代後期黒色土器杯A（8）、平安時代土師器甕（9）、5層から古墳時代前期土師器甕（10）、同鉢（11）が出土した。6層からは弥生時代中期栗林式の壺（12）、古墳時代前期器台（15）やミニチュア土器（13）、川久保SQ26・27の古墳時代前期土器が多く出土した。8層から弥生土器甕（14）や高杯脚（17）や鉢（18）、弥生時代後期初頭の壺（16・19）、9層から同壺（20）が出土した。NR1b 1層に平安時代、2～4層に古墳時代後期、5・6層に古墳時代前期、8層に弥生時代中期～後期前半の土器が含まれる。NR1bは長期間開口し、洪水土で徐々に埋没している。

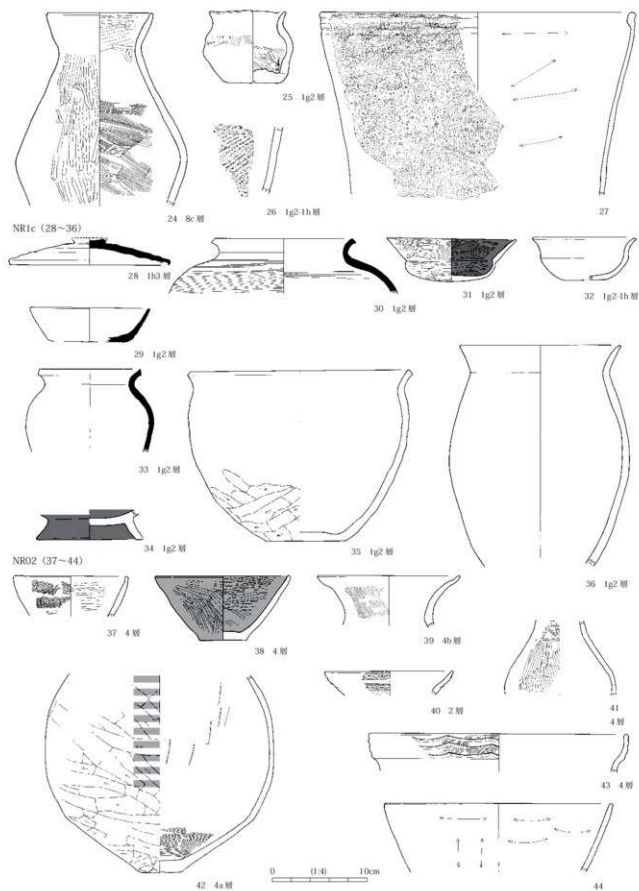
NR1bの形成時期は底面に近い8・9層の土器から想定される。8層から弥生時代中期後半の栗林式壺51片1.190g、同甕7片247gの合計58片1.437g、同後期初頭の吉田式壺92片2,822g、甕12片739g、高杯1片189gの合計105片3,750g、栗林式末頃の壺42片2,439gが出土した。弥生時代後期初頭の吉田式壺は破片数が多いものの、同一個体と思われる破片91片2,794gがあり、個体数は多くない。他に弥生土器としかわからない壺2片158g、甕2片30g、不明土器79gがある。口縁遺存5/8以上は吉田式土器が1個体（14）、4/8遺存が2個体（21・24）あるが、栗林式土器は口縁遺存1/8以下のものしかない。なお、図示した土器は8層出土の弥生土器の重量比99.1%にあたる。9層からは栗林式壺3片36g、吉田式壺11片445g、混入と思われる古墳時代前期土師器と思われる土器片4片65gが出土した。NR1bの出土層位不明土器には吉田式の甕（23）、同片口鉢（22）、同ミニチュア土器（25）、縄文時代晩期深鉢（27）がある。NR1bの8・9層は縄文土器も含むが、弥生時代中期後半～後期初頭の土器が一定量出土し、口縁遺存度では弥生時代後期初頭土器のほうが比較的良好に遺存する。しかも川久保4区北東低地の弥生時代中期後半の土器集中を埋めるV2層にあたる土層がNR1b内になくことから、弥生時代中期後半末～後期初頭の間に形成されたと想定される。弥生時代中期後半の土器は浸食時にV層の土器が紛れ込んだ可能性がある。また、埋土と出土土器の年代が類似するNR02と、形成時期が重なるとと思われるV2層は、NR1bと関連して形成された可能性がある。

NR1cはNR1b西端を切るように位置し、川久保2区ではトレンチで底面まで確認したが、川久保1区では調査期間の制約から下層の様相は確認できなかった。埋土はⅢ3層にまとめたが、川久保2区では黄褐色・にぶい黄褐色シルト等の洪水土と思われる1a・1c・1e1・1e3・1g3・1g4層と、腐植土の暗褐～黒褐色土層1b・1d・1e2・1e4・1f・1g1・1g2・1h1層が交互に堆積し、最下層に粘土・シルト・砂が互層に堆積した1h2・3層がある。形成時に1h層が堆積し、以後は徐々に埋没したとみられる。NR1c上層の埋土はNR1bの上部まで覆覆し、NR1b上層で検出された平安時代川久保SB18の上部に重なる川久保SB10・11との間にNR1c埋土の1a～1d層が挟まれる。川久保SB18はNR1cの1e4層を切り、NR1c形成以後と捉えられる。遺物は1g～1h1層上部で浸食時に崩落した古墳時代後期住居跡と思われるSQ28の古墳時代後期の土器751～768が出土したが、他は1層群から奈良時代須恵器蓋（28）、同杯A（29）、平安時代土師器甕（35）、須恵器壺（30・33）、古墳時代後期黒色土器A杯（31）、土師器杯（32）、同甕（36）が出土した。34は両面黒色土器で器種不明だが、平安時代の所産と思われる。本跡の形成時期は出土土器から奈良時代を上限とし、下限は上面にある川久保SB18の9世紀後半の間とみられる。埋没スピードはNR1bより早く、上面検出の川久保SB46のある10世紀には平坦化している。

NR1dはNR1c西隣の川久保1区5～10面で帯状窪地地形と視認でき、先端はやや西側に湾曲する。



第16図 NR1b出土土器



第17図 NR1b・NR1c、NR02 出土土器

調査期間の制約からNR1d下層の様相は確認し得なかったが、NR1cの1a層や川久保1区Ⅲ2層はNR1d形成時周囲に堆積した土層と思われる。NR1dは中世に窪地として残存した最終的な浸食地形で、これ以後に段丘I上面の浸食地形は認められない。形成時期は、NR1cの形成時期を上限とし、川久保SB18とSB10・11の間層1a層がNR1d形成時の可能性があることから、NR1c上面検出の川久保SB46の10世紀が下限と捉えられる。なお、平安時代の洪水として、善光寺平南部で認められている仁和四年(888)の洪水が想起されるが、NR1cは9世紀後半以前で、NR1dがそれと関連する痕跡の可能性はある。

NR02 (第18図)

NR02は川久保2区南部に位置し、調査区の南西隅から入ってN70°E方向に直線的に伸びる細長い窪地地形である。段丘I縁辺近くにあつて、南岸は中世以後の水田造成で削平され、北東先端付近しか残存しない。幅は南東部で18m以上としか捉えられず、調査区内で確認した長さは約164mである。深さは検出面から底面まで約1.6mで、底面は平坦ぎみの断面W字形で、南西側から北東方向に緩やかに高くなる。埋土は上層に基本土層Ⅲ層にあたる1・2層、中位に古墳時代前期洪水土層Ⅳ層にあたる3層、底面近くにV層に当たる細砂と腐植土の黒・暗褐色土層が交互に堆積する4a～4e層があり、その土層構成はNR1bに似る。埋土は基本土層Ⅲ～V層に対比されることから埋没までに長期開口していたと思われる。

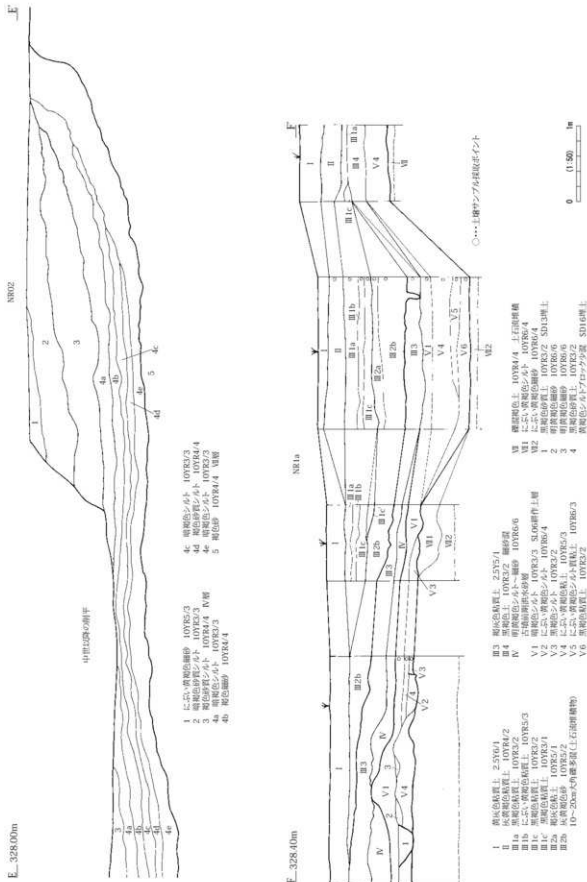
出土土器(第16・17図 PL41)は、縄文時代後・晩期深鉢2片110g、弥生時代中期土器は壺82片1.783g、同甕41片900g、同鉢2片36gの合計2.719g、弥生時代後期土器は壺14片276g、甕9片243g、高杯5片319g、天王山式甕1片16gの合計854g、弥生土器とのみ識別し得た壺31片1.892g、甕12片390g、鉢7片207g、鉢・高杯5片73gの合計2.562g、古墳時代前期壺8片1.658g、同甕3片37g、古墳時代後期土師器甕?1片10g、古墳時代後期かと思われる土師器壺7片55g、同甕1片7g、平安時代黒色土器A杯Aが1片6g、中世在地産須恵質すり鉢1片2g、同器種不明3g、近代白磁1片14gがある。時期別では縄文時代110g、弥生時代中期土器2.719g、弥生時代後期土器854g、弥生土器(中期・後期不明)が2562g、古墳時代前期土器1.695g、古墳時代後期と思われる土器10g、古墳時代の時期不明土器62g、平安時代土器6g、中世陶器5g、近代磁器14g、不明土器828gの合計8.865gである。弥生土器が4層群を中心に多く出土し、重量比で69.2%を占める。図示したのは縄文時代晩期粗製深鉢(44)、古墳時代前期土師器壺(42)、弥生土器鉢(38)、弥生時代後期甕(37)、同壺(41)、天王山式甕(40)、弥生時代中期壺(39)、同甕(43)である。NR02から縄文時代晩期土器も出土したが、埋土はNR1bに類似し、下層4層から弥生時代後期初頭土器が出土し、NR1bと類似時期の弥生時代中期後半～後期前半後に形成されたと思われる。

NR03 (第14・27・28図)

川久保4区2面東部に位置するNR1a南岸から、緩やかに弧状を描いて川久保4区北東低地に続く短い浸食地形である。底面はNR1a側から川久保4区低地側へ傾斜する。平面形から自然地形と捉えたが、下端から弥生時代中期の用水と思われる川久保SD18・19が始まっており、形成以後に流水で浸食され幅が広がった可能性がある。洪水土層V2層で埋没し、埋土中から川久保4区土器集中と同じ弥生時代中期土器が多数出土し、弥生時代中期以前に形成されたと思われる。出土遺物は第3章第3節に掲載した。

NR04 (第14・18図)

NR04は川久保4区2面の調査区南東の段丘縁辺周辺にわずかに残存する浸食地形で、東・南側はNR05に切られ、西端は中世以後の水田造成で削平される。わずかに北岸のみ確認され、底面は未確認ながら幅は3m、長さ10m以上である。埋土は上層に砂層、下層に断層でずれたようにV・Ⅶ層が確認された。



第18図 NR1a・NR02土層断面図

調査では地震に伴う断層とも考えられたが、砂層で埋没しているので洪水時の浸食・崩落による可能性がある。V層上層に堆積する洪水砂層はIV層の可能性はあるが、上部に位置する基本土層Ⅲ層が水田造成で削平されて捉えられず、断定はできない。V層の古墳時代前期以後に形成されたと捉えられる。遺物は弥生時代中期土器が壺5片367gと甕4片302gの合計669g、弥生土器とのみ識別できた土器が壺25片596gと鉢・高杯1片5gの合計601g、古墳時代前期土器甕1片10g、不明土器10gがある。

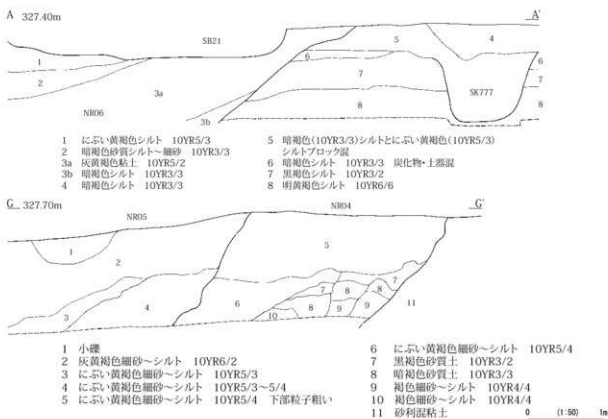
NR05 (第14・19図)

NR05は川久保4区の調査区南東境周辺で検出された。千曲川に面した段丘I縁辺に位置し、NR04、川久保4区の弥生時代中期後半の土器集中を埋めるV2層を切る。段丘Iの千曲川縁辺の地表面に認められる段差とほぼ一致して位置し、埋土は砂層を中心に底面上に礫の堆積が認められた。段丘離水以後の洪水時の本流が浸食した地形とみられる。形成時期はNR04を切るので古墳時代前期以後で、断面の埋土上面の礫を含む窪地は近世の川久保SK21～24、25A・B、26～29と類似し、下限は近世と推測される。出土遺物はない。

イ 斑尾川の窪地地形

NR1a (第14・18図)

NR1aは川久保2・4区の北壁にかかって位置する東西方向に延びる浅く幅広い帯状窪地地形で、川久保2・4区内でも高所に位置する。東端は川久保4区から調査区外へ延び、段丘IIの段丘崖下に沿って千曲川氾濫原へ続くこととみられる。西端は川久保2区から調査区外へ延び、その延長先は川久保1区12面の窪地地形や川久保6区4トレンチにかかる窪地地形に続いて斑尾川氾濫原まで続くことと推測される。埋土に斑尾川土石流堆積層が認められることから、NR1aは斑尾川の旧河道跡の可能性が考えられる。



第19図 NR04・05・06土層断面図

NR1aは、上層のⅡ層では窪地形と視認できないが、Ⅲ層でやや浅い窪地、Ⅳ～Ⅶ層上面で帯状窪地地形と認められる。調査では段丘Ⅰを覆うⅦ層上面まで掘削したが、本来の底面はⅦ層より下層にあると思われる。なお、調査当初にNR1aとNR1bは関連地形と考えてNR1のa・bの枝番号で呼称したが、NR1bには斑尾川系の堆積層が認められず、先端が立ち上がる形状の違いからも別地形と判明した。

Ⅶ層より上面にⅢ～Ⅴ層が認められるが、Ⅲ層はNR1b・1cのⅢ1～4層が1枚のⅢ5層の黒褐色土層に取返し、下部にはⅢ6・7層の土石流堆積層と川久保SLO4の水田耕作土があり、Ⅳ層は南部を中心に分布して北部や中央部には残存しない。また、Ⅴ層は川久保SLO6耕作土Ⅴ1層があるが、それ以下は狭い範囲に分布する洪水土層と粘土層からなるⅤ4層で、泥炭質の土層もあって湿地に近い環境と思われる。

遺構はⅢ5層で古墳時代後期川久保SQ02～06、中世川久保SLO2・03、Ⅲ6層下で古墳時代前期水田跡川久保SLO4、Ⅳ層下部で同水田跡川久保SLO6、Ⅶ層上部で川久保SK51や炭化物集中川久保SF10・33・34等のほか、根痕と思われる不整形な落ち込みを検出した。弥生時代中期後半ではNR1aに接続するNR03途中から用水と思われる川久保SD18・19が始まることから流水があった可能性があり、古墳時代前期では用水を伴う水田跡に利用され、Ⅲ6層土石流堆積で埋没して平坦化して古墳時代後期以後は水田域に利用されずに中世は畑地となる。

NR06（第14・19図）

NR06は川久保1区10面で、北東側の微高地と南西部の三角洲状微高地に挟まれた水田跡に利用される帯状窪地地形と認められた。調査期間の制約から下層は確認しておらず、NR1dは川久保1区10面の表面観察から認定した。北西端は調査区外へ延び、南東端はNR1dの窪地地形に重なる付近以南は不明となるが、川久保2区南西隅から1区南東部にかけての斑尾川系の土石流堆積層分布範囲周辺に延長される可能性がある。第19図では古墳時代後期のSK777の検出土層をNR06が切るようにみえるが、これはNR06内に古墳後期以後堆積したⅢ2層と思われる。NR06よりNR1dが低く、NR1dがNR06を切るとみられる。このNR06は川久保1区10面で捉えたが、Ⅶ層で捉えられるNR1aよりも低い場所にあり、位置的にも現斑尾川に近い位置にある。段丘形成以後の隆起で斑尾川がNR1a→NR06→現斑尾川へ変遷したもので、段丘Ⅰ内で2回の隆起活動があった可能性がある。ただし、下層の土層を確認しておらず断定はできない。NR06はNR1dに切られるので平安時代以前の所産で、川久保2区南西部の土石流堆積層がNR06の河道跡に沿って堆積したもので、宮沖1・5区の段丘縁辺にある土石流堆積層と対比し得る可能性があり、宮沖1区3面下層のトレンチ結果を加味すると縄文時代後期が上限と思われる。

ウ 地震痕跡

川久保2区2面の川久保ST02南辺から川久保SB06北辺にかけて細砂埋土の噴砂と思われる細い帯状の落ち込みが認められた。幅約20cmで深さは約20cmである。等高線方向のN78°E方向に約4m確認したが、両端は未確認である。川久保ST02の調査記録には亀裂痕が記されず、川久保SB06に亀裂が記載されているので古墳時代後期のものとも思われるが、観察や記録漏れの疑いもあって確証はない。これ以外に、川久保4区2面のSK40の断面に噴砂と思われる痕跡が認められた。また、中世と捉えたSK13は断面がずれるように認められた。普光寺地震によるものとも思われるが、同様の断層は他に確認されず断定できない。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 縄文時代の概要 (第20図)

概要：川久保・宮沖遺跡の立地する河岸段丘は、長野盆地西縁断層の活動に伴って、千曲川・斑尾川の氾濫原であった場所が縄文時代頃に隆起したものとみられる。遺跡内で最も高い段丘Ⅱ上面に位置する川久保3区は、表土を除去したところで陥穴と思われる土坑を検出し、縄文時代以後の堆積土層がないので縄文時代には完全に離水していたとみられる。また、斑尾川上流側の段丘Ⅱ縁辺にあたる宮沖1・5区や川久保5区の段丘先端側に土流堆積層や窪地地形が認められ、縄文時代には氾濫原に近い場所であったとみられる。なかでも宮沖1区3面水田跡下層の窪地地形内に堆積したV3層の黒色土層から縄文時代後期の土器が出土し、これが宮沖1区の段丘先端部分の離水下限時期を示す可能性がある。しかし、宮沖1・5区や川久保5区など斑尾川上流側では縄文土器が縄文時代前期前葉頃から断続的に認められ、前期前葉頃には一部段丘が離水し、縄文時代後期には現段丘の先端付近までが離水したと思われる。一方、川久保1・2・4区などの斑尾川下流側から千曲川に面した段丘Ⅰでは、宮沖1区と同層と思われる土流堆積層が部分的に認められたものの、縄文時代の土層は特定できなかった。川久保1・2・4区では縄文土器の出土量は少ないながら、川久保1区南東部周辺や川久保2区の弥生時代の浸食地形NR1b内から縄文時代後・晩期土器が出土した。他に縄文時代前期後葉と思われる土器が1点、NR1a上層の中近世耕作土層から中期後葉土器が1点出土したが、点数はわずかで、後・晩期土器のほうが大型破片で磨滅が少ないことから川久保1・2・4区は縄文時代後・晩期に離水した可能性がある。

縄文時代の遺構は川久保3区で陥穴と思われる土坑が検出されたのみで、縄文時代の出土遺物も多くはない。宮沖1区では石皿や土器が複数出土し、調査区周辺に居住遺構が存在する可能性があるが、それ以外の地点は居住遺構が存在する可能性は窺えなかった。縄文時代の遺構や、周囲に遺構が存在する可能性が窺えるのは川久保3区や宮沖1区など斑尾川の上流側や調査区内でも高い段丘Ⅱで、斑尾川下流側から千曲川沿いの段丘Ⅰでは段丘が形成されても、河川との比高差が小さく洪水に遭いやすい場所であったため居住地には利用されにくい場所だったと思われる。

2 縄文時代の遺構

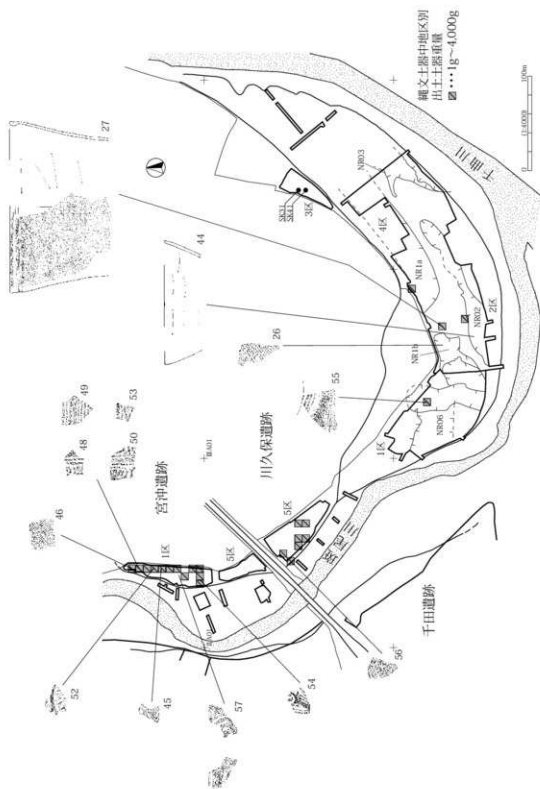
陥穴と思われる土坑2基のみある。川久保3区の段丘Ⅱ縁辺の緩斜面で検出され、出土遺物はないが、形状から縄文時代遺構と判断した。2基はほぼ同じ標高の場所に9mほど離れて位置する。

川久保5K31 3区 IV M12 (第21図 PL 4)

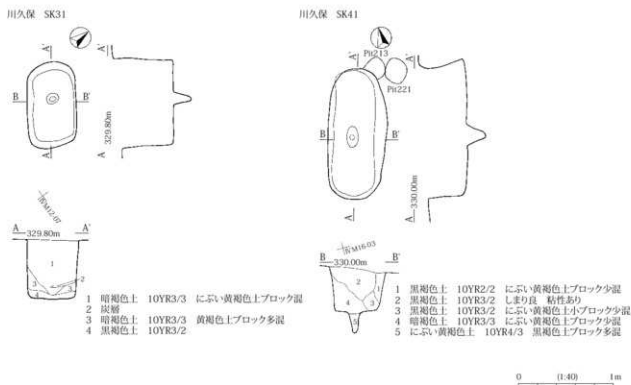
川久保3区東部の段丘縁辺の緩斜面にあり、平面形は長軸約0.9m、短軸約0.5mの長楕円形で、長軸を傾斜方向とする。壁はほぼ垂直で検出面からの深さ約60cmを測り、底面は平坦で中央に小ピット1基が検出された。埋土は底面上に黒褐色土、その上に黄褐色土ブロックが混じる土層、薄い炭層が認められた。

川久保5K41 3区 IV M11 (第21図 PL 4)

川久保3区東部の段丘縁の緩傾斜地にある。精査後に北東縁に重複するPit213の存在に気付いたが、前後関係は直接確認できなかった。平面形は長軸約1.4m、短軸約0.6mの長楕円形で、長軸を傾斜方向とする。壁はほぼ垂直で、検出面から底面までの深さ約50cmを測る。底面は平坦で中央に小ピット1基



第20図 縄文土器の出土重量分布



が検出された。ピットの深さは 20cm ほどである。埋土は底面上に黄褐色土ブロックが混じる土層、上層に黒褐色土が入る。出土遺物はない。

3 縄文時代の遺物

(1) 縄文土器 (第 22 図 PL31)

縄文土器は宮沖 1・5 区、川久保 5 区など斑尾川上流側の段丘を中心に少量出土した。縄文土器のみが含まれる包含層は宮沖 1 区 3 面水田跡のある窪地地形内の下層黒色土層 V 3 層が捉えられたが、この土層自体に含まれる土器はわずかで、他は検出面や他時代遺構に混入しての出土である。縄文土器の集中的な出土は確認できず、大型破片もあまりない。これらの縄文土器は本遺跡の中心となる遺物ではないが、調査地点が縄文時代人の活動領域内にあったこと、本遺跡の地形形成時期を示す資料とみられる。

出土した縄文土器は川久保遺跡約 16 片 1.301g、宮沖遺跡 93 片 1,844g あり、時期が識別できた土器では、千曲川沿いの川久保遺跡 1・2 区で縄文時代前期後葉からの土器が認められ、縄文時代前期 1 片、同中期 1 片、同後期 2 片、同晩期 1 片、同後・晩期 2 片がある。これらは弥生時代の浸食地形 NR1b や NRO2、中世の耕作土層から出土した。また、斑尾川沿い段丘の川久保 5 区では縄文時代前期土器 1 片、同後期土器 1 片、同後・晩期土器 2 片があり、隣接する宮沖 1・5 区では縄文時代前期土器 7 片、同中期土器 30 片、同後期土器 4 片が出土した。本遺跡では断片的に縄文時代前期前葉から晩期まで土器が出土し、最も古い縄文時代前期前葉の土器は宮沖 1 区北部、縄文時代前期後半は宮沖 1・5 区や川久保 2・5 区でわずかに出土した。縄文時代中期土器は宮沖 1 区周辺で出土し、縄文時代後期前葉まで同様の傾向が認められる。縄文時代後期中葉の土器は千曲川に面した川久保 1 区で認められ、断片的ながら晩期土器も同じ出土傾向と認められるが、宮沖遺跡では縄文時代後期中葉頃からの土器があまり認められない。なお、斑

尾川対岸の千田遺跡と比較すると、川久保・宮沖遺跡では縄文土器の出土量は圧倒的に少ないが、千田遺跡の竪穴住居跡が多い縄文時代中期後葉の土器は川久保・宮沖遺跡では少なく、縄文時代後期土器も千田遺跡より少ないが川久保・宮沖遺跡でも出土が認められ、晩期土器もわずかが認められる。

縄文土器は文様が明瞭なものを中心に図示した。45・46は胎土に織維を含み、羽状縄文が施される前期前葉土器、47が半截竹管で施文される前期後葉土器、48・49・50・51・52・53が中期前葉土器で、50は北陸系の土器と思われ、52は外面に指頭圧痕が施され胎土に雲母が目立つ。54は渦巻隆帯脇を縦位沈線で充填し、千田遺跡の集落隆盛期と同時期のものである。55は後期後葉頃と思われる土器で、中世溝跡から出土したが、本来は段丘土層内に含まれていたものと思われる。56が後期中葉の土器、57が後期前葉の三十稲場式の浅鉢である。27は晩期前葉の佐野1式と思われる粗製土器、26は縄文時代前期後葉と思われる斜縄文土器破片、NR02出土の44は縄文時代後・晩期の粗製土器と思われる。

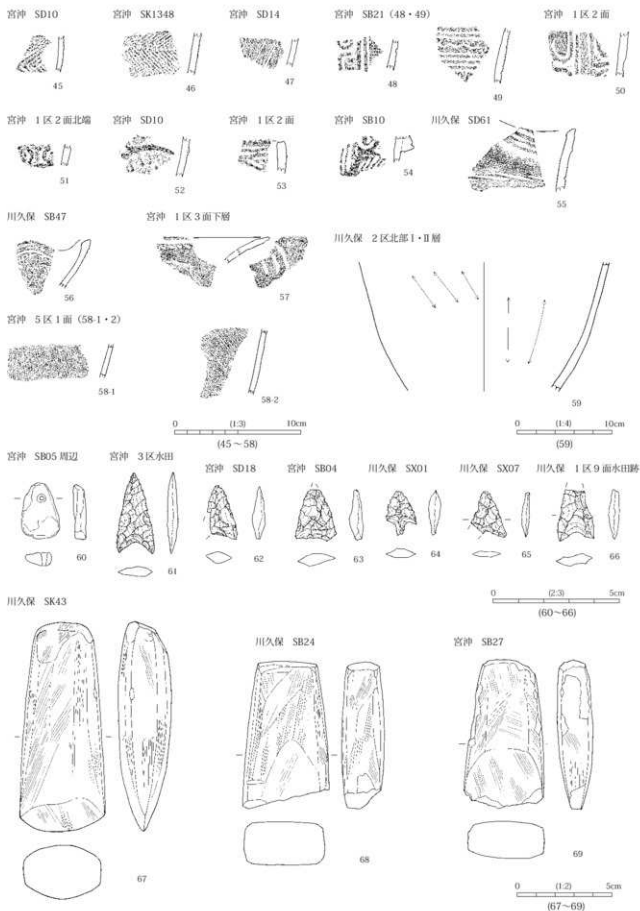
(2) 縄文時代の石器 (第22・23図 PL31)

縄文時代の石器は他時代の遺構埋土や遺構外から出土した。縄文時代の石器は縄文土器の出土分布と同様に宮沖1区・川久保5区から出土したが、縄文土器があまり出土していない川久保1・3区からも出土し、縄文土器とは異なる出土分布を示す。川久保1区では出土地点周辺に縄文時代の遺物包含層がなく、古墳時代以後の土層から出土したことから混入と考えられる。以下には製品を中心に掲載する。

60はヒスイ製垂飾品で、奈良時代の宮沖SB05検出時に出土した。研磨は部分的で、形状から縄文時代の所産と捉えた。打製石鎌は7点出土し、6点(61～66)図示した。調査域内の広範囲から単独で出土し、川久保1区9面水田跡、氾濫原内の宮沖3区水田跡など縄文・弥生時代の遺物包含層がない場所からも出土し、特定地点に集中する傾向はない。石鎌は凹基鎌5点(黒曜石3点(61・65)・チャート1点(62)・無斑晶質安山岩1点(66))、無茎平基1点(チャート1点(63))、有茎1点(黒曜石1点(64))がある。磨製石斧は5点出土し3点掲載した(67～69)。側面に角をもつ定角式の磨製石斧で、67は閃緑岩とも思われるが、石材は特定できず、他は蛇紋岩製である。川久保1・3区といった土器出土も少ない千曲川に面した地区で出土した。70～72は打製石斧で、すべて宮沖遺跡から出土した。石材は砂岩・頁岩・泥岩などの堆積岩である。70は使用による摩耗痕が観察され、71・72は先端が欠損する。73・74は磨石と思われ、73は安山岩製でやや扁平な平坦面に研磨痕が残る。74は研磨痕が不明瞭ながら砂岩製の球状礫で磨石の可能性を考えて掲載した。類似した球状の礫が近世の川久保SD41からも出土したが、周囲には縄文土器の出土もなく、縄文時代の所産とは断定できなかった。75は石皿で、裏面を台状に作り出し、弱く研磨される。擦り面は使用でかなり減っている。古墳時代後期宮沖SB12から出土した。

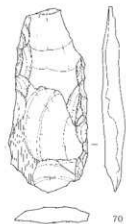
剥片・石核・原石類は図示していないが、少量出土した。その石材は黒曜石や無斑晶質安山岩があり、黒曜石は表面が風化した亜角礫である。メノウも出土したが、自然面が残る円礫片で石材として搬入されたと断定できない。剥片は黒曜石を主体にチャートが続き、他に珩質頁岩、無斑晶質安山岩、流紋岩などがある。黒曜石剥片には微細な剝離痕や部分的な調整が加えられたものがわずかにある。

第3章 検出された遺構と遺物



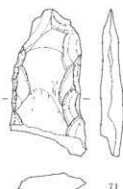
第22図 縄文土器、縄文時代の石器1

宮沖 1区2面



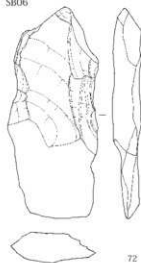
70

宮沖 1区表採

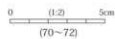


71

宮沖 SB06

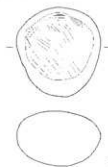


72



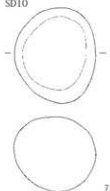
(70~72)

宮沖 SB16



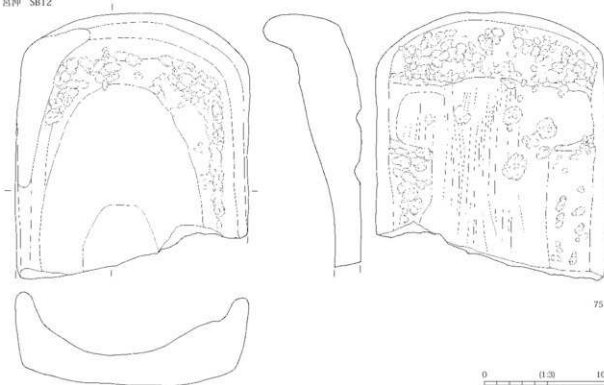
73

宮沖 SD10

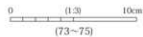


74

宮沖 SB12



75



(73~75)

第23図 縄文時代の石器2

第3節 弥生時代の遺構と遺物

1 弥生時代の概要 (第24～26図)

概要：千曲川に隣接する川久保2・4区で弥生時代中期後半と後期初頭の遺構が検出された。川久保遺跡で本格的な活動が捉えられるのは、この弥生時代中期後半からである。また、川久保遺跡発見の端緒は、明治30年代に弥生時代中期と思われる太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧12本が裏に入った状態で発見されたことによる(藤森1947・桐原1956)。発見地点は調査地を含む塚地籍とされるが、詳細は不明である。

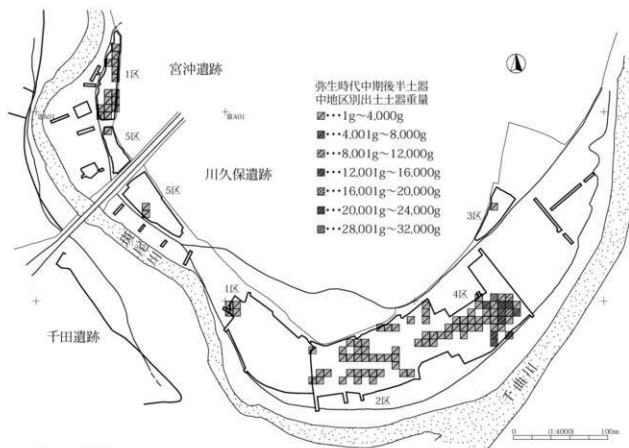
弥生時代中期後半の遺構は川久保4区を中心に検出され、川久保4区北東部にある千曲川の浸食による低地では、土壌分析から水田に利用されていた可能性が知られた(添付DVD参照)。その低地の北・西に接する微高地縁辺で完形や完形に近い土器の集中、微高地上では埋土に焼土・炭化物を含む不整形な土坑やピット、焼土跡が検出された。これらの川久保2・4区2面の土坑、ピット、焼土跡は出土遺物がない遺構もあり、当該期ばかりでなく縄文時代や古墳時代前期の遺構も含む可能性もあるが、ここで扱う。

弥生時代後期初頭の遺構は川久保2区で竪穴住居跡1軒のみがあり、他にNR1b、NR02など千曲川洪水による浸食地形が検出された。水田遺構は確認されなかったが、類似時期の住居跡が斑尾川対岸の千田遺跡にあり、千曲川沿いに居住遺構が分布すると思われる。弥生時代後期の遺構はない。

検出面と土層：弥生土器はV層に含まれ、川久保2・4区微高地域ではその下層のVI・VII層上面で土坑・ピットを検出した。微高地上のV層はIV層堆積以前の古墳時代前期の土器まで含み、純粋な弥生土器包含層ではない。それ以外のIV層が分布しない地点ではIII・V層が重なって分層できず、縄文土器～平安時代の土器と弥生土器が混在して出土した。また、川久保4区北東低地ではV層が細分され、弥生時代中期後半の土器集中はV3層上部に位置し、洪水土層V2層に覆われる。このV2層は、弥生時代中期後半土器集中を覆い、上部にIV層が位置することから弥生時代中期後半～古墳時代前期の所産と捉えられる。V2層と同じ洪水土層は他に認められないが、隣接する川久保2区では類似時期の弥生時代中期後半～後期初頭の浸食地形NR1bとNR02が検出された。同じ洪水時に、流速が早く浸食作用が強く働いた地点ではNR1b・NR02が形成され、一方で窪地の低地では流速を減じて川久保4区でV2層を堆積させたと思われる。これ以外の弥生時代の洪水土層は捉えられなかった。

2 弥生時代の遺構

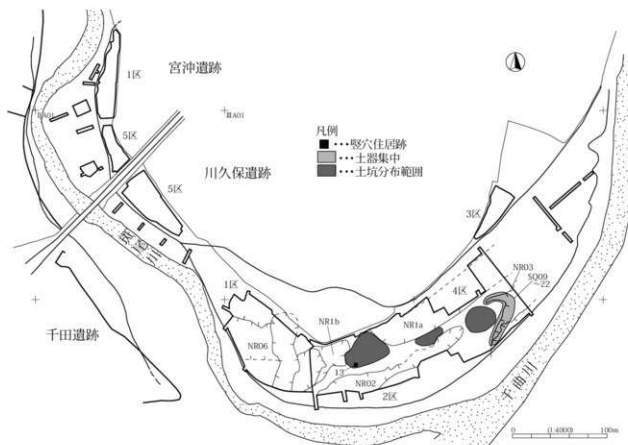
川久保2・4区の2面で弥生時代中期後半と後期初頭の遺構を検出した。弥生時代中期後半の遺構には、川久保4区のNR03と北東低地に挟まれた舌状微高地縁辺に分布する川久保SQ09～22の土器集中、NR03内の土器集中、NR03から微高地下端の川久保4区北東低地にかけて位置する川久保SD18・19がある。さらに、川久保2・4区の微高地上の2面のVI・VII層上面で平面形が不整形な土坑、ピット状の落ち込み、焼土跡数基が検出された。これらの微高地上の遺構には弥生時代中期後半の粟林式土器片を少量出土したものもあるが、土器を出土せず時期が特定できない遺構が多い。川久保SD18に切られる川久保SF06・Pit160など水田化以前と思われる遺構や、出土炭化材の¹⁴C年代測定で縄文時代晩期の可能性が知られた川久保SK51、さらにV層に古墳時代前期土器も含まれるので、出土遺物のない古墳時代前期遺構が含まれる可能性がある。しかし、土坑・ピットの分布範囲で明確な縄文時代、古墳時代前期遺構は捉



第24図 弥生時代中期後半土器の出土重量分布



第25図 弥生時代後期土器の出土重量分布



第 26 図 弥生時代の主要遺構分布概略

えられず、その分布範囲は弥生時代中期後半の土器の分布に重なることから、弥生時代中期前後の可能性を考慮してここで扱う。土坑は不整形な平面形のものが多い。一部は植物の根痕の可能性があるが、埋土に焼土や炭化物を含む開墾時の伐採や抜根後の焼却遺構（寺内 1998）と思われる土坑もある。また、川久保 4 区北東低地は比較的平坦で畦は確認できなかったものの、土壌分析でプラントオパールが検出され、水田跡の可能性が知られた。川久保 SD18・19 はこの水田に伴う用水の可能性がある。なお、当該期の主要遺構分布図（第 26 図）では土器集中川久保 SQ09～22、NR03 の範囲と、焼土を伴う土坑の分布範囲をスクリーントーンで示し、遺構図は巻末の割付図（第 287～295 図）に掲載した。

（1）土器集中

川久保 SQ09～22、NR03 4区2面 X B04・05、C01～04・07～09・12・13・17・18・21
 （第 27～29 図 PL 4・5 第 8 表）

川久保 4 区東部の NR03 と北東低地に画された舌状微高地縁辺で、弥生時代中期後半の完形や完形に近い土器が集中する土器集中が川久保 SQ09～22 の 14 か所捉えられた。NR03 内では調査時に土器集中と認定しなかったが、中央付近と北東端部の 2 か所に土器が集中する。また、NR03 北東付近の土器集中は川久保 SQ20・21 と捉えたが、NR03 内の土器と関連する可能性がある。土器集中は基本土層 V 層中にあり、川久保 4 区北東低地では V 3 層上部に土器が含まれる。川久保 SQ09 のみ V 3 層上部の V 2 層で検出したが、出土範囲が広く洪水時に流された土器を土器集中と捉えた可能性がある。川久保 SD18 に伴う畦内や南東低地 V 3 層下部以下で土器集中は検出されず、川久保 4 区北東低地が水田に利用されていた

間の土器集中は捉えられなかった。なお、隣接する川久保2区V層では弥生時代中期後半の土器破片が調査区内に散って出土した。土器集中と認定し得なかったが、川久保4区の土器集中と関連する可能性がある。

土器集中のなかで川久保 SQ13のみ微高地上にあり、川久保 SQ21・20・17・16・22・10・11（・12）・14・15は、NR03より南西部側の微高地縁辺に沿って分布し、南端は千曲川浸食地形 NR05に切られる周辺まで続く。NR03以東には土器集中は認められない。川久保 SQ17は接合しない破片が多く、その東側の川久保 SQ18・19も土器散布範囲が広く、洪水で移動した土器散布範囲を捉えた可能性がある。川久保 SQ17より南に位置する川久保 SQ16～SQ15までは5～7m間隔に分布し、各土器集中の土器出土範囲も狭い。ただし、川久保 SQ11・12のように近接した傾斜面の上下に位置し、土器の転落によるものを別の土器集中と捉えた可能性のものもある。また、川久保 SQ11・16・21の土器が川久保 SD18・19の上部で出土したが、これも川久保 SD18・19 廃絶以後の転落や洪水によって移動したと思われる、すべてが遺棄された状態のままとはいえない。この土器集中間で土器小片がいくつか千曲川と同じ方向で接合した。

各土器集中からは遺存良好な土器が出土し、当該期の出土土器重量は最少が川久保 SQ14の1.084g、最大は川久保 SQ15の20.093gで、平均土器重量は6.983gである。NR03は80.661gと突出するが、これはNR03内出土土器を一括して計測したことによる。土器集中毎の器種構成を比較するために、口（頸）～底部5/8以上残る土器数と出土重量を第8表にまとめた。壺と甕を中心とし、若干壺が多い傾向が認められ、鉢、高杯、甕、蓋はわずかである。NR03を除くと推定個体数は10個を越えず、多数の土器は含まれない。甕は内面にお届けが認められ、集落内で実際に使用されたものと思われるが、内部に穀物等の残滓は確認されず容器として持ち込まれた可能性がある。土器以外に石器は出土していない。

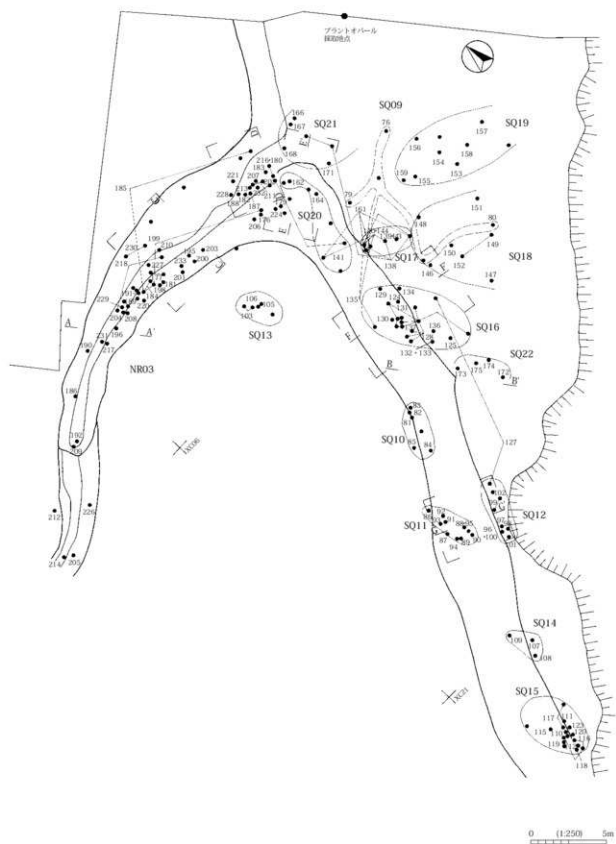
土器集中は川久保4区の千曲川に面した微高地縁辺で、壺・甕を中心とする土器数個を用いてそのまま遺棄する、この場所で行われた行為によるものと思われる。千曲川や水田跡の可能性のある川久保4区北東低地に近接した場所にあつて、それらに関わる可能性がある。土器集中は複数認められ、繰り返しの類似行為か、同時に複数形成されたものと推測されるが、その回数や単位は多くないと思われる。土器集中周辺では石器などの生産具や生活遺構が検出されず、土器の遺存状態が良好であることから破損した生活器材の廃棄とは考えにくい。この土器集中は土器の特殊な出土状態から祭祀行為によることも考えられるが、断定する根拠は得られず、性格は明らかにし得なかった。

第8表 弥生時代中期後半土器集中出土土器計測表

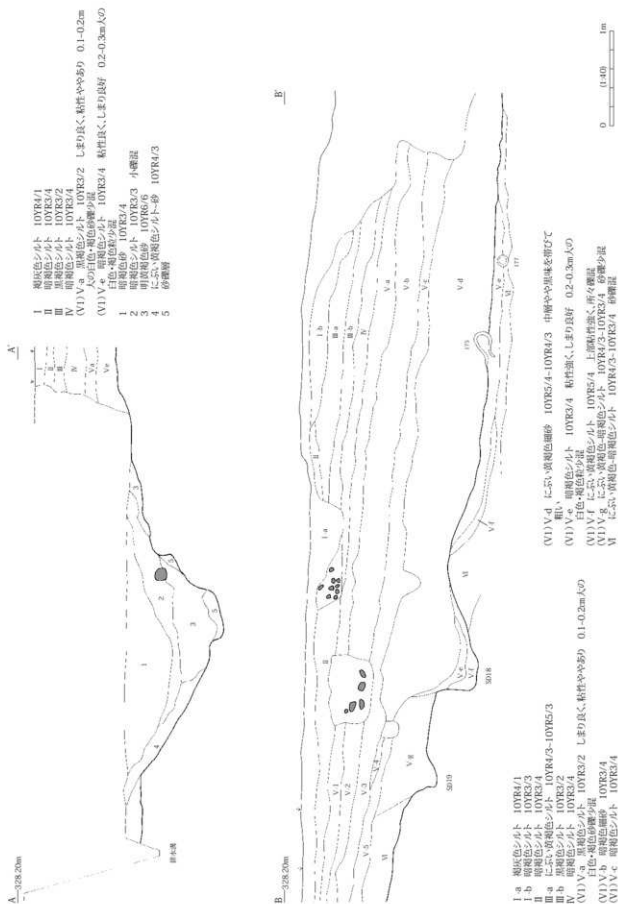
器種	SQ09	SQ10	SQ11	SQ12	SQ13	SQ14	SQ15
壺	1/2/1,291	1/3/464	5/8/1,204	5/8/12,191	1/5/1,055	1/2/454	6/16/12,808
甕	1/1/1,590	3/4/1,720	3/12/2,533	0/0/0	1/2/260	2/6/630	4/4/5,973
鉢・高杯	0/2/523	0/0/0	0/1/184	0/1/2	0/0/0	0/0/0	0/1/954
甕	0/0/0	1/1/193	0/0/0	0/0/0	0/0/0	0/0/0	0/0/0
蓋	0/0/0	0/0/0	0/0/0	0/0/0	0/0/0	0/0/0	1/1/358
総重量	2/5/3,404	5/8/2,377	8/21/4,536	5/9/12,193	2/7/1,315	3/8/1,084	11/22/20,093

器種	SQ16	SQ17	SQ18	SQ19	SQ20	SQ21	SQ22	NR03
壺	4/31/14,428	2/43/5,748	1/4/1,403	2/10/1,586	3/10/4,757	6/14/7,648	4/6/5,794	30/118/50,708
甕	4/4/1,006	2/8/1,405	1/3/2,571	4/5/2,794	1/2/2,100	0/1/6	0/0/0	18/48/22,389
鉢・高杯	0/2/354	0/5/78	1/1/118	0/0/0	1/3/771	0/3/221	0/0/0	5/9/4,348
甕	0/0/0	0/0/0	0/0/0	0/0/0	0/0/0	0/0/0	0/0/0	2/3/3,049
蓋	0/0/0	0/0/0	1/1/213	0/0/0	0/0/0	0/0/0	0/0/0	0/0/0
総重量	8/37/15,921	4/56/7,251	4/9/4,305	6/15/4,392	5/15/7,644	6/18/7,879	4/6/5,794	55/178/80,764

※表中の表記は口（頸）～底5/8以上遺存の推定個体/破片を含む推定個体数/出土総重量gであり、最下段の総重量は器種不明土器重量を含む。

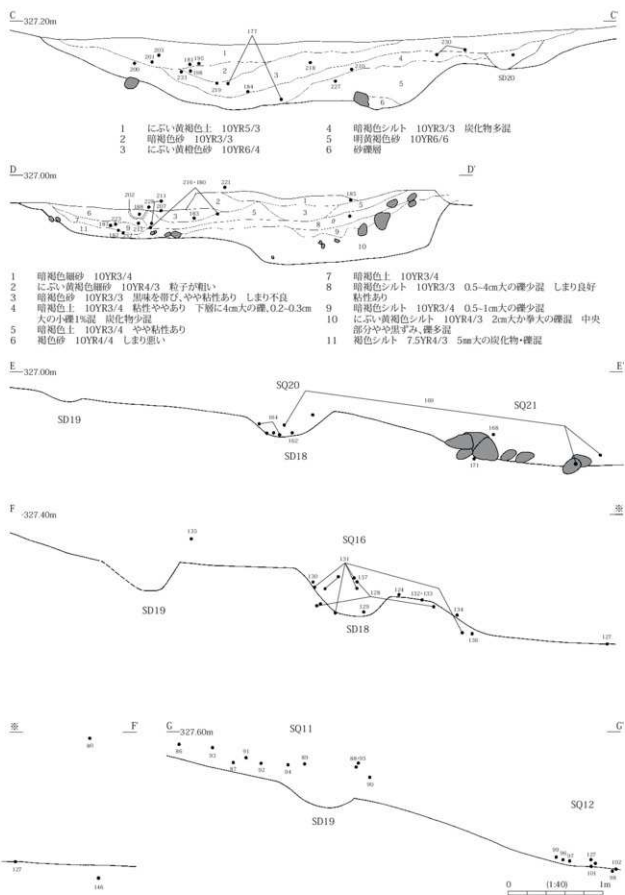


第27図 川久保4区土器集中の分布



第28図 川久保4区土器集中周辺の土層1

第3章 検出された遺構と遺物



第29図 川久保4区土器集中周辺の土層2

(2) 土坑 (第30～33図 PL5 第9表)

川久保2・4区2面のⅦ層上面でさまざまな規模、形状の落ち込みが検出された。調査時に、大型で湾曲した不整形な落ち込みをSX、細長い形状の落ち込みをSD、中型で不整形円形・楕円形の落ち込みをSKとした。いずれも不整形な形状ではあるが、類似した性格と思われるものもあり、ここでは土坑として報告する。埋土はⅦ層を基調とするが、川久保SK20・52はⅣ層起源とも思われる砂質土や細砂埋土で、見逃した上層遺構の疑いがある。また、川久保SK34・36・37・40・51・64など埋土中に焼土や炭化物が混じるものは、千曲市屋代遺跡群で弥生時代中期の抜根後の根焼却遺構と報告されたものに類似する(寺内1998)。川久保SD37・39・40は細長い形状からSDとしたが、倒木痕か、川久保SQ34と関連した倒木焼却の痕跡と思われる。これ以外の川久保2区の川久保SK54～63、同SD35・36、川久保4区の川久保SX06・07、同SK38は形状から植物根痕の可能性が高い。なお、川久保SD18底面で川久保Pit160を検出した。川久保Pit160の埋土は炭化物や焼土を含み、傾斜上方の北西壁が立ちあがることからピットとされたが、傾斜下方の南東側は水田土壌と思われる土層下に広がる(第31図)。このことから、川久保SD18構築以前の根等を焼却した遺構と思われる。川久保SF09はPit160脇のSD18に伴う畦上面で検出された焼土跡で、川久保Pit160と別焼土跡と捉えられる。

これらの土坑は出土遺物がなく時期不明だが、SD18底で検出されたPit160は弥生時代中期後半以前と捉えられ、川久保2区SK51出土炭化材(PLD-3676)のAMS¹⁴C年代測定結果は2710±30yr.B.P.で(添付DVD参照)、縄文時代晩期に遡る可能性がある。以下に土坑を一覧表で示す。

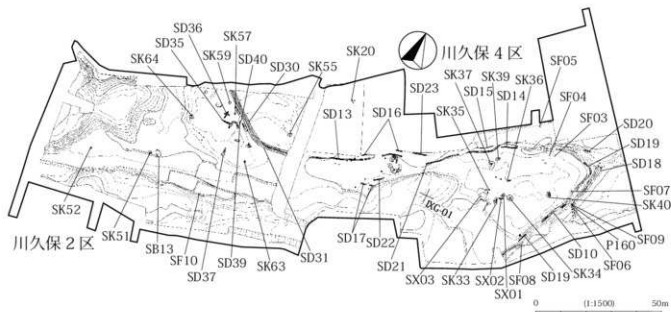
第9表 弥生時代中期前後の土坑一覧表

遺跡・遺構	調査区 調査面	グリッド	平面形	長軸×短軸 (cm)	断面形	深さ (cm)	埋土の特徴・出土遺物・備考
川久保SK20	4区2面	IX E15	長楕円形	156×34	逆台形	10	炭化材出土。埋土は砂質土。
川久保SK33	4区2面	X B19	不整形楕円形	318×140	不整U字形	48	風化凝灰岩粒混。遺物なし。底面凹凸あり。
川久保SK34	4区2面	X B19	不整形円形	260×240	不整V字形	82	風化凝灰岩粒混。遺物なし。底面凹凸あり。
川久保SK35	4区2面	X B18	楕円形	66×48	逆台形	18	風化礫層粒(Ⅶ層?)混。遺物なし。
川久保SK36	4区2面	X B14	不整形楕円形	106×96	U字形	21	焼土ブロック混。底面一部焼け。遺物なし。底面凹凸あり。
川久保SK37	4区2面	X B13	楕円形	308×266	上広逆台形	62	焼土ブロック混。凝灰岩粒混。遺物なし。底面凹凸あり。
川久保SK39	4区2面	X B08	不整形楕円形	212×150	U字形	38	風化凝灰岩粒混。出土遺物なし。
川久保SK40	4区2面	X C11	不整形丸長方形	206×170	U字形	52	焼土塊・礫混。遺物なし。底面凹凸。噴砂入り。
川久保SK47	4区2面	X C21	円形	78×74	不整U字形	41	遺物なし。中段あり。中央PIT状に窪む。
川久保Pit160	4区2面	X C12	楕円形	90×64以上	U字形	8	風化凝灰岩粒混。底面凹凸あり。遺物なし。
川久保SX01	4区2面	X B19	不整形楕円形	194×118	浅いU字形	10	風化凝灰岩粒混。底面凹凸。遺物なし。
川久保SX02	4区2面	X B19	不整形楕円形	186×62	浅いU字形	10	V層基調で風化凝灰岩粒混。底面凹凸あり。遺物なし。
川久保SX03	4区2面	X B18	不整形楕円形	460×426	浅いU字形	20	V層基調。風化凝灰岩粒混。底面凹凸あり。遺物なし。
川久保SK51	2区2面	IX I17	不整形円形	240×160	不整V字形	72	焼土粒混。遺物なし。
川久保SK52	2区2面	IX H24	不整形楕円形	110×58	浅い窪み形	12	にぶい黄褐色砂。土器出土。底面凹凸あり。
川久保SK55	2区2面	IX J03	楕円形	204×130	不整U字形	38	V層基調。遺物なし。底面凹凸あり。
川久保SK57	2区2面	IX I05	円形	64×58	浅いU字形	6	Ⅶ層ブロック混。遺物なし。遺構が不明。
川久保SK59	2区2面	IX D25	楕円形	100×80	浅いU字	8	粘土。遺物なし。遺構が不明。
川久保SK63	2区2面	IX J12	楕円形	116×54	U字	22	Ⅶ層ブロック混。遺構が不明。
川久保SK64	2区2面	IX I08	楕円形	184×128	浅いU字形	20	炭化物多量。遺物なし。周囲炭化物分布。



(3) ピット (第287～295図)

川久保2・4区の2面Ⅶ層上面で柱穴状の小規模な落ち込みが100基弱検出され、調査では形状から「Pit」と捉えた。いずれも直径20～50cmほどの円形の平面形で、深さは検出面から底面まで5～45cmまであり、平均は20cm前後である。微高地付近だけでなく、微高地縁辺の斜面や北東低地にも認



第30図 川久保2・4区2面検出の土坑、溝跡、焼土跡分布

められ、一定範囲に数基集中すると見受けられるものもあるが、低地内や微高地縁辺の斜面など検出場所もさまざまに配置に規則性がないことや、ピット分布域内に焼土跡を伴う例もないなど居住関連遺構と断定できない。植物根痕も多く含まれると思われる。なお、個別ピットは割付図に平面形のみ図示した。

(4) 溝跡 (第30・294・295図 PL3)

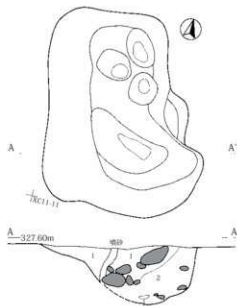
弥生時代中期後半の溝跡は川久保SD18・19の2条ある。同じ調査2面ではNR1a南岸付近で川久保SD13～16・20・21・23も検出したが、川久保SD30・31・34の延長先と捉えて古墳時代前期で扱った。川久保SD18・19 4区2面 X C02・03・07・08・12・13・16・17・21 (第30・292・293図 PL3)

川久保4区北東低地にNR03が注ぎ込む周辺から始まり、微高地縁に沿って並列して南へ延び、途中からSD18は「く」字状に折れて低地内へ、SD19はそのまま南へ延びる。

SD18はNR03東端から段丘下端に沿って南へ延び、「く」字状に東方へ折れて千曲川浸食地形NR05に切られる付近で途切れる。幅は120cm、長さは調査区内で約24mを測る。断面形は西岸が急傾斜となるU字形で、低地側の高さ20cm程の畦状の高まりを伴って底面までの深さは約30cmを測る。他遺構の重複では、SD18がPit160・SF06を切り、その脇の畦状の高まり上面でSF09を検出した。出土遺物はないが、SQ16・20の土器がSD18埋土上部で検出され(第29図)、弥生時代中期後半の溝跡と捉えた。

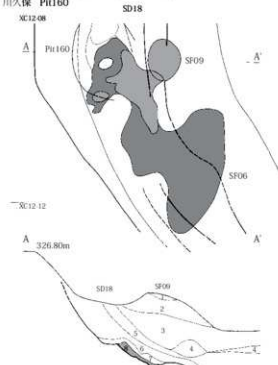
SD19は微高地縁辺のSD18よりやや高い位置を等高線方向にNR02付近まで延びる。幅120cmで、断続的な部分を含めて総延長約44mを測る。川久保4区のトレンチ土層観察で、SD19がVI層の崩落土で埋没してSD18が造られたと捉えたが、両溝跡は重複せず灌水範囲が異なることから、崩落土は溝跡廃絶以後のもので同時存在した可能性がある。断面形は微高地側の西岸が急傾斜となるU字形で、深さは約20cmを測る。出土遺物はないが、埋土上方で川久保SQ11・20の土器が出土した(第29図)。他の重複遺構はない。

川久保 SK40



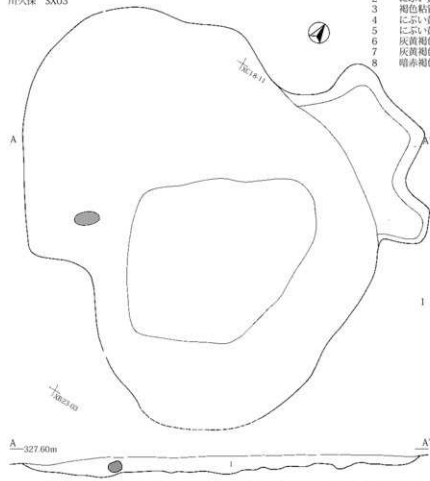
- 1 黒褐色土 10YR2/3 炭化物粘
- 2 にぶい黄褐色土 10YR5/4 炭化物・焼土塊・円礫・凝灰岩粒混
- 3 焼土ブロック

川久保 Pit160



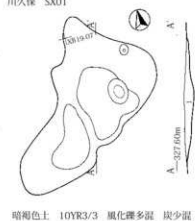
- 1 暗褐色シルト 10YR3/4 1mm以下の細かい焼土粒混
- 2 にぶい黄褐色-暗褐色土 10YR4/3-10YR3/4 砂礫混
- 3 褐色粘質シルト 10YR4/4
- 4 にぶい黄褐色シルト 10YR5/4
- 5 にぶい黄褐色土 10YR5/4
- 6 灰黄褐色土 10YR4/2 炭化物少混
- 7 灰黄褐色土 10YR4/2 炭化物多混
- 8 暗赤褐色土 5YR3/4 焼土

川久保 SX03



- 1 暗褐色シルト質細砂 10YR3/3 細粒の白色・黄褐色の風化礫(0.2-1cm)を混入 しまり良好

川久保 SX01



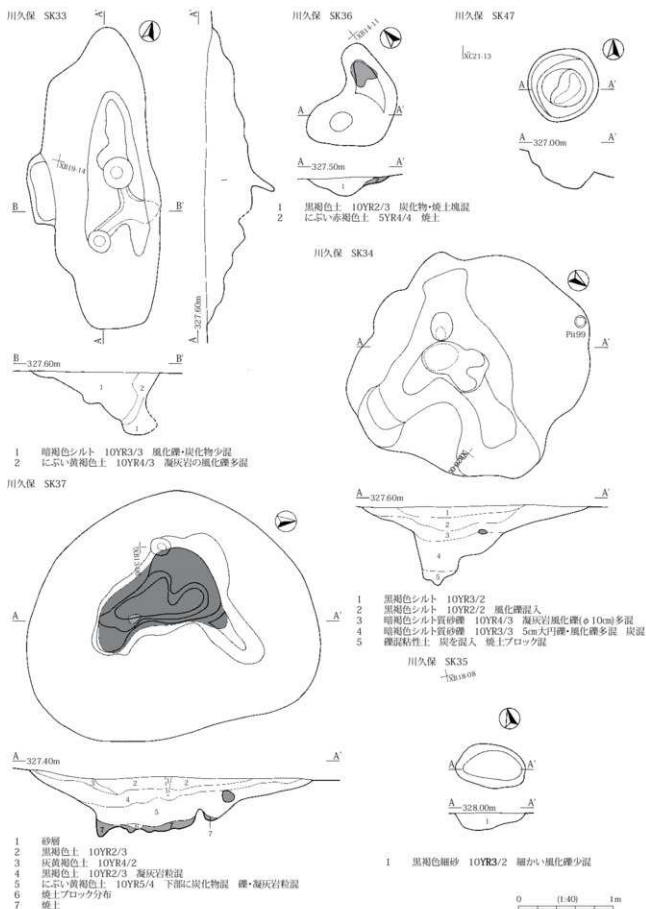
- 1 暗褐色土 10YR3/3 風化礫多混 炭少混

川久保 SX02



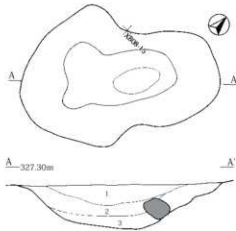
- 1 暗褐色土 10YR3/3 細粒風化礫多混 炭少混 しまり良好

第31図 弥生時代の土坑1



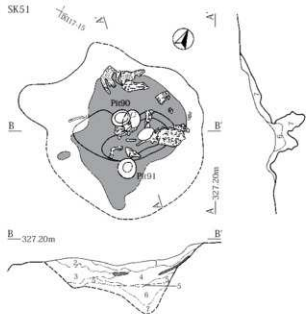
第32図 弥生時代の土坑2

川久保 SK39



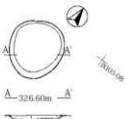
- 1 黒褐色シルト 10YR2/2 風化礫多混
2 暗褐色細砂 10YR3/4
3 暗褐色砂礫 10YR3/4 風化礫多混

川久保 SK51



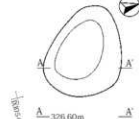
- 1 黒褐色土 10YR3/1 炭化物多混
2 褐色土 10YR4/4 炭化物少混
3 黄褐色砂質シルト 2.5Y5/4
4 黄褐色砂質シルト 2.5Y5/4 炭化物混
5 にぶい黄褐色土 10YR5/3 炭化物・焼土粒少混
6 暗オリーブ色砂質シルト 7.5Y4/3 焼土粒少混
7 暗赤褐色砂質シルト 5YR3/2 焼土粒少混

川久保 SK57



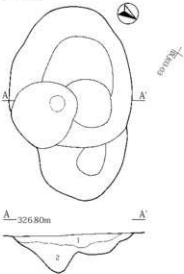
- 1 褐灰色粘土 10YR4/1
Ⅴ層黄褐色土ブロック少混

川久保 SK59



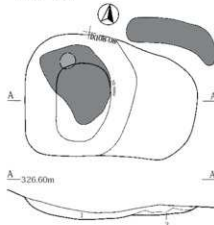
- 1 灰黄色シルト質粘土 2.5Y6/2
2 褐灰色粘土 10YR4/1

川久保 SK55



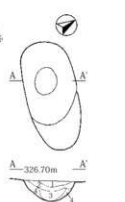
- 1 黒色粘土 2.5Y2/1
2 黄褐色シルト質粘土 2.5Y5/6 しまり不良
(根堀か?)

川久保 SK64



- 1 褐灰色粘土 10YR4/1 1cm以下の炭化物多混
2 灰黄褐色粘土 10YR5/2 黄褐色土ブロック混 しまる

川久保 SK63



- 1 褐灰色粘土 10YR4/1
黄褐色シルトブロック混
2 灰黄色粘土 2.5Y6/2
にぶい黄色(2.5Y6/4)細砂
ブロック多混
3 黒褐色粘土 2.5Y3/1
炭化物小片少混
4 暗灰黄色土 2.5Y5/2
Ⅴ層ブロック少混

0 (1:40) 1m

第33図 弥生時代の土坑3

(5) 焼土跡・炭化物集中

川久保 SF03～10, SQ33・34 2・4区2面 (第30・289・293～295図 第10表)

川久保2・4区の2面、V3層・VII層上面でSF03～09の焼土跡7基、SF10、SQ33・34の炭化物集中3基を検出した。千曲川に面した微高地斜面際に、北側からSF03・04・07・08、南のNR02脇にSF10、NR1a内の東岸付近に炭化材を出土したSQ33・34や焼土跡SF05が位置する。焼土跡は直接熱を受けて赤化した痕跡だけでなく、SF03・04・05のように焼土ブロック集中と認められたものも含む。焼土跡が根の攪乱を受けた可能性もある。帯状のSQ33・34は倒木焼却に伴う炭化物集中と思われる。SF09はSD18に伴うV3層の畦状高まり上面にあり、SF06とPit160はSD18に切れ弥生時代中期前後と思われるが、他は遺物を伴わず時期は不明である。埋土に炭化物や焼土を含む土坑との関連は捉えられなかった。

第10表 弥生時代中期前後の焼土跡一覧表

焼土跡	調査区 調査面	グリッド	平面形	長軸×短軸 (cm)	出土遺物・重複
川久保SF03	4区2面	IX C01	円形	直径10	4区北部NR1aの東岸に川久保SF04と近接。VII層上面で検出。焼土ブロック集中。根攪乱?。
川久保SF04	4区2面	IX B05	円形	直径14	川久保SF03に近接し、VII層上面で検出。焼土ブロック集中。根攪乱?。
川久保SF05	4区2面	IV V24	不整形円形	54×34	4区北部NR1a東岸近くにある焼土ブロック集中。VII層上面で検出。根の攪乱?。
川久保SF06	4区2面	X C12	不整形楕円形	210×112	西端はビット状Pit160脇に94×53cmの焼土跡、東側に傾斜に沿って炭化物が散布する。上面にSD18が載る。
川久保SF07	4区2面	X C07	楕円形	52×32以上	北部トレンチにかかる。被熱で焼層が赤化。脇に窪みがあるが関係不明。
川久保SF08	4区2面	X H01	楕円形	64×34	SD19青塚脇の微高地斜面にあり、直接VII層上面が被熱で赤化する。SQ15と重なる位置にある。
川久保SF09	4区2面	X C12	楕円形	42×36	川久保SF06-Pit106に重なる位置だが、SD18に伴う畦状高まり上部で検出。川久保SF06とは異なる時期と思われる。
川久保SF10	2区2面	IX I25	不整形円形	94×48	NR02岸付近で検出。炭化物の散布範囲で、焼土は認められなかった。
川久保SQ33	2区2面	IX D24,104	帯状	20×520	帯状に炭化物が散布。倒木が炭化、もしくは焼却されたものと思われる。
川久保SQ34	2区2面	IX I10,J06	帯状	56×428	帯状の炭化物・炭化材散布。同方向の南延長先に炭化物を含むSD37、北延長先に近いSD39・40がある。SD37と本跡は倒れた幹線でSD39・40が根腐で、倒木後の焼却等による炭化の可能性がある。

(6) 竪穴住居跡

川久保SB13 2区2面 IX I17・22 (第34図 PL6 第11表)

川久保2区2面のVII層上面で検出した。川久保Pit286に切れ、周囲には同時期の遺構はなく、単独で位置する。本跡南半分は現代の水田造成により削平され、東側はトレンチにかかってわずかに残存する。残存部から平面形は緩やかなカーブを描いた小判形か隅丸長方形と思われる。埋土は暗褐色砂質土で、床面上に炭化材が点在して検出され、焼失住居跡の可能性が高い。壁は斜めで立ち上がりは不明瞭で、床面は細かな凹凸があって軟弱である。南東隅の床面上で地床跡と思われる焼土が検出された。また、南西部で小ビット状の窪みが多数みつかったが、根の攪乱と思われる。遺存良好な甕3個体が出土した。

第11表 弥生時代後期初頭竪穴住居跡一覧表

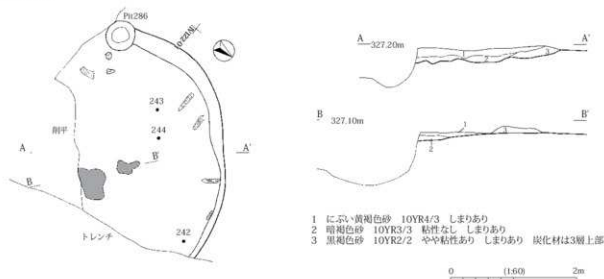
遺跡	SB	地区	グリッド	検出面	平面形	主軸方位	南北(m)	東西(m)	壁	深さ(cm)	床面	施設	カマド	炉
川久保	13	2区	IX I17・18	2面 VII層	不明	不明	1.9以上	2.7以上	斜	18	軟弱で細かい凹凸あり	なし	地床跡1基	
重複関係・備考 南部は現代水田に削平され、東側はトレンチに切られる Pit286に切られる														

3 弥生時代の遺物

(1) 弥生時代前期末～中期初頭の土器 (第53図 PL41)

図示した条痕文土器小片1点51g(241)がある。宮沖5区SD15から出土し、伴出遺物はない。壺肩付近の破片で、突帯は明瞭ではないが、連続する指頭圧痕を挟んで上部がタテ方向、下部はヨコ方向の条痕文が認められる。色調は外面が赤～黒褐色、内面は黄褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。

川久保 SB13



第34図 川久保 SB13

(2) 弥生時代中期後半の土器

ア 概要

弥生時代中期後半の粟林式土器は川久保4区から宮沖1区まで段丘上の広範囲で出土し、なかでも川久保4区では土器集中から完形や完形に近い土器が複数出土した。周辺のV層からも当該期の土器が出土したが、破片が多く図示し得なかったものが多い。ここでは土器集中出土土器を中心に報告する。

イ 器種 (第35図)

器種は壺、甕、高杯、鉢、甔、蓋、ミニチュア土器がある。なお、文様の名称は長野市松原遺跡の弥生土器の記述に従った(青木2000)。

壺 ラッパ状に開いた口縁に細長い頸部がつき、胴部下半に最大径をもつイチジク形の器形を基本とするが、最大径がやや上部にある178の縦長の球胴もある。後者は甕211・212と器形が似ており、211・212の内面調整も壺と同様に胴部上半が急角度のナナメハケ、胴部下半はヨコに近いナナメハケを施す。甕を目途として胴部下半を製作し少し乾燥させたが、上半を製作するに際して壺へ作り替えたものだろうか。他に胴部に注口をつけるものがわずかにあり、無頸壺は出土していない。

壺の規格は4種類ほどあり、口径7cmで高さ15cmほどの小型(188)、口径12～16cmで高さ19～25cm前後の中型(110・131・193・166)、口径15～16cmで高さ31～39cmの大型(131・177)、さらに口径20cm以上で高さ50cmほどの特大がある(178)(第36図)。大型が多く、中型が少量、小型と特大がわずかである。口縁の形は外反と受口があるが、外反口縁で赤彩される壺はほぼ輪花となり、受口口縁には片口状に歪ませるものもある。頸部上部の造作では、口縁の強いナデ・ミガキにより段状になるものと、平坦な器面に沈線を引いて装飾帯(文様帯)をつくりだすものが多い。頸部内側から押しだすように盛り上げて文様帯を作り出すものは161のみ識別できたが、頸部に降帯をつけるものは認められない。

整形はハケ調整を基本とし、胴部内面は屈曲する胴部下半でハケ調整の角度を変え、下半部は緩やかなナナメかヨコハケ、上半部を急角度のナナメハケを施す。内底と頸部はナデ、口縁内面はミガキ調整される。内底部は外底部ケズリ調整のために手で支えた痕跡を消したナデ調整があり、頸

部内面も頸部を絞り込むための調整と思われるナデ調整がある。外面はナナメハケ調整後に施文しミガキ調整される。ミガキは口縁部に連続する弧状ヨコミガキ、頸部にタテもしくは連続弧状ヨコミガキ、頸部と胴部下半はタテミガキを施し、最後に胴部中位をナナメもしくは弧状ヨコミガキする。胴部中位のミガキは172・175など弱いものや省略したものがある。また、ミガキは縄文・沈線などの施文後に施され、縄文の一部が消えているものがある。外底部はケズリ後にミガキ・ナデ調整される。

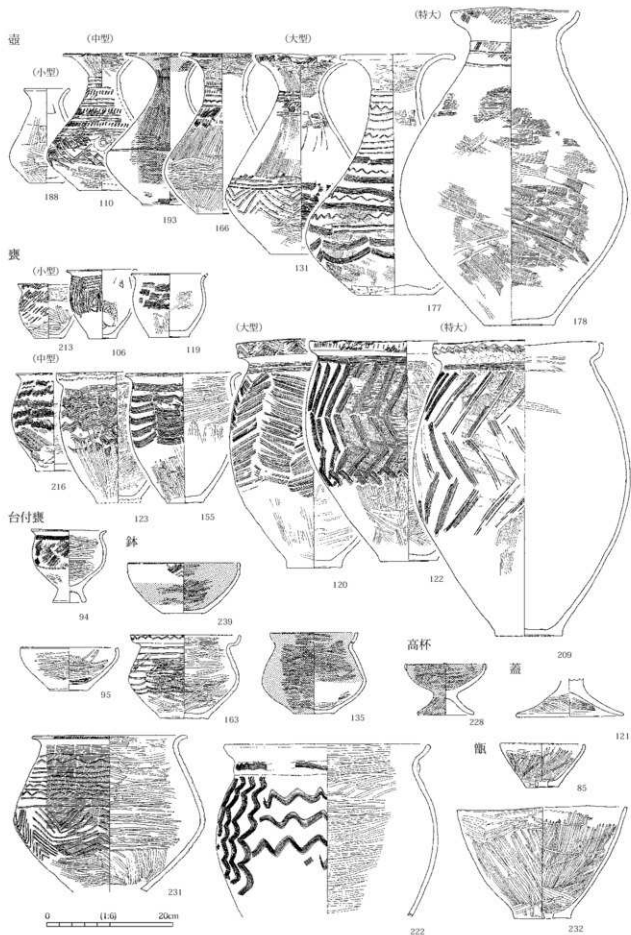
文様は沈線文、櫛描文、縄文、木口の角などによる刺突文などがあり、施文順は地文縄文→沈線・櫛描文→刺突文と思われる。栗林式土器には沈線区画内を縄文で埋める充填縄文もあるが、本遺跡の出土例には明確な例は確認できず、縄文地文の上に沈線で連弧文や重山形文、鋸歯文などを描くものが主体である。また、櫛描文は沈線間を部分的に用いる116・136、頸部から胴部下半に施される115・177など少数しかない。石川日出志氏の編年(石川2002)を参考にすると、栗林1式や2式古段階には縄文・沈線文と、櫛描文を主文様とするものがあり、時間の経過と共に壺から櫛描文を多用するものが減少する傾向がみとれる。本遺跡で櫛描文を施す壺が少ないのは減少時期に当たるともみられない。

文様は口唇部、頸部上部、頸部下部、胴部中位、胴部下半に横方向の帯状に施される。この帯状に施される装飾帯(文様帯)は、頸部～胴部に4つの文様帯が施されるもの、頸部上下が連続した文様を施されるもの、頸部上部と胴部に無文帯を挟んで施されるもの、頸部のみ、頸部～頸部中位にかけて施文されるもの、装飾帯(文様帯)がないもの、底部を除く全面が赤彩される例がある。頸部下部の無文帯を挟んで頸部上部と胴部に施文されるものが多く、頸部上部のみと頸部～胴部まで施されるものがそれに次ぐ。頸部上部の文様はヨコ平行沈線を基調として、沈線のみ(110・177)、縄文とヨコ平行沈線(131・178)、ヨコ平行・波状沈線(139)、ヨコ平行沈線にタテ方向の短い沈線文や刺突文を加えるもの(166)などがある。頸部下部は無文が多いが、頸部上部の文様を若干変えながら櫛描平行線か櫛描平行線・沈線文、さらに刺突や短いタテ方向の沈線が何段か帯状に連続して施されるものがあり、114や173のように変則的な文様を1帯加えるものがある。また、頸部に縦長のU字形区画文の懸垂舌状文を施すものが少量ある。胴部中位の文様は最大径より少し上に1～3本の平行沈線を施し、胴部下半は縄文地文かそのまま、V字を重ねた重山形文、V字に三角を重ねた重三角文、弧状沈線を重ねる連弧文、鋸歯文などの沈線文が施される。116・136はそこに櫛描文が加えられ、138・177は櫛描文で連弧文や重山形文を描く。これ以外に口縁内面に縄文や波状沈線文を加えるものがわずかにある。

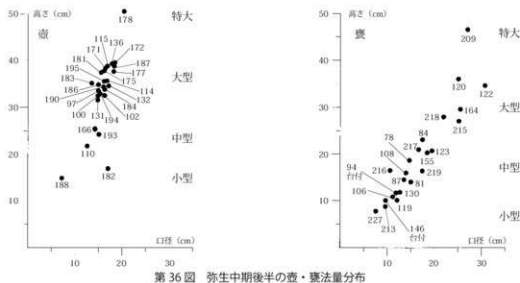
なお、土器文様は帯状に施されることを基本とするが、特定の面を意識したと思われる一部造作が異なるものがある。127は重山形文の一部が平行線(鋸歯文?)で描かれ、194は懸垂舌状文が1カ所のみしかなく、101は頸部に1カ所、202は胴部に平行沈線の記号が描かれる。

甕

器形は小さな平底から斜めに胴部が立ち上がり、胴部中央が膨らみ、口縁が短く折れる。台付甕もわずかにあり、胴部下半に最大径をもつ壺と類似した器形の211・212もある。口縁は外反と受口があり、ユビオサエ等で口縁を波状にするものは認められなかった。甕の規格は口径8～13cmで高さ10cm前後の小型(106・119・213)、口径12～19cmで高さ14～23cm前後の中型(123・155・216)、口径21～26cm高さ27～40cm前後の大型(120・122)、口径27cmで高さが47cmほどの特大(209)がある(第36図)。小・中型を中心として他のサイズは少ない。台付甕は小型が多い。



第35図 弥生時代中期後半土器の器種分類



第36図 弥生中期後半の壺・甕法量分布

整形はハケ調整後、胴部外面下半と内面をミガキ調整、口縁外面はナデ調整する。文様は胴部外面上部と頸部・口縁に帯状に施される。施文は櫛描文、縄文、沈線文がある。櫛描文には縦羽状文(120)、横羽状文(122)、格子文(82)、波状文(123・216)、連弧文(155)があり、縄文は縄文のみ(213)と、縄文・沈線文のコの字重ね文(130・133)、沈線文のみのコ字重ね文(106)がある。壺では胴部文様に櫛描文と沈線文・縄文を併用するものが少なく、甕も胴部文様は櫛描文主体と縄文・沈線文主体に分かれるが、わずかに152のような胴部に縄文地文の上にコ字重ね文を櫛描文で施した例もある。ただし、胴部に櫛描文を施し、受口口縁外面に縄文・沈線文、口唇部に縄文を用いるものや、縄文と沈線文を用いるコ字重ね文でも頸部に櫛描波状文、平行文、波状文を施すものなど、部位を限って併用するものはある。このコ字重ね文と縄文の甕は小・中型サイズに多く、櫛描文は小～大型・特大サイズに認められる。他に82のような口唇部のみ縄文を施し、胴部は何も文様を施さないものもある。

高杯・鉢 高杯は破片を含めてもわずかしかない。脚内面を除いて赤彩される(228)。鉢も少ないがバラエティーに富み、内湾ぎみに斜めに胴部が立ち上がる逆台形のもの(95)、口縁部に縄文・沈線文を施し、胴部が赤彩されるもの(239)、甕に類似した器形で、受口口縁で外面が赤彩されるもの(135)、壺と類似文様が施されるもの(163・231)がある。甕と類似する器形の214・222は鉢の可能性もある。また、破片でミガキ調整が判然としない225・234は鉢でなく、甕の可能性もある。

甗 底部に1孔穿孔された鉢形土器で、有孔鉢とも呼ばれ、本遺跡では少量出土した。煮炊きに使用された痕跡は不明で用途は特定し得ないが、ここでは形状から甗と呼称しておく。小型鉢と同様の器形の85・233、大型230・232があり、230は外面1カ所に木口の角を用いた縦方向の3列の刺突文がある。整形はハケ調整後にミガキ調整するが、230は外面ミガキ調整が確認できなかった。

蓋 出土はわずかで121と151のみ図示し得た。甕の蓋と思われるが、甕の出土数に比して極端に少ない。器形は弥生時代後期の蓋同様に、横断面は口縁が強く開いた低い山形で、頂部は摘み状に形づくられている。これ以外の無頸壺の蓋と思われる円形の蓋は出土していない。

ミニチュア土器 227の甕と思われるミニチュア土器が出土したが、他に識別できたものはない。甕同様に内面はミガキ調整される。

ウ 個別出土例

遺物集中出土の比較的遺存良好な土器を選択して図示した。なお、以下に掲載する土器破片数や重量は接合後のものであり、接合破片はより大きな破片の個体に帰属させた。個体数はあくまでも推定値である。

川久保 SQ09 (第37図 PL32)

壺2片2個体1.291g(76・77)、甕1片1個体1.590g(78)、鉢1片1個体373g(79)、高杯1片1個体150g(80)が出土し、すべて図示した。口縁4/8遺存は甕1個体(78)、鉢1個体(79)で、他は1/8以下である。77は胴部無文、76は頸部上部まで施文する壺、78・79はコの字重ね文の甕と鉢である。

川久保 SQ10 (第37図 PL32)

壺3片3個体464g、甕11片4個体1.720g、甕1片1個体193gが出土し、壺1個体400g(83)、甕3個体1.350g(81・82・84)、甕1個体193g(85)の合計1.943g、出土土器の81.7%を図示した。口縁遺存8/8は1個体(83)、7/8が1個体(81)あるが、全体的に遺存状態は悪い。83は頸部に沈線と刺突文を施す壺、84が無文、81が櫛描縦羽状文、82が同格子文の甕である。

川久保 SQ11 (第37・38図 PL32)

壺37片8個体1.804g、甕52片11個体2.186g、台付甕1片1個体347g、鉢1片1個体184g、不明土器15gがある。壺4個体1.561g(86・89～91)、甕4個体2.029g(87・88・92～93)、台付甕1個体347g(94)、鉢1個体184g(95)の合計4.121g、重量比91.2%を図示した。口縁遺存7/8以上は壺3個体(86・89・91)、台付甕1個体(94)、4/8遺存は図示以外の壺1個体、鉢1個体(95)で、他は3/8以下である。隣のSQ12と接合した破片はない。91は胴部無文の壺、甕は87が櫛描波状文、93が同縦羽状文、92が同横羽状文で、88・94は縄文を施す。

川久保 SQ12 (第38・39図 PL32・33)

壺36片8個体12.191gが出土し、35片7個体12.186g(96～102)を図示した。他に鉢・高杯1片1個体2gがある。隣のSQ11と接合した破片はないが、SQ16の127と破片が接合した。壺97～99は頸部と胴部に沈線文、100・101は頸部に沈線文を施し、102は胴部に縄文・沈線文を施す。96は赤彩される。口縁遺存8/8が4個体(97・98・100・101)、5/8が1個体(102)がある。

川久保 SQ13 (第39図 PL33)

壺6片5個体1.055g、甕2片2個体260g、古墳時代前期器台31gが出土した。壺3個体1.007g(103～105)、甕1個体240g(106)の合計1.247g、出土土器の重量比94.8%を図示した。壺103と甕106のみ口縁8/8遺存、壺104は3/8遺存で、他はそれ以下である。壺104は口縁に貼付文があり、106は沈線文のコの字重ね文の甕である。

川久保 SQ14 (第39図)

壺10片2個体454g、甕34片6個体630gが出土し、壺1個体440g(107)、甕2個体491g(108・109)の合計931g、出土土器重量比85.9%を図示した。口縁遺存5/8は壺1個体(107)、甕1個体(108)あるが、全体形が窺える個体は少なく、他は1/8以下の遺存である。107は頸部に平行沈線文と木口の刺突文を加える。108・109はコの字重ね文の甕である。

川久保 SQ15 (第39～41図 PL33・34)

壺71片16個体12.808g、甕46片4個体5.973g、鉢1片1個体954g、蓋1片1個体358gが出土した。図示したのは壺8個体12.043g(110～117)、甕4個体5.973g(119・120・122・123)、蓋1個体358g(121)、鉢1個体954g(118)の合計19.328gで、出土土器重量比96.2%に当たる。口縁遺存

5/8以上は壺5個体(111~113・115・116)、甕2個体(120・123)、蓋1個体(121)、鉢1個体(118)で、3/8遺存が甕2個体(119・122)があるが、他は小片である。SQ16の136に本跡周辺の破片が接合した。壺で頸部~胴部施文のもので櫛描文の115と縄文・沈線文の114があり、頸部と胴部施文は縄文・沈線文の110・113、櫛描文を加える116がある。他に赤彩される112と胴部無文の117がある。甕は櫛描文の119・123の波状文、120の縦羽状文、122の横羽状文がある。

川久保SQ16 (第41・42図 PL34・35)

壺72片31個体14,428g、甕6片4個体1,006g、鉢9片1個体334g、鉢・高杯1片1個体20g、不明土器133gが出土した。遺存良好な土器が多く、このうち壺10個体13,902g(124~129・131・132・136・137)、甕3個体703g(130・133・134)、鉢1個体334g(135)の合計14,939g、出土土器の重量比94.6%を图示した。127にSQ12、136にSQ15出土の破片が接合した。壺は頸部~胴部を施文するものに縄文・沈線文の129、懸垂舌状文137があり、頸部と胴部施文のものでは胴部下半に縄文・沈線文の125・128、沈線文のみ127・131・132、櫛描文を加える136がある。甕は130・133の縄文・沈線文の口の字重ね文、134の櫛描波状文がある。鉢135は赤彩される。口縁遺存8/8は4個体(124・129・131・136)、6/8は2個体(127・137)、5/8が1個体(128)がある。

川久保SQ17 (第43図)

壺123片43個体5,748g、甕18片8個体1,405g、高杯4片4個体56g、鉢・高杯2片1個体22g、不明土器20gが出土した。图示したのは壺6個体3,741g(138~142・144)、甕2個体709g(143・145)の合計4,450gで出土土器の重量比61.5%にあたる。口縁遺存5/8以上は壺2個体(138・141)しかなく、4/8遺存が壺1個体(140)があるが、他は2/8以下の遺存である。遺存度が低いものが多く、图示し得た土器比率も低い。本跡出土破片の一部はSQ16・20と接合した。全体的に遺存不良で推定個体数も多く、洪水等で移動した破片も含まれると思われる。壺は頸部~胴部施文のものに縄文・沈線文の141、頸部と胴部施文のものに胴部下半に櫛描文を施す138がある。他は破片で全体形が不明である。

川久保SQ18 (第43・44図 PL35)

壺14片4個体1,403g、甕20片3個体2,571g、鉢6片1個体118g、蓋1片1個体213gが出土した。图示したのは壺2個体1,378g(146・147)、甕3個体2,571g(148・149・152)、鉢1個体118g(150)、蓋1個体213g(151)、の合計4,280gで出土土器の重量比99.4%にあたる。口縁遺存5/8以上は壺1個体(147)、鉢1個体(150)、蓋1個体(151)、3/8遺存が甕2個体(149・152)がある。壺は全体が窺えるものはないが、頸部に懸垂舌状文を施す147がある。甕は櫛描縦羽状文148・149と口の字重ね文152がある。鉢150は浅い器体で赤彩されない。

川久保SQ19 (第44図PL35)

壺11片10個体1,586g、甕8片5個体2,794g、不明土器12g、古墳時代土師器172gが出土した。古墳時代土師器は小片で断定はできない。このうち壺2個体1,501g(153・154)、甕5個体2,794g(155~159)の合計4,295gで、出土弥生土器の重量比98.1%を图示した。壺は頸部から胴部施文のものに沈線文153、頸部と胴部施文のもので胴部下半に沈線文を施す154がある。甕は櫛描連弧文の155、波状文の156、縦羽状文の158がある。口縁遺存8/8が1個体(153)、4/8が1個体(155)がある。

川久保SQ20 (44・45図 PL35)

壺31片10個体4,757g、甕14片2個体2,100g、鉢3片3個体771g、不明土器16gが出土した。このうち壺3個体4,263g(160~162)、甕1個体1,916g(164)、鉢1個体750g(163)の合計6,929g、

出土土器重量比 90.8%を图示した。壺は頸部と胴部施文のものに沈線文のみ施す 162 がある。161 は SQ17 出土の破片が接合した。鉢は縄文と沈線文を施す 163、甕は櫛描縦羽状文の 164 がある。口縁遺存 8/8 は 1 個体 (163)、7/8 は 1 個体 (164)、6/8 は 1 個体 (161) がある。

川久保 SQ21 (第 45 図 PL36)

壺 54 片 14 個体 7,648g、甕 1 片 1 個体 6g、鉢 4 片 3 個体 221g、不明土器 4g が出土した。壺 7 個体 (165～171) の合計 7,379g で、出土土器重量比の 93.7%を图示した。口縁遺存 5/8 以上はほぼ円形の 167・171 を含む壺 4 個体 (167・168・170・171) があるが、鉢・甕は小片である。168 は NR03 出土破片が接合した。壺は、頸部と胴部施文のもので胴部下半に縄文・沈線文を施す 167、沈線文の 170 があり、頸部施文のものには縄文・沈線・刺突文の 166 と沈線文の 171 がある。他に赤彩される 165 がある。

川久保 SQ22 (第 46 図 PL36)

壺 14 片 6 個体 5,794g 出土し、このうち 4 個体 5,738g (172～175) を图示した。口縁遺存 5/8 以上は 2 個体 (172・174) あり、口縁を欠損するが、頸部 6/8 以上も 2 個体 (173・175) がある。壺は頸部～胴部施文の 173 は沈線文のみで、頸部と胴部施文の 172・175 も胴部下半に沈線文が施される。

川久保 NR03 (第 46～52 図 PL37～40)

NR03 から壺 286 片 118 個体 50,708g、甕 140 片 47 個体 22,131g、台付甕 1 片 1 個体 258g、鉢 5 片 5 個体 4,034g、鉢・高杯片 6 片 3 個体 99g、高杯 1 片 1 個体 215g、甕 15 片 3 個体 3,049g、不明土器 270g が出土した。このうち、壺 31 個体 46,954g (176～205・207)、甕 18 個体 21,276g (208～213・215～224・226・227)、台付甕 1 個体 258g (206)、鉢 4 個体 3,952g (214・225・229・231)、高杯 1 個体 215g (228)、甕 3 個体 3,049g (230・232・233) の合計 75,704g、出土土器の重量比 94.2%を图示した。このなかで口縁～頸部遺存度 5/8 以上は 176～178・180～192・194・195・197～199・205・206・208・209・213・215～220・222・225・227・231～233 がある。壺は、頸部から胴部施文のものに櫛描文・沈線の 177、沈線文のみ 187、縄文と沈線文の 205、刺突を加える 185 があり、頸部と胴部施文の壺では胴部下半に縄文・沈線文を施す 180～183・203 (・201)、沈線文のみ 184・186・195 がある。頸部のみ施文するものは 178・189・190・200・202 と 1 カ所懸垂舌状文を施す 194 があり、頸部文様は縄文・沈線文と沈線文のみがある。他に赤彩の壺 193、無文の壺 188 がある。179 は頸部が太く口縁が短い器形で、202 は平行沈線の記号がある。甕は櫛描文の縦羽状文 211・217・218、横羽状文 209・212・220、格子文 210、波状文 215・216・222・226、横線文 208 がある。縄文を施す甕は 213 と台付甕の 206、縄文・沈線文のコの字重ね文の 219・221、沈線のコの字重ね文に 214 がある。214・222 は鉢の可能性があり、222 は 1 カ所に縦の櫛描波状文が施される。鉢は縄文・沈線文の 229、沈線文の 231 がある。225 は甕かもしれない。甕は大型 230・232 と小型 223 がある。230 は 40m 以上離れた川久保 4 区の近世 SK27 出土破片が接合した。

上記以外の出土土器 (第 52・53 図 PL41)

川久保 2・4 区の微高地上 U 層や NR1b 内、宮沖遺跡から弥生時代中期後半の土器が少量出土したが、破片で遺存良好なものはないため一部のみ图示した。235 は薄い器壁で口径が広い壺、234・239・240・245 は鉢と思われる。宮沖遺跡では小片のみ出土し、宮沖 SD17 出土の 242・1・2 の壺を图示した。

エ 土器の特徴

弥生時代中期後半の栗林式土器は笹澤 浩 (笹澤 1996)、寺島孝典 (寺島 1999)、青木一男 (青木 1996)、費田 明 (費田 2000b)、石川日出志 (石川 2002) 氏等により、器種組成や器形、文様や装飾 (文

様)帯による編年案が示されている。これらの論考を参考に本遺跡土器の年代的位置を探ってみたい。

本遺跡の弥生中期後半の土器器種は壺、甕・台付甕、高杯、鉢、甕、蓋があるが、寺島氏は(寺島1999)、台付甕や山形の蓋の出現を中段階新相以後と捉えた。また、寺島氏は壺の器形は口縁部を引っ張り出すナデ調整により口縁は小型からラッパ状の広い口縁へ、胴部最大径が高い位置にある球胴から下がったイチジク形へ、甕は胴が張って口縁の屈曲が強いものへ変化し、受口口縁は中段階古相から出現するとしている。器形変化は相対的で、明瞭な指標としにくいだが、本遺跡の壺の胴部はイチジク形で、口縁がラッパ状に開き、甕は胴が張る。壺・甕の受口口縁や蓋の存在からも寺島氏の中段階新相以後とみられる。

次に文様の装飾帯(文様帯)を石川日出志氏の分類(石川2002)に対比すると、本遺跡出土の図化土器では頸部～胴部の装飾帯2・3・4・5が7個体、頸部上下が連続する2+4装飾帯が1個体、頸部と胴部の2・4・5装飾帯が25個体、頸部のみ2(2A)装飾帯が10個体、頸部～頸部中頃まで遺存する2・2Aか1・2・3装飾帯が3個体、文様なしが1個体、全面赤彩3個体、残りが不明である。装飾帯2・4・5の個体数が多い点は石川氏の栗林2式古段階にあたるが、石川氏が栗林2式古段階で例示した壺には装飾帯2+4に柳描横線や柳描工具の刺突で充填するものがあるが、本遺跡では柳描文を施す壺が少ない。また、本遺跡の壺では5装飾帯に沈線区画内を縄文で充填するものはなく、縄文地文の上に沈線と平行線や連弧文や重山形文、鋸歯文を描くものが多い。この沈線文は縄文を充填する区画を形づくるものではないためか、重三角文の中心の三角形は閉じずに、V字を重ねた連続波状文にみえるものがある。さらに、賛田氏の様相3(賛田2000b)、石川氏の3式に例示された松原遺跡(高速度)SK191出土土器では、口唇部と頸部は縄文が施されるが、胴部から縄文が喪失して5装飾(文様)帯は沈線文のみ施される。この対比から、壺の胴部文様は沈線区画内を縄文で充填するものから、縄文地文上に沈線文、沈線文のみへの変化とみられ、本遺跡例は後出する様相とみられる。しかしながら、受口口縁は内湾が緩やかとなっておらず、栗林3式まで下らないと思われる。なお、賛田氏は頸部文様帯(装飾帯)平行沈線下に付加的波状沈線を加える文様帯の分化を松原3段階以後(石川氏の3式)と捉えたが、本遺跡では川久保SQ21の167・199などが該当すると思われ、栗林2式新段階にもわずかに存在する可能性はある。

以上から、寺島氏の中段階新相、石川氏の2式新段階、賛田氏の松原2段階が本遺跡の中心だが、各氏が設定した段階内でも、より新しい時期を含む可能性がある。

(3) 弥生時代中期末～後期初頭の土器

ア 概要

弥生時代後期土器は川久保5区南部でもわずかに出土したが、ほぼ川久保2・4区、宮沖1・5区の2地点に多い。弥生時代後期土器は弥生時代後期初頭の吉田式土器、古墳時代前期初頭に残る箱清水式系土器の大きく2時期の土器がある。これ以外に弥生時代中期末頃から後期初頭と思われる栗林式系の土器がわずかにある。ここでは弥生時代中期末～後期初頭、後期初頭の土器を扱う。弥生後期の吉田式土器と箱清水式土器、それらと弥生時代中期後半の栗林式土器とは識別しにくい破片もあって、出土土器の計測では誤って識別したものもあると思われる。ただし、吉田式土器は川久保2区周辺からのみ出土し、宮沖遺跡の弥生時代後期土器はほぼ古墳時代前期初頭の箱清水式系土器と捉えられる。なお、川久保NR02から天王山式土器が1片出土した。

イ 器種

壺、甕、鉢、高杯がある。鉢と高杯の口縁部破片は識別しにくく、鉢・高杯と扱った。

壺 中期末か後期初頭頃の土器と思われる壺には、NR1b 出土の 16・21・24・39 がある。頸部は太く、口縁も外反が弱い。外面のミガキ調整も省略されるなど退化した栗林式土器の印象を受ける。後期初頭の吉田式壺には頸部に鋸歯状文を施す 19、頸部に細沈線が施される 20、口縁部が大きく開いて赤彩されない 41 がある。19・20 の沈線は細く鋭い。246・247 は口縁端部を面取して櫛描波状文を加え、頸部の内外面は赤彩される壺で、古墳時代前期にかかる可能性がある。

甕 吉田式の甕は 14・23・238～240 の中型品と、249 の小型品があるが、後者は台付甕の可能性がある。甕は、23・238・240 の屈曲が弱く長くのびた受口口縁で、頸部の屈曲が弱く胴部が緩やかな S 字を描くものと、237 の口縁が短く折れる栗林式甕と類似する器形がある。前者は口縁まで櫛描波状文が施されるが、後者の口縁には波状文が施されない。両者が川久保 SB13 から出土した。いずれもハケ調整後に内面と外面胴部下半をミガキ調整し、頸部に靡状文、口縁と胴部に波状文を施す。23 のように胴部に沈線で鋸歯文を描くものもある。この櫛描文には、時計まわりに連続した畿内型類似櫛描文の 23・238・240 と、短く途切れる中部高地型櫛描文 14・239 がある。後者は口縁が短い甕に多いように思われるが、出土数が少なく断定はできない。頸部の靡状文は等間隔と、短・長の組み合わせがあり、加えて 1 段と 2 段のものがある。胴部の鋸歯文は細く鋭い刃幅の狭い施文具による。

鉢・高杯 当該期の可能性がある高杯に NR1b の 8 層出土の 17 がある。脚は細長く赤彩される。鉢は NR1b の 18、NR02 の 38 を図示した。

天王山式土器 40 の天王山式甕と思われる破片 1 片 16g が出土した。胎土は灰白色で 1mm 前後の白色砂粒を含み、本遺跡の弥生土器と異なる色調・胎土である。甕口縁部と思われる破片で、横位の沈線に刺突を加える。小片で口径の推定は不安がある。また、間隔を開けた燃糸文を施す土器 (243・244) も東北地方の弥生時代後期頃の土器の可能性もある。胎土は本遺跡の土器と類似する。

ウ 個別出土事例

川久保 SB13 (第 53 図 PL41)

甕のみ 6 片 3 個体 1,455g と不明土器 11g が出土し、甕 3 個体 1,455g (236～238) を図示した。いずれも口縁遺存 6/8 以上である。他器種は出土していない。崩れた受口口縁で畿内型櫛描波状文が施される 236・238 と、栗林式期に通行の口縁が短く折れる器形で中部高地型櫛描波状文を施す 237 がある。

川久保 NR1b 8・9 層 (第 16・17 図 PL41)

NR1b の底面近くの 8・9 層から、弥生時代中期後半の土器 1,986g、中期末頃か後期初頭と思われる壺 42 片 3 個体 2,439g、後期初頭の吉田式土器 4,227g、古墳時代前期と思われる土器片 65g、弥生土器とのみ識別し得た土器 188g、不明土器 79g が出土した。吉田式土器は壺 104 片 5 個体 3,299g、甕 12 片 2 個体 739g、高杯 1 片 1 個体 189g があり、口縁遺存 5/8 以上は甕 1 個体 (14)、4/8 遺存は壺 2 個体 (21・24) がある。吉田式壺は破片数が多いが個体数は少ない。このうち、高杯 1 個体 189g (17)、壺 2 個体 3,239g (19・20)、甕 1 個体 710g (14)、弥生時代中期末と思われる壺 3 個体 2,439g (16・21・24)、弥生時代中期後半の鉢 1 個体 127g (18) を図示した。弥生時代中期末～後期初頭土器の重量比で 98.7% に相当する。

川久保 NR02 (第 17 図 PL41)

縄文時代～近代の土器が出土しているが、4 層を中心に弥生時代中期後半の土器 2,719g、弥生時代後期初頭の土器 854g、弥生時代としか識別できない土器 2,562g が出土した。弥生時代後期土器は吉田式

土器が壺 14 片 10 個体 276g、甕 9 片 6 個体 243g、高杯 5 片 4 個体 319g、天王山式の甕 1 片 1 個体 16g がある。出土量は多いが、口縁遺存 3/8 以下しかない。なお、天王山式土器は 2 層から出土した。鉢 1 個体 187g (38)、弥生時代後期甕 1 個体 27g (37)、同壺 1 個体 50g (41) 天王山式土器甕 1 個体 16g (40)、弥生時代中期壺 1 個体 76g (39)、同甕 1 個体 59g (43) を図示し、出土弥生時代後期土器の重量比 10.9% に相当する。

上記以外の土器 (第 53 図)

遺構外や他時代遺構に混入して出土した弥生時代後期土器が少量ある。弥生時代後期土器は、宮沖遺跡のものは古墳時代前期とみられるが、川久保遺跡は吉田式土器と古墳時代前期にかかる箱清水式土器が混在し、破片では識別できない。ここでは吉田式土器と詳細な時期不明の箱清水式土器を掲載した。246・247 は面取した口縁端部に櫛描波状文を加え、口縁部内外面が赤彩される。古墳時代前期の可能性がある。248 は口唇部を面取する小型甕か台付甕、249 は鋸歯文を施す吉田式の小型甕か台付甕と思われる。

エ 土器の特徴

弥生時代中期末頃から後期初頭と捉えた土器は編年的な位置づけを明らかにし得なかったが、弥生時代後期初頭の吉田式土器は確認できた。その甕は頸部臙状文より上の口縁部に櫛描波状文を数段施し、吉田式土器でも後出するとみられる。青木一男氏の編年(青木 1998a)を参照すれば 2 段階に当たろう。この吉田式土器は弥生時代中期後半の栗林式土器に後続し、後期の箱清水式土器と共通する特徴をより強く持ち合わせるから箱清水式土器の一段階と捉える考えもある。しかし、千野 浩氏は吉田式の甕内面のケズリ技法と、畿内型類似の櫛描波状文の存在などを指摘し、吉田式土器を箱清水式に含めてしまう点に慎重な議論が必要とする(千野 2001)。さらに、青木和明氏は後期箱清水式の高杯の成立に畿内第 V 様式との関係に触れ(青木 1988)、田島明人氏も吉田式と箱清水式の土器画期に注目している(田島 2009)。

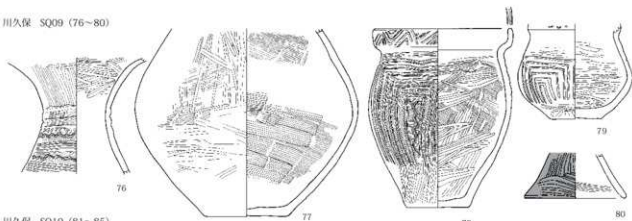
ここでは吉田式の成立・画期に関する問題は触れられないが、本遺跡出土土器では千野氏が指摘する甕内面のケズリ技法は捉えられなかったものの、畿内型類似櫛描波状文の一定の存在や、天王山式土器出土から東北地方との交流の可能性は捉えられた。この天王山式については長野県内でもいくつか出土例があり(石川 2000)、本遺跡出土例から信濃川沿いのルートでの伝播が裏付けられたと思われる。ただし畿内型類似の櫛描文は栗林式にも存在が知られており、信濃内での継続性の可能性について課題は残る。

4 弥生時代のまとめ

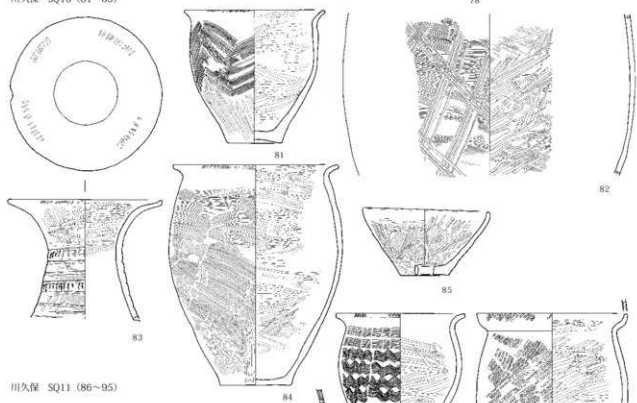
本遺跡の弥生時代の様相を北信地域の弥生時代遺跡の動向と合わせて整理してみたい。

千曲市屋代遺跡群では縄文時代晩期に自然堤防が固定し、弥生時代中期前半頃に抜根後の焼却処理遺構とみられる土坑が認められ、開墾作業が開始されたと捉えられている(寺内 1998)。この開墾に伴う焼却処理土坑は弥生時代の広い耕地開発に伴う象徴的遺構とみられる。川久保遺跡も縄文時代晩期までに離水し、屋代遺跡群と類似した焼土・炭化物を伴う土坑の検出から同様の開墾活動が始まったと推測される。その時期は川久保 SK51 出土の炭化材 ^{14}C 年代測定結果から、 $2710 \pm 30\text{yr.B.P.}$ (添付 DVD 参照)の縄文時代晩期の可能性が知られた(小林 2008・中沢 2008)。中山誠二氏は中部高地では、弥生時代前期の埋没河川などを利用した非灌漑型小規模水田、中期前半からの水路を伴う灌漑型の水田への変化を捉えており(中山 2009)、この説によれば本遺跡の開墾活動は灌漑型水田の造成を目的とした可能性が浮かぶ。弥生時代中期後半の川久保 SD18 が川久保 SF06 や同 Pit160 などの焼土跡を切る点も、弥生時代中期後

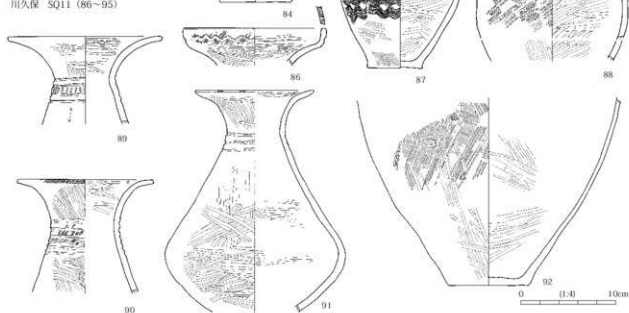
川久保 SQ09 (76~80)



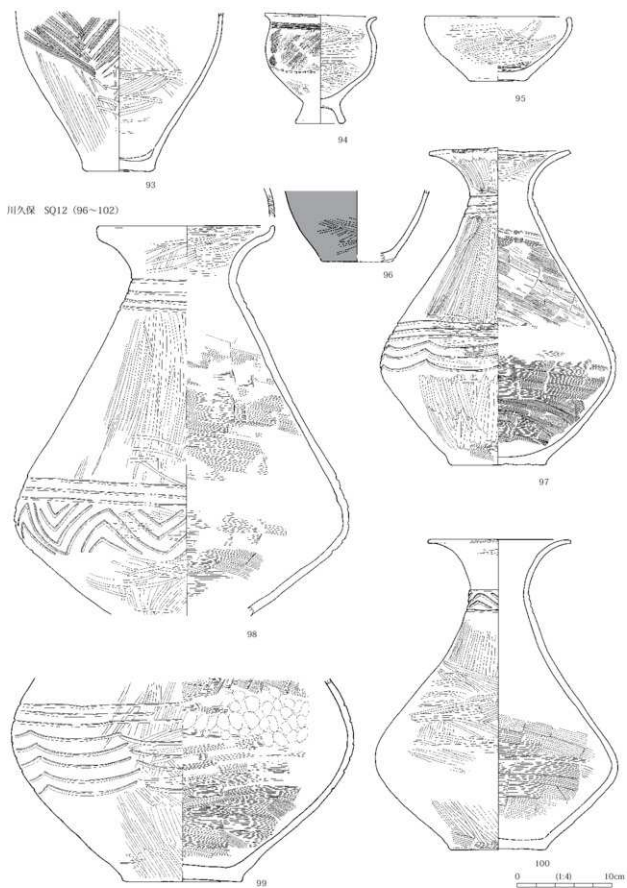
川久保 SQ10 (81~85)



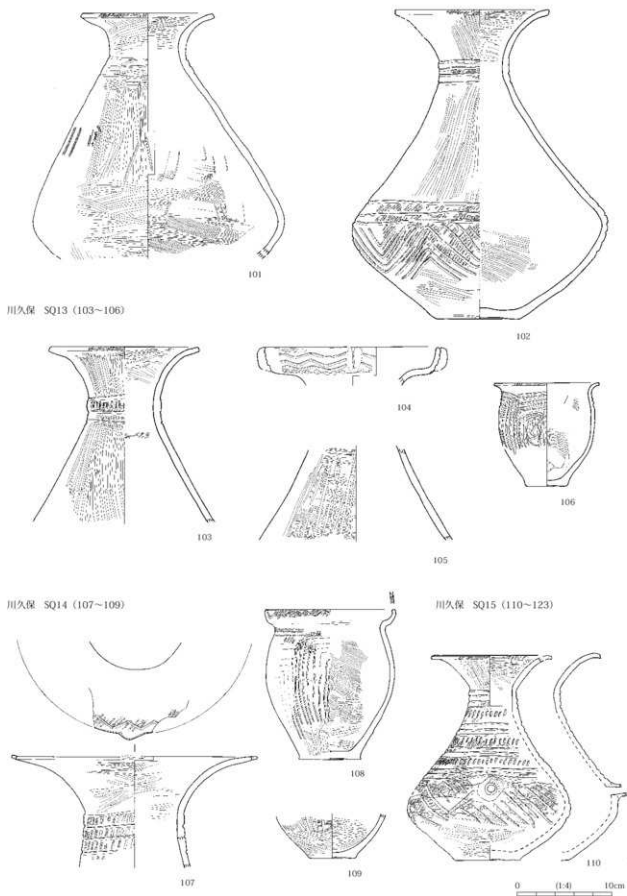
川久保 SQ11 (86~95)



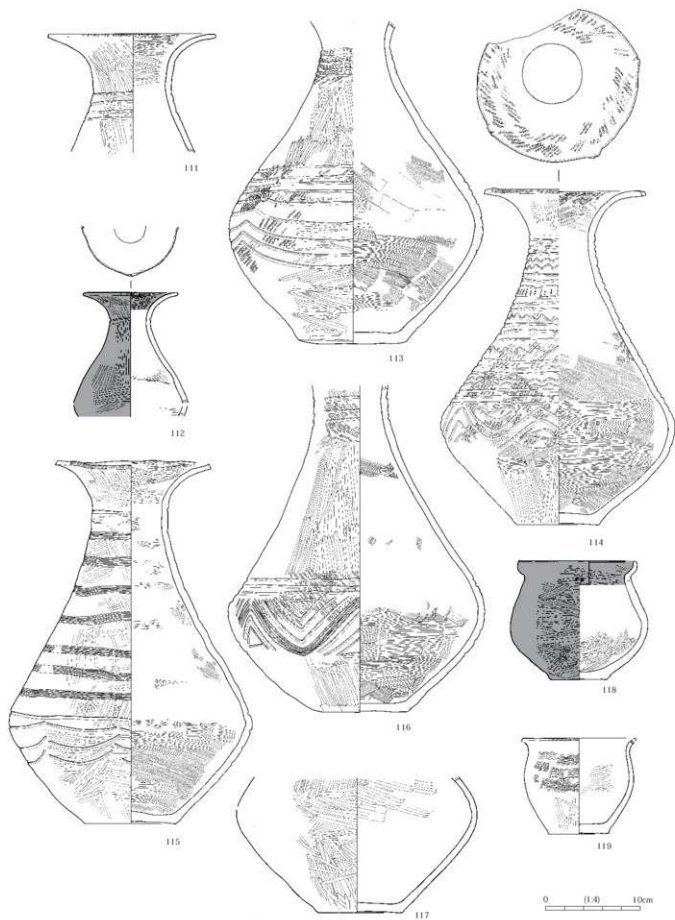
第37図 弥生時代中期後半土器1



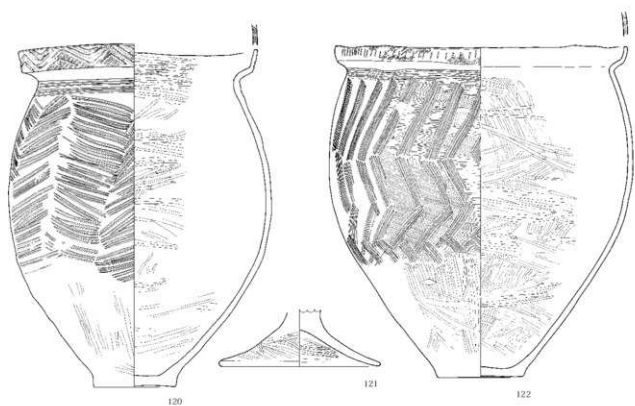
第38図 弥生時代中期後半土器2



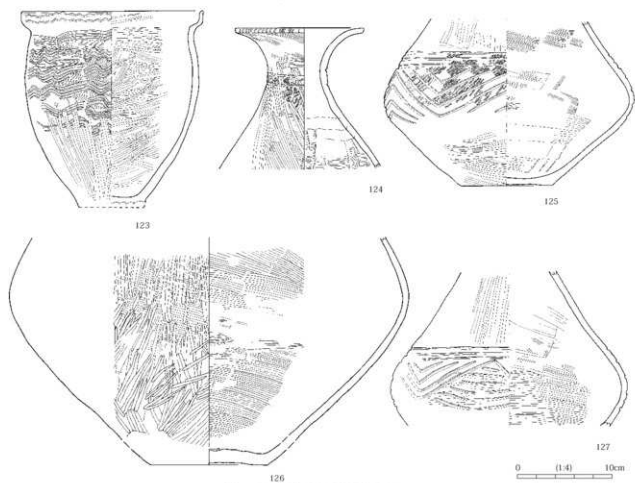
第39図 弥生時代中期後半土器3



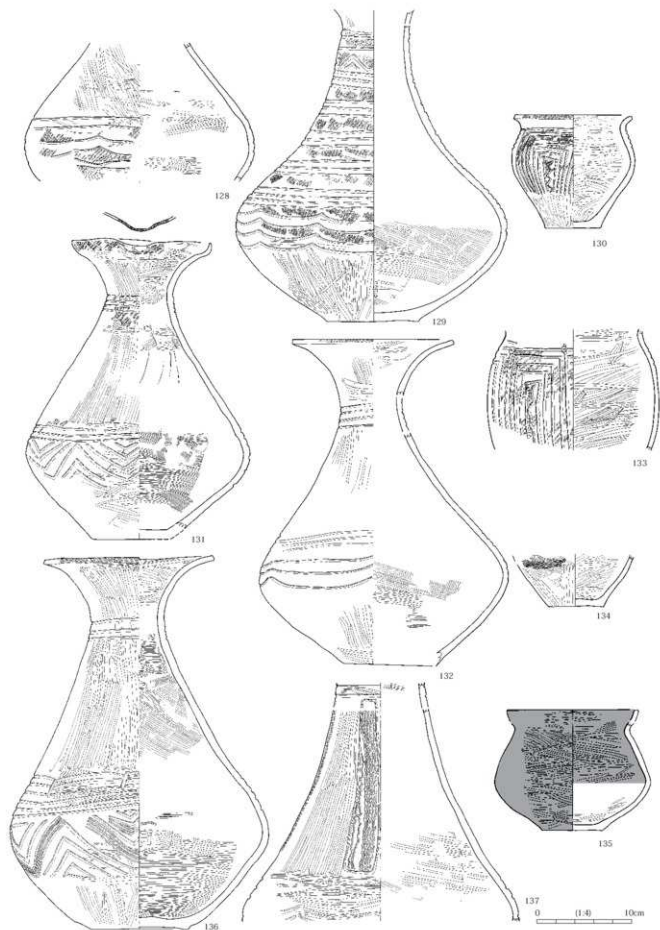
第40図 弥生時代中期後半土器4



川久保 SQ16 (124~137)

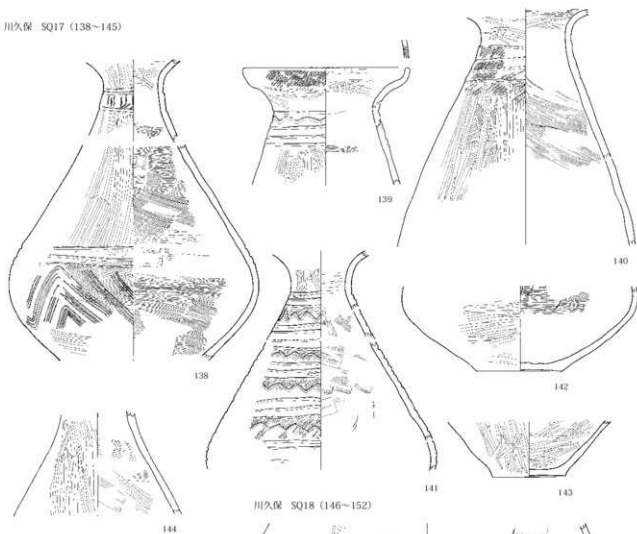


第41図 弥生時代中期後半土器5

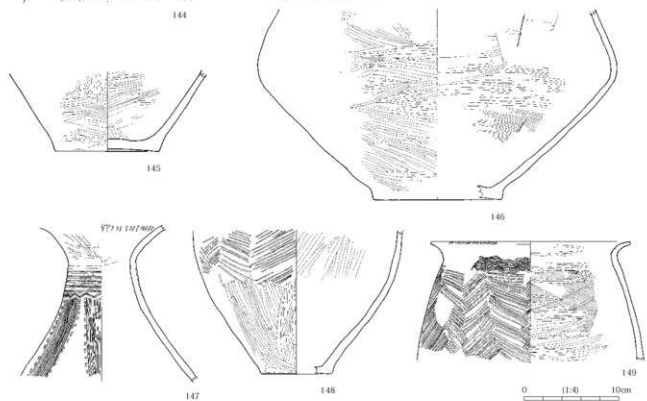


第42図 弥生時代中期後半土器6

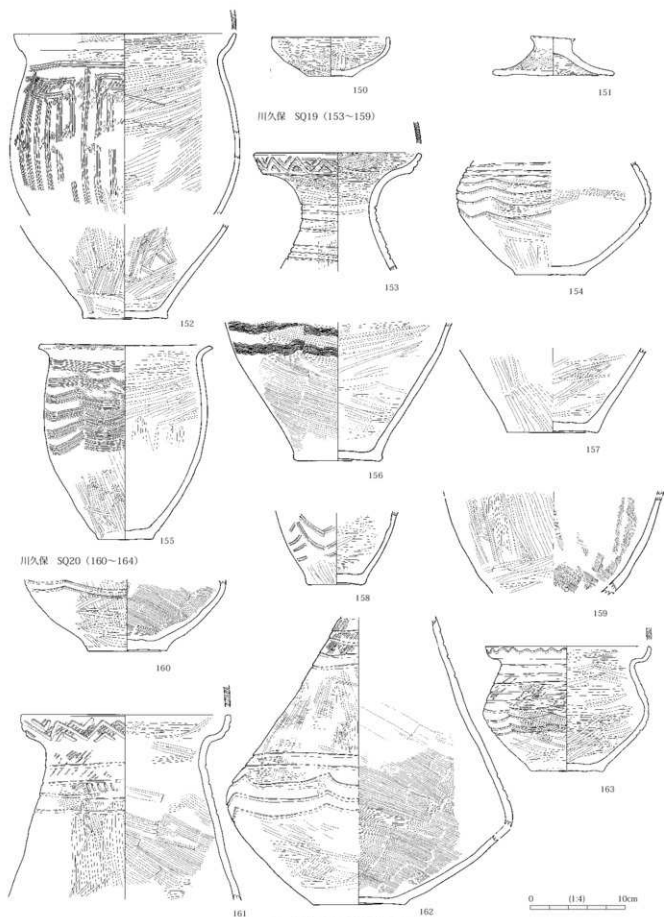
川久保 SQ17 (138~145)



川久保 SQ18 (146~152)



第43図 弥生時代中期後半土器7

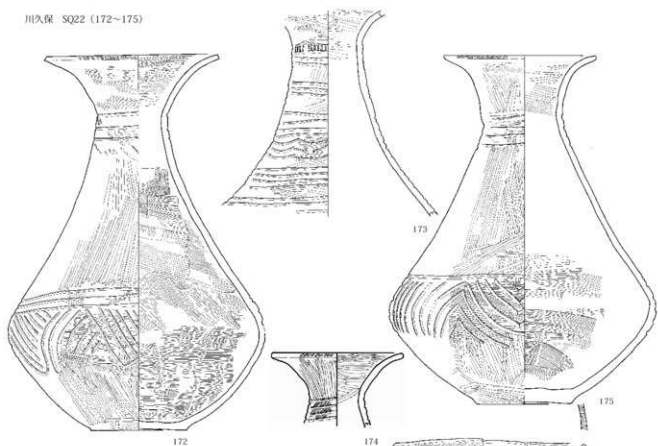


第44図 弥生時代中期後半土器8

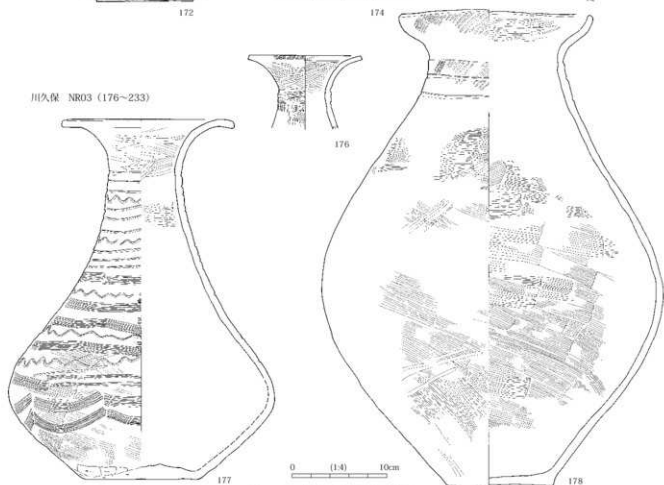


第45図 弥生時代中期後半土器9

川久保 SQ22 (172~175)



川久保 NR03 (176~233)

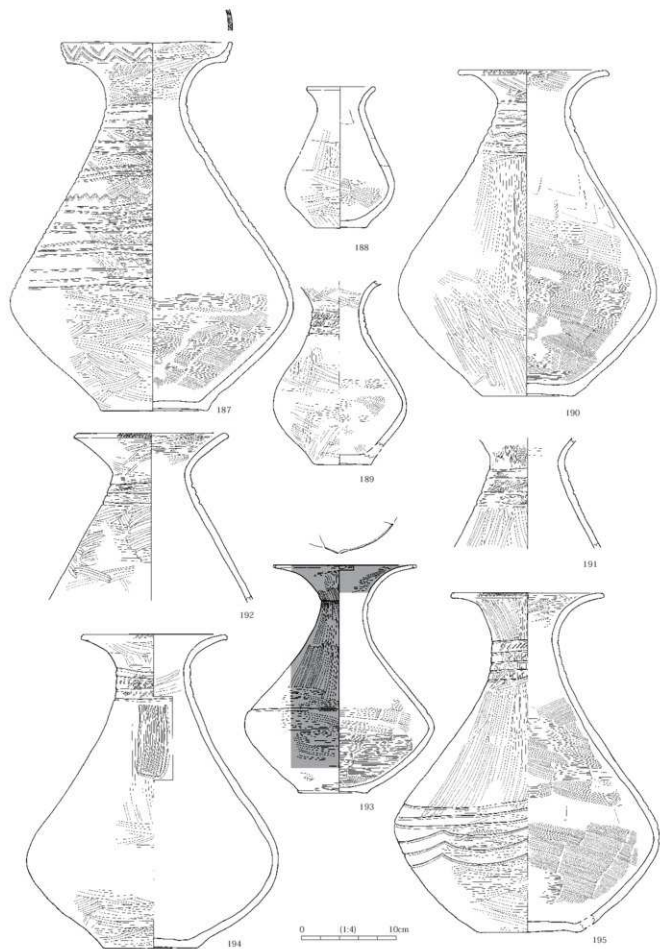


0 (1:4) 10cm

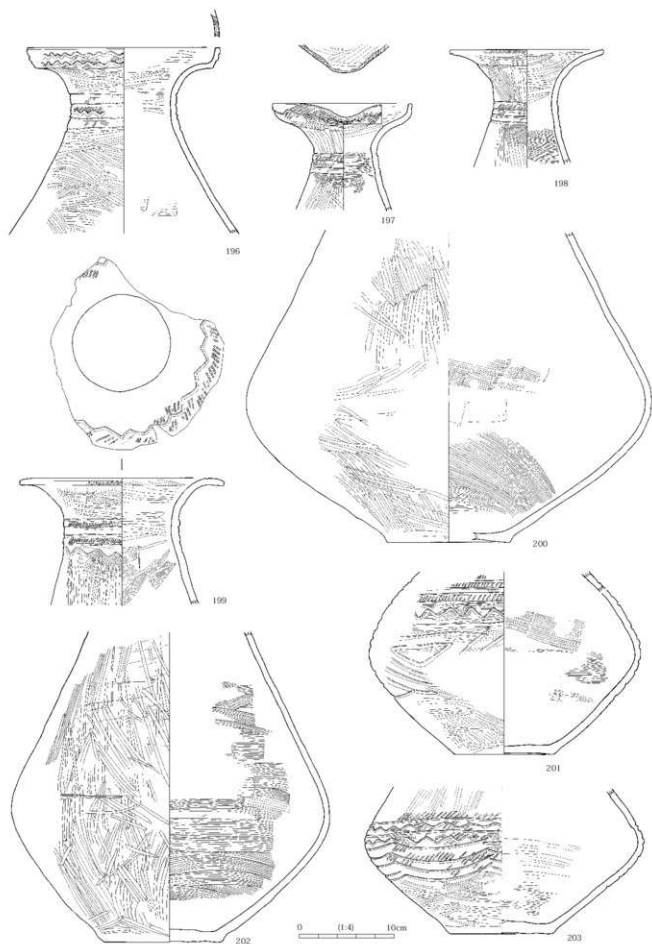
第46図 弥生時代中期後半土器 10



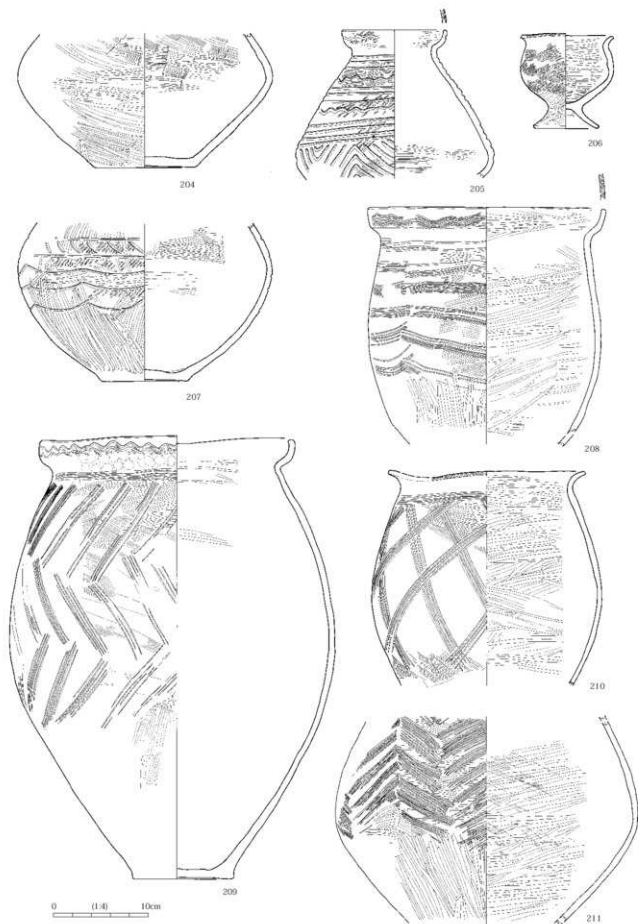
第47図 弥生時代中期後半土器 11



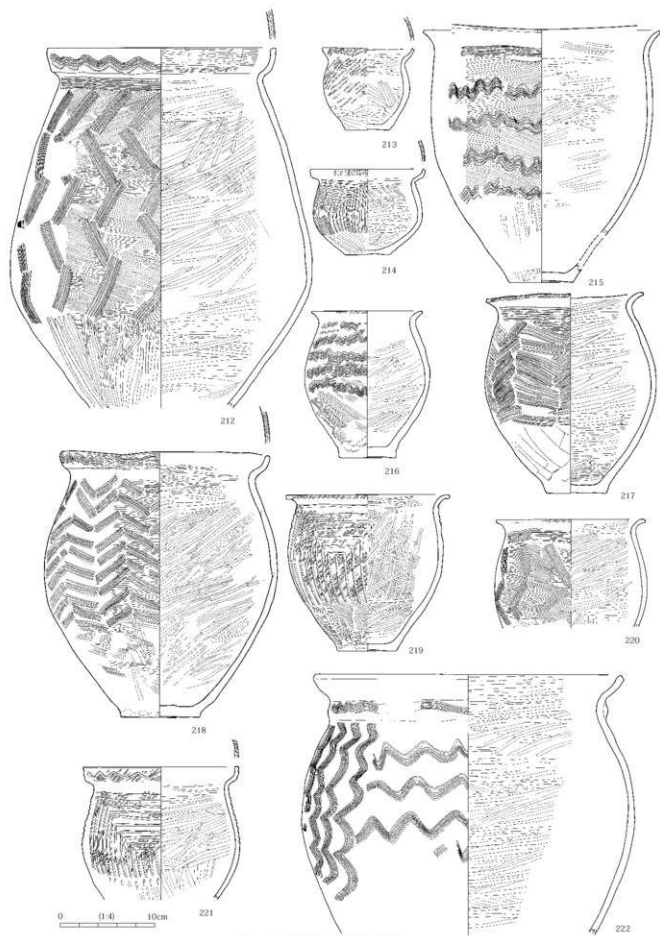
第48図 弥生時代中期後半土器 12



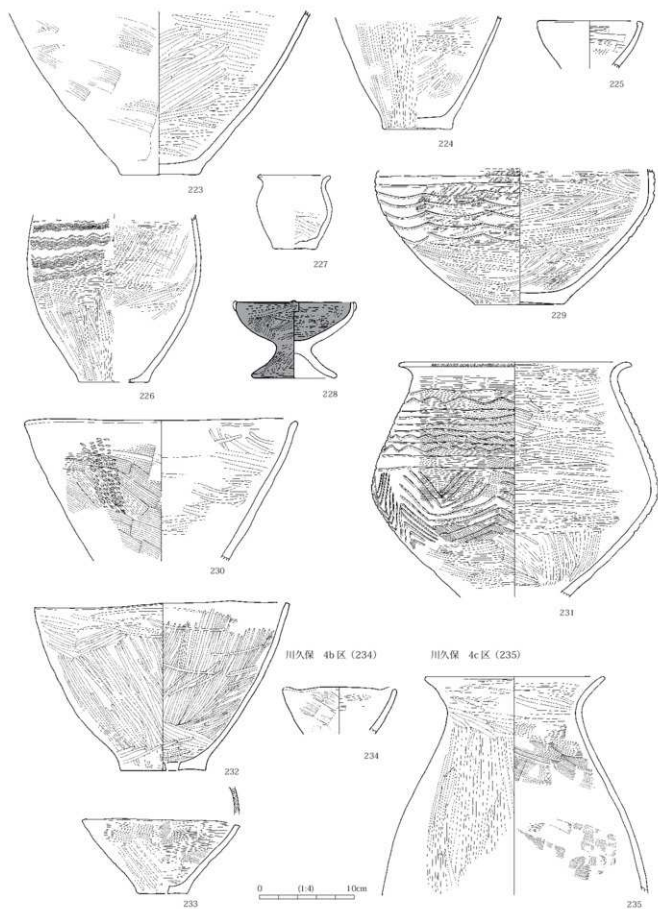
第49図 弥生時代中期後半土器13



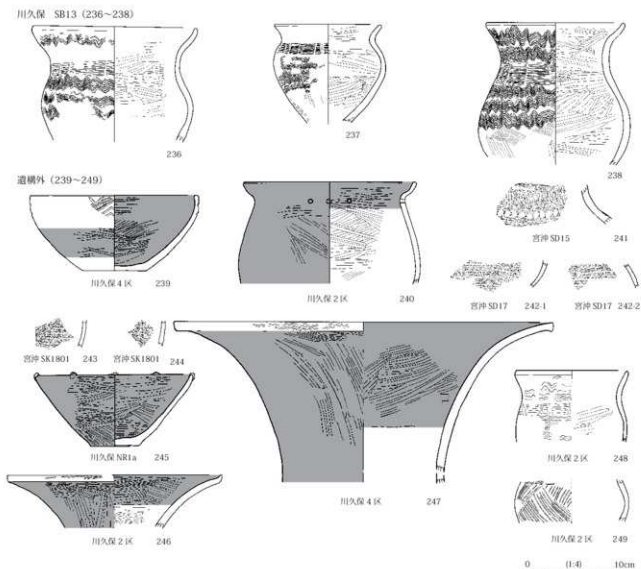
第50図 弥生時代中期後半土器14



第51図 弥生時代中期後半土器15



第52図 弥生時代中期後半土器 16



第53図 弥生時代後期土器・他地区出土の弥生土器

半の開墾活動が行われた可能性を示すと思われる。先の ^{14}C 測定年代から水田と無関係の古い開墾活動があったとも考えられるが、ここでは一つの可能性として弥生時代中期後半の開墾開始を推測しておきたい。

この焼土跡や焼土を伴う土坑は川久保2・4区の微高地に多く認められ、広範囲に樹木の伐採が行われた可能性が窺えた。微高地上では畑跡も捉えられず、具体的な土地利用状況は明らかにし得なかったが、微高地周辺は、弥生時代中期後半の土器集中が検出され、微高地上でなんらかの遺跡居住者の活動が行われたことが知られた。石器など生産具が検出されず、出土土器も生活器材の廃棄とは考えにくいことから居住の場ではないと思われる。完形の土器を残す特殊な行為から祭祀活動とも考えたが、断定できる根拠は得られず、活動内容は明らかにし得なかった。この土器集中の土器は石川日出志氏編年の栗林2式新段階頃(石川2002)と捉えられ、この頃には遺跡居住者が水田を営んでいたと捉えられる。

本遺跡周辺では本遺跡出現以前に飯山市の小泉、上野遺跡、中野市栗林遺跡などの遺跡が存在するが、本遺跡の栗林2式新段階頃には飯山市周辺の遺跡が減少し、一方で長野市周辺では遺跡数が増加して松原遺跡のような大規模集落も出現している(馬場2007)。この時期には一見矛盾するような居住遺跡の分

散と集中が認められるが、馬場伸一郎氏はこの栗林2式新段階が水田稲作を基幹生業とした時期と捉え、その水田経営や造成を支える木材伐採・加工具としての石斧の集約的手工業生産として大規模集落の出現、そして流通網の整備を想定している。本遺跡に水田跡が存在した可能性からは、馬場氏の想定した水田耕作に立脚した遺跡の一つと捉えられ、当該期の稲作本格化と居住遺跡の拡散するなかで出現したと思われる。その水田規模から本遺跡の集団規模は小さいと思われる。

ところで、中野市周辺の栗林式期の遺跡は銅戈・銅鐙出土で有名な柳沢遺跡、栗林式土器の標式遺跡の栗林遺跡が本遺跡も含めて千曲川沿いに分布し、その立地背景に河川交通を想定する意見もある。しかし、下流側の飯山市、上流側の長野市北部では未発見なだけかもしれないが、千曲川沿いの遺跡は多くはない。さらに、石斧未製品出土から千曲川西岸の中俣・水内坐一元神社遺跡と石材産出する千曲川東岸の榎田周辺の関係を想定した馬場伸一郎氏の説（馬場 2009）によるならば、千曲川近くに立地する長野市北部の遺跡は千曲川を渡河地点にあたるともみられ、河川交通より陸路が主流とも思われる。そうしたことから、千曲川沿いに遺跡が分布するのは川沿いの低地での水田耕作によると思われる。それを可能にしたのは大規模洪水が少ない環境もあったと思われる。

この栗林2式新段階以後の本遺跡の様相は不明瞭で、弥生時代中期末～後期初頭と思われる土器が少量採取されたが、後期との連続関係は明らかにし得なかった。そのなかで後期初頭に大きな洪水に遭っている可能性が知られた。類似時期の洪水は長野市松原遺跡の弥生時代中期遺構を埋めるV層が知られる。時期は弥生時代後期前葉～後期中葉の間とされ（県埋文2000c）、本遺跡の浸食地形NR1bの下層8・9層出土土器は青木一男氏の弥生時代後期2段階にあたるので、松原遺跡の洪水は本遺跡例より古い可能性がある。他に類似時期の洪水に長野市川田条里遺跡のE区第4水田跡とD区第6水田跡を被覆する洪水（河西2000）がある。松原遺跡V層や本遺跡例は大きな洪水と思われるが、川田条里遺跡の洪水は全域には及ばない小規模のものである。本遺跡の洪水と同じものは特定し得なかったが、洪水が多い時期だったのだろうか。

その後、弥生時代後期初頭には、川久保遺跡をはじめ、斑尾川対岸の千田遺跡でも竪穴住居跡が検出され、千曲川沿いに居住域が広がることが確認できた。そのなかで、当該期のものと思われる東北地方の天王山式土器が1点出土した。すでに長野市吉田高校グランド遺跡や松本市竹淵遺跡で出土が知られており、今回、本遺跡出土例が加わったことで流入ルートは千曲川沿いの可能性が知られた。吉田高校グランド遺跡では天王山式土器そのものと、吉田式土器の器形に天王山式の交互刺突を取り入れた中間のような土器が認められ、アメリカ石鐮の出土等からも吉田高校グランド遺跡では人間の移動が想定されている（千野2001）。本遺跡では天王山式土器の影響を受けた吉田式土器は出土しておらず、天王山式土器を携えた人々が定住したとは言い切れない。ところで、青木一男氏は吉田式期の集落は情報量が少ないと断りながら、善光寺平南部では弥生時代後期1～2期の集落はなかなか検出されていないと述べている（青木1998c）。近年、当該期の集落遺跡が中野市や長野市北部でみつかっており、遺跡分布は善光寺平北部に偏るようにも思われる。そうならば、やはり地理的に近い北陸や信濃川を通じての東北との交流も、吉田式土器の時期の様相を考える上で、視野に入れておくべきとも思われる。

第4節 古墳時代前期の遺構と遺物

1 古墳時代前期の概要（第54・55図）

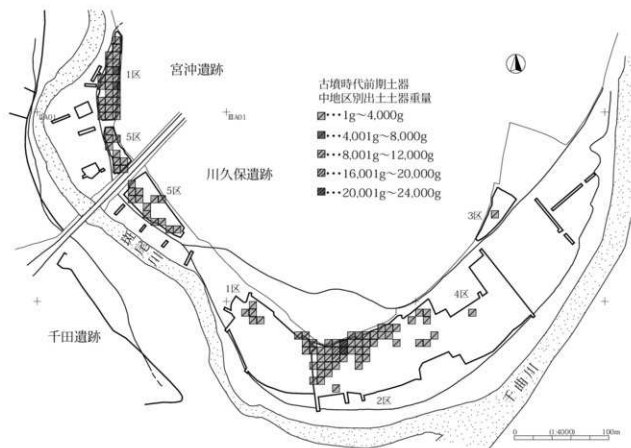
概要：古墳時代前期の遺構は、斑尾川上流側の宮沖1区で住居跡群、その下層や斑尾川下流の川久保1・2区の帯状窪地地形内で水田跡、さらに川久保2区の千曲川寄りで土器集中が検出された。宮沖遺跡は当該期から明確な遺構が確認される。これ以外の川久保3・4・5区でも土器は出土し、遺跡居住者の活動領域は段丘の広範囲に及ぶと思われる。当該期の地形は弥生時代と大きく変わらないが、古墳時代前期に堆積した基本土層Ⅳ層の洪水土層により、水田に利用されていたNR1aなどの帯状窪地地形が埋積される。それ以後も水田域は規模を縮小しながら維持されたが、古墳時代後期では段丘上の水田跡は確認されなかった。また、本遺跡周辺には類似時期の中野市牛出遺跡、粟林遺跡、安源寺遺跡などがあり、これらと本遺跡は関連すると思われるが、周辺遺跡より本遺跡の消滅時期はやや遅い。

検出面と土層：調査域内には複数の古墳時代前期の洪水土層が認められ、遺構検出面も複数面である。当該期は洪水が多発する不安定な環境とみられ、洪水で埋没し、造り替えられた川久保SD30・31・34の例からも、基本土層に残らない小規模洪水も多いと思われる。

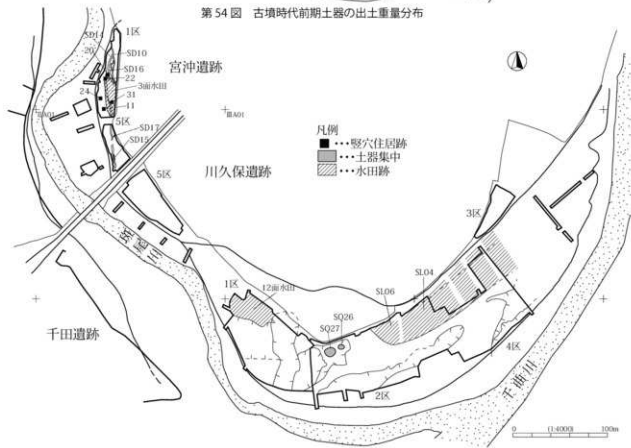
古墳時代前期の最上位にある洪水土層は川久保SL04を覆うⅢ6層の斑尾川土石流堆積層である。水を含む礫混土砂が滑走するように流水で運ばれたもので、Ⅲ6層は川久保2区NR1a内の限られた範囲に堆積する。その下には宮沖1区や川久保1・2区のNR1aやNR1bに堆積した洪水土層Ⅳ層がある。宮沖遺跡では上面で宮沖SB20・22・31とSK1801、SD10を検出し、川久保遺跡ではⅣ層上面検出の古墳時代前期の遺構はない。Ⅳ層下面では宮沖1区3面水田跡と宮沖SD14～17、川久保1区12面水田跡、川久保SL06、川久保SQ26・27が検出された。川久保1区12面水田跡と宮沖1区3面水田跡は離れた地点にあって出土遺物もなく、川久保2区Ⅳ層との対比が課題であった。宮沖1区では、Ⅳ層下の川久保SQ26・27より古相の土器を出土した宮沖SB11があるが、直接洪水土層との重複関係がなく、宮沖1区3面水田跡のSD16の造り替えと思われる宮沖SD10と川久保SQ26・27出土土器が近似時期とみられることから、宮沖1区3面を被覆する洪水土層をⅣ層と捉えた。また、川久保1区12面水田跡を覆う洪水土層は、竪穴住居跡との重複から古墳時代後期以前と知られ、他に類似時期の洪水土層がないためⅣ層に対比し得ると捉えた。このⅣ層が分布しない川久保2・4区ではⅤ層上面で川久保SD12～16・20・21・23やSD31・34、宮沖1・5区ではⅤ層上Ⅴ・Ⅵ層上面で宮沖SB11・24を検出した。川久保2・4区のⅤ層検出遺構には出土遺物がないため当該期と識別できなかった遺構が含まれている可能性がある。

2 古墳時代前期の遺構

竪穴住居跡は宮沖SB11・20・22・24・31の5軒、土坑は宮沖1区SK1801・1820と川久保2区SK50の3基、溝跡は川久保SL06に伴うSD30・31・34、関係すると思われる川久保SD12～16・20・21・23、宮沖1区3面水田跡関連の宮沖SD10・14～17の16条がある。水田跡は川久保SL04・06、同1区12面水田跡、宮沖1区3面水田跡、土器集中は川久保2区のNR1b内で検出した川久保SQ26・27がある。なお、宮沖SK1801は柱穴と思われる、認定し得なかった掘立柱建物跡が存在する可能性がある。



第54図 古墳時代前期土器の出土重量分布



第55図 古墳時代前期の主要遺構分布概略

(1) 竪穴住居跡 (第12表)

当該期の竪穴住居跡はすべて宮沖1区で検出され、IV層上面で宮沖SB20・22・31、V・Ⅷ層上面で宮沖SB11・24を検出した。平面形は方形で、床面中央付近に地床炉が認められる。

第12表 古墳時代前期竪穴住居跡一覧表

遺跡	SB	地区	グリッド	検出面	平面形	主軸方位	南北(m)	東西(m)	壁 深さ(cm)	床面	施設	カマド	炉
宮沖	11	1区	XVI V24・25、II B04・05	2面V・Ⅷ層	方形・長方形?	N14° W	5.1以上	5.1	直 10	軟弱	Pit1基?	中央北西よりある地床炉	60×40cmの楕円形
重複関係・備考 SB10、SD11、SK905～912・914・1609・1610・1810に切られる													
宮沖	20	1区	XVI V05	2面IV層	方形か長方形	N15° W	5.4	3.9以上	直 20	堅硬	Pit6基	中央東よりある地床炉	54×20cmの楕円形
重複関係・備考 SK1065～1073・1094～1096・1099・1235・1260～1262・1283・1362・1368・1371・1427、ST02・03、SB22に切られる													
宮沖	22	1区	XVI V05・09・10	2面IV層	方形か長方形	N38° E	6.5	4.3以上	直 20	堅硬	Pit2基	不明	ST02のPit1に切られたか
重複関係・備考 SB20を切り、SK1011・1012・1065・1256・1257・1369・1381・1402・1552、ST02・03に切られる													
宮沖	24	1区	XVI V19	2面V・Ⅷ層	方形	N10° W	3.2	2.7	直 10	軟弱	なし	なし	なし
重複関係・備考 SD11、SK917～920・1557・1596に切られる													
宮沖	31	1区	XVI W16・21	2面IV層	方形か長方形	N12° W	4.5以上	2.5以上	斜 10	堅硬	不明	不明	不明
重複関係・備考 SB06・09に切られ、床面検出のSK1795～1797が切るか													

宮沖SB11 1区2面 XVI V24・25、II B04・05 (第56図 PL6)

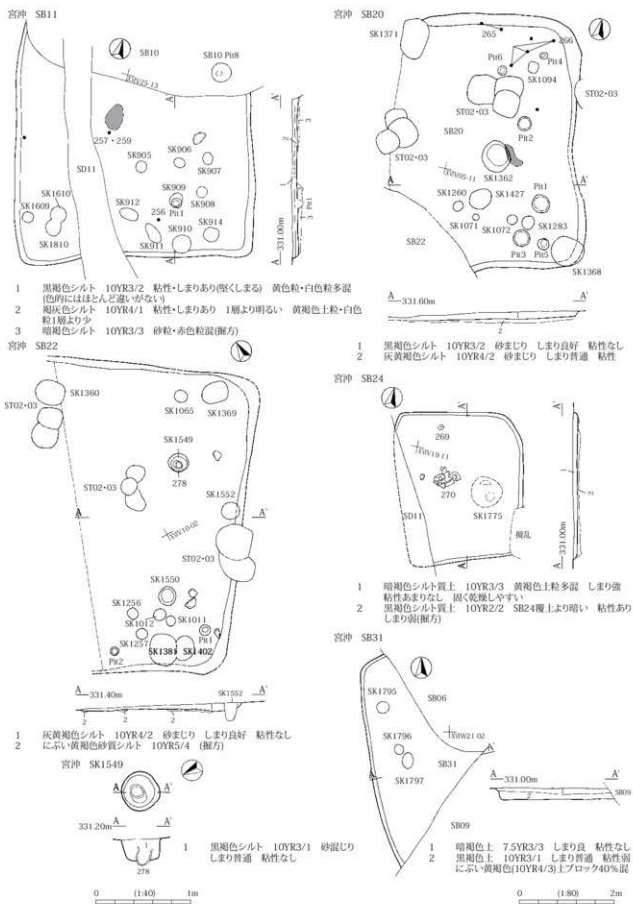
宮沖1区南西部の段丘縁辺付近に位置し、V・Ⅷ層上面で検出した。他遺構との重複では、本跡がSB10、SD11、SK905～912・914に切られる。本跡床面検出のSK1609・1610・1810も形状や埋土から本跡を切る重複柱穴と思われ、床面検出のPit1は整理作業で同位置に重複するSK909の掘り残しと判明した。北辺はSB10に切られ、残存範囲から平面形は1辺5m強の方形と思われる。埋土は上層にややくすんだ黒褐色土、下層に灰褐色土層がある。壁はほぼ垂直で、床面は浅い掘方を均したものであまり堅緻でない。床面上の中央北西寄りて炉1基、東壁近くに工作台と思われる30cmほどの平石1個を検出した。炉は長軸約60cm、東西約40cmの楕円形に赤化した範囲が認められた地床炉である。柱穴は、西辺柱穴がSD11に切れ、北東柱穴はSB10Pit8の下部検出の柱穴状落ち込みに当たる可能性がある。少量の土器が西辺際や炉周辺から出土した。箱清水式系櫛描波状文甕を含む古い土器様相を示す。

宮沖SB20 1区2面 XVI V05 (第56図 PL6)

宮沖1区北西部、SB22北側のIV層上面で検出した。他遺構との重複では、本跡がST02・03 (Pit2・9・10)、SB22、SK1065～1073・1094～1096・1099・1235・1260～1262・1283・1362・1368・1371・1427に切られ、本跡ピットと捉えた柱穴も重複する柱穴の可能性ある。西辺は段丘縁辺の斜面で浅く途切れ、南西隅はSB22に切られて全容は捉えられなかったが、平面形は1辺5mほどの方形と思われる。埋土はIV層が若干くすんだ灰黄褐色土の単層である。壁はほぼ垂直で、床面は浅い掘方を均したものが堅く、床面で炉1基、ピット6基を検出した。炉は中央東寄りにあり、床面が直接被熱で赤化した地床炉である。焼土の厚さは4cmほどを測る。長軸約54cmで、炉西側はSK1362に切られ短軸は20cmほどしか残存しない。ピットはいずれも直径20～30cmの円形の平面形で柱穴と思われる。南東隅にPit1・3・5、北東隅にPit4・6、北東部のやや中央寄りにPit2が位置するが、Pit1・4は古墳時代後期土器片を出土し、本跡を切る柱穴と判明した。他のピットも深さ10～20cmと浅いものが多く、重複する柱穴の可能性ある。遺物は北壁際で壺の破片が出土したが、他は小片のみである。

宮沖SB22 1区2面 XVI V05・09・10 (第56図 PL6)

宮沖1区北西部の段丘縁辺近くに位置し、IV層上面で検出した。他遺構との重複では本跡がSB20を切り、



第56図 宮沖SB11・20・22・24・31

SK1011・1012・1065・1256・1257・1369・1381・1402・1552、ST02・03 (Pit6・7・8) に切られる。西辺は段丘斜面で浅く途切れ、残存部から本跡平面形は1辺6.5m前後の方形と思われる。埋土はⅣ層が少しくすむ色調の灰黄褐色土の単層である。壁はほぼ垂直で、床面は浅い掘方を均したもののだが比較的堅い。床面上で検出されたピットは重複柱穴と思われ、調査ではSK番号を付したが、SK1549から古墳時代前期の土師器が出土し、東辺に平行した対称位置のSK1550と共に本跡主柱穴と捉えられた。埴は検出されず、段丘斜面にかかって削られた可能性がある。遺物は土器破片が少量ある。

宮沖 SB24 1区2面 XVI V19 (第56図 PL6)

宮沖1区南部の段丘縁辺付近に位置し、2面のⅤ・Ⅷ層で検出した。他遺構との重複では本跡がSD11、SK917～920・1557・1596に切られる。床下検出の不整形なSK1775は構築時に地山礫を掘り出した痕跡と思われる。西辺はSD11に切られ全容は不明だが、残存する南北長から1辺約3.2m前後の方形の平面形と思われる。埋土は暗褐色シルトの単層で、壁はわずか10cmほどの残存である。床面はほぼ平坦ながら軟弱で、埴や柱穴は検出されなかった。床面上で完形の壺と鉢が出土したが、他は小片のみある。

宮沖 SB31 1区2面 XIV W16・21 (第56図 PL6)

宮沖1区南部に位置する。宮沖1区3面のSD14検出中に土器が多く出土したことから本跡の存在が捉えられた。他遺構との重複では北側をSB06、東側をSB09に切れ、床面で検出したSK1795～1797は本跡と重複する柱穴と思われる。周囲を他の堅穴住居跡に切れ、わずかに残る西辺の長さから、1辺約4.5m以上の方形の平面形と思われる。壁はわずか10cmほどの残存である。床面は比較的堅いが柱穴は検出されなかった。土器は破片ながら1,000gほど出土し、古墳時代前期の住居跡と捉えた。

(2) 土坑 (第57図 PL6 第13表)

古墳時代前期の土坑は、出土遺物から識別し、川久保SK50と宮沖SK1801・1820を抽出した。川久保SK50は出土遺物がないが、Ⅴ層上面検出で埋土はⅣ層起源の細砂を埋土とすることから当該期の遺構と捉えた。宮沖SK1801は形状から柱穴とみられ、認定し得なかった掘立柱建物跡が存在する可能性を示す。また、宮沖SK1820は平安時代の宮沖SB21床下で検出された傾斜方向に長い不整形楕円形の土坑で、多くの土器が出土したが、形状から窪地地形と思われる。なお、中世の川久保SK1813や宮沖SK913・1656から古墳時代前期土器が多く出土したが、それぞれ重複する古墳時代前期宮沖SD10、宮沖SB11の土器を混入したとみられ、古墳時代前期の土坑と捉えなかった。

第13表 古墳時代前期土坑一覧表

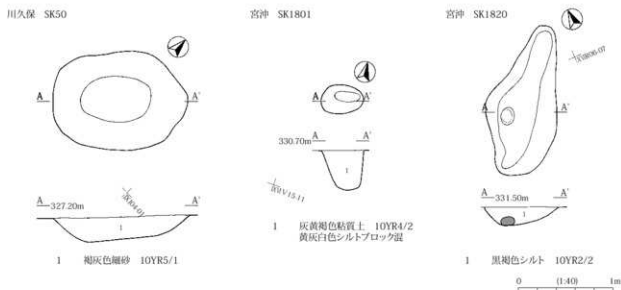
土坑	調査区 調査面	グリッド	平面形	長軸×短軸 (cm)	断面形	深さ (cm)	埋土の特徴・出土遺物・備考
川久保SK50	2区2面	IX D23、I03	楕円形	143×105	逆台形	26	埋土は細砂でⅣ層起源か。
宮沖SK1801	1区2面	XVI V15	楕円形	46×32	U字形	42	埋土は灰黄褐色土。柱穴跡。土器出土。
宮沖SK1820	1区2面	XVI R06	不整形楕円形	162×80	逆台形	20	埋土は黒褐色土。不整形ながら土器多く出土。

(3) 溝跡

川久保SL06に伴う川久保SD30・31・34、宮沖1区3面水田跡に伴うSD10・14～17はそれぞれ水田跡の頂で触れ、ここでは水田跡に伴わずに検出された川久保4区2面の溝跡を記述する。

川久保SD12 4区2面 X A07・08・11 (第291図)

川久保4区2面のNR1a北岸のⅧ層上面で検出したが、調査区壁の土層観察からSLO6耕作土層下面に位置すると捉えられた。東西両端は調査範囲外へ延び、長さ約17.8mを確認した。幅約50cmで、断面



第57図 古墳時代前期の土坑

形はU字形で検出面からの深さは18cmを測る。V層の黒褐色土にVII層の黄褐色土小ブロックを多く含む埋土で、弥生時代後期と思われる壺や甕が少量出土した。弥生時代後期～古墳時代前期の溝跡と思われる。川久保SD13～16・20・21・23 4区2面 IV W22、IX J04、X A18～23、B04・07・08・11・12、F01（第289～294図）

川久保4区2面のNR1a南岸付近のVII層上面でSD13～16・20・21・23を検出した。川久保2区東壁の土層観察で、SD13・16はSL06耕作土層下面に位置すると捉えられた。位置関係からSD16・23・15は連続した溝跡で、SD13・21もSL06に伴う用水SD30・31・34の延長先にあたる可能性がある。SD13・21を同一溝跡とすると長さ約75m、SD30・31・34西端からだと約119mを測る。また、SD13・21がSL06に伴うSD30・31・34の延長先とすれば、より低地側に位置するSD16・23・15はSL06より古い溝跡と考えられる。SD14はSD15の東端延長上にあつて同一溝跡の可能性があり、SD15からSD16東端まで約55m、SD14までだと63mを測る。その東方に離れて位置するSD20はSD14かSD16の延長先にあたるかは断定できなかった。SD16からSD20までは約92mを測る。これらの溝跡の幅は20～60cmまでであるが、40～50cmが多く、断面形はいずれもU字形で底面は東へ傾斜して若干凹凸がある。検出面から底面までの深さは4～12cm程度である。埋土は黄褐色シルト小ブロックを含む黒褐色土を基調する。出土遺物はないが、SD16・23・15はSL06と関連する可能性から古墳時代前期の溝跡と思われ、関連すると思われるSD13・21は若干遡る時期と思われる。いずれも水田跡に伴う用水と思われる。

川久保SD17・22 2区2面 X F02・03（第289図）

川久保2区中央微高地の東側斜面に位置し、NR02にかかって検出された。長さ約4～6mほどの短い溝跡で、幅約30～60cm、深さ約6cm前後で埋土は暗褐色シルトの単層である。出土遺物はない。埋土・形状ともに川久保SD13～16・20・21・23に類似し、関連する溝跡と思われるが、地形的に付近には水田跡を想定しにくく、用水ではないと思われる。その性格は明らかにし得なかった。

(4) 水田跡 (第14表)

古墳時代前期の水田跡は川久保 SLO4・06、川久保 1区 12 面水田跡、宮沖 1区 3面水田跡の 4カ所捉えられた。いずれも段丘上の細長い帯状窪地地形に立地し、検出面は川久保 SLO4のみ NR1aのⅢ 7層で、NR1a内の川久保 SLO6と川久保 1区 12 面水田跡、宮沖 1区 3面水田跡はIV層洪水土層に被覆されたV 1層検出である。川久保 SLO4・06は洪水土層に覆われた範囲のみ調査し、水田範囲全域は捉えられなかったが、部分的な畦の検出から川久保 4区まで水田域が広がると思われる。水田跡の時期は、川久保 SLO4は出土遺物から捉え、宮沖 1区 3面水田跡や川久保 SLO6や川久保 1区 12 面水田跡は出土遺物がないが、IV層に被覆されることから古墳時代前期と捉えた。これらの水田跡は帯状窪地地形内に傾斜方向と直交方向の畦による不整形な小水田区画を並べ、斑尾川上流側から用水を引いて長い距離を灌水する。古墳時代前期では斑尾川河床との比高差が小さいため段丘上の水田跡へ引水しやすく、斑尾川の旧河道跡と思われる NR1aが帯状窪地地形として残存していた地形条件から水田が営まれたと思われる。この古墳時代前期以後、中世前期まで段丘上で水田跡は検出されなかった。

第14表 古墳時代前期水田跡面積計測表

水田 No	遺跡	地区名	平均 m	水田 No	遺跡	地区名	平均 m	水田 No	遺跡	地区名	平均 m
1	川久保	1区 12 面	52.7	21	川久保	2区 SLO6	3.2	43	川久保	2区 SLO6	2.1
2	川久保	1区 12 面	24.7	22	川久保	2区 SLO6	3	44	川久保	2区 SLO6	3.5
1	川久保	2区 SLO6	(3.6 以上)	23	川久保	2区 SLO6	1.6	45	川久保	2区 SLO6	3
2	川久保	2区 SLO6	7.5	24	川久保	2区 SLO6	5.3	46	川久保	2区 SLO6	3.1
3	川久保	2区 SLO6	4.8	25	川久保	2区 SLO6	計測不能	47	川久保	2区 SLO6	(5.4)
4	川久保	2区 SLO6	2.7	26	川久保	2区 SLO6	(3.2 以上)	1	川久保	4区 SLO4	(23.5 以上)
5	川久保	2区 SLO6	2.8	27	川久保	2区 SLO6	5.3	2	川久保	4区 SLO4	58.3
6	川久保	2区 SLO6	3.2	28	川久保	2区 SLO6	5.3	3	川久保	4区 SLO4	48.4
7	川久保	2区 SLO6	3.3	29	川久保	2区 SLO6	5.7	4	川久保	4区 SLO4	29.2
8	川久保	2区 SLO6	2.7	30	川久保	2区 SLO6	3.4	5	川久保	4区 SLO4	18.7
9	川久保	2区 SLO6	3.7	31	川久保	2区 SLO6	4.8	6	川久保	4区 SLO4	(14.6 以上)
10	川久保	2区 SLO6	8.0	32	川久保	2区 SLO6	4.7	7	川久保	4区 SLO4	(27.1 以上)
11	川久保	2区 SLO6	3.7	33	川久保	2区 SLO6	3.2	8	川久保	4区 SLO4	計測不能
12	川久保	2区 SLO6	9.5	34	川久保	2区 SLO6	3.1	9	川久保	4区 SLO4	計測不能
13	川久保	2区 SLO6	8.1	35	川久保	2区 SLO6	4.0	1	宮沖	1区 3面	4.7
14	川久保	2区 SLO6	8.0	36	川久保	2区 SLO6	計測不能	2	宮沖	1区 3面	12.2
15	川久保	2区 SLO6	4.9	37	川久保	2区 SLO6	計測不能	3	宮沖	1区 3面	9
16	川久保	2区 SLO6	4.6	38	川久保	2区 SLO6	2.5	4	宮沖	1区 3面	(11.4 以上)
17	川久保	2区 SLO6	7.3	39	川久保	2区 SLO6	2.2	5	宮沖	1区 3面	13.9
18	川久保	2区 SLO6	計測不能	40	川久保	2区 SLO6	5.2	6	宮沖	1区 3面	(16.1 以上)
19	川久保	2区 SLO6	4.4	41	川久保	2区 SLO6	(5.4)	7	宮沖	1区 3面	計測不能
20	川久保	2区 SLO6	9.7	42	川久保	2区 SLO6	3.4	8	宮沖	1区 3面	計測不能

川久保 SLO4 2区 1面 IX E14・15・19・20・24・25、X A11 ~ 13・16 ~ 18 (第58・59 図 PL 7)

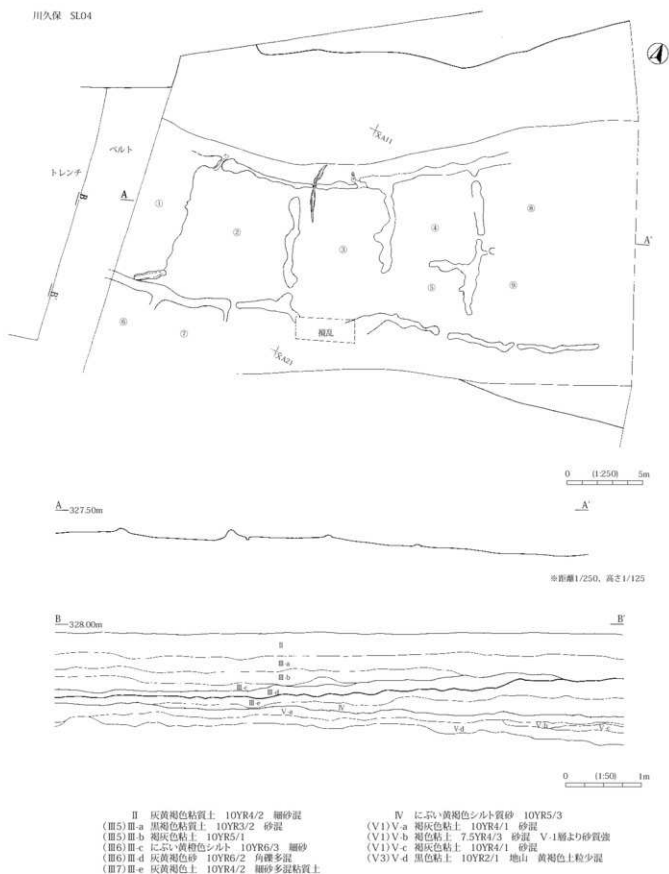
川久保 2区 NR1a内にあり、Ⅲ 7層を耕作土層として黄褐色風化礫を含む土石流堆積層のⅢ 6層に被覆される。被覆する土石流堆積層は NR1a内でも下流側の狭い範囲のみ堆積し、その堆積域内の幅 18m、長さ 35m ほどの範囲を調査した。隣接する川久保 4区でわずかに畦が認められ、川久保 4区まで水田域が広がる可能性がある。水田跡は幅 10m 前後の低地を 6 ~ 7m 間隔に横断方向の畦で区切り、一部は帯状窪地地形と同方向の畦で幅約 5m 前後に区画する。水田内は水口で配水し、用水は検出されなかった。本跡の時期は小型丸底の出土から古墳時代前期と捉えた。

川久保 SLO6 2区 2面 IX D24・25、E 16・21 ~ 23、I 05、J 01 ~ 03・06 ~ 08 (第60 図、PL 8)

川久保 2区の NR 1a内の V層上面で、被覆するIV層を除去して検出した。北西部は調査区外へ延び、東側は洪水土層IV層の被覆が薄く不明瞭となるが、本跡に関連する SD30・31・34の延長と思われる

第3章 検出された遺構と遺物

川久保 SL04



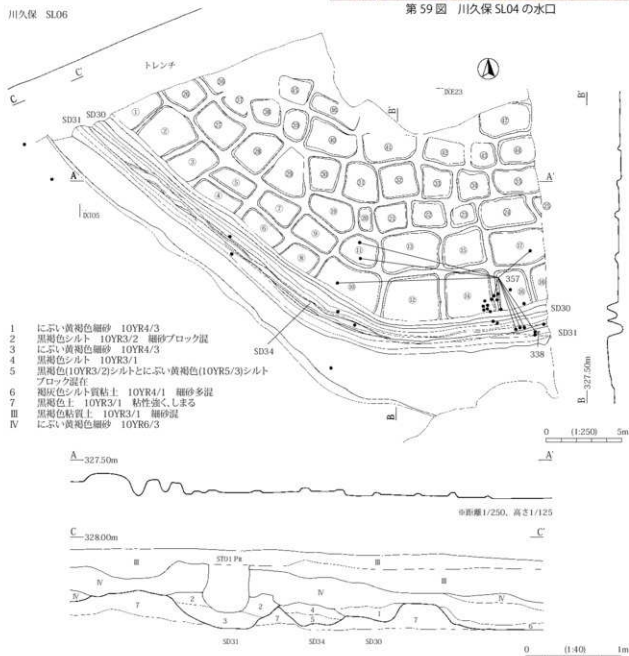
第58図 川久保 SL04

るSD13・21が続く範囲までは水田域が広がる可能性は高い。IV層の被覆が厚い川久保2区内で幅約20m、長さ約30mの範囲を調査した。水田跡はNR1a南岸から少し低地側に入る場所に幅約4.5m、高さ10～20cmの幅広い畦を設け、低地中央側を水田域とする。水田区画はNR1aと同方向の1.5～3.0m間隔の畦で細長く区画し、さらに2～3m間隔の横断方向の畦で区画した1辺1.5～3.0m四方の水田を形づくる。水田跡1枚の平均面積は4.5㎡である。水田域を区切る西・南側の幅広い畦上面に



第59図 川久保SL04の水口

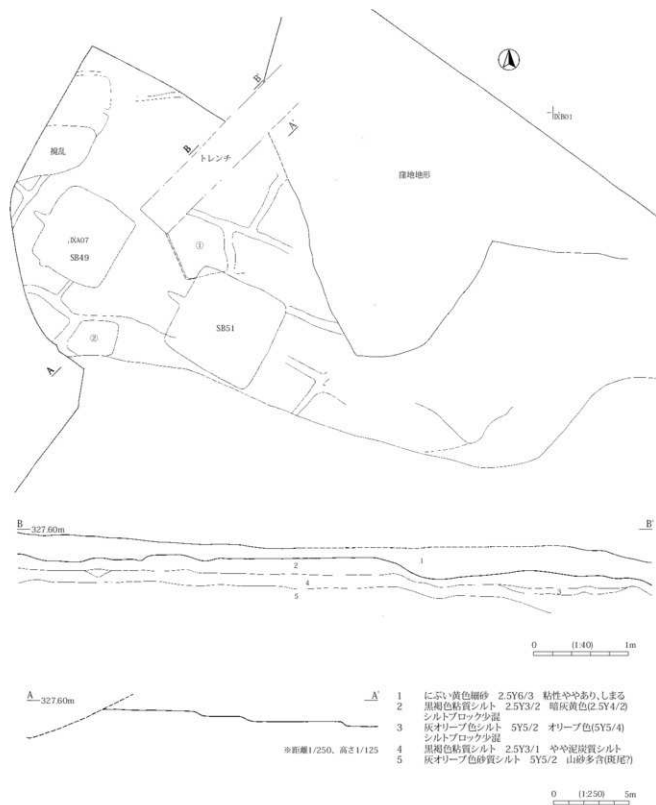
川久保 SL06



第60図 川久保SL06

第3章 検出された遺構と遺物

川久保 1区12面水田



第61図 川久保1区12面水田跡

SD30・31・34があり、この畦とNR1a南岸との間の空閑地で、SK50の1基が検出された。

用水はIV層で埋没したSD30があり、その下層でSD31とSD34を検出した。SD30は幅70～100cm、SD31が約80～100cm、SD34は約70cmで、いずれも断面U字形である。畦上の用水はSD34→31→30へ通り替えが捉えられ、東延長先のⅥ層上面検出のSD13・21はこれらの溝跡の延長先にあたる可能性がある。北西端は調査区外、東端は面的調査対象圏外へ続いて長さ約25.5mを確認した。それぞれ埋土は砂層が入り、洪水で埋没した都度、掘り直されたとみられる。出土遺物は水田耕作土層中や川久保SD30・31から古墳時代前期の土師器片が少量出土した。

川久保1区12面水田跡 IX A01～15、B06・11、Ⅲ U21・22・23 (第61図 PL 7)

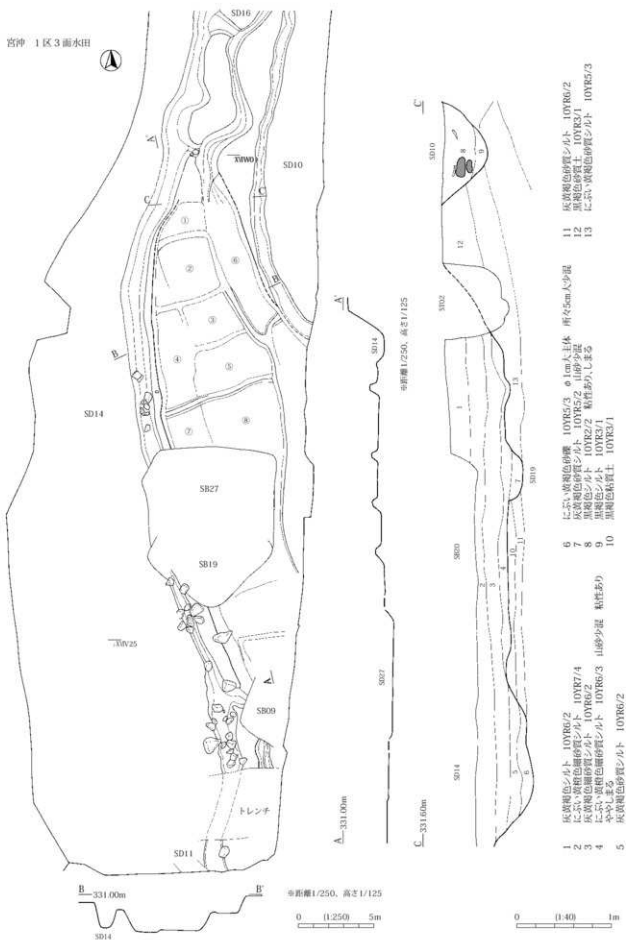
川久保1区北東部、川久保2区NR1aの北西延長先とみられる帯状窪地地形内にある。この帯状窪地地形南部は平安時代の浸食地形NR1dに削られ、水田跡は川久保1区北部のみ遺存する。川久保1区北端トレンチの土層観察でIV層の黄褐色シルト層下部の黒褐色～褐色粘土層のV層が階段状に認められ、一部を面的に掘り広げたところで畦と思われる帯状の盛り上がり確認され水田跡と認定した。ただし、水田面が遺存する西部は、被覆する洪水土層が薄く、11面古墳時代後期住居跡の掘り込みが水田面に達するなど遺存状態は悪い。出土遺物はないが、古墳時代後期住居跡検出面下層に位置することから被覆洪水土層をIV層と捉え、古墳時代前期の所産と捉えた。隣接する川久保SLO6と同じ水田跡と思われるが、両端は調査区外へ延びて直接連続関係は確認できなかった。

水田跡の検出された低地内は調査区北東部が最も低く、中央付近には北東から南西方向に洪水時の流水が抜けたと思われる狭い帯状窪地地形が延び、北東部の最も低い場所は粗砂が厚く堆積していたが、畦は認められなかった。水田跡は遺存不良で、水田区画の詳細は把握できなかったが、西岸に断片的に認められた畦から1辺約2.5～4.0m間隔の低地と同方向の畦で帯状に区切り、その中を3.5m前後の直交する畦で区切って約2.5～4.0m四方のやや不整形な長方形水田を形づくるとみられる。面積が判明した水田跡はわずかだが、平均面積7.7㎡である。水口・用水は検出されなかった。

宮沖1区3面水田跡 XVI V05・10・15・20・25、W 01・06・11・16・21、II B05・C 01 (第62図 PL 7)

段丘上の宮沖1区中央にある帯状窪地地形内に位置し、IV層の洪水土層に被覆される。この窪地は斑尾川脇に土石流堆積物が土手状に厚く堆積し、段丘Ⅱの段丘崖との間が帯状窪地地形として残されたもので、ほぼ斑尾川と平行する。水田跡の南東部は調査区外へ延び、隣接する宮沖5区や川久保5区では延長先は検出されなかった。川久保5区東側を迂回するように延び、現川久保集落の段丘崖先端付近で斑尾川側の低地へつながると思われる。上面の古墳時代後期住居跡が水田面まで掘り込まれて遺存状態は悪いが、水田跡は帯状窪地地形と同方向の畦と2～4m間隔の横断方向の畦で区画する。確認できた水田1枚の規模は幅約2m、長さ約4～5m前後で、平均面積は9.95㎡である。田面には足跡痕と思われる窪みが認められたが、耕作痕は捉えられなかった。この水田跡は斑尾川の upstream からSD14・16により引水していたとみられる。水田面からは混入と思われる縄文土器や、時代・器種不明の土器小片が出土したが、水田跡の時期はSD16が途中までIV層に覆われ、その造り替えと思われるSD10から古墳時代前期土器が出土したことにより、洪水土層IV層に覆われる古墳時代前期の水田跡と捉えた。

宮沖SD10・16 (第63図 PL 7)はXVI R11・16・21、W 01・06グリッドに位置する。宮沖1区2面ではSD16上端のIV層に被覆されない北端のみ検出できたが、IV層に覆われた南端は宮沖1区3面で調



第62図 宮沖1区3面水田跡

査した。北端はSD10に重なるように切られ、南端は3面水田跡に流れ込む。若干流水で蛇行し、途中に傾斜下方のSD14へオーバーフローしたと思われる窪みがある。SD10と重複する部分より北側の延長先は検出できず、ほぼSD10に重なることとみられることから、洪水以後にSD16をSD10へ造り替えたとと思われる。SD10は1区北部から中央東側調査区外へ延び、確認した長さは約37mである。幅は約100cmで断面形はU字形を呈して、検出面から底面までの深さは約30～50cmを測る。埋土はⅢ・Ⅴ層を基調とする黒褐色土で、底面に砂礫の堆積は認められなかった。他遺構との重複では中世柱穴や古墳時代後期～奈良時代のSB05・12・16に切られ、SD10がSD16を切る。土器は比較的多く出土し、北部と南部に完形土器を含む土器が集中する。土器は中層から底面付近にかけて出土した。

宮沖SD14・15・17(第63図)はXVI Q20・25、XVI V05・10・15・20・25、II B 05、II C11・16・21、II H01・06・11グリッドに位置する。SD14は宮沖1区北端の調査区境から1区3面水田跡西脇を迂回し、宮沖5区を貫いて南端は調査区外へ延びる。南側の隣接地区の川久保5区では延長先が検出されず、川久保5区西側を迂回すると思われる。規模は幅約60～170cmで、宮沖1・5区を通して確認できた規模は約126mである。宮沖1区3面水田跡に注ぎ込まずに迂回することから別地点の水田域へ引水するための用水と思われる。断面形はU字形で、宮沖1区北部では深さ40cm前後、南部の宮沖5区では深さ10cmと浅い。北部は若干蛇行し、本跡より高い位置にあるSD16の溢流による窪みが所々認められる。宮沖1区南部で水田から水口状に開口する場所が1カ所あり、宮沖5区北部で調査区東側からSD17が接続する。これらは水田域の余った水を本跡へ流す施設と思われる。宮沖5区南部で並列して検出されたSD15はSD14を造り替えする以前の溝跡とみられる。出土遺物はSD17から弥生時代中期後半の壺片(242)、SD15から条痕文と思われる壺片(241)、縄文土器片や時代・器種不明の小片が出土した。

(5) 土器集中

川久保SQ26・27 2区2面 IX H09・10・14・15、IX I01・06(第64・65図 PL 8 第15・16表)

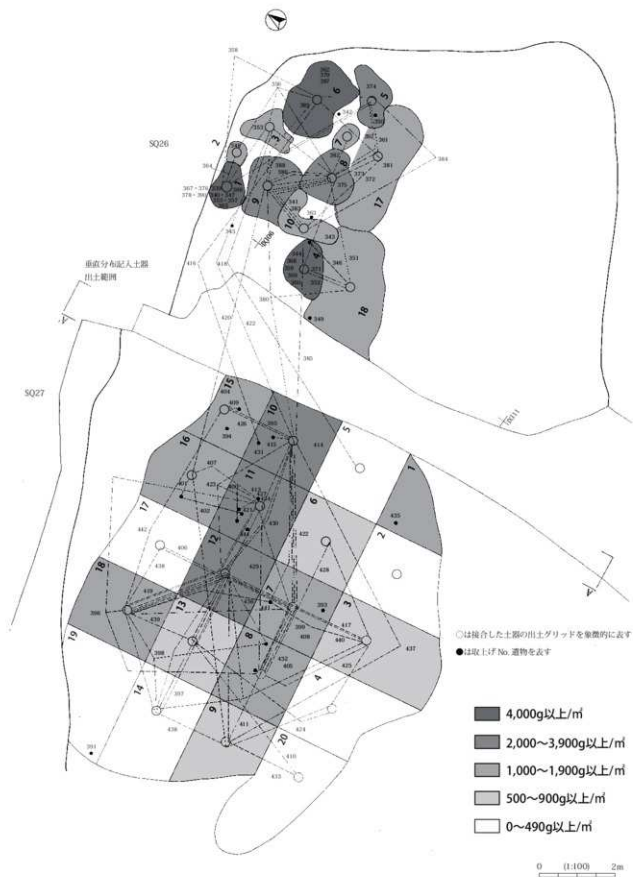
川久保2区の浸食地形NR1b北岸の斜面にある。埋土5層(基本土層Ⅳ層)に覆われた埋土6層(基本土層Ⅴ1層)で古墳時代前期土器が集中的に検出され土器集中と認定した。調査開始時のトレンチを境に別個に調査したため別の遺構番号を付したが、連続した同一遺構とみられる。トレンチより東側をSQ26、西側をSQ27とし、SQ26では一定範囲に集中する土器群毎にNoを付して取り上げたが、SQ27は土器出土が散漫で完形や大型破片の土器のみNoを付して取り上げ、他はトレンチと平行する任意の2×2mグリッド毎に取り上げた。土器の取り上げ方法が異なるため出土土器重量を単純に比較できないが、土器取り上げ範囲の面積で出土土器重量を除いて面積当たりの重量で比較すると、SQ26のほうが出土土器の重量・密度共に高く、SQ27は出土土器も少なく散布範囲が広く密度も低いが、土器出土量が多い特異な場所が点在しており、複数回の土器廃棄が集積していると思われる。また、土器の接合関係では、NR1bの主軸方向と、直交するNR1b北岸の斜面方向で接合するものがあり、いずれも傾斜方向に土器片が移動した可能性がある。出土土器は多いが、廻間Ⅱ式～Ⅲ式のバレス壺、あるいは布留式の影響と思われる柱状高杯や小型丸底まで混在し、Ⅳ層堆積までの長期間にわたる土器が廃棄されたと思われる。出土した糞は煤が付着するなど使用痕跡が認められ、器種の組成の重量比も集落遺構と大差ないが、居住域と離れた場所に土器を廃棄した理由は明らかにし得なかった。これ以外に敲打痕を残す礫が出土した。

第15表 川久保 SQ26 出土土器計測表

取上げNo	小型内径		鉢		有蓋付		高台		高杯		壺		罎		不明		グレットml		※破片数は土器接合前の数値			
	重量	破片数	重量	破片数	重量	破片数	重量	破片数	重量	破片数	重量	破片数	重量	破片数	重量	破片数	重量	破片数	重量	破片数	重量	
1	272	5	229	5	4	1	6	1	10	1	385	15	2,088	38	105	67	8,294	324	0.83	494.0	181.9	
2																						
3	39	4	9	2	38	1	28	3	314	4	252	8	1,569	37	39	19	1,837	77	0.64	1943.0	81.9	
4	72	4	126	2	71	3	6	1	6	1	581	29	2,598	31	30	18	5,478	157	1.24	4417.7	126.6	
5																						
6	104	7	47	5	55	2	8	1	21	1	953	1	2,350	31	20	88	3,360	37	1.14	2965.0	32.7	
7	8	7	1	1	7	1	326	14	3,430	119	82	1	96	16	6	2	4,160	245	2.61	1593.0	81.9	
8	71	7	95	5	53	2	23	2	6	1	1,215	28	2,007	83	115	67	3,585	195	1.49	2466.0	369.9	
9	106	11	113	8	5	21	1	578	39	1,541	103	195	3	82	53	2,699	223	1.97	1370.1	116.2		
10	108	8																				
11																						
12																						
13																						
14	198	1																				
15																						
16																						
17	45	6																				
18	32	2	72	1	15	1	170	4	31	3	277	11	1,005	76	23	10	1,237	81	4.26	290.4	19.0	
19																						
一編	274	42	211	32	46	3	214	27	113	10	1,321	77	4,906	636	42	26	1,644	124	4.83	361.5	25.9	
合計	1,319	98	928	62	555	12	1,038	51	542	24	8,201	232	28,851	1,372	277	4	2,090	1,290	43,801	3,145		

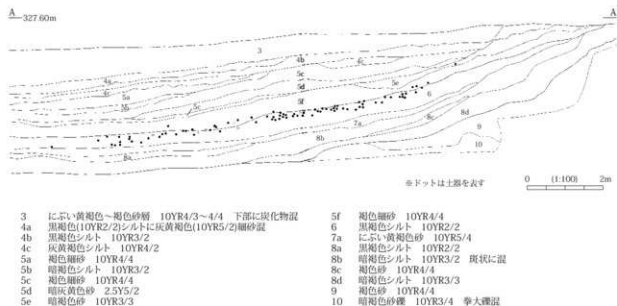
第16表 川久保 SQ27 出土土器計測表

取上げNo	小型内径		鉢		器付		高杯		壺		小笠笠		罎		不明		グレットml		※破片数は土器接合前の数値				
	重量	破片数	重量	破片数	重量	破片数	重量	破片数	重量	破片数	重量	破片数	重量	破片数	重量	破片数	重量	破片数	重量	破片数	重量		
1																							
2	28	2																					
3	32	2	22	1	8	1																	
4																							
5	24	1	15	1	12	1																	
6	2	1	1	1	1	1																	
7	271	8	15	1	73	2	39	3	271	10	43	2	798	34	87	2	9	1,696	63	4	401.5	15.8	
8	144	8																					
9																							
10	21	2	275	2	21	1	25	5	246	9	20	2	375	23	12	1	4	6,222	35	4.02	1547.7	82.5	
11	36	2	528	6	538	6	538	4	2,322	63	189	5	1,184	74	169	1	14	7,349	94	4	987.3	23.5	
12	84	5	15	1	61	4																	
13	84	4																					
14	19	3																					
15	275	5	372	5	57	1	25	5	246	9	14	2	363	23	21	1	6	4,379	55	2.53	545.1	21.7	
16																							
17																							
18	134	12																					
19																							
20	59	12	135	6	164	2	74	2	317	33	293	17	1,783	165	20	12	280	98	3.105	335			
一編	1,213	67	896	20	1,328	27	234	11	4,071	229	1,395	64	15,304	877	189	5	1,115	78	499	182	26,744	1,560	



第 64 図 川久保 SQ26・27 土器出土重量分布

川久保 SQ26・27



第65図 NR1b土層と川久保SQ27土器出土垂直分布

3 古墳時代前期の遺物

(1) 古墳時代前期の土器

ア 概要

当該期の土器は川久保2区北部、川久保1区北部、川久保5区～宮沖1区から出土し、川久保SQ26・27のある川久保2区と、竪穴住居跡が分布する宮沖1区から多く出土した。古墳時代前期の土器はハケ調整具の木目が細かく、器壁も薄く、焼成良好で堅いものが多いことから他時代土器と識別しやすい。

出土土器は古墳時代前期でも初頭のものだが、当該期では北陸→東海→畿内などの外来系の土器や小型精製土器の流入や影響が強まり、弥生時代後期の箱清水式土器と併存しながら次第に外来系土器へ軸足を移す変化と理解されている。本遺跡でも箱清水式系土器と外来系土器やその影響を受けた土器が存在するが、遺構外出土の箱清水式土器は破片では吉田式土器や栗林式土器と識別しにくいものがあり、他時代の項に掲載した土器もあると思われる。川久保遺跡では弥生時代後期初頭と古墳時代前期の土器が混じり、層位的にも分離し得ないため、弥生時代後期土器の出土重量分布図には両者が混じった数値で掲載している。一方、宮沖遺跡では吉田式土器は出土せず、弥生土器はほぼ弥生時代後期末～古墳時代前期と捉えられる。

当該期の遺構検出面は複数あり、層順からⅤ層上面川久保SQ26・27→Ⅳ層上面宮沖SB20・22・31、宮沖SD10→Ⅲ7層川久保SLO4出土土器へ時間的変遷が迫る可能性があるが、土器の型的な変遷が捉えきれず、上記層順から土器変遷を捉えるのは慎重さが必要と思われる。なお、箱清水式土器を少量混じり込む古相の土器を出土した宮沖SB11・24はⅣ層の堆積がない場所に立地し、Ⅳ層との前後関係は直接捉えられなかった。また、S字裏や北陸系裏と思われる土器破片は古墳時代後期や奈良時代遺構から混入して出土し、直接伴出土器が捉えられた出土状況はない。

イ 器種 (第66・67図)

古墳時代前期土器の器種には小型丸底、器台、鉢、高杯、壺、甕、甔がある。

小型丸底 出土量はわずかで、宮沖SD10、川久保SQ26・27、川久保SLO4から出土した。破片では小型裏やミニチュア土器裏との識別が十分でないものもあるが、球胴に直線的な口縁が付く器形で、

口縁が短い399、直線的で長い口縁の340、胴部がやや大きい393の例がある。また341は有段口縁で胴部中央が穿孔される。小型丸底土器の調整はハケ、ナデ、ミガキなどがあり、口縁が直線的で長いものはミガキ調整される。なお、343は小型甕の可能性はある。

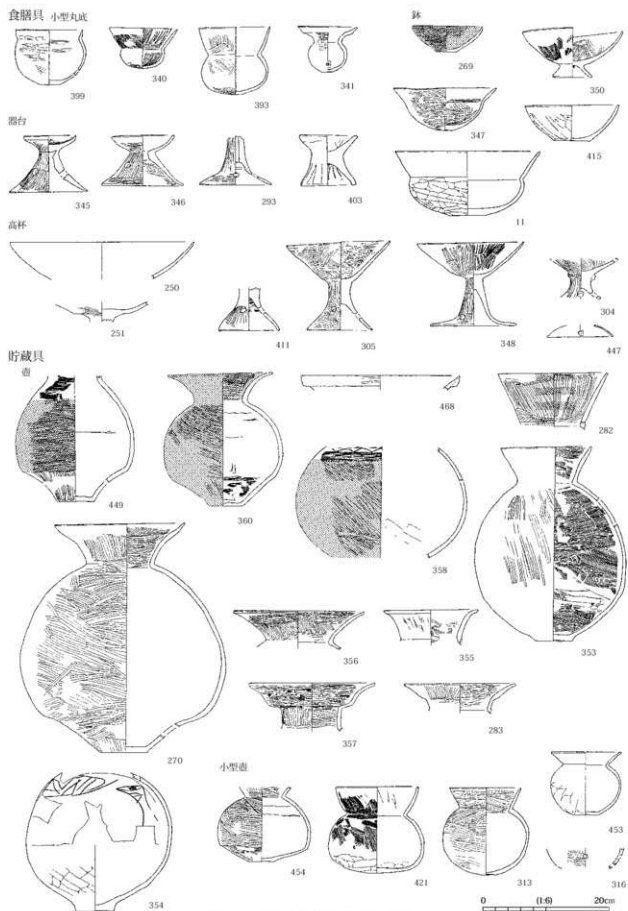
器台 内湾する小さな杯部に、円い穿孔が数カ所施される外反・直線的な脚がつく器形で、杯部内底から脚接合部中央が穿孔される。杯部が小さい345、脚が低く杯部が大きい346、柱状脚高杯を思わせる細長い脚の293、403のような粗製支脚のような厚いつくりのものがある。杯部は口唇部の外面を面取するように尖る345の例も少量あるが、内湾ぎみで口唇部を丸く納めるものが多い。脚には3カ所穿孔するものも多く、わずかに4～5カ所もある。調整はハケ調整後に外面と杯内をミガキ調整し、脚内面上部と端部にナデ調整、下部にハケ調整を残す。口縁が内湾する器台には少量ながら赤彩されるものがある。

鉢 バリエーションが多く、箱清水式系の269、内湾する胴部に低い脚が付く台付鉢350、口縁が胴部から屈曲して外反する11・347、箱清水式系鉢に類似する内湾もしくは開いた逆台形ぎみの415など複数種類がある。頸部が屈曲する外反口縁が最も多く、いわゆる鉄鉢形の鉢は確認されなかった。349・350は当地域で類例が少ない台付鉢で、畿内か北陸に系譜が追えると思われる。多くの鉢はミガキ調整されるが、この台付鉢はハケ・ナデ調整後に内面のみ雑なミガキが施される。

高杯 出土量が少なく全体形が窺えるものはわずかしかない。脚は411の内湾するもの、305・348のように柱状脚で底部が屈折し、境に穿孔されるものがある。前者は廻間Ⅱ式の高杯に類似するが、千曲市灰塚遺跡H1出土品にも類例があって古相の土器と言いつけられない。柱状脚の高杯は畿内に系譜が求められるもので、破片ながら250・251は東海系の開脚高杯の可能性はある。高杯は基本的にミガキ調整されるが、304は脚の付け根に指頭圧痕のある粘土帯が付される。なお、413は蓋と考えたが、類例が不明で高杯の可能性もある。また、447はわずかに穿孔が認められることから高杯脚と考えたが、断定はできない。

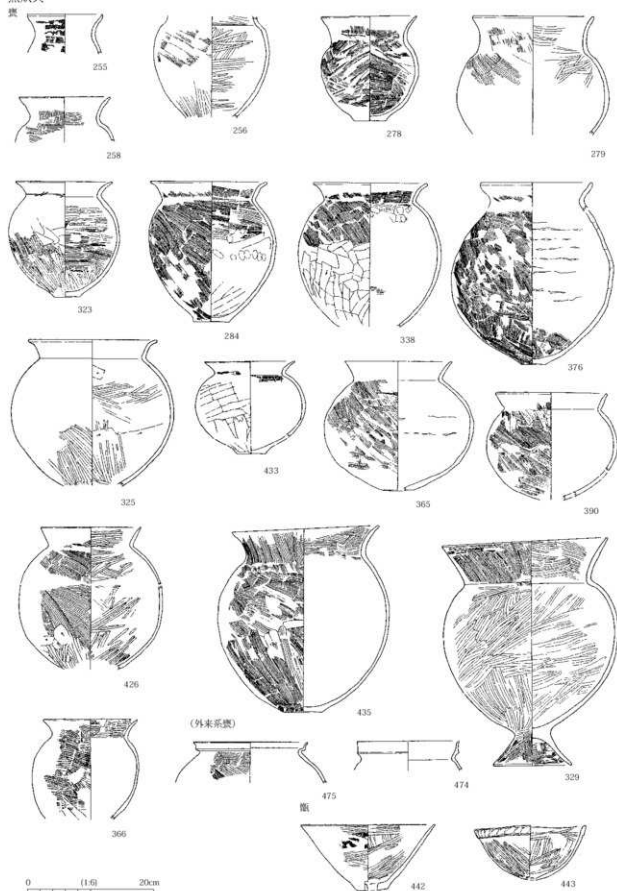
壺 全体形が窺えるものは少なく、口縁破片を中心に図化・掲載した。当地域で製作されたと思われる壺には少量の箱清水式系の壺と、本遺跡の中心となる箱清水式系壺の特徴も残しつつ、外来系の壺を写したと思われる壺があり、わずかに北陸・東海・畿内の土器の特徴をもつ外来系の壺がある。

箱清水式系の壺は胴部下半で屈曲して緩やかに外反口縁に続く器形で、頸部に櫛歯文を施し、口縁内部と口縁・胴部外面が赤彩される。代表例として449があり、弥生時代後期の項に掲載した246・247も当該期の可能性がある。箱清水式系壺の特徴を残す外来系壺の模倣と思われる土器には、やや球胴を意識しながらも胴下部が明瞭に屈曲して赤彩される360、より球胴傾向が強く赤彩されない270・419・420など外来系壺の影響が強いと思われる器形があり、353は胴部下半が張った器形で、箱清水式系壺の成形方法による直口口縁壺の模倣品とみられる。外来系土器の影響の受け方の程度はさまざまあり、口縁部形態と頸部の屈曲は他地域の土器の影響を受けて変容しているが、胴部下半が屈曲する箱清水式系壺の特徴は比較的残る傾向と思われる。この胴部下半の屈曲も強弱があり、354のように球胴のものもあるが、胴部が屈曲するものから球胴へ時間を追って型式の変化するかは断定できない。口縁部の形態は畿内や北陸から伝えられたと思われる直口口縁356、外反する口縁の355、有段口縁壺357、折り返し口縁383がある。また、これらの器形からの箱清水式系壺の特徴を残す土器も、ケズリ調整や内面をナデ調整する技法が新たに認められる。製作の技法の系譜や導入契機は不明だが、単純な器形の模倣ばかりでない可能性がある。



第66図 古墳時代前期土器の器種分類1

煮炊具



第 67 図 古墳時代前期土器の器種分類 2

外来系壺では東海系のバレス壺 358・448 がある。胴部上半に貝殻によると思われる弧状沈線と櫛描横線文を施し、下半は焼成後に赤彩が施される。468 は同類と思われる沈線を施す口縁部だが、胎土は当地域の土器と同じである。廻間Ⅱ式墳（赤塚 1990）のものと思われる。

なお、359 はミガキ調整の裏の疑いがあり、354 は胴部に鋭い工具による線刻がある。抽象的な記号ではなく、具象的なストーリー性のある情景を描いたとも思われ、上が魚、下は壺にみえる。

小型壺 小型壺は出土量が少なく、全体器形が窺えるものも少ない。壺同様に箱清水式系壺の特徴を残す 454 もあるが、外来系土器の影響を受けたと思われる球胴で直口口縁の 313 が多い。壺ほど箱清水式土器の特徴を残すものではなく、新たに出現した器種として当初より球胴が意識されたものだろうか。口縁部の形は直口口縁で端部を丸く納めるものが多いながら 453 のような面取されるものがある。ハケ調整後に、内面はナデ、外面と口縁内外面がミガキ調整される。なお、316 は胴部中央が穿孔される。

裏 箱清水式系裏の特徴を残す裏、弥生時代後期末に北陸から伝播したハケ裏、他に外来系の S 字裏、北陸系裏などがある。詳細な分類ができず以下には並列的に記述する。

箱清水式系裏は長い口縁と、屈曲が弱い頸部と縦長で緩やかな S 字形を呈する胴部の器形を特徴とする。例として 255・256・258・278・279 がある。255 のように内面と胴部外面下半をミガキ調整し、外面に櫛描波状文を施す箱清水式裏と同じ特徴を有するものと、口縁が長く、頸部の折れが弱い器形は類似しながらもミガキ調整や櫛描波状文がない 256・258・278・279 の例がある。ハケ裏は頸部から口縁が短く明瞭に折れ、胴部は球形の 325・365・390・433 と、卵型に近い縦長の 284・323・376 の器形がある。底部は 384 の丸底に近いものがあるが、小さいながら平底が多く、わずかに 329 のような台付裏がある。口縁部は頸部で明瞭に折れ、「く」字形に外反する 323・365・426 や、口縁端部が緩やかに外反する「コ」字形の 284・325、わずかに内湾する 376 がある。それぞれ端部は丸く納めるものと面取するものがある。ハケ裏は胴部と口縁部の形態、調整方法はさまざまな組み合わせがあって定型的な型として捉えにくい。このバリエーションが多い背景には壺同様に当地域に定着する過程で、外来系裏や、箱清水式系裏の特徴の取り込み方の程度が多様であったためと思われる。そのなかで、ハケ裏のなかで胴の長い器形とミガキ調整の特徴は、箱清水式系裏に由来すると思われる。

球胴の裏は、やや扁平な胴部（365）と丸い球胴（370・382）がある。口縁は「く」字形（365・390・426）、「コ」字形（325）が一定量あり、390 は端部を面取する。内湾ぎみのもの（376）もわずかにある。胴部外面調整は、ナナメハケ（365・390）、ナナメハケ後に胴下半をケズリ調整するもの（433）、ミガキ調整を加えるもの（325・426）がある。ミガキ調整は箱清水式裏に由来すると思われる。

縦長の胴の裏は、器形は箱清水式の特徴を残すものとみられるが、胴部外面の調整はナナメハケ（284）、ナナメハケにミガキ（323）、逆位に持って下半にケズリを加えたもの（338）がある。口縁は外反（323）、「コ」字形（284）、内湾（376）がある。435 はやや屈曲が弱く箱清水式系と捉えた 278 に近い。

なお、458・461 の口縁はわずかに内湾するが、口縁内面の調整の加減によるもので意図的なものではないと思われる。また、366 は器壁が薄く一見タタキにみえるが、ハケ調整と同方向の右上がりてハケ調整と捉えた。

外来系の甕は東海系S字甕469・472・475、北陸系甕321・474がある。胎土は本遺跡出土のハケ甕と同じ明褐色のもので、当地で製作されたと思われる。これらの外来系甕は古墳時代後期など他時代の遺構に混入して出土し、遺存状態も悪い。出土量はわずかである。

甕 底部に穿孔のある鉢形の器で、有孔鉢とも呼ばれる。ここでは用途を断定しないが甕と呼称しておく。出土数は少なく、器形は胴部が内湾する443と直線的に斜めに開く442がある。443は連続指頭圧痕のある粘土帯が口縁に付く。ハケ調整後、ミガキ調整される。

ウ 個別遺構出土例

代表的な遺構出土例を以下に掲載するが、詳細は添付DVDの出土土器計測表を参照されたい。なお、個体数は肉眼観察によるもので参考推定値である。また、遺構別の実測した個体の比は重量比である。

宮沖SB11 (第68図 PL46)

小破片ばかりで遺存良好な個体はない。重複する宮沖SB10からの混入と思われる奈良時代土器225gがあるが、埋土から弥生時代後期～古墳時代前期土器2,526g、弥生時代中期土器50g、不明土器495gが出土した。弥生時代後期～古墳時代前期土器の内訳は高杯13片2個体247g、壺23片18個体700g、ハケ甕70片51個体1,278g、箱清水式系鉢が高杯片9片9個体67g、同甕14片4個体192gとミニチュア土器3片3個体42gがある。口縁遺存度5/8以上は壺1個体(253)のみで他はすべて2/8以下の遺存である。図示したのは高杯2個体247g(250・251)、壺2個体380g(252・253)、ハケ甕4個体379g(256～259)、櫛描波状文を施す甕2個体162g(254・255)、ミニチュア土器3個体42g(260～262)の合計1,210gで、本跡出土の当該期土器の重量比47.9%を図示した。高杯250・251は同一個体の可能性もあり、裾広がりの脚が付くと思われる。壺253は明瞭に屈曲した頸部に櫛描横線文が施され、赤彩は認められない。甕は箱清水式系の櫛描波状文を施す254・255、箱清水式甕と同様の屈曲が弱い口縁ながら櫛描波状文のないハケ甕252・256・258がある。箱清水式土器の特徴を残す甕・壺を含み、小型丸底や鉢は認められない点から本遺跡の古墳時代前期でも古相の土器様相と捉えられる。

宮沖SB20 (第68図 PL42)

床上～埋土中から弥生時代後期～古墳時代前期土器4,482g、不明土器273gが出土し、他に重複柱穴からの混入と思われる平安時代土器21g、古墳時代後期土器68gがある。古墳時代前期土器の内訳は、器台3片2個体27g、小型丸底？3片3個体18g、高杯1片1個体10g、壺58片30個体2,679g、小型壺8片8個体77g、鉢・高杯1片1個体3g、甕128片92個体1,390g、甕2片1個体32gで、箱清水式系鉢・高杯8片8個体49g、同壺15片9個体155g、同甕1片1個体42gがある。口縁遺存は壺1個体(264)のみ4/8遺存で、他は2/8以下の遺存である。他にPit1から古墳時代後期土器82g、古墳時代前期小型丸底1片1個体3g、同甕2片2個体20g、不明土器10g、Pit2から不明土器20g、Pit4から古墳時代後期土器89g、古墳時代前期甕3片3個体35gと不明土器1gが出土した。ビットと捉えられたが、Pit1・4は重複遺構と思われる。図示したのは小型丸底と思われる1個体11g(263)、壺2個体1,482g(264・265)、甕1個体308g(266)の合計1,801gで、出土土器重量の40.2%にあたる。箱清水式系甕が少量あるが、確実に伴うと断定できない。264は外反口縁、265は端部が折れる外反口縁の壺である。

宮沖SB22 (第68図)

わずかな破片のみあり、床上～埋土中から弥生時代後期～古墳時代前期土器795g、不明土器72gが出土した。弥生時代後期～古墳時代前期土器は、器台2片2個体24g、小型丸底2片2個体11g、壺4片4個体122g、小型壺1片1個体16g、ハケ甕67片36個体602g、箱清水式系壺1片1個体10g、同甕

1片1個体6g、同鉢・高杯1片1個体4gが出土した。口縁遺存度は4/8が1個体(267)あるが、他は1/8以下の遺存である。図示したのはハケ裏2個体103g(267・268)で、出土土器重量で約13.0%にあたる。裏は「く」字形口縁のハケ裏で端部が面取される。これ以外に本跡柱穴と捉えられた宮沖SK1549出土の裏1個体650gを図示した(278)。口縁が長く頸部の屈曲が弱い箱清水式裏と類似した器形である。

宮沖SB24 (第68図 PL42)

床上～埋土から弥生時代後期～古墳時代前期土器3,234g、不明土器40g、混入と思われる古墳時代後期須恵器4gが出土した。弥生時代後期～古墳時代前期土器の内訳は、壺41片4個体2,839g、ハケ裏22片15個体217g、箱清水式系鉢・高杯2片2個体61g、同鉢1片1個体110g、同裏1片1個体7gで、口縁遺存度は5/8以上の鉢1個体(269)と壺1個体(270)のみで、他は口縁部が遺存しない。図示したのは赤彩された箱清水式系鉢1個体110g(269)、球胴ながら胴部下半が屈曲した壺1個体2,781g(270)の合計2,891gで出土土器重量の89.4%にあたる。壺の口縁端部は若干屈曲する。

宮沖SB31 (第68図)

出土量は多いが小破片が主体である。床上～埋土から古墳時代前期土器1,176g、不明土器218gが出土した。古墳時代前期土器の内訳は、小型丸底1片1個体7g、器台4片4個体32g、高杯2片2個体29g、小型壺7片3個体39g、壺21片14個体335g、裏52片46個体685g、箱清水式系鉢・高杯4片4個体23g、同裏3片3個体26gがある。口縁遺存2/8以下しかない。壺1個体17g(271)、裏1個体87g(272)の合計104g、出土土器重量比で8.8%を図示した。

宮沖SK1801 (第69図)

縄文土器19g、古墳時代前期土器1,207g、古墳時代後期～奈良時代土器135g、不明土器12gが出土した。弥生時代後期～古墳時代前期土器の内訳は高杯1片1個体15g、小型壺2片2個体63g、壺1片1個体19g、裏8片1個体1,055g、箱清水式系鉢・高杯4片4個体12g、同裏1片1個体43gである。口縁遺存2/8以下しかない。小型壺胴下部と思われる破片1個体58g(277)、裏1個体1,055g(279)を図示した。図化土器は合計重量1,113gで、古墳時代前期土器出土総重量の92.2%にあたる。

宮沖SK1820 (第69図 PL42)

重複する宮沖SB21からの混入と思われる平安時代土器106g、古墳時代前期土器5,161g、縄文土器45g、不明土器107gが出土した。古墳時代前期土器は器台6片6個体104g、高杯3片3個体90g、鉢・高杯4片4個体40g、小型丸底3片3個体13g、小型壺5片5個体33g、壺57片41個体2,168g、ハケ裏114片96個体2,514g、ミニチュア土器1片1個体22g、箱清水式系壺6片6個体85g、同裏3片3個体22g、同鉢・高杯5片5個体70gある。口縁遺存度5/8以上は壺1個体(282)、裏1個体(284)で、3/8遺存はミニチュア土器1個体(280)あるが、他は2/8以下の遺存である。図示したのは壺3個体882g(282・283・287)、ハケ裏4個体1,079g(281・284～286)、ミニチュア土器1個体22g(280)の合計1,983gで出土土器総重量の38.4%にあたる。壺は直口(282)と折り返し口縁(283)と胴部下半が張った箱清水式系壺の特徴を残す壺(287)があり、ハケ裏は縦長胴のものがあり、端部が外へ緩やかに開く「く」字形口縁(281)と、外反する「コ」字形口縁(284～286)がある。

宮沖SD10 (第69～71図 PL42・43・46)

調査では大型破片にNoを付して取り上げ、他は中地区グリッド別、埋土やトレンチ別に一括の取り上げとした。これらを合計すると縄文土器223g、弥生時代中期土器46g、古墳時代前期土器37,378g、古墳時代後期土器935g、弥生土器とのみ判明した土器75g、不明土器1,645gがある。古墳時代前期土器の

内訳は箱清水式系高杯 13片 11個体 221g、同鉢・高杯 31片 30個体 268g、同壺 8片 6個体 98g、同甕 34片 33個体 389gで、土師器は小型丸底 39片 37個体 572g、器台 48片 42個体 1,055g、高杯 20片 20個体 1,370g、鉢 24片 16個体 1,165g、鉢・高杯 30片 28個体 335g、甕 2片 2個体 130g、壺 284片 186個体 8,816g、小型壺 94片 75個体 2,004g、甕 947片 747個体 17,514g、台付甕 24片 10個体 3,331g、ミニチュア土器 3片 3個体 110gがある。口縁遺存 5/8以上はミニチュア土器 1個体(326)、高杯 1個体(305)、小型丸底 1個体(288)、鉢 2個体(297・298)、甕 2個体(318・330)、台付甕 1個体(329)、小型壺 2個体(312・313)、4/8遺存は器台 1個体(295)、壺 1個体(308)、甕 1個体(332)があるが、他は3/8以下の遺存である。磨滅していない大型破片もあるが、遺存度は低いものが多い。図示したのは小型丸底 4個体 252g(288～291)、器台 4個体 383g(293～296)、高杯 5個体 815g(301・304～306・309)、鉢 7個体 890g(292・297～300・302・303)、小型壺 5個体 900g(312～316)、壺 4個体 458g(307・308・310・311)、甕 10個体 3,468g(317～321・323～325・330・331)、台付甕 2個体 2,539g(322・329)、甕 1個体 110g(332)、ミニチュア土器 3個体 110g(326～328)である。箱清水式系土器は小片しかない。図示した土器の合計重量は 9,925gで、古墳時代前期土器の出土総重量比で 26.6%にあたる。

本跡出土土器で、箱清水式系土器は小片のみで図示し得たものはなく、ほぼ遺存良好な個体は土師器である。小型丸底は口縁が長い 288、器台は脚が低い 294・295、柱状脚を思わせる 293、鉢は口縁が外反する 299・300・303 と内湾する 298・302 と口縁が短く折れる 297 がある。高杯は柱状脚 301・305 がある。壺は外反 307、折り返し 310、直口 311 がある。小型壺は球胴に限られる。甕は縦長胴 317・318・323・324 と球胴 325、台付甕 329 があり、317・318・323・329 はミガキ調整される。321 は北陸系、322 は端部が面取されるが S 字甕と思われる。いずれも小片で遺存度は低い。

川久保 SL04 (第71図 PL46)

水田跡検出時に古墳時代前期土器 313g、弥生土器とのみ判明した土器 47g、不明土器 89g が出土した。古墳時代前期土器の内訳は、小型丸底 1片 1個体 114g、器台 1片 1個体 4g、壺 2片 2個体 12g、小型壺 1片 1個体 9g、甕 4片 4個体 16g、箱清水式系壺 2片 1個体 158g である。口縁遺存度は 4/8 が小型丸底 1個体(334)のみで他は口縁部の破片はない。334の小型丸底 1個体 114g を図示し、出土土器総重量の 36.4%にあたる。

川久保 SL06 (第71図)

弥生時代中期土器 7g、古墳時代前期土器 2,347g、不明 49g が出土した。古墳時代前期土器の内訳は、小型丸底 1片 1個体 16g、高杯 1片 1個体 16g、鉢 19片 1個体 382g、壺 3片 2個体 61g、小型壺 3片 3個体 54g、甕 53片 18個体 1,818g である。口縁遺存度は 7/8 が甕 1個体(337)、4/8 が甕 1個体(338)で、他は 2/8 以下である。鉢 1個体(336)と甕 2個体(337・338)の合計 1,537g を図示し、出土土器重量比で 65.5%にあたる。

川久保 SD30・31 (第71図)

SL06 に伴う水跡で、古墳時代前期土器 110g、不明土器 5g が出土した。古墳時代前期土器は甕 3片 1個体 75g と壺 2片 1個体 35g があり、壺 1個体 35g(335) を図示し、口縁遺存度は 2/8 である。

川久保 SQ26・27 と NR1b の 5・6 層土器 (第71～77図 PL43～45)

SQ26・27 は NR1b の 6 層(V層)で検出したが、調査時に周辺の 6 層(V層)や 5 層(IV層)で取り上げられた土器もあり、これらも併せて触れる。

SQ26は弥生時代後期土器51g、古墳時代前期土器41.711g、不明土器2.090gと混入と思われる古墳時代後期土器56g、平安時代土器95gが出土した。古墳時代前期土器の内訳は小型丸底98片59個体1.319g、器台44片36個体1.038g、鉢62片39個体928g、高杯24片18個体542g、台付鉢12片3個体555g、壺187片108個体8.201g、甕1.278片653個体28.851g、甕4片2個体277gである。口縁遺存度5/8以上は小型丸底3個体(340～342)、器台3個体(344～346)、鉢1個体(347)、高杯1個体(348)、台付鉢2個体(349・350)、壺2個体(356・360)、甕19個体(359・361・363・365・366・368～370・372・373・376・378・379・381・382・384・390・392・一括)があり、頸部5/8以上では小型丸底1個体(339)、壺1個体(353)、甕1個体(371)がある。器台・鉢・高杯・台付鉢・壺は口縁遺存度6/8以上と3/8以下に大きく分かれるが、小型丸底や甕は口縁遺存度1/8～5/8までである。図示したのは小型丸底5個体606g(339～443)、器台3個体511g(344～346)、鉢3個体394g(347・351・352)、台付鉢2個体353g(349・350)、高杯1個体314g(348)、壺7個体4.611g(353～358・360)、甕32個体18.364g(359・361～390・392)、甕1個体195g(391)の合計25.348gで、古墳時代前期土器の重量比60.8%にあたる。343は小型甕の可能性がある。

SQ27からは弥生時代中期土器89g、古墳時代前期土器25.745g、不明土器499g出土した。古墳時代前期土器の内訳は小型丸底24片9個体1.213g、器台17片13個体1.328g、鉢18片16個体896g、高杯9片5個体234g、蓋1片1個体189g、小型壺48片25個体1.395g、壺109片64個体4.071g、甕481片200個体15.304g、甕15片6個体1.115gである。口縁遺存度5/8以上は小型丸底6個体(393～395・397～399)、器台8個体(400～405・407・408)、鉢3個体(409・410・415)、小型壺2個体(421・423)、壺1個体(417)、甕8個体(424・427・430・431・434・435・438・439)、甕2個体(443・444)ある。小型丸底・器台・鉢・小型壺は口縁遺存度5/8以上と3/8以下に大きく分かれる。甕は口縁遺存度1/8が多いながら8/8もある。図示したのは小型丸底7個体1.105g(393～399)、器台9個体1.290g(400～408)、鉢4個体737g(409・410・414・415)、高杯2個体190g(411・412)、蓋?1個体189g(413)、小型壺3個体1.071g(421～423)、壺5個体2.050g(416～420)、甕17個体9.686g(424～439・441)、甕4個体965g(440・442～444)の合計17.283gで、出土土器重量比で67.1%にあたる。

SQ26・27周辺のNR1bの6層(V層)から弥生時代中期土器435g、古墳時代前期土器393g、古墳時代後期土器425g、平安時代土器46g、不明土器7gが出土した。古墳時代前期土器は器台2片2個体176g、壺5片5個体134g、ミニチュア土器1片1個体45g、甕2片2個体38gがあり、器台1個体99g(15)とミニチュア土器1個体45g(13)の合計144gを図示した。古墳時代前期土器の出土土器重量の36.6%にあたる。器台1個体(15)のみ7/8遺存だが、他は2/8遺存以下である。また、洪水砂層5層(IV層)から古墳時代前期土器1.658g、弥生時代中期土器11g、古墳時代後期土器69g、不明土器53gが出土した。古墳時代後期土器は混入と思われる。古墳時代前期土器は甕6片3個体959g、壺2片2個体36g、鉢1片1個体663gで、口縁遺存度6/8以上は鉢1個体(11)のみあり、他は3/8以下である。鉢1個体663g(11)と甕1個体435g(10)を図示した。合計1.098gは出土土器総重量比の66.2%にあたる。

SQ26・27出土土器は土師器が主体で、小型丸底は長い口縁の340・341・393、口縁が短い342・394～397があり、口縁が短いものはSQ27に多い。器台はやや低い脚の344・346・400～402・406、やや長い脚の345、粗製の403がある。高杯は柱状脚348、内湾する高杯脚411がある。鉢は台付鉢349・350、外反口縁鉢347・351・352・409・410、内湾する鉢414・415がある。壺は赤彩さ

れる箱清水式系の360と、外來系土器を模倣した直口壺353、外反口縁壺355・356、有段口縁壺357があり、外來系壺ではパレス壺358がある。甕はハケ甕で球胴・縦長胴があるが、SQ27のほうがやや縦長胴で、424・426・439などミガキ調整の甕が認められる。甕は胴部が内湾する443・444と直線的な440・442がある。

その他の土器（第77・78図 PL46）

検出面や他時代の遺構に混入して出土した土器のなかで、遺存良好な土器を図示した。川久保2区ではIV・V層から比較的遺存良好な土器が出土した。445・446・458はⅢ層の古墳時代後期土器集中川久保SQ03として取り上げられたが、IV層の被覆が薄い場所で、出土層位はⅢ層かV層が明確に捉えられなかった。461は甕、445・458は鉢と思われる。447は中世柱穴出土の小型高杯の脚と思われる破片で穿孔がわずかに認められる。448はパレス壺で川久保2区2面、451～453・463は川久保2区北端のトレンチのIV層下部から出土し、SLO6関連の土器とみられる。また、457も中世の川久保SLO3の畝間溝調査時に出土し、当初ビットと思われたが、掘り込みは確認されず下層の川久保SLO6の土器である可能性がある。459・460・462・463は川久保2区2面出土である。これ以外に、川久保4区のトレンチやIV・V層から454の小型壺、455の壺、456の卵形に近い胴長で胴部外面下半に弧状ヨコミガキを施す甕がある。川久保4区で遺構は確認されなかったが、本遺跡居住者の活動領域に含まれることが知られる。

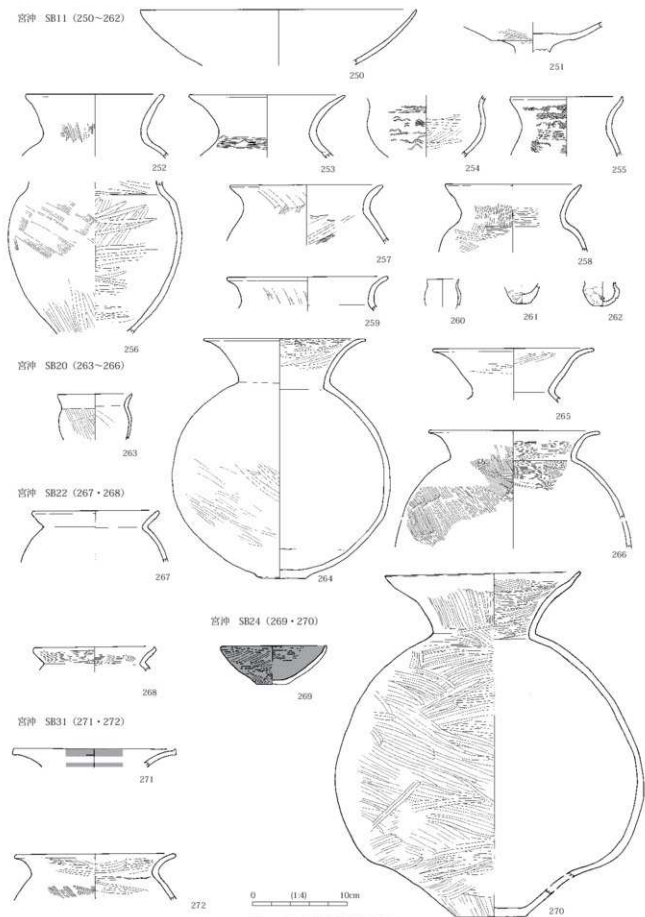
宮沖遺跡では重複する他時代遺構に混入して出土した土器がある。古墳時代後期の宮沖SBO2出土の470・476、古墳時代後期宮沖SB09出土の477・478、古墳時代後期の宮沖SB29出土の469・472、古墳時代後期宮沖SD12出土の471を図示した。また、中世SD11出土の474は重複する宮沖SB11、宮沖SK1656の275・276は宮沖SD10の土器を混じり込んだと思われる。他に宮沖1区2面検出面や出土地点不明の土器に464・465の鉢、466の大型高杯、467・471・478の壺、468の東海系と思われる壺、474の北陸系と思われる甕、469・472・475の東海系のS字甕を図示した。473はやや内湾ぎみの口縁の甕、470は箱清水式系の甕である。

エ 古墳時代前期土器の特徴

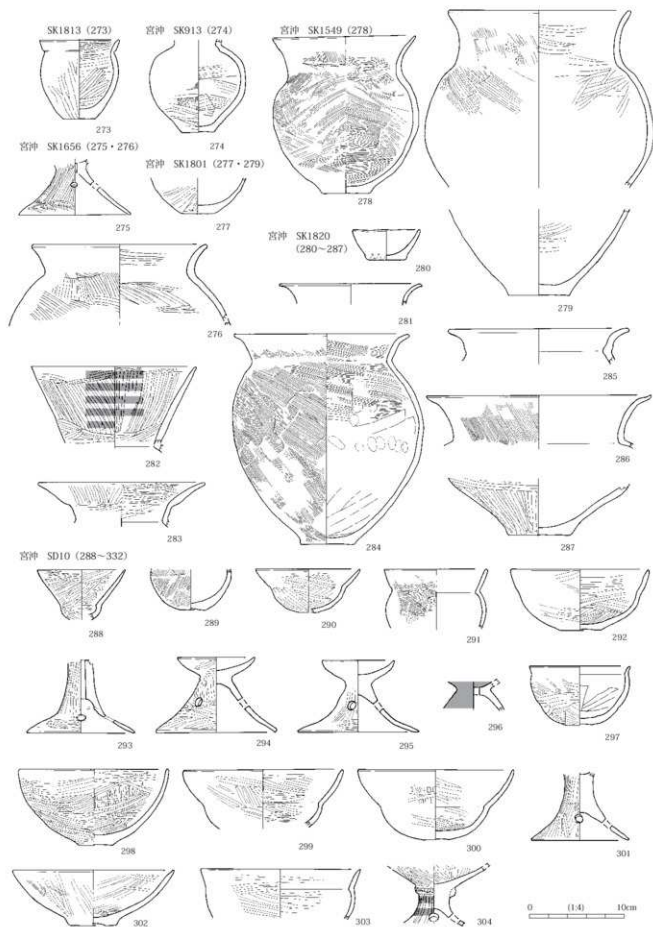
本遺跡の出土土器の年代について、中野、飯山市周辺の弥生時代末～古墳時代前期土器を検討した赤塩仁氏（赤塩1994）、土屋 積氏（土屋1998）、同じく善光寺平南部の土器を検討した青木一男氏の論考（青木1998b）に照らして検討する。ただし、本遺跡では長期に開口していた窪地地形内や溝跡出土土器が多く、堅穴住居跡にも良好な一括出土はないので、遺跡の概略時期を把握するにとどめる。

北信では弥生時代後期の箱清水式土器主体から、次第に北陸・東海・畿内といった他地域の土器の搬入や影響が強まり、箱清水式土器と併存しながら外來系土器の影響を受けた土器が次第に定着して土器様相全体が変容する過程と理解されている（赤塩1994）。この変遷観から、箱清水式土器の特徴を残す土器が多く、小型丸底や外反口縁の鉢が認められない宮沖SB11出土土器が古相の土器群と捉えられる。ここでは柳描波状文を施す箱清水式甕の他に、柳描文のない箱清水式甕と類似器形の甕、赤彩のない頸部に柳描文を施す壺、間脚高杯が出土した。土屋氏の編年に照らせば5段階（土屋1998）に該当し、宮沖SB24も同時期と思われる。宮沖SB11より古い一括資料は得られなかったが、川久保SQ26・27から出土した東海系パレス壺、S字甕は廻間Ⅱ式頃と思われ、遺跡の出現は土屋氏4段階に遡る可能性がある。

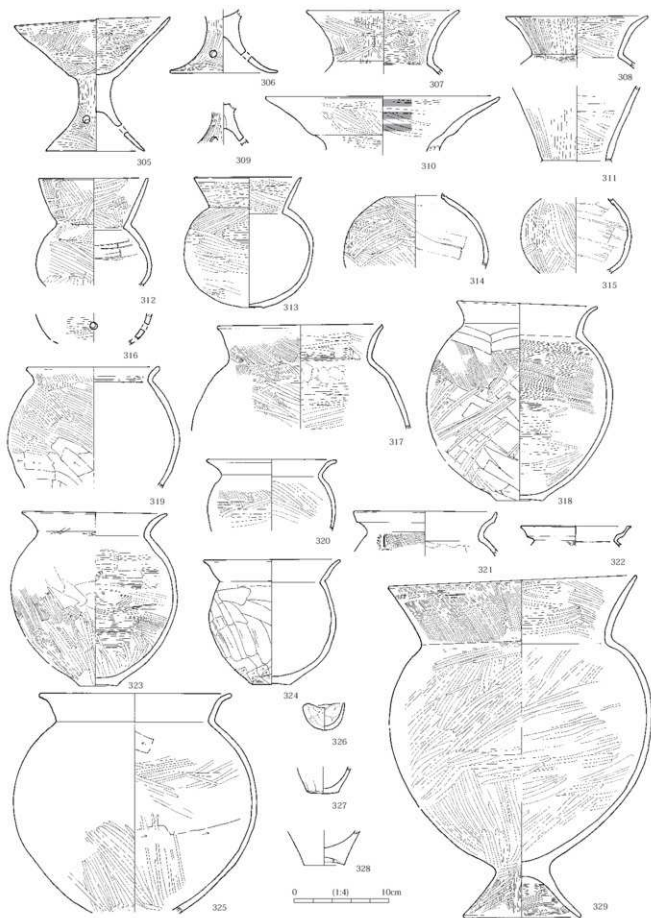
次に、より後出すると思われる箱清水式土器が少ない川久保SQ26・27や宮沖SD10の出土土器には、小型丸底、外反口縁の鉢、柱状脚高杯（屈折脚高杯）があり、畿内系小型精製品を含む点から土屋氏6～7段階に相当する可能性がある。ただし、土屋氏は畿内系小型精製土器の定着を7段階とするが、中野市



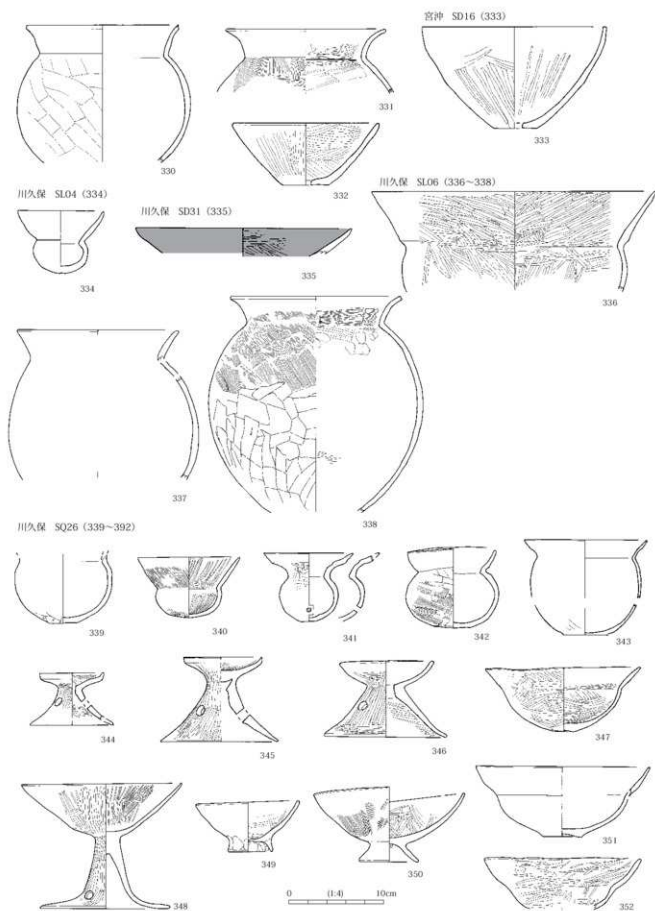
第68図 古墳時代前期土器1



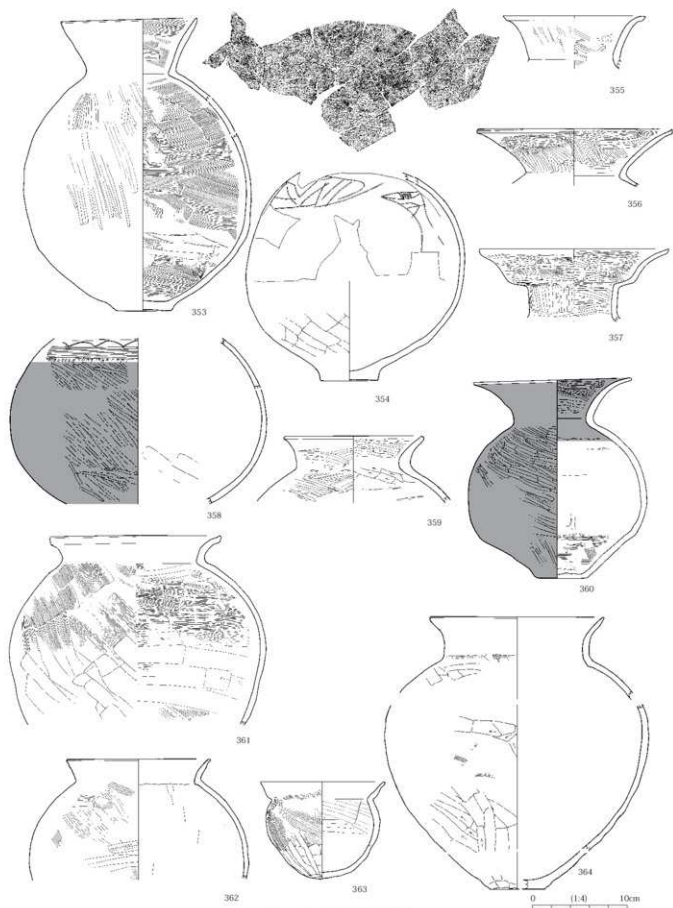
第69図 古墳時代前期土器2



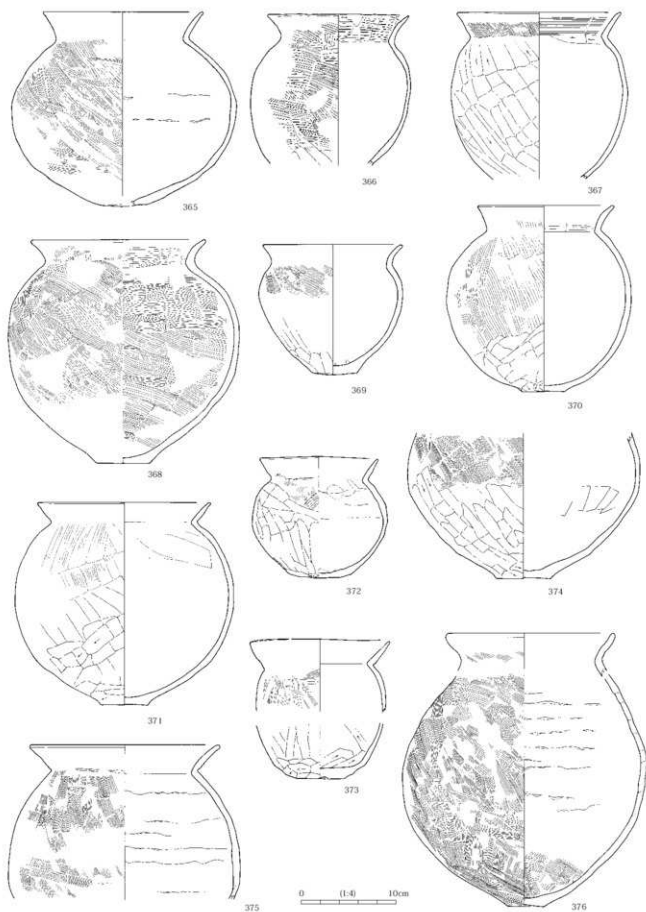
第70図 古墳時代前期土器3



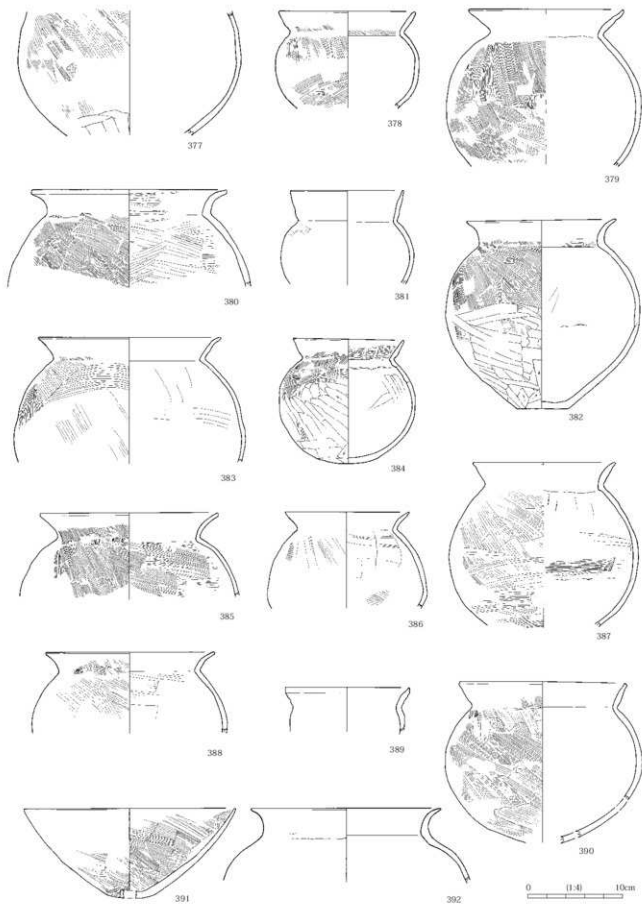
第71図 古墳時代前期土器4



第72図 古墳時代前期土器5

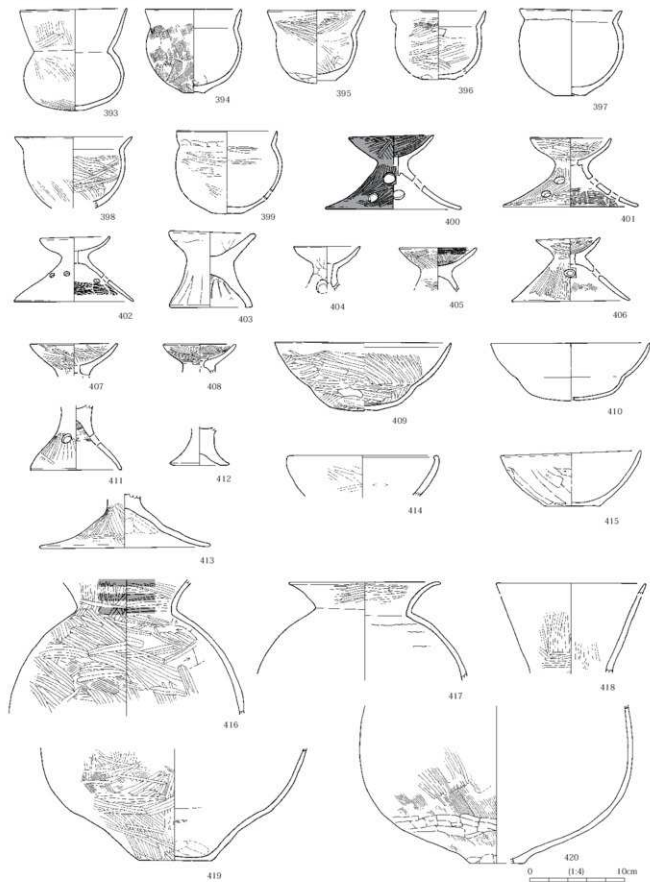


第73図 古墳時代前期土器6

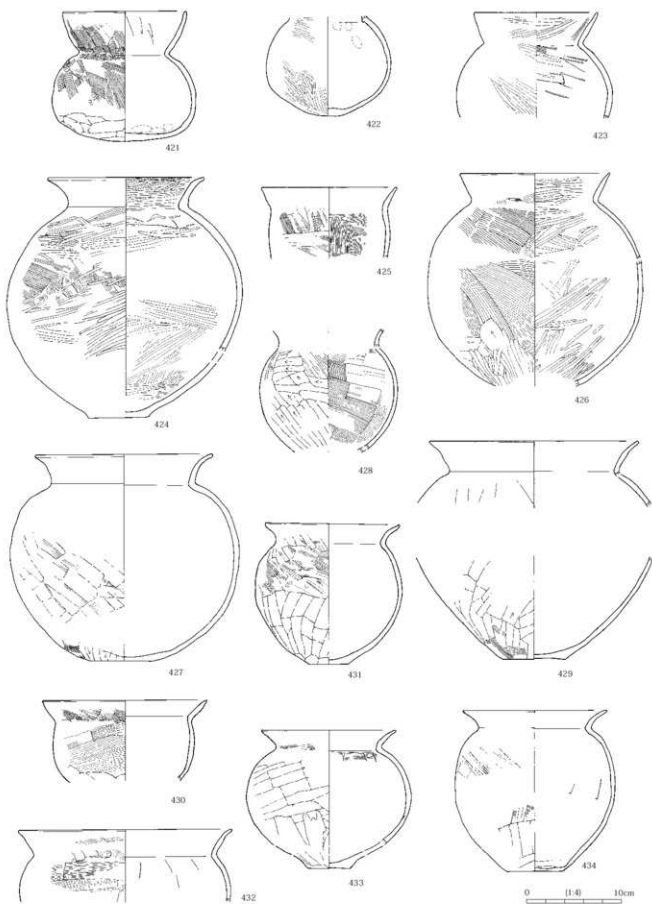


第74図 古墳時代前期土器7

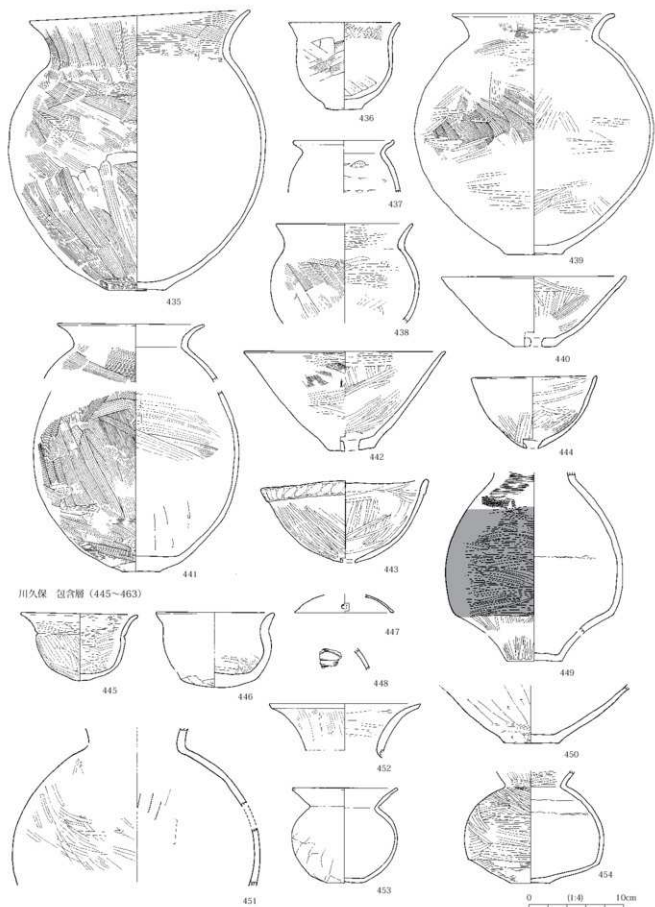
川久保 SQ27 (393~444)



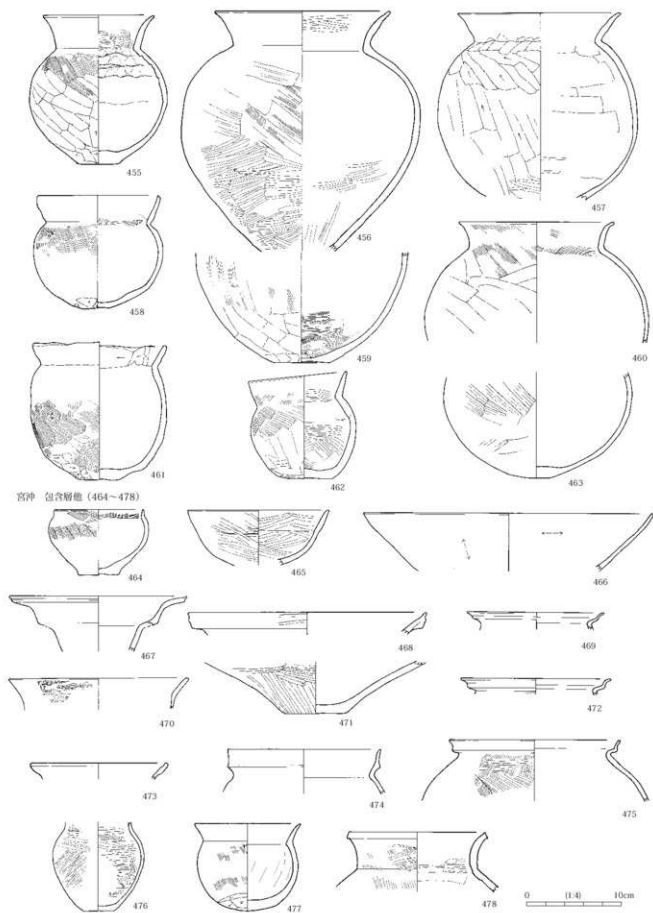
第75図 古墳時代前期土器8



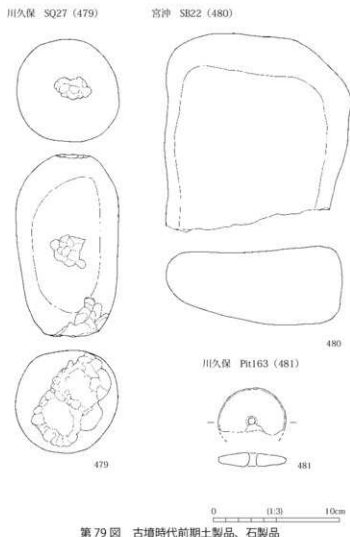
第76図 古墳時代前期土器9



第77図 古墳時代前期土器 10



第78図 古墳時代前期土器 11



第79図 古墳時代前期土製品、石製品

底幅は狭いが、川久保SQ26の348は脚内の中空部が広く、脚も高く口縁の屈曲部幅が広いなど305より後出要素がある。若干の時間差は考えられるが、いずれも明瞭な筒形の柱状脚ではない古い形態とはみられよう。また、青木氏が様相4段階として例示した長野市篠ノ井遺跡群体育館地点出土高杯にみられる高杯脚内をケズリ込む技法(青木和明1990)は、305の基礎調整にケズリ込みが行われた可能性はあるがナゲ調整で断定しにくい。一方、青木氏の様相3段階の柱状脚高杯について器種消長表でも破線で示されるように資料が少なく不明瞭である。したがって、川久保SQ26・27等の土器群の下限は様相3・4段階のいずれかとみるかは微妙で断定しにくい。ここでは川久保SQ26・27、宮沖SD10出土土器は、口縁が「く」字形に折れる外反口縁の鉢、小型丸底、柱状脚高杯の古い形態を伴う土器群と捉え、青木氏様相3段階、土屋氏6段階を中心に、青木氏様相4段階、土屋氏7段階にかかる可能性があると捉えておく。この川久保SQ26・27、宮沖SD10以後の遺構にはⅢ層中の川久保SL04があり、ここでは口縁の長い小型丸底が出土し、本遺跡の終末は土屋氏7段階にかかると思われる。

以上、本遺跡出土資料を中野市周辺の土器群を検討した土屋氏や善光寺平南部の青木氏の検討と比較したところでは、本遺跡は土屋氏4段階に遡る可能性を残しつつも、中心時期は土屋氏5・6段階、青木氏の様相1・2・3段階、なかでも土屋氏6段階、青木氏様相2・3段階が中心で、最終時期は土屋氏7段階、青木氏様相4段階にかかる時期と捉えておく。

周辺に良好な出土例がないため詳細は触れられていない。そこで、やや離れた善光寺平南部の土器を検討した青木一男氏の検討を参照してみる(青木一男1998b)。

青木氏は、土屋氏6段階に対比した様相2・3段階に小型丸底や鉢の出現を認め、土屋氏7段階に対比した様相4段階に柱状脚高杯(屈折脚高杯)が顕在化すると捉える。長野市南部・千曲市と中野市周辺の地域差もあるのか、青木氏は土屋氏よりも小型丸底など小型精製土器の出現時期を古く捉えていると思われるが、川久保SQ26・27や宮沖SD10の土器には小型丸底や外反口縁の鉢が存在するが、定型化した柱状脚高杯は含まれず青木氏の様相2・3段階を含み、様相5段階までは下らないとみられる。

次に川久保SQ26・27、宮沖SD10の土器の下限時期が青木氏の様相4段階にかかるかが問題だが、様相4段階に「顕在化する」とする柱状脚高杯(屈折脚高杯)に注目すると、本遺跡の宮沖SD10の305は柱末で脚が低く、口縁の屈曲する外

(2) 古墳時代前期の土製品 (第79図 PL63)

当該期と断定できないが、川久保3区中世柱穴より出土した土製紡錘車481を図示した。

(3) 古墳時代前期の石製品 (第79図 PL64)

石製品は川久保SQ26から削痕のある軽石1点、同SQ27から敲打痕のある礫1点(479)、宮沖SB11から台石とも思われる礫1点、同じく宮沖SB22から台石1点(480)が出土した。宮沖SD10から磨石が2点出土したが、混入した縄文時代石器の可能性がある。宮沖SB11・22出土の台石とも思われた扇平河川礫は明瞭な加工痕は認められず性格は断定できない。

4 古墳時代前期のまとめ

本遺跡では弥生時代後期初頭以後の遺構・遺物が認められず、古墳時代前期に再び遺構・遺物が認められる。土屋 積氏による中野市周辺の集落跡動向の整理(土屋1998)に照らすと、本遺跡は近隣の千曲川沿いにある牛出遺跡、牛出窯跡と同じ土屋氏4・5段階に出現した可能性が知られた。そして、畿内系土器の影響が強まる土屋氏6段階頃に本遺跡周辺の牛出、牛出窯跡、安源寺、栗林遺跡などが消滅するなかで、本遺跡のみ土屋氏7段階にかかる頃まで存続した可能性を捉えた。土屋氏は、本遺跡と出現時期が類似する牛出遺跡、牛出窯跡については継続期間も短い小規模集落跡で、七瀬、安源寺遺跡のような水田耕作を安定的に営む長期継続遺跡と対照的な遺跡と捉える。また、いくつかの小規模集落は水に恵まれない環境に立地することから河川交通との関係を想定している。本遺跡も牛出遺跡、牛出窯跡と同じ小規模集落の一つとみられるが、本遺跡では水田跡が検出され、水田経営に関わっていた可能性は知られた。また、土屋氏は小規模集落跡が長期継続遺跡と関連しながら存在したとするが、本遺跡は周辺遺跡より遅くまで存続し、継続的集落に依存しきつた関係ではないと思われる。

なお、河川交通に関しては、新潟県境にある信濃町の川久保遺跡(奥埋文2004)で、土屋氏3・4段階の北陸系、東海系、畿内系の土器が多く出土し、他にも弥生時代中期後半と古墳時代中期の土器が一定量出土した。この遺跡は上越方面へ抜けるルート上に位置すると思われ、当該期の交流は河川交通に限らない可能性が窺える。ただし、信濃町川久保遺跡では本遺跡の中心時期と同時期の土器は少ない。また、新潟県では新潟平野に古墳時代前期古墳が分布し、長野県北部出土土器との関係から信濃川沿いの交流が指摘されている(甘粕1986)。信濃川沿いの交流は河川交通の可能性も推測させるが、上記からも川沿いの道を通じての交流の可能性もあると思われる。

当該期には外来系土器の増加とその影響が捉えられている。この外来系土器の出現は単純に集団の政治的移動ではなく、日常的な交流にもよると思われるが、外来系土器と居住者の関係は問題になろう。この点について土屋氏は、中野市域では当該期に外来系土器の波及が顕著ながら、土器様相が大きく変わる直前に集落動向に変化が認められ、土器の画期と集落動向は一致しないとす。外来系土器から人間の移動を想定し、そこで生じる緊張・定着状況は、集落遺跡の動向には見出しにくく、北陸、東海、畿内系土器の影響が及ぶ段階での質的な違いがあるものの、外来系土器はそれを生みだした地域との緊密な関係を選択した結果を現わしていると捉えている。

本遺跡は東海系土器の影響が及んでいた時期に出現し、畿内系の土器の影響が強まる段階までが中心と

なる。外来系土器を模倣した土器はあるが、直接搬入されたと思われる土器は少ない。土器生産については明らかでないところもあるが、本遺跡出土土器には箱清水式壺の特徴を残しつつ、外来系壺の器形を写したと思われるものが認められることから、外来集団が直接定住した遺跡とは言えない。やはり当地域内で分村のような形で出現した遺跡と捉えられよう。

本遺跡は周辺遺跡よりも遅くまで残るものの、あまり時間差をおかずに消滅したとみられ、本遺跡の消長は当該期の中野市域の遺跡全般の動向と関連していたと思われる。それに関し、土屋氏は古墳時代移行期の中野市域の位置づけについて、外来系土器の様相から当地域は北陸→東海→畿内の交流最前線であり、特に善光寺平南部より東海系の影響は直接的と捉えている。その関係が畿内との関係へつながるとも考えられるが、当地域では後続する土屋氏6段階に遺跡が消滅するものが多い。これを古墳時代前期に前方後円墳が多く造られた善光寺南部の集落跡動向を整理した青木一男氏の検討に照らすと、善光寺平南部では東海の影響が強まる土屋氏3・4段階の遺跡は少ないが、中野市周辺には複数の遺跡が存在し、畿内の影響が強まる土屋氏5（青木氏様相1）・6（青木氏様相2・3）段階には中野市周辺の遺跡数は減り、一方で善光寺平南部の遺跡数が増加するようにみえる。青木氏が示した遺跡消長では土屋氏6段階に始まる遺跡が多いながら、土屋氏5段階頃から始まる遺跡をいくつか示しており、中野市域で遺跡数が減る時期とは若干時間差はあるが、両者が近い時期に相対的な遺跡の増減があるようにみえる点は興味深い。

また、当該期の善光寺平南部は畿内系鉢を出土するなど、より畿内色が強い土器様相に思われるが、それは小型精製土器が古墳時代のイデオロギーを体現する儀礼用道具として、前方後円墳の造営に展開していく善光寺平南部の地域的特性とみることでもできよう。ただ、小型精製土器には模倣品や在地色が強い土器もあって、特定祭祀や儀礼に伴う象徴的な道具として限定的に捉えてしまうのは早計かもしれない。

この中野市域と善光寺平南部の遺跡動向に相関関係があるかどうかは、十分な検討ができておらず、結論を述べられない。しかし、善光寺平南部と中野市域の遺跡の消長関係が関連するならば、それは善光寺平の一角同士の比較ではなく、善光寺平南部は古墳時代前期に前方後円墳を造営する首長の本拠地、かたや中野市域は土屋氏が指摘したように前段階に東海地方の影響をより直接的に受けた交流最前線としての地域として、いわば各時代の中核地（の一部）、あるいは対外的な最前線の地域の移動ともみられる。それは、中野市域の交流最前線としての役割の喪失と、新時代の地域編成と捉えられ、あくまでも憶測だが、この動向のなかで本遺跡を含む中野市域の遺跡減少が捉えられる可能性もあるように思われる。

ところで、土屋氏は前方後円墳が、地域的首長の共同体外部との関係を契機として出現したとするが、その母集団の共同体と首長はいかなる関係と捉えられるだろうか。今回、本遺跡は水田跡を営む小規模集落跡で、周辺遺跡の大集落跡が途絶するなかでも存続した可能性が知られた。土屋氏5・6段階に高遠山古墳の築造を想定するなら、水田基盤の長期継続集落と捉えられた遺跡が途絶えていくなかで本遺跡は残るので、首長の役割は定住し継続的に再生産を繰り返す水田経営に基盤を置く強固な農業共同体の代表者とはみられない可能性がある。本遺跡のような流動性のある小集団も含む集団代表者で、その繋がりは大規模用水や水田造成と経営など不動産自体に関わる者ではなく、鉄や威信材の入手など他地域との交流による動産入手と配布の代表者であって、その関係性によって立つ者と考えられるかもしれない。

最後に、当該期の洪水について少し整理しておく。長野県内では古墳時代前期の洪水土層は北信と中信で捉えられているが、北信を中心にいくつか洪水土層を対比してみたい。

古墳時代前期の洪水土層は長野市浅川扇状地遺跡群新幹線W7地区（眞理文1998）、長野市川田条里

遺跡（県埋文2000）、中野市柳沢遺跡（県埋文2012）で捉えられている。最も多く捉えられているのが長野市川田条里遺跡で、①A区5水田・C区6水田・D区6水田、②A区4水田、③B区6水田被覆洪水土層の大きく3つの洪水土層が知られる。そのなかで①のC区6水田跡は前後に2～3回の小規模洪水が想定され、それが犀川系洪水と捉えられている（河西2000）。川田条里遺跡は水田遺構が中心で出土土器が少ない上に、破片資料や、畦内出土など洪水時期を示すと断定し得ない土器もあるが、①のA区5水田・C区6水田・D区6水田被覆洪水が土屋氏4段階前後、②A区4水田は囊しかないが土屋氏5段階頃か、③B区6水田が小型丸底と柱状脚高杯を含む土屋氏7段階頃に該当しよう。浅川扇状地遺跡群新幹線W7地点では、洪水砂層に被覆された水田跡が検出されたが、上面に古墳時代中期住居跡が存在し、この洪水も古墳時代前期の可能性もある。また、柳沢遺跡のV層洪水砂層は上層の古墳時代中期土器出土から古墳時代中期を下限に、下層のVI層から土屋氏5・6段階前後と思われるミガキを施した甕や箱清水式甕の特徴を残す甕が出土し、洪水はそれ以後と捉えられる。

以上、現時点で知られる古墳時代前期洪水は千曲川と犀川合流地点以北に多く、川田条里遺跡で犀川系洪水が捉えられたように洪水は長野県北西部を中心に発生したものである。柳沢遺跡では大きな古墳時代前期洪水砂層が1枚のみで本遺跡IV層が柳沢遺跡のV層に対応する可能性が高い。しかし、本遺跡のIV層が川久保SQ26・27以後とすれば、川田条里遺跡の③B区6水田を覆う洪水土層にあたると思われるが、土器様相は大きく隔たっているように思われる。それ以前の①A区5水田・C区6水田・D区6水田を覆う洪水土層も、規模の大きさは本遺跡IV層に近いが、本遺跡IV層は土屋氏4段階のものとはいえず、本遺跡と川田条里遺跡の洪水の対比は現時点では難しい。洪水土層は地点によって残存状況も異なるし、出土土器からの年代比定も難しいところもあるため詳細は、資料の蓄積を待って検討される必要があるが、古墳時代前期に洪水が多かった可能性は捉えられると思われる。なお、浅川扇状地遺跡群新幹線W7地点では洪水砂層の上面で古墳時代中期の住居跡が検出され、本遺跡でも古墳時代前期水田域が古墳時代後期に竪穴住居跡が造られている。このことから、古墳時代中期以後には洪水の少ない環境へ変化した可能性が知られる。

第5節 古墳時代後期～奈良時代の遺構と遺物

1 古墳時代後期～奈良時代の概要

概要：本遺跡では古墳時代前期以後に一旦遺構・遺物が途切れ、再び古墳時代中期末頃から遺構・遺物が確認される。時期毎に遺構数の増減はあるが、概ね奈良時代前半まで続き、本項では古墳時代後期～奈良時代にまとめて記述する。検出された遺構は竪穴住居跡・掘立柱建物跡など居住遺構が中心で、水田跡など生産遺構は検出されなかった。これらの居住遺構は川久保～宮沖遺跡の段丘上に広く分布し、基本土層Ⅳ層の洪水砂で埋積した古墳時代前期に水田域であった低地でも検出された。斑尾川氾濫原内では当該期の土層は残存せず遺構は確認されなかったが、段丘上で水田跡は検出されなかったことから氾濫原内に水田跡が存在した可能性は考えられる。それは後述する洪水が少ない環境が関連すると思われる。

竪穴住居跡は5世紀末～6世紀前半前後、7世紀頃にやや多く認められる。千曲川沿いの川久保1・2区は竪穴住居跡の分布が散漫で、古墳時代後期を中心として奈良時代の竪穴住居跡は少ないが、斑尾川上流側の宮沖遺跡は古墳時代中期末～奈良時代に至るまでの竪穴住居跡が重複して分布密度も高く、集落の中心と思われる。また、古墳時代後期には現千曲川本流から100mほど離れた場所まで竪穴住居跡が分布し、洪水堆積層があまり認められていないことから当該期は洪水が少ない環境と捉えられる。

本遺跡周辺の中野・飯山市では古墳時代後期の遺跡は多く知られているが、奈良時代まで続く遺跡はあまり知られていない。そうしたなかで、本遺跡は奈良時代初頭まで継続する数少ない遺跡であり、これまで知られていなかった当地域の古墳時代後期から奈良時代の様相を知る上で注目される資料と思われる。

なお、時期区分は土器の項で触れ、遺構の時期は古墳後・奈良〇期と表記する。

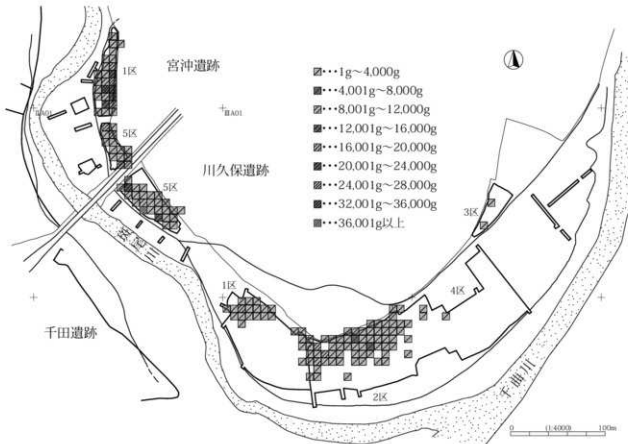
検出面と土層：当該期の遺構はⅣ層上面か、Ⅳ層が堆積していない地点ではⅦ・Ⅷ・Ⅸ層上面で検出した。当該期の土器はⅢ層に含まれ、川久保SB28のカマド煙道や、川久保SB38の輪郭の一部がⅢ層中で検出されたことから古墳時代後期住居跡の構築面はⅢ層中にあると思われる。川久保SB51の埋土最上層は砂質土で小規模な洪水があった可能性は窺えたが、基本土層には古墳時代後期～奈良時代の洪水土層は認められない。竪穴住居跡が千曲川近くまで分布する様相から当該期は洪水が少ない環境と思われ、遺構検出面は黒褐色土層Ⅲ層下面に該当する土層の1面のみである。

2 古墳時代後期～奈良時代の遺構

当該期の遺構は検出面と出土土器から識別した。竪穴住居跡は川久保遺跡で29軒、宮沖遺跡では22軒で合計51軒ある。このなかで川久保SB07・30・41・42・62は方形の落ち込みながら遺存状態が悪いことに加え、カマドや柱穴が判然としない遺構だが、規模から住居跡の可能性があると考えてここに掲載した。掘立柱建物跡は川久保遺跡で8棟、宮沖遺跡で8棟の合計16棟ある。その他、両遺跡を併せて土坑が5基、溝跡1条、遺物集中が11カ所検出された。

(1) 竪穴住居跡 (第17～19表)

川久保3・4区を除く広範囲で検出された。平面形は方形を基調としてカマドを設置するものが一般的である。川久保SB07・30・41・42・62は方形の落ち込みながらカマドが判然としない。SB30は中世の竪穴建物跡の可能性もあるが、完形の須恵器蓋の出土から当該期の遺構と捉えた。また、宮沖SB07は



第80図 古墳時代後期～奈良時代土器の出土重量分布



第81図 古墳時代後期～奈良時代の主要遺構分布概略

出土土器に平安時代の土器が一定量認められたことから平安時代で扱ったが、同量の古墳時代後期～奈良時代の土器も出土し、当該期の可能性も残る。逆に宮沖SB17はわずかに平安時代の土器も出土しているが、奈良時代の土器に遺存状態が良いものが多いことから奈良時代としてここに掲載する。

なお、宮沖遺跡を中心にいくつかの竪穴住居跡でカマドの造り替えが捉えられた。全く同じ場所に間層を挟んで2枚の火床が検出された宮沖SB05（第82図）、近接場所にカマドを造り替える宮沖SB10（第83図）や同SB01、住居跡拡張に伴ってカマドを外側へ移動したと捉えられる宮沖SB09（第84図）、同床面上の異なる場所にカマドを造り替えた宮沖SB06（第85図）や同SB14などの例がある。このなかで宮沖SB10は下層床面で2回、上層床面で床面の貼り直しに伴って2回カマドを造り替えたといえ、各床面の柱穴数から窺える上層建て替えよりカマド造り替えのサイクルが短いと思われる。しかし、一方で複数の主柱穴が近接して柱の建て替えを行なったと思われる川久保SB28の例もあるが、痕跡が残らなかったためか、カマドの造り替えは捉えられなかった。カマドの耐用期間は個別住居跡毎の使用状況によると思われるが、カマドの造り替えは住居跡使用期間が長い可能性を示唆すると思われる。ちなみに、住居跡の柱の建て替えが捉えられた例に川久保SB17、同51、宮沖SB10、拡張された例は宮沖SB09がある。

以下には個別竪穴住居跡について記述するが、出土遺物については遺物の項で後述する。



第82図 同所でのカマド造り替え（宮沖SB05）



第83図 近接場所のカマド造り替え（宮沖SB10）



第84図 住居跡拡張に伴うカマド造り替え（宮沖SB09）



第85図 位置を替えてのカマド造り替え（宮沖SB06）

第17表 古墳時代後期～奈良時代賢六住居跡一覧表(1)

遺跡	SB	地区	グリッド	検出面	平面形	主軸方位	南北(m)	東西(m)	壁	深さ(cm)	床面	施設	カマド 炉
川久保05		2区	IX I08-09-13-14	1面IV層	方形	N22° W	4.2	4.3	直?	10	浅い掘方 所々 堅緻	Pit5 基	北壁中央の石組粘土カマド 時期:3期
重複関係・備考			SL02-03に切られる										
川久保06		2区	IX I09-10	1面IV層	方形?	N9° W	3.7以上		不明	4	浅い掘方 所々 堅緻	なし	北壁中央の石組粘土カマド 時期:3期
重複関係・備考			ST02に切られる										
川久保07		2区	IX J01-02-06-07	1面IV層	方形	N31° W	5.4	5.1	不明	0	堀方を検出か	Pit9基、焼土	なし 時期:3期
重複関係・備考			重複なし										
川久保08		2区	IX J06-07	1面IV層	方形?	N70° E	5.2	2.9以上	不明	0	検出で床面露呈 軟弱	Pit6基(P1- 6主柱穴?)	北壁中央 石組粘土カマド 時期:7期
重複関係・備考			重複なし										
川久保15		2区	IX H09-14	1面NR1b3層	不整形	N27° W	5.2	5	直	40		Pit8基(P1- 貯蔵)	北壁中央 石組粘土カマド 時期:1期
重複関係・備考			SO23が載る										
川久保16		2区	IX H13	1面NR1b3層	長方形	N1° W	3.3	4.2	直	20	平坦	Pit8 基	北壁中央粘土カマド 時期:1-2期
重複関係・備考			ST41に切られる										
川久保17		2区	IX H13-14-18-19	1面NR1b3層	方形	N11° W	5	5.2	直	20	平坦	Pit18 基	北壁中央 石組粘土カマド 時期:2期
重複関係・備考			NR1cに切られる										
川久保28		1区	IX A10-15、B06-11	1面IV層	方形	N62° W	6.7	6.2	直	30~40	深い掘方の貼床 堅緻	Pit8基、焼土、 壁溝	北壁中央 粘土カマド 時期:2期
重複関係・備考			重複なし										
川久保30		5区	II M04	3面VII層	不整形	N17° W	2.7	2.6	直	10	平坦 均した床	焼土跡1基	なし 時期:7期
重複関係・備考			竪穴建物跡 重複なし										
川久保32		5区	II H23	3面VII層	不整形	N11° W	3.2以上	5.5	直	32	薄い貼床 やや 堅緻	Pit14基、焼土	不明(調査区外か) 時期:2期
重複関係・備考			2軒重複の可能性あり										
川久保33		5区	II M03	3面VII層	方形?	N33° W	5.0以上	4.8以上	直	22	浅い掘方 やや 堅緻	Pit6 基	不明(調査区外か) 時期:2期
重複関係・備考			SB40に切られる										
川久保35		5区	II M02	3面VII層	不明	N29° W	4.6以上	0.9	直	30	浅い掘方の貼床	焼土1基	不明(調査区外か) 時期:2期
重複関係・備考			SB37に切られる										
川久保36		5区	II M08	3面VII層	方形?	N29° W	1.8以上	3.0以上	直	34	浅い掘方 やや 堅緻	Pit1基、焼土 跡1基	不明(調査区外か) 時期:7期
重複関係・備考			SB37に切られる										
川久保37		5区	II M02-03-07-08	3面VII層	やや隅丸 の方形	N29° W	4.5以上	6.3	直	35	浅い掘方 やや 堅緻	Pit7 基	北壁中央 時期:7期
重複関係・備考			SB36を切る										
川久保38		5区	II M08	3面VII層	方形?	N32° W	4.4	2.8以上	直	34	浅い掘方 均し た平坦な床	Pit1 基	東辺南隅 石組粘土カマド 時期:1-2期
重複関係・備考			重複なし										
川久保40		5区	II M03	3面VII層	方形	N4° W	4.0以上	4.3以上	直	22	やや堅緻な貼床	Pit7 基	北壁中央、地山削り出し 粘土カマド 時期:7期
重複関係・備考			SB33切る										
川久保41		1区	IX A03	11面IV層	不整形	N77° W	2.8	3.1	斜	20	平坦 均した床 軟弱	なし	なし 時期:1-2期
重複関係・備考			竪穴建物跡 重複なし										
川久保42		1区	IX A03-04-08-09	11面IV層	不整形	N64° W	6	6	直	6	不明 掘方のみ か	Pit7基 焼土 2基	西壁中央焼土がカマド跡か 時期:1-2期
重複関係・備考			重複なし										
川久保49		1区	IX A01-02-0607	11面IV層	方形	N57° W	5.7	5.2	直	30	堅緻な貼床	Pit10基、壁溝、 焼土1基	北西壁中央 粘土カマド 時期:2期
重複関係・備考			ST08-09、SK703-761に切られる										
川久保50		1区	IX A08-09-13-14	11面IV層	やや隅丸 の方形	N56° W	6.6	6.2	直	26	堅緻な貼床	Pit8基、壁溝、 焼土	北西壁中央 粘土カマド 時期:3期
重複関係・備考			重複なし										
川久保51		1区	IX A07-08-12-13	11面IV層	方形	N59° W	6.6	6.5	直	38	堅緻な貼床	Pit12基、壁溝、 簡土切溝	西壁中央 石組粘土カマド 時期:5期
重複関係・備考			重複なし										
川久保53		5区	II M14-15-19-20	3面VII層	方形	N53° W	7.1(7.4)	4.1m以上	直	30	浅い掘方の貼床	Pit2 基	東壁中央石組粘土カマド、 北壁中央埋溝のみ 時期:4期
重複関係・備考			SB54を切る										

第3章 検出された遺構と遺物

第18表 古墳時代後期～奈良時代賢六住居跡一覧表(2)

遺跡	SB	地区	グリッド	検出面	平面形	主軸方位	南北(m)	東西(m)	壁	深さ(cm)	床面	施設	カマド 炉
川久保	54	5区	II M14	3面Ⅷ層	方形?	N36° W	5.4	3.5以上	直	14	浅い掘方の貼床	Pit1基	北西壁中央 石組粘土カマド 時期:4期
重複関係・備考			SBS3	切られる									
川久保	55	1区	IX B07-12	11面Ⅳ層	方形	N61° W	4.0	4.1	直	40	深い掘方の貼床	Pit6基、壁溝	西辺中央 石組粘土カマド 時期:2期
重複関係・備考				重複ないが、9面SD58-NR1dが東壁割る									
川久保	58	5区	II N12-17	3面Ⅳ層	長方形	N2° W	4.6	3.4	直	10	浅い掘方の貼床	Pit4基	東壁中央 石組粘土カマド 時期:7期
重複関係・備考				中世 Pit に切られる									
川久保	59	5区	II M20-25, N16-21	3面Ⅷ層	方形?	N75° W	4.0以上	2.1以上	直	50	湧水で仔細不明	不明	不明(調査区外か) 時期:4期
重複関係・備考				SB61を切り, SK1945切られる									
川久保	60	5区	II N22	3面Ⅷ層	方形?	N35° W	4.6	4.2	弱斜	50	浅い掘方の貼床 壁敷	Pit6基	北壁中央 石組粘土カマド 時期:4期
重複関係・備考				ST10, SK1626~1909~1939切られる									
川久保	61	5区	II M20, N16	3面Ⅷ層	方形?	N42° W	5.2	2.6以上	直	40	湧水で仔細不明	不明	不明(調査区外か) 時期:7期
重複関係・備考				SBS9切られる									
川久保	62	5区	II N16-17, 21-22	3面Ⅷ層	不整形	N42° W	3.3	3	斜	14	平坦 均した床 敷	なし	なし 時期:4期
重複関係・備考				竪穴建物跡 ST13, SK1930に切られる									
宮沖	01	5区	II H11-12	1面Ⅷ層	方形	N13° W	4.8	3.7以上	直	20	浅い掘方で壁敷	Pit5基	北壁中央 造り替え2基 石組粘土カマド 時期:7期
重複関係・備考				SK610-1731-1732-1807~1809に切られる									
宮沖	02	5区	II B15	1面Ⅷ層	長方形	N27° W	5.4	6	直	36	浅い掘方で壁敷	Pit23基(重複遺構含む?)	北辺中央 石組粘土カマド 時期:5期
重複関係・備考				SD09, SK509-749-794-796-797-800-839-840-1359に切られる SD14を切る									
宮沖	03	5区	II C16-21	1面Ⅷ層	方形?	N8° W	6.7	4	直	20	浅い掘方で北側壁敷	なし	不明(調査区外か) 時期:2期
重複関係・備考				SK1293, SF09-12-15に切られる SK533-617-1351-1370-1466-1471-1472-1467-1469は不明									
宮沖	05	1区	XIV W01-06	2面Ⅳ層	方形	N34° W	5.4	5.3	直	30	浅い掘方の貼床 壁敷	Pit14基(北壁中央 石組粘土カマド 造り替え 重複 SK含む?)	時期:6期
重複関係・備考				SD10, SB25切る ST35-ST36に切られる SK1704-1726-1727-1735~1737-1803-1804不明									
宮沖	06	1区	XIV W16-21	2面Ⅳ層	方形	N34° W	4.8	4.7	直	40	浅い掘方の貼床 壁敷	Pit4基?	新(東壁北寄り 不明旧)南壁西より 煙道のみ 時期:6期
重複関係・備考				SB09-19-30-31を切り, SK1356~1358-1364-1365-1407-1411に切られる SK1409-1410-1412-1413本跡 Pit? SK1390-1405-1406-1415関係不明									
宮沖	08	1区	XIV V20-25, W21	2面Ⅳ層	方形?	N17° W	2.4以上	3.2	直	20	浅い掘方の貼床 壁敷	Pit1基	東壁中央 石組粘土(禁口除のみ石) 時期:7期
重複関係・備考				ST38, SK354-355-933-934+1536, SL01に切られる									
宮沖	09	1区	XIV W16-21	2面Ⅳ層	方形?	N57° W	4.2以上	7.7以上	直	50	浅い掘方の貼床 壁敷	Pit5基、壁溝	新(西壁中央 石組粘土旧)西壁中央内側 火床のみ 時期:2期
重複関係・備考				既述カマドを造り替え SB06, SK1652-1653に切られ, SB31を切る SK1676~1679-1681関係不明 SK1680も切るか?									
宮沖	10	1区	XIV V24-25	2面Ⅳ層	方形	N10° W	5.4	5.6	直	20	浅い掘方の貼床 床貼り直し	Pit19基(上面床8基, 下面床11基)壁溝	東壁中央 上面床2回, 下面床4回造り替え 石組粘土カマド 時期:7期
重複関係・備考				SB11を切り, SK523-901~903-915-1460-1461-1463-1464-1490-1688-1689, SD11に切られる									
宮沖	12	1区	XIV R21, W01	2面Ⅷ層	方形	N85° W	5.6以上	5.8	直	10	浅い掘方の貼床 比較的壁敷	Pit4(19基重複 SK含む) カマド	西壁中央 石組粘土カマド 時期:2期
重複関係・備考				SB16, SD10を切り, SK1022-1082-1084-1087-1089-1090-1099-1110-1112-1720-1734-1882に切られる									
宮沖	13	1区	XIV W11	2面Ⅳ層	方形?	N2° W	3.6	2.0以上	直	20	浅い掘方の貼床 壁敷	Pit3基	北壁中央 石組粘土カマド 時期:5期
重複関係・備考				SB28-30切る SL01, SK1491~1494に切られる									
宮沖	14	1区	XIV V15-W11	2面Ⅳ層	方形	N82° W	6.3	6	直	50	浅い掘方の貼床 壁敷	Pit6基、壁溝	新(西壁南より 石組粘土カマド旧)北壁中央 火床、煙道のみ 時期:6期
重複関係・備考				SB07, SL01-ST11~33-37, SK947-949-951~953-955-956-964-965-969-974-976-978~980-983-984-1290-1294-1296-1297-1307-1387~1389-1391-1395-1456-1528-1538-1594-1595-1600~1604-1606-1607-1622-1623-1627~1635-1684-1811に切られる SB19-26-27-28, SK1776を切る									

第19表 古墳時代後期～奈良時代賢六住居跡一覧表(3)

遺跡	SB	地区	グリッド	検出面	平面形	主軸方向	南北 (m)	東西 (m)	壁	深さ (cm)	床面	施設	カマド 炉	
宮沖 15	1区	II 805, C01	2面Ⅳ層	方形?	N7° W	2.1 以上	3.4	以上	直	5	浅い掘方の貼床 壁敷	Pit1 基	北壁中央 火床のみ 構造不明 時期: 6期	
重複関係・備考		SK1744~1746・1765・1766に切られる?												
宮沖 16	1区	X IV R16・ 21	2面Ⅳ層	方形	N68° W	5.6 以上	6.1	直	10	浅い掘方の貼床 壁敷	Pit8 基	西壁中央 石組粘土カ マド	時期: 4期	
重複関係・備考		SD10を切り, SK1129~1134・1136~1139・1164・1168・1169・1171・1232・1279・1814, SB12に切られる												
宮沖 17	1区	X IV Q20・ 25, R16	2面Ⅳ層	方形	N25° W	6.8 以上	3.8	直	24	浅い掘方の貼床 壁敷	Pit9 基, 埴土 1基	不明(調査区外か)	時期: 7期	
重複関係・備考		SK1149・1150・1156・1157・1168・1179~1194・1264・1506・1507・1509・1541・1542・1568・1643・1740に切られる												
宮沖 18	1区	X IV V10	2面Ⅳ層	方形	N60° W	4.4	4.5	直	30	浅い掘方の貼床	Pit3 基, 壁溝	西壁中央 石組粘土カ マド	時期: 2期	
重複関係・備考		SB07・23, SK997・999・1020・1034・1035・1231・1300・1301・1320・1358・1359・1363に切られる										SK1454*		
宮沖 19	1区	X IV V15・ 20, W11・ 16	2面Ⅳ層	方形	N30° W	6.7	6.7	直	30	浅い掘方の貼床 壁敷	Pit4 基, 壁溝・間仕切溝	西壁中央 石組粘土カ マド	時期: 5期	
重複関係・備考		SB06・14・30, ST32・33・37, SK925・926・928・930・931・936・937・966~968・971・1353・1495・1497・1499・1502・1534・1539・1592・1621・1623・1659・1662・1664・1683に切られる										SB27を切る	SK1671~1674・ 1684・1751~1753・1755~1759・1765 関係不明	
宮沖 23	1区	X IV V09・ 10	2面 V・Ⅷ層	方形	N68° W	3.4 以上	2.4	以上	直	10	軟弱 掘方なし	Pit なし	なし(遺存せず)	時期: 不明
重複関係・備考		SB18, SK1693を切る											SK1524との関係不明	
宮沖 25	1区	X IV W06	2面Ⅳ層	方形?	N46° W	4.6 以上	3.0	以上	直	30	軟弱	不明	西壁中央 石組粘土 (禁口陥石)	時期: 6期
重複関係・備考		SB04・05・28・29, SLO1, SK1045・1046・1236・1237に切られる											SK1697・1709・1804・1805は関係不明	
宮沖 27	1区	X IV V15・ 20, W11・ 16	2面Ⅳ層	方形	N89° W	8.8	8.4	直	35	貼床 壁敷	Pit4 基, 壁溝	西壁中央 石組粘土カ マド	時期: 2期	
重複関係・備考		SB7・14・19, SLO1, SK924~926・930・931・936・937・939・941・942・945~949・951~953・966~975・979~983・1006・1296・1395・1396・1496・1497・1499・1539・1592・1593・1595・1601・1602・1604・1622・1623・1630・1633・1636・1639~1641・1645・1648・1649・1656・1658・1664・1668・1669・1671~1673・1682・1684・1691・1692・1694・1695に切られる												
宮沖 28	1区	X IV W06・ 11	2面Ⅳ層	方形?	N52° W	5.7 以上	5.0	以上	直?	7	浅い掘方の貼床 壁敷	Pit1	西壁中央 SB04に壊 され火床のみ	時期: 5期
重複関係・備考		SB25・29を切り, SB04・13・14, SLO1・ST30・SK954・956~960・962・963・1004・1007・1258・1259・1305・1391・1392に切られる											SK1701・1702・1707・1708・1723~1725 関係不明	
宮沖 29	1区	X IV V10・ 15, W06・ 11	2面Ⅳ層	不明(方 形)	N35° W	4.5 以上	5.0	以上	直	35	軟弱 微凹凸 あり	なし	不明(他住居跡に壊さ れたか?)	時期: 6期
重複関係・備考		SB25を切り, SB04・14・28, SLO1, SK1003・1036・1046・1236・1244に切られる												
宮沖 30	1区	X IV W11・ 16	2面Ⅳ層	不明(方 形)	N25° E	3.7 以上	1.8	以上	直	30	やや軟弱	なし	調査区外か	時期: 不明
重複関係・備考		SB06・13, SK938・1292に切られる											SK1806との関係不明	

川久保SB05 2区1面 IX I08・09・13・14 (第86図 PL 9)

川久保2区北西部に位置し、中近世水田耕作土層下で露出したⅣ層上面で検出した。南側是水田造成で削平され、埋土は厚さ10cmほどしかない。本跡の重複位置のⅦ層上面で検出したSB14は本跡掘方と判明して欠番とした。他遺構との重複では本跡が中世のSLO2・03に連続すると思われる畑畑間の溝に切られる。平面形は1辺約4.2～4.3mの方形である。埋土中には、大きな炭化材はないものの、炭化材小片を多く含み、土器も小破片が散漫に出土した。床面上でカマドと焼土、柱穴と思われるピット5基を検出した。ピットは本跡に重なる位置の調査2面で検出し、北東隅を除いて本跡辺と平行する位置にあることから整理作業で北西隅をPit1、南東隅をPit2、南西隅をPit3～5とした。カマドは北辺中央に位置し、表土除去作業中にカマド石が抜けたが、北壁よりカマドが若干飛び出る石組粘土カマドと思われる。焼土は西辺際中央2カ所認められたが、炭化材片が多く含まれることから本跡は焼失住居跡の可能性があり、その焼失時にできた焼土かもしれない。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良3期と思われる。

川久保SB06 2区1面 IX I09・10 (第86図 PL9)

川久保2区北西部NR1a内のIV層上面で検出。古墳時代後期STO2に切られる。本跡北辺付近で地震亀裂痕と思われる帯状の落ち込みがあり、本跡床面上でも認められたが、近接する古墳時代後期STO2の図化記録ではPit11が亀裂痕を切るようにみえる。亀裂痕は古墳時代後期に形成されたとも考えられるが、STO2 Pit11との重複がわずかで前後関係は断定できない。本跡は遺存不良で西辺・南辺は確認できなかったが、カマドが北辺中央とすれば、本来の規模は4m前後と思われる。埋土は床面直上付近のみ遺存し、炭化物や炭化材を多く含む土層が認められ、遺物も比較的多く出土した。焼失住居跡と思われる。施設はカマドのみがあり、柱穴や貯蔵穴は確認できなかった。カマドは北辺にある石組粘土カマドで、火床と支脚、石組の一部と思われる礫が検出された。出土遺物から古墳後・奈良3期と思われる。

川久保SB07 2区1面 IX J01・02・06・07 (第86図 PL9)

川久保2区中央、SB08北側に位置する。II層水田耕作土層下で露出したIV層上面で検出したが、カマドもなく、掘方の底面も不明瞭である。捉えられた平面形は1辺5.1～5.4mの方形で、北側に幅約0.8m、長さ約0.5mの長方形の張り出しがある。入口施設とは斯じ得ず、性格は不明である。埋土はIII層基調の黒褐色土の単層で、床面は軟弱である。施設はビット9基、焼土1基がある。ビットはPit6のみ北壁際にあるが、他は本跡南半の各辺際で検出された。ただし、柱穴と断定し得たのはPit3のみで、他は浅い。焼土は中央にあつて被熱で赤化し、周囲に炭化物・焼土ブロックが分布する。掘方から少量出土した土器から、本跡の時期は古墳後・奈良3期と思われる。

川久保SB08 2区1面 IX J06・07 (第86図 PL9)

川久保2区中央にあり、中近世水田耕作土下で露出したIV層上面で検出。南側は水田造成で削平され、検出時にも床面北半分が露出した。残存する東西長は約5.2m、東辺際で検出された焼土ブロック・炭化物集中が辺中央に位置するカマドとすれば、南北約1辺5.2mと推測され、平面形は方形と思われる。埋土はほとんど残存せず、検出面で掘方を検出したと思われ、壁・床面の詳細は不明である。本跡内ではビット6基、カマドと思われる焼土・炭化物集中が検出された。ビット6基はいずれも掘方で検出したもので、本跡施設と言いつてもいいが、北辺に平行して並ぶPit1・6は主柱穴の可能性がある。壁際のPit2～4は性格不明である。東辺中央の焼土ブロック・炭化物集中は、直接被熱を受けた火床は認められなかったが、カマドと思われ、廃絶時に壊されたか植物根等で攪乱されたと思われる。遺物は焼土ブロック周辺でのみ採取された。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良7期と思われる。

川久保SB15 2区1面 IX H09・14 (第87図 PL9)

川久保2区北西部NR1bの3層上面で検出。本跡西部に土器集中SQ23が載る。本跡南辺中央に張り出し状の浅い落ち込みが検出されたが、土層断面観察では本跡が切られるように認められ、本跡施設とは認定しなかった。他に重複遺構はない。平面形は不整形形で、1辺は約5.0～5.2mである。埋土は上層に黒褐色土、下層に炭化材・焼土を含む暗褐色土層があり、東辺中央付近の埋土中には焼土粒の集中が認められた。下層の炭化材は細い丸木が放射状に分布し、南辺東側の1m四方ほどの範囲に、屋根材とも思われるカヤ状炭化物が認められた。壁はほぼ垂直で検出面から床面まで40cm強と深い。施設にはビット8基、カマドがある。ビットのなかでPit2・3・4(7)・5は方形に並ぶことから主柱穴と思われる。隣接するPit4・7、重複するように位置するPit2・3はそれぞれ建て替えの柱穴と思われる。Pit1は南辺西寄りに位置し、貯蔵穴と思われる。Pit8は中央南よりにある柱穴だが、建物構造上の機能は不明である。カマドは北辺中央にあり、焚口脇のみ石を組んだ石組粘土カマドである。煙道は北側へ80cmほど長く延びる。袖外側まで

被熱で赤化し、火床中央には河川礫の支脚と高さを調整するためと思われる土器片が出土した。カマド西脇や南西隅付近で甕が出土した。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良1期と思われる。

川久保SB16 2区1面 IX H13 (第88図 PL9)

川久保2区西端、NR1bの3層上面で検出。浸食地形NR1cに西辺が壊され、南西隅は平安時代SB18に切られる。また、調査時に本跡施設と捉えたPit1・2・3・6と南に位置するSK66は、整理作業で出土遺物から本跡を切る平安時代川久保ST41の柱穴と捉えた。平面形はやや東西に長い長方形で、東西約4.2m、南北約3.3mを測る。埋土はNR1bの2層黒褐色土を基調とし、黄褐色ブロック土を若干含む。壁はほぼ垂直で、床面はほぼ平坦である。本跡内で検出されたピットは8基あるが、本跡施設と思われるピットは床下検出のPit7・8で、Pit8は上面が貼床される。また、Pit5は浅く施設とは断定できない。カマドは北辺中央に位置する粘土カマドで、袖内に焼土ブロックを混じり、その上に袖土の黄褐色粘土混じり土を貼っている。カマドを造り替えた可能性がある。出土土器は破片が多いが、埋土中からST41柱穴に伴う土器と思われる平安時代黒色土器A杯・椀、土師器小型甕が出土した。また、本跡南東隅でこも編石と思われる拳大河川礫が出土した。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良1・2期と思われる。

川久保SB17 2区1面 IX H13・14・18・19 (第87図 PL9)

川久保2区西部に位置し、NR1bの3層上面で検出。西辺はNR1cに切られる。重複住居跡はないが、床面検出ピットの一部は本跡と重複する柱穴の可能性がある。平面形は約5.2～5.0mの方形である。埋土はNR1bの2層を基調とする暗褐色～黒褐色土で、壁はほぼ垂直、床面は貼床で西へわずかに傾斜する。床面上でピット18基とカマドを検出した。Pit18は床下検出の上面に粘土が貼られた浅い土坑で、Pit2は床面検出ながら上面が黄褐色土で埋められていた。この2基は性格不明ながら埋められる共通点から類似した性格の施設と思われる。Pit1・11・13・15は辺に平行して方形に並びことから主柱穴、Pit14・16はその建て替え柱穴と思われる。Pit12・17は出土土器から本跡施設と思われるが性格不明である。他のPit3～10・16は竪穴住居跡内の位置から本跡施設とは考えにくく、Pit15を切るPit3も小型で隣接するPit4・5とも重複する中世柱穴の可能性がある。カマドは北辺中央に位置する石組粘土カマドで、煙道は北壁から60cmほど延びて、調査当初に入れたトレンチにかかって先端形状は不明である。袖内では芯材と思われる平行して並べられた3個の礫が検出されたが、その焚口付近に浅い窪みが検出され、手前に芯材の礫がもう1個存在したと思われる。カマド前に天井石と思われる平石が出土し、廃絶時に壊されて抜かれた可能性がある。また、カマド火床上で逆位の完形に近い土師器甕が出土したが、支脚の可能性もある。土器はカマド左脇脇から集中して出土し、南壁脇で長さ40cmほどの河川礫2個、東壁際でこも編石と思われる拳大河川礫の集中が認められた。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われる。

川久保SB28 1区11面 IX A10・15、B06・11 (第88図 PL10)

川久保1区北部にある。IV層の10cmほど上部のⅢ層中で煙道が発見され、トレンチを入れながら平面形を確定した。平面形は1辺約6.5～6.7mの方形である。埋土はⅢ層の黒褐色土層を基調とし、色調とIV層黄褐色シルトブロックの含まれ方から上下2層に分層した。遺物は下層から少量出土した。壁はほぼ垂直で、床面は深い掘方を伴う貼床で堅い。施設はピット8基、焼土、壁溝、カマドがある。ピットは2基ずつ重複して方形に並び、主柱穴が建て替えられたとみられる。柱痕跡はPit2のみ確認できた。なお、Pit4とPit8は重複に気付くのが遅れて前後関係は捉えられなかった。主柱穴は直径60～100cmの円形で、深さ約70～90cmと深い。焼土は中央付近にあり、被熱で赤化した範囲と認められ、灰と思われる。壁溝はカマド周辺を除いてほぼ全周する。カマドは北辺中央にある粘土カマドで、幅軸がやや厚いが、内

面は被熱で赤化しているものの、外側は埋土と類似した土質で見誤った可能性がある。カマドは幅50～60cm、長さ100cmほどの規模で、煙道は壁から90cmほど延びる。火床中央に自然礫の支脚上に高さ調整のためと思われる小型甕が伏せられていた。土器はカマド周辺から多く出土し、こも編石と思われる拳大河川円礫が南・東辺周溝内から散漫に出土し、北部床面近くで滑石製鈴鐘車が出土した。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良2期とみられる。

川久保SB30 5区3面 II M04 (第89図 PL10)

川久保5区2面で露出したⅧ層の河川砂礫層上面で方形の黒褐色シルトの落ち込みと認められ、トレンチでわずかな壁の立ち上がりを確認して竪穴住居跡と認定した。平面形は南北約2.7m、東西約2.6mの不整形で、検出面から床面までの深さは10cm前後である。埋土は黒褐色シルトで直径1～3cmの円礫を少量混入する。床面は平坦ながら、直径5～15cmの円礫を含む皿盤の砂礫層を直接床面とし、東壁近くに約20cm×10cmの焼土が検出された。焼土は被熱で床面が赤化したと捉えられたが、赤化層は薄い。焼土はカマドと断定できず、柱穴も検出されなかった。小片ながら平安時代の土器も出土したことから、近接する川久保SB31と同様に中世竪穴建物跡とも考えたが、床面付近から完形の須恵器蓋が1点ながら出土し、本跡の時期は古墳後・奈良7期と思われる。

川久保SB32 5区3面 II H23 (第89図)

川久保5区3面Ⅷ層上面で検出した。5区北端のJR飯山線際に位置し、北部は調査区外へ延びる。平面形は西と南辺が直線的で、直角に折れるが、東辺は途中で屈曲した不整形で東西長は約5.5mを測る。埋土は黒褐色砂質土で、少量の人頭大礫を混じる。壁はほぼ垂直で、床面の北部は薄い貼床で所々Ⅹ層の土流堆積礫が露呈し、南部は浅い掘方を伴う貼床で比較的堅い。床面でPit1～5の5基のピットと焼土、掘方でPit6～14の9基を検出した。ピットはいずれも平面形が直径約20～40cmの円形で、深さは10～20cmで柱穴と思われる。Pit11・7・9は南辺と平行した方形に位置して支柱穴と思われ、Pit8・12は北東辺と直交方向に焼土を挟んで位置する。焼土は床面中央に位置し、東側に隣接して地山礫が検出された。本跡は調査時に1軒の住居跡と捉えたが、出土土器に複数時期の土器が含まれる。本跡の西辺はN11°W方向で、東辺北東部がやや西へ屈曲するように認められたが、床面中央の焼土を南辺中央のカマドとする1辺5.2m前後の主軸方位N30°Wの住居跡が北側に重なっていた可能性がある。Pit8・12はこの重複住居跡の柱穴とも思われる。古墳後・奈良1期土器が混じるが、本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われる。なお、出土遺物には平安時代土器も少量混在し、ピットの一部は重複する中世柱穴の可能性もある。

川久保SB33 5区3面 II M03 (第89図 PL10)

川久保5区北西部に位置し、3面のⅧ層上面で検出した。1軒の住居跡として検出したが、不明瞭な北東部を確定するため試掘トレンチ断面を再精査したところ、本跡を切るSB40が捉えられた。他遺構との重複では2面SK1340・1472・1480が本跡埋土まで達するが、重複する3面の遺構はSB40以外にない。本跡南東部は試掘トレンチにかかり、北東部をSB40に切られるが、平面形は南北長約5.0m前後の方形と思われる。埋土は黄褐色土をブロック状に含む黒褐色土の単層である。壁はほぼ垂直で、床面ではⅩ層の土流堆積礫頭が露出するが、南・西・北壁際に幅約1m、深さ15～20cmの溝状の窪みが廻るように認められた。床中央は堅いが、溝状の窪み上面は軟弱で、黄褐色シルトブロックを含む土層で埋められていた。これを住居跡掘方と考えたが、北西壁面付近に焼土ブロックの混入が認められ、北壁付近にも焼土、炭の集中が認められたことから開口していた可能性がある。床面上で検出した施設にはピット5基が

ある。本跡の Pit3 は SB40Pit2・5 とされた柱穴と方形に位置し、これらが本跡主柱穴とも思われるが、SB40Pit2 は SB40Pit1・4 と方形に配置する SB40 主柱穴としても妥当な位置にあり、いずれの柱穴とも断定はできなかった。他は柱穴と思われるが、性格は仔細不明である。カマドはトレンチや SB40 と重複する範囲以外では認められなかった。遺物は SB40 との重複が捉えられるまで一括で取り上げてしまい、古墳時代後期と奈良時代の遺物が混在する。埋土上層から多く出土し、床面付近での出土はあまりないが、本跡と捉えられた範囲で出土した土器から、本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われる。

川久保 SB35 5区3面 II M02 (第90図 PL10)

川久保5区北西端にあり、3面Ⅷ層上面で検出した。北・西辺は調査区外へ伸びてわずかな範囲のみの調査である。SB34 と SB37 に切られる。規模は調査区内で東西長約4.6m以上としか捉えられず、直線的な南辺から平面形は方形と思われる。埋土は黒褐色土の単層で、黄褐色土粒を全体的に混入し、床面北側周辺から土器片や20～30cm大の礫が多く出土した。壁は垂直で、床面は浅い掘方を均した程度の貼床で堅くしめる。南辺中央の壁際に焼土が検出され、周囲に焼礫も散在してカマドと思われる。出土土器に奈良時代土器も混じるが、主体となる出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われる。

川久保 SB36 5区3面 II M08 (第90図 PL10)

川久保5区北西隅に位置し、平成17年度に試掘トレンチにかかって発見された。3面Ⅷ層上面で検出し、当初は1軒の住居跡と捉えたが、南部の精査中に SB37 カマドが発見されて本跡が SB37 に切られることが判明した。本跡西側は調査区外へ伸び、北側は SB37 に切られて、わずかな残存である。平面形は残存する南辺から1辺3m以上の方形と思われる。壁は垂直で床面はやや堅くしめるが、掘方は浅く、床面の高さは SB37 と同じである。床面上ではピット1基が検出された。Pit1 は平面形が直径30cmの円形で、深さ約20cmを測る。対応するピットは重複する SB37 内では確認できなかったが、位置的に主柱穴と思われる。カマド火床や芯材の礫、煙道は確認されなかった。須恵器杯が多く出土し、内底面に「水」と刻書された須恵器杯Aが出土した。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良7期と思われ、SB37 と接合する土器片も多い。

川久保 SB37 5区3面 II M02・03・07・08 (第90図 PL10)

川久保5区北西隅に位置し、3面Ⅷ層上面で検出した。本跡が南側の SB36、北側の SB35 を切る。SB36 と重なる南壁は一部認識して掘り下げ、後に残存範囲から捉え直したが、カマドが内側に入った位置にあり、壁はやや北寄りに位置していたとも思われる。また、本跡カマド主軸方位は N15°W 方向で、本跡東辺の N29°W 方向とずれる方位である。本跡東辺は重複する SB36 東辺に重なりと捉えたが、本来はやや西側に位置する北壁を見逃した可能性がある。本跡西側は調査区外へ伸びて全容は不明だが、残存する南北長は約6.3mを測り、カマドが南辺中央にあるとすれば東西長は約5.2m前後で、平面形は長方形と思われる。埋土は炭・焼土粒を混入する黒褐色土で、北東隅床面上で灰状の軟弱な暗灰色土が分布すると認められた。また、埋土南西部に薄い炭化物集中、北西床面上で焼土・炭化物集中が検出されたが、炭化材は北壁際やカマド周辺のみしか認められず、焼失住居跡と断定できない。遺物の多くは埋土中から出土し、床面上の出土は少ない。壁はほぼ垂直で、床面は北側で堅緻な床面が捉えられたが、南側は地山から水が染み出して詳細な様相は捉えられなかった。床面ではピット7基とカマドが検出された。カマドは南壁中央付近に位置し、精査中に存在が捉えられ、煙道は調査区境のトレンチにかかった部分のみ確認できた。石組粘土カマドで、カマドの幅約60cmに比して、長さは80cmほどと短い。ピットはいずれも形状から柱穴と思われ、東壁から1m前後内側に入った位置にある Pit1～5 がほぼ列状に並び、Pit6 が北壁際、Pit7 が北西部に位置

する。Pit2・4・7か、Pit3・5が主柱穴と思われる。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良7期と思われる、SB36と接合した破片も多い。

川久保SB38 5区3面 II M08 (第90図 PL10)

川久保5区北部の調査区西壁にかかって位置し、2面SD104底面で本跡の煙道が発見されたが、3面Ⅷ層上面で検出した。同調査面の重複遺構はない。本跡西側は調査区外へ延びて全容は不明だが、南北長から平面形は1辺4.4m前後の方形と思われる。埋土は上層に黒褐色土、下層に薄い炭層を挟んだ黒褐色土、壁際に黄褐色土と黒褐色土が混じり込んだ土層が認められた。北側の床面上で焼土・炭の散布と炭化材も認められたが、わずかな量で焼失住居跡とは言い切れない。壁際から長さ30cmほどの石が出土した。壁はほぼ垂直で、床面は浅い掘方を均したもので平坦である。施設にはピット1基とカマドがある。Pit1はカマド左脇にある柱穴だが、対応する位置の柱穴は検出されなかった。カマドは東辺南隅近くにある石組粘土カマドである。天井部は残存せず、長さ30cmほどの天井石と思われる礫が離れて出土し、廃絶時に壊された可能性がある。カマド右脇から完形小型甕、左脇から杯類、カマド内から土器片が多く出土し、南東隅壁際から砥石が出土した。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良1・2期と思われる。

川久保SB40 5区3面 II M03 (第89図 PL11)

川久保5区北部3面Ⅷ層上面で検出。重複するSB33北東辺の不明瞭な輪郭を確定するために、本跡にかかる試掘トレンチ断面精査と東壁周辺の再検出を行ったところ、本跡カマド煙道が検出された。本跡西辺はSB33として掘り進めていたため、残存部分やトレンチ土層から西辺の位置を捉えた。他遺構との重複では本跡がSB33を切り、床面検出ピットの一部は本跡を切る柱穴の可能性がある。平面形は1辺4.0～4.3mの方形である。埋土は礫を少量混入する黒褐色土層で北部の床面上に炭を多く含む土層が認められた。壁はほぼ垂直である。床面は浅い掘方を均した貼床で、平坦ながらあまり堅くなく、地山の土石流堆積層の礫頭が所々露出する。床面上でピット7基とカマドを検出した。ピットはPit1・2・4・6が方形に並ぶ主柱穴と思われるが、Pit2はSB33の主柱穴でも妥当な位置にあり、掘方が浅いため本跡床面で露出した可能性がある。Pit3は重複する柱穴と思われ、Pit5もSB33柱穴でも妥当な位置にあって帰属関係は断定できなかった。カマドは北辺中央にあり、右袖はⅨ層、左袖は地山の礫を掘り残して袖基部とし、上部に粘土を貼った粘土カマドと思われる。煙道は北辺と少しずれた方向に約1m延びて先端がピット状に窪む。火床はあまり顕著に焼けていない。遺物は少量だが、古墳時代後期と奈良時代の土器、わずかに混入と思われる平安時代土器片が出土した。重複関係と出土土器からSB33が古墳時代後期、本跡は奈良時代の古墳後・奈良7期と思われる。また、北西部隅周辺の埋土土層で須恵器甕片が集中出土したが、古墳時代後期の所産で、重複するSB33の遺物である可能性が高い。

川久保SB41 1区11面 IX A03 (第91図 PL10)

川久保1区北部に位置し、SB42北西側に隣接する。Ⅲ層掘削中にSB28煙道が検出され、Ⅲ層中で一旦検出したところ灰黄褐色土のやや不整形な落ち込みが認められた。埋土と地山の色調差はわずかながら、土師器杯の大破片が出土し、トレンチでⅣ層を掘り込む壁が認められ本跡を認定した。平面形は東西3.1m、南北2.8mの不整形方形で、主軸方位はN77°Wである。壁は斜めで、検出面から床面までの深さ約20cmを測る。床は平坦ながら貼床ではなく軟弱で、ピットやカマドは検出されなかった。埋土は上部にやや明るい灰黄褐色粘質土、下部に暗めの灰黄褐色粘質土があり、炭化物や遺物が若干含まれていた。調査時に中世竪穴建物跡や土坑の掘り残しを疑ったが、出土杯類の特徴や他時代の遺物が混じらないことから古墳後・奈良1・2期の所産で、カマドや柱穴は検出されなかったが規模や形状から竪穴住居跡と捉えた。

川久保SB42 1区11面 IX A03・04・08・09 (第91図 PL11)

川久保1区北部に位置する。SB28 カマド煙道が発見されたⅢ層中の検出作業で、緩やかに傾斜する地形にあって傾斜上方の本跡北西隅の落ち込みが検出された。傾斜下方は浅く途切れて規模は不明ながら炭化材の出土からも遺構の一部と捉えた。Ⅳ層上面で再検出したところ、当初検出した北西隅から北東方向の延長上に焼土が検出され、周辺で輪郭はやや不鮮明ながら黄褐色シルトブロックを含む掘方と思われる灰褐色土が方形に分布すると認められた。焼土はその北辺上に位置するカマドと考えると本跡を認定した。ピットも不明瞭で確認できた平面形は1辺約6.0mを測る不整形で、東・南辺は浅く途切れるが、若干広がる可能性がある。床面は軟弱で掘方のみを検出したと思われる。施設はピット7基と焼土を検出した。焼土は西辺中央付近とその北東側の2カ所あり、前者をカマドと捉えた。ピットはいずれも直径30～40cmの円形の平面形で、検出面から底面までの深さは20cm前後と浅い。形状から柱穴と思われるが、配置に規則性はなく、主柱穴と断定できない。出土土器はわずかだが、古墳後・奈良1・2期のものがある。断片的な遺存で断定はできないが、竪穴住居跡の可能性を考えてここに掲載した。

川久保SB49 1区11面 IX A01・02・06・07 (第91図 PL11)

川久保1区北西部に位置する。平成16年度の試掘トレンチで捉えられ、平成17年度に11面Ⅳ層上面で検出した。本跡は古墳時代後期と思われるST08 (SK762)、ST09 (SK700・747)、SK703・761に切れ、整理作業の検討で本跡床面検出のPit3・13をST08柱穴と捉えてSK773とSK744に変更し、Pit3・13は欠番とした。本跡の平面形は1辺5.2～5.7mの方形である。埋土は灰黄褐色粘質土を基調とし、床面上に炭化物・焼土粒を含む黒褐色粘質土が認められた。カマド周辺に炭化材を含む炭化物が分布し、焼失住居跡の可能性ある。北東辺の壁はやや斜めながら、他はほぼ垂直で、床面は貼床で堅くしめる。床面でピット10基、壁溝、焼土1基、カマドを検出した。ピットはPit4・5、7、9、12が主柱穴と思われ、Pit4と5が隣接し、Pit7も2基重複する可能性があることから、建て替えられた可能性がある。なお、Pit9上面で半分に割れた平石が床面と同じ高さで出土し、廃絶時のままのものと思われる。これ以外のPit10・11は貯蔵穴かカマド造り替えに伴う廃棄坑、Pit11は形状から貯蔵穴と思われるが、竪穴隅に位置して断定できなかった。他のPit2・8は性格が不明である。壁溝はカマド周辺を除いてほぼ全周し、床面からの深さは数cmと浅い。また、南辺中央の壁際で検出されたSK766は本跡入口施設とも考えたが、ST08 桁行ライン上に位置することからST08柱穴と捉えた。焼土は住居跡中央やや南西寄りにあり、直接床面が被熱して赤化した炉と思われる。カマドは北西辺中央にある粘土カマドで、天井は崩落し、火床内には長楕円形自然礫の支脚が残されていた。遺物は埋土中から少量、カマド左脇のPit10・11周辺で壊破片が集中して出土し、床面上で礫が散在的に検出された。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われる。

川久保SB50 1区11面 IX A08・09・13・14 (第92図 PL11)

川久保1区北部にある。SB28と同様にⅢ層中で煙道が検出されたが、平面形が不明瞭でⅣ層上面の11面で検出した。遺構との重複では10面の中世建物跡柱穴が重なるが、同調査面での重複遺構はない。平面形は1辺約6.2～6.6mの方形で、埋土は上層にぶい黄褐色土、下層に黒褐色土層があり、南東壁際の一部に炭化物を多く含む黒褐色土層が認められた。土器は下層から出土し、なかでもカマド周辺とPit1やPit2周辺から多く出土した。壁はほぼ垂直で、床面は貼床で若干南西部が低いが、ほぼ平坦で堅くしめる。床面でピット7基と壁溝、焼土、カマド、掘方でPit8の1基を検出した。ピットはPit1～4が方形に配置されることから主柱穴と思われる。Pit5・6は北西壁際にカマドを挟んで対称位置にあり、Pit7・8は南東壁際に約80cm離れて並列する。柱穴と思われるが、構造上の位置は不明である。これら

の柱穴は直径60～80cm前後の円形の平面形で、深さ40～50cmを測り、Pit1・2・4で柱痕跡が確認された。Pit7上面では床面と同じ高さで人頭大礫が出土した。壁溝はカマド周辺を除いて全周し、焼土は床面中央にあって直接被熱で赤化したかと思われる。カマドは北西辺中央にあり、焚口脇のみ石を用いた石組粘土カマドである。天井は遺存せず、焚口の天井石がずれた位置で検出された。火床中央には高杯脚を転用した支脚がある。その上部周辺で甕破片が集中して検出され、天井石が崩れた付近で正位のほぼ完形の甕が出土した。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良3期と思われる。

川久保SB51 1区11面 IX A07・08・12・13 (第93図 PL11)

川久保1区北部にあり、1区11面のIV層上面で検出した。同調査面で重複する遺構はない。平面形は一边約6.5～6.6mの方形で、埋土は最上層に薄い砂質土、中層にシルトブロックを含む灰黄褐色粘質シルト、床面直上に炭化物・焼土を多く含む土層が認められた。最上層は住居跡廃絶以後に入った洪水土層、中層が埋め土、下層が焼土・焼却に関わる土層と思われる。下層の炭化材は放射状に分布して垂木材と思われるが、一部の幅広い材は梁・桁材の可能性もある。なお、柱材は遺存しないが、Pit1内に柱痕跡と思われる中空部分が認められた。柱穴上面が密封され、周囲が堅い土層で固められて柱痕跡が中空の状態に残されたのだろうか。遺物は下層から完形に近い土器が多く出土した。壁は垂直で、カマド周辺の壁は被熱で赤化する。床面は貼床で堅く、南へ向かってわずかに傾斜する。床面でビット12基、壁溝と間仕切溝、カマドが検出された。ビットはPit6が貯蔵穴、Pit1～4が主柱穴、Pit7・8が入口施設と思われる。Pit8～12は床下検出の柱穴だが、主柱穴に近接して位置し、建て替えの古い柱穴と思われる。Pit1～4は直径30～60cmで床面から底面まで30～46cmの深さがある。Pit6はカマド脇にあり、埋土下層と同様に焼土ブロックや炭化物が多く混じり、廃絶時に開口していたと思われる。壁溝はカマド周辺を除いて全周し、直交方向の間仕切り溝が西側に2条検出された。間仕切り溝は東側では確認されなかった。カマドは北辺中央にある石組粘土カマドである。天井石がカマド脇から出土し、袖上部と外面は被熱で赤化する。また、煙道は壁から1.6mほど延びて先端がビット状に窪み、火床には河川礫の支脚が認められた。カマド左脇からは完形や完形に近い甕や須恵器杯が出土した。本跡は焼土住居跡で遺存良好な遺物が多い。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良5期と思われる。

川久保SB53 5区3面 II M14・15・19・20 (第94図 PL12)

川久保5区3面の中央西寄りのVIII層上面で検出した。南西半分ほどが調査区外へ延びる。検出時に本跡周辺で3基のカマド煙道がみつかり、複数住居跡の重複が予想された。埋土が類似して識別しにくかったが、トレンチを入れてSB54を切る本跡の重複が捉えられた。本跡北辺カマド煙道は火床や袖・石組が認められず、東辺からの距離がおおよそ南北長の半分の長さに合うことや本跡の主軸と類似方位であることから、東辺カマドへ造り替える前の旧カマドと捉えた。また、本跡南壁を一旦捉えた後に、精査を進めるなかで30cmほど外にさらに住居跡壁が存在すると捉えられた。当初認定した南壁は埋土土層の誤認か、わずかながら重複する別住居跡壁が存在したかは、いずれとも断定はできなかった。当初認定した南壁までの南北長は約7.1m、追加で認定した壁まで約7.4mを測る。東西長は不明だが、北辺のカマド煙道が北辺中央にあったとすれば、東辺からカマド軸まで約3.5mで東西長約7.0mの方形の平面形と予想される。埋土はIII層基調の黒褐色土層で、南東壁際に炭粒を混じる黒褐色土層が認められた。床面は北西壁近くに厚さ3～4cmの灰オリーブ色のしまりの良い浅い貼床が認められ、大部分は浅い掘方を均した程度の貼床と思われる。床面上でビット2基を検出した。ビットは東辺から1～2m内側に、東辺とややずれた方向でカマドを挟んで並び、形状から柱穴と思われる。他の施設にはカマドとカマド煙道が各1基ある。カマドは東辺中央にある石組粘土カマドで、袖内に列状に石を並べるが、右袖の焚口脇の石組が少ない。周

間に天井石や15～30cm大の礫が散在し、廃絶時にカマドが壊されたと思われる。また、東壁際にある長さ55cmほどの礫も表面が変色して剥落し、カマド石と思われる。カマド右袖脇から甕2個体、左袖脇から小型甕や甕が出土した。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良4期と思われる。

川久保SB54 5区3面 II M14 (第92図 PL12)

川久保5区3面の中央西寄りのⅧ層上面で検出した。西側半分ほどが調査区外へ延び、南端はSB53に切られる。同じ調査面で他に重複する遺構はない。平面形は調査範囲から南北約5.4m以上、東西3.5m以上の方形と思われ、カマドが北西辺中央に位置するとすれば1辺約6m前後と推測される。埋土はわずかに焼土粒・炭粒を混じる黒褐色土の単層である。壁はほぼ垂直で、床面は浅い掘方を伴う貼床だが、地下から染み出す水で床面の状態やピット等の施設の詳細は確認できなかった。床面で検出したピットは1基で、そのPit1はカマド脇にあって、深さは10cmほどと浅い。貯蔵穴には小さすぎ、性格は明らかにし得なかった。カマドは北西辺中央にあり、袖の石組礫は表土掘削時に重機バケット先端が当たって動いた。火床には支脚は検出されなかった。土器はカマド内を中心に出土し、埋土中からは土器破片が散漫に出土した。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良4期と思われる。

川久保SB55 1区11面 IX B07・12 (第95図 PL12)

川久保1区中央の北東壁際にあり、南東端は調査区外に延びる。川久保1区11面でⅣ層上面の不鮮明な落ち込みと認め、トレンチを入れたところ煙道と堅い床面が捉えられて本跡を認定した。同調査面の重複遺構はないが、本跡埋土上部を9面SD58が削っており、東壁はNR1dに削られたためか遺存不良である。平面形は1辺4.1～4.0mの方形である。埋土は上層に灰黄褐色粘質土、下層に黒褐色土層があり、その境に薄く炭化物を多く含む土層が挟まる。土器は床面直上のカマド左脇と埋土上層の北壁際から大型破片や土器が多く出土した。また、床面中央でこも編石と思われる拳大の楕円形礫の集中が検出された。壁はほぼ垂直である。床面は深い掘方を伴う貼床で、中央周辺が堅くしまり、若干南へ傾斜する。床面上でピット6基と壁溝・カマドを検出した。Pit1～4は深さ30cm前後で、方形に配置されることから主柱穴と思われ、Pit1・2で柱痕跡が確認された。Pit5はカマド西脇にあって貯蔵穴、Pit6は東辺中央にあって入口施設と思われる。壁溝は南・東・北壁を廻り、Pit5周辺のみ溝は確認できなかった。カマドは西辺中央にある石組粘土カマドで、天井石は焚口前で検出された。カマド火床面に支脚痕の小さな落ち込みが確認された。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われる。

川久保SB58 5区3面 II N12・17 (第94図 PL12)

川久保5区中央東寄りのⅨ層土石流堆積礫が露出していない場所に位置し、2面の中柱穴の壁にカマドがかかって存在は捉えられたが、3面で検出した。同じ検出面に重複する遺構はない。埋土もわずかな残存で遺存不良である。平面形は東西約3.4m、南北約4.6mの長方形で、カマドがやや西に偏って位置するが、西側はⅨ層礫が多く露出して西側に広がらないと思われる。埋土は黒褐色土ブロックを含む灰黄褐色土を主体とし、北壁際に褐色土、東壁のカマド周辺に焼土粒を多く混じる土層が認められた。壁はわずかな残存だが、垂直で、床面は10cmほどの掘方を伴う貼床で比較的堅い。施設はピット4基とカマドがある。ピットのなかで、Pit1は明確に検出されたが、他のピットは床面と類似した色調で若干の土質差から捉えた。いずれも深さ20cm以下と浅いが、長方形に配置されることから主柱穴と捉えた。カマドは南辺西寄りに南壁から方形に突出して造られ、カマド軸は若干東へずれる。左袖は地山の露出した礫頭を袖基部とし、周囲に散在する礫から右袖は石組を用いた石組粘土カマドと思われる。火床中央に支脚痕が検出され、カマド内から土器少量が出土した。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良7期と思われる。

川久保 SB59 5区3面 II M20・25、N16・21 (第96図 PL12)

川久保5区中央西壁際にある。平成17・18年度の調査区境にあり、平成17年度に排水用釜場の断面にかかって存在は捉えられたが、平成18年度に3面Ⅷ層上面で精査した。他遺構との重複は本跡がSB61を切り、SK1945に切られる。本跡の半分以上は調査区西壁外へ延び、北西端は排水用釜場にかかって全容は不明である。調査区内の規模から、南北長約4m以上の方形の平面形と思われる。埋土はやや灰色を呈する粘質土で下層に炭化物を混じり、土器片が散漫に出土した。壁はほぼ垂直で、床面は染み出す水で捉えにくく、層境を床面と捉えた。施設は不明である。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良4期と思われる。

川久保 SB60 5区3面 II N22 (第95図 PL12)

川久保5区南の3面Ⅷ層上面で検出した。調査区西壁際に位置し、本跡南西部は調査外へ延びる。北辺は試掘トレンチにかかり、カマドはSK1626に切られて遺存不良である。他遺構との重複は同調査面ではST10、SK1909・1939に切られる。北辺は明瞭に検出できたが、東・南辺は地山から染み出す水で軟弱なことに加え、埋土の色調が検出土層と類似して輪郭が捉えにくく、トレンチを入れながら確定した。また、当初はSK1626底部検出の焼土をカマド火床と認識して類似高で床面を探したが、埋土中の礫が下層にめり込むと認められ、改めて入れたトレンチで下層に床面が捉えられた。そして、焼土はカマド天井部焼土の可能性が考えられた。平面形は東西長約4.2m、南北長約4.6mの方形で、主柱穴と思われるPit3の位置が西壁側に寄りすぎ、西辺が掘り足りなかった可能性がある。埋土は上層にシルトブロックを少量含む黒褐色土層、中層に灰白色シルトや黒褐色粘質土ブロックを多く含む埋め土と捉えられる土層、床面直上にブロックを含まない黒褐色土層が認められた。中層には礫が多く混じり、一部は積み上げられたように重なる。壁は若干斜めで、床面は比較的堅い。床面でビット6基と壁溝を検出した。ビットではPit5のみ埋土が異なり、本跡を切る重複遺構と思われる。Pit4はST10柱穴と近接するが、Pit1～3と類似した埋土から本跡の入口施設と捉えた。Pit1～3は配置から主柱穴と思われ、深さ30cm前後を測る。Pit6はカマド東脇にある方形の穴で、周囲に灰白色粘土を堤状に盛り上げる。形状から貯蔵穴と思われる。その中央で柱穴状のビットがみつかった。上部には埋土中層の礫が厚く重なるので、本跡廃絶以後の重複遺構とは考えにくい。性格は捉えきれなかった。壁溝は東壁周辺にあり、地山礫が露出する部分では溝が途切れる。カマドは北辺中央の西寄りに位置し、壁から1mほど内側に火床が位置する。中世のSK1626底面検出の焼土はカマド天井部焼土の可能性があり、埋土3層精査中に火床と重なる位置で礫が集中する円形の炭化物集積が検出されたが、カマド掛け口が遺存していた可能性がある。火床周囲で石組や天井石は判然とせず、袖も不明瞭だが天井部が遺存した可能性からは粘土カマドと思われ、火床から支脚と思われる小礫が検出された。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良4期と思われる。

川久保 SB61 5区3面 II M20、N16 (第96図 PL13)

川久保5区3面中央の調査区西壁にかかって位置する。南に重複するSB59の壁に本跡断面がかかって発見されたが、平面検出が難しく検出を繰り返し、補助的にトレンチを入れて平面形を確定した。西側半分以上が調査区外へ延び、南端はSB59に切られる。全容は不明だが、調査区内の規模や形状から平面形は1辺5.2m以上の方形と思われる。埋土は黒褐色土ブロックが混じる褐色土を基調とする。地山から染み出す水で床面の詳細な観察はできなかったが、ほぼ完形の須恵器大甕が類似標高で出土し、その破片出土底面を床面と捉えた。壁はほぼ垂直で検出面からの深さ約40cmを測る。ビット等の施設は検出できず、カマドは調査区外に位置すると思われる。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良7期と思われる。

川久保SB62 5区3面 II N16・17・21・22 (第96図 PL13)

川久保5区南部にある。3面Ⅷ層で認められた焼土粒の散布から本跡の存在が想定されたが、埋土と検出面土層が類似して検出しにくく、トレンチで確認した壁のラインを繋ぎながら平面形を捉えた。他遺構との重複では本跡がST13に切られる。平面形は北東—南西方向で約3.3m、北西—南東方向で約3.0mの不整形を呈し、主軸方位はN42°Wである。壁は斜めで検出面から床面までの深さは約20cmを測る。床面は軟弱で中央に地山の礫が露出する。ピット等は検出されず、土器は破片が少量しか出土していない。古墳時代後期～奈良時代土器が混在して出土し、本跡の時期は古墳後・奈良4期以後としかわからない。

宮沖SB01 5区1面 II H11・12 (第96図 PL13)

宮沖5区1面のⅣ・Ⅷ層上面で検出した。中世SK610・1731・1732・1807～1809に切られ、本跡が切る遺構はない。宮沖5区南端に入れたトレンチにカマドがかかって発見され、南へ拡張して本跡の2/3ほどを調査した。調査区内の形状から、平面形は東西約4.8m前後の方形と思われる。埋土は床面上に炭化物を多く含む土層があり、焼失住居跡の可能性もある。この埋土土層上面で土器が多く出土し、南西隅周辺で炭化米と思われる炭化種実が集中出土した。壁は若干斜めである。床面は浅い掘方を伴う貼床で、床面は堅緻ながら地山の礫頭が所々露出する。床面でピット5基とカマド2基を検出した。Pit1はカマド左袖脇にある直径50cmほどの円形の浅い穴で貯蔵穴と思われる。Pit2・5はカマドを挟んで北辺に平行して位置する主柱穴と思われ、深さは床面から24cmほどしかない。Pit3はPit5と関連する柱穴と思われ、Pit4は浅い窪みで施設と断定できない。カマドは北辺中央にあり、煙道2本と火床2カ所が隣接して検出された。袖が遺存する西側カマドが廃絶時のカマドで、東側の火床と煙道のみ遺存するカマドが古いカマドと思われる。西側のカマドは調査開始時のトレンチにかかって遺存不良で、左袖は粘土のみで右袖内に芯石が検出できた。構造は石組粘土カマドと思われる。遺物は埋土から完形に近い須恵器甕や蓋、砥石等が出土した。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良7期と思われる。

宮沖SB02 5区1面 II B15 (第97図 PL13)

宮沖5区北端の1面Ⅷ層上面で検出した。北東隅と南東隅は現代の攪乱、南辺周辺は中世SD09に切られ、北西隅が調査区外へ延びる。かろうじて4辺が確認でき、1辺5.4～6.0mの東西に若干長い方形の平面形が捉えられた。他遺構の重複では中世SD09、SK509・749・794・796・797・800・839・840・1359に切られ、古墳時代前期SD14を切る。床面検出ピットにも重複する中世建物跡柱穴が含まれる可能性がある。埋土下層に人頭大から一抱えほどの礫多数が混じり、廃絶後に礫が廃棄されたと思われる。遺物はこの礫中から散漫に出土した。壁はほぼ垂直で、床面は浅い掘方を伴う貼床で、若干西側へ傾斜し地山礫の頭が所々床面に露出する。床面でピット23基とカマドを検出した。Pit1・2・3は辺と平行して方形に配置される主柱穴と思われ、南東隅柱穴は攪乱部分にあたって不明である。Pit18はカマド右袖脇にあり、貯蔵穴と思われる。Pit4・21は位置から補助的な柱穴、Pit23・6はPit1・2と関連した建て替えの柱穴、南辺中央に並列するPit11・12は入口施設と思われる。他の埋土礫の下に位置するPit2・10・16・17は礫投棄以前の本跡施設と思われるが、性格は不明で、それ以外は重複する中世柱穴の可能性もある。カマドは北辺中央にある石組粘土カマドで、袖内に石を列状に並べている。焚口に載せられていたと思われる天井石は火床上に落下していた。廃絶時に壊されたと思われる。カマド軸は北辺に対して若干西へずれ、煙道部分には地山の土石流堆積区層礫が露出して延長先は不明である。遺物は北壁近くで須恵器杯蓋、北西隅の埋土より紡錘車出土した。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良5期と思われる。

宮沖 SB03 5区1面 II C16・21 (第97図 PL13)

宮沖5区北部の調査区東壁にかかってⅧ層上面で検出した。南西部は現代の掘乱で破壊され、東側は調査区外へ延び、約1/3ほどが調査し得た。他遺構との重複は、本跡がSK1293、SF07・09～12に切れ、古墳時代前期SD17を切る。床面検出のSK533・617・1351・1370・1466・1471・1472・1467～1469は形状から重複する中世建物跡柱穴と思われる。SK1293の壁にかかって西壁が捉えられたが、検出面上層と埋土の識別が難しく、トレンチを入れながら確定した。南部の埋土はわずかにしか残存せず、地山のⅨ層巨石が露出して南辺は不明瞭であった。確認できた南北長は約6.7mで、方形か長方形の平面形と思われる。埋土は暗褐色土を基調として上層には多数の礫が混じる。遺物は礫間から破片で出土した。壁はほぼ垂直で、床面は浅い掘方を伴う貼床で、北部が比較的堅いが、南部は軟弱と判然としない。また、地山礫が所々床面に露出する。本跡に伴うと断定し得たピットはなく、カマドは調査区外に位置すると思われる。古墳時代前期や古墳時代後期末と思われる土器も混入して出土したが、遺存良好で出土量も多い土器から本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われる。

宮沖 SB05 1区2面 XVI W01・06 (第98図 PL14)

宮沖1区中央東寄りに位置し、2面のⅣ層上面で検出した。北・西辺は明瞭に検出され、SB04・25が重複する南東辺は不明瞭で、トレンチを入れながら確定した。他遺構との重複では、本跡がSD10、SB25を切り、ST35・36(SK1352)が本跡を切る。床面や掘方で検出したSK1704・1709・1726・1727、1735～1737、本跡下面で検出したSK1802～1804は前後関係が捉えきれなかったが、整理段階でSK1802・1709はSK1352と共に本跡を切るST36柱穴、Pit4・8・9・12とSK1720も本跡を切るST35柱穴と捉えた。また、床面検出のPit6・7・10・11・13は浅く、重複する遺構の可能性はある。ST35柱穴の位置にあたるPit3はST35の他柱穴より底面標高が低く本跡ピットと考えたが、2基重複していた可能性はある。本跡南東隅は調査区外へ延び、平面形は1辺5.3～5.4mの方形である。埋土は地山の黄褐色土ブロックの含まれ方から3層に分層され、礫も多く混じり人為的に埋め戻されたかと捉えられる。壁はほぼ垂直で、床面は堅く平坦で、ピット14基とカマドが検出された。Pit5は貯蔵穴、方形に並ぶPit1・2・3は支柱穴で、南東柱穴は調査区外に位置すると思われる。カマドは北辺中央にある石組粘土カマドで、焚口両脇の石が火床側に傾き天井石は遺存しない。火床は支脚石より手前が顕著に赤化し、間層を挟んで下層にもう一面火床が検出された。同位置でカマドを造り替えたと思われる。煙道は北辺から1.5mほど延び、3面調査時にその先端付近で見逃しと思われるピット状の窪みを検出したが、煙道底面から30cmほどの深さで焼土ブロックを含まないことから別遺構と捉えた。遺物はカマド周辺と埋土北東部の礫間から土器片が出土した。検出時に出土したヒスイ製垂飾は混入と思われる。本跡の時期は古墳後・奈良6期と思われる。

宮沖 SB06 1区2面 XVI W16・21 (第98図 PL14)

宮沖1区南東部にある。平成18年度のトレンチにかかって捉えられ、平成19年度の1区2面Ⅳ層上面で検出した。北・西辺は明瞭に検出されたが、SB30と重複する東辺、SB09と重複する南辺は不明瞭でトレンチを入れながら確定した。他遺構との重複では本跡がSB09・19・30と古墳時代前期SB31を切り、埋土中で検出した柱穴SK1357・1358、1365・ST38(SK1356(1407)・1411・1364)に切られる。本跡を切る柱穴と類似形状の床面検出の柱穴は、帰属関係が判断できずSKと扱ったSK1409・1410・1412・1413は本跡柱穴の可能性はあるが、SK1390・1405・1406・1415は本跡柱穴と断定できない。北辺は試掘トレンチにかかり、北東部は調査区外へ延びて全容は不明だが、北東辺のカマド位置から、東

辺は調査区外へあまり延びないと思われる。平面形は不整形で、1辺約4.8m前後である。埋土は地山の黄褐色土ブロックの少ない上層と多く含む下層に分層され、本跡は埋め戻された可能性がある。壁はほぼ垂直で、床面は浅い掘方を均した貼床で、堅く平坦である。床面では調査時に帰属関係が不明でSK番号を付したSK1409・1410・1412・1413は位置関係から主柱穴と思われるが、SK1409はカマド焚口との間隔が狭すぎて断定できない。カマドは南東辺西寄りと北東辺東寄りの2カ所検出されたが、南東カマドは火床と煙道、石組痕と思われる浅い窪みが残存し、旧カマドと思われる。一方、北東辺のカマド袖が不明瞭ながら、火床周辺で裏破片が多く出土し、廃絶時の新カマドと考えられ、場所を移してカマドを造り替えたと思われる。出土遺物から本跡時期は古墳後・奈良6期と思われる。

宮沖 SB08 1区2面 XVI V20・25、W21 (第99図 PL14)

宮沖1区中央南寄りに位置し、2面IV層上面で検出。西側は平成18年度のトレンチにかかる。他遺構との重複ではST38(SK1536)とSLO1、SK354・355・933・934・1536が本跡を切る。南北長は約3.2mを測り、平面形はほぼ3m強の方形と思われる。壁はほぼ垂直で、床面は浅い掘方を均した貼床で、中央からカマド前が深い。床面上でカマド、壁溝が検出された。中央南側でピットが検出されたが、1面SK355と重なる位置にあり、柱穴底面が掘り足らなかったものと捉えた。もう1基トレンチ壁にかかってピットが検出されたが、わずかな残存で本跡との関連が捉えられず本跡施設としなかった。カマドは東辺中央に位置する焚口脇と天井に石を用いた粘土カマドである。火床は壁際にあつて掛け口が壁にかかる位置と思われるが、掛け口の構造と壁の関係はつかめなかった。煙道は東壁から1.4mほど延びて先端がピット状になり、礫が詰め込まれていた。壁溝はカマド周囲を除く各辺を巡る。土器はカマド脇から裏が1個体出土したが、他は破片しかない。本跡の時期は古墳後・奈良7期と思われる。

宮沖 SB09 1区2面 XVI W16・21 (第100図 PL14)

宮沖1区南東部に位置し、2面IV層上面で検出。南辺～南西隅は明瞭に検出されたが、SB06・31と重複する北東部が不明瞭でトレンチを入れたところ、北西隅は調査区東外へ延びることが確認された。他遺構との重複では本跡がSK1652・1653、SB06に切られ、SB31を切る。床面で検出したSK1676～1679・1681は、住居跡内の位置や浅く小さい形状から重複遺構と捉えた。また、SK1680は本跡Pit3と共に西辺に平行する位置にあり、上面出土土器が本跡埋土出土土器と接合した。しかし、本跡の拡張前の壁溝と思われる溝より外側に位置し、貯蔵穴と思われる本跡Pit4・5がSK1680と関連すると思われるPit3を切ることから、本跡が切る遺構の可能性がある。

本跡の平面形は方形と思われ、南北長は調査区内で約7.7m以上を測り、カマドが西辺中央に位置するならば、1辺9m程の規模と推測される。埋土は上層が流入土と思われる褐色土、中層が黄褐色土ブロックを大量に含む埋め土、下層が1次流入土と思われる灰黄褐色土層に分層された。壁はほぼ垂直で、床面は西壁際が若干高く、中央付近は平坦で堅く東側は地山から染み出す水で詳細な観察はできなかった。床面中央に直径1mを超える地山の巨礫が30cmほど露出する。床面上で壁溝とカマド、ピット5基を検出した。ピットは南西隅のPit1・2が主柱穴と思われる。カマド左袖脇にはPit3～5がPit3→5→4の順で重なる。Pit4・5は浅いタライ状で貯蔵穴と思われるが、Pit3は柱穴とみられ本跡が切る遺構の可能性はある。壁溝は西壁際に断続的に認められ、約1m東に平行して古い壁溝と思われる溝が1条検出された。カマドは西辺中央に位置する石組粘土カマドで、袖内に扁平な河川礫を列状に並べる。中央から壁際の礫は直立し、焚口脇の礫はやや内傾する。天井は残存せず、火床内にカマド石と思われる扁平な石が重ねて入れられていた。廃絶時にカマドが壊されたとみられる。カマド火床には支脚の設置穴が検出され、その

手前に古い火床と思われる焼土が検出された。煙道は壁際から約1m直線的にトンネル状に掘られ、先端が小ビット状となる。また、カマド右脇に人頭大礫が集中して出土したが、壁溝にかかっており、使用時のものと断定できない。遺物は少量ながら、完形や大型土器破片が認められ、カマド右袖脇の集石上部で完形に近い杯、カマド上部からほぼ1個体と思われる土師器甕が出土した。本跡はカマド火床が2基、壁溝と思われる溝が2条あって使用中に西側へ拡張されたと思われる。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われ、近接する同時期の宮沖SB27とは規模も類似し関連すると思われる。

宮沖SB10 1区2面 XVI V24・25 (第101図 PL15)

宮沖1区南部西寄りに位置し、2面のV・VIII層上面で検出した。東・南辺は明瞭に検出されたが、中世SD11が重複する西～北西隅は不明瞭で、トレンチを入れて平面形を確認した。また、北辺中央に長さ1～2mの下層の土石流堆積層の巨礫が露出する。他遺構との重複では本跡がSD11、SK523・901～903・915・1460・1461・1463・1464・1490・1688・1689に切れ、SB11を切る。本跡Pit8下面で検出した柱穴や本跡Pit9はSB11柱穴が重なっていた可能性がある。平面形は東辺中央がやや膨らむ方形で、1辺約5.4～5.6mを測る。埋土は灰黄褐色・褐灰色を基調とし、上層に黄褐色土ブロックが混じり、下層の南東壁付近に焼土粒の散布が認められた。壁は垂直である。床面は堅緻な貼床で、下層にもう1枚床面が検出された。カマドは南辺中央付近にあり、上層床面で火床2基(カマド1・2)、下層床面で火床2基(カマド3・4)の4基検出され、3回の造り替えが捉えられた。最終的なカマドからカマド1～4と呼称した。カマド1は南辺中央東寄りにあり、袖石や袖が残存する住居跡廃絶時のカマドで、左袖内にカマド2の焼土・炭化物を多く含む。天井は遺存しないが、南西床面上で天井石と思われる細長い礫が検出された。カマド2はカマド1の東に隣接し、火床と煙道のみ遺存するが、石組痕は不明である。カマド3・4は下層床面にあり、その前後関係は確認できなかったが、カマド2に近いカマド3のほうが後出する可能性がある。カマド3はカマド1・2の火床直下にあり、火床と右袖の石組痕が捉えられた。カマド4は南辺中央にあり、カマド石を抜き取った痕跡と思われるPit9・10の狭間にわずかに火床が残る。

上層床面ではカマド1・2の他にPit1～8、壁溝を検出した。Pit1～4はほぼ方形に位置して主柱穴と思われるが、Pit3・4は深い、Pit1は浅く、Pit2も小さく断定はできない。北辺脇のPit7は入口施設、カマド東脇のPit8は貯蔵穴と思われる。Pit8は下層に薄い灰白色土層が認められ、その底面で柱穴状落ち込みを検出した。この柱穴状の落ち込みは重複するSB11柱穴の可能性がある。Pit6は床面中央に位置する柱穴だが、関連する柱穴がなく、重複遺構と思われる。Pit5は浅い窪みで施設と認められず欠番とした。壁溝はカマド西側と東辺で断続的に検出された。

下層床面ではカマド3・4とPit9～19のビット11基を検出した。Pit11～17は上層床面主柱穴と捉えたPit1～4の脇にそれぞれ位置し、下層床面の主柱穴と思われるが、Pit3の下層床面脇のみPit13・14・15が隣接して柱穴の数が多く、Pit15・16・17はやや小型である。Pit18は浅い落ち込みで施設と断定できず、Pit19は柱穴ながら建物構造上の機能は明らかにし得なかった。壁溝は上層床面の壁溝と重なる可能性もあるが、上層床面の壁溝はカマド1を切り、カマド2の壁際には壁溝が検出されなかったので、カマド1の段階では南辺の壁溝がなかった可能性もある。

遺物は上層床面から多く出土し、下層床面ではカマド3・4の前付近から出土した。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良7期と思われ、使用中に柱穴と床面、カマドを造り替えたと思われた。床面や柱穴の建て替えの数よりもカマドの造り替えの数が多く、カマド造り替えの間隔が短い可能性が知られる。

宮沖 SB12 1区2面 XVI R21, W01 (第99図 PL15)

宮沖1区北東部に位置し、2面のⅣ層で検出した。埋土は10cmほどしか遺存せず、検出面でカマド石が露出した。他遺構との重複は本跡がSD10、SB16を切り、SK1022・1082・1084・1087・1089・1090・1099・1110・1111・1112・1720・1734・1882に切られる。これ以外に本跡 Pit1・7・12は整理作業の検討でST34柱穴、Pit17はST27柱穴と捉えられ、Pit6と捉えた柱穴から平安時代黒色土器A杯が出土したことから床面検出ピットには重複柱穴が含まれる可能性がある。また、カマド袖下で検出したSK1798南壁はカマド袖と捉えたラインに一致し、本跡を切るSK1798を上面で見逃した可能性がある。本跡の東辺は調査区外へ延び、調査域内で南辺東側がやや開いた方形の平面形と捉えられ、南北約5.8m、東西約5.6m以上の規模を測る。埋土は炭化物が混じる黒褐色シルトで、西側床面上で少量の炭化材が放射状に検出され、焼失住居跡と思われる。壁はほぼ垂直で、床面は浅い掘方を砂混じりの黒褐色土で貼床する。カマドは西辺中央に位置し、袖石は左袖のみ遺存し、右袖は重複するSK1798に壊されたと思われる。遺存不良で構造は捉えきれなかったが、石組粘土カマドと思われる。ピットは床面で19基検出したが、本跡のピットは北・西・南辺と平行してL字形に並ぶPit5・9・19が主柱穴と捉えられ、北東部の主柱穴は不明である。Pit9と15から古墳時代後期土師器が出土したが、他の柱穴は本跡に伴うとは断定できなかった。遺物はカマド左袖脇と焚口右前周辺で複数の甕類、西辺北脇で須恵器甕が出土した。また、棒状鉄製品や東辺中央でこも編石と思われる礫集中が検出された。本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われる。

宮沖 SB13 1区2面 XVI W11 (第100図 PL15)

宮沖1区中央の東際に位置し、2面Ⅳ層上面で検出した。調査区壁際の排水溝にカマドがかかって発見され、東半分は調査区外へ延びる。他遺構との重複では本跡がSB28・30を切り、SK1491～1494・SLO1に切られる。調査区内で南北長約3.6mを測り、平面形は南西隅がやや丸い方形とみられる。埋土は上層に灰黄褐色土層、下層に暗褐色土層があり、遺物はカマド周辺の埋土下層から床面上にかけて多く出土した。壁は若干斜めで、床面は深い掘方を伴う貼床でほぼ平坦である。カマドは北辺中央付近にあり、左袖と火床は調査区境の排水溝にかかって全容は捉えられなかった。北西床面からカマド石と思われる長さ50cmほどの礫が数個出土し、残存する右袖の様相から焚口脇に石を立てた石組粘土カマドと思われる。煙道は北辺から90cmほど延び、先端へ向かって高く傾斜し、先端部分で再び低く掘られる。床面で検出したピットは3基あり、Pit1・2が主柱穴とみられ、Pit3も柱穴と思われるが建物構造上の機能は不明である。南壁際でこも編石と思われる礫集中がみつかった。本跡の時期は古墳後・奈良5期と思われる。

宮沖 SB14 1区2面 XVI V15, W11 (第102図 PL15・16)

宮沖1区中央にあり、2面のⅣ層上面で検出した。北・西辺は明瞭に検出されたが、他辺は遺構重複が著しく不明瞭であった。しかも黄褐色土ブロックを多く混じる中層埋土を地山と誤認したことや、本跡範囲内にかかる中世柱穴断面にカマド火床2基が捉えられて複数住居跡重複の可能性が想定され、平面形が確定できなかった。そこでトレンチを入れて床面から壁を探して平面形を確定したが、SB19と重複する南西壁は床面標高も埋土も類似してやや不明瞭であった。他遺構との重複では、本跡がSB07、SLO1、ST31 (SK1265)、ST32 (SK981・982)、ST33 (SK993・973・1529・1396)、SK947・949・951～953・955・956・964・969・972・974～976・978～980・983・984・1290・1294・1296・1297 (965)・1307・1387～1389・1391・1395・1456・1528・1538・1594・1595・1600～1603 (956)・1604・1606・1607・1622・1623・1627～1629・1630 (ST37)・1631 (1738)・1632～1635・1684・1811に切られ、本跡がSB19・25・28、26・27、SK1776を切る。床面で

SK1636～1641、1645・1649・1650・1706・1713を検出したが、本跡との関係が不明なためSKで扱い、整理作業の検討でSK1645はST31、SK1639はST32、SK1638・1646はST37柱穴と捉えた。各掘立柱建物跡の他柱穴の重複関係からこれらの柱穴は本跡を切る可能性がある。また、SK1636は本跡ピットの可能性がある。なお、SK1801は3面調査中に本跡下面で検出したが、本跡との前後関係は不明である。

本跡平面形は北辺中央カマド周辺と南西部がややふくらむ平行四辺形に近い長方形で、東西約6.3m、南北約6.0mを測る。埋土は上層に黄褐色土・焼土・炭化物を少量含む褐色土、中層に黄褐色土を多量に混じる土層、下層に黒褐色土ブロックを含む褐色土層がある。中層はすり鉢状に堆積し、上下に炭や焼土を多く含む薄層が認められた。黄褐色土ブロックを多量に混じる土層は宮沖SB09でも認められたが、本跡廃絶後に窪地を埋めたものか、屋根上に載せられていた土屋根が崩落したものかは確定できなかった。遺物は中層より上層と、下層に分けて取り上げた。上層では中央部から土器片が多く出土し、下層では北辺際で散漫に出土したのみでカマド周辺でも土器はあまり出土しなかった。壁はほぼ垂直で、床面は浅い掘方を均した貼床で比較的堅い。床面でカマド2基、ピット6基、壁溝を検出した。カマドは西辺南寄りと北辺中央の2カ所にある。北辺カマドは火床と煙道のみ遺存し、カマド煙道は壁際から約1.7m北へ延びて先端が小ピット状になる。袖は残存せず、カマド造り替えて壊した旧カマドと思われる。先端付近で煙道構築材と思われる大型土器片が出土した。西辺南寄りカマドは石組粘土カマドで、天井石は3つに割れてカマド内に落ちていたが、遺存良好で廃絶時の新カマドと思われる。火床は床面よりも若干高く遺物はほとんどない。袖の幅はかなり狭く、袖脇に礫が集中して検出された。壁溝は西南カマド周辺を除いてほぼ全周する。ピットは調査時にPit1～4を主柱穴と捉えたが、SK1636・Pit2・3・6も配置関係から主柱穴の可能性があり、さらにPit3はST37柱穴の可能性もあって断定できなかった。Pit5は浅く、貯蔵穴か重複柱穴と思われる。破片ながら古墳時代後期の黒色土器Aの盤を模倣した杯Jや須恵器杯G模倣と思われる杯I2類が多く出土した。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良6期と思われる。

宮沖SB15 1区2面 II B05、C01 (第99図 PL16)

宮沖1区南端に位置し、2面IV層上面で検出。他の堅穴住居跡との重複はないが、床面検出のSK1745・1746・1765・1766は位置関係から本跡と重複する柱穴の可能性はある。SK1744はカマド火床を挟んで上部で土器が多く出土したPit1と対峙する位置にあるが、土器出土が少なく本跡ピットと断定できなかった。本跡北部は試掘トレンチにかかり、東・南部は調査区外へ延びて、本跡の中央から西辺のみ調査し得た。平面形は直線的な西辺から方形と思われ、北部の火床を北辺中央に位置するカマドとすれば、東西長は約3.8mと推測され、調査区外へあまり延びないと思われる。埋土は2層に分層され、調査時に下層の上面を床面と認識したが、トレンチで火床が検出されて床面を捉え直した。壁はわずかな遺存で、床面は軟弱で地山の区層礫が頭を出す。床面上で火床とピット1基を検出した。Pit1上部から周辺にかけて一個体の裏が出土した。火床はカマドと思われるが、構造は捉えられなかった。遺物は他に中央南部の床面で土器器杯が出土し、本跡の時期は古墳後・奈良6期と思われる。

宮沖SB16 1区2面 XIV R16・21 (第103図 PL16)

宮沖1区北東部に位置する。2面でVIII層の礫混じり暗褐色土層上面で検出した。他遺構との重複では、本跡がSB12、SK1129～1134・1136～1139・1164・1168・1169・1171・1232・1279・1814に切られ、SD10を切る。また、調査時に捉えたPit1は壁が本跡西壁よりも外に出ることが判明してSK1814に変更し、本跡Pit6は整理作業の検討でST27柱穴と捉えた。Pit6は本跡貼床上面で検出したので本跡を切る可能性がある。埋土はわずかな遺存で、東辺は調査区外へ延びる。北辺東部側は掘り足りなかった可能性

があるが、調査区内で南北約6.1m、東西約5.6m以上の規模を測り、平面形は方形と思われる。埋土は黒褐色の砂混じりシルトで、壁は垂直で検出面から床面まで約10cmの深さを測る。床面はほぼ平坦で埋土より濃い黒褐色の砂まじりシルト層で貼床されるが、地山に含まれる拳大河川礫を混じり、床面に地山の大きな礫が露出する。床面でピット8基、カマド1基を検出した。ピットは柱穴とみられるが、いずれも浅い。南辺に平行してPit8・9・5が並び、中央にPit4・7、北辺際にPit2・3が位置する。Pit2・3・5・9が主柱穴とみられるが、浅く断定できない。カマドは西辺中央に位置し、約40cm大の礫を南側・北側3個ずつ列状に並べた石組粘土カマドで、煙道は壁から60cmほど延びる。火床は直径約30cmの円形で、深さ5～10cmほどが赤化する。カマド左脇より完形の甕が出土した。本跡の時期は古墳後・奈良4期と思われる。

宮沖SB17 1区2面 XIV Q20・25、R16 (第103図 PL16)

宮沖1区北西部、段丘縁近くに立地し、2面のIV層上面で検出した。他遺構との重複では、本跡がSK1149・1150・1156・1157・1168・1179～1194・1264・1506・1507・1509・1541・1542・1543・1568・1642・1643・1740・1821に切られる。西側は段丘縁の斜面で途切れ、その周辺上部に現代の攪乱が重なる。平面規模は南北長約6.8m、東西長は床面残存範囲で約3.8mを測る。平面形は方形か長方形と思われ、主軸方位は東辺でN25°Wである。埋土は砂混じりの黒褐色土層が主体で、所々炭化物を多く含むブロック土が含まれるが、根の攪乱によって上層から混入した可能性がある。壁はほぼ垂直で、遺存良好な東辺で検出面からの深さは約24cmを測る。床面は平坦で堅く、壁際に壁溝が走る。床下で厚さ20cm前後のブロック土を少量混じる灰褐色土を掘方と捉えたが、壁付近の立ち上がりは不明瞭で、ブロック土も部分的にしか認められないことから段丘縁部の濁った土層の一部を掘方と誤認した可能性がある。床面上で壁溝、ピット9基、焼土1基を検出した。壁溝は北東南辺の壁際に沿って廻り、幅約15cm、深さ3cmで断面はU字形である。ピットは柱穴とみられ、Pit1とPit8が重複して東辺の壁溝を切るように位置し、その東辺と直交方向の西側約2m離れてPit3がある。また、隣接するPit2と7、Pit4と5が東辺と平行して並び、Pit6・7は南辺壁際にある。これらのピットは本跡東・南辺と平行・直交して位置するようにみえるが、Pit8以外は浅く、Pit1・6・8は壁溝と重なり重複遺構の可能性がある。焼土は中央付近にあり、約60cm×40cm、厚さ10cmの範囲で認められ、石組等は認められず性格は不明である。土器は埋土中から破片が少量採取され、古墳時代後期～奈良時代の土師器・須恵器、平安時代の土師器や黒色土器、わずかに近世陶器も出土した。遺存良好な須恵器杯の出土から、本跡の時期は古墳後・奈良7期と思われる。他に刀子か鎌と思われる鉄製品が出土した。

宮沖SB18 1区2面 XVI V10 (第103図 PL16)

宮沖1区中央西よりの段丘縁近くに位置し、2面IV層で検出した。他遺構との重複は本跡がSB07・23、SK997・999・1020・1034・1035・1231・1300・1301・1320・1358・1359・1363に切られる。SK1454・1468・1487・1520・1522～1524・1526・1540・1555・1556・1591・1619は本跡床面で検出したが、調査時に配置や形状・埋土から重複する中世遺構と捉えた。また、SK1521は調査時に重複柱穴と考えたが、整理時の検討で本跡ピットの可能性が捉えられた。本跡は南側をSB07に切れ、中央は平成18年度のトレンチにかかって遺存不良である。平面形は南北長約4.5m、東西長約4.4mの方形で、主軸方位はN60°Wである。埋土は床面上に炭化材を含む土層、中層に炭化物を少量含む土層、上層に黄褐色土粒を少量含む土層がある。焼失住居跡と捉えられ、炭化材は壁際周辺に丸木材が放射状に分布する。壁は遺存良好な北辺で検出面から床面までの深さ約30cm弱あり、床面は比較的堅い。床面でピット3基と壁溝、カマドを検出した。埋土の炭化材が部分的に上面に載るPit1は本跡ピットと捉えられ、

それと北辺に平行して位置する Pit3、Pit1 に隣接する類似形状の Pit2 も本跡柱穴と捉えた。Pit1 とカマドを挟んで西辺に平行して位置する SK1521 は炭化材を切るようにみえて重複遺構と捉えたが、位置関係から本跡主柱穴の可能性が高い。壁溝は北・東壁直下に浅く途切れるように検出された。カマドは西辺中央にあるが、試掘トレンチで上部を削平し、左袖と火床のみ残存する。カマドの石組は認められなかったが、左袖先端に袖芯石の痕跡と思われる浅い窪みが認められ、構造は石組粘土カマドと思われる。出土遺物は東壁際でほぼ完形の土師器甕が出土した以外は破片が少量出土した。本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われる。

宮沖 SB19 1区2面 XIV V15・20、W11・16 (第104図 PL16)

宮沖1区中央南寄りに位置し、2面IV層上面で検出した。南・西辺は明瞭に検出されたが、SB14と重複する北辺が不明瞭でトレンチを入れて確定した。他遺構との重複では、本跡が SB06・14・30、ST32(970・1660・1669)、ST33 (SK924・969・1661・1663)、ST37 (1498)、SK925・926・928・930・931・936・937・966 ～ 968・971・1353・1495・1497・1499 ～ 1502・1534・1539・1592・1621・1623・1659・1662・1664・1683 に切れ、SB27 を切る。本跡床面検出の SK1671 ～ 1674・1684・1753 は、帰属関係が確定できず SK としたが、本跡ビットを含む可能性がある。また、本跡が切る SB27 の本跡範囲と重なる床面で SK1751・1752・1755 ～ 1759・1765 を検出した。小型の SK1665 ～ 1669・1686・1682・1763 は本跡と関連しない重複柱穴と思われる。ST37 柱穴と捉えた SK1674 は、同じ ST37 柱穴の SK1498 同様に本跡を切ると思われる。SK1759・1755 は SB27 や本跡との関係は不明である。

本跡は北西隅と東辺の一部が平成18年度の試掘トレンチ、北西隅と東辺は SB06・14 に切られるが、ほぼ全容は捉えられた。平面形は方形で、南北長約6.7m、東西長約6.7mを測り、主軸方位は N30° W である。埋土は床面上にしまった褐灰色土層、中・上層に地山ブロックを含む土層が認められた。遺物は北辺際の埋土2層と、カマド周辺の床面上で多く出土した。壁はほぼ垂直で検出面から床面までの深さ30cm前後を測る。床面は平坦で堅い。床面でビット、カマド、壁溝と間仕切り溝を検出した。主柱穴は整理作業の検討で北西部柱穴が不明ながら、方形に並ぶ Pit1・SK1672・Pit2 か、SK1759・1752・1496・1755 と捉えたが、SK1755・1759 は SB27 主柱穴でも妥当な位置にあって主柱穴を断定できなかった。また、Pit1 は SB14 調査時に壁にかかって検出された SK1623 を調査時に本跡ビットと捉え直したものである。Pit4 は位置や規模から貯蔵穴と思われ、それを切る Pit3 は本跡を切る別遺構と思われる。壁溝はカマド西側から南西隅を除いて廻り、その壁溝から内側へ直交方向に延びる短い間仕切り溝は南辺3カ所、北辺東側1カ所が検出された。壁際から約1m前後の長さで、幅は20cm前後である。深さは床面から数cmほど浅い。カマドは西辺中央に位置する石組粘土カマドで上部が平成18年度の試掘トレンチにかかった。右袖の石組は火床側に倒れ、天井石もないため壊された可能性がある。袖内は片側2個ずつ石組が確認されたが、トレンチにかかった西壁までの間の石組は不明である。右袖の裾外側にカマド袖構築材と思われる黄褐色粘土層が認められ、それが袖内に延びており、カマドを造り替えている可能性がある。カマド右袖脇に礫の集中が検出され、その周辺で土師器甕類が集中して検出された。また、左袖脇で完形の土師器甕が出土した。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良5期と思われる。

宮沖 SB23 1区2面 XIV V09・10 (第101図 PL17)

宮沖1区中央西寄りの段丘縁辺近くに位置し、2面のV・VIII層上面で検出した。検出形状から土坑 SK1489 としたが、本跡にかかる試掘トレンチ断面観察で底面がほぼ水平で、東・北辺が明瞭に立ち上がり、その規模から SB23 に変更した。埋土はわずかな残存で、段丘斜面にかかる西辺は浅くなって途切れ、

南辺は地山の土石流堆積の礫が密集する場所にかかって不明である。他遺構との重複では、本跡がSB18、SK1693を切るが、SB18との境にあるSK1524との前後関係は見逃して不明である。残存する規模は東西約2.4m以上、南北約3.4m以上だが、南側は土石流堆積の礫が露出し、あまり広がらないと思われる。平面形は方形か長方形で、北辺から主軸方位はN68°W前後と思われる。埋土は黒褐色土の単層である。床面は平坦ながら軟弱で、掘方は捉えられなかった。ピットもカマドも確認できなかったが、残存部分から竪穴住居跡の一部と捉えた。遺物は埋土中から土器片が少量出土し、北壁際でこも編石と思われる拳大礫が集中して出土した。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良2期以後としかわからない。

宮沖 SB25 1区2面 XIV W06 (第106図 PL17)

宮沖1区中央に位置し、2面のIV層上面で検出した。本跡カマドがSB05南西壁にかかって発見され、その脇で検出された北西辺ラインが直線的に認められたことから、当初は大型住居跡を想定した。しかし、精査中に本跡南側に一段低いSB29床面が見つかり、さらに東側に本跡を切るSB28が検出されたことから、SB25はカマドを中心とする狭い範囲に残存すると捉えられた。SB29との重複関係ではSB29埋土中に本跡貼床は確認されず、SB29が本跡を切ると捉えた。他の遺構重複では本跡がSB04・05、SL01、SK1045・1046・1236・1237に切られる。SK1697・1709・1804・1805は本跡床面で検出したが、帰属関係が不明でSKとした。北西辺以外は重複住居跡に切られて平面形は不明である。残存部で南北約3.0m以上、東西約4.6m以上の規模を測り、西辺から主軸方位はN46°Wと推測される。埋土は暗褐色土を基調とし、東側床上面にブロック土を含む上層が認められた。西壁はほぼ垂直で検出面から床面までの深さは約30cmを測り、床面はほぼ平坦で軟弱である。カマドは北西辺にあり、右袖の一部はSB05に壊される。焚口脇にやや内傾させた石を立てた粘土カマドで、焚口は奥壁から70cmとやや短く、延長先に短く浅い煙道が付属する。ピットは不明で、床面検出のSK1697・1804・1805はカマド焚口前に位置して本跡柱穴と考えにくい。また、周囲の重複住居跡のSB04Pit3とSK1709は本跡カマドを挟んで等間隔に北西辺と平行して位置し、床面で露出した本跡ピットの可能性も考えたが、SB04Pit3は平安時代土器を出土し本跡ピットとは認定できなかった。遺物はカマド周辺でほぼ方形の土器が出土し、本跡の時期は古墳後・奈良6期と思われる。

宮沖 SB27 1区2面 XIV V15・20、W11・16 (第105図 PL17)

宮沖1区中央南寄りに位置する。本跡は平成18年度の試掘トレンチにカマドと西辺ラインがかかって発見され、平成19年度に2面のIV層上面で検出した。調査ではSB14・19に切られた三角形の残存部をSB26としたが、後に本跡の一部と判明して欠番とした。他遺構との重複では本跡がSB07・14・19、SL01、SK924～926・930・931・936・937・939・941・942・945～949・951～953・966～975・979～983・1006・1226・1395・1396・1496・1497・1499・1539・1592・1593・1595・1601・1602・1604・1622・1623・1630・1633・1636・1639～1641・1645・1648・1649・1656・1658～1664・1668・1669・1671～1673・1682・1684・1691・1692・1694・1695に切られる。このうち上記SK924からSK1296までは検出面で本跡を切ることを確認し、SK1395～1695は本跡を切るSB14・19の精査に検出されたことから本跡を切ることを捉えられた。SK1705・1706・1713・1714・1752～1763・1772・1785・1799は本跡床面で検出し、重複関係が不明でSK番号を付したものである。このなかでSK1758・1756は本跡を切るSB19のピット、SK1755・1759は本跡がSB19ピットの可能性がある。また、床下で検出したSK1810は重複を見逃したものと思われる。

本跡は重複住居跡が多いながら、床面は深く遺存良好である。平面形は若干南辺が湾曲する方形を呈し、

東西長約 8.8m、南北長約 8.4m を測る。主軸方位は N89° W である。埋土上部を SB14・19 に切られるが、床面上に灰褐色土層、東壁周辺にはその上部に炭化物と焼土粒を含む土層と黒褐色土層が認められた。壁はほぼ垂直で遺存良好な東壁で 35cm を測り、床面は平坦で堅緻である。床面上で SK1705 から SK1799 までの柱穴とピット 4 基、カマド、壁溝を検出した。ピットは北東部で検出された Pit1・2 を主柱穴と捉えたが、対応する柱穴は調査時に確定できなかった。整理時の検討では SK1761 が北西部、SK1759 が南西部、SK1755 が南東部柱穴と思われたが、SK1755・1759 は見逃した SB19 ピットの可能性があって断定できなかった。また、カマド脇に SB19 の Pit3 が位置するが、本跡に帰属する貯蔵穴が重複していた可能性がある。本跡カマド脇にある Pit4 のみは遺存良好な杯が出土し、本跡施設と判断した。壁溝は西辺のカマド南側を除いてほぼ全周する。カマドは西辺中央に位置する石組粘土カマドである。壁から焚口まで約 1.4m と長く、幅は 1m 前後である。カマド内からは構築材に使われたと思われる土師器甕、廃絶時に入れられたとみられる完形の黒色土器 A の杯数点が出土した。石組は全体的に左側へ傾くものが多く、廃絶時に潰れた可能性がある。また、カマド右脇に 30cm 前後の礫 5 点が集中的に出土したが、性格は不明である。出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良 2 期と思われる。

宮沖 SB28 1区2面 XVI W06・11 (第104図 PL17)

宮沖 1 区中央に位置し、2 面 IV 層上面で SB25 精査中に東部で貼床とカマド火床が認められて本跡を認定した。2 面の他遺構との重複では本跡が SB25・29 を切り、SB04・13・14、中世の SL01、ST30 (SK1725)、SK954・956～960・962・963・1004・1007・1258・1259・1305・1391・1392 に切られる。本跡西辺は SB04 に壊され、東半分は調査区外へ延びる。調査区内で東西長 5.7m 以上、南北長 5.0m 以上の規模を測る。本跡の北西辺の東端は緩やかにカーブするように認められ、住居跡隅に近い場所と思われることから、1 辺は 5.8m 前後の方形の平面形と思われる。主軸方位は N52° W である。壁はわずかな残存で、南東部で検出面から床面までの深さは約 7cm ほどである。床面は比較的堅く、若干南側へ向かって傾斜する。床面上でピット 1 基とカマド火床を検出した。Pit1 は形状から貯蔵穴と思われる。また、床面上で柱穴 SK1701・1702・1707・1708・1723～1725 を検出し、本跡との関係が不明で SK とした。このなかで、カマド火床前の SK1707・1708、カマド袖脇に位置する SK1724 は位置関係から重複する柱穴と思われ、SK1725 は整理作業での検討で ST30 柱穴と捉えられた。SK1701 と SK1723 はカマド火床を挟んでほぼ等間隔にあり、しかも両者を結ぶラインは西壁とほぼ平行して本跡主柱穴の可能性はある。カマドは西辺中央にあり、上部は SB04 に壊されて火床のみ遺存する。石組や袖等は残存しなかった。土器小片がわずかに出土したのみだが、本跡の時期は古墳後・奈良 5 期と思われる。

宮沖 SB29 1区2面 XIV V10・15、W06・11 (第106図 PL17)

宮沖 1 区中央にあり、2 面で SB25 精査中に一段低い本跡床面の発見から本跡の存在が捉えられた。精査の進んだ段階で本跡の存在に気付いたが、本跡埋土中に SB25 床面が認められないことから本跡が SB25 を切ると思えた。中央を SB04、南側を SB14・28 に切られて遺存不良である。他遺構との重複では SL01、SK1003・1036・1046・1236・1244 に切られる。残存範囲から平面形は方形と思われ、東西長は約 5.0m、南北長は残存範囲で約 4.5m を測る。主軸方位は N35° W である。埋土はわずかな遺存で、発見時に床面まで掘り下げが進んでいたため、埋土は観察できなかった。壁はほぼ垂直で床面までの深さは 35cm を測る。床面は平坦ながら部分的に凹凸が認められ、特に堅緻ではなかった。床面上ではピットやカマドは確認できなかった。遺物は一部 SB25 として取り上げてしまったが、SB25 との重複がない南西部から出土した土器は本跡の土器と限定でき、出土土器から本跡の時期は古墳後・奈良 6 期と思われる。

宮沖 SB30 1区2面 XVI W11・16 (第106図 PL17)

宮沖1区中央東寄りに位置し、2面のIV層上面で検出した。重複するSBO6北壁にかかって本跡の存在が判明したが、周囲は重複住居跡が多く平面形が捉えにくく、トレンチを入れて西壁を確認した。他遺構との重複では本跡がSBO6・13、SK938・1292に切られる。東側の大部分は調査区外へ延びて全容は不明だが、調査区内の規模から南北長3.7m以上、東西長1.8m以上と捉えられる。西辺の方はN25°Eである。埋土は上層に黄褐色ブロック土を含む灰褐色土、床面上にブロック土が少ない土層が認められた。壁はほぼ垂直で、検出面から床面までの深さは約30cmである。床面は南側へむかって若干傾斜し、緩やかながら段差があるように検出されたが、埋土の観察では重複住居跡は認定できず、整理作業で床下から取り上げられた土器が埋土中出土土器と接合したことから、北辺の床面が掘り足りなかった疑いがある。床面上ではカマドもピットも確認できなかった。また、本跡と重なる範囲の3面水田跡調査中にSK1806を検出したが、本跡との関係は不明である。本跡の時期は古墳後・奈良2期以後としかわからない。

(2) 掘立柱建物跡 (第20表)

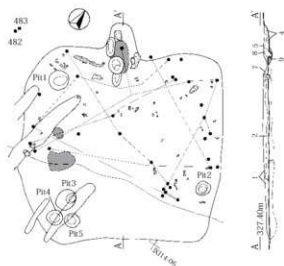
当該期の掘立柱建物跡は調査時に認定し得たものもあるが、多くは整理作業で柱穴配列の検討から認定した。整理作業では、古墳時代後期～奈良時代遺構の検出面で検出された柱穴、当該期の土器を出土した柱穴や、当該期に多く認められる掘方の大きな柱穴を抽出し、その配列を検討した。小型の柱穴は中世の建物跡柱穴と考えたが、遺物出土もわずかなので古墳時代後期～奈良時代の建物跡柱穴の可能性も残る。認定した掘立柱建物跡はほぼ竪穴住居跡の分布と重なり、川久保遺跡から宮沖遺跡まで広範囲に認められた。宮沖1区では数多くの掘立柱建物柱穴が存在するが、認定し得た掘立柱建物跡は少ない。

第20表 古墳時代後期～奈良時代掘立柱建物跡一覧表

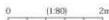
遺跡	S T	調査区	地区	柱配置				梁		柱方向	柱穴			
				梁×桁	長さ(m)	柱間寸法(m)	長さ(m)	柱間寸法(m)	平面形		平面規模(平均cm)	底面標高(平均m)	深さ	
川久保	01	2区1面	IX D24・25	側柱 3×37	6.2	1.6～2.6	5.2	1.7～1.8	N40° W	隅丸方形・ 長方形	40～68(54)	326.76～327.16 (327.04)	42～84	
川久保	02	2区1面	IX I09・10	側柱 3×3	4.7	1.2～1.9	4.3	1.4・1.5	N18° W	隅丸方形	32～56(41)	327.18～327.32 (327.29)	16～30	
川久保	08	1区11面	IX A06・07	側柱 17×3	4.8	1.2～2.0	3.6	3.6	N43° W	円形	42～66 (54)	327.06～327.46 (327.24)	10～46	
川久保	09	1区11面	IX A02-06-07	側柱 17×37	4.2	1.2)～1.7	3.5	3.5	N39° W	円形	70～40 (49)	327.02～327.32 (327. 21)	18～22	
川久保	10	5区3面	II N17・22・23	側柱 2×3	5.8	1.9～2.0	1.9・ 2.0	3.5	N43° W	円形	60～88(75)	328.16～328.66 (328.46)	30～60	
川久保	11	5区3面	II N23, S03	側柱 2×37	5.6	1.8～1.9	3.2	1.6・1.5	N68° E	円形	38～70 (51)	328.30～328.40 (328.37)	20～40	
川久保	12	5区3面	II N23, S03	側柱 1×2以上	3.4 以上	1.6・1.8	3.0	1.6	N49～ 52° E	円形	40～60 (48)	328.36～328.60 (328.44)	16～38	
川久保	13	5区3面	II N16-17-22	側柱 2×2	3.58	1.68・1.9	3.4	1.77・1.77	N27° W	円形・ 楕円形	30～66(52.3)	328.39～328.74 (328.54)	26～54	
宮沖	02	1区2面	XVI V05・10, W01	側柱 2×3	6.99	1.84～2.64	4.73	2.4・2.33	N30° E	円形・ 隅丸方形	37～82(61.8) (331.93)	331.72～332.1 (331.93)	15～48	
宮沖	03	1区2面	XVI V05・10, W01	側柱 2×3	6.99	1.74～2.64	4.73	2.4・2.33	N30° E	円形・ 隅丸方形	37～82(61.8) (331.93)	331.72～332.1 (331.93)	15～48	
宮沖	04	1区2面	XVI R16	側柱 2×37	5.97	1.7～2.33	3.64	1.86・1.78	N35° W	円形・ 楕円形	40～86(54.1) (331.29)	331.20～331.36 (331.29)	11～24	
宮沖	34	1区2面	XVI R21-W01	側柱 1×3	3.32	1.44～1.88	2.2	1.17・1.17	N21° E	円形・ 楕円形	25～70(48.7) (331.26)	331.18～331.30 (331.26)	10～16	
宮沖	35	1区2面	XVI W01-06	側柱 2×2以上	3.24 以上	1.21～1.64	3.02	1.50・1.52	N43° W	円形・ 隅丸方形	36～69(52.3) (330.92)	330.72～331.02 (330.92)	7～35	
宮沖	36	1区2面	XVI V10, W06	側柱 2×3	4.9	1.48～1.64	3.3	1.58・1.40	N54° W	円形・ 長方形	34～76(52.8) (330.80)	330.63～331.04 (330.80)	16～40	
宮沖	37	1区2面	XVI V15-W11	側柱 1×2 (3)	3.8 (5.7)	1.70～2.11	3.98	2.17・1.81	N71° E	円形・ 楕円形	38～56(45.4) (330.49)	330.28～330.66 (330.49)	12～44	
宮沖	38	1区2面	XVI V20-W16	側柱 1×3	5.04	1.18～1.99	3.42	1.71?・ 1.71?	N0° W	円形・ 楕円形	41～81(56.1) (330.40)	330.00～330.60 (330.40)	8～56	

第3章 検出された遺構と遺物

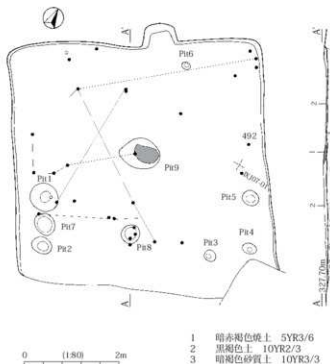
川久保 SB05



- 1 黒褐色砂質土 10YR3/1 炭化物多混
- 2 暗褐色砂質土 10YR3/3 炭粒少混
- 3 暗褐色砂質土 10YR3/3 青灰色シルトブロック少混
- 4 暗褐色砂質土 10YR3/4 焼土粒少混
- 5 暗褐色砂質土 7.5YR3/4 焼土ブロック少混
- 6 によみ褐色焼土 5YR7/3
- 7 黒褐色砂質土 10YR3/2 焼土ブロック混
- 8 暗赤褐色砂質土 2.5YR3/4 焼土ブロック混
- 9 焼土



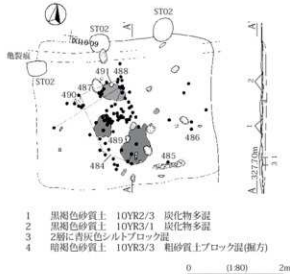
川久保 SB07



- 1 暗赤褐色焼土 5YR3/6
- 2 黒褐色土 10YR2/3
- 3 暗褐色砂質土 10YR3/3



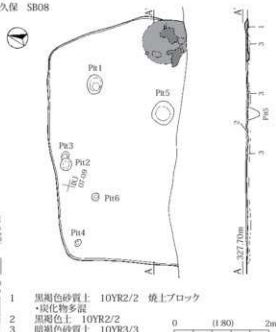
川久保 SB06



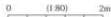
- 1 黒褐色砂質土 10YR2/3 炭化物多混
- 2 黒褐色砂質土 10YR3/1 炭化物多混
- 3 2層に青灰色シルトブロック混
- 4 暗褐色砂質土 10YR3/3 粗砂質土ブロック混(掘方)



川久保 SB08



- 1 黒褐色砂質土 10YR2/2 焼土ブロック・炭化物多混
- 2 黒褐色土 10YR2/2
- 3 暗褐色砂質土 10YR3/3



川久保 SB08 カマド

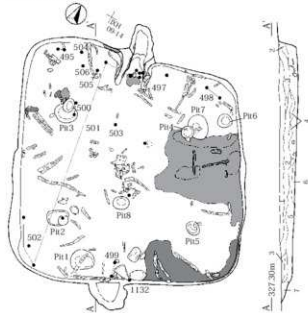


- 1 黒褐色砂質土 10YR2/2 焼土ブロック・炭化ブロック多混
- 2 暗褐色砂質土 10YR3/3
- 3 焼土ブロック
- 4 炭化物層



第86図 川久保SB05・06・07・08

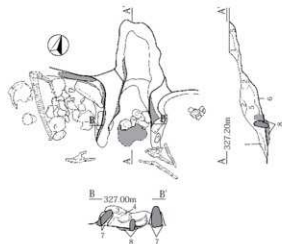
川久保 SB15



- 1 黒褐色土 10YR3/2
- 2 黒褐色土 10YR3/2 焼土ブロック・炭化物少混
- 3 黒褐色土 10YR3/2 5層に黄褐色ブロック混
- 4 黒褐色土 10YR3/2 焼土粒・炭粒均一に混
- 5 黒褐色土 10YR3/2 炭化材・焼土ブロック混
- 6 黒褐色土 10YR3/2 黄褐色土ブロック混
- 7 暗褐色土 10YR3/3 黄褐色シルト粒混

0 (1:80) 2m

川久保 SB15 カマド

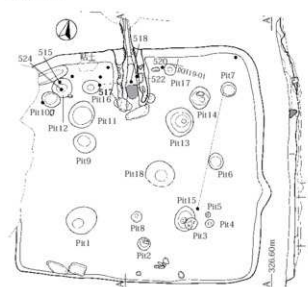


- 1 黒褐色土 10YR3/2 黄褐色シルトブロック(地山)多混
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3 黒褐色土小ブロック少混
- 3 黒褐色土 10YR3/2 焼土粒・にぶい黄褐色土ブロック混
- 4 赤褐色土 5YR4/6 焼土ブロック多混
- 5 黒褐色土 10YR3/2 にぶい黄褐色土ブロック・焼土粒混
- 6 暗褐色土 10YR3/3 緻密で粘性強
- 7 にぶい褐色土 7.5YR6/4 炭化物ブロック状に混
- 8 にぶい赤褐色土 5YR4/4

0 (1:40) 1m

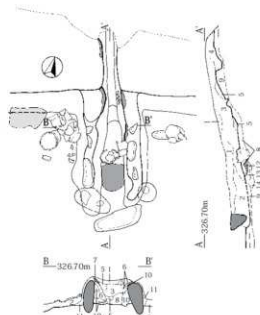
川久保 SB17 カマド

川久保 SB17



- 1 黒褐色土 10YR3/2 にぶい黄褐色土粒少混
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3 しまり良好
- 3 にぶい黄褐色土 10YR4/3 黒褐色土ブロック多混 焼土粒少混 しまり良好
- 4 にぶい黄褐色土 10YR4/3 黒褐色土・にぶい褐色土ブロック混

0 (1:80) 2m

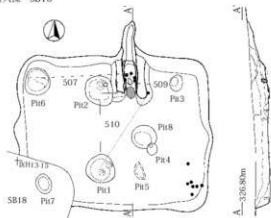


- 1 暗褐色土 10YR3/3 焼土粒混
- 2 黒褐色土 10YR3/2 にぶい黄褐色土粒混
- 3 暗褐色土 10YR3/3 1層に炭粒混
- 4 黒褐色土 10YR3/2 しまり弱
- 5 褐色土 10YR4/4 暗褐色土ブロック混
- 6 褐色土 10YR4/4 粘性強
- 7 暗赤褐色焼土 2.5YR3/4 11層が被熱で赤化
- 8 暗褐色土 10YR3/3
- 9 暗褐色土 10YR3/3 焼土ブロック混
- 10 暗褐色土 10YR3/3 焼土ブロック混 粘性強
- 11 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (焼土)
- 12 にぶい褐色土 7.5YR5/3
- 13 明赤褐色焼土 5YR5/6
- 14 極暗赤褐色焼土 2.5YR2/3

0 (1:40) 1m

第87図 川久保 SB15・17

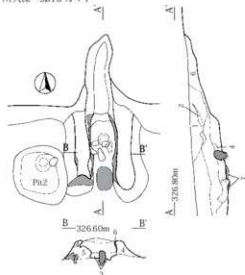
川久保 SB16



- 1 黒褐色土 10YR3/2 黄褐色シルトブロックわずかに混
- 2 黒褐色土 10YR3/2 黄褐色シルトブロック少量混
- 3 黒褐色土 10YR2/3 炭化物混
- 4 黒褐色土 10YR2/3 炭化物・焼土粒混

0 (1:80) 2m

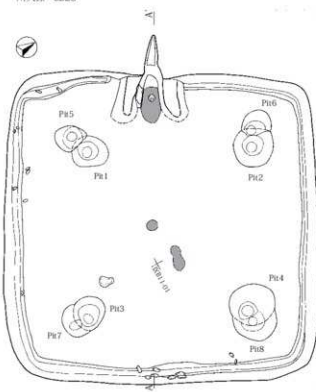
川久保 SB16 カマド



- 1 黒褐色土 10YR3/2 焼土粒・炭粒混
- 2 暗赤褐色土 5YR3/3 (埋土2層) 焼土粒混在
- 3 黒褐色土 10YR3/2 焼土ブロック・炭粒多混
- 4 暗褐色土 10YR3/3 黄褐色粘土多混
- 5 暗赤褐色土 5YR3/3 焼土ブロック多混
- 6 黒褐色土 10YR2/3 黄褐色土ブロック・炭粒多混
- 7 暗赤褐色土 5YR3/3

0 (1:40) 1m

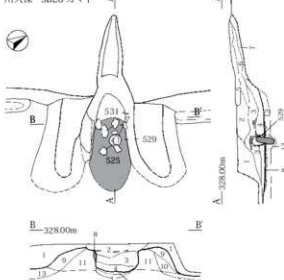
川久保 SB28



- 1 黒褐色粘質シルト 10YR3/2 粘性強く、しまり良好 焼土粒・炭粒わずかに混
- 2 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 黄灰白色シルトブロック(1-2m大)少量混
- 3 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 黄灰白シルトブロック混入 焼土粒・炭粒少量混
- 4 黒褐色土 10YR3/2 褐色土上ブロック混
- 5 黒褐色土 10YR3/2

0 (1:80) 2m

川久保 SB28 カマド

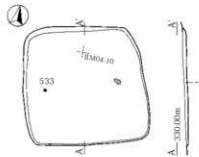


- 1 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 (住居埋土2層)
- 2 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 炭化物少量混
- 3 橙色土 7.5YR7/6 焼土ブロック主体 下部土源混
- 4 黒色土 10YR2/1 灰・炭化物混在
- 5 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 1-2m大焼土上ブロック・黄灰白シルトブロック混
- 6 灰黄褐色土 10YR4/2 1m以下の層か、焼土粒・炭粒少量混
- 7 褐色粘質土 5YR5/1 1-2m大の焼土粒少量混黄灰白シルトブロック多混
- 8 にいり赤褐色焼土 5YR4/4
- 9 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2
- 10 暗赤褐色土 5YR5/6 細かい焼土粒多混
- 11 黒褐色粘質土 10YR3/2 褐色土上ブロック混
- 12 黒褐色粘質土 10YR3/2 細かい褐色土上ブロック混
- 13 黒褐色粘質土 10YR3/2

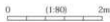
0 (1:40) 1m

第88図 川久保 SB16・28

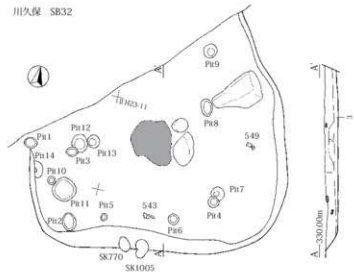
川久保 SB30



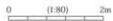
- 1 黒褐色シルト 10YR2/2 白色粒子・0.1cm大赤褐色粒子多混 1-3cm大の円礫を混



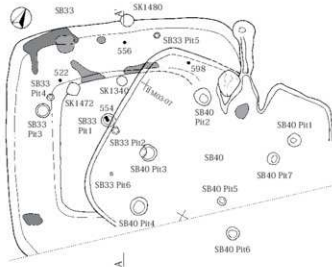
川久保 SB32



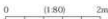
- 1 黒褐色砂質シルト 7.5YR3/1 白色粒子・灰・焼土粒混入 しまり良好 粘性ややあり 円礫混
2 黒褐色シルト 7.5YR3/2 1.5cm以下の焼土粒15%混 しまりあり
3 黒褐色シルト? 10YR3/2? 1.5cm以下の礫混



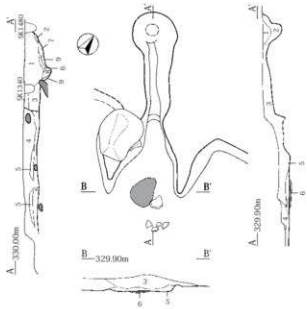
川久保 SB33・40



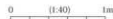
- 1 黒褐色シルト 10YR2/2 白色粒子・赤色粒子を少混 黄褐色土ブロックを全体に混 しまり良好
2 黒褐色シルト 10YR2/2 焼土粒多混 やや粘性あり しまり良好
3 暗褐色シルト 10YR3/3 しまり良好
4 黒褐色シルト 10YR2/2 白色粒子・1cm大の赤褐色粒子を多混 10-20cm大の円礫を少混
5 黒褐色シルト 10YR3/2 灰・粘土粒を多混
6 黒褐色粘土質シルト 10YR3/2 黄褐色土ブロック状に混
7 1層に小礫・白色粒子を混入 しまり良好
8 1層に焼土多混 焼土は上部に多い
9 5層と同じ 粘性あり



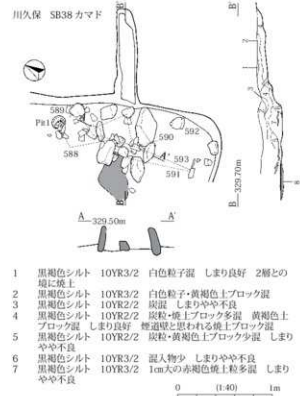
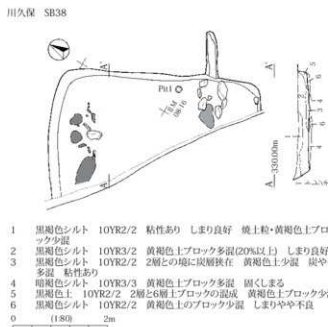
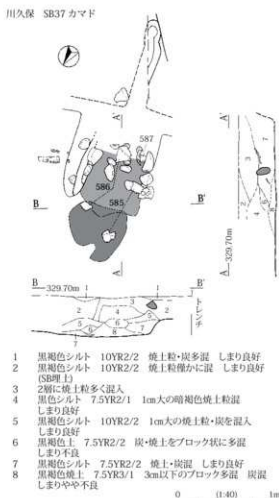
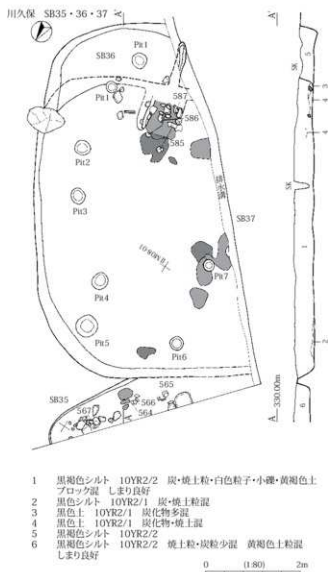
川久保 SB40 カマド



- 1 黒褐色砂質シルト 10YR2/2 灰・焼土多混 黒褐色に焼けた1cm大前後の焼土ブロック混 しまり良好
2 黒褐色シルト 10YR3/2 焼土粒・灰・黄褐色土粒を全体に混 しまりやや不良
3 2層と同じだが、しまり良好 焼土粒を全体に混
4 黒褐色シルト 10YR3/2 焼土粒少混 しまり良好
5 黒褐色シルト 10YR2/2 0.5cm大の焼土粒多混 灰少混 しまりやや不良
6 灰床

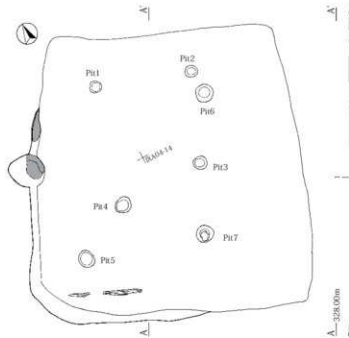


第89図 川久保 SB30・32・33・40



第90図 川久保SB35・36・37・38

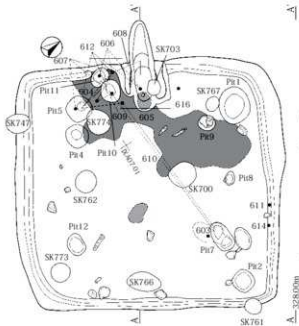
川久保 SB42



- 1 褐色粘質シルト 10YR5/1 灰白色シルトブロック混

0 (1.80) 2m

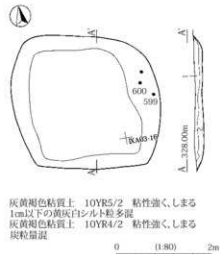
川久保 SB49



- 1 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2
- 2 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 炭粒・焼土粒少混
- 3 灰黄褐色粘質シルト 10YR5/2 炭粒・焼土粒少混 粘性強
- 4 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 炭粒・焼土粒少混
- 5 黒褐色粘質土 10YR3/2 2層より炭粒やや多混 粘性強
- 6 焼土
- 7 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1-5cm大黄褐色土ブロック多混

0 (1.80) 2m

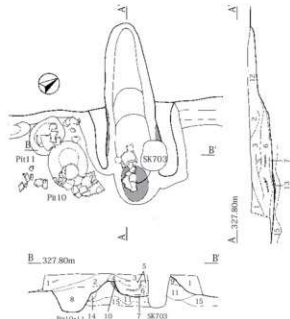
川久保 SB41



- 1 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 粘性強く、しまる
1cm以下の黄灰白シルト粒多混
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 粘性強く、しまる
炭粒多混

0 (1.80) 2m

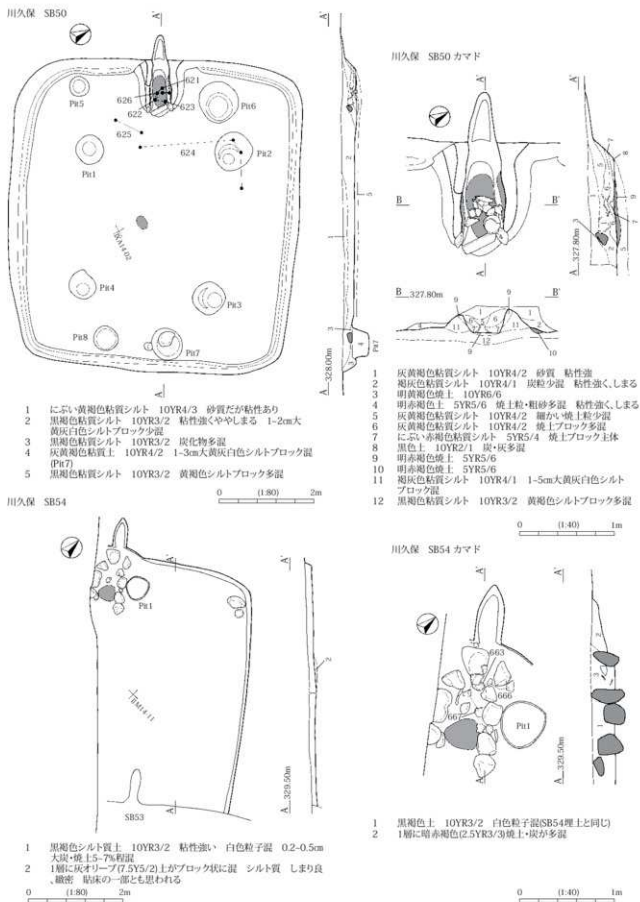
川久保 SB49 カマド



- 1 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 砂混 粘性強くしまる
- 2 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 砂混 粘性強くしまる 焼土粒・炭粒多混
- 3 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 砂混 粘性強くしまる 焼土粒・炭粒やや多混
- 4 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2
- 5 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 1cm以下の細か焼土粒多混
- 6 褐色粘質シルト 7.5YR6/6 焼土ブロック多混
- 7 黒色土 10YR2/1 炭・灰主体 焼土粘混
- 8 褐色粘質シルト 5YR6/6 粗砂・焼土粒多混 粘性強くしまる
- 9 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 1cm以下の焼土粒・炭粒少混
- 10 褐色焼土 5YR6/6
- 11 淡赤褐色粘質シルト 2.5YR7/3
- 12 灰黄褐色土 10YR4/2 1cm以下の細か焼土粒多混
- 13 焼土
- 14 灰黄褐色土 10YR4/2
- 15 灰黄褐色土 10YR4/2 灰黄褐色シルトブロック多混

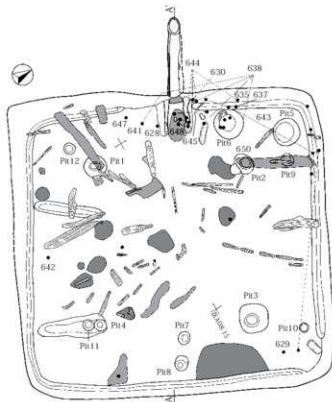
0 (1.40) 1m

第91図 川久保SB41・42・49



第92図 川久保 SB50・54

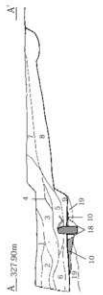
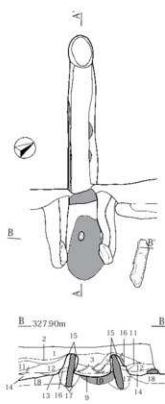
川久保 SB51



- 1 褐色粘質シルト 10YR6/1 黄灰白色砂ブロック混
- 2 灰黄褐色粘質シルト 10YR5/2 全体的に砂混 ササクする
- 3 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 1cm大黄灰白色シルトブロック混 粘性強くしまる
- 4 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 1-5cm大黄灰白色土ブロック混 粘性強くしまる
- 5 黒色土 10YR2/1 炭・焼土粒多混
- 6 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 炭粒やや多混
- 7 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2
- 8 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 1-10cm大黄褐色(10YR7/4)シルトブロック混

0 (1:80) 2m

川久保 SB51 カマド



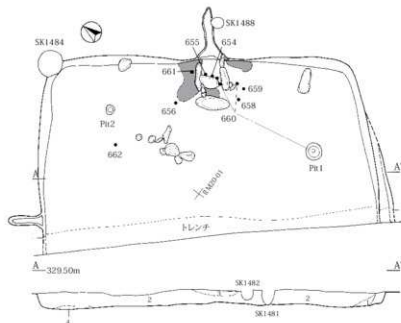
- 1 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 炭粒少混
- 2 灰黄褐色粘質シルト 10YR5/2 1cm以下の細かい黄灰白色シルトブロック混
- 3 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 1cm以下の細かい黄灰白色シルトブロック混 細かい焼土粒少混
- 4 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 焼土・炭粒多混 黄灰白色シルトブロック混
- 5 黒褐色粘質土 10YR3/2 1-2cm大焼土ブロック・炭化物多混
- 6 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/3 細かい砂粒少混
- 7 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 1-2cm大焼土ブロック混
- 8 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 1-2cm大焼土ブロック・炭化物多混
- 9 濃い赤褐色土 5YR4/4 焼土ブロック主体 黄褐色土ブロック混 炭粒少混
- 10 褐色焼土 5YR6/6
- 11 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 1cm以下の焼土・炭粒混
- 12 黒褐色粘質シルト 10YR3/1 細かい炭粒多混
- 13 明黄褐色粘質土 10YR7/6
- 14 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 焼土・炭粒多混 黄褐色シルトブロック混
- 15 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 濃い黄褐色(10YR7/4)粘質シルトブロック混
- 16 濃い赤褐色土 5YR4/4 焼土ブロック・炭粒主体
- 17 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1-5cm大黄褐色土ブロック混
- 18 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 1-10cm大黄褐色シルトブロック多混

0 (1:40) 1m

第93図 川久保SB51

第3章 検出された遺構と遺物

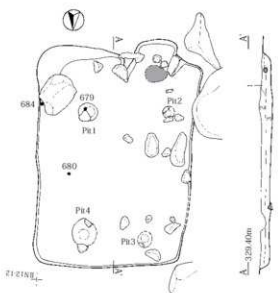
川久保 SB53



- 1 黒褐色シルト質土 10YR3/1 白色粒子見られる 0.2-0.5cm大炭
- 2 黒褐色シルト質土 10YR3/2 全体に炭・焼土粒散在的に混
- 3 褐色土 10YR4/1 灰色粘土ブロック混
- 4 2層に灰オリブ色土(7.5V)ブロック混

0 (1:80) 2m

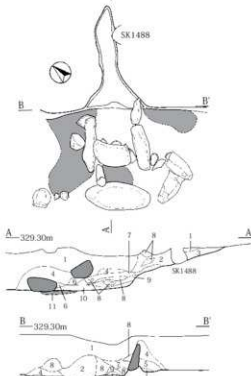
川久保 SB58



- 1 灰黄褐色土 10YR5/2 1-3cm大黒褐色土ブロック多混
- 2 1層に細か〜焼土粒多混
- 3 褐色土 10YR4/1 礫多混

0 (1:80) 2m

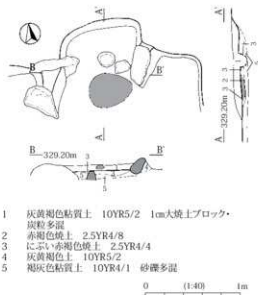
川久保 SB53 カマド



- 1 SB埋土
- 2 8層に焼土ブロック多混
- 3 黒褐色シルト 10YR3/1 焼土・炭混 しまり良好
- 4 黒褐色粘土質シルト 10YR3/1 細礫・白色粒子混 炭少混 酸分集積 しまり良
- 5 4層に焼土粒多混
- 6 黒褐色粘土質シルト 10YR3/1 焼土・炭粒混 しまり不良
- 7 暗褐色シルト 10YR3/3 粘性あり やや軟質 焼土粒・炭・灰黄褐色土(灰か?)混入
- 8 にぶい赤褐色シルト 5YR4/4 焼土ブロック多量に混入 しまり やや不良
- 9 黒褐色シルト 7.5YR3/1 しまり不良 軟質(灰混入?)
- 10 黒褐色シルト 10YR3/2 焼土多混 しまり不良
- 11 火床

0 (1:40) 1m

川久保 SB58 カマド

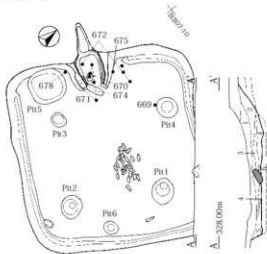


- 1 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 1cm大焼土ブロック・炭粒多混
- 2 赤褐色土 2.5YR4/8
- 3 にぶい赤褐色焼土 2.5YR4/4
- 4 灰黄褐色土 10YR5/2
- 5 褐色粘質土 10YR4/1 砂礫多混

0 (1:40) 1m

第94図 川久保 SB53・58

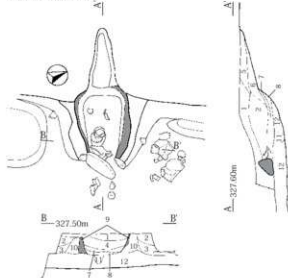
川久保 SB55



- 1 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 1-2cm大黄褐色砂ブロック少混にふい・黄褐色粘質シルト 10YR4/3 粘性あり 固くしまる
- 2 黒色粘質シルト 10YR2/1 炭化物多混 固くしまる
- 3 黒褐色粘質シルト 10YR3/1 粘性あり 固くしまる
- 4 黒褐色粘質 10YR3/1 炭粒少混
- 5 灰黄褐色粘質上 10YR4/2 黄褐色土ブロック多混

0 (1.80) 2m

川久保 SB55カマド



- 1 灰黄褐色粘質上 10YR4/2
- 2 にふい・黄褐色粘質上 10YR4/3 粘性強くしまる
- 3 黒褐色粘質上 10YR3/1 炭化物少混
- 4 にふい・黄褐色粘質上 10YR4/3 焼土粒少混
- 5 灰黄褐色粘質上 10YR4/2 細かい焼土粒少混
- 6 にふい・黄褐色土 10YR4/3 焼土ブロック少混
- 7 灰黄褐色粘質上 10YR4/2 焼土ブロック・黄褐色シルトブロック多混
- 8 黒色土 10YR2/1 炭層
- 9 褐色焼土 5YR6/6
- 10 暗褐色粘質上 10YR3/3 黄褐色シルトブロック多混
- 11 灰黄褐色粘質上 10YR4/2 焼土粒少混
- 12 灰黄褐色粘質上 10YR4/2 黄褐色シルトブロック多混

0 (1.40) 1m

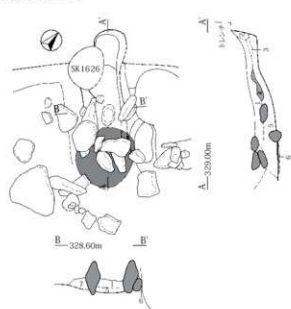
川久保 SB60



- 1 黒褐色粘質上 10YR3/2 灰白色シルトブロック・焼土粒少混
- 2 灰黄褐色粘質上 10YR4/2 2-3cm大灰白色シルト・灰黄褐色粘質上ブロック混
- 3 暗褐色土 10YR4/1 灰白色シルト・黒褐色粘質上ブロック混
- 4 黒褐色粘質上 10YR3/2 粘性強いが、しまり不良 炭化物少混
- 5 黒褐色土 10YR3/1 灰色シルトブロック混
- pit5 暗褐色粘質シルト 10YR4/1 SB60のpitではない
- pit6-1 暗褐色粘質シルト 10YR4/1
- pit6-2 灰白色シルトブロック主体

0 (1.80) 2m

川久保 SB60カマド

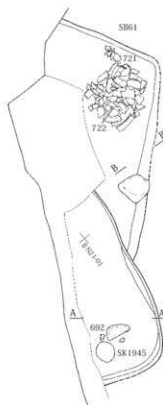


- 1 黒褐色砂質シルト 10YR2/3 粘性あるが、しまり不良
- 2 暗赤褐色土 2.5YR3/2
- 3 黒色土 10YR2/1
- 4 赤褐色焼土 2.5YR4/6
- 5 黒色土 10YR2/1 炭多混
- 6 にふい・赤褐色焼土 2.5YR4/3
- 7 にふい・黄褐色土 10YR5/4

0 (1.40) 1m

第95図 川久保 SB55・60

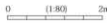
川久保 SB59・61



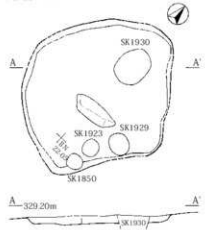
- 1 褐色粘質土 10YR4/1 粗砂全体に散在 粘性強く、しまる
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1cm以下の炭粒少量混



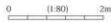
- 1 褐色シルト質粘土 10YR4/1 粘性あり
- 2 黒色土 10YR2/1 確認 (池1の)
- 3 褐色(10YR4/1)に黒褐色(10YR2/3)上ブロック混シルト質粘土 粘性あり



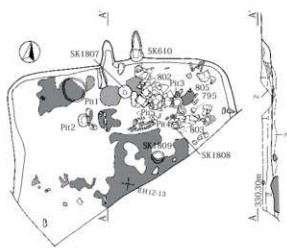
川久保 SB62



- 1 褐色土 10YR4/1 粘性あり しまり良好



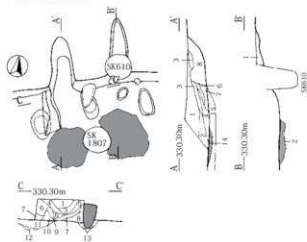
宮沖 SB01



- 1 暗褐色土 10YR3/4 しまり良好 粘性弱
- 2 黒褐色土 10YR2/3
- 3 黒褐色粘質土 10YR3/2 粗砂少混 1~3cm大黄褐色土ブロック多混

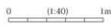


宮沖 SB01 カマド



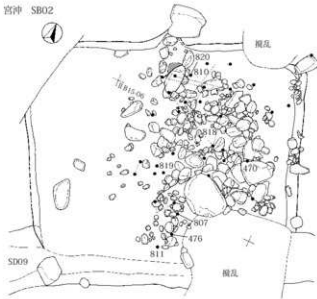
- (SB01 カマドA, A', C, C')
- 1 黄褐色土 しまり良好 粘性ややあり
 - 2 黒褐色土 10YR2/3
 - 3 にぶい黄褐色土 10YR5/4 しまり・粘性なし 3~5cm大焼土 粘点存在
 - 4 にぶい黄褐色土 10YR5/4 しまり・粘性なし
 - 5 にぶい黄褐色土 10YR5/4 しまりなし 粘性ややあり
 - 6 にぶい黄褐色土 10YR4/3 しまりなし 粘性ややあり
 - 7 暗褐色土 10YR3/3 しまり不良 粘性強
 - 8 褐色土 10YR4/4 しまり・粘性なし
 - 9 黒褐色土 10YR3/2 焼土・炭粒多混
 - 10 にぶい黄褐色粘質土 10YR5/3 黄褐色土ブロック多混(ノデ)
 - 11 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1cm大黄褐色土ブロック・焼土粒多混
 - 12 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1cm大黄褐色土ブロック多混
 - 13 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 焼土粒少混
 - 14 焼土
 - 15 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 確認 しまり良好

- (SB01 カマドB-B')
- 1 黒褐色粘質土 10YR3/2・10YR3/1 黄褐色土ブロック少混
 - 2 焼土

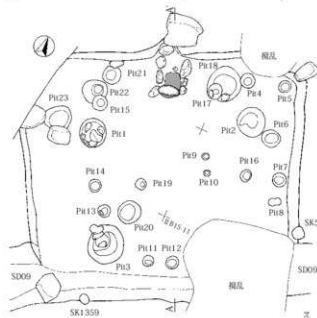
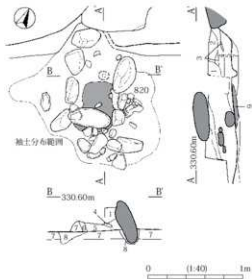


第96図 川久保 SB59・61・62、宮沖 SB01

宮沖 SB02



宮沖 SB02 カマド

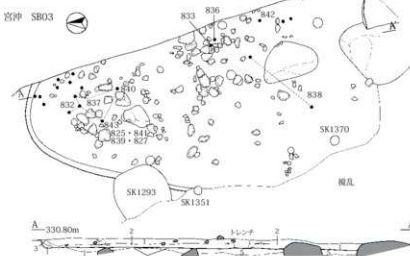


(SB02 カマド)

- 1 にぶい黄褐色土 10YR4/3 しまり良好 粘性なし
1-3cm大炭土粒・暗褐色粘泥
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3 しまりややあり 粘性なし
- 3 黄褐色土 10YR5/6 しまり・粘性なし
- 4 にぶい黄褐色土(10YR4/3)上と黄褐色土(10YR5/6)上ブロック混在 しまり・粘性なし
- 5 暗褐色土 10YR3/3 しまりなし 粘性ややあり
- 6 黄褐色土 10YR5/8 しまりなし 粘性ややあり
- 7 黒褐色土 10YR3/2 しまり・粘性なし
- 8 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 粗砂多量 ややしまる
焼土

- 1 黒褐色土(10YR3/2)上になぶい黄褐色土(10YR5/4)上ブロック混
- 2 暗褐色土 10YR3/4 細かい砂均一に混 しまり強
粘性あり
- 3 褐色土 10YR4/4 細かい砂均一に混 しまり強
粘性あり
- 4 黄褐色土 10YR5/6 暗褐色土(10YR3/3)上ブロック混
- 5 黒褐色土 10YR3/2 1cm大の灰黄褐色土(10YR6/2)
粒が均一
- 6 にぶい黄褐色シルト 10YR7/4 細かいブロック主体
黒褐色粘質土 10YR3/2 粗砂多量 粘性あり しまる

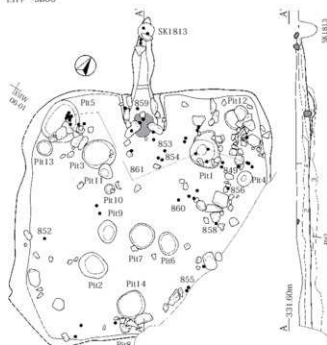
宮沖 SB03



- 1 暗褐色土 10YR3/3 1-2m大白色・黄色粒
均一に混在 1-2m大炭化物混 しまり強
粘性なし
- 2 暗褐色土 10YR3/3 1-2m大白色・黄色粒
均一に混在
1-2m大炭化物混 しまりやや強 粘性僅かに
あり
- 3 灰黄褐色土 10YR4/2 褐色土(10YR4/4)上
ブロック混 しまりやや強 粘性僅かにあり
- 4 にぶい黄褐色土 10YR4/3 褐色
土(10YR4/6)上ブロック混 しまりやや強 粘
性僅かにあり
- 5 黒褐色粘質土 10YR3/2 粗砂少混 黄褐
色・黒褐色土粒混

第97図 宮沖SB02・03

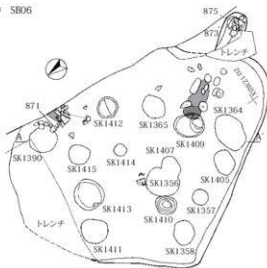
宮沖 SB05



- 1 黒褐色粘質土 10YR3/2 1cm以下の細かい黄褐色土粒多混 炭粒少混 暗褐色土ブロックより成るか
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 黒褐色(10YR3/2)粘土ブロック混 焼土粒・炭粒少混
- 3 黒褐色粘質土 2.5Y3/1 1-3cm大黄褐色(2.5Y5/3)シルトブロック多混 粘性強く、しまり良好

0 (1:80) 2m

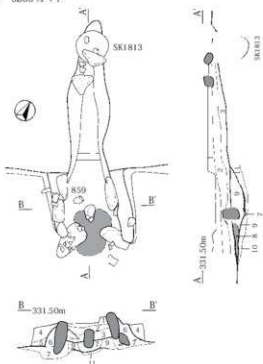
宮沖 SB06



- 1 黒褐色粘質土 10YR3/2 1cm大黄褐色土ブロック少混
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1-3cm大黄褐色土ブロック多混 1-3cm大焼土粒・炭粒少混
- 3 ぶい・黄褐色砂質シルト 10YR4/3 暗褐色ブロック多混

0 (1:80) 2m

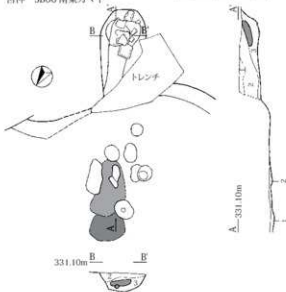
宮沖 SB05 カマド



- 1 黒褐色土 10YR3/2 埋土1層
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1cm大焼土ブロック少混
- 3 黒褐色粘質土 10YR3/2 1cm大焼土ブロック・炭粒多混
- 4 黒褐色粘質土 10YR3/2 黄褐色粒多混
- 5 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 灰色強 粘質強 黄褐色ブロック少混
- 6 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1-5cm大黄褐色ブロック多混
- 7 黒褐色粘質土 10YR3/2 焼土粒・炭粒多混
- 8 橙色焼土 7.5YR6/6
- 9 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 細かい焼土粒少混
- 10 橙色焼土 7.5YR6/6
- 11 黒褐色粘質土 10YR3/2 焼土粒少混

0 (1:40) 1m

宮沖 SB06 南東カマド

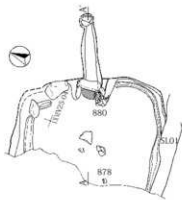


- 1 褐色粘質土 10YR4/1
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1-2cm大の焼土ブロック多
- 3 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1-5cm大褐色(7.5YR4/3) 焼土ブロック混

0 (1:40) 1m

第98図 宮沖SB05・06

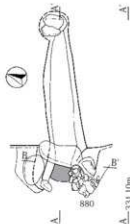
宮沖 SB08



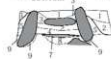
- 1 褐色粘質土 10YR4/1 粘性強く、しまる
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1cm大黄褐色土ブロック多混
- 3 2層に1-3cm大黄褐色シルトブロック多混
- 4 ぶい・黄褐色砂質シルト 10YR4/3 褐色土ブロック10%混
- 5 火床
- 6 7層とほぼ同じ 7層より黄褐色土ブロック少混
- 7 灰黄褐色土 10YR4/2 カマド側方 焼土粒・黄褐色土ブロック多混



宮沖 SB08 カマド



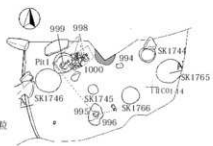
- 1 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1cm大黄褐色シルトブロック多混
- 2 褐色粘質土 10YR4/1 炭粒・焼土粒少混
- 3 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1-3cm大黄褐色土ブロック多混
- 4 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 焼土粒・炭粒少混
- 5 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 焼土ブロック・炭化物多混
- 6 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 黄褐色土ブロック少混
- 7 火床
- 8 灰黄褐色土 10YR4/2 焼土粒・黄褐色土ブロック多混
- 9 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 黄褐色土ブロック多混



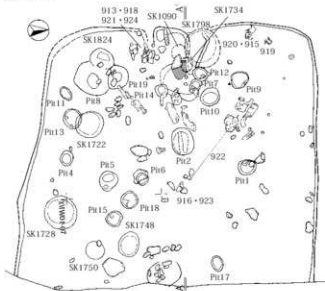
- 1 黒褐色粘質土 10YR3/1 細かい黄褐色シルト粒わずかに混
- 2 黒褐色土 10YR3/1 黄褐色土粒1層より多混
- 3 黒褐色シルト 10YR2/3 赤色粒・白色粒混



宮沖 SB15



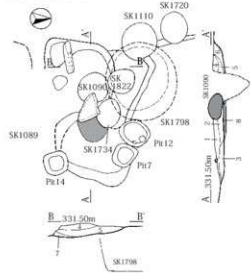
宮沖 SB12



- 1 黒褐色シルト 10YR3/1 砂混
- 2 黒褐色土 10YR3/1
- 3 黒褐色シルト 10YR3/2 しまり良好 粘性なし 砂混



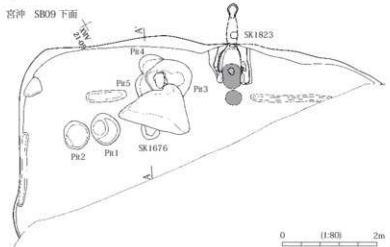
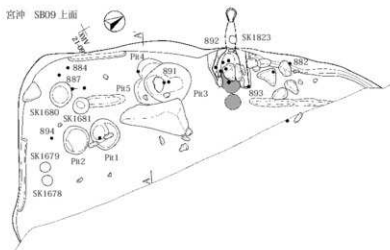
宮沖 SB12 カマド



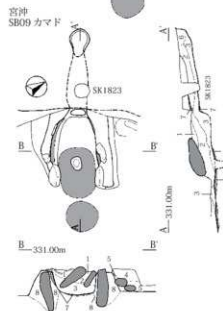
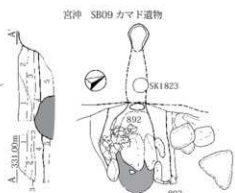
- 1 黒褐色粘質土 10YR3/1 粘性強 砂混
- 2 黒褐色粘質土 10YR3/2 1-3cm大黄褐色土少混
- 3 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 黄褐色土粒・焼土粒少混
- 4 褐色粘質土 10YR4/1 焼土粒やや少混
- 5 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 焼土粒・炭粒多混
- 6 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1cm以下の細かい黄褐色土粒・焼土粒少混
- 7 ぶい・黄褐色シルト 10YR5/3
- 8 焼土



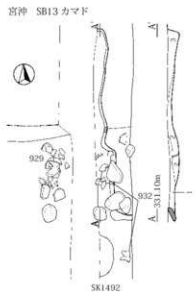
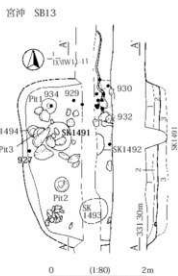
第99図 宮沖SB08・12・15



- 1 黒褐色粘質土 10YR4/1 粘性強く、しまる 細かい黄褐色土粒・粗砂全体的に散在
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1-3cm大の黄褐色土ブロック多混
- 3 黒褐色粘質土 10YR3/1 粒子均一 粘性強く、しまる
- 4 黒褐色粘質土 10YR3/2 粘性強く、しまる 3層より粗砂少混 粒子細かい・灰黄褐色(10YR5/2)粘質土ブロック少混
- 5 黒褐色シルト 10YR2/3 白色粘混

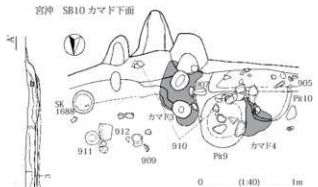
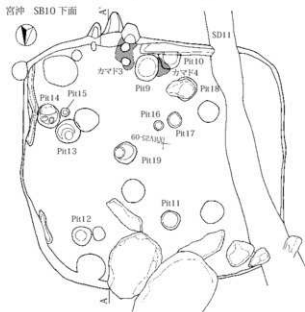
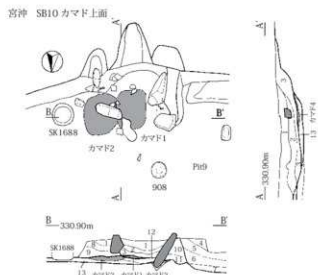
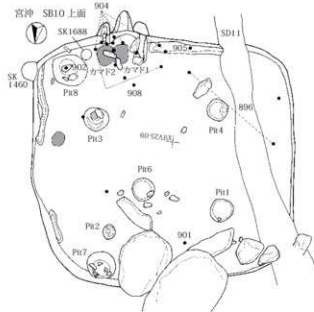


- 1 黒褐色粘質土 10YR3/1 焼土粒少混
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1cm大の焼土ブロック・炭粒多混
- 3 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 炭粒少混
- 4 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1-3cm大焼土ブロック混
- 5 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 黄褐色土粒少混
- 6 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1cm大黄褐色土ブロック多混
- 7 黒褐色土 10YR3/2 黄褐色土ブロックを10%混
- 8 濃い黄褐色土 10YR4/3 黄褐色ブロックを30%混 焼土粒混



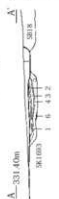
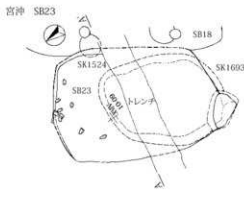
- SB13
- 1 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 粗砂少混 1-3cm 大黄褐色土ブロック混
 - 2 黒褐色粘質土 10YR3/2 1cm以下の黄褐色土ブロック少混
 - 3 暗褐色土 10YR3/3 しまり良好
- (SB13 カマド)
- 1 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 焼土粒少混
 - 2 黒褐色粘質土 10YR3/1 1cm大焼土ブロック・炭化物多混
 - 3 黒褐色粘質土 10YR3/1 炭化物多混

第100図 宮沖 SB09・13



- 1 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 粗砂多混 粘性ありしまる 褐色(10YR4/1)粘質土との混成土
- 2 褐色粘質土 10YR4/1 粗砂少混 焼土粒散在(南、東部にやや多)
- 3 黒褐色粘質土 10YR3/1 細かい黄褐色土粒多混 しまる 粗砂多混(二次床面)
- 4 黒褐色シルト 10YR2/3 白色粒多混

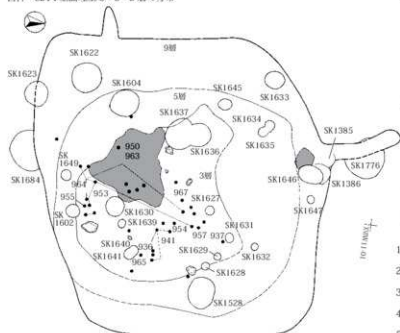
- 1 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 粗砂少混 黄褐色粒多混
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 粗砂・黄褐色土多混 焼土粒少混
- 3 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 1cm以下の焼土粒多混 炭化物・灰多混
- 4 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1-3cm大黄褐色土ブロック少混
- 5 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 粗砂多混 粘性強
- 6 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 焼土粒少混
- 7 黒褐色粘質土 10YR3/2 粗砂多混 焼土粒少混(カマド下石設置穴カマ)
- 8 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 細かい焼土粒多混
- 9 褐色粘質土 10YR4/1 1cm以下の焼土粒少混
- 10 褐色粘質土 10YR4/1 粗砂混多 粘性強
- 11 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 細かい黄褐色土・粗砂多混
- 12 黒褐色粘質土 10YR3/2 粗砂多混 1cm大焼土ブロック・炭化物多混
- 13 黒褐色粘質土 10YR3/2 細かい焼土粒少混



- SB23
- 1 黒褐色粘質土 10YR3/1 炭粒・焼土粒少混
- SK1693
- 1 黒褐色粘質土 10YR3/1 1-3cm大黄褐色土粒多混
 - 2 黒褐色粘質土 10YR3/1 黄褐色土粒少混
 - 3 黒褐色粘質土 10YR3/1 1-3cm大黄褐色土ブロック多混
 - 4 黒褐色粘質土 10YR3/1 黄褐色土粒少混
 - 5 黒褐色粘質土 10YR3/1 1-3cm大黄褐色土ブロック多混
 - 6 うすい焼土

第101図 宮沖 SB10・23

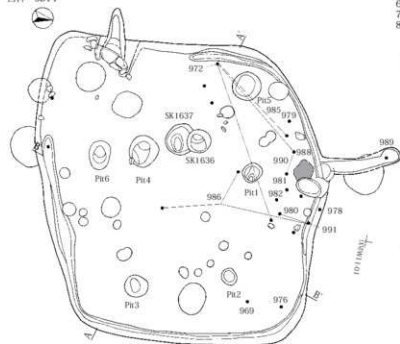
宮神 SB14 上面埋土3・5・9層の分布



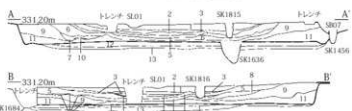
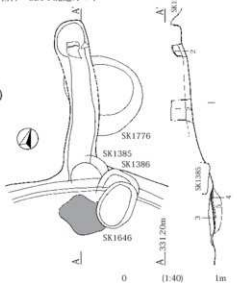
宮神 SB14 西辺カマド



宮神 SB14



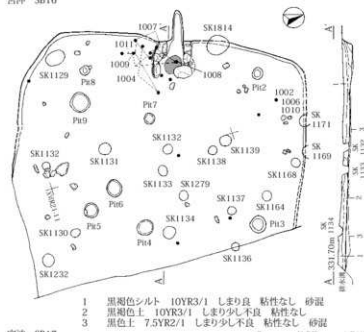
宮神 SB14 北辺カマド



- 1 褐色粘質土 10YR4/1 細かい焼土粒・炭粒少混
- 2 褐色粘質土 10YR4/1 細かい焼土粒・炭粒少混 1-2cm
- 3 大黄色土ブロック少混
- 4 褐色粘質土 10YR4/1 焼土ブロック・炭化物多混
- 5 焼土
- 6 灰黄色粘質土 10YR4/2 1-3cm大黄色土ブロック多混
- 6 灰黄色粘質土 10YR4/2 1-10cm大黄色土ブロック多混
- 7 灰黄色粘質土 10YR4/2 6層より黄褐色ブロック多い
- 8 黒褐色粘質土 10YR3/1 炭化物片多混 薄い層状に混
- 9 灰黄色粘質土 10YR4/2 黄褐色土・焼土少混
- 10 紫色炭屑 10YR2/1
- 11 褐色粘質土 10YR4/1 炭化物少混 黒褐色土ブロック多混
- 12 黒褐色土 10YR3/2 しまり多 粘性なし
- 13 黒褐色土 10YR3/2 しまり・粘性なし

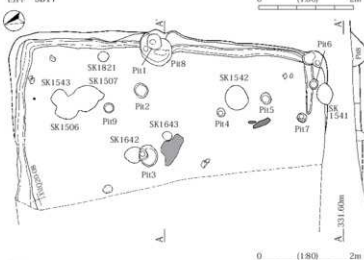
第102図 宮神SB14

宮沖 SB16

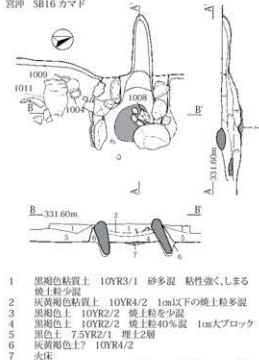


- 1 黒褐色シルト 10YR3/1 しまり良 粘性なし 砂混
- 2 黒褐色上 10YR3/1 しまり少し不良 粘性なし 砂混
- 3 黒色上 7.5YR2/1 しまり少し不良 粘性なし 砂混

宮沖 SB17

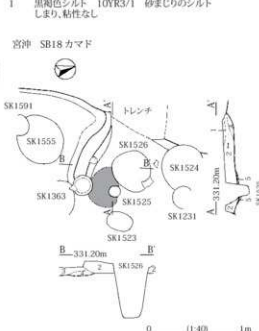


宮沖 SB16 カマド



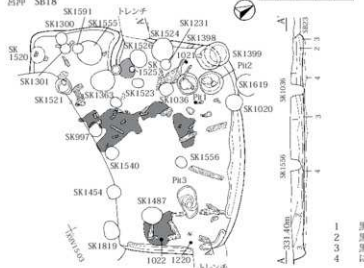
- 1 黒褐色粘質土 10YR3/1 砂多混 粘性強く、しまる 焼土粒少混
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1cm以下の焼土粒多混
- 3 黒褐色土 10YR2/2 焼土粒を少混
- 4 黒褐色土 10YR2/2 焼土粒40%混 1cm大ブロック
- 5 黒色土 7.5YR2/1 埋土2層
- 6 灰黄褐色土? 10YR4/2
- 7 火床

宮沖 SB18 カマド



- 1 褐色粘質土 10YR4/1 1-3cm大黄褐色土ブロック混
- 2 褐色粘質土 10YR4/1 焼土粒多混 炭化物少混
- 3 褐色粘質土 10YR4/1 1-3cm大黄褐色土ブロック多混
- 4 濃い黄色粘質土 黄褐色土ブロック主体
- 5 焼土

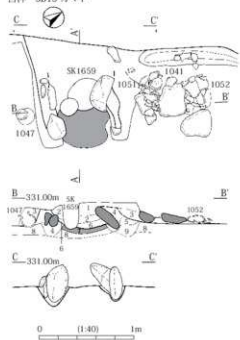
宮沖 SB18



- 1 黒褐色粘質土 10YR3/2 1cm大黄褐色土粒少混
- 2 黒褐色粘質土 10YR3/1 炭粒少混
- 3 黒褐色粘質土 10YR3/1 1-3cm大黄褐色土ブロック、焼土粒多混
- 4 濃い黄色粘質土 2.5Y6/3 黄褐色土ブロック多混

第103図 宮沖SB16・17・18

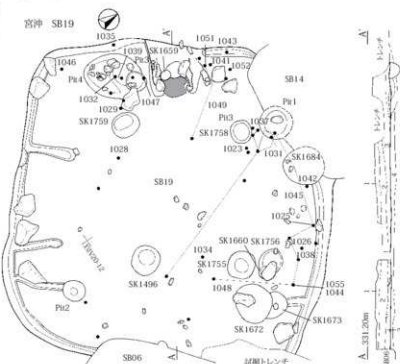
宮沖 SB19 カマド



(SB19 カマド)

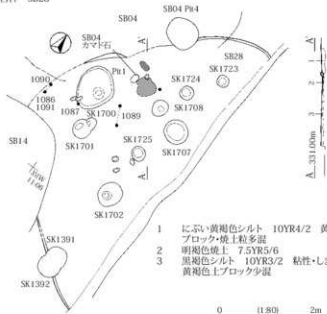
- 1 灰黄褐色粘質土 10YR6/2 1cm大黄褐色土ブロック混 焼土粒少混
- 2 褐灰色粘質土 10YR4/1 焼土粒・黄褐色土ブロック多混
- 3 褐灰色粘質土 10YR4/1 1cm大黄褐色土ブロックやや多混
- 4 褐灰色粘質土 10YR4/1 焼土粒・灰粒少混
- 5 にぶい黄色土 2.5Y6/3 シルトブロック主体 焼土粒微混
- 6 にぶい橙色焼土 7.5YR6/4 細か・焼土ブロック主体
- 7 明褐色焼土 7.5YR5/6
- 8 明褐色シルト 10YR3/3 粘性・しまりあり 黄褐色土ブロック混
- 9 黒褐色シルト 10YR2/2 黄褐色ブロック30%混
- 10 灰黄褐色粘質土 10YR6/2 1cm以下の細か・焼土粒混

宮沖 SB19



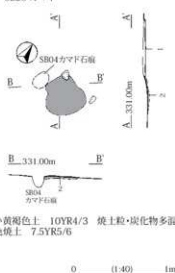
- 1 褐灰色粘質土 10YR4/1 1cm大黄褐色土粒多混
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR6/2 1-5cm大黄褐色土ブロック多混(比減少)
- 3 褐灰色粘質土 10YR4/1 黄褐色土粒少混 粘性強く、ねっとりしている
- 4 黒褐色シルト 7.5YR3/2 しまり良好 粘性なし 砂混

宮沖 SB28



- 1 にぶい黄褐色シルト 10YR4/2 黄褐色土ブロック・焼土粒多混
- 2 明褐色焼土 7.5YR5/6
- 3 黒褐色シルト 10YR3/2 粘性・しまりあり 黄褐色土ブロック少混

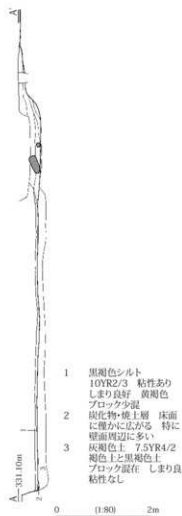
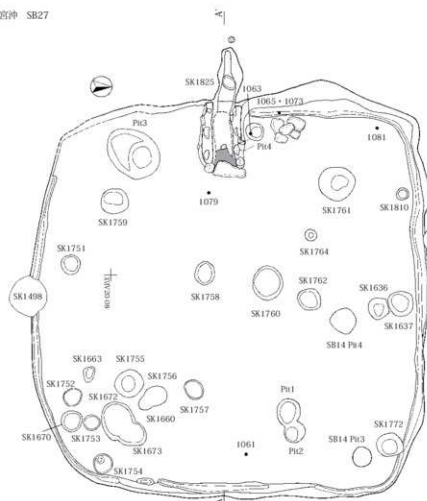
宮沖 SB28 カマド



- 1 にぶい黄褐色土 10YR4/3 焼土粒・炭化物多混
- 2 明褐色焼土 7.5YR5/6

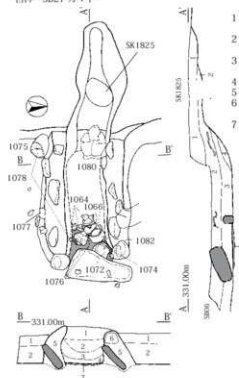
第104図 宮沖 SB19・28

宮沖 SB27

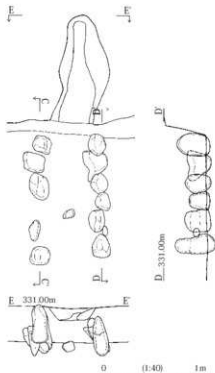


- 1 黒褐色シルト
10YR2/3 粘性あり
しまり良好 黄褐色
ブロック少量
- 2 灰化物・焼土層 床面
に僅かに広がる 特に
壁面周辺に多い
- 3 灰褐色土 7.5YR4/2
褐色土之黒褐色土
ブロック散在 しまり良
粘性なし

宮沖 SB27 カマド



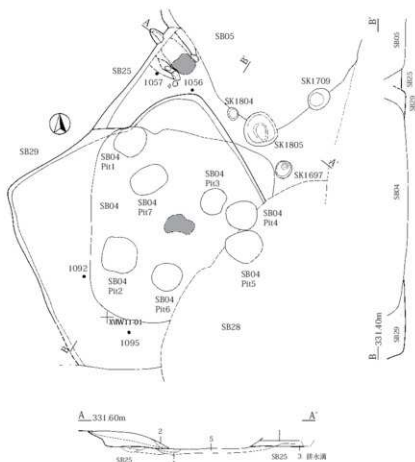
- 1 灰褐色土 7.5YR4/2
黄褐色土ブロック混
- 2 黒褐色土 7.5YR3/2
焼土ブロック混
- 3 黒褐色土 7.5YR3/2
焼土ブロック混
- 4 褐灰色土 7.5YR4/1
- 5 赤褐色土 10R4/4
- 6 赤褐色土 10R4/4
- 7 焼土粒混在
赤褐色焼土 10R4/4



第105図 宮沖SB27

第3章 検出された遺構と遺物

宮沖 SB25・29



SB25・29

- 1 暗褐色シルト 10YR3/3 粘性あり しまり弱 黄褐色土ブロック10%混
- 2 暗褐色シルト 10YR3/3 粘性あり しまり弱 黄褐色土ブロック堆積 1層類似
- 3 暗褐色シルト 10YR3/3 粘性あり しまり弱 黄褐色土ブロック40%混
- 4 暗褐色シルト 10YR3/3 粘性あり 3cm大のブロック40%混
- 5 黒色粘質土 10YR2/1 黄褐色土ブロック混

0 (1:80) 2m

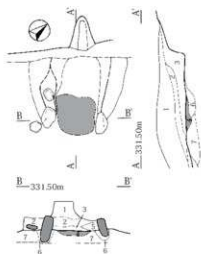
宮沖 SB30



- 1 灰黄褐色シルト 10YR4/2 黄褐色土ブロック・焼土
粒多混
- 2 明褐色焼土 7.5YR5/6
- 3 黒褐色シルト 10YR3/2 粘性・しまりあり 黄褐色土
ブロック少混

0 (1:80) 2m

宮沖 SB25 カマド



(SB25 カマド)

- 1 黒褐色シルト 10YR3/1 粘性・しまり弱
- 2 黄褐色土ブロック30%混
- 3 暗褐色シルト 10YR4/1 粘性あり
- 4 明褐色シルト 10YR4/1 粘性あり
- 5 しまり弱 焼土粒40%程混
- 6 明褐色焼土 7.5YR5/6
- 7 暗褐色シルト 10YR3/4 焼土粒少混
- 8 暗褐色シルト 10YR3/3 赤色粒と黄褐色
土ブロック30%混
- 9 暗褐色シルト 10YR3/3 黄褐色土ブロック
少混

0 (1:40) 1m

川久保ST01 2区1面 IX D24・25 (第107図 PL17)

川久保2区北西部の1面のNR1a上部のIV層上面で検出した。調査区北壁にかかった本跡のPit8・9は基本土層Ⅲ層下部まで立ち上がりが確認された。直接重複する遺構はない。本跡は直線的に等間隔で並ぶPit1～4を南辺とし、その西端Pit1から北直交方向のPit9、東端のPit4から北直交方向のPit8を結ぶラインをそれぞれ西辺、東辺と捉えた。北辺は調査区外に位置する。西辺中間のPit5・6は西辺Pit1と9を結ぶライン外側に位置し、その中間外側に本跡施設の可能性があるSK18が位置する。また、東辺中間のPit7・8もPit4から北直交方向のライン外側に位置する可能性がある。東西辺の中央2基の柱穴が外側に位置する柱穴の配置は川久保ST02も同様である。本跡の規模は南辺3間約5.2m、西辺はPit9まで西辺3間約6.2m、東辺Pit8まで2間約4.4mを測る。川久保ST02と同じ柱配置ならば3×3間の側柱建物と推測される。この柱配置は建物構造の在り方に由来すると思われるが、棟方向は特定できなかった。南辺の方位はN40°Wである。柱間寸法は南辺約1.7～1.8m、西辺約1.7～2.0m、東辺約2.2mを測る。柱穴は直径50～60cmの隅丸方形か円形で、断面形はU字・逆台形で検出面から底面までの深さ約50～80cmを測る。埋土はⅢ層を基調とする黒褐色砂質土でしりはなく、炭化物や焼土粒を含む。西辺中央に位置するSK18は、直径80cm前後の円形の土坑で、梯子設置坑とも思われる。出土遺物は混入の古墳時代前期土師器片が少量あるが、古墳時代後期土器はPit3・4・8・9から38g以下しか出土しなかった。小片で図示し得なかったが、黒色土器A杯はC類がある。本跡の時期は古墳時代後期としかわからない。

川久保ST02 2区1面 IX I09・10 (第107図 PL17)

川久保2区北西部のIV層上面で検出。他遺構との重複では本跡がSBO6を切る。SBO6を切る地震によると思われる亀裂痕が本跡柱穴方向に延びているが、本跡柱穴では確認されなかった。南西隅柱穴は試掘トレンチにかかって不明である。本跡は3×3間の側柱建物跡と捉えたが、東西辺の中央2基の柱穴が東西辺ラインの外側に位置し、西辺中間のPit1・2中央の外側にはSK17が位置する。規模は異なるがST01と同じ柱配置である。規模は東西辺約4.9m、南北辺約4.6mを測り、平面形は方形である。東西辺の中間柱穴がライン外側に位置するのは建物構造に関連すると思われるが、棟方向は断定できなかった。東西辺の方位はN18°W方向である。柱間寸法は南北辺で約1.4～1.5mと等間隔だが、東西辺は中央が1.2m前後で、両端は1.7～1.8m前後と広い。柱穴はやや不整形な1辺40cmほどの隅丸方形の平面形を呈し、底面は検出面から16～30cmほどの深さを測る。埋土はしまりのない暗褐色砂質土である。本跡にはST01同様に西辺中央の外側に直径60cmほどの円形のSK17が近接する。その西底面は深くなり、梯子埋設坑の可能性がある。出土遺物はないが、本跡は形態的に似るST01と類似時期と思われる。

川久保ST08 1区11面 IX A06・07 (第107図)

川久保1区北部にあり、1区11面のIV層上面で検出した。他遺構との重複では本跡がSB49を切る。直接重複しないが、同じ範囲に重なるST09は規模も類似し、建て替えの関係と思われる。本跡は調査時に直線的に並ぶ西桁行柱穴から存在が捉えられたが、東桁行の柱穴が確定できず、整理作業ではSB49ピットを含めた柱配列を検討した。その結果、本跡柱穴と認められたSB49Pit3をSK773、同Pit13をSK744に変更し、SK746・742・741・740を西桁行、SK774・762・773・748を東桁行と捉えた。本跡南梁行中央にST09のSK744、本跡北梁行中央付近にST09のSK747が位置するが、本跡北梁行ラインから内側に位置し、ST09のSK700・749とほぼ方形に並ぶことからST09柱穴と捉えた。本跡は桁行3間約4.8m、梁行1間約3.6mの側柱建物跡で、棟方向はN43°Wである。柱間寸法は東桁行で北から約1.3・2.9・1.3mと中央の柱間が広い。遺物はSK746から古墳時代後期Ⅲ片8g、同黒色土器A杯の底部1

片 18g、SK748 より不明土器 6g が出土した。本跡の時期は古墳後・奈良 2 期以後と思われる。

川久保 ST09 1 区 11 面 IX A02・06・07 (第 107 図)

川久保 1 区北西部に位置し、1 区 11 面の IV 層上面で検出した。他遺構との重複では本跡が SB49 を切り、ST08 は直接切り合わないが、重なって位置する。本跡は整理作業の検討で ST08 から東へ約 2m ずれた位置に方形に並ぶ柱穴 SK747・744・749・766・700 から認定した。ST08 と類似規模で、建て替えの関係と捉えた。SB49 床面で検出した SK766 は当初 SB49 ピットとも考えたが、東桁行ライン上にあって本跡柱穴と捉えた。規模は桁行柱間数が不明ながら、長さ 4.2m、梁行 1 間約 3.5m を測る。側柱建物跡と思われ、棟方向は N39° W である。桁行中間の柱穴は不明だが、SK766 から柱間寸法は約 1.7m と想定され、ST08 同様に 3 間と思われる。SK700 から古墳時代後期土師器壺 2 片 95g と時期不明甕 1 片 11g、SK744 から古墳時代後期甕片 1 片 17g が出土した。重複関係から本跡の時期は古墳後・奈良 2 期以後と思われる。

川久保 ST10 5 区 3 面 II N17・22・23 (第 108 図 PL17)

川久保 5 区中央西端にあり、3 面で検出した。個別に検出した SK1863・1864・1886～1888・1906～1909 が方形に並ぶと捉えられて調査時に本跡を認定し、柱穴番号は北西隅から時計まわりに Pit1～10 に変更した。北西隅の柱穴は本跡認定以後に検出したもので本跡のピット番号のみ付した。他遺構との重複では本跡が SB60 を切り、中世の SK1637・1937、時期不明 SK1865 に切られる。棟方位 N43° W、桁行 3 間約 5.8m、梁行 2 間約 3.5m の規模である。柱穴は直径 60～80cm の円形、楕円形を呈し、断面形は方形で検出面からの深さは 30～60cm を測る。緩やかに南へ向かって傾斜する地形に立地して柱穴底面標高は南側ほど低い傾向にあり、Pit7 のみ浅い。埋土は黒褐色土ブロックを含む灰黄褐色土で、柱痕跡は Pit7・8 で検出されたが、他では捉えられなかった。柱間寸法は桁行で約 1.9～2.0m、梁行で約 1.9m 前後と推測される。遺物は Pit1・3～7・9・10 から古墳時代後期甕、壺・杯など 450g が出土し、Pit10 出土の黒色土器 A 杯 1 個体 62g (724) を図示した。遺物は重複する SB60 からの混入土器も多いが、SB60 を切ることから本跡時期は古墳後・奈良 4 期以後と思われ、近接する ST11・12 と関連する可能性がある。

川久保 ST11 5 区 3 面 II N23、S03 (第 108 図 PL18)

川久保 5 区 3 面南部の調査区西際に位置する。個別に SK とした柱穴を整理作業で配列を検討して長方形に配列する SK1872・1873・1876・1881・1897・1922・1925 から本跡を認定した。南桁行柱穴は 2 基のみしか捉えられず、南西部は調査区外へ延びて規模は不明である。調査区内では棟方向 N68° E、桁行 3 間約 5.6m、梁行 2 間約 3.2m の側柱建物跡と捉えられた。柱間寸法は桁行で 1.8～1.9m、梁行で 1.5m 前後を測る。柱穴の平面形は長軸 70cm ほどの楕円形を呈するものもあるが、直径約 30～50cm 前後の円形の平面形で、断面形は長方形か若干 U 字形ぎみの方形を呈し、検出面から底面までの深さは約 20～40cm を測る。柱穴の底面標高は近似し、南西方向に傾斜する地形にあって北東部の柱穴が深い。埋土は灰白色～灰黄褐色土と黒褐色土ブロックからなる土層で人為的に埋められたと考えられる。遺物は SK1876 から不明土器片 1 片 10g、SK1922 から古墳時代後期の底部脇をケズリ調整する土師器甕 4 片 138g が出土した。近接する川久保 ST10 と類似時期と思われる。

川久保 ST12 5 区 3 面 II N23・S03 (第 108 図)

川久保 5 区 3 面の南端、調査区西壁際に位置する。個別に SK として調査した柱穴を整理時に配列を検討し、東西方向に直線的に並ぶ SK1927・1918・1919 と、SK1927 の南東直交方向に並ぶ SK1880、SK1919 と南直交方向にある SK1868 がコ字形に並ぶように認められて本跡を認定した。南桁行の

SK1877は桁行ラインからやや位置がずれ、さらにSK1880のみ底面標高が高く、SK1927とSK1880のみ埋土に焼土粒を含む特徴があるなど、同一建物跡柱穴との断定には不安を残す。ここでは可能性がある掘立柱建物跡として掲載する。本跡は調査区西壁外へ延びて規模は不明だが、調査区内では棟方向N49°～52°E、桁行2間約3.7m、梁行1間3.0m前後の側柱建物跡とみられる。梁行の長さがやや長く、桁行は北と南で方位が若干ずれる。柱間寸法は桁行でSK1877とSK1880間は約1.6mと狭いが、他はほぼ1.8～1.9m前後である。柱穴は直径40～60cm前後の平面形が円形を呈し、断面形は方形で検出面から底面まで約30～40cmを測るが、かなり浅いSK1880以外は近似した底面標高である。遺物はSK1927から古墳時代後期黒色土器A杯2片12g、ナデ調整と思われる土師器甕4片54g、小型壺1片9gが出土した。本跡は近接するST10と類似時期と思われる。

川久保ST13 5区3面 II N16・17・22 (第108図)

川久保5区南部に位置する。3面のSB62を切る柱穴SK1930・SK1929を通るラインでトレンチを入れたところ、南側にSK1935が検出され、SK1930・1929・1935が直線的に等間隔に並ぶと認められた。さらに、浅く小規模ながらSK1850・1855がSK1930・1929・1935と梁行の対位置で直線的に並ぶことから本跡を認定した。調査時に南西隅の柱穴をSK1939と想定したが、測量後に位置を見直すと桁行、梁行ラインからずれることから本跡柱穴でないと判断し、南西隅の柱穴は不明となった。本跡は調査区西壁際にあつて、西側調査区外へ延びる可能性がある。調査区内で棟方向N27°W、桁行2間約3.6m、梁行1間約3.4mの側柱建物跡と認定した。梁行の間隔が広いが、桁行柱間寸法は1.7～1.8mである。西桁行の柱穴は直径約50～80cmの円形、楕円形の平面形を呈し、検出面から底面までの深さは40cm前後を測り、東桁行の柱穴は直径30～40cmで深さは30cm前後である。東桁行の柱穴のほうが若干小さい。遺物はSK1930から古墳時代後期高杯2片8g、土師器甕2片32g、同壺2片32g、同小型壺1片7gと不明土器10g、SK1858から黒色土器A杯1片4g、土師器甕3片51g、SK1935から古墳時代後期土師器甕4片44g、同壺2片49gが出土した。ケズリ調整の甕片を含むことから古墳後・奈良5期以後のものと思われる。

宮沖ST02・03 1区2面 XVI V05・10、W01 (第109図 PL18)

宮沖1区北部の段丘縁辺近くに位置し、2面検出の直径50cm前後の柱穴が長方形に並ぶことから本跡を認定した。周囲には建物跡と認定し得なかった柱穴も多くあり、掘立柱建物跡が集中的に建てられた場所と思われる。他遺構との重複では本跡が古墳前期SB20・22を切り、SK223・SK224など中世柱穴に切られる。また、柱穴は2～3基が重複・近接して検出された。最も新しい柱穴Pit4内で柱痕跡が認められたことから、重複する柱穴は柱の抜き取り痕ではなく重複位置での建て替えと捉え、最終時の建物跡をST02、その前段階の建物跡をST03と捉えた。なお、個々の柱穴は重複関係で新しいものからa～cの枝番号を付し、ST02はPita、ST03はPitbと呼称した。Pit7～10ではa～cの3基柱穴が重なるように認められ、もう1棟存在する可能性があるが、欠落する柱穴が多く認定し得なかった。Pit5も3基重なるともみえるが、Pit5b・cは同一柱穴の柱痕跡と掘方を別に捉えた可能性がある。また、Pit2は重複柱穴が捉えられず、同一場所で作り替えた可能性がある。SK1375はPit4bの西隣にあるが桁行ラインから大きくずれてST02・03柱穴ではないと判断した。本跡は梁行2間約4.7m、桁行3間約6.9mの側柱建物跡で、棟方向はN30°Eである。各柱穴埋土はⅢ層黒褐色土を基調として、Ⅳ層黄褐色土ブロックの入り方から分層した。また、本跡の位置する場所は緩やかに斑尾川へ向かって傾斜するが、低面標高

は類似する。遺物は比較的多いが、混入と思われる古墳時代前期や弥生土器、不明土器を除くと古墳時代後期～奈良時代土器は Pit1 から 31 片 262g、Pit2 から 16 片 159g、Pit3 から 14 片 152g、Pit4 から 15 片 101g、Pit5 から 37 片 310g、Pit6 から 28 片 244g、Pit7 から 8 片 50g、Pit8 から 10 片 86g、Pit9 から 15 片 122g、Pit10 から 11 片 168g が出土した。このなかで Pit2・5・9 から須恵器杯 A、Pit3 から須恵器蓋 2 片 8g 出土し、本跡の時期は古墳後・奈良 7 期と思われる。

宮沖 ST04 1 区 2 面 XVI R16 (第 109 図)

宮沖 1 区北端に位置し、2 面で検出した柱穴配列を整理作業で検討し、SK1511・1516・1812・1721・1518・1509・1510 がコ字形に配置されることから本跡を認定した。北東部が調査区外へ延びるが、調査区内では梁行 2 間約 3.6 m、桁行 3 間約 6.0 m 以上の側柱建物跡と捉えた。柱穴は直径 50～80cm の円形で、検出面からの深さは 30cm 弱である。遺物は小片で図示していないが、SK1509・1518 から土師器甕片等 10g、47g が出土した。

宮沖 ST34 1 区 2 面 XVI R21、W01 (第 109 図)

宮沖 1 区北部の 2 面で検出した。整理作業の検討で SB12Pit7・1・2、SK1722・1728・1748 が長方形並ぶと認められ本跡を認定した。SB12Pit1・2・7 は床面上で検出し、SB12 床面が上面に載らないことから本跡が SB12 を切ると思われる。梁行 1 間約 2.2 m、桁行 2 間約 3.3 m の側柱建物跡と捉えた。長方形に柱穴が並ぶが、中央の SB12Pit12 と SK1748 の位置が梁行の対位置にないので、柱に桁を載せる構造と思われる。出土遺物はない。本跡の時期は重複関係から古墳後・奈良 2 期以後としかわからない。

宮沖 ST35 1 区 2 面 XVI W01・06 (第 110 図)

宮沖 1 区北部の 2 面で検出した。整理作業で長方形に並ぶ SB05Pit12・(Pit3)・Pit9・Pit4、SK1720 が長方形に並ぶように認められ、本跡を認定した。南東部は調査区外へ延びて全容は不明だが、調査区内では梁行 1 間約 3.0 m、桁行 2 間約 3.2 m 以上の側柱建物跡と捉えられる。本跡柱穴が SB05Pit3 周辺的位置にあたるが、Pit3 は底面の深さから本跡柱穴とは考えにくく、不明となった。SB05Pit4・9・12 から土師器甕 27g、13g、7g と Pit9 より黒色土器 A 杯 1 片 12g が出土した。SB05 を切ることから本跡の時期は古墳後・奈良 7 期と思われる。

宮沖 ST36 1 区 2 面 XVI V10、W06 (第 110 図)

宮沖 1 区北部の 2 面で検出した。整理作業の検討で SK1352・1802・SB05Pit2・1709 が直線的に並ぶと捉えられ、東端の SK1709 の南直交方向にある SB04Pit4 と、SK1802 の南方に位置する SB04Pit1 を結ぶラインと平行することから掘立柱建物跡の可能性を考え認定した。SB05 の Pit2 は重複を見逃した柱穴で、SB04Pit4 は掘方が浅いため下層の柱穴が露出した可能性がある。また、SB04Pit1 は平安時代の土器が多く出土したが、下層は土器出土がなく本跡柱穴が重なっていた可能性がある。梁行 1 間約 3.3m、桁行 3 間約 4.9m の側柱建物跡で、西梁行中間に SK1426、東梁行中間に SK1697 があり、これを梁行中間柱穴として梁行 2 間の可能性がある。出土遺物は SK1352 より古墳時代後期～奈良時代の須恵器甕 1 片 45g、黒色土器 A 杯 6 片 61g、土師器杯 2 片 26g、土師器甕 15 片 149g、SK1709 より古墳時代後期土師器甕 2 片 26g、SK1802 より須恵器蓋 1 片 27g、土師器甕類 43g、SB04Pit1 より平安時代土師器甕 189g の他に古墳時代後期黒色土器 A1 片 3g、同土師器甕 20 片 378g、同 Pit 4 から古墳時代後期黒色土器 A 杯 2 片 34g、同盤・台付盤? 13 片 145g、土師器杯 I3 類 1 片 22g、甕類 19 片 682g と不明土器 22g が出土した。土師器杯 I3 類の出土から本跡の時期は古墳後・奈良 6・7 期と思われる。

宮沖 ST37 1区2面 XVI V15、W11 (第110図)

宮沖1区2面検出の柱穴を整理作業で配列を検討し、SB14床面上で検出されたSK1638・1646・1650・(SB14Pit3)、SB14を切るSK1630、重複を見逃してSB27床面で検出したSK1762が長方形に並ぶことから本跡を認定した。他遺構との重複ではSB14・27を切る。南西隅柱穴はSB14Pit3周辺に想定されるが、SB14Pit3は底面の深さや位置関係から本跡柱穴と断定できず、不明となった。また、北桁行の西延長上にSB07Pit3や南桁行の西延長先にSB27Pit4が位置するが、SB27Pit4は出土土器から本跡柱穴と認定できず、西側へ延長されるとは断定できなかった。本跡は梁行1間約4.0m、桁行2(3)約3.8(5.7)mの側柱建物跡と捉えられた。SB14を切ることから奈良時代の所産と思われる。遺物はSK1646から古墳時代後期土師器2片249gが出土した。重複関係から本跡の時期は6・7期と思われる。

宮沖 ST38 1区2面 XVI V20、W16 (第110図)

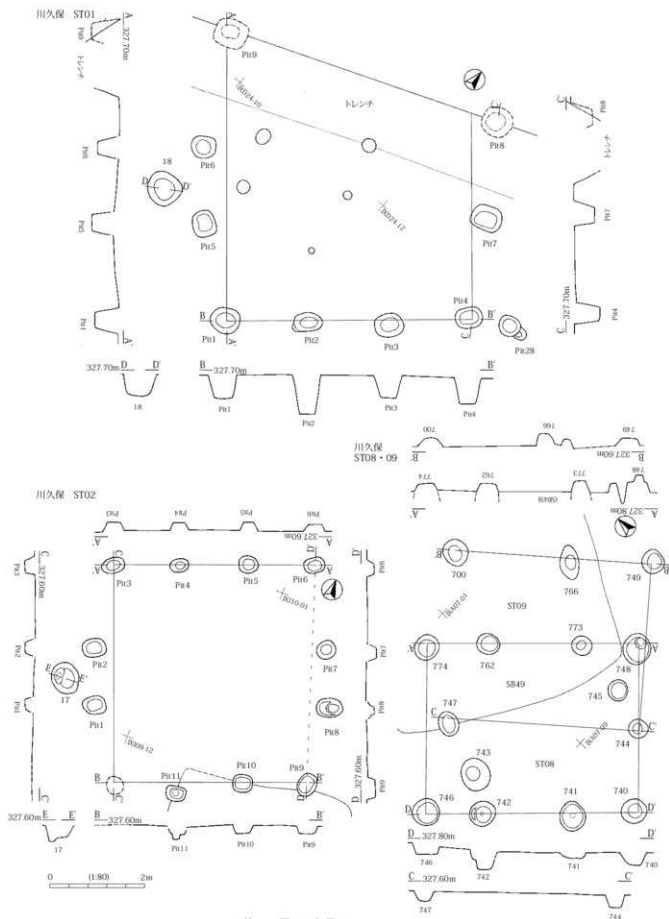
宮沖1区2面で検出した。整理作業の検討でSK1364・1407(1356)・1411・1498・1536(1374)・1674が長方形に並ぶと認められ本跡を認定した。他遺構との重複では本跡がSB06・19・27を切り、SB08に切られる。梁行1間約3.4m、桁行3間約5.0mの側柱建物跡と捉えた。北西隅の柱穴は不明である。遺物はSK1364から古墳時代後期黒色土器A杯1片6g、古墳時代後期～奈良時代土師器壺1片6gが出土した。方位に棟方向を合わせた掘立柱建物跡で、重複関係から本跡は古墳後・奈良6期と思われる。

(3) 土坑 川久保SK30、Pit32、宮沖SK259・1575・1806 (第111図 PL18 第21表)

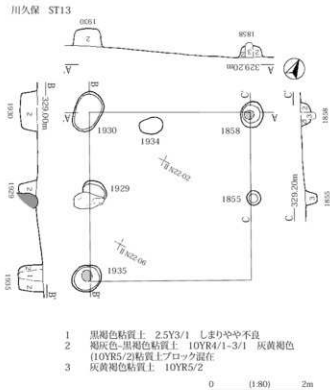
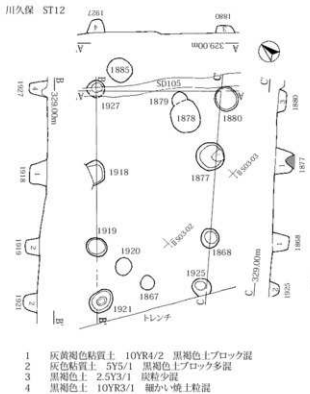
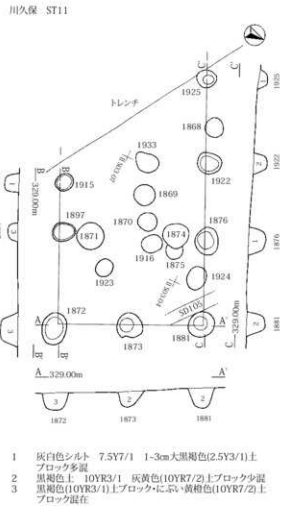
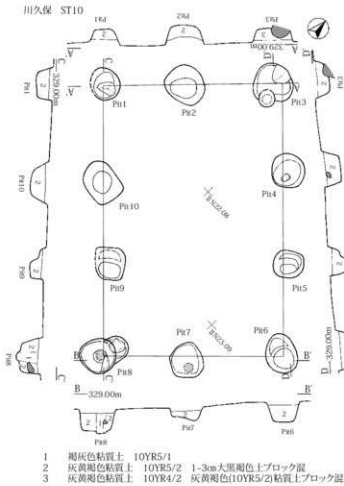
出土土器等から捉えられた当該期の土坑は川久保SK30、Pit32、宮沖SK259・1806・1575の5基のみある。川久保Pit32と宮沖SK1806は柱穴と思われるが、建物跡に組めず大型土器片を出土したことからここで扱う。川久保SK30はSB05北脇で検出され、埋土に焼土ブロックを多く含む。古墳時代後期土器を少量出土し、当該期の土坑と思われる。川久保Pit32は川久保ST04南東近くで検出した柱穴で、埋土中より盪の大破片が1片511g(735)出土した。ST04は形状から中世と思われ、本跡も中世の柱穴に古墳時代後期土器が混入した可能性もある。宮沖SK259は宮沖1区1面のIV層で検出し、浅い窪み状だが、遺存良好な土師器杯1片137g(1096)と古墳時代前期土器他16gが出土した。また、宮沖SK1575は中世柱穴と重なるが、古墳時代後期土器148片2005g、古墳時代前期土器15片56g、弥生土器1片2g、不明土器90gが出土し、土師器壺(1105)を図示した。中世の宮沖SK259と似た形状だが、古墳時代後期土器が多く出土し当該期の土坑と捉えた。SK1806は見逃して宮沖1区3面掘削中に検出し、古墳時代後期黒色土器A杯1片20g、土師器壺2片50g、土師器甕1片595g(1108)が出土した。柱穴と思われるが埋土から大型破片が出土した。SB30と重なって位置するが、SB30施設とは断定できなかった。

第21表 古墳時代後期～奈良時代土坑一覧表

土坑	調査区調査面	グリッド	平面形	長軸×短軸 (cm)	断面形	深さ (cm)	埋土の特徴・出土遺物・備考
川久保SK30	2区1面	IX J09	円形	40×37	逆台形	10	古墳後期土器少量出土。焼土ブロック含む。
川久保Pit32	2区1面	IX J02	圓丸方形?	36×31	U字形	38	埋土は黒褐色砂質土で筈の大片出土。柱穴。
宮沖SK259	1区2面	XVI V05	円形	62×60	浅い窪み?	10	浅い窪み状で土器大型片出土。
宮沖SK1575	1区2面	XVI Q25	不整形長方形	148×124	不整形	43	埋土は黒褐色砂質土。中世柱穴と重複する浅い窪み状落ち込み。
宮沖SK1806	1区2面	XVI W16	楕円形	54×44	逆台形	12	埋土は褐色粘質土、土器大片含む。柱穴。

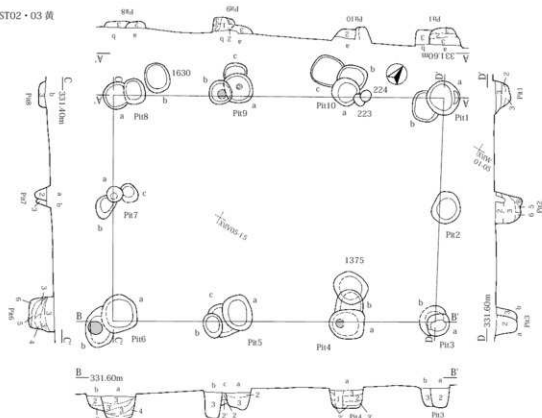


第107図 川久保ST01・02・08・09



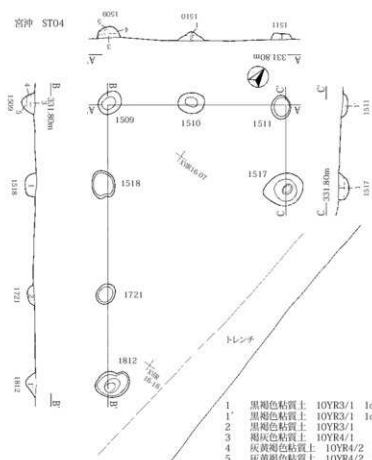
第108図 川久保ST10・11・12・13

宮沖 ST02・03 黄



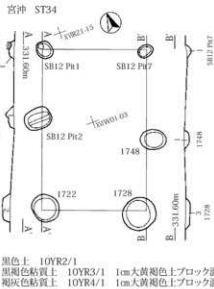
- 1 黒褐色土 10YR3/1 黄褐色土ブロック混
- 2 黒褐色土 10YR3/1 黄褐色土ブロック多混
- 2' 黒褐色土 10YR3/1 細かい黄褐色土ブロック多混
- 3 黒褐色土 10YR3/1 黄褐色土ブロック少混
- 3' 黒褐色土 10YR3/1 細かい黄褐色土ブロック少混
- 4 黒褐色土 10YR3/1
- 5 黒褐色土 10YR3/1 黄褐色土ブロック少混
- 6 灰黄褐色土 10YR4/2 黄褐色土ブロック少混

宮沖 ST04



- 1 黒褐色粘質土 10YR3/1 1cm大黄褐色土粒多混
- 1' 黒褐色粘質土 10YR3/1 1cm大黄褐色土粒少混
- 2 黒褐色粘質土 10YR3/1
- 3 褐色粘質土 10YR4/1
- 4 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 黄褐色土ブロック少混
- 5 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 黄褐色土ブロック多混

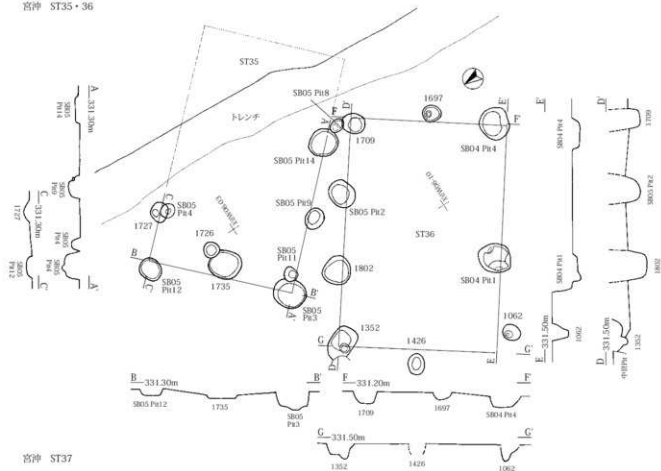
宮沖 ST34



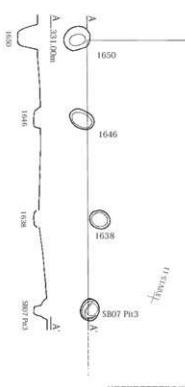
- 1 黒色土 10YR2/1
- 2 黒褐色粘質土 10YR3/1 1cm大黄褐色土ブロック混
- 3 褐色粘質土 10YR4/1 1cm大黄褐色土ブロック混

第109図 宮沖 ST02・03・04・34

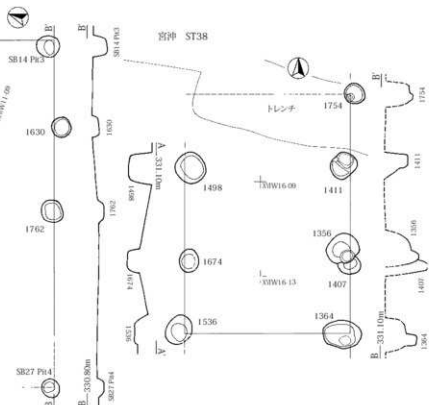
宮沖 ST35・36



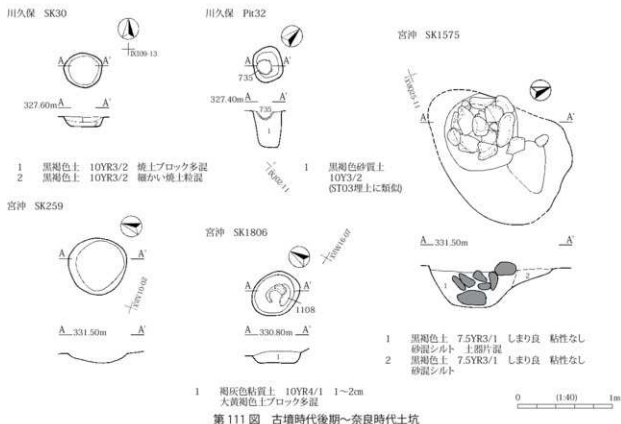
宮沖 ST37



宮沖 ST38



第110図 宮沖 ST35・36・37・38



(4) 土器集中

川久保1・2区のⅡ層下部～Ⅲ層にかけて古墳時代後期土器片が一定範囲から集中的に出土する地点が認められ、土器集中と捉えた。破片の状態や散布範囲もさまざまで、すべて同じ性格の遺構とは断定できない。特に、川久保2区のSQ01～05は広範囲に破片が散布し、少量ながら中世や古墳時代前期土器まで混じる。後代の耕作が竪穴住居跡埋土に及んで土器が散布した可能性もある。また、川久保SQ28はNR1cの浸食により崩落した竪穴住居跡と思われる、川久保SQ23～25はNR1b上面で狭い範囲に土器片が散布すると認められ、SQ29・30も同様である。特殊な器種の集中や完形・完形に近い土器が集中するような出土状況は確認できなかった。いずれも祭祀等の行為に関わる遺構とは断定できない。

川久保SQ01～03 2区1面 IX D23・24、I03～05・08～10・13・14 (第112図)

川久保2区北部の窪地地形NR1a上層のⅡ層下部～Ⅲ層にかけて土器が多く散布すると認められ、検出順に土器集中SQ01～03を捉えた。出土土器は古墳時代後期を中心とし、器種組成は竪穴住居跡出土土器と変わらない。磨滅していない破片が多いが、接合する破片は少ない。わずかに隣接する土器集中間で接合した土器片がある。上面に中世のSL02・03が重なり、中世の耕作で攪はんされた可能性がある。

SQ01はSQ02北東側に隣接して位置する。6m四方の範囲に土器片が散布すると認められた土器集中中で、出土土器は全部で1.799gがある。そのうち、古墳時代後期と思われる土器は1.637gで91.0%を占め、他に平安時代須恵器杯が1片5g、不明土器が少量ある。口縁遺存1/8～2/8しかない。黒色土器Aの杯類はC類で、位置関係から川久保SQ02・03と類似時期と思われる。

SQ02はSQ01南西側に隣接した土器集中で出土土器重量は1.935gがあり、時期が推測できた土器では古墳時代後期1.848gでほぼ95.5%を占める。小破片しかなく、遺存不良の土器が多い。本跡の時期は位置関係や出土杯からSQ01・03と類似時期と思われる。

SQ03はSQ01・02の南側東西約22m南北15mほどの広範囲に散布する土器集中と捉えた。広範囲に土器が散布し、出土土器は弥生時代中期、古墳時代前期、古墳時代後期のものがある。古墳時代後期土器が3,780gと最も多いが、このみ弥生時代中期土器136g、古墳時代前期土器1,381gが混じり、古墳時代前期の小型丸底など完形品(445・446・458)が出土した。SQ03はNR1a岸際に位置してIV層を挟まず、Ⅲ層直下にV層が重なる場所にあり、V層の土器まで掘り上げた可能性がある。なお、SQ03範囲に川久保SB05が重なり、耕作で覆はされた川久保SB05の土器を含む可能性がある。出土土器類から本跡の時期は古墳後・奈良3期と思われ、SQ01・02と類似時期と思われる。

川久保SQ04・06 2区1面 IX H10、I01・06 (第112図 PL18)

川久保2区北部のNR1a内Ⅲ層で検出。SQ05西側に位置し、東西13m、南北約8mの範囲に土器が散布する地点をSQ04と捉えた。土器片散布範囲内に礫も数点散在的に認められた。SQ04北西側約3m離れたIV層上面で東西約1.8m、南北約1.4mの小規模な土器集中SQ06を認定したが、SQ06は窪地地形にⅢ層中の土器が入り込んだ可能性がある。出土土器は古墳時代後期土器8,664gがあり、遺存良好な土器もある。736～738・740の黒色土器A杯、739の同盤、742の土師器甕や741の土師器甕を图示した。黒色土器AにはC3・4類が認められ、本跡の時期は古墳後・奈良3期と思われる。

川久保SQ05 2区1面 IX I02・03・07・08 (第112図 PL18)

川久保2区NR1a内のⅢ層で検出し、SQ03北東に隣接する南北約11m、東西約5mの範囲に散布する土器集中をSQ05と捉えた。一定範囲に土器散布するなかに、小規模な集中がいくつか認められたが、いずれの土器集中地点も破片で完形となるものはない。土器は古墳時代後期土器が1,441gと多いが、古墳時代前期土器89g、弥生時代中期土器61g、平安時代土師器64g、中世白磁碗31gも含まれる。周辺のSQ01～04・06と器種組成は類似し、類似時期の同様の土器集中と思われる。

川久保SQ23～25 2区1面 IX H09・10・13・14 (第112図 PL18)

川久保2区のNR1b上面にある土器集中でSQ23・24がNR1b4c層、SQ25が5e層検出である。南北約4m、東西約2m前後の不整長楕円形の範囲に古墳時代後期を中心とする土師器破片の集中が3カ所検出された。調査時には土器が比較的集中すると認められたが、出土土器は小片ながら個体数も多い。人為的に土器が廃棄された状態ではなく、自然営力により窪地に土器が集積した可能性がある。特にSQ25は同時期遺構より検出面が下層にあたり、根の攪乱によってできた可能性がある。SQ23の743・744、SQ25の745～750を图示したが、古墳時代後期1期の土器が認められる。

川久保SQ28 2区1面 IX H07・08・12・13 (第113図 PL18)

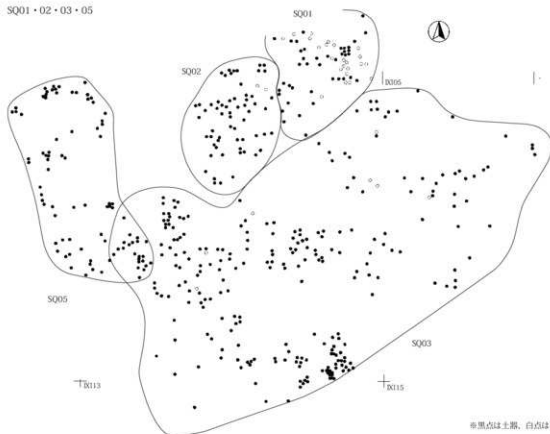
川久保2区北西隅にあるNR1cの1f・g層で検出した。NR1c北壁周辺の南北約6m、東西約4mの範囲に古墳時代後期の土器が集中すると認められた。土器は斜面に沿って30cm前後の標高差幅をもって出土し、その周辺のみ炭化物や焼土粒が多く混じっていた。斜面下方では長さ30～50cmほどのカマド石と思われる楕円形礫4・5個が集中して出土した。出土土器は一部NR1cで取り上げたものもあるが、土器総重量は18,368gで一般的な住居跡と出土量も器種組成も変わらない。土器出土範囲も幅6m、東西4mと住居跡規模に類似し、楕円形礫がカマド石の可能性あることや、NR1cが奈良時代～平安時代前期に形成されたと思えられることから、NR1c浸食の際して古墳時代後期の竪穴住居跡の下部が抉られてNR1c内へ崩落したと思われる。土器は完形になるものは認められないが、口縁部が4/8遺存の個体がいくつかあり、图示し得た土器も多い。出土土器は古墳時代後期2期のものである。

川久保SQ29・30 1区11面 IX A10 (第112図)

川久保1区中央東寄りに位置し、11面にあたるⅢ層中で古墳時代後期土器の小規模な土器集中と認め

第3章 検出された遺構と遺物

川久保 SQ01・02・03・05



●黒点は土器、白点は石を表す

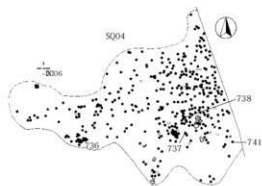
0 (1:200) 5m

川久保 SQ04・06

7001



SQ06



川久保 SQ23・24・25

743 744

SQ23

7015

SQ24

川久保 SQ29



川久保 SQ30



SQ25

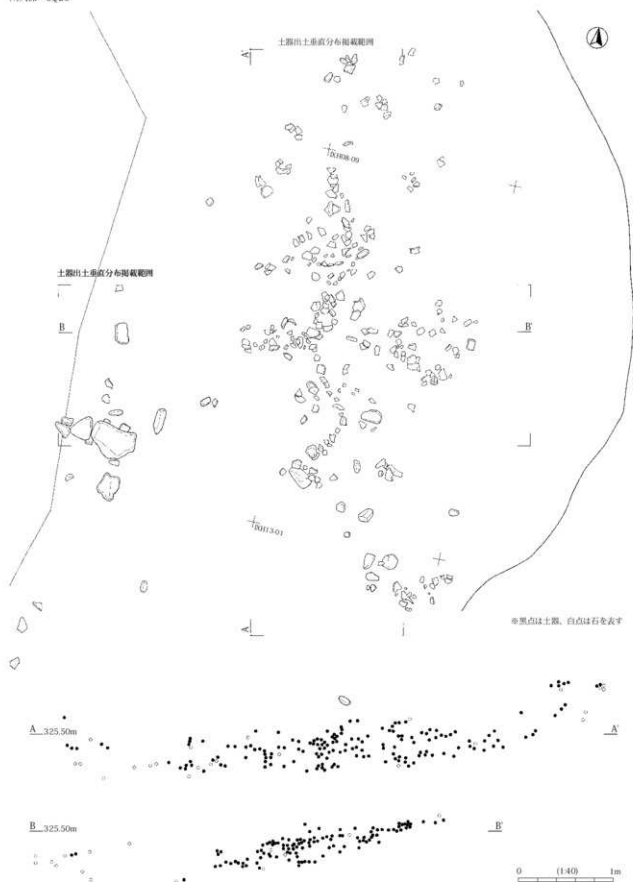
7020

0 (1:40) 1m

0 (1:200) 5m

第 112 図 古墳時代後期～奈良時代土器集中 1

川久保 SQ28



第113図 古墳時代後期～奈良時代土器集中2

られた。SQ29・30は約5m離れて位置し、SQ29が1×0.8mほどの範囲、SQ30が約1.8×1.2mの範囲に土器片が散布する。土器片の出土標高差はあまりなく、SQ30では壺下半部が正位で出土した。土器出土量はSQ29が2.492g、SQ30が800gと少ない。いずれも破片で複数器種が含まれる。周囲ではあまり土器出土がないなかで特異な出土状況と捉えて古墳時代後期の土器集中と捉えた。性格は不明である。本跡の時期はSQ29出土黒色土器Aに杯C4類が認められ、古墳後・奈良3期と思われる。

3 古墳時代後期～奈良時代の遺物

(1) 古墳時代後期～奈良時代の土器

ア 概要

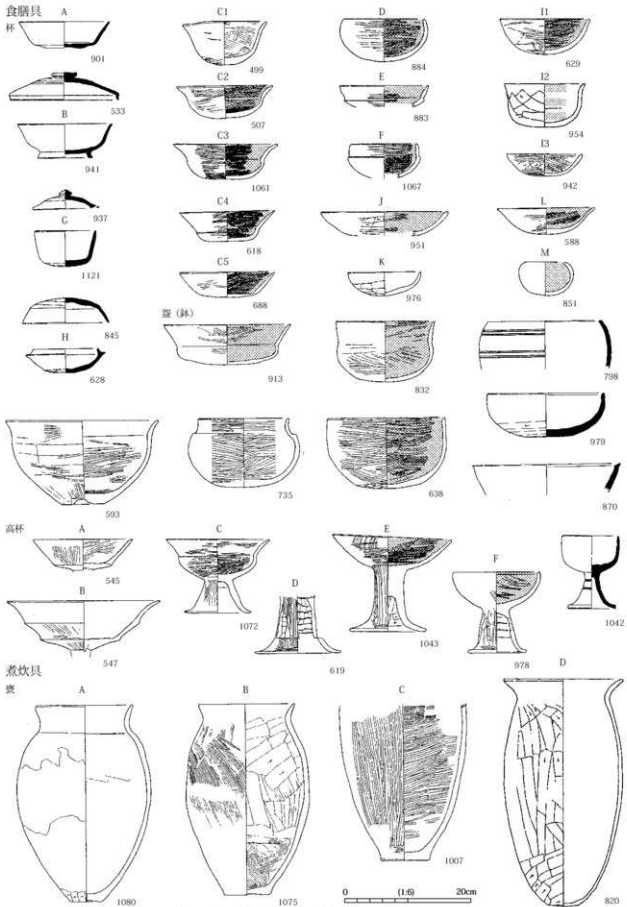
古墳時代後期～奈良時代の土器は、川久保4区と1区南西部の平安時代の浸食地形NR1c・1d周辺と現斑尾川氾濫原を除く広範囲から出土した。土器の多くは竪穴住居跡から出土し、土器出土重量分布もほぼ竪穴住居跡分布に重なる。各竪穴住居跡ではカマド周辺から遺存良好な甕や甔類が出土した例や、焼失住居跡で多様な土器が残されていた川久保SB51など、遺構と土器の関係や土器相互の共存関係を捉えやすい出土例もあるが、竪穴住居跡埋土中から破片で出土した土器が多い。さらに、宮沖1・5区や川久保5区では竪穴住居跡の重複が著しく、混入する土器もある。このように土器の一括性を捉えにくい出土状況が多いことや、調査では埋土中の破片を一括で取り上げたことから、整理作業の遺構別出土土器計測作業では床土～埋土出土土器をまとめて計測した。なお、時期区分については本項の最後に記述した。

今回の調査では古墳時代中期後半頃から奈良時代初頭に至る土器がみとめられ、なかでも古墳時代後期前半頃と古墳時代後期末～奈良時代初頭の所産が多い。後者の資料は中野市周辺であり知られていなかったが、杯類の形態や甕の調整方法が変容するようすが捉えられた。

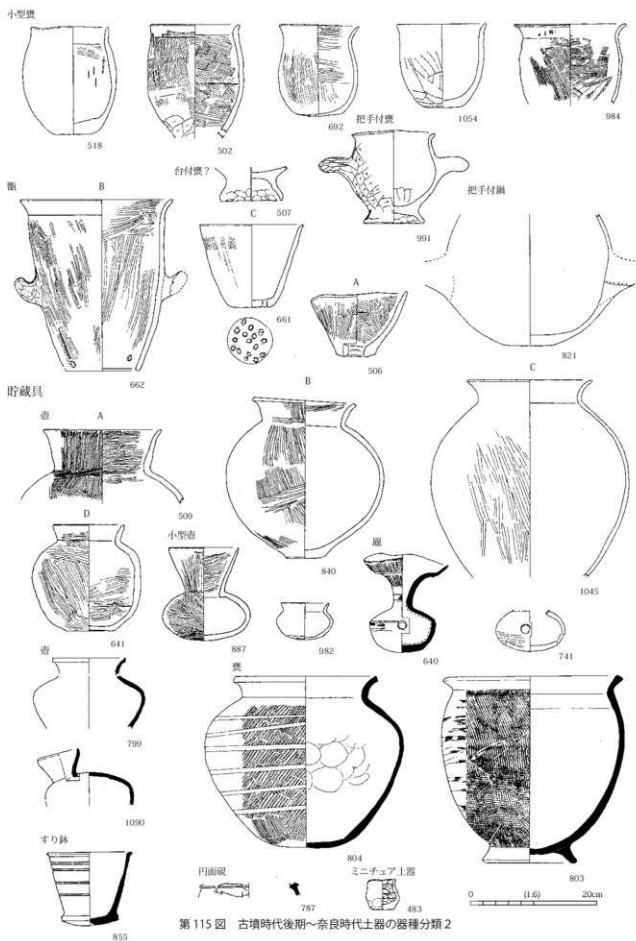
イ 焼物種と器種 (114・115図)

当該期の焼物には酸化炎焼成の土師器や黒色土器と、還元炎焼成の須恵器がある。土師器はハケ・ミガキ調整などの古墳時代の伝統的調整技法を用いる酸化炎焼成の土器で、狭義の素焼きの土師器と内面を黒色処理した黒色土器A(内黒)がある。須恵器はタタキ、ロクロ成形・調整する還元炎焼成の硬質の焼物である。本報告では焼物種として黒色土器A、土師器、須恵器に区別した。黒色土器A・土師器と、須恵器は焼成方法に加えて成形・調整方法が異なるが、古墳時代後期末頃から奈良時代初頭頃にハケ調整された須恵器壺、タタキ調整された黒色土器A壺、ロクロ調整後にミガキ調整される明褐色の土師器杯など、成形・調整技法と焼成が一致しないものや、焼成不良で酸化炎焼成に近い須恵器など、焼物種を識別しにくい土器がある。これは須恵器生産に土師器工人が加わるような生産体制による可能性があるが、ここでは焼成を基本として識別し、須恵器同様の成形・調整方法の明褐色の土器は須恵器とした。また、同時期には口縁や底部のみに黒灰色をどめ、黒色土器・土師器が識別しにくいものがあるが、部分的にも黒灰色をどめるものは黒色土器を志向するものとして黒色土器とした。

焼物種別の器種では、黒色土器は甔や壺・甕も少量あるが、高杯や杯・甔類など食器が多く、土師器は甕、小型甕、甔、壺・小型壺など煮炊具を中心に貯蔵具の一部と杯や盃がわずかにある。食器・貯蔵具では時代の経過とともに須恵器が増加する傾向があり、後述する時期区分に従ってみると古墳後・奈良1期では須恵器はないが、食器では2～5期で重量比10%未満須恵器出土の竪穴住居跡が一部にあり、6期で10%台出土する竪穴住居跡が増える。7期では急速に増えて50%台も現れ、貯蔵具は100%近くを占める。また、古墳時代後期では土師器・黒色土器の壺、甕、杯などに須恵器の模倣が認められる。



第114図 古墳時代後期～奈良時代土器の器種分類1



第115図 古墳時代後期～奈良時代土器の器種分類2

(ア) 食膳具 (第114図 第22表)

食物を盛る器と考えられる杯・蓋・鉢(鉢)・高杯類を食膳具にまとめる。長頸壺や甕も含むべきとも思われるが、破片では他の壺類と識別できないため長頸壺・甕は貯蔵具で扱った。整理作業では遺構毎に焼物種・器種を識別して破片数・重量・推定個体数、口縁・底部遺存度を計測した。破片では器種や焼物種を識別しにくい個体もあり、厳密な数値とは言えないが、次のような傾向が窺えた。

食膳具の焼物種には土師器、黒色土器A、須恵器があり、その比率は時期毎に異なる。古墳後・奈良1期は川久保SB15のみだが土師器55.3%、黒色土器Aが44.7%で須恵器はなく、2～5期では黒色土器Aが80%以上、土師器10～30%を占め、須恵器10%台の住居跡がわずかにある。6期前後から黒色土器Aが60～80%台で、須恵器が10%台ながら定量的に認められ、7期は須恵器30～50%台と急速に増える。土師器から黒色土器A、さらに須恵器主体へ変化する。ちなみに、古墳後・奈良2～5期の須恵器食膳具は杯H・高杯・鉢類、6期はかえりのある蓋Aや杯B・Cや鉢、7期では杯A・Bと蓋・盤がある。また、土師器食膳具は古墳後・奈良2～6期に少量あるが、須恵器や黒色土器Aとの識別に迷った酸化炎焼成済みの土器や、脚のみで黒色土器と断定できなかった高杯片を含むため、組成上の比率はかなり低いと思われる。この土師器杯は出土量が少なく、搬入品の可能性もあるが、断定はできなかった。

食膳具の出土状況では、個別竪穴住居跡内では床面上から完形品が出土する例は稀で、埋土中からの破片出土が多い。整理作業では、遺存良好な土器は竪穴住居跡廃絶時に残されたか、破損直後に捨てられた可能性が高い土器と仮定し、土器接合後の口縁部破片を完形8/8として、8分割のいくつ残るかを計測した。その結果、口縁遺存1/8が最も多く8/8が少ない結果が得られた。8/8になる破片の組み合わせ(例えば8/8=1/8+7/8、2/8+6/8、1/8+1/8+6/8・・・)の1/8～8/8の出現頻度を考えると、1/8が45回と最も多く、徐々に数を減じて7/8と8/8はわずか1回となる。今回の調査で出土した土器口縁遺存度1/8～8/8毎の破片数の分布と似た形となるので、竪穴住居跡埋土土器には完形のまま残し廃棄する等の行為が数値上は大きく関与しておらず、重複住居跡の土器を混じる等の混入土器が多い可能性を示すとも思われる。破片すべての詳細な時期を識別することは困難で、混入を含めて埋土一括で出土量や破片数等を計測したが、須恵器比率の増加等、時期別に一定の傾向が数値上に表現されると考えた。

竪穴住居跡別食膳具出土量(第22表)は、最多が宮沖SB14の686片10,059gで、最少は宮沖SB23の6片39gである。1軒あたり平均75.0片1,324.5gだが、平均重量を上回る住居跡は51軒中15軒のみで、多い順で10,000g以上は宮沖SB14の1軒、5,000g台は宮沖SB19の1軒、3,000g台は宮沖SB05・10・27の3軒、2,000g台は川久保SB32・33・51・60と宮沖SB03・06の6軒、1,325～1,999gが川久保SB15と宮沖SB02・09・29の4軒である。他遺構との重複による部分的な遺存や、調査区境にあって部分全掘し得なかった竪穴住居跡もあって単純に比較できないが、ごく一部の突出した食膳具出土量が多い住居跡が平均重量を押し上げている。また、食膳具出土重量が多い上位は古墳後・奈良5～7期の住居跡が中心だが、後述するように杯類の出土量が多い時期にあたる。

次に食膳具の他器種との破片数比率は、川久保SB32の25.4%など食膳具出土量・比率は共に高い例もあるが、3～77%までの幅があるなかで10%後半～30%が多い。出土量に違いがあっても、器種組成の比率が似ることからは、食膳具のみ多く出土する例はあまりないといえる。ただし、時期別に平均重量をみると住居跡数が少ない古墳後・奈良3期は杯類278.5g、高杯70.5gと土器量も少ないが、杯類は5期で1,138.4g、6期で1,984.0gと多く、他時期は670～760g前後である。5・6期では出土量が多い宮沖SB14・19を含むため出土重量が多いともいえるが、1,000g以上出土した竪穴住居跡が他にもあり、

時期毎の食膳具出土量の差は認められる。古墳後・奈良7期の杯出土平均重量は他時期とあまり変わらないが、2.036g 出土した宮沖 SB10 もあれば、100g に満たない川久保 SB08・36・61 まで幅はある。高杯は古墳後・奈良1期の土器が多く混在する川久保 SB32 で 1.642g と多く、4期も平均重量 172.0g とやや多いが、他は 107～270g 前後と少ない。また、盤のJ類は6期のみに認められる。

杯 深い皿状の容器で、土師器・黒色土器 A・須恵器がある。その形態や組合せは時期区分の指標となるため、やや煩雑ながら分類を挙げておく。

杯 A 平らな底部から体部が斜めに延びる逆台形の器形で、例として宮沖 SB10 の 900～903 がある。(6・) 7期に須恵器のみあり、一部にミガキ調整されたと思われる 947 がある。体部はロクロナデ、外底はヘラ切り後に手持ちか回転ヘラケズリ、ナデが施される。破片では杯 B・G 類と識別しにくく、杯 A・B・G 類が識別できないものは単に杯、杯 A と杯 B 類が識別できないものは杯 A・B とした。

杯 B 体部下半が折れて口縁が直立し、平坦な外底に高台が付く器形で、例として宮沖 SB10 の 897・898 がある。端部が折れる蓋 B 類や内面にかえりがつく蓋 A 類を伴うと思われる。平安時代前期では黒色土器 A の杯 B がわずかにあるが、当該期は須恵器のみである。いずれも体部はロクロナデで、底部は回転ヘラケズリか、手持ちヘラケズリされる。宮沖 SB14 上層出土 940・941 や川久保 SB06 出土の 863 は体部が湾曲する器形で、941 は高台がやや高い。定形化以前の杯 B と思われる。

杯 C 古墳時代中期後半の半球形の体部に口縁端部を外側へ短く折った器形を基本とし、時間の経過と共に口縁が長く延びて相対的に体部高が低くなり、最終的に内面にわずかな段を残すのみの逆台形に近い形態へ変化すると捉えられている。口縁端部を短く折るものを杯 C1 類、器高の 1/3 ほどで口縁が屈曲するものを杯 C2 類、1/2～3/4 ほど折れるものを杯 C3 類、器高 3/4 以上が折れるものを杯 C4 類、底部脇にわずかに段を残すものを杯 C5 類とした。杯 C1 類は川久保 SB15 の 496～500、杯 C2 類は同じく SB15 の 495、SB16 の 507 などがある。杯 C3 類は例が多く、宮沖 SB27 の 1061～1066、同 SB09 の 881・882 などがあり、杯 C4 類は川久保 SB50 の 618 などしか例がない。杯 C5 類は川久保 SB59 の 685・687～689、同 SB60 の 694・699 などがあり、川久保 SB59・60 はいずれも杯 I 類が出土している。杯 C3 類が最も多く杯 C4 類の出土量は少ないが、遺構の多寡を反映していると思われる。また、川久保 SB15 では杯 C1・C2 類が出土し、杯 C2 類は同系譜の中から現れた可能性がある。この杯 C2 類は須恵器の影響を受けているかは明らかにし得なかった。

杯 D 口縁が内湾する丸底の器形で、宮沖 SB09 の 884 がある。破片では杯 I1 類と杯 I3 類や杯 M 類と識別しにくく、誤認したものもあると可能性があるが、宮沖 SB09 は杯 C3 類を出土することから、杯 I3 類や杯 M 類とは時期が異なる土器と思われる。

杯 E 半球形の底部から体部が屈曲して直線的に口縁が外へ開く器形で、黒色土器 A がある。形態的特徴から須恵器蓋横俵と思われる。例として宮沖 SB09 の 883、同 SB27 の 1070 がある。

杯 F 口縁が内側に屈曲し、その屈曲境に段や沈線が施されるものもある。やや直立ぎみの宮沖 SB27 の 1068・1069 など杯 C3 類の中間のような形態もある。須恵器杯身模倣杯と思われ、宮沖 SB27 の 1067 が例として挙げられるが、出土量はわずかで杯 C 類に伴う可能性がある。

杯 G 平底で口縁の立ち上がりが比較的直線となる須恵器杯で口径に比して深い。蓋 C 類を伴う。

確認できた宮沖 SB14 下層の 971 が古い出土例で、他に宮沖 SB05 の 847、遺構外出土の 1121 がある。なお、後述する黒色土器 A 杯 I2 類は杯 G 類の模倣と思われる。

- 杯 H** 口縁内側に受口が付いた須恵器杯で半球形の蓋 C 類を伴う。出土量はわずかであまり出土してはいないが、例として川久保 SB51 出土の 628 がある。
- 杯 I** 丸底から内湾気味に口縁が立ち上がる器形で黒色土器 A が多い。半球形の器形である杯 D 類と似ており、杯 I3 類と杯 D 類は破片では識別しにくい。口縁形態から口縁先端が緩やかに外反する杯 I1 類、深い器形で、丸底から体部が比較的直立ぎみに立ち上がり、端部がやや肥厚する須恵器杯 G の模倣ともみられる杯 I2 類、丸味のある体部からそのまま緩やかな直線で口縁に至る杯 I3 類に分類した。杯 I1 類は川久保 SB51 の 629・630・633、宮沖 SB05 の 848、I2 類は宮沖 SB14 の 953・954、杯 I3 類は同 SB14 の 942・943・945 などがある。杯 I1・3 類には深いものと浅いものがあるが、宮沖 SB14 下層に深い杯 I1 類・I3 類、上層に浅い杯 I1 類・I3 類が多い傾向から浅いものが後出し、あわせて上層から杯 I2 類が出土するので I2 類は後出すると思われる。
- 杯 J** 皿型の浅い器形で、類似器形の須恵器盤の模倣形と思われる。黒色土器 A のみがあり、944・950～952 など宮沖 SB14 上層から出土しているが、他の住居跡からの出土例は少ない。
- 杯 K** 出土量がわずかな土師器杯をまとめた。口縁は内湾、緩やかな S 字状に湾曲する形のものがあり、口径は小さい小型が多い。ミガキ調整は顕著でなく、焼成もやや不良のものが多い。出土量が少なく搬入品とも思われるが、宮沖 SB14 の 976、川久保 SB51 の 634 など I3 類と類似器形のものには黒色の薄い黒色土器 A かもしれない。杯 C5 類や杯 I 類を出土した住居跡に認められる。
- 杯 L** 器高が低く口径が大きな皿形の器形で、口縁は屈曲して緩やかに外反する。例として川久保 SB38 の 588 が挙げられるが、出土量が少なく、遺存良好な出土例もなく器形全体の詳細は不明である。杯 J 類にも似るが、口縁部の形態から杯 C 類との関連が考えられる。
- 杯 M** 体部が内湾して口縁に至る器形で、口径が小さく丸い器形から小型壺とも考えたが、内面をミガキ調整し、杯類とした。4 期前後に認められ、宮沖 SB05 の 851 や同 SB16 の 1003 がある。
- 蓋** 須恵器のみあり、杯 G 類に伴う口縁内側に受け口がつく形態の蓋 A 類、杯 B に伴う端部が折れる蓋 B 類、杯 H に伴う半球形の宮沖 SB05 の 845 や同 SB19 の 1023 などの蓋 C 類がある。出土量は少なく、特に蓋 C 類はわずかでである。また、宮沖 SB05 から高杯蓋と思われる 844 が出土した。
- 甗(鉢)** 杯よりも口径が大きく深い器を甗(鉢)とした。杯類に類似した形態があり、杯 C3 類に類似した宮沖 SB12 の 913、杯 F 類に似た川久保 Pit32 の 735、杯 I1 類に似た川久保 SB51 の 639、杯 I3 類に似た川久保 SB51 の 637・638、宮沖 SB10 の 908 などがある。これらは杯に準じて分類した。宮沖 SB27 の 1083 は杯 C3 類と共に出土したが、若干形態が異なるものの杯 C 類の範疇で捉えられると思われる。これらの甗は黒色土器 A がある。破片では宮沖 SB27 の 1081 のような小型甗や甗と識別しきれない可能性があり、計測時の分類では若干混乱している。
- 高杯** 古墳時代中期以来の柱状脚高杯を高杯 A 類、有段口縁の大型高杯を高杯 B 類、杯 C3 に脚を付けたものを高杯 C 類、杯部の形態が不明ながら脚に透かしを付した須恵器模倣の高杯を高杯 D 類、外反口縁の浅い皿型の高杯を高杯 E 類、杯 I 類同様の内湾する碗形の杯部に脚を付したものを高杯 F 類とした。高杯 A・B 類は良好な出土例がなく、川久保 SB32 から高杯 A 類 542・544・545、

高杯B類547が出土した。高杯C類は宮沖SB27の1072などが例として挙げられる。高杯D類は杯部形態が不明ながら川久保SB50の619、高杯E類は宮沖SB19の1043や川久保SB51の635、高杯F類は宮沖SB14下層出土の978、宮沖SB10下層床面出土の911がある。

須恵器鉢類 出土量は少ないが、数種類の須恵器鉢類が出土した。鉢形と思われる宮沖SB01の798、口縁端部が屈曲する深い器形の宮沖SB06の867、口縁端部を面取する同866・870、杯I類と類似形態の宮沖SB14の979などがある。杯I類や須恵器杯A・B類を出土する住居跡から共に出土する例がいくつかあり、6・7期の所産が多いと思われる。

その他 わずかな出土例だが、特異な器種として宮沖SB05の筒形容器852がある。胴部中に沈線を2条施した円筒形の器形で、高台は付かない。計量カップの可能性が想定される川久保SB52の1325に似た器形であり、同様の用途の器の可能性がある。

(イ) 貯蔵具 (第115図 第23表)

土師器壺・小型壺、須恵器壺・甕・横瓶・平瓶・甕等の固形物や液体の貯蔵容器と思われる土器を貯蔵具とまとめた。甕は厳密には貯蔵具と言えないが、破片では壺類との識別が難しいものもあるため貯蔵具で扱う。竪穴住居跡別の貯蔵具出土量(第23表)では川久保SB61の38,588gを最多として最少0gまで出土量に差がある。出土重量の多い例は、須恵器大甕を出土した川久保SB61の38,588g、複数の須恵器甕が出土した宮沖SB01の16,155g、須恵大甕片を出土した川久保SB40の4,961g、土師器壺が一定量出土した宮沖SB03の5,378gや宮沖SB19の4,335g、川久保SB15の4,114g、宮沖SB14の4,140gなどである。3,000g台は川久保SB51、宮沖SB05・10、2,000g台が川久保SB33・60、宮沖SB02があるが、他は1,000g以下で、全く出土しない住居跡も複数ある。また、遺存良好な個体も少ない。貯蔵具は食膳具・炊炊具のように使用量は多くなく、消耗器種でもなかったため住居跡廃絶時に持ち出されている可能性があり、定量的には認められない。参考に貯蔵具2,000g以上出土した住居跡の土師器と須恵器の重量比は、古墳後・奈良7期の宮沖SB01、川久保SB61共に須恵器が100%、同宮沖SB10も90%以上と高い。6期の宮沖SB14では重量比54%と宮沖SB02で重量比78%、5期の川久保SB51で62%、4期の川久保SB59は53gで重量比22.8%、3期は出土例がなく、2期では川久保SB35が538g66.9%と高いが、平均は126.6gで11.3%、1期の川久保SB15は須恵器0%土師器・黒色土器100%で、時期を追って須恵器比率は増える傾向がある。また、川久保SB51の須恵器広口壺642と横做と思われる土師器壺641、須恵器甕の模倣と思われる川久保SQ04の741など、須恵器の器形模倣が認められる。なお、宮沖SB15の997は内面に青海波文を残す黒色土器である。

壺 壺は須恵器と土師器があるが、土師器は器形から分類した。壺A類は、やや外へ開く長い直口口縁で端部が外反する形態で、例として509があり、直立ぎみの口縁の836・889も同類と思われ、古墳時代中期の系譜の壺と思われる。壺B類は口縁形態が壺A類と類似するが、口縁上部が外へ開いて端部が短く面取状となる840などがある。宮沖SB03の壺A・B類は近似時期が同時存在し、伴う杯類から後出する時期と思われる川久保SB50では端部が丸く納められており、口縁が面取されるものから丸く納められる形態へ変化したと思われる。壺C類は外反するやや長い口縁の付く壺で、例として1045がある。壺A・B類と同じ系譜と思われるが、やや大きめで器形も須恵器甕を思わせる。壺D類は球胴部にわずかに短く外反する口縁がつき、器形の類似と共に、須恵器広口壺と伴った641から須恵器広口壺の模倣と思われる。宮沖SB16の1004から宮沖SB14下層の981まで認められる。692は本類と似た器形だが、口が広い形態から小型甕とした。

第23表 堅穴住居跡別古墳時代後期～奈良時代土器貯蔵具計測表(破片数/重量g)

区分	遺跡	遺構	貯蔵具 総量	土師器・黒色土器 A			須恵器			合計	合計(%)		
				壺	小型壺	合計	壺	壺	その他				
1	川	SB15	58/4,114	50/3,904	8/210	58/4,114	100/100					0/0	
2	川	SB17	39/1,462	37/1,389	2/73	39/1,462	100/100					0/0	
2	川	SB28	30/1,296	25/1,227	4/50	29/1,277	96.7/98.5			層 1/19	1/19	3.3/1.5	
2	川	SB32	71/1,328	45/1,025	21/134	66/1,159	93.0/87.3		3/96	層 2/73	5/169	7.0/12.7	
2	川	SB35	11/804	8/266		8/266	72.7/33.1		3/538		3/538	27.3/66.9	
2	川	SB41										0/0	
2	川	SB42										0/0	
2	川	SB49										0/0	
2	川	SB55	27/1,842	27/1,842		27/1,842	100/100					0/0	
2	宮	SB03	138/5,378	78/3,434	32/986	110/4,420	79.7/82.3	3/13	21/755	層 4/190	28/958	20.3/17.8	
2	宮	SB09	15/1,238	9/472	2/644	11/1,116	73.3/90.1	2/57				4/122	20.3/9.9
2	宮	SB12	15/784	8/270	2/60	10/330	66.7/42.1		3/49	層 2/405	5/454	33.3/57.9	
2	宮	SB18	6/126	3/105	1/13	4/118	66.7/93.7		1/5	層 1/3	2/8	33.3/6.3	
2	宮	SB27	21/594	8/357	6/118	14/475	66.7/80.0	1/2	6/117		7/119	33.3/20.0	
1・2	川	SB16	9/774	5/709	4/65	9/774	100/100					0/0	
1・2	川	SB38										0/0	
3	川	SB50	13/467	13/467		13/467	100/100					0/0	
37	川	SB05	6/185	6/185		6/185	100/100					0/0	
37	川	SB06	7/692	6/652	1/40	7/692	100/100					0/0	
37	川	SB07	3/43	1/25	2/18	3/43	100/100					0/0	
4	川	SB53	25/404	18/282	6/82	24/364	96.0/90.1		1/40		1/40	4.0/9.9	
4	川	SB54	3/134	1/105	2/29	3/134	100/100					0/0	
4	川	SB59	17/232	5/100	10/79	15/179	88.2/77.2		2/53		2/53	11.8/22.8	
4	川	SB60	54/2,063	41/1,626	9/362	50/1,988	92.6/96.4		4/75		4/75	7.4/3.6	
4・7	川	SB62	7/164	1/21	2/76	3/97	42.9/59.1		4/67		4/67	57.1/40.9	
5	川	SB51	4/3,178	2/1,193		2/1,193	50.0/37.4	1/1,311		層 1/674	2/1,985	50.0/62.5	
5	宮	SB02	48/2,481	12/478	4/69	16/547	33.3/22.0	10/552	16/608	横瓶 5/593, 長頸壺 1/181	32/1,934	66.7/78.0	
5	宮	SB13	16/1,125	4/120		4/120	25.0/10.7	1/5	11/1,000		12/1,005	75.0/89.3	
5	宮	SB19	60/4,635	51/4,530		51/4,530	85.0/97.7	1/15	8/90		9/105	15.0/2.3	
5	宮	SB28	2/363	1/136		1/136	50.0/37.5			平瓶 1/227	1/227	50.0/62.5	
6	宮	SB05	100/3,674	60/2,346	4/39	64/2,385	64.0/64.9	6/150	29/1,132	層 1/7	36/1,289	36.0/35.1	
6	宮	SB06	59/1,841	16/869	1/15	17/884	28.8/48.0	10/137	32/820		42/957	71.2/52.0	
6	宮	SB14	150/4,140	37/1,834	2/68	39/1,902	26.0/45.9	13/218	97/2,011	層 1/9	111/2,238	74.0/54.1	
6	宮	SB15	14/257	1/45		1/45	7.1/17.5	4/54	9/158		13/212	92.9/82.5	
4	宮	SB16	12/1,123	9/1,094		9/1,094	75.0/97.4	2/22	1/7		3/29	25.0/2.6	
6	宮	SB25	6/99	4/91		4/91	66.7/91.9	1/3	1/5		2/8	33.3/8.1	
6	宮	SB29	26/571	20/505	2/23	22/528	84.6/92.5		2/33	層 2/10	4/43	15.4/7.5	
7	川	SB08	1/310				0/0		1/310		1/310	100/100	
7	川	SB30	3/74	1/22		1/22	33.3/29.7		2/52		2/52	66.7/70.3	
7	川	SB36	18/668					2/10	16/658		18/1,668	100/100	
7	川	SB37	55/1,923	11/504	3/26	14/530	25.5/27.6		39/1353	小壺 2/40	41/1,393	74.5/72.4	
7	川	SB40	323/4,961	5/164	22/232	27/396	8.4/8.0		296/4,565		296/4,565	91.6/92.0	
7	川	SB58	12/458	2/53		2/53	16.7/11.6	1/330	9/75		10/405	83.3/88.4	
7	川	SB61	3/38,588				0/0		3/38,588		3/38,588	100/100	
7	宮	SB01	37/16,155				0/0	2/175	22/14,925	横瓶 13/1,055	37/16,155	100/100	
7	宮	SB08	17/882		1/11	1/11	5.9/1.2	4/31	12/840		16/871	94.1/98.8	
7	宮	SB10	69/3,061	3/85	3/77	6/162	8.7/5.3	10/703	44/1,555	横瓶 12/641	63/2,899	91.3/94.7	
7	宮	SB17	28/677	3/83		3/83	10.7/12.3	9/172	16/422		25/594	89.3/87.7	
1・2・6	川	SB33	154/2,638	15/355	101/1,120	116/1,475	76.4/58.6	2/45	36/1,118		38/1,163	24.6/44.1	
不明	宮	SB23					0/0					0/0	
不明	宮	SB30	1/20				0/0	1/20			1/20	100/100	

小型壺 土師器小型壺は少量あり、図示し得た土器もわずかである。宮沖 SB09 の 887 の細い直口壺、宮沖 SB03 の 834・川久保 SQ29 の 769 などの口縁部が短く折れる小型壺がある。口縁が折れる小型壺は須恵器壺 982 の模倣かと思われる。小型壺の宮沖 SB03 の 834 は他土器の年代から混入の疑いがある。なお、851 や 1003 は小型壺に似るが、内面をヘラミガキしており、杯 M 類とした。

須恵器壺・甕 須恵器貯蔵具類は甕・壺類にさまざまな種類がある。種類が多い上に遺存不良な例が多く、分類は行わなかった。時期を追って須恵器貯蔵具類は出土量が増加し、7 世紀前後に須恵器貯蔵具の模倣が増え、8 世紀にかかる頃には須恵器貯蔵具類が 100% の住居跡もある。川久保 SB61 の 722 の須恵器大甕はほぼ完形である。

(ウ) 煮炊具 (第114・115図 第24表)

煮炊具は加熱調理する容器と思われる甕、小型甕、台付甕、甕、鍋等をまとめた。すべて土師器で、甕と小型甕は破片で識別しにくいため土器計測では甕に一括した(第24表)。甕等の胴部破片も甕と誤認したものもあると思われる。竪穴住居跡別出土量は最多が宮沖SB14の35.035gで、最少は川久保SB41の77gで、1軒あたり平均215.3片、重量5,734.0gで、住居跡出土土器の他器種との破片比平均65.2%、重量比63.8%を占める。カマドを設置しない竪穴住居跡では煮炊具の出土重量は1,000g以下が多く、重量比で40%以下である。煮炊具の出土量は多いが、これは被熱による消耗・破損しやすさによると思われる。また、川久保SB15・17・49・50・53、宮沖SB12・16・19等ではカマド周辺から遺存状態が良好な甕や甕が集中的に出土し、これらの出土例は使用時の煮炊具セットを知る手掛かりとなる。これらのカマド周辺出土土器の最多量は宮沖SB19の14.293g、最少は川久保SB15の5.978gで、土器重量平均は10,407.7gである。例として川久保SB15(甕3・甕1)、同SB17(甕2・小型甕5・甕1)、同SB49(甕5・小型甕1・甕1)、同SB53(甕3・小型甕1・甕2)、宮沖SB16(甕3・小型甕1・鍋1)、同SB19(甕2・小型甕2)がある。甕2～5個、小型甕1～5個と甕1・2個が1軒の住居跡で保有されていたとみることができる。したがって、上記の遺存良好な出土例の平均重量約10,000gを1軒あたりの煮炊具保有量平均とすれば、10,000g以下の住居跡では、煮炊具は持ち出された可能性がある。なお、宮沖SB27の甕1080は胴部外面に粘土の付着が認められ、カマド掛口に塗り込められていたと思われる。また、少ないながら台付甕や胴径が大きな鍋も出土したが、カマドでの設置方法は明らかにし得なかった。

甕・小型甕 甕には長胴甕と小型甕があり、いずれも出土量が多い。甕・小型甕は調整方法からナデ調整の甕A類、ハケ調整の甕B類、ミガキ調整の甕C類、ケズリ調整の甕D類に分けられる。2期の宮沖SB27では甕A類の1080、甕B類の1075が認められ、甕B類の方が量的に多い。宮沖SB27の甕A・B類は、ともに胴部中央径が口径より膨らむ器形で、後出するとみられる川久保SB50の甕は胴の膨らみが減少した細身の器形で、胴部の膨らみが減少する器形変化を迫ることができる。甕C類はミガキ調整の甕で宮沖SB16の1007がある。出土量が少なく、破片では甕との識別に迷う例もあるが、宮沖SB16の4期から認められ、川久保SB51の647や宮沖SB01の800など7期まで少量ながら残存する可能性がある。他遺跡の例では屋代遺跡群で古墳8期(6世紀後葉～7世紀初頭)、榎田遺跡ではIV期(7世紀)に出現すると捉えられている。本遺跡でもほぼ同じ時期に認められる。甕D類はケズリ調整の甕で宮沖SB02の820、川久保SB51の643などが挙げられる。ケズリ調整は、ハケ調整と同工具か類似工具で外面を掻き取るように粗く雑に調整したもので、器壁は厚い。ハケ調整との識別に迷うものがあるが、杯I類の出現する時期にやや遅れて7期まで認められる。以上を時期別にみると、古墳後・奈良1～3期は宮沖SB27など甕A・B類、4期で宮沖SB16例から甕A・B類に甕C類が加わり、5～7期は川久保SB51、宮沖SB02、同SB10、同SB14など甕D類主体のなかに、甕C類、甕A類が認められる。宮沖SB16の例から古墳後・奈良4期には甕D類主体へ変わるとみられる。

なお、上記以外に搬入品と思われる甕がある。川久保SB60の709はミガキ調整された口縁が長い器形で甕とも考えたが、新潟県で出土している東北系の甕に似ている。断定はできないが、可能性は指摘しておく。また、ケズリ調整の甕D類が主体となる川久保SB51では646のハケ調整の丸底甕、宮沖SB14では薄手で焼成良好なハケ調整甕983・984が出土し、川久保SB50や川久保SQ28の甕B類には口縁端部を積み上げるような面取状とするものがある。これらの土器は搬入品とも考えられるが、産地等の詳細は明らかにし得なかった。

第24表 竪穴住居跡別古墳時代後期～奈良時代土器炊具計測表(破片数/重量g)

区分	遺跡	遺構	総量	土師器			合計	炊具比率(%)
				甕	甔	その他		
1	川	SB15	147/11,621	61/5,488	1/490		62/5,978	42.2/51.4
2	川	SB17	202/12,392	94/8,251	29/2,084		123/10,335	60.9/83.4
2	川	SB28	324/8,654	209/5,755	13/654		222/6,409	68.5/74.1
2	川	SB32	405/6,518	231/2,797			231/2,797	57.0/42.9
2	川	SB35	100/3,483	50/1,763			50/1,763	50.0/50.6
2	川	SB41	3/338	1/77			1/77	33.3/22.8
2	川	SB42	11/220	5/108			5/108	45.5/49.1
2	川	SB49	286/13,677	220/11,260	25/1,314		245/12,574	85.7/91.9
2	川	SB55	116/7,655	72/4,837	1/301		73/5,138	62.9/67.1
2	宮	SB03	695/16,032	415/8,534	2/72		417/8,606	60.0/53.7
2	宮	SB09	444/9,709	351/6,536	4/415		355/6,951	80.0/71.6
2	宮	SB12	422/10,999	303/7,055	19/2,304		322/9,359	76.3/85.1
2	宮	SB18	109/3,403	71/2,625	2/23		73/2,648	67.0/77.8
2	宮	SB27	698/18,450	519/14,086			519/14,086	74.4/76.4
1・2	川	SB16	60/2,222	41/1,019	3/121		44/1,140	73.3/51.3
1・2	川	SB38	84/3,367	50/2,064			50/2,064	59.5/61.3
3	川	SB50	198/9,466	45/6,060	27/2,182		72/8,242	36.4/87.1
3?	川	SB05	41/572	29/326			29/326	70.7/57.0
3?	川	SB06	116/4,576	84/3040	3/425		87/3465	75.0/75.7
3?	川	SB07	51/1016	22/650	1/95		23/745	45.1/73.3
4	川	SB53	223/12,185	138/8,065	16/2,716		154/10,781	69.1/88.5
4	川	SB54	60/2,928	37/1,272	6/1,030		43/2,302	71.7/78.6
4	川	SB59	200/4,367	121/3,197	4/64		125/3,261	62.5/74.7
4	川	SB60	496/11,429	300/6,906	8/254		308/7,160	62.1/62.6
4・7	川	SB62	105/1,799	77/1,460	1/9		78/1,469	74.3/81.7
5	川	SB51	128/13,994	100/8,498			100/8,498	78.1/60.7
5	宮	SB02	569/14,556	335/7,621	6/71	鍋 35/2,158	376/9,850	66.1/67.7
5	宮	SB13	172/6,170	113/3,715	1/50		114/3,765	66.3/61.0
5	宮	SB19	921/23,931	590/13,963		台付甕 1/330	591/14,293	64.2/59.7
5	宮	SB28	35/2,533	29/1,701			29/1,701	82.9/67.2
6	宮	SB05	1,396/26,984	963/18,906	12/335	(須すり鉢 1/410)	975/19,241	69.8/71.3
6	宮	SB06	745/13,219	453/8,953	4/64	鍋 1/70	458/9,087	61.5/68.8
6	宮	SB14	2,664/49,616	1,775/34,202	6/224	把手付甕 2/519・台付甕 3/90	1,786/35,035	76.9/71.0
6	宮	SB15	197/4,694	135/3,151	2/105	黒色甕 1/39	138/3,295	70.1/70.2
4	宮	SB16	224/11,787	146/7,902		鍋 1/1677	147/9,579	65.6/81.3
6	宮	SB25	199/2,520	123/1,545	2/61		125/1,606	62.8/63.7
6	宮	SB29	588/8,298	413/6,172			413/6,172	70.2/74.4
7	川	SB08	10/974	8/537			8/537	80.0/55.1
7	川	SB30	40/1,009	31/617			31/617	77.5/61.1
7	川	SB36	237/4,060	190/2,453			190/2,453	80.2/60.4
7	川	SB37	710/15,932	425/11,198	6/195	台付甕 1/19	432/11,412	60.8/71.6
7	川	SB40	497/7,639	127/1,956	1/124		128/2,080	25.8/27.2
7	川	SB58	61/2,348	37/1,427	2/15		39/1,442	63.9/61.4
7	川	SB61	91/40,515	80/1,868			80/1,868	87.9/4.6
7	宮	SB01	137/21,498	86/4,618	1/15		87/4,633	63.5/21.6
7	宮	SB08	139/3,762	98/2,497	1/6		99/2,503	71.2/66.5
7	宮	SB10	644/14,612	447/7,975	3/73		450/8,048	69.9/55.1
7	宮	SB17	211/2,946	129/1,839	1/17		130/1,856	61.6/63.0
1・2・6	川	SB33	670/9,738	290/4,201	4/151		294/4,352	43.9/44.7
不明	宮	SB23	19/235	13/196			13/196	68.4/83.4
不明	宮	SB30	49/667	37/530			37/530	75.5/79.5

台付甕 高台の付いた煮炊具と思われる 1041・1113 のような土器がわずかに出土し、台付甕と捉えた。全体形は不明だが、991 や 1112 のような器形かもしれない。いずれも造りが雑で器壁が厚い。

甔 甔は 2 期のものは図示し得た個体が多いが、古墳後・奈良 5 期以後は川久保 SB51 の 650 しかなく、出土量が少ない。甔の器形には胴部が開いた逆台形に近い形態の A 類 506・678 と、口縁部が折れるか、やや広がる砲弾型の胴部に湾曲した把手がつく B 類、A 類に類似した器形ながら底部に小孔を蜂の巣状に穿孔する 661 の C 類がある。B 類底部は大きく孔状に削り貫いたものが多いが、川久保 SB53 の 662 のように底部脇側面に支える棒を差し込む小孔を設置したものや 924

のように底部を田字状に残すものがある。法量はA・C類が口径12～18cm、高さ10～14cm前後と小ぶりだが、B類は口径20cm、高さ22～28cm前後と大きく目である。調整はハケ調整後にミガキ調整されるものが多い。

鍋 把手付鍋がわずかに出土した。図示し得たものでは浅い器体の宮沖SB16の1011、深い器体の宮沖SB02の821があり、把手付鍋に台が付いた形態の宮沖SB14の991もある。把手付鍋は古墳後・奈良4・5期頃の特定時期にみられる。胎土からは当地域で生産されたと思われる、杯1類の出現する時期の土器全般の大きな変化のなかで出現したものと思われる。なお、口縁が外へ開く浅い鉢型の593、768、1083は平安時代の鍋に似るが、被熱痕跡もなく甗と捉えた。

(工) その他

すり鉢 すり鉢や陶白と呼ばれる須恵器鉢が宮沖SB05から855が1個体出土した。

円面硯・転用硯 円面硯と思われる破片が川久保1区9面から1個体(787)が出土した。奈良・古墳時代土器を包含するⅢ層から出土したものではなく、伴出土器もなく時期の詳細は不明だが、奈良時代の所産と考えた。転用硯と思われる破片は壺底部を用いた679、須恵器蓋内面を用いた795があり、転用硯と断定できないが、須恵器蓋の1116は内面に研磨痕が観察される。

刻書・ヘラ描文のある土 (PL52) 墨書土器は確認されなかったが、刻書のある須恵器杯が4個体ある。川久保SB36出土576の「水」、川久保5区SK1706出土731の「夫□」、川久保5区2面出土781の「伴?」、宮沖SB17出土1017の「于?」である。いずれも7期の須恵器杯で焼成前に書かれている。旁があるものもあるが、「水」以外は横棒2本と縦1本を含む文字で類似する。ほかに中世の川久保1区SD62出土の788の須恵器甕には、ヘラ描の平行線と湾曲した沈線が描画される。絵画とは断定できないが、意図的に描かれたものと思われる。

ミニチュア土器 祭祀用と思われる小容器をミニチュア土器とした。川久保SB33や川久保SQ29、宮沖SB14など複数出土した例や、1個体のみの出土があり、完形品もあれば破片出土もある。輪積成形後にユビオサエやナデ調整される。器高が高い壺形の容器を意識したと思われる483・557もあるが、多くは558～561のような浅い杯形で、773のように高台を意識した高杯が白ともみられるものがある。また、879は把手付の容器と思われる。壺形のミニチュア土器など古墳時代前期のものが混入した可能性があるが、複数出土した例や、杯を意識したと思われる浅い皿形のものとは当該期の所産と思われる。

ウ 代表的な個別出土例

以下には住居跡を中心とした代表的な遺構出土土器を記述するが、詳細は添付DVDの一覧表を参照されたい。なお、遺構別出土土器計測表で土器年代は「古墳時代後期」、「奈良時代」といった大枠の「時代」で表記し、細分時期の古墳後・奈良1～7期の「期」は遺構の時期区分に用いた。7期が「奈良時代」、それ以前が「古墳時代後期」となるが、詳細な時期を特定できなかった土器片も多く、不明なものは「古墳時代後期～奈良時代」と表現した。また、器種もできるだけ特定するようにしたが、小片では甕・小型甕と甔や、杯と甗の識別が曖昧などところがある。なお、文中の%表示は重量比で、破片数は接合後のもので、同一個体でも接合しない破片は別に数えている。これとは別に色調・胎土・調整等から同一個体と思われる個体の推定数を出したが、誤差も大きいと思われる、あくまでも参考数値である。

川久保SB05 (第118図)

床土～埋土から弥生時代中期土器10g、古墳時代後期土器572g、不明土器26gが出土した。古墳時代

後期土器の内訳は黒色土器 A 杯 6 片 4 個体 61g、土師器壺 6 片 6 個体 185g、同甕 29 片 27 個体 326g で、口縁遺存度は 1/8 以下しかない。他に本跡周辺から出土したミニチュア土器 3 個体 99g があり、その 2 個体 84g (482・483) のみ図示した。時期は杯 C3・4 類を含むことから古墳後・奈良 3 期と思われる。
川久保 5B06 (第 118 図)

床上～埋土から古墳時代後期土器 4,576g、支脚 1 点 311g (491)、不明土器 132g、混入と思われる近世土人形 1 片 15g の合計 5,034g が出土した。古墳時代後期土器は食膳具が黒色土器 A 杯 23 片 16 個体 385g、同盤 1 片 1 個体 34g の合計 419g、貯蔵具は土師器壺 6 片 4 個体 652g、同小型壺 1 片 1 個体 40g の合計 692g、煮炊具は土師器甕 84 片 28 個体 3,040g、同甕 3 片 1 個体 425g の合計 3,465g で、それぞれ出土土器重量比で食膳具 9.2%、貯蔵具 15.1%、煮炊具は 75.7% を占める。図示した土器は黒色土器 A 杯 1 個体 140g (484)、同小型壺 1 個体 40g (485)、同甕 3 個体 2,305g (487～489)、同壺 1 個体 423g (486)、同甕 1 個体 425g (490)、支脚 1 点 311g (491) の合計 3,644g で、本跡埋土出土土器重量比の 75.2% にあたる。486 の土師器壺は須恵器模倣品と思われる。口縁遺存 5/8 以上は甕 1 個体 (489) のみである。図示した杯は E 類で、他に C3・4 類と思われる破片があり、甕はハケ調整の甕 B 類が多い。時期は古墳後・奈良 3 期と思われる。

川久保 5B07 (第 118 図)

床上～埋土中から古墳時代後期土器 1,016g、不明土器 25g が出土した。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が黒色土器 A 杯 25 片 23 個体 228g のみ、貯蔵具は土師器小型壺 2 片 2 個体 18g、同壺 1 片 1 個体 25g の合計 43g、煮炊具は土師器甕 22 片 20 個体 650g、同甕 1 片 1 個体 95g の合計 745g である。埋土中出土土器重量比で食膳具は 228g22.4%、貯蔵具は 43g4.2%、煮炊具は 745g73.4% である。口縁遺存は 1/8 以下が多く、図示したのは黒色土器 A 杯 C3 類の 1 個体 33g (492) で出土土器重量比の 3.2% に過ぎない。図示しなかったのが C4 類と思われる破片があり、土師器甕はハケ調整 B 主体で古墳後・奈良 3 期と思われる。

川久保 5B08 (第 118 図)

床上～埋土から奈良時代須恵器杯 A が 1 片 1 個体 95g、同甕 1 片 1 個体 310g、土師器甕 8 片 2 個体 537g、同杯 2 片 2 個体 32g の合計 974g と不明土器 3g が出土した。重量比で食膳具は須恵器杯、土師器杯の 127g13.0%、貯蔵具は須恵器甕 310g31.8%、煮炊具は土師器甕 537g55.1% である。口縁遺存は 3/8 以下しかなく、全体的に遺存不良である。図示した土器は須恵器杯 A が 1 個体 (493) と土師器甕 D 類の 1 個体 (494) で合計 619g、奈良時代土器の出土重量比 63.6% にあたる。土師器杯は小片で伴うとは断定しきれない。須恵器杯 A 類と土師器甕 D 類の出土から本跡時期は古墳後・奈良 7 期と思われる。

川久保 5B15 (第 118・119 図 PL47)

遺存良好な土器が多い。床上～埋土から古墳時代後期土器 11,621g、不明土器 225g、土製紡錘車 1 点 56g、床下から古墳時代後期土器 80g、不明土器 1g、Pit1 から古墳時代後期土器 30g、Pit3 から不明土器 2g が出土した。埋土出土の古墳時代後期土器は、食膳具が黒色土器 A 杯 7 片 5 個体 260g、同盤 16 片 2 個体 423g、土師器杯 4 片 4 個体 846g で合計 1,529g、貯蔵具は土師器壺 50 片 2 個体 3,904g、同小型壺 8 片 4 個体 210g で合計 4,114g、煮炊具は土師器甕 61 片 29 個体 5,488g、同甕 1 片 1 個体 490g の合計 5,978g がある。重量比で食膳具は 13.2%、貯蔵具は 35.4%、煮炊具は 51.4% を占める。杯は C1・2 類があるが、土師器と黒色土器の識別に迷うものがある。口縁遺存 5/8 以上は杯 5 個体 (495～497・499・500)、甕 2 個体 (504・505) で、他は 3/8 以下の遺存である。図示したのは黒色土器 A

杯1個体200g(495)、土師器杯4個体846g(496・497・499・500)、黒色土器A盃1個体257g(498)、土師器壺1個体2,410g(501)、同甕4個体4,259g(502～505)、同甕1個体490g(506)、紡錘車1点56g(1132)の合計8,518gで、床土～埋土出土古墳時代後期土器の重量比で72.9%にあたる。なお、甕503～505、甕506、壺501はカマド周辺、甕502はカマドの南西側床土から出土した。本跡は古墳後・奈良1期の代表例とみられる。

川久保SB16(第119図)

床土～埋土中から古墳時代前期土器81g、古墳時代後期土器2,222g、平安時代土器135g、ミニチュア土器56g、不明土器98gが出土した。他にPit6から古墳時代後期の黒色土器A杯1片1個体20g、Pit1から埋土と接合した古墳時代後期土師器甕1片1個体と同甕1片1個体と、同小型壺1片1個体6gと不明土器8g、Pit2から古墳時代後期土師器甕4片4個体55g、同小型壺1片1個体13g、平安時代土師器甕1片1個体2g、不明土師器11gが出土し、床下から古墳時代後期土器3g、古墳時代前期土器22gが出土した。本跡は出土土器の主体を占める古墳時代後期の所産で、Pit1・2は平安時代ST41柱穴と捉えられたことから、埋土中の平安時代土器は混入と思われる。床土～埋土の古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が黒色土器A杯5片3個体295g、土師器盃1片1個体13gの合計308g、貯蔵具は土師器壺5片1個体709g、同小型壺4片4個体65gの合計774g、煮炊具は土師器甕41片25個体1,019g、同甕3片1個体121gの合計1,140gがある。出土重量比で食膳具は13.9%、貯蔵具が34.8%、煮炊具が51.3%を占める。口縁遺存度5/8以上は壺1個体(509)、4/8遺存が土師甕1個体(510)で、他は3/8遺存以下である。図示したのは黒色土器A杯1個体247g(507)、土師器壺1個体709g(509)、同甕1個体557g(510)、ミニチュア土器1個体56g(508)で、507はPit6、510はPit1・2出土破片が接合した。図示し得た土器は合計1,569gで、埋土出土土器重量比で67.9%にあたる。黒色土器A杯C2が主体で、C3類と思われる破片がわずかにある。甕はハケ調整B類とナデ調整A類がある。古墳後・奈良1・2期と思われる。

川久保SB17(第119・120図 PL47)

床土～埋土から古墳時代前期土器103g、古墳時代後期土器12,392g、不明土器193g、ビットから古墳時代後期土器45gが出土した。埋土出土の古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が黒色土器A杯28片23個体382g、同盃9片2個体182g、土師器杯3片2個体31gの合計595g、貯蔵具は土師器壺37片10個体1,389g、同小型壺2片1個体73gの合計1,462g、煮炊具は土師器甕94片42個体8,251g、同甕29片3個体2,084gの合計10,335gである。埋土出土土器の重量比で66.6%を土師器甕が占め、甕を含む煮炊具は83.4%、食膳具は4.8%、貯蔵具が11.8%である。ビットから黒色土器A杯1片1個体6g、土師器甕4片4個体39gが出土した。口縁遺存5/8以上は土師器甕7個体(515・516・518～522)、4/8遺存が同甕(524)と甕(523)各1個体で、食膳具はいずれも3/8以下の遺存しかない。図示したのは黒色土器A杯2個体188g(511・512)、同盃1個体64g(513)、同甕1個体1,434g(524)、土師器小型壺1個体73g(514)、同甕9個体7,157g(515～523)の合計8,916gで、埋土出土土器の重量比で71.9%にあたる。黒色土器A杯はC3とD類があり、甕はA・B類がある。杯C3類主体でD類が少量あり、古墳後・奈良2期と思われる。土師器甕519・521、同小型甕515～518・520、同甕524はカマド周辺から出土した。

川久保SB28(第120図)

床土～埋土から古墳時代後期土器8,654g、不明土器670g、ビットから古墳時代後期土器65gが出土した。床土～埋土出土の古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が黒色土器A杯66片41個体794g、同盃

3片1個体95g、同高杯3片2個体60gの合計949g、貯蔵具は須恵器甕1片1個体19g、土師器壺25片4個体1,227g、同小型壺4片4個体50gの合計1,296g、煮炊具は土師器甕209片119個体5,755g、同甕13片4個体654gで合計6,409gである。重量比で食膳具は11.0%、貯蔵具は15.0%、煮炊具は74.0%を占める。ピットから黒色土器A杯3片1個体35g、同高杯1片1個体7g、土師器甕1片1個体23gが出土した。すべて口縁遺存4/8以下である。図示したのは須恵器甕1個体19g(528)、黒色土器A杯3個体245g(525～527)、土師器甕3個体2,160g(529～531)、同甕1個体500g(532)の合計2,924gで、床上～埋土出土の重量比33.8%にあたる。出土量が多い黒色土器A杯、土師器甕、同壺は小片で図示し得たものが少ない。杯はC3類、甕はA・B類があり、本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われる。

川久保SB30(第120図)

床上～埋土から古墳時代前期土器55g、古墳時代後期土器665g、奈良時代土器277g、奈良～平安時代土器67g、平安時代土器50g、不明土器128gが出土した。平安時代土器は土師器甕3片3個体26g、同杯1片1個体24g、奈良～平安時代須恵器杯Aが2片2個体9gと同蓋1片1個体6g、同甕2片1個体52g、奈良時代土器は須恵器蓋1個体277gがある。複数時期の土器があるが、図示した完形須恵器蓋1個体(533)から古墳後・奈良7期と捉えた。533は古墳時代後期～奈良時代土器の重量比29.4%に当たる。川久保SB32(第120・121図 PL47)

床上～埋土中より古墳時代前期土器10g、古墳時代後期土器6,518g、重複遺構からの混入と思われる奈良時代土器60gと平安時代土器16g、不明土器1,300gが出土した。古墳時代後期の杯類は土師器杯C1・2類(537・540・541)、同柱状脚高杯A・B類(544・545・547)など古墳後・奈良1期のものと、黒色土器A杯C3類(535・536・539)、同高杯C類(543)など同2期や同5・6期のものがあり、形態別では杯C1・2類が21片13個体239g、C3類18片11個体320g、同杯I類1片1個体17g、土師器杯K類3片3個体17gで、C1～C3類を主体に複数時期の土器が混在する。食膳具は黒色土器A杯48片33個体602g、同壺4片4個体105g、同高杯2片2個体265g、土師器杯4片4個体44g、同高杯A類45片27個体1,377gの合計2,393g、貯蔵具は須恵器甕2片2個体73g、同甕3片2個体96g、土師器壺45片17個体1,025g、同小型壺21片4個体134gの合計1,328gで、煮炊具は土師器甕類231片68個体2,797gがある。口縁遺存5/8以上は土師器高杯A類1個体(547)、同壺1個体(549)で、他は口縁遺存3/8以下である。図示した土器は須恵器甕1個体62g(546)、黒色土器A杯6個体321g(535～539・541)、同高杯1個体246g(543)、土師器杯1個体27g(540)、同高杯4個体1,032g(542・544・545・547)、同壺1個体560g(549)、同甕1個体(548)230gの合計2,478gで、古墳時代後期土器の38.0%に該当する。図示し得なかった土師器甕が多いため図化した比率は低い。他に534や538など混入した古墳時代後期～奈良時代土器もある。1期と2期土器が混在するが、本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われる。

川久保SB33(第121図 PL48)

床上～埋土から縄文土器17g、古墳時代前期土器60g、古墳時代後期土器3,771g、時代の詳細が識別できない土師器甕を含む古墳時代後期～奈良時代土器5,278g、奈良時代土器689g、平安時代土器94g、不明土器1,332gが出土し、床下から古墳時代後期土器541gと不明土器44gが出土した。川久保SB40や重複柱穴の混入土器を含む。550・551は川久保SB40の土器で、川久保SB40の598は本跡の土器と思われる。古墳時代後期の土器の内訳は、食膳具が黒色土器A杯162片116個体1,365g、黒色土器・

土師器高杯22片22個体780gで、貯蔵具は土師器壺15片8個体355g、同小型壺101片34個体1,120gで、煮炊具は土師器甕4片4個体151gがある。黒色土器A杯は552のC1類、553のC3類があり、土師器小型壺は細片に割れて破片数が多いが個体数は少ない。SB40からの混入と思われる奈良時代土器は、食膳具が須恵器杯Aの14片10個体194g、同杯Bが3片2個体21g、同杯A・Bが8片8個体25g、同蓋6片6個体116g、貯蔵具は須恵器壺2片2個体45g、同甕6片6個体288gがある。他に古墳時代後期～奈良時代の土師器甕290片265個体4,201g、須恵器甕30片1個体830g、ミニチュア土器7片7個体247gや焼粘土塊10点165gがある。口縁遺存5/8以上は小型壺1個体(556)のみで他は3/8遺存以下である。図示したのは須恵器蓋A1個体14g(550)、同杯A1個体53g(551)、黒色土器A杯C1・3類2個体302g(552・553)、同高杯1個体106g(554)、土師器高杯1個体75g(555)、同小型壺1個体126g(556)、ミニチュア土器5個体227g(557～561)の合計903gで、古墳時代後期～奈良時代土器の重量比9.3%に過ぎない。本跡は古墳後・奈良2期と思われる。

川久保SB35 (第121図)

床上～埋土から古墳時代後期土器3,483g、不明土器444gが出土した。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が黒色土器A杯29片24個体645g、同盤2片1個体17g、土師器杯1個体1片88g、同盤5片4個体136g、同高杯2片1個体30gの合計916gで重量比26.3%、貯蔵具は土師器壺8片3個体266g、須恵器甕3片1個体538gで合計804g重量比23.1%を占め、煮炊具は土師器甕50片32個体1,763gで重量比50.6%を占める。口縁遺存5/8以上は黒色土器A杯1個体(565)のみ、4/8遺存も土師器杯1個体(567)で、他は2/8以下である。図示したのは黒色土器A杯4個体420g(563～566)、土師器壺1個体88g(567)のみで、古墳時代後期土器の重量比14.6%にあたる。土師器甕の出土量が多いが、破片で図示し得なかった。杯類はC2・3類が多く、本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われ、一部7期土器が混じる。

川久保SB36 (第121・122図 PL48)

床上～埋土から古墳時代前期土器3g、古墳時代後期土器1,580g、古墳時代後期～奈良時代土器2,453g、奈良時代土器1,607g、重複柱穴の混入と思われる平安時代土師器杯等87g、不明土器850gがある。古墳時代後期～奈良時代の識別ができない土師器甕が多い。須恵器杯A出土から本跡の時期は古墳後・奈良7期とみられ、SB37の土器と接合する破片も多い。奈良時代土器の内訳は、食膳具に須恵器杯Aの5片5個体497g、同杯Bが8片4個体233g、杯A・Bが15片12個体133g、同蓋1片1個体76gの合計939gがあり、須恵器杯Aの底部調整はヘラ切りである。貯蔵具は須恵器壺2片2個体10g、同甕16片6個体658gで合計668g、煮炊具は古墳時代後期～奈良時代の土師器甕190片141個体2,453gがある。混入と思われる古墳時代後期土器は黒色土器A杯80片63個体660g、同盤4片4個体88g、同高杯6片5個体146g、土師器杯3片2個体15g、同高杯6片5個体75g、同壺21片18個体470g、同小型壺7片7個体115g、同甕1片1個体11gがある。黒色土器A杯の出土量が多いが、遺存度は低い。古墳時代後期～奈良時代の土師器甕を加えた奈良時代土器の食膳具は重量比23.1%、煮炊具は60.4%、貯蔵具は16.5%である。口縁遺存5/8以上は須恵器杯A(572)1個体のみで、小破片が多い。図示したのは須恵器杯Aが5個体497g(571～574・576)、同杯Bが2個体217g(569・570)、同蓋1個体76g(568)、同甕2個体381g(577・578)の合計1,171gで、重量比28.8%にあたる。須恵器杯Aの576の内側に「水」の刻書がある。

川久保SB37 (第121・122図 PL48)

床上～埋土から古墳時代後期～奈良時代の土器が15,867g、不明土器1,262gが出土した。この内、時代が識別できた奈良時代の土器が2,192g、古墳時代後期の土器が1,742gあるが、ほとんどは古墳時代後期～奈良時代としか識別できなかった。ピットから古墳時代後期土器3片3個体65g、不明土器2gが出土した。床上～埋土出土の古墳時代後期～奈良時代の土器は、食器具が須恵器杯A5片5個体302g、同杯B4片4個体25g、同杯A・Bが14片13個体177g、同鉢2片1個体15g、同蓋6片6個体261g、土師器杯5片4個体51g、黒色土器Aの杯171片127個体1,352g、同高杯15片11個体339gで合計2,522gある。須恵器杯A底部はすべてヘラ切りで、土師器杯も焼成不良の須恵器杯Aの可能性ある。貯蔵具は須恵器甕39片16個体1,353g、同小型壺2片2個体40g、土師器壺11片8個体504g、同小型壺3片3個体26gの合計1,923gがある。煮炊具は時期の詳細を識別できず古墳時代後期～奈良時代と括ったが、土師器甕425片273個体11,198g、同甕6片6個体195g、台付甕と思われる破片が1片1個体19gで合計11,412gがある。他にミニチュア土器1片1個体10gが出土した。食器具は出土土器重量比で15.9%、貯蔵具は12.1%、煮炊具は71.9%、ミニチュア土器0.1%である。口縁遺存5/8以上は甕1個体(586)、4/8遺存は2個体(584・585)、杯類は2/8以下しかない。図示したのは須恵器杯Aが1個体167g(579)と土師器杯1個体19g(581)、同甕5個体4676g(583～587)の合計4,862gで35.8%にあたる。他に混入と思われるC2・3類の黒色土器A杯2個体111g(580・582)を図示した。甕は弱いハケ調整のA類である。SB36出土須恵器杯Aの542～548に本跡出土の135g、杯Bは546に15g、蓋549に169g、甕551に201gが接合した。須恵器杯類などの出土から本跡の時期は古墳後・奈良7期と思われる。

川久保SB38 (第122図 PL48)

床上～埋土から古墳時代後期土器3,352g、混入と思われる奈良時代土器15g、平安時代土器10g、不明土器175gが出土した。最も多い古墳時代後期土器は、食器具が黒色土器A杯2片1個体200g、土師器杯29片4個体213g、同鉢2片1個体875gの合計1,288gで重量比38.4%、煮炊具は土師器甕50片12個体2,064gで重量比61.6%を占め、貯蔵具はない。口縁遺存5/8以上は黒色土器A1個体(588)と鉢1個体(593)で、他は2/8以下の遺存である。図示したのは黒色土器A・土師器杯2個体398g(588・589)、同鉢1個体875g(593)、同甕3個体1,432g(590～592)の合計2,705gで重量比80.7%に当たる。588は杯L類、589は杯C2類で、本跡時期は古墳後・奈良1・2期と思われる。

川久保SB40 (第122図 PL48)

床上～埋土から古墳時代中～後期土器5,291g、奈良時代土器213g、古墳時代後期～奈良時代土器2,115g、平安時代土器5g、時期不明須恵器28g、不明土器432gがあり、他にPit2・3から古墳時代後期土器29g、Pit7から不明土器7gが出土した。598の須恵器甕は重複するSB33からの混入と思われる。古墳時代後期から奈良時代土器の内訳は、食器具に須恵器杯Aが2片2個体205g、同蓋2片1個体8g、黒色土器A杯26片26個体174g、同蓋7片7個体114g、土師器杯3片2個体30g、土師器高杯1片1個体12gの合計543gで7.1%、貯蔵具に須恵器甕296片1個体4,565g、土師器壺5片5個体164g、同小型壺22片2個体232gの合計4,961gで64.9%がある。煮炊具は古墳～奈良時代としか識別できなかった土師器甕127片100個体1,956g、同甕?1片1個体124gの合計2,080gで27.2%を占める。他に須恵器不明1片1個体28gとミニチュア土器4片4個体35gの63gの0.8%である。口縁遺存5/8以上の個体はなく、須恵器甕1個体(598)が4/8で、他は3/8以下である。図示したのは混入と思われる

須恵器甕1個体4.565g(598)、同杯A2個体205g(594・595)、土師器甕と思われる1個体124g(596)、ミニチュア土器1個体12g(597)の合計4.906gで、古墳時代後期と古墳時代後期～奈良時代土器の土器重量比64.2%にあたる。黒色土器A杯は図示し得なかったものに、I類とC4類があるが、須恵器杯Aの出土から本跡は古墳後・奈良7期と捉えた。

川久保SB41 (第123図)

古墳時代後期土器338gのみ出土した。内訳は黒色土器A杯1片1個体176g、土師器高杯1片1個体85g、同甕1片1個体77gある。黒色土器A杯1個体176g(599)と同高杯1個体85g(600)のみ図示し、出土土器の重量比77.2%にあたる。わずかに杯C2類があり、古墳後・奈良1・2期と思われる。

川久保SB42 (第123図)

古墳時代後期土器220g、不明土器2gが出土した。古墳時代後期土器の内訳は黒色土器A杯6片1個体112g、土師器甕5片5個体108gがある。黒色土器A杯1個体112g(601)のみ図示し、出土古墳時代後期土器の重量比50.9%にあたる。出土土器は少ないが、杯C2類から古墳後・奈良1・2期と思われる。

川久保SB49 (第123・124図 PL49)

床上～埋土中から古墳時代後期土器13.677g、弥生時代中期土器8g、不明土器23gが出土した。古墳時代後期土器の内訳は食膳具が黒色土器A杯37片25個体1.004g、土師器高杯1片1個体10gの合計1.014g7.4%、煮炊具は土師器甕220片104個体11.260g、同甕25片7個体1314gの12.574g91.9%、ミニチュア土器3片3個体89g0.7%である。貯蔵具はない。口縁遺存5/8以上は土師器甕5個体(606～610)、4/8遺存は同甕1個体(612)で、杯類は3/8以下である。図示したのは黒色土器A杯4個体430g(602～605)、土師器甕8個体8.285g(606～612・614)、同甕2個体1.039g(613・616)、ミニチュア土器1個体71g(615)の合計9.825gで、古墳時代後期土器の重量比71.8%にあたる。杯類C3類を主体にD類がわずかにあり、甕はA類が多く、606のB類がある。土師器甕606・607・610～612、小型甕614、甕616はカマド周辺で出土した。本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われる。

川久保SB50 (第124図 PL49)

床上～埋土中から古墳時代前期土器103g、古墳時代後期土器9.466g、不明土器150gが出土し、ピットから古墳時代後期黒色土器A杯2片2個体20g、同盤2片2個体35gが出土した。古墳時代後期土器の内訳は食膳具が黒色土器A杯26片23個体440g、同盤2片2個体35g、土師器高杯2片2個体282gの合計757gで8.0%、貯蔵具は土師器壺13片4個体467gで4.9%、煮炊具は土師器甕128片45個体6.060g、黒色土器A・土師器甕27片4個体2.182gの合計8.242gで87.1%を占める。口縁遺存5/8以上は甕2個体(622・626)で、4/8遺存が杯1個体(618)あるが、他は3/8以下である。甕には遺存度が高いものがあるが、杯類は低い。杯はC3・4類がある。図示したのは黒色土器A杯2個体135g(617・618)、土師器高杯1個体245g(619)、同壺1個体230g(620)、同甕5個体4.400g(621～623・625・626)、甕2個体2.130g(624・627)の合計7.140gで古墳時代後期土器の重量比75.4%に当たる。619の高杯脚には三角の透かしがあり、627は口縁の屈曲や口径から甕とみられる。土師器甕はハケ調整A類が多く、杯C3・4類出土から本跡の時期は古墳後・奈良3期と思われる。

川久保SB51 (第125・126図 PL50)

床上～埋土中より古墳時代後期土器13.994g、不明土器27gが出土した。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が須恵器杯H1片1個体201g、同高杯1片1個体54g、黒色土器A杯9片9個体653g、同高杯1片1個体218g、同盤9片8個体1.159g、土師器杯2片1個体16g、同高杯1片1個体17gの合計

2,318g16.6%、貯蔵具は須恵器同壺1片1個体674g、同壺1片1個体1,311g、土師器壺2片2個体1,193gの合計3,178gで22.7%、煮炊具は土師器甕100片41個体8,498gで60.7%である。Pit2から土師器甕4片1個体332g、Pit3・5から土師器甕5片2個体81g、Pit6から黒色土器A杯2片2個体188g、638と接合した黒色土器A盤3片1個体136g、644との接合片を含む土師器甕10片2個体227gがある。口縁遺存5/8以上は須恵器杯1個体(628)、黒色土器A杯3個体(629～631)、同高杯1個体(635)、同盤1個体(638)、須恵器甕1個体(640)、同壺1個体(642)、土師器甕2個体(647・648)で、遺存良好な土器が多い。図示した土器は床上～埋土出土の須恵器蓋杯1個体201g(628)、同高杯1個体54g(636)、同壺1個体674g(640)、同壺1個体1,311g(642)、黒色土器A杯3個体607g(629～637)、同盤3個体992g(637～639)、同高杯1個体218g(635)、土師器杯1個体16g(634)、同壺1個体1,170g(641)、同甕7個体6,557g(643～649)の合計11,800gで、古墳時代後期土器重量比84.3%にあたる。他にPit2の土師器甕1個体332g(650)、Pit6の土師器杯2個体188g(632・633)の520gでピット出土土器重量比53.9%を図示した。甕は646がA類、647と648がC類で他はD類である。646は丸底のやや異形の甕で搬入品の可能性があり、647と648は大きな胴径から壺かもしれない。また、641の土師器甕は642の須恵器広口壺を写したと思われる。杯C2～4類も少量混在するが、I1・I3類主体で本跡の時期は古墳後・奈良5期と思われる。

川久保SB53 (第126図 PL50・51)

床上～埋土中から縄文土器45g、弥生時代中期と思われる土器11g、古墳時代前期土器36g、古墳時代後期土器12,185g、不明土器592gが出土した。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が須恵器鉢1片1個体14g、黒色土器A杯34片31個体353g、土師器杯2片2個体152g、黒色土器A盤5片4個体364g、土師器高杯1片1個体75gの合計958g7.9%、貯蔵具は須恵器甕1片1個体40g、土師器小型壺6片6個体82g、同壺18片5個体282gの合計404g3.3%、煮炊具は土師器甕16片11個体2,716g、同甕138片77個体8,065gの合計10,781g88.5%、ミニチュア土器1片1個体42g0.3%である。他にPit1から土師器甕2片2個体70gが出土した。口縁遺存は5/8以上が黒色土器A杯1個体(653)、同盤1個体(654)、土師器甕2個体(661・662)、同甕2個体(658・659)で、煮炊具の遺存度は高いが、杯類は653を除くと2/8以下である。図示した土器は黒色土器A杯1個体19g(651)、同盤1個体272g(654)、土師器杯2個体152g(652・653)、同高杯1個体75g(655)、同甕2個体2,404g(661・662)、同甕4個体5,102g(656・658～660)、ミニチュア土器1個体42g(657)の合計8,066gで床上～埋土出土の古墳時代後期土器重量比66.2%にあたる。杯類はC4・C5類があり、土師器甕はC類658、A類659、B類660がある。甕661底部は蜂巣状で、662は棒を掛ける小孔がある。土師器甕658～660、同小型壺656、同甕656はカマド周辺で集中的に出土し、高杯655・盤654はカマド内、甕662はカマドから少し離れた床上出土である。本跡の時期は古墳後・奈良4期と思われる。

川久保SB54 (第127図 PL51)

床上～埋土中から古墳時代後期土器2,928g、不明土器38gが出土した。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が黒色土器A杯7片7個体194g、同盤4片2個体228g、土師器高杯3片3個体70gの492g16.8%、貯蔵具は土師器壺1片1個体105g、同小型壺2片1個体29gの合計134g4.6%、煮炊具は土師器甕6片3個体1,030g、同甕37片28個体1,272gの合計2,302g78.6%である。口縁遺存5/8以上はなく、4/8遺存は黒色土器A杯1個体(663)と土師器甕1個体(666)あり、他は2/8以下の遺存である。図示した土器は黒色土器A杯2個体164g(663・664)、同盤1個体204g(665)、土師器

甕1個体561g(666)、同甕1個体992g(667)の合計1,921gで重量比65.6%に該当する。杯類はわずかだが、C4・5類がある。甕はB類があり、本跡の時期は古墳後・奈良4期と思われる。

川久保SB55 (第127図 PL51)

床上～埋土中から弥生土器13g、古墳時代後期土器7,655g、不明土器69gが出土した。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が黒色土器A杯13片6個体310g、同高杯1片1個体338g、土師器高杯1片1個体4g、同盃2片2個体23gの合計675gで8.8%、貯蔵具は黒色土器A・土師器甕27片6個体1,842gで24.1%、煮炊具は土師器甕72片35個体4,837g、同甕1片1個体301gの合計5,138g67.1%である。貯蔵具がやや多い。口縁遺存5/8以上は黒色土器A高杯1個体(670)、土師器壺1個体(674)、同甕2個体(672・676)あり、杯類は3/8遺存以下しかない。図示したのは黒色土器A杯2個体270g(668・669)、同高杯1個体338g(670)、同壺1個体167g(673)、同甕1個体301g(678)、土師器壺2個体940g(671・674)、同甕4個体4,194g(672・675～677)の合計6,210gで古墳時代後期土器の重量比81.1%に相当する。672は胴径に比して器高が低い。杯類はC3類、甕はA・B類があり、本跡時期は古墳後・奈良2期と思われる。

川久保SB58 (第128図)

床上～埋土中から縄文土器15g、古墳時代後期土器86g、奈良時代土器2,107g、古墳時代後期～奈良時代土器241g、不明土器204gが出土した。古墳時代後期土器は黒色土器A杯5片5個体50g、同小型壺2片1個体36gで混入と思われる。奈良時代土器は、食膳具が須恵器杯A7片3個体261g、同杯Bが3片3個体182gで合計443g21.0%、貯蔵具は須恵器壺1片1個体330g、同甕9片5個体75g土師器壺1片1個体31g、の合計436g20.7%、煮炊具は土師器甕24片15個体1,228gの58.3%である。古墳時代後期～奈良時代土器には土師器壺1片1個体22g、同甕2片2個体15g、同甕13片10個体199g、不明須恵器5片5gがある。古墳時代後期～奈良時代土器を加えると食膳具443g18.9%、貯蔵具は土師器壺を加えて458g19.5%、煮炊具は土師器甕・同甕を加えて1,442gで61.4%、器種不明須恵器5g0.2%となる。口縁遺存5/8以上はなく、4/8遺存は須恵器杯A1個体(679)のみある。図示したのは須恵器杯A1個体186g(679)、同壺1個体330g(680)、土師器壺1個体31g(681)、同甕3個体579g(682～684)の合計1,126gで、古墳時代後期～奈良時代土器の重量比48.0%にあたる。須恵器杯A底部はヘラ切りで、須恵器壺680の外底には2次的な研磨があり、転用甕と思われる。本跡の時期は古墳後・奈良7期と思われる。

川久保SB59 (第128図 PL52)

床上～埋土中から弥生土器32g、古墳時代前期土器27g、古墳時代後期土器4,367g、重椀柱穴からの混入と思われる平安時代土器7g、不明土器160gが出土した。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具は黒色土器A杯45片35個体615g、土師器杯6片2個体89g、同高杯7片7個体170gの合計874g20.0%、貯蔵具は須恵器甕2片2個体53g、土師器壺5片2個体100g、同小型壺10片7個体79gの合計232g5.3%、煮炊具は土師器甕121片72個体3,197g、同甕4片4個体64gの合計3,261g74.7%がある。692はミガキ調整され、壺とも考えたが口径が大きく甕とした。口縁遺存5/8以上のものは692の1個体のみで、3/8遺存以下しかなく、小片が多い。図示したのは黒色土器A杯5個体280g(685～688・691)、土師器杯2個体89g(689・690)、同甕2個体1,837g(692・693)の合計2,206gで床上～埋土出土の土器重量比50.5%に相当する。杯はC5とI3類、甕はB類がある。本跡の時期は古墳後・奈良4期と思われる。

川久保SB60 (第128・129図)

床上～埋土中より古墳時代後期土器 11,429g、不明土器 1,097g、土鍾 61g (1140) が出土した。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が黒色土器 A 杯 120 片 99 個体 1,694g、同盤 7 片 5 個体 308g、土師器杯 2 片 2 個体 29g、同高杯 5 片 2 個体 175g の合計 2,206g 19.3%、貯蔵具は須恵器甕 4 片 2 個体 75g、同小型壺 5 片 2 個体 276g、黒色土器 A 小型壺 4 片 1 個体 86g、土師器壺 41 片 16 個体 1,626g の合計 2,063g で 18.1%、煮炊具は土師器甕 300 片 143 個体 6,906g、同甕 8 片 7 個体 254g の合計 7,160g で 62.6% がある。口縁遺存 5/8 以上はなく、最大は 4/8 遺存の黒色土器 A 杯 (699) のみで他は 2/8 以下の遺存である。出土量は多いが小片が多い。他に Pit1 から古墳時代後期土師器甕 5 片 72g、不明土器 12g が出土した。図示した土器は黒色土器 A 杯 8 個体 499g (694～701)、同盤 4 個体 296g (702～704・706)、土師器高杯 1 個体 168g (705)、同壺 2 個体 746g (709・710)、同小型壺 2 個体 338g (707・708)、同甕 9 個体 3,486g (711～719) の計 5,533g で床上～埋土出土古墳時代後期土器の重量比 48.4% に当たる。黒色土器杯は 694・695・698・699 など C5 類が中心で、697・700・701 など混入と思われる C3 類がある。甕は A・B 類がある。709 は長い口縁形態とミガキ調整から壺と思われたが、近年、新潟県で捉えられている東北・北海道系甕とされる甕に類似するとも思われる。断定はできない。C3 類杯が多いが、C5 類中心で本跡の時期は古墳後・奈良 4 期と思われる。

川久保SB61 (第129図 PL52)

床上～埋土中から古墳時代前期土器 49g、古墳時代後期土器 189g、古墳時代後期～奈良時代土器 181g、奈良時代土器 40,334g、不明土器 131g が出土した。奈良時代土器は、食膳具が須恵器杯 B1 片 1 個体 16g、同蓋 2 片 1 個体 12g、貯蔵具は須恵器甕 3 片 3 個体 38,588g、煮炊具は土師器甕 63 片 6 個体 1,718g があり、古墳時代後期土器は、食膳具に黒色土器 A 杯 4 片 4 個体 39g、同盤 4 片 2 個体 134g、土師器高杯 4 片 1 個体 16g、古墳時代後期と奈良時代の識別ができない土器は食膳具の黒色土器 A 杯 5 片 4 個体 31g、煮炊具の土師器甕 17 片 15 個体 150g がある。完形の須恵器甕 722 は重量を厳密に計測できなかったが約 38,500g あり、古墳時代後期～奈良時代土器合計の重量比で食膳具 59g 0.1%、煮炊具 1,868g 4.6%、貯蔵具 38,588g 95.2% となる。口縁遺存 5/8 以上は須恵器甕 (722) 1 個体のみで、須恵器杯 B の 1 個体 16g (720) と、同甕 1 個体 38,500g (722)、土師器甕 1 個体 1,304g (721) の計 39,820g の重量比 98.3% を図示した。本跡時期は古墳後・奈良 7 期と思われる。

川久保SB62 (第130図)

床上～埋土中より古墳時代前期土器 40g、古墳時代後期土器 258g、古墳時代後期～奈良時代土器 1,487g、奈良時代土器 54g、不明土器 280g が出土した。古墳時代後期土器内訳は食膳具が黒色土器 A 杯 16 片 14 個体 145g、土師器高杯 3 片 3 個体 16g、貯蔵具は土師器小型壺 2 片 2 個体 76g、同壺 1 片 1 個体 21g、古墳時代後期～奈良時代土器は煮炊具の土師器甕 77 片 51 個体 1460g と同盤 1 片 1 個体 9g、貯蔵具の須恵器甕 2 片 2 個体 18g、奈良時代土器は貯蔵具の須恵器甕 2 片 2 個体 49g、食膳具の須恵器蓋 1 片 1 個体 5g がある。口縁遺存は 2/8 以下のみしかない。C5 類の黒色土器 A 杯 1 個体 41g (723) のみである。複数時期の土器が少量ずつ混在し、時期の詳細不明だが、本跡は古墳後・奈良 4 期以後の所産と思われる。

宮沖SB01 (第133・134図 PL53)

床上～埋土中より古墳時代前期土器 116g、古墳時代後期土器 98g、奈良時代土器 21,498g、不明土器 400g が出土した。土師器甕に古墳時代後期のものを含む可能性があるが、内訳は食膳具に、須恵器

杯Aが2片1個体42g、同杯Bが1片1個体132g、同蓋4片4個体445g、同鉢1片1個体70g、土師器杯5片5個体21gの合計710gで3.3%、貯蔵具は須恵器壺2片1個体175g、同甕22片8個体14.925g、同横瓶13片1個体1,055gの合計16,155g75.1%、煮炊具は黒色土器A・土師器甕86片75個体4,618g、土師器甕1片1個体15gの合計4,633g21.6%を占める。須恵器は合計16,844gで78.4%を占め、なかでも貯蔵具は16,155gで須恵器の95.9%に相当して須恵器比率が高い。図示したのは須恵器杯Aが1個体42g(796)、同杯Bが1個体132g(797)、同蓋1個体420g(795)、同壺1個体175g(799)、同鉢1個体70g(798)、同甕3個体14,780g(802～804)、土師器甕4個体3,282g(800・801・805・806)の合計18,901gで奈良時代の土器重量比で87.9%にあたる。口縁遺存5/8以上は須恵器甕1個体(804)と土師器甕1個体(806)のみで、他は2/8以下である。本跡の時期は古墳後・奈良7期と思われる。

宮沖5802 (第134図 PL53・54)

床土～埋土中より弥生時代中期土器516g、弥生時代後期～古墳時代前期土器1,524g、古墳時代後期～奈良時代土器14,556g、古墳時代前・後期の識別ができなかった須恵器5g、重複遺構の混入と思われる平安時代の土器136g、不明土器2,416gと羽口32g、紡錘車40gが出土した。最も多い古墳時代後期～奈良時代土器の内訳は、食膳具が須恵器杯B1片1個体11g、同蓋2片2個体18g、黒色土器A杯103片99個体808g、同盤9片1個体140g、同高杯2片1個体167g、土師器杯3片3個体350g、同高杯18片14個体484gの合計1,978gで13.6%、貯蔵具は須恵器壺10片7個体552g、同甕16片5個体608g、同横瓶5片1個体593g、同長頸壺1片1個体181g、土師器小型壺4片4個体69g、同壺12片9個体478gの合計2,481gで17.0%、煮炊具は土師器甕335片126個体7,621g、同鍋35片1個体2,158g、同甕6片2個体71gの合計9,850gで67.7%、ミニチュア土器7片5個体247gで1.7%に当たる。食膳具の58.5%を黒色土器A・土師器杯が占め、わずかな須恵器蓋と杯Bは混入の疑いがある。口縁遺存5/8以上は黒色土器A杯3個体(807・810・811)のみで、他は2/8以下である。出土土器量は多いが、破片が多い。図示したのは黒色土器A・土師器杯2個体209g(807・808)、同盤1個体140g(817)、同高杯1個体167g(812)、土師器杯3個体350g(809～811)、同鍋1個体2,158g(821)、同甕3個体3,084g(818～820)、須恵器壺3個体345g(814～816)、同長頸壺1個体181g(813)、ミニチュア土器2個体160g(822・823)、土製紡錘車1点40g(1133)の合計6,834gで、古墳時代後期土器の重量比46.8%にあたる。他に弥生土器2個体137g(470・476)、平安時代土器1個体90g(1392)を図示した。杯類はC1・3・5類が少量あるが、I1・I3類が主体である。甕はD類中心に粗いハケ調整A類がある。本跡の時期は古墳後・奈良5期と思われる。

宮沖5803 (第135図 PL54)

床土～埋土中より弥生時代後期～古墳時代前期土師器755g、古墳時代後期土器16,032g、不明土器2,751gが出土した。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が須恵器杯10片9個体103g、同蓋5片5個体35g、黒色土器A杯121片112個体1,624g、同盤2片1個体242g、土師器高杯2片2個体44gの合計2,048gで12.8%を占め、貯蔵具は須恵器甕21片11個体755g、同壺3片3個体13g、同甕4片4個体190g、黒色土器壺20片1個体1,876g、土師器壺58片8個体1,558g、同小型壺32片4個体986gの合計5,378gで33.5%、煮炊具は土師器甕415片151個体8,534g、同甕2片2個体72gの合計8,606gで53.7%を占める。黒色土器A杯はC3類が主体で、わずかなC5類の831、I3類の827は混入の疑いがある。口縁5/8以上の遺存は黒色土器A杯1個体(828)、土師器壺1個体(840)、同小型

壺2個体(834・835)のみで、他は1/8以下の遺存である。図示したものは黒色土器A杯7個体719g(825～831)、同盤1個体242g(832)、同壺1個体1,876g(840)、土師器壺1個体1,140g(836)、同小型壺2個体755g(834・835)、同甕6個体4,271g(841～843・837～839)、須恵器杯?1個体70g(824)、同甕1個体164g(833)の合計9,237gで埋土出土古墳時代後期土器の重量比57.6%にあたる。これ以外に古墳時代前期土器1個体110g(475)を図示した。本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われる。宮沖SB05(第136図PL54)

床上～埋土から縄文土器173g、弥生時代後期～古墳時代前期土器2,384g、古墳時代中期末土器85g、古墳時代後期土器2,097g、古墳時代後期～奈良時代土器24,921g、中世磁器4g、不明土器5,413gが出土した。ピットでは古墳時代後期と思われる土器小片がPit1から243g、Pit2から125g、Pit4から27g、Pit6から20g、Pit7から3g、Pit8から14g、Pit9から25g、Pit10から36g、Pit11から83g、Pit12から7g出土し、Pit2・9・11から古墳時代前期土器99g、不明土器114gが出土した。本跡の時期は古墳後・奈良6期と思われるが、土師器甕や壺は古墳時代後期と奈良時代の識別ができず一括した。古墳時代前期土器は重複するSD10からの混入で、中世焼物は重複する柱穴の混入と思われる。古墳時代後期～奈良時代土器の内訳は、食膳具が須恵器杯A・G14片12個体162g、同杯Hが1片1個体5g、同蓋8片5個体111g、同高杯2片1個体19g、同高杯蓋1片1個体163g、黒色土器A杯37片25個体529g、同筒形容器2片1個体406g、土師器杯3片3個体167gの合計1,562g、貯蔵具は須恵器壺10片7個体186g、同甕29片19個体1,132g、同甕1片1個体7g、土師器壺60片26個体2,346g、同小型壺4片4個体39gの合計3,710g、煮炊具は土師器甕963片697個体18,906g、同甕12片10個体335gの合計19,241g、他に須恵器すり鉢1片1個体410gがある。古墳時代後期の土器は食膳具に黒色土器A杯193片179個体1,262g、同盤56片46個体801g、同高杯3片3個体34gの合計2,097gがある。古墳時代後期・古墳時代後期～奈良時代土器を合わせて食膳具は合計3,659gで13.5%、貯蔵具は合計3,710gで13.7%、煮炊具は合計19,241gで71.2%、すり鉢1片1個体410gが調理具で1.5%にあたる。なお、851は杯M類と捉えた。食膳具は須恵器33.4%、黒色土器A54.5%、土師器12.1%で黒色土器A主体に須恵器が一定量加わる。貯蔵具は須恵器35.1%、土師器62.1%、黒色土器Aが2.8%である。筒形容器(852)は平安時代の川久保SB52出土のコップ型須恵器杯B(1325)に形態や体部の沈線が類似する。口縁遺存5/8以上は土師器杯1個体(849)、同小型壺1個体(851)、同甕1個体(856)しかなく、大部分が3/8以下の破片である。図示したのは須恵器杯2個体93g(846・847)、同蓋2個体214g(844・845)、土師器杯1個体149g(849)、黒色土器A杯2個体119g(848・850)、同小型杯Mが1個体107g(851)、同筒形容器1個体406g(852)、土師器壺1個体781g(853)、同甕8個体3,433g(854・856～862)の合計5,712gで、埋土出土古墳時代後期～奈良時代土器の重量比22.9%に当たる。杯類はC1～3類を中心にI1・I3・M類、I2類、J類を含み、甕類はD類を主体とする。さまざまな土器が混在するが、杯I類や甕D類の出土から本跡の時期は古墳後・奈良6期と思われる。宮沖SB06(第136・137図PL54)

床上から埋土中より縄文土器20g、弥生時代中期土器10g、弥生時代後期～古墳時代前期土器1,590g、古墳時代後期土器286g、奈良時代土器676g、古墳時代後期～奈良時代土器12,543g、中世焼物60g、不明土器3,377gが出土した。古墳時代後期と奈良時代の貯蔵具や煮炊具は識別できず古墳時代後期～奈良時代とし、古墳時代後期と奈良時代土器を加えて合計13,219gである。奈良時代の土器は食膳具の須恵器杯A7片5個体88g、同杯Bが2片2個体127g、同杯片16片14個体49g、同盤2片1個体

301g、同蓋2片2個体5g、同鉢7片4個体106gで合計676gがある。古墳時代後期～奈良時代土器は食膳具に須恵器蓋2片2個体12g、黒色土器A杯156片146個体872g、同盤33片29個体711g、土師器杯1片1個体20gの合計1,615g、貯蔵具は須恵器壺10片9個体137g、同甕32片16個体820g、土師器壺16片8個体869g、同小型壺1片1個体15gの合計1,841g、煮炊具は土師器甕453片412個体8,953g、同甕4片3個体64g、同鍋?1片1個体70gの合計9,087gがある。奈良時代と古墳時代後期～奈良時代食膳具は合計2,291gで17.3%、貯蔵具は1,841gで13.9%、煮炊具は9,087gで68.8%に当たる。食膳具は須恵器に杯G(A)・杯B、黒色土器A・土師器にI類がある。杯・甕・鉢類1,973gのうち、370gが須恵器、1603gが黒色土器A・土師器だが、図示し得た個体は少ない。貯蔵具は時期不明のものも含めて須恵器957g、土師器他884gでほぼ拮抗する。煮炊具は甕D類がある。口縁遺存5/8以上は土師器甕1個体(874)、4/8遺存も黒色土器A壺1個体(872)で、他は2/8以下である。図示した土器は須恵器杯1個体46g(867)、同杯B1個体117g(863)、同盤1個体301g(871)、同鉢4個体106g(866・868～870)、黒色土器A杯1個体12g(864)、同壺1個体619g(872)、土師器杯1個体20g(865)、同甕3個体2,604g(873～875)の計3,825gで古墳時代後期～奈良時代、奈良時代土器の重量比28.9%にあたる。本跡の黒色土器A杯はC3類を少量含むが、杯I1～I3類と須恵器杯Bを含み、本跡時期は古墳後・奈良6期と思われる。混入の中世内耳鍋(1509)は第7節に掲載した。

宮沖5B08 (第137図 PL55)

床上～埋土中から弥生時代後期～古墳時代前期土器129g、古墳時代後期～奈良時代土器1,374g、奈良時代土器2,388g、時期不明須恵器1片3g、不明土器952gとミニチュア土器25gが出土した。識別できた奈良時代土器は食膳具が須恵器杯A7片7個体75g、同蓋1片1個体12gの合計87g、貯蔵具は須恵器壺4片4個体31g、同甕12片12個体840gの合計871g、煮炊具は土師器甕30片1個体1,430gがある。古墳時代後期・奈良時代と識別できなかった土器は食膳具が黒色土器A杯9片9個体56g、同盤3片3個体37g、黒色土器A・土師器高杯3片3個体197gの290g、貯蔵具は土師器小型壺1片1個体11g、煮炊具は土師器甕68片64個体1,067g、同甕1片1個体6gの計1,073gである。古墳時代後期土器と合わせて重量は計3,762gとなり、食膳具は377gで10.0%、貯蔵具は882gで23.4%、煮炊具は2,503g66.5%となる。口縁遺存3/8以下のみしかない。食膳具では須恵器87g、黒色土器A・土師器は290gがあり、高杯197gが大部分を占める。図示した土器は須恵器杯Aが1個体17g(877)、同蓋?1個体12g(876)、黒色土器A高杯1個体178g(878)、土師器甕1個体1,430g(880)の合計1,637gで、床上～埋土出土の古墳時代後期～奈良時代、奈良時代土器の重量比43.5%にあたる。他に時期不明の把手付ミニチュア土器1個体(879)を図示した。本跡の時期は古墳後・奈良7期と思われる。

宮沖5B09 (第137図 PL54)

埋め土と捉えられた埋土中層の上下層別に土器を採取し、上・下層で7個体の土器が接合した。以下の計測数値は接合後のもので、接合した上層土器は下層に含めた。上層より縄文土器17g、弥生時代後期～古墳時代前期土器1,995g、古墳時代後期土器8,114g、不明土器2,402gが出土した。古墳時代後期土器の内訳は食膳具が須恵器蓋・高杯?2片2個体16g、黒色土器A杯51片49個体1,125g、同盤8片8個体148g、土師器高杯3片3個体64gの合計1,353g、貯蔵具は須恵器壺2片2個体57g、同甕1片1個体55g、土師器壺8片8個体369g、同小型壺2片2個体644gの計1,125g、煮炊具は土師器甕305片147個体5,324g、同甕2片2個体305gの計5,629g、ミニチュア土器1片1個体7gがある。下層から、弥生時代後期～古墳時代前期土器466g、古墳時代後期土器1,212g、不明土器320gが出土し、古

墳時代後期土器の内訳は食膳具が黒色土器A杯6片4個体78g、土師器杯3片3個体82gの計160g、貯蔵具が須恵器甕1片1個体10g、煮炊具は土師器甕45片31個体932g、同甕2片1個体110gの計1,042gがある。口縁遺存5/8以上は上層出土の黒色土器A杯2個体(882・884)、土師器小型壺1個体(887)があるが、下層は3/8遺存以下しかない。上下層の古墳時代後期土器合計9,326gで、食膳具は1.513g16.2%、貯蔵具1.135g12.2%、煮炊具6.951g74.5%、その他7g0.1%である。他にPit4から古墳時代後期土器64gと不明土器5gが出土した。図示したのは上層出土の黒色土器A杯3個体663g(882～884)、土師器小型壺1個体602g(887)、同甕4個体1,233g(890～893)、同甕1個体275g(894)、ミニチュア土器1個体7g(888)の合計2,780gで重量比34.3%、下層は土師器杯2個体57g(885・886)、黒色土器A杯1個体30g(881)、土師器甕1個体95g(889)の合計182gで、重量比15.0%である。他に古墳時代前期で上層出土の土師器甕1個体(477)、下層出土の土師器壺1個体(478)を図示した。上層とした甕477はカマド上部出土で、本来はカマドに掛けられていた可能性がある。杯類はわずかにC1類があるが、C3類を中心にD・E・F・K類がある。本跡の時期は古墳後・奈良2期とみられる。宮沖5B10(第138図 PL55)

貼り替えられた上層・下層床面別に遺物を取り上げた。上層床面～埋土から縄文土器35g、弥生時代後期～古墳時代前期土器969g、古墳時代後期土器70g、古墳時代後期～奈良時代土器8,432g、奈良時代土器3,419g、平安時代土器46g、不明土器2,040gが出土した。奈良時代土器の内訳は、食膳具が須恵器杯A9片8個体747g、同杯B10片8個体343g、識別できない同杯A・Bが18片16個体65g、同蓋7片7個体140g、黒色土器A杯20片20個体219g、同高杯2片2個体30g、土師器杯2片2個体20gの計1,564g、貯蔵具は須恵器壺7片7個体300g、同甕41片28個体1,555gの計1,855g、識別し得なかった古墳時代後期～奈良時代土器は食膳具が黒色土器A杯29片29個体147g、同蓋17片12個体415g、土師器壺1片1個体610gの計1,172g、貯蔵具は須恵器横瓶4片1個体315g、土師器壺3片3個体85g、同小型壺9片9個体77gの計477g、煮炊具は土師器甕418片346個体6,710g、同甕3片3個体73gの計6,783gがある。口縁遺存5/8以上は須恵器杯Aの2個体(901・902)と土師器壺1個体(908)で、他は3/8以下である。古墳時代後期～奈良時代土器と奈良時代土器合計11,851gで食膳具は2,736gで23.1%、貯蔵具2,332gで19.7%、煮炊具6,783gで57.2%となる。食膳具は須恵器1,295g、黒色土器A・土師器が1,441gとほぼ等量だが、後者は小片が多い。図示した土器は須恵器杯A4個体592g(900～903)、同杯B3個体213g(897～899)、同蓋1個体25g(895)、黒色土器A杯2個体55g(905・906)、土師器壺1個体610g(908)、同甕1個体559g(904)の合計2,054gで、土器重量比17.3%にあたる。他に上層床面のPit3から須恵器甕1片1個体3g、土師器甕4片4個体30g、不明土器20g、Pit6から須恵器蓋1片1個体3g、黒色土器A杯1片1個体3g、土師器甕2片2個体32g、Pit7から須恵器甕1片1個体35g、黒色土器A高杯1片1個体55g、同蓋1片1個体7g、土師器甕2片2個体200g、Pit8から須恵器杯A1片1個体15g、同杯B1片1個体2g、土師器甕23片15個体490g、不明土器10gが出土した。

下層床面ではカマド周辺から多く土器が出土し、古墳時代後期～奈良時代土器2,468g、奈良時代土器293g、不明土器15gで、奈良時代土器では食膳具が須恵器杯A2片2個体201g、同杯B1片1個体30g、同蓋1片1個体62gの計293g、古墳時代後期～奈良時代土器は食膳具が黒色土器A杯3片3個体256g、同蓋1片1個体9g、同高杯1片1個体201g、土師器杯1片1個体8gで474g、貯蔵具は須恵器甕3片2個体403g、同横瓶8片1個体326gの計729g、煮炊具は土師器甕29片15個体1,265g

がある。古墳時代後期から奈良時代土器の食膳具は767gで27.8%、貯蔵具は729gで26.4%、煮炊具は1,265gで45.8%にあたる。口縁遺存5/8以上は須恵器杯Aが1個体(909)、黒色土器A杯1個体(907)、同高杯1個体(911)のみで他は3/8以下の遺存である。図示したのは須恵器杯Aが1個体192g(909)、同蓋1個体62g(896)、黒色土器A杯2個体194g(907・910)、同高杯1個体201g(911)、土師器甕1個体299g(912)の合計948gで、古墳時代後期～奈良時代土器・奈良時代土器の重量比34.3%にあたる。下層床面ビットではPit9で須恵器甕1片1個体63g、黒色土器A杯1片1個体25g、土師器甕5片4個体109g、Pit10から須恵器甕1片1個体10g、黒色土器A杯1片1個体20g、土師器壺1片1個体20g、同甕5片4個体135g、古墳時代前期土師器甕1片1個体10gと不明土器20g、Pit12から須恵器杯Aが1片1個体8g、Pit14から土師器甕1片1個体7g、Pit15から土師器甕1片1個体26g、Pit17から土師器甕2片2個体45g、古墳時代前期土器7g、Pit18から土師器甕2片2個体8g、Pit19から土師器甕1片1個体15gが出土した。本跡の時期は古墳後・奈良7期と思われる。

宮沖5812 (第138・139図 PL55)

床上～埋土中から縄文土器94g、弥生～古墳時代前期土器2,058g、古墳時代後期土器10,999g、不明土器1,028gが出土した。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が黒色土器A杯76片56個体686g、同蓋3片3個体97g、土師器杯1片1個体9g、同高杯5片5個体64gの計856gで7.8%、貯蔵具は須恵器甕2片2個体405g、同甕3片3個体49g、土師器壺8片5個体270g、同小型壺?2片1個体60gの計784g7.1%、煮炊具は土師器甕303片203個体7,055g、同甕19片4個体2,304gの計9,359gの85.1%がある。これ以外にPit4から古墳時代前期土器26g、Pit6から平安時代土器16g、古墳時代前期土器59g、古墳時代後期土器39g、Pit9から古墳時代前期土器85gと古墳時代後期土器12g、Pit12から古墳時代前期土器182g、不明土器7g、Pit13から古墳時代前期土器124gと不明土器17g、Pit15から古墳時代前期土器29g、古墳時代後期土器42g、不明土器6g、Pit17から古墳時代前期土器7g、古墳時代後期土器12gが出土した。Pit6は重複柱穴の可能性ある。床下から古墳時代後期土器345g、古墳時代前期土器829g、不明土器52gが出土した。口縁遺存5/8以上は土師器甕3個体(918・921・922)と須恵器甕1個体(919)があり、口縁4/8遺存は土師器甕2個体(923・924)と煮炊具に遺存良好な個体が多い。図示したのは須恵器甕1個体395g(919)、黒色土器A杯5個体397g(913～917)、土師器甕4個体3,355g(918・921～922)、同甕2個体2,278g(923・924)の合計6,425g、床上～埋土出土の古墳時代後期土器の重量比58.4%にあたる。杯はC3類を中心に少量のD・F類があり、本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われる。

宮沖5813 (第139図 PL55)

床上～埋土中から弥生～古墳時代前期土器382g、古墳時代後期土器6,170g、重複柱穴の混入品と思われる平安時代土器20g、不明土器565gが出土した。他にPit1から古墳時代前期土器18g、古墳時代後期黒色土器A杯4片4個体28g、同蓋1片1個体13g、土師器甕2片2個体22gが出土した。埋土出土の古墳時代後期土器は食膳具が黒色土器A杯31片30個体590g、同蓋7片6個体575g、同高杯2片2個体85g、土師器杯2片1個体30gの計1,280gで20.8%、貯蔵具は須恵器甕11片7個体1,000g、同壺1片1個体5g、土師器壺4片2個体120gの計1,125gで18.2%、煮炊具は土師器甕113片60個体3,715g、同甕1片1個体50gの計3,765gで61.0%に当たる。口縁遺存5/8以上は黒色土器A・土師器杯2個体(925・927)、同蓋1個体(929)がある。図示した土器は黒色土器A・土師器杯4個体455g(925～928)、同蓋1個体540g(929)、須恵器甕1個体790g(930)、土師器甕4個体2,135g(931)

～934)の合計3,920gで、床上～埋土出土古墳時代後期土器の重量比63.5%にあたる。黒色土器A杯は少量のC2・C3があるが、I1・I3類が多く、本跡の時期は古墳後・奈良5期と思われる。

宮沖5B14 (第139～141図 PL56)

埋め土と捉えた埋土中位の上・下層別に土器を取り上げた。上層は弥生時代後期～古墳時代前期土器710g、古墳時代後期土器20,623g、重複柱穴の混入と思われる平安時代土器10g、土製品15g、不明土器3,874gが出土した。混入土器も多く、詳細な時期を識別できず古墳時代後期土器とまとめた土器も多い。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が須恵器杯A・Gが10片10個体153g、同杯Bが5片5個体275g、同杯A・B・Gが9片9個体40g、同蓋6片6個体238g、黒色土器A杯235片223個体2,506g、同蓋45片40個体1,105g、黒色土器A・土師器杯Jが16片13個体345g、土師器杯13片13個体364g、同高杯4片4個体57gで計5,083gの24.6%、貯蔵具は須恵器壺3片2個体56g、同甕46片19個体765g、土師器壺6片4個体221gの計1,042gで5.1%、煮炊具は土師器台付甕?3片3個体90g、黒色土器A・土師器甕663片448個体14,378gで計14,468gで70.2%、他にミニチュア土器2片2個体30gの0.1%がある。口縁遺存5/8以上は黒色土器A杯1個体(942)、同蓋1個体(954)のみで、後は3/8以下の遺存である。図示したのは須恵器杯Aが2個体77g(938・939)、同杯Bが2個体245g(940・941)、同蓋3個体218g(935～937)、黒色土器A杯6個体694g(942・943・945・946・953・954)、同蓋2個体135g(955・957)、土師器・黒色土器A杯Jが4個体220g(944・950～952)、土師器杯3個体290g(947～949)、同甕5個体1,825g(963～967)、黒色土器A甕1個体89g(958)、ミニチュア土器2個体30g(959・960)の合計3,823gで18.6%にあたる。

下層より弥生時代後期～古墳時代前期土器1,149g、本跡より古い古墳時代後期土器258g、古墳時代後期土器22,428g、土製品2点21g、不明土器3,154gが出土した。本跡の時期より古い古墳時代後期の杯類29片258gは識別できたが、他は古墳時代後期土器と括った。上層とほぼ同量の土器が出土したが、煮炊具が多い。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が須恵器杯A・Gが20片18個体255g、同蓋11片10個体576g、同鉢2片2個体252g、黒色土器A杯187片173個体1,733g、同高杯1片1個体295g、同蓋25片23個体424g、土師器杯4片3個体183g、同蓋5片4個体55g、同杯11片1個体23g、同高杯12片8個体250gで合計3,788gの16.9%、貯蔵具は須恵器壺1片1個体9g、同壺3片2個体52g、同甕34片5個体1,064g、土師器壺28片11個体1,559g、同小型壺2片2個体68gで合計2,752gで12.3%、煮炊具は土師器把手付甕2片2個体519g、同甕794片515個体15,194g、同甕4片4個体117gの合計15,830gで70.6%を占める。他にミニチュア土器6片5個体58g0.2%がある。土製品は土玉1点11gである。口縁遺存5/8以上は須恵器蓋2個体(968・969)、土師器杯1個体(976)で、4/8遺存は黒色土器A杯1個体(972)、土師器高杯1個体(978)、同小型壺1個体(982)、黒色土器A把手付甕1個体(991)がある。図示した土器は、須恵器杯1個体140g(971)、同蓋3個体432g(968～970)、同鉢1個体232g(979)、土師器杯2個体163g(976・977)、黒色土器A杯4個体300g(972～975)、同高杯1個体295g(978)、同把手付甕1個体434g(991)、土師器壺2個体1,047g(981・989)、同小型壺1個体54g(982)、同甕9個体2,721g(980・983～988・990・992)、土玉1点11g(1143)、土製円盤1点10g(1144)、ミニチュア土器2個体19g(962・963)で合計5,858gあり、重量比で26.1%にあたる。

他にトレンチ等で出土した埋土一括で取り上げた土器は弥生時代後期～古墳時代前期土器95g、古墳時代後期土器6,405g、不明土器1,389gがある。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が須恵器杯A・G4片

4 個体 92g、同蓋 A1 片 1 個体 23g、黒色土器 A 杯 87 片 83 個体 722g、同盤 17 片 17 個体 370g、土師器杯 7 片 7 個体 75g、同高杯 1 片 1 個体 30g で 1,312 g、貯蔵具は須恵器壺 7 片 7 個体 110g、同甕 17 片 8 個体 182g、土師器壺 3 片 1 個体 54g の 346g、煮炊具は土師器甕 318 片 241 個体 4,630g、同甕 2 片 2 個体 107g で合計 4,737g、ミニチュア土器 1 片 1 個体 10g がある。図示したのは土師器杯 1 個体 10g (956)、ミニチュア土器 1 個体 10g (961) のみで 0.3% に過ぎない。また、Pit1 から古墳時代後期～奈良時代須恵器甕 1 片 1 個体 10g、土師器甕 2 片 2 個体 26g、古墳時代前期土器 5g、Pit5 から古墳時代後期～奈良時代土師器甕 12 片 12 個体 262g、ミニチュア土器 1 片 1 個体 16g、古墳時代前期土器 183g、不明土器 39g、Pit6 から古墳時代後期～奈良時代須恵器杯 1 片 1 個体 5g、土師器杯 1 片 1 個体 7g、同甕 1 片 1 個体 6g、古墳時代前期土器 14g、不明土器 39g が出土した。また、床下からは弥生土器 40g、古墳時代前期土器 333g、奈良時代～古墳時代後期土器 906g、古墳時代後期土器 2g、不明土器 246g が採取され、古墳時代後期～奈良時代土器の内訳は須恵器甕 1 片 1 個体 14g、同蓋 1 片 1 個体 18g、黒色土器 A 杯 8 片 7 個体 65g、同盤 2 片 2 個体 26g、同高杯 2 片 2 個体 44g、土師器盤 1 片 1 個体 6g、同壺 3 片 3 個体 53g、同甕 54 片 54 個体 680g が出土した。口縁遺存 2/8 以下で図示しなかった。

上層に杯 AG・B 類や I2 類や J 類が多く、I1・I3 類は浅いものが多い傾向があるが、上・下層では大きな時間差は認めにくい。杯 B、G、I1～I3 類、J 類の出土から、本跡時期は古墳後・奈良 6 期と思われる。宮沖 SB15 (第 141 図 PL56)

床上～埋土中から弥生時代後期～古墳時代前期土器 222g、古墳時代後期土器 4,694g、不明土器 510g が出土した。古墳時代後期土器の内訳は食膳具が須恵器杯 A7 片 7 個体 195g、同杯 B が 3 片 2 個体 24g、同蓋 3 片 3 個体 26g、黒色土器 A 杯 20 片 20 個体 309g、同盤 8 片 8 個体 519g、土師器高杯 4 片 2 個体 69g の計 1,142g で 24.3%、貯蔵具は須恵器壺 4 片 3 個体 54g、同甕 9 片 6 個体 158g、土師器壺 1 片 1 個体 45g の計 257g で 5.5%、煮炊具は土師器甕 135 片 109 個体 3,151g、同甕 2 片 1 個体 105g、黒色土器 A ? 甕 1 片 1 個体 39g の計 3,295g の 70.2% がある。口縁遺存 5/8 以上は黒色土器 A 杯 2 個体 (995・996)、土師器甕 1 個体 (999) があり、他は 2/8 以下の遺存しかない。図示したのは須恵器杯 G が 1 個体 120g (994)、黒色土器 A 杯 2 個体 188g (995・996)、同盤 1 個体 420g (998)、同甕 1 個体 39g (997)、土師器甕 2 個体 1,892g (999・1000) の合計 2,659g で 56.6% にあたる。997 は内面に青海波文のある黒色土器で横楕円と思われる。杯は G、AG、B、I1・I3 類があり、本跡の時期は古墳後・奈良 6 期と思われる。

宮沖 SB16 (第 142 図 PL56・57)

床上～埋土中から弥生時代後期～古墳時代前期土器 1,394g、古墳時代後期土器 11,787g、不明土器 515g が出土した。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が黒色土器 A 杯 57 片 53 個体 431g、同盤 4 片 4 個体 118g、同高杯 2 片 2 個体 526g の計 1,075g の 9.1% で、貯蔵具は須恵器壺 2 片 2 個体 22g、同甕 1 片 1 個体 7g、土師器壺 9 片 7 個体 1,094g の計 1,123g の 9.5%、煮炊具は土師器甕 146 片 99 個体 7,902g、同鍋 1 片 1 個体 1,677g の計 9,579g の 81.3% があり、他にミニチュア土器 2 片 2 個体 10g の 0.1% がある。口縁遺存 5/8 以上は土師器壺 1 個体 (1004)、同甕 2 個体 (1008・1009)、同鍋 1 個体 (1011) で、煮炊具の一部は遺存良好なものがあるが、ほとんどが 2/8 以下の遺存である。これ以外に Pit5 から古墳時代前期土器 18g、古墳時代後期土器 21g、不明土器 6g、床下から弥生時代中期土器 36g、弥生時代後期～古墳時代前期土器 437g、古墳時代後期土器 396g、不明土器 94g が出土した。図示した土器は黒色土器 A 杯 2 個体 66g (1001・1003)、同盤 1 個体 38g (1002)、同高杯 2 個体 526g (1005・

1006)、土師器壺1個体924g(1004)、同甕4個体5,461g(1007～1010)、同鍋1個体1,677g(1011)、ミニチュア土器1個体6g(1012)の合計8,698gで重量比の73.8%に当たる。土師器甕1007・1009・1010、小型甕1008、鍋1011はカマド脇周辺から集中して出土したものである。杯類はC3・C4・M類、II類、甕はA類とC類があり、本跡の時期は4期と思われる。

宮沖SB17 (第142図)

床上～埋土から弥生時代中期土器24g、弥生時代後期～古墳時代前期土器371g、古墳時代後期土器120g、古墳時代後期～奈良時代土器2,087g、奈良時代土器859g、平安時代土器676g、中世内耳鍋38g、近世伊万里5g、ミニチュア土器2g、土錘1点172g、不明土器1,523gが出土した。時期が識別しにくい土師器甕を含めた奈良時代と古墳時代後期～奈良時代土器は合計2,946gである。古墳時代後期土器の内訳は食膳具が須恵器杯Hの蓋1片1個体23g、黒色土器A杯9片9個体49g、同盤1片1個体15g、同高杯1片1個体16g、土師器高杯1片1個体17gがあり、古墳時代後期～奈良時代土器では食膳具が黒色土器A杯23片23個体148g、貯蔵具が土師器壺3片3個体83g、煮炊具が土師器甕129片125個体1,839g、同甕1片1個体17gの計1,856gで、奈良時代土器は食膳具が須恵器杯A2片1個体65g、同杯B5片2個体104g、同杯A・Bが22片22個体88g、同蓋1片1個体8gの計265g、貯蔵具は須恵器壺9片2個体172g、同甕16片12個体422gの計594gである。古墳時代後期から奈良時代の土器合計で食膳具は合計413g14.0%、貯蔵具は677g23.0%、煮炊具は1,856gで63.0%にあたる。貯蔵具の土師器壺や煮炊具の甕などは古墳時代後期の可能性がある。口縁遺存5/8以上はなく、最大でも2/8で須恵器杯Bの1個体(1014)と同蓋1個体(一括)のみで、全体的に遺存不良である。これ以外にPit3から古墳時代後期～奈良時代の土師器甕30g、Pit8から同甕片114g・古墳時代前期土器20g、床下から平安時代土器416g、奈良時代土器40g、古墳時代後期～奈良時代土器467g、弥生時代後期～古墳時代前期土器81g、不明土器150gがある。平安時代土器はロクロ成形の小型甕で平安時代と考えたが、それを除くと388gとなる。他の平安時代土器は斜面部分の土器も掘方を含めて取り上げた混入品とみられる。図示したのは須恵器杯A1個体65g(1017)、同杯B2個体104g(1013・1014)、黒色土器A杯2個体30g(1015・1016)の埋土中出土古墳時代後期～奈良時代土器の重量比合計199g6.8%と、平安時代の可能性がある土師器小型甕2個体220g(1018・1019)である。複数時期の土器が混在するが、遺存度の高い土器から本跡の時期は古墳後・奈良7期と思われる。

宮沖SB18 (第143図 PL57)

床上～埋土中から古墳時代後期土器3,403g、不明土器645gが出土した。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が黒色土器A杯25片25個体179g、同盤3片3個体188g、土師器杯1片1個体250g、同高杯1片1個体12gの計629gの18.5%、貯蔵具は須恵器甕1片1個体5g、同題1片1個体3g、土師器壺3片3個体105g、同小型壺1片1個体13gの計126gで3.7%、煮炊具は土師器甕71片46個体2,625g、同甕?2片2個体23gの計2,648gで77.8%にあたる。口縁遺存5/8以上は土師器杯1個体(1020)、同甕1個体(1022)があり、4/8遺存が黒色土器A盤1個体(1021)があるが、他のほとんどが1/8である。図示したのは遺存良好な黒色土器A盤1個体160g(1021)と土師器杯1個体250g(1020)と土師器甕1個体1,530g(1022)で合計1,940g出土土器重量比57.0%にあたる。杯はC3・E類があり、本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われる。

宮沖SB19 (第143・144図 PL57)

出土土器量は多いが、重複するSB27土器を多く混じり込む。床上～埋土中から弥生時代後期～古墳

時代前期土器 1,606g、古墳時代後期土器 23,931g、不明土器 4,802g、土鍾 1点 20g が出土した。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が須恵器杯 9片 9個体 53g、同蓋 1片 1個体 164g、同高杯 2片 1個体 138g、黒色土器 A 杯 191片 151個体 2,266g、同盤 34片 25個体 712g、同高杯 4片 3個体 810g、土師器杯 7片 6個体 245g、同高杯 22片 17個体 615g の合計 5,003g の 20.9%、貯蔵具は須恵器壺 1片 1個体 15g、同甕 8片 6個体 90g、土師器・黒色土器 A 壺 51片 12個体 4,530g の計 4,635g で 19.4%、煮炊具は土師器甕 590片 415個体 13,963g、黒色土器 A 台付甕? 1片 1個体 330g の計 14,293g の 59.7%がある。このなかで土師器高杯脚片は黒色土器 A の可能性があり、1041 は脚の付く煮炊具と捉えた。口縁遺存 5/8 以上は須恵器蓋 1個体 (1023)、黒色土器 A 杯 2個体 (1026・1028)、土師器甕 4個体 (1049・1051・1052・1054)、同壺 2個体 (1045・1046) あり、4/8 遺存破片も黒色土器 A 杯 1個体 (1025)、同盤 1個体 (1038)、土師器甕 1個体 (1048) と遺存良好なものがある。図示した土器は須恵器蓋 1個体 164g (1023)、同高杯 1個体 138g (1042)、黒色土器 A 杯 10個体 1,054g (1024～1028・1030・1031・1033～1035)、同盤 1個体 280g (1038)、同高杯 3個体 810g (1040・1043・1044)、同台付甕? 1個体 330g (1041)、土師器杯 1個体 180g (1036)、土師器・黒色土器 A 壺 4個体 4,145g (1037・1045～1047)、同甕 7個体 6,245g (1048～1054) の合計 13,342g で、床上～埋土出土土器重量の 55.8% に当たる。他に土鍾 1点 20g (1139) を図示した。それ以外には Pit1 から黒色土器 A 杯 1片 1個体 5g、土師器小型壺 1片 1個体 3g、同甕 4片 4個体 32g、不明土器 65g、Pit3 から黒色土器 A 杯 3片 3個体 20g、同盤 1片 1個体 7g、土師器小型壺 3片 3個体 65g、同甕 10片 10個体 125g、弥生時代後期～古墳時代前期土器 2片 11g、不明土器 35g、Pit4 から古墳時代後期黒色土器 A 杯 3片 3個体 516g、同盤 2片 1個体 390g、土師器小型壺 3片 3個体 70g、同甕 10片 10個体 126g、古墳時代前期土器 42g と不明土器 12g が出土し、Pit4 の黒色土器 A 杯 2個体 467g (1029・1032)、同盤 1個体 390g (1039) を図示した。床下から弥生時代後期～古墳時代前期土器 535g、黒色土器 A 杯 24片 24個体 165g、土師器甕 58片 32個体 958g の古墳時代後期土器 1,123g、不明土器 390g が出土した。なお、土師器甕 1049・1052、同小型甕 1051・1054、同壺 1046・1047 はカマド脇周辺から集中して出土し、土師器甕 1048・1050、同小型甕 1053、同壺 1045 は北東埋土中からの出土である。杯類は I1・I3 類を中心とし、少量 1031・1034 など C5 類があり、本跡の時期は古墳後・奈良 5 期と思われる。これ以外に杯 C3 類、杯 D・E 類や Pit4 の杯 F 類 1029 は重複する SB27 の土器と思われる。

宮沖 SB23

床上～埋土中より古墳時代前期土器 30g、古墳時代後期土器 235g、不明土器 201g が出土した。古墳時代後期土器には黒色土器 A 杯 6片 6個体 39g、土師器甕 13片 10個体 196g があり、口縁遺存度は 1/8 以下で図示し得なかった。杯 D と F 類、甕 B 類があり、本跡は古墳後・奈良 2 期以後としかわからない。

宮沖 SB25 (第 144 図)

床上～埋土中より弥生時代後期～古墳時代前期土器 1,102g、古墳時代後期土器 2,520g、平安時代土器 9g、不明土器 540g が出土した。古墳時代前期土器は本跡が切る SD10、平安時代土器は重複する SB04 からの混入と思われる。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が須恵器杯 2片 2個体 134g、同蓋 1片 1個体 14g、黒色土器 A 杯 59片 56個体 606g、土師器高杯 3片 3個体 27g の計 781g で 31.0%、貯蔵具が須恵器甕 1片 1個体 5g、同壺 1片 1個体 3g、土師器壺 4片 3個体 91g の計 99g 3.9%、煮炊具は土師器甕 123片 98個体 1,545g、同甕 2片 2個体 61g の計 1,606g 63.7% で、ミニチュア土器 3片 3個体 34g 1.3% がある。食膳具の杯は黒色土器 A が 81.9% を占め、C3 類を含むが、I1・I3 類が中心である。

須恵器杯はA・Gの識別しにくい破片で、須恵器蓋は蓋Aがある。口縁遺存5/8以上は黒色土器A杯(1057)と須恵器杯(1056)のみで、他は2/8以下である。図示したのは黒色土器A杯2個体186g(1057・1058)、須恵器杯1個体128g(1056)、同蓋1個体14g(1055)、ミニチュア土器1個体22g(1059)の合計350gで、床上～埋土出土古墳時代後期土器の重量比で13.9%にあたる。土師器甕は小片が多く図化率は低い。杯H・I3類を中心に須恵器蓋Aを含むことから、本跡の時期は古墳後・奈良6期と思われる。

宮沖SB27 (第144・145図 PL58)

本跡埋土上面はSB19に切られて土器出土量は多くはない。床上～埋土中から弥生時代中期土器12g、弥生時代後期～古墳時代前期土器1.761g、古墳時代後期土器18.450g、平安時代土器25g、ミニチュア土器6g、不明土器990gが出土した。ミニチュア土器は古墳時代前期の可能性もある。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が須恵器杯4片4個体73g、黒色土器A杯127片114個体2,068g、同高杯10片10個体685g、同盤7片6個体120g、土師器杯9片6個体77g、同鉢1片1個体747gの計3,770gで20.4%、貯蔵具は須恵器壺1片1個体2g、同甕6片6個体117g、土師器小型壺6片4個体118g、同壺8片7個体357gの計594g3.2%、煮炊具は土師器甕519片381個体14,086gで76.4%がある。口縁遺存5/8以上は黒色土器A杯3個体(1062・1064・1066)、同高杯1個体(1072)、土師器甕5個体(1074・1078・1080～1082)があり、カマド周辺で遺存良好な土器が出土した。図示したのは須恵器杯1個体19g(1060)、黒色土器A杯8個体1,290g(1061・1062・1064～1069)、同高杯1個体509g(1072)、土師器杯1個体23g(1071)、同鉢1個体747g(1083)、同壺1個体241g(1073)、同甕9個体7,737g(1074～1082)、ミニチュア土器1個体6g(1084)の合計10,572gで出土古墳時代後期土器の重量比57.3%にあたる。他にPit4から古墳時代後期黒色土器A杯1片1個体285gと土師器甕1片1個体22g、古墳時代前期土器1片10gが出土し、床下からは古墳時代後期須恵器甕1片1個体9g、黒色土器A杯35片30個体370g、同盤2片2個体56g、土師器杯3片2個体39g、同甕19片10個体358g、同小型壺1片1個体8g、同壺10片1個体300g、弥生時代後期～古墳時代前期土器925g、不明土器102gがある。Pit4の黒色土器A杯1個体285g(1063)、床下出土の黒色土器A杯1個体49g(1070)を図示した。本跡の杯類はC3類を中心にD・E・F類、甕A・B類があり、本跡の時期は古墳後・奈良2期と思われる。

宮沖SB28 (第146図 PL58)

周囲を重複住居跡に切れ、わずかな残存で出土土器も少ない。床上～埋土中より古墳時代前期土器184g、古墳時代後期土器2,533g、不明土器172gが出土した。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が黒色土器A杯3片3個体457g、土師器杯1片1個体12gの計469gで18.5%、貯蔵具が須恵器平瓶1片1個体227g、土師器壺1片1個体136gの計363gで14.3%、煮炊具が土師器甕29片7個体1,701gで67.2%である。口縁遺存5/8以上は黒色土器A杯2個体(1086・1087)、須恵器平瓶1個体(1090)で、他は1/8以下である。図示したのは黒色土器A杯2個体437g(1086・1087)、須恵器平瓶1個体227g(1090)、土師器甕2個体1,627g(1089・1091)の合計2,291gで、出土古墳時代後期土器の重量比90.5%にあたる。床下から古墳時代前期土器58g、古墳時代後期土器355gが出土し、後者には土師器杯2片72g、黒色土器A杯2片67g、土師器壺2片38g、同甕12片178gがある。土師器杯1個体72g(1088)、黒色土器A杯1個体67g(1085)の39.2%を図示した。杯類は混入と思われるC3類もあるが、C5・I3類があり、甕はケズリ調整のD類である。本跡の時期は古墳後・奈良5期と思われる。

宮沖 SB29 (第146図)

複数住居跡と重複して混入土器も多い。弥生時代後期～古墳時代前期土器 732g、古墳時代後期土器 8,298g、平安時代土器 19g、ミニチュア土器 5g、不明土器 1,029gがある。平安時代土器は重複するSB04からの混入と思われる。古墳時代後期土器の内訳は、食膳具が須恵器高杯 4片 3個体 113g、同杯 AG が 5片 5個体 149g、同蓋 3片 3個体 26g、黒色土器 A 杯 112片 111個体 800g、同高杯 10片 8個体 171g、同盤 12片 12個体 221g、土師器杯 1片 1個体 22g、同盤 2片 2個体 53gの計 1,555gで 18.7%、貯蔵具は須恵器甕 2片 1個体 10g、同甕 2片 2個体 33g、土師器小型壺 2片 2個体 23g、同壺 20片 8個体 505gの計 571gで 6.9%、煮炊具は土師器甕 413片 328個体 6,172gの 74.4%である。杯・盤は合計 1,245gあり、須恵器 12%、黒色土器 A 82%、土師器 6%で、土師器には黒色土器 A の可能性があるものも含む。口縁遺存 2/8 以下しかない。図示した土器は須恵器高杯 2個体 102g (1042・1094)、同杯 G が 1個体 79g (1092)、土師器杯 1個体 22g (1093)、土師器甕 1個体 361g (1095)の合計重量 564g で古墳時代後期土器の重量比 6.8%に過ぎない。破片が多く図示し得なかった土師器甕類が多い。なお、1042 は宮沖 SB19 出土破片と接合した。杯 I3・G 類が認められ、本跡の時期は古墳後・奈良 6期と思われる。古墳時代前期土器 2個体 (469・472) は第4図に掲載した。

宮沖 SB30

床上～埋土中から弥生時代後期～古墳時代前期土器 378g、古墳時代後期土器 667g、不明土器 115g が出土した。古墳時代後期土器の内訳は、黒色土器 A 杯 8片 8個体 57g、土師器高杯 3片 3個体 60g、須恵器甕 1片 1個体 20g、土師器甕 37片 26個体 530gがある。出土量はわずかで口縁遺存も 2/8 以下しかなく図示し得た土器はない。他に床下から古墳時代前期土器 60g、古墳時代後期土器 218g が出土した。杯は C3 類があるが、小片で伴うと断定できない。本跡の時期は古墳後・奈良 2期以後としかわからない。

川久保 SQ01

古墳時代後期土器 1,637g、平安時代土器 5g、不明土器 157g が出土した。古墳時代後期土器の内訳は黒色土器 A 杯 23片 13個体 230g、土師器小型壺 15片 3個体 187g、同壺 6片 3個体 195g、同甕 75片 9個体 1,019g、同甕 1片 1個体 6gで、口縁遺存 2/8 以下しかなく図示し得なかった。同一個体と思われる甕 2個体分の破片 (21片 292g と 25片 358g) もあるが、接合せず整形にはならなかった。食膳具 230g14.1%、貯蔵具 382g23.3%、煮炊具 1,025g62.6%である。黒色土器 A 杯は C 類としかわからない破片が多いが、一部 C3 類と思われる破片がある。仔細な時期不明だが、川久保 SQ02・03 と類似時期と思われる。

川久保 SQ02

古墳時代後期土器 1,848g、不明土器 87g が出土した。古墳時代後期土器は黒色土器 A 杯 10片 8個体 103g、土師器小型壺 4片 3個体 138g、同壺 2片 1個体 27g、同甕 76片 16個体 1,580gで、口縁遺存 2/8 以下しかなく図示し得なかった。食膳具 103g5.6%、貯蔵具 165g8.9%、煮炊具 1,580g85.5%である。出土した黒色土器 A 杯は C 類とのみ識別し得たが、本跡は川久保 SQ01・03 と類似時期と思われる。

川久保 SQ03

弥生時代中期土器 136g、古墳時代前期土器 1,381g、古墳時代後期土器 3,780g、不明土器 229g が出土した。古墳時代後期土器の内訳は黒色土器 A 杯 47片 36個体 607g、同盤 2片 2個体 42g、土師器高杯 1片 1個体 8g、同壺 22片 19個体 567g、同小型壺 12片 6個体 231g、同甕 130片 92個体 2,179g、同甕 5片 2個体 146g である。口縁遺存 2/8 以下しかなく、図示し得た土器はない。同一個体と思われ

る甕 40片 916gもあるが、他は同一個体とみられる破片は2・3片ほどである。食膳具 657g17.4%、貯蔵具 798g21.1%、煮炊具 2,325g61.5%である。古墳時代前期土器は器台 1片 1個体 45g、鉢 3片 3個体 284g、壺 22片 8個体 230g、小型壺 3片 2個体 20g、甕 23片 23個体 649g、小型丸底? 2片 2個体 153gがあり、口縁遺存 5/8以上は古墳時代前期甕 1個体 (458)、同小型丸底? 1個体 (445)、同鉢 1個体 (446) があり、古墳時代後期土器は 3/8以下しかない。古墳時代前期土器は下層V層の土器と一緒に取り上げた可能性がある。黒色土器 A 杯は C3・4 類があり、本跡時期は古墳後・奈良 3期と思われる。

川久保 SQ04 (第130 図)

弥生時代中期土器 16g、古墳時代前期土器 188g、古墳時代後期土器 8,664g、平安時代土器 71g、不明土器 1,088g、土鍾 35g が出土し、混入土器も多い。古墳時代後期土器の内訳は須恵器平瓶 1片 1個体 29g、黒色土器 A 杯 81片 51個体 1,009g、同壺 10片 10個体 110g、土師器甕 1片 1個体 267g、同高杯 1片 1個体 9g、同壺 41片 10個体 1,134g、同小型壺 12片 8個体 133g、同甕 259片 82個体 5,920g、同瓶 1片 1個体 53g で、口縁遺存度 5/8以上は黒色土器 A 杯 1個体 (738)、土師器甕 1個体 (742) があるが、他は 3/8以下である。食膳具 1,128g13.0%、貯蔵具 1,563g18.0%、煮炊具 5,973g69.0% である。図示したのは黒色土器 A 杯 3個体 403g (736～738)、同壺 2個体 28g (739・740)、土師器甕 1個体 290g(742)、同壺 1個体 267g(741)の合計 3,599g で 41.5%にあたる。これ以外に土鍾 1点(1135)を図示した。黒色土器 A は C3・4 類があり、本跡時期は古墳後・奈良 3期と思われる。

川久保 SQ05

弥生時代中期土器 61g、古墳時代前期土器 89g、古墳時代後期土器 1,441g、平安時代土器 64g、中世焼物 31g (1502)、不明土器 38g が出土した。出土量の多い古墳時代後期土器は黒色土器 A 杯 7片 7個体 54g、同壺 3片 3個体 49g、土師器壺 18片 6個体 415g、同小型壺 10片 7個体 136g、同甕 39片 29個体 787g がある。食膳具 103g7.2%、貯蔵具 551g38.2%、煮炊具 787g54.6% である。口縁遺存 2/8以下の小片しかなく、図示し得た古墳時代後期土器はない。黒色土器 A 杯は C 類としかわからない。

川久保 SQ23 (第131 図)

古墳時代後期土器 2,071g、不明土器 106g が出土した。古墳時代後期土器の内訳は須恵器壺 1片 1個体 11g、黒色土器 A 杯 3片 1個体 41g、土師器壺 3片 3個体 182g、同小型壺 3片 3個体 47g、同甕 65片 6個体 1,566g、黒色土器 A ? 甕 2片 1個体 202g、土師器瓶 1片 1個体 22g がある。口縁遺存 5/8以上は土師器甕 1個体 (744) のみあり、3/8 遺存が黒色土器 A ? 甕 1個体 (743) があるが、ほぼ 2/8以下の遺存しかない。食膳具 41g2.0%、貯蔵具 240g11.6%、煮炊具 1,790g86.4% で、甕が最も多く他器種は小片である。図示したのは土師器甕 2個体 1,102g (743・744) で古墳時代後期土器の重量比 53.2%にあたる。古墳後・奈良 1期と思われる。

川久保 SQ24

弥生時代中期土器 85g、古墳時代前期土器 32g、古墳時代後期土器 319g、不明土器 56g が出土した。古墳時代後期土器の内訳は黒色土器 A 杯 8片 3個体 56g、同壺 4片 1個体 16g、土師器壺 6片 4個体 123g、同甕 14片 14個体 124g である。口縁遺存 1/8以下の小片のみしかない。時期の詳細は不明である。

川久保 SQ25 (第131 図)

古墳時代後期土器 7,318g、不明土器 112g が出土した。古墳時代後期土器では黒色土器 A 壺 17片 7個体 272g、土師器壺 31片 6個体 1,203g、同小型壺 11片 6個体 195g、同甕 191片 37個体 5,648g で、口縁遺存 4/8 は土師器甕 2個体 (747・748)、同壺 1個体 (746)、3/8 遺存が黒色土器 A 壺 1個体 (745)

あるが、他は2/8以下の遺存である。図示したのは黒色土器A盃1個体174g(745)、土師器壺1個体859g(746)、同甕4個体3,054g(747～750)の合計4,087gで古墳時代後期土器の重量比55.8%にあたる。食膳具272g3.7%、貯蔵具1,398g19.1%、煮炊具5,648g77.2%である。古墳後・奈良1期と思われる。

川久保SQ28 (第131・132図)

古墳時代前期土器248g、古墳時代後期土器17,599g、不明土器521g、土錘29gが出土した。古墳時代後期土器の内訳は須恵器甕3片1個体419g、黒色土器A杯72片53個体1,691g、同盃1片1個体130g、土師器高杯5片5個体264g、同壺104片34個体4,863g、同小型壺6片5個体91g、同甕261片131個体9,433g、同鉢1片1個体190g、同甕6片1個体354g、ミニチュア土器5片2個体122g、土製品1個体42gがある。口縁遺存5/8以上は土師器甕2個体(762・764)、ミニチュア土器1個体(760)、4/8は黒色土器A杯4個体(752・756～758)、図示していない土師器高杯1個体、同鉢1個体(768)がある。図示したのは黒色土器A杯7個体706g(751～753・755～758)、同盃1個体130g(754)、土師器甕6個体3,696g(761～766)、同鉢1個体190g(768)、同高杯1個体126g(759)、同甕1個体354g(767)、ミニチュア土器1個体96g(760)の合計5,298gで古墳時代後期土器重量比30.1%にあたる。用途別組成では食膳具2,275g12.9%、貯蔵具5,373g30.5%、煮炊具9,787g55.6%、その他164g0.9%である。杯C3類が認められ、土器は古墳後・奈良2期のものである。

川久保SQ29 (第132図)

古墳時代後期土器2,212g、不明土器280gがある。内訳は黒色土器A杯50片18個体400g、土師器高杯5片4個体50g、同小型壺18片5個体280g、同壺31片2個体480g、同甕71片19個体820g、ミニチュア土器9片5個体182gがある。口縁遺存5/8以上はなく、最大で土師器甕に口縁遺存3/8が1個体のみである。遺存度が低い小片が多く、破片数に比して重量は少ない。図示したのは土師器小型壺1個体60g(769)、同壺1個体380g(770)、ミニチュア土器5個体182g(771～775)の合計622gで出土土器の28.1%にあたる。食膳具450g20.3%、貯蔵具760g34.4%、煮炊具820g37.1%、その他182g8.2%である。小片が多いが、本跡の時期は古墳後・奈良1期と思われる。

川久保SQ30 (第132図)

古墳時代後期土器680g、不明土器120gがあり、古墳時代後期土器は黒色土器A杯1片1個体20g、土師器甕5片5個体95g、同甕1片1個体40g、同壺1片1個体525gがある。口縁遺存1/8しかなく、図示したのは土師器壺1個体525g(776)のみである。本跡の時期は古墳後・奈良1期と思われる。

エ 古墳時代後期～奈良時代の土器の時期区分と特徴

ここでは遺構の時期を捉えるために堅穴住居跡出土土器を中心に土器の時期区分を検討する。北信の古墳時代中・後期土器については、笹澤 浩(笹澤1988)、廣田和穂(廣田1999)、花岡 弘・西山克己(花岡・西山1995)、鳥羽英継(鳥羽1998)氏等の検討がある。それらを参照すると、概ね古墳時代中期には柱状脚高杯に加えて口縁端部を外側に短く折る杯類が広域に認められ、そこに黒色土器や須恵器杯・蓋類や椀椀杯の出現が加わる。そして、古墳時代後期は高杯の減少と共に、地域色の強い杯類が各地に生まれ、北信では丸い体部から屈曲した口縁が直線的に開く器形の杯(本報告のC類)を基軸に展開し、須恵器模倣の杯類(本報告のE・F類)が客体的に存在すると捉えられている。杯C類は口縁部の伸延と共に体部高が減少し、やがて内面の底部脇に沈線状の窪みを残すのみとなる逆台形への器形へ型式変化する。その最終形態の頃に半球形の杯(本報告のI類)が新たに出現するとされる。その後は須恵器杯Gと同蓋Aが

加わり、須恵器杯A・Bの出現と須恵器の比率が増加していくというのが一般的理解と思われる。ここでも変化が捉えやすい杯類を取り上げ、上記の変遷を参考に杯C類主体から杯I類主体へ、さらに須恵器杯G、A・B類の出現と増加を目安に時期区分を検討する。

古墳時代中期以来の口縁端部を短く折る杯C1類がまとまって出土した川久保SB15が本遺跡の古墳時代後期の遺構で最も古いと考えられる。川久保SB15では杯C2類も出土したが、杯C2類は形態的に似る杯C1類から生まれ、口縁がやや長い特徴から杯C3類に続くと思われる。須恵器模倣等の影響により杯C1類から別型式として生まれたものだろうか。川久保SB33から混入品ながら柱状脚高杯が出土し、川久保SB15で高杯出土が少ないことから1期は細分し得る可能性がある。

杯C類は古墳時代後期住居跡で主体的にみられるが、口縁が長く伸長し、相対的に体部高が低くなって、最終的に内面の体・底部境にわずかな段を残す逆台形への型式変化（廣田1999、花岡・西山1995、鳥羽1998）と捉えられている。本遺跡でもその変遷を想定して杯C2～C5類に分けたが、比較的スムーズに型式変化が追える。遺構重複関係からは杯C3類出土の宮沖SB27を、杯C5類出土の宮沖SB19が切り、杯C3類出土の宮沖SB12を杯C5・I類を出土した宮沖SB16が切る例から、杯C3類より杯C5類が後出すると捉えられ、概ね杯C2類から杯C5類への変遷と推測される。杯C3類は宮沖SB09・27などで多く出土したが、杯C4類はわずかながら川久保SB50・54、内底脇にわずかな段を残す杯C5類は川久保SB59・60などから出土した。なお、須恵器杯H類を模倣した杯E・F類について、廣田氏は榎田Ⅲ期（6世紀中葉～後葉）に消滅すると捉え、鳥羽氏も屋代8期（6世紀後葉～7世紀初頭）には客体と捉える（廣田1999、鳥羽1989）。本遺跡でも杯C4類を出土したSB50では確認されず、ほぼ同じ状況とみられる。

杯C類に後続して主体となる杯I類だが、川久保SB59・60や宮沖SB16などで杯C5類が少量伴うと思われる例がある。杯C5類と併存する可能性から、杯I類は器形の類似と出現時期から7世紀の金属器志向の影響下に出現したと推測される。しかし、周辺地域の土器様相と十分な比較はできず、出現背景や系譜の詳細は検討できなかった。鳥羽氏はTK217古段階頃までを含む屋代古墳8期で口縁が直線的でなく内湾する内面に段を残す杯（本遺跡の杯C5類）を捉えている（鳥羽1998）が、この杯は杯I類の影響を受けた杯C5類とみられ、ここでも併存する可能性は支持される。

それ以後の変遷は須恵器の杯・蓋の増加と型式変化を目安に捉えられ、須恵器杯Hと黒色土器A杯I類が主体となる川久保SB51、須恵器杯Gや蓋Aを混じる宮沖SB14、須恵器杯A・Bと蓋Bが主体で黒色土器A杯類が少ない宮沖SB10へ推移すると思われる。杯I類の形態変化について西山・花岡氏は次第に浅いものが増えたと指摘しており（花岡・西山1995）、本遺跡でも宮沖SB14の上層・下層出土土器から概ね同様の傾向は見取れる。ただし、深いものと浅いものが出土した例もあり、厳密なものではない。また、宮沖SB14から須恵器杯Gに似た黒色土器A杯I3類、須恵器盤を模倣したと思われる皿形の黒色土器A杯I類など、須恵器を模倣したと思われる黒色土器A杯類が認められる。

以上の杯の変遷の見直しから以下のように時期区分する。

古墳後・奈良1期 黒色土器A杯C1（・C2）類を中心とする時期（川久保SB15）

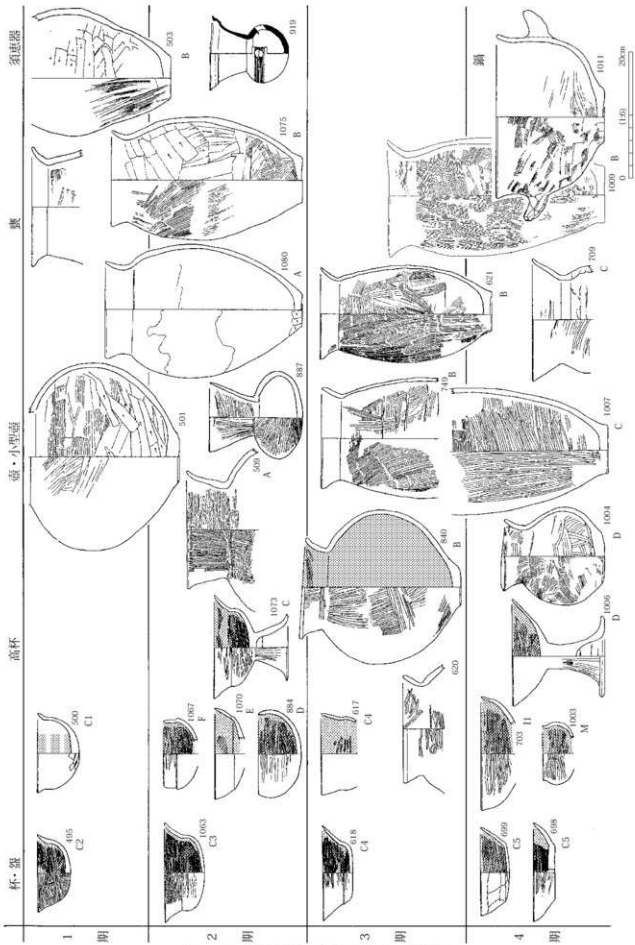
古墳後・奈良2期 黒色土器A杯C3類に須恵器模倣杯E・F類とD類が加わる時期（宮沖SB09・27）

古墳後・奈良3期 黒色土器A杯C4類を中心とする時期（川久保SB50）

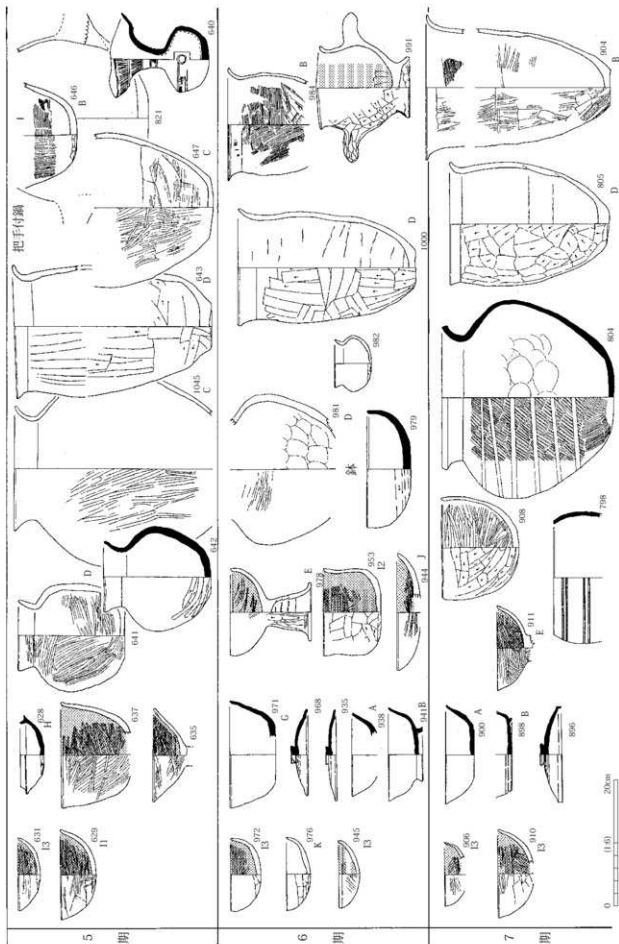
古墳後・奈良4期 黒色土器A杯C5・I類が伴う時期（川久保SB59・60）

古墳後・奈良5期 黒色土器A杯I類を中心とする時期（川久保SB51、宮沖SB02・16）

古墳後・奈良6期 黒色土器A杯I類と、須恵器杯G類・蓋A類・わずかな須恵器杯Bを伴う時期（宮沖SB14）



第116図 古墳時代後期～奈良時代土器の時期区分1



第117図 古墳時代後期～奈良時代土器の時期区分2

古墳後・奈良7期 少量の杯I類と須恵器杯A・B類が主体となる時期（宮沖SB10）

上記の古墳後・奈良1期はシナノ周辺にも共通する端部を短く折った杯C1類を中心とする時期、同2・3期はシナノ特有の杯C類が展開した時期、同4・5期が新たな丸底杯I類が普及して主流となる時期、同6・7期が須恵器普及と共にシナノ全域が類似する土器様相の時期と捉えられる。地域的土器様相が強い2・3期の前後にあたる、広域に共通する土器様相の1-2と3-4期境が画期とみられようか。

上記の時期区分に従って土師器叢をみると、古墳後・奈良1～3期はハケ調整の叢A類とナデ調整叢B類、4期に叢A・B類にミガキ調整叢C類が加わり、同5期にケズリ調整叢D類主体となり、以後は叢D類主体で7期にハケ調整叢A類が再び少量認められる変化となる。鳥羽氏によると屋代遺跡ではミガキ調整叢が、屋代古墳8期（6世紀後葉～7世紀初頭）から確認されるという（鳥羽1998）。本遺跡では杯I類の出現、把手付鍋の出現などほぼ同じ頃にあたる4期に認められる。また、高杯は1期では明確な共伴例はないが、柱状脚高杯A・B類が存在する段階があると思われ、2期では高杯C類、4・5期は浅く口径が広く外反する口縁の高杯E類、6・7期には内湾する高杯F類が確認できる。このような他器種との変遷と併せると、上記の時期区分は概ね変化の方向として妥当と思われる。

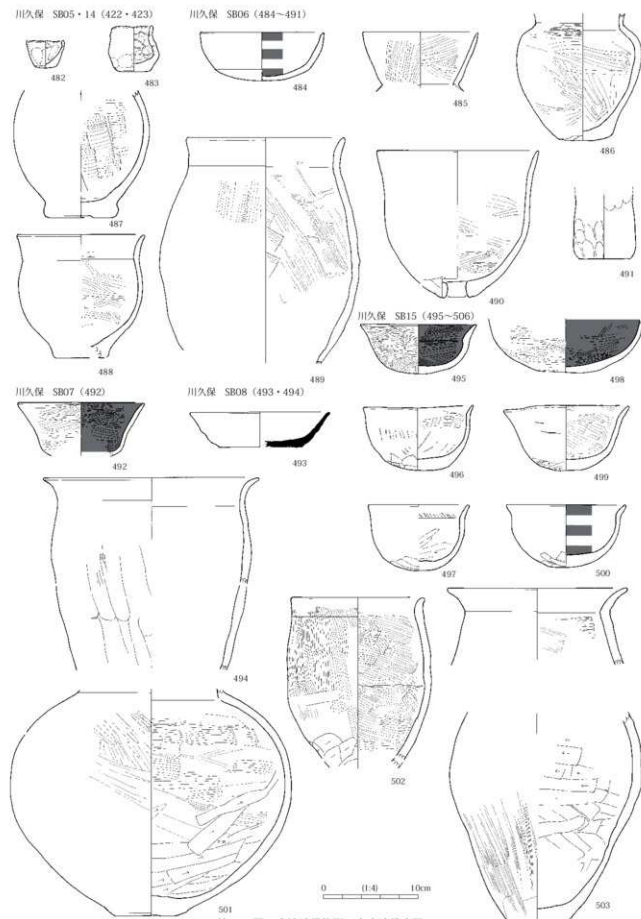
ただし、古墳後・奈良1期はわずかな住居跡例からの設定なので資料的限界があり、2期との連続関係は杯C2・C3類の型式的類似性から推測したが、細分される可能性もあって、1・2期の時間幅は不明である。2期と3期は同系の杯C3・4類の型式変化から区分したが、これも後述するように出土須恵器を陶邑の須恵器編年（田辺1981、中村1993）と対比すると長い時間幅を含む可能性がある。一方で、4～6期は杯I類の型式変化が緩やかなことからすれば、C類で細分した2～3期より時期幅が短い可能性がある。このように上記の時期区分の時期幅は均等ではない可能性がある。

従来編年との対比だが、笹澤氏（笹澤1988）のIV期古段階は本遺跡の須恵器模倣杯の存在は不明瞭ながら口縁端部を折る杯の存在から本遺跡1期、IV期中段階は本遺跡杯C3・4類を含むことから本遺跡2・3期、IV期新段階が杯C5類と杯I類に類する杯があるので本遺跡4・5期、かえりのある須恵器蓋Aと同杯Gの出現からV期古段階が6期に対応しよう。廣田氏（廣田1999）との対比では杯Cの形態的な対比から榎田II期が本遺跡1期、榎田III期が本遺跡2期、榎田IV期が本遺跡3期、榎田遺跡V期が本遺跡4～6期に対応しよう。また、鳥羽氏の編年（鳥羽1998）とは、屋代古墳（5・6期）が本遺跡1期、屋代古墳7期は本遺跡の2・3期を含むとみられ、丸味を帯びる杯C5類から屋代古墳8期が本遺跡の4期、須恵器杯G・Bを伴わない段階とした屋代古墳9期（古代0期）は杯I類主体ながら須恵器杯G・Bが認められない5期、かえりのある須恵器蓋Aと杯G・定形以前と思われる杯Bの出現からは屋代古代1期が6期、杯A・B増加から屋代古代2期が本遺跡7期に対応しよう。

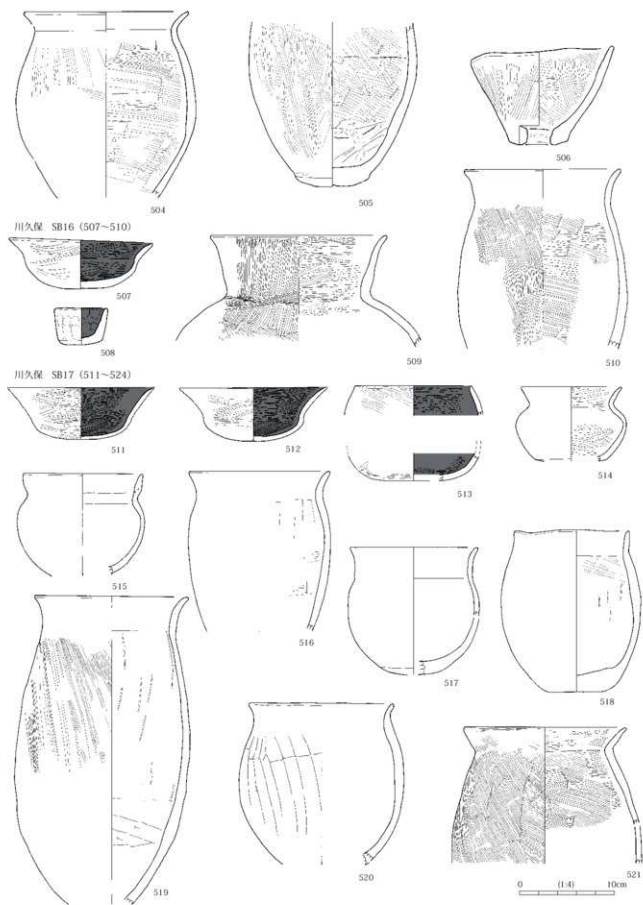
以上の各氏の編年案と共伴する陶邑の須恵器型式を併記すると、第25表となる。本遺跡1期に対比されると思われるのが笹澤氏IV期古段階・廣田氏榎田II期・鳥羽氏古墳6期で、伴う須恵器は陶邑TK208～TK47、本遺跡の2期は笹澤氏IV期中段階・廣田氏III期・鳥羽氏古墳7期でMT15～TK10、本遺跡3

第25表 北信地域の古墳時代後期土器編年対照表

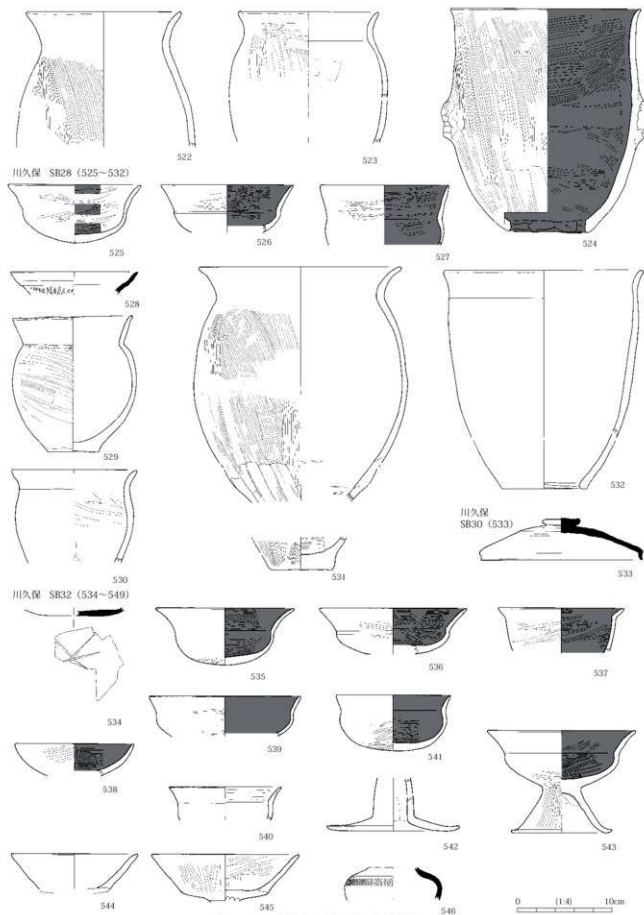
川久保宮沖遺跡	笹澤1988	花岡・西山1995	鳥羽1998	廣田1999	陶邑
1期	川久保 SB15	IV期古段階	善光寺平後期1期	屋代古墳6期	榎田II期 TK208～TK47
2期	宮沖 SB09・27	IV期中段階	善光寺平後期2期	屋代古墳7期	榎田III期 MT15～TK10
3期	川久保 SB50	IV期新段階	善光寺平後期3期	屋代古墳8期	榎田IV期 TK217
4期	川久保 SB59・60	V期古段階	善光寺平後期4期	屋代古墳9期	榎田V期 TK217
5期	川久保 SB51、宮沖 SB02・16	V期中段階	善光寺平後期5期	屋代古代1期	
6期	宮沖 SB14	V期新段階	善光寺平後期6期	屋代古代2期	
7期	宮沖 SB10	古代I期古段階			



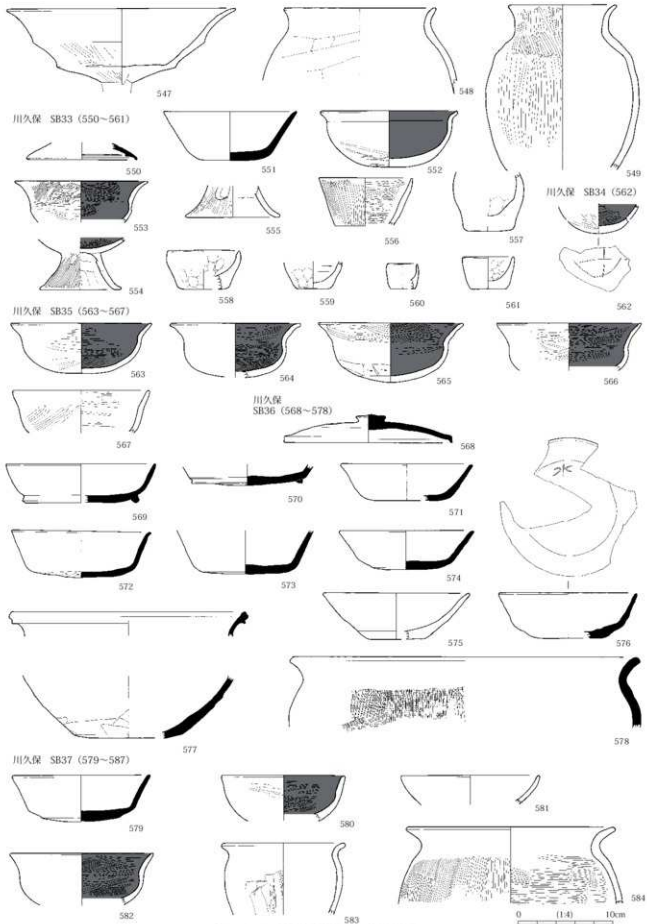
第118図 古墳時代後期～奈良時代土器1



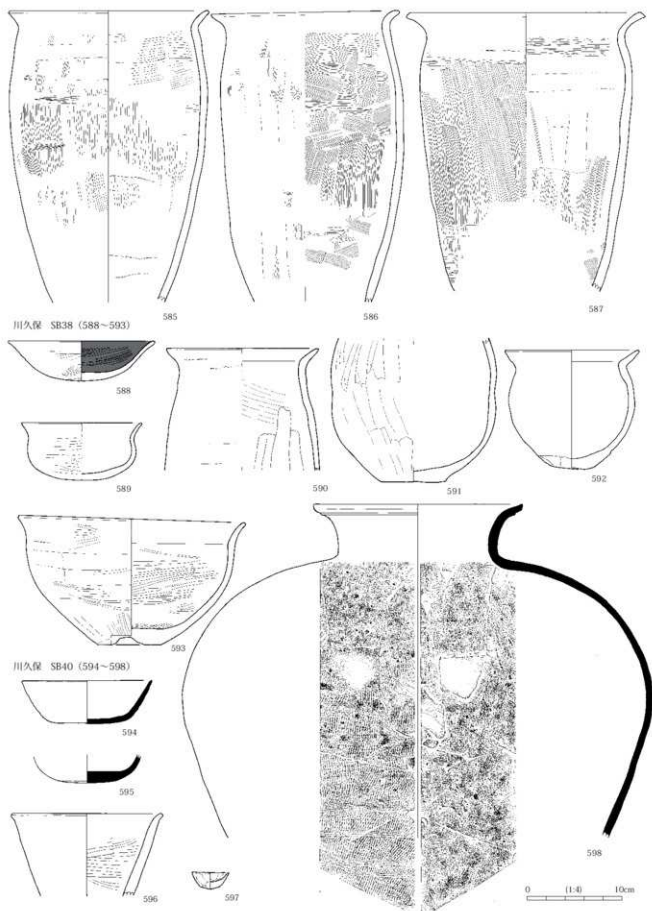
第119図 古墳時代後期～奈良時代土器2



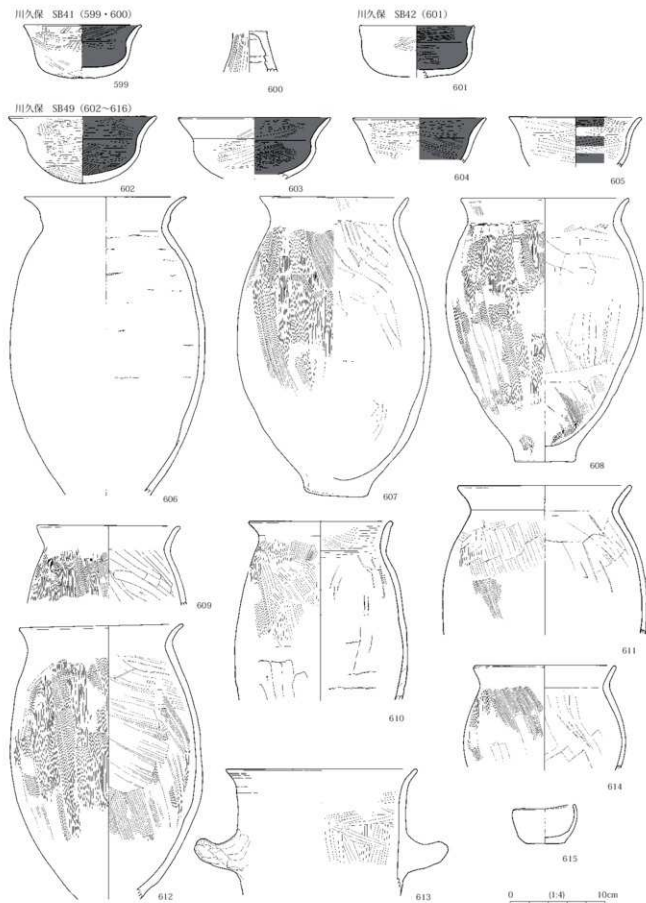
第120図 古墳時代後期～奈良時代土器3



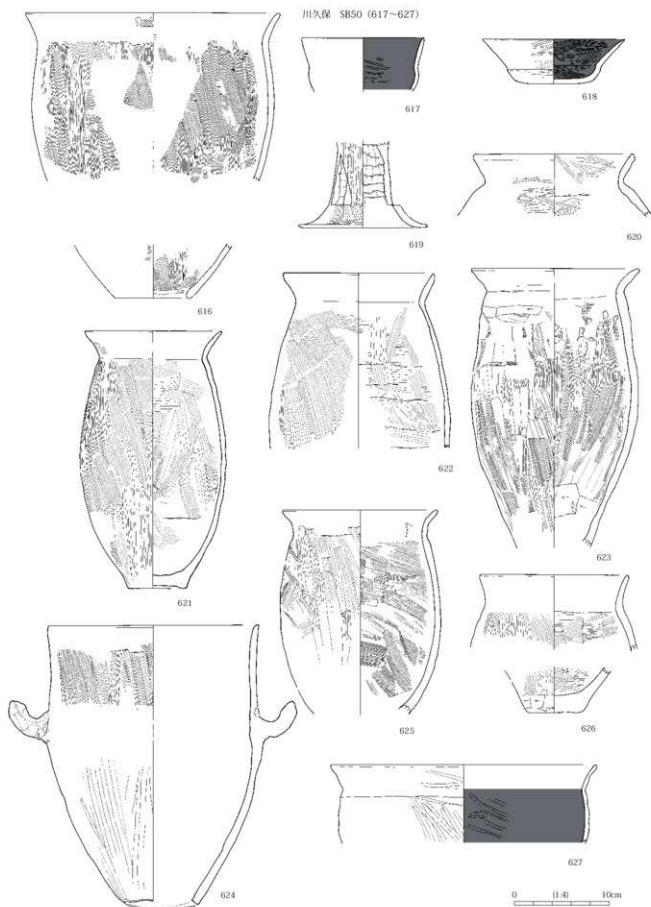
第121図 古墳時代後期～奈良時代土器4



第122図 古墳時代後期～奈良時代土器5

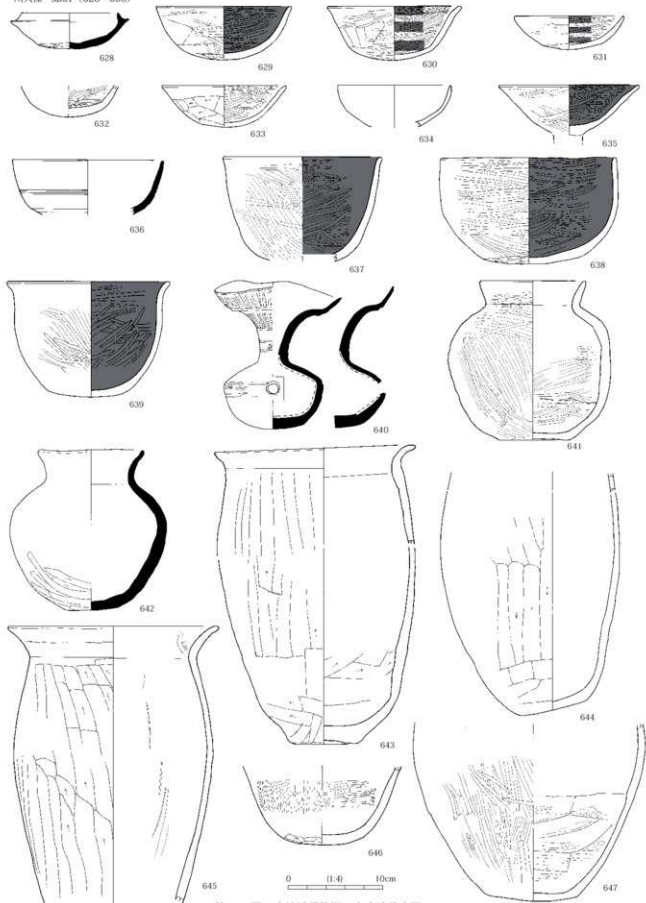


第123図 古墳時代後期～奈良時代土器6

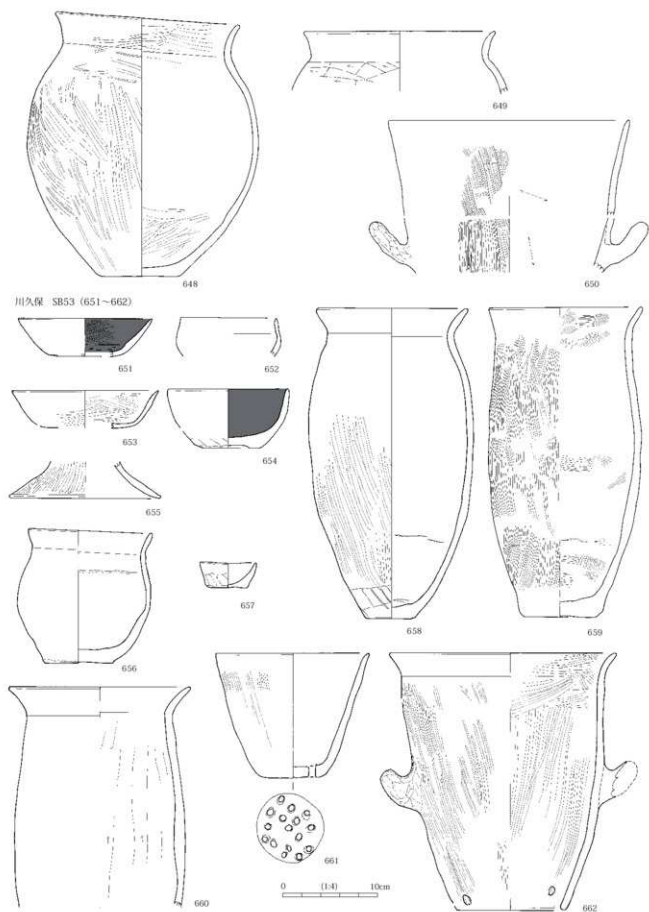


第124図 古墳時代後期～奈良時代土器7

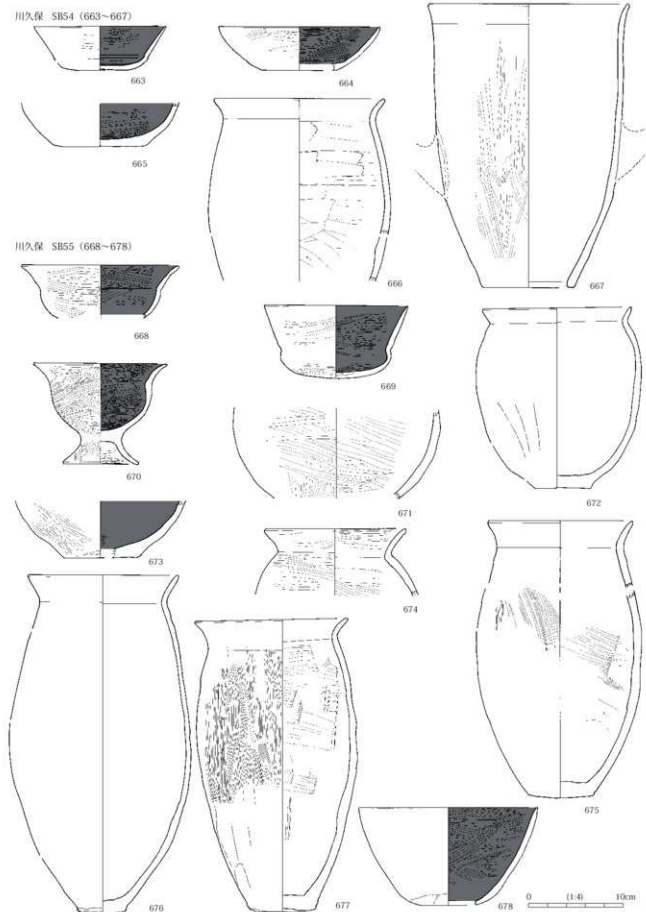
川久保 SB51 (628～650)



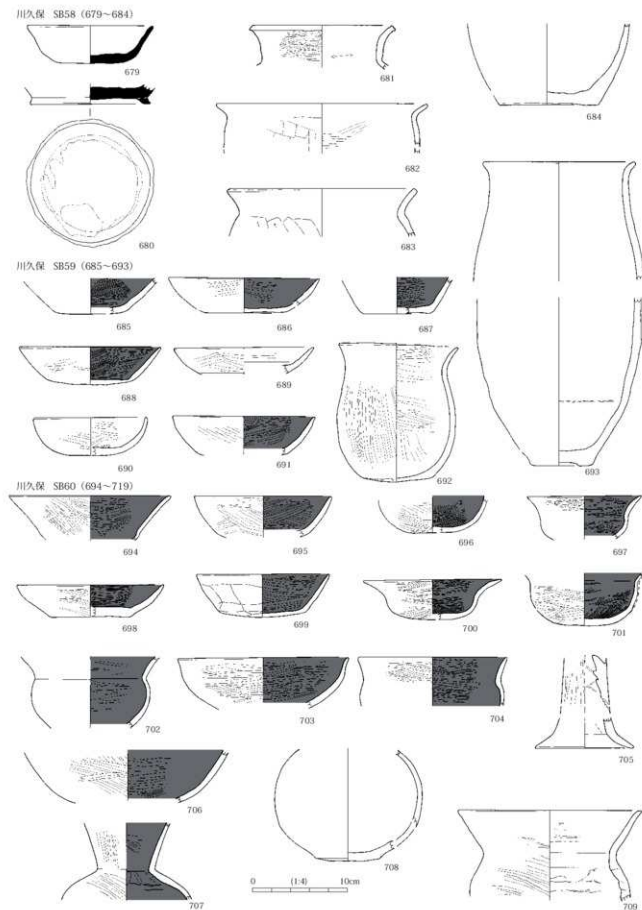
第125図 古墳時代後期～奈良時代土器8



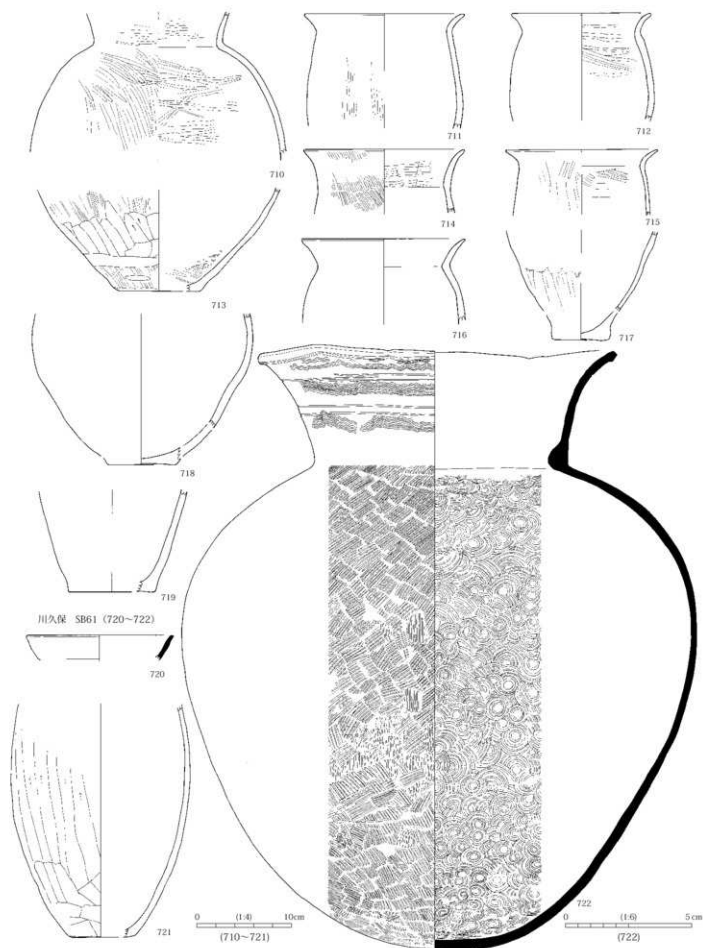
第126図 古墳時代後期～奈良時代土器9



第127図 古墳時代後期～奈良時代土器 10

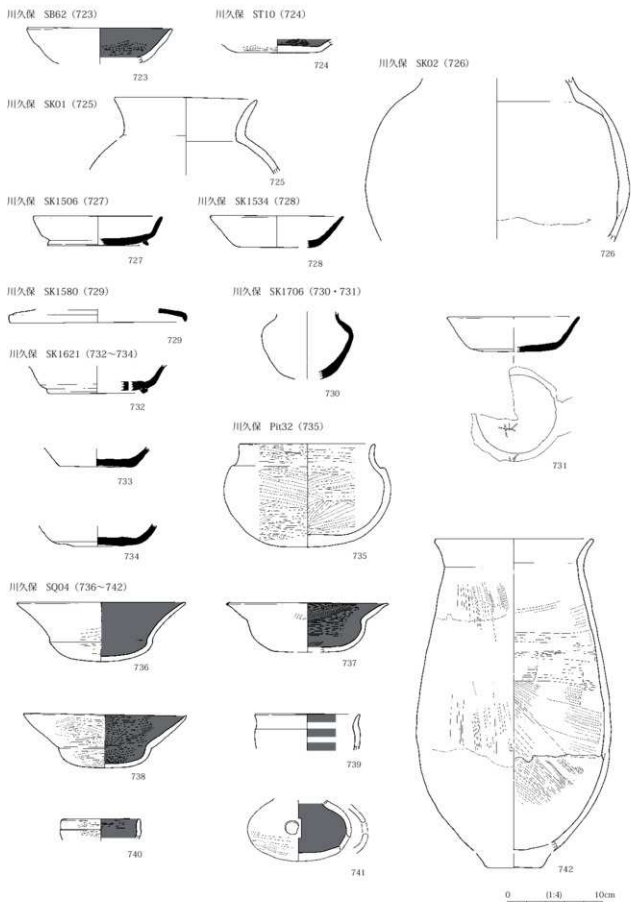


第128図 古墳時代後期～奈良時代土器 11



第129図 古墳時代後期～奈良時代土器 12

第3章 検出された遺構と遺物

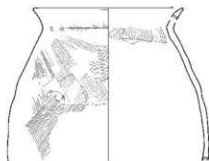


第130図 古墳時代後期～奈良時代土器 13

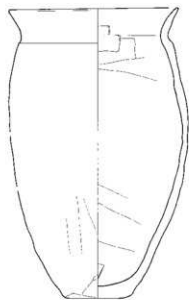
川久保 SQ23 (743・744)



743



744

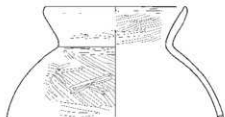


747

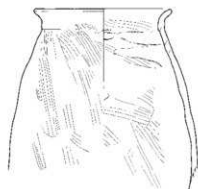
川久保 SQ25 (745～750)



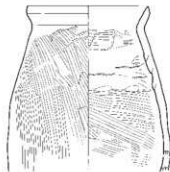
745



746



748

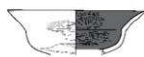


749



750

川久保 SQ28 (751～768)



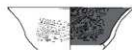
751



752



753



755



756



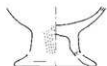
757



754



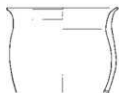
758



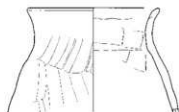
759



760



761



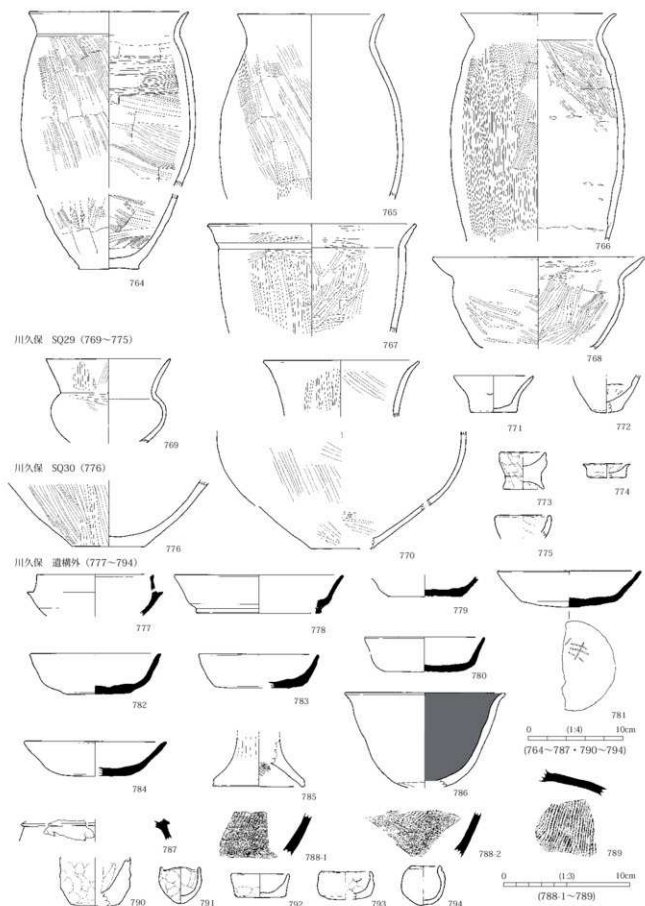
762



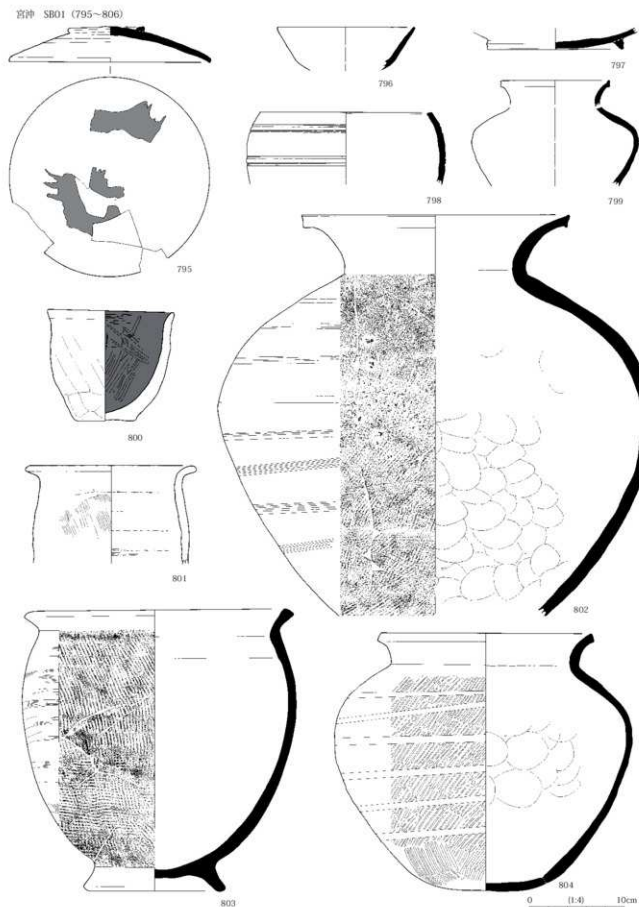
763

0 (1:4) 10cm

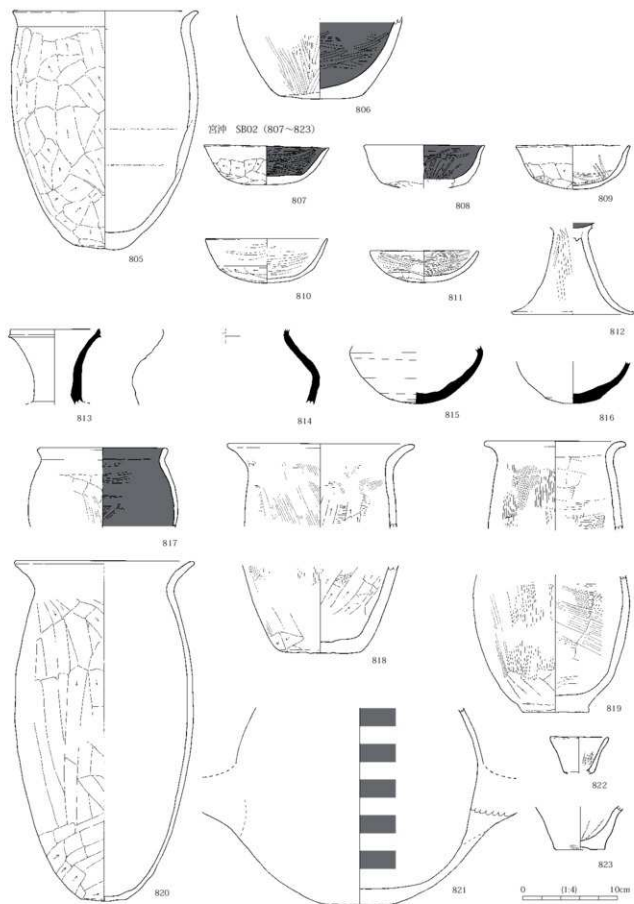
第131図 古墳時代後期～奈良時代土器 14



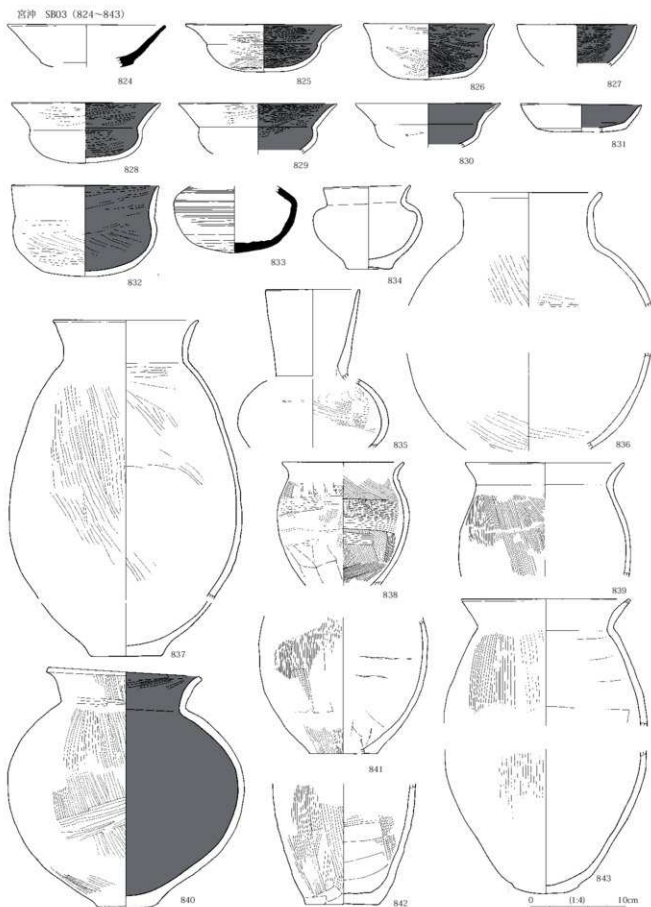
第132図 古墳時代後期~奈良時代土器15



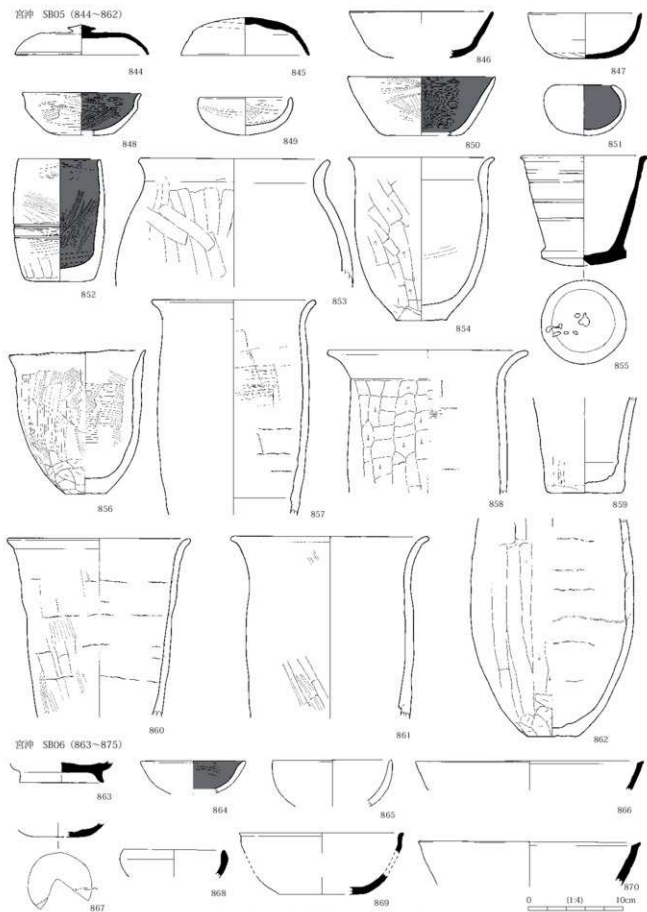
第133図 古墳時代後期～奈良時代土器 16



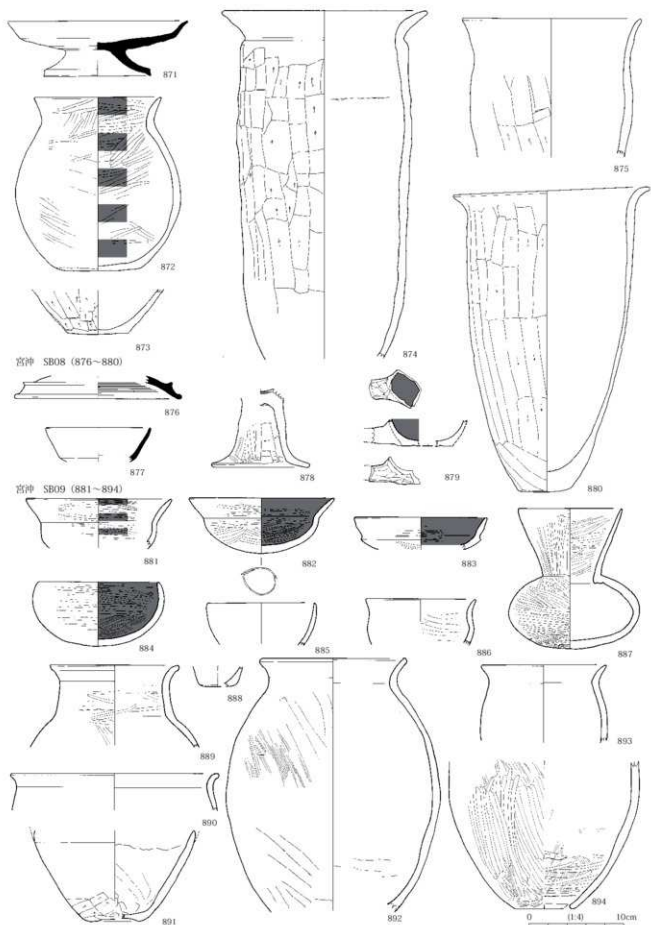
第134図 古墳時代後期～奈良時代土器 17



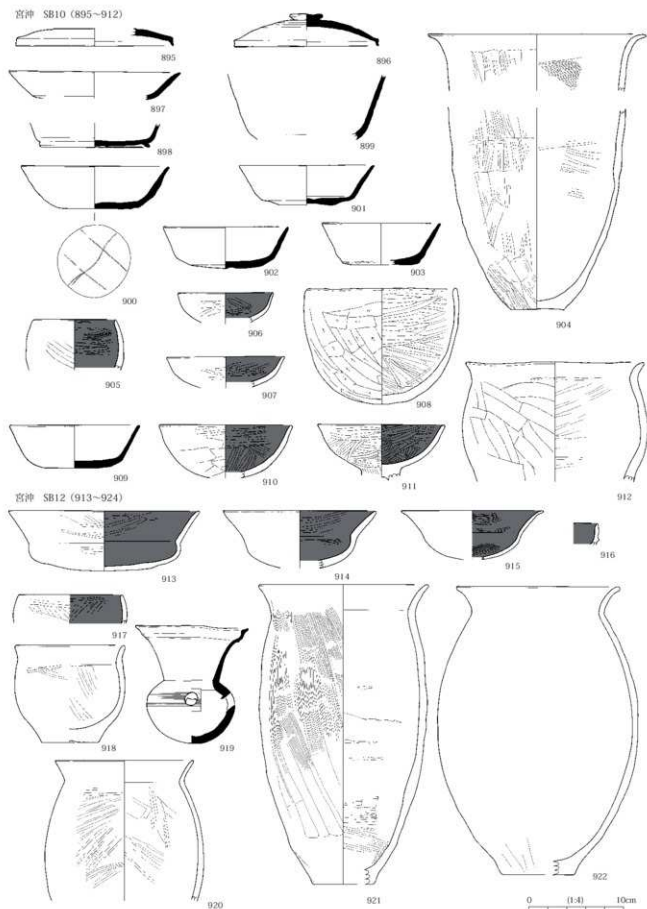
第135図 古墳時代後期～奈良時代土器 18



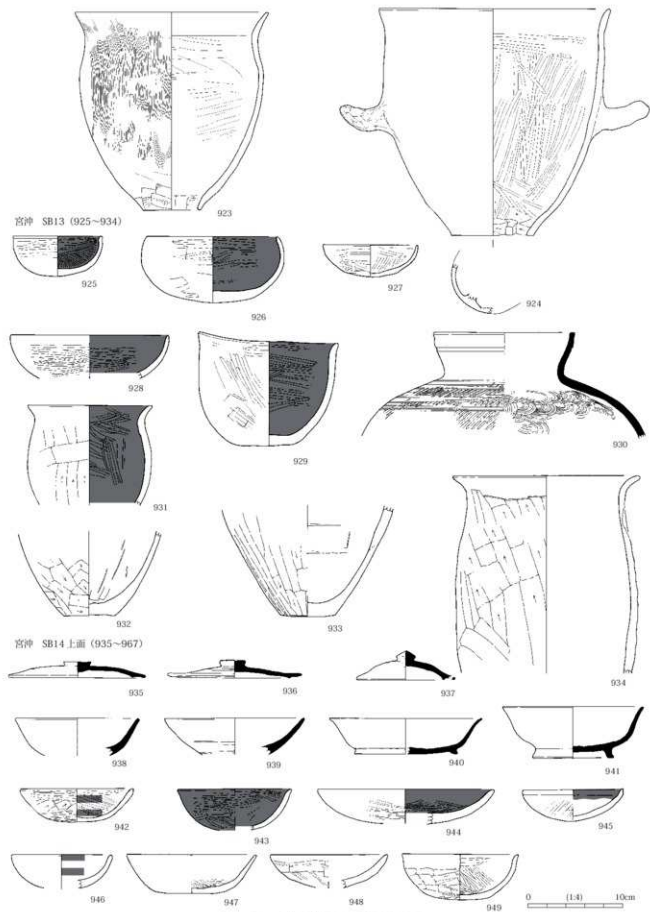
第136図 古墳時代後期～奈良時代土器19



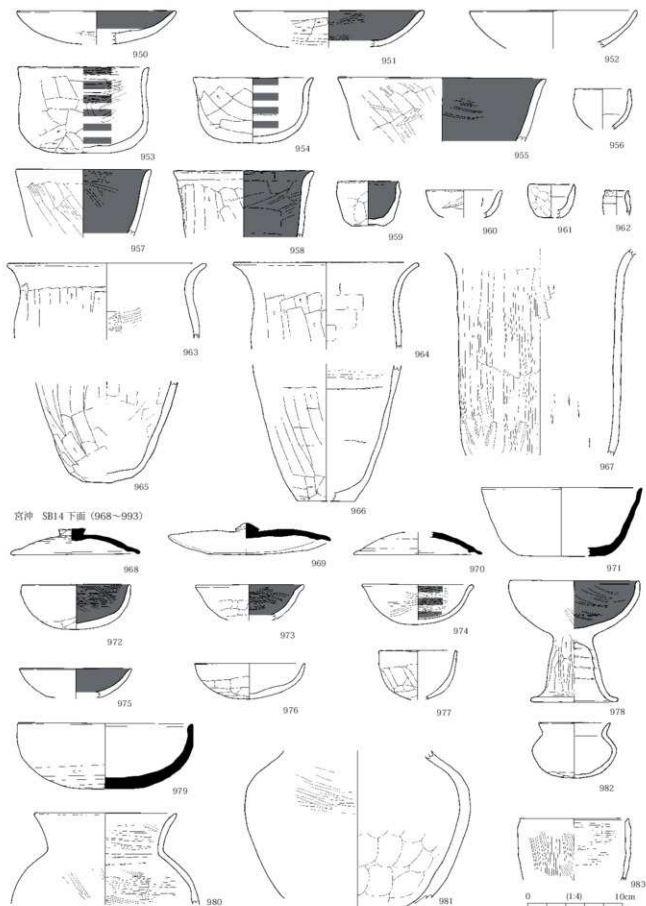
第137図 古墳時代後期～奈良時代土器 20



第138図 古墳時代後期～奈良時代土器 21

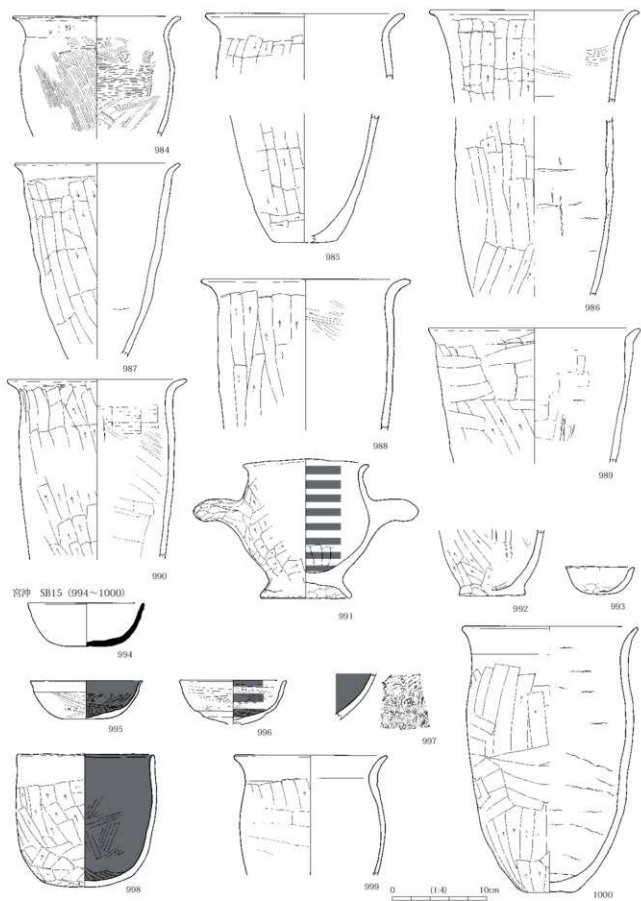


第139図 古墳時代後期～奈良時代土器 22

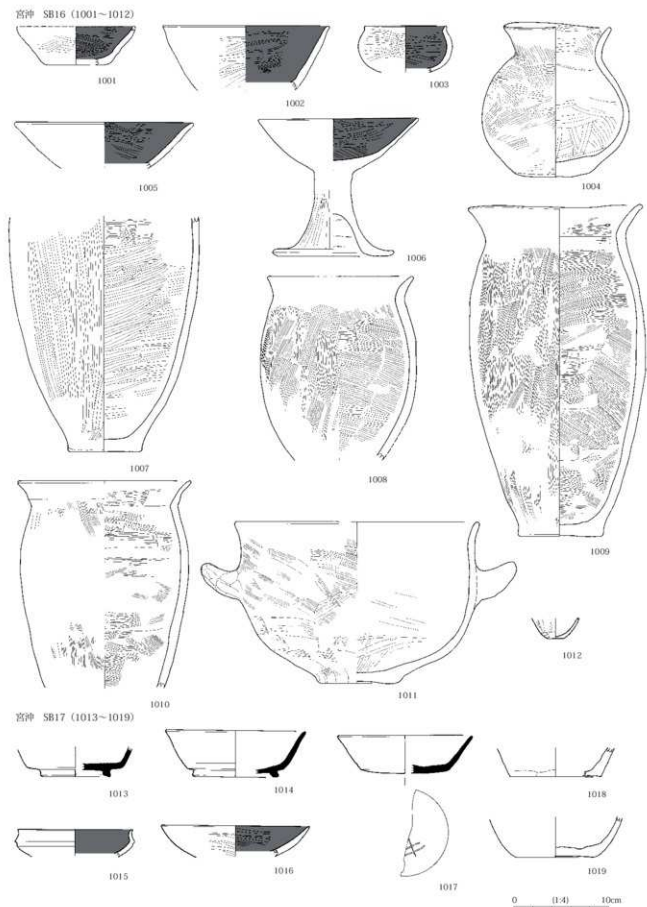


宮神 SB14 下面 (968~993)

第140図 古墳時代後期～奈良時代土器 23



第141図 古墳時代後期～奈良時代土器 24

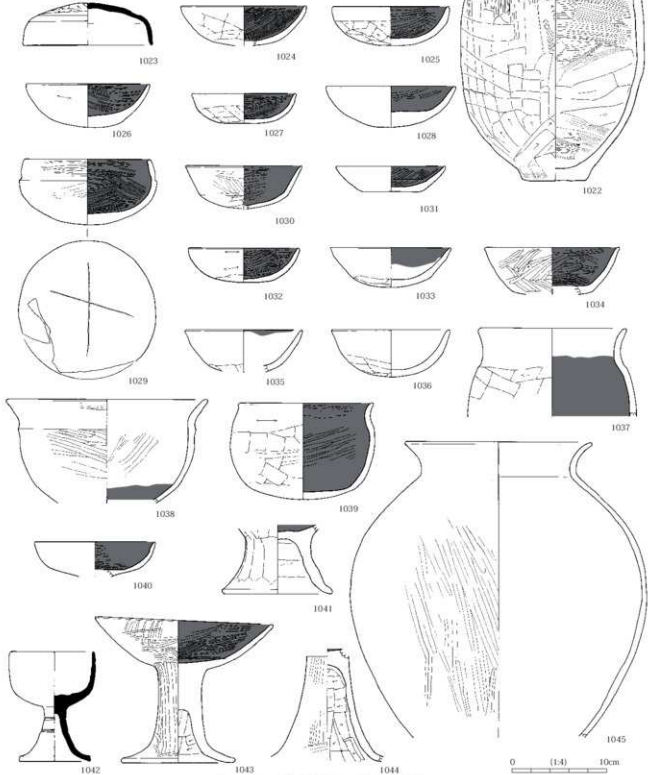


第142図 古墳時代後期～奈良時代土器 25

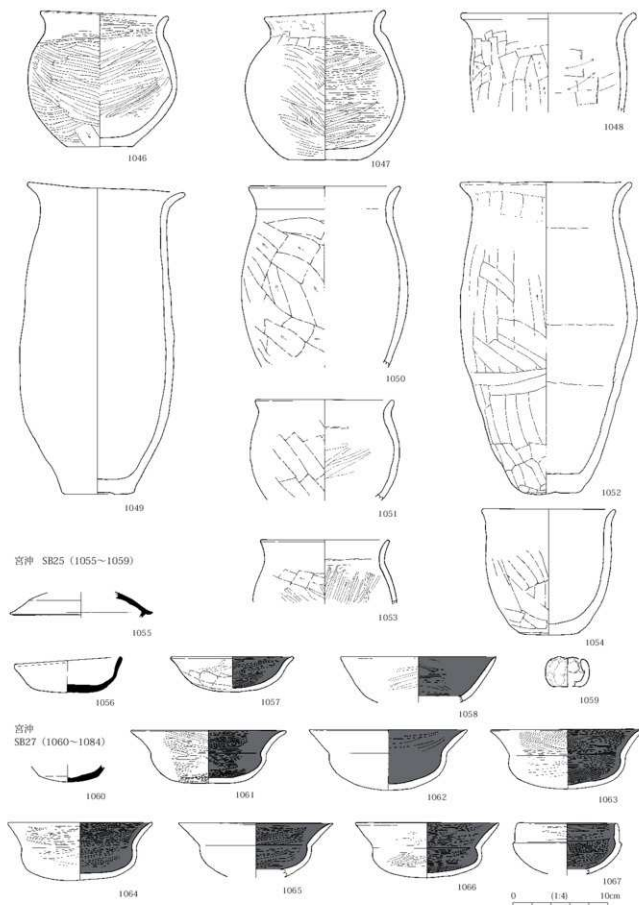
宮神 SB18 (1020～1022)



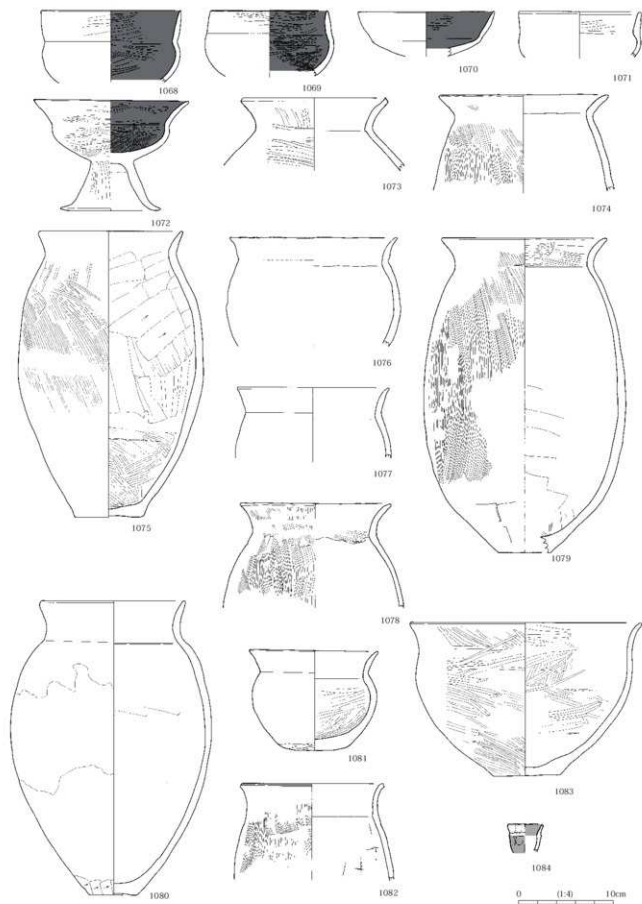
宮神 SB19 (1023～1054)



第143図 古墳時代後期～奈良時代土器 26

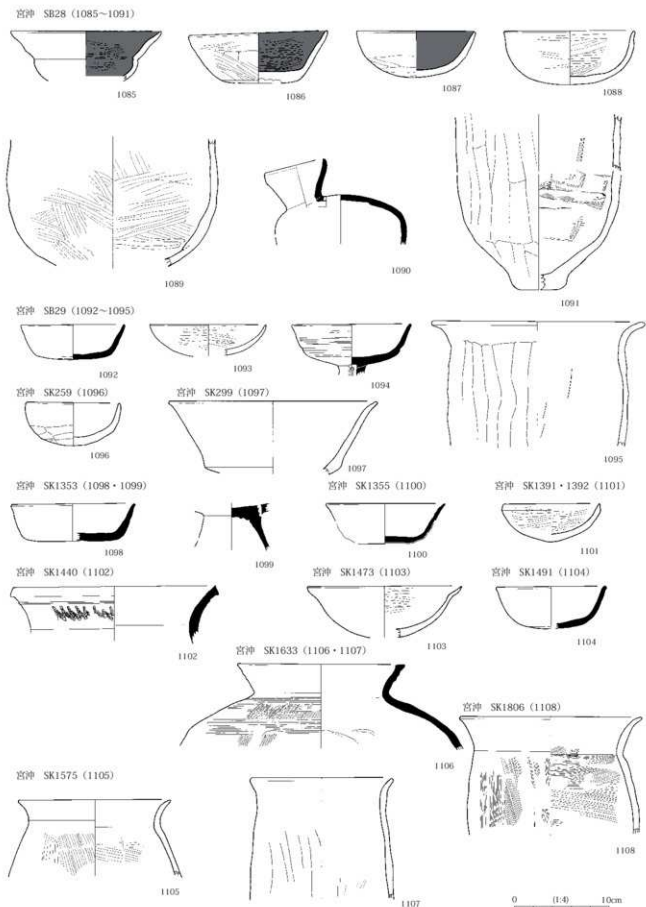


第144図 古墳時代後期～奈良時代土器 27

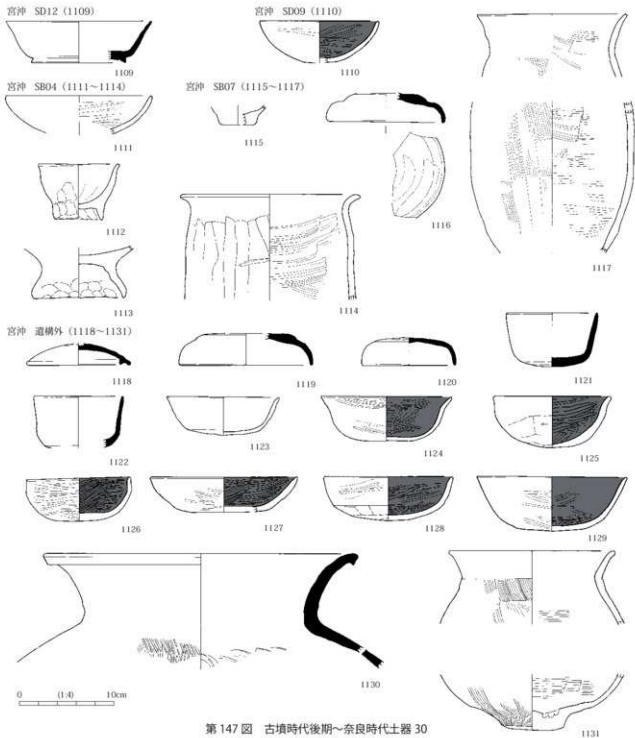


第145図 古墳時代後期～奈良時代土器 28

第3章 検出された遺構と遺物



第146図 古墳時代後期～奈良時代土器 29



第 147 図 古墳時代後期～奈良時代土器 30

期は笹澤氏Ⅳ期中段階・廣田氏Ⅳ期・鳥羽氏古墳 7 期で MT15・TK10、本遺跡 4 期は笹澤氏Ⅳ期新段階・廣田氏Ⅳ期・鳥羽氏古墳 8 期で TK43～TK209、本遺跡 5 期は笹澤氏Ⅴ期古段階・廣田氏Ⅴ期・鳥羽氏古墳 9 期（古代 0 期）で TK217、本遺跡 6 期は笹澤氏Ⅴ期新段階・鳥羽氏古代 1 期、本遺跡 7 期は笹澤氏古代 1 期古段階・鳥羽氏古代 2 期に対比されると思われる。本遺跡出土須恵器は 2 期 SB12 の甕が中村氏（中村 1993）のⅡ型式 1 段階・田辺氏（田辺 1981）MT15、5 期川久保 SB51 の甕は TK209・中村氏Ⅱ型式 6 段階、6 期宮沖 SB14 の蓋 A や定形化以前とも思われる杯 B は田辺氏 TK217・中村氏のⅢ型式 1 段階以後と思われる。本遺跡 2 期に伴う須恵器 MT15 があり、上記の笹澤・鳥羽氏の編年対比でⅣ

期中段階・古墳7期に本遺跡2・3期が対比し得ることは、伴う須恵器型式とも矛盾がない。また、川久保SB51の例は古い須恵器層が次段階まで残ったとすれば矛盾しないと思われる。

本遺跡のみでは実年代の積極的な根拠はないため、今後変更される可能性もあるものとして、上記の北信地域の編年との対比や伴出須恵器型式の年代観（白石・宮崎 2006）を参照して実年代を想定すると、1期が5世紀後半、2期が5世紀末～6世紀前半、3期が6世紀中頃～後半、4期が6世紀末～7世紀初頭、5期が7世紀中頃、6期が7世紀後半、7期が7世紀末～8世紀初頭と想定される。ただし、本遺跡自体では3期の住居跡数が少なく、4期との間に空白期が存在する可能性もないわけではないが、4期の糞は3期以前以来のハケ・ナデ調整糞を基本としたもので杯C5類を含むことから、本遺跡は連続すると考える。

以上の年代観は仮の設定ではあるが、5世紀後半頃に本遺跡が出現し、2期の5世紀末～6世紀前半頃に遺跡が拡大、その後はやや住居跡が減るが4～5期にかけて再び増加するとみられる。この増加期に土器は杯類が先に変化し、甕類は遅れて変化したと思われる。本遺跡の杯1類と類似した形の杯は佐久地域にもあるが、当地域の杯は北関東と共通のもので、出現の時期は同じシナノ内ながら7世紀後半と捉えられている。シナノ内で出現時間差があるなかで、北信では早い時期に出現した可能性もあるかもしれない。ただし、その出現の影響が北陸から及んだものとは断定し得ない。

（2）古墳時代後期～奈良時代の土製品（第148図、PL63）

古墳時代後期～奈良時代の遺構から出土した土製品には紡錘車、土鍾、土玉、土製円板がある。出土遺構から当該期の土製品と判断したが、混入の可能性もあるものも含まれる。

紡錘車 土製紡錘車は2点出土し、すべて掲載した。1132は1期の川久保SB15出土の土製紡錘車でミガキ調整される。1133は宮沖SB02出土の土製紡錘車でナデ調整される。

土鍾 9点出土し、すべて掲載した。1遺構から複数出土した例はなく、いずれも単体での出土である。1137・1138が須恵器、それ以外は土師器である。1137・1138は双孔棒状土鍾（内田 2009）で、筒形形状の中軸と両端側面に穿孔されて一端の孔がT字形となるが、中軸の孔は側面からの穿孔の粘土が詰まって塞がる。大阪湾や瀬戸内に起源をもつとされる刺網の土鍾とも推定されているものだが、当地域に系譜がない。焼成が須恵器であることから須恵器工人が製作したものと思われるが、使用方法がどのように伝播したかは不明である。1137は平安時代とした宮沖SB07出土、1138は奈良時代とした宮沖SB17から出土している。出土量は少なく、古墳後・奈良7期の短期に存在したと思われる。土師器の土鍾は直径2cm前後の細身と直径3cm前後の太身のものがあり、長さは7cm強と3cm強の2者がある。細身の土鍾は両端が細い紡錘形で、平安時代以後の土鍾と類似する。混入の可能性もある。

その他 1143は宮沖SB14出土の土玉である。1144は土製円板とみられ、土器片の周囲が研磨される。宮沖SB14から出土し、出土遺構からここに掲載したが、時期の詳細は不明である。

（3）古墳時代後期～奈良時代の石製品（第148～151図 PL63～65）

当該期の石製品には滑石製模造具、紡錘車、砥石、石鍾、削痕のある軽石、敲打痕のある礫、研磨痕のある礫、凹石・石鉢、こも編石がある。滑石の他は千曲川や斑尾川で採取できる円礫を用いる。

滑石製模造具 1145の1点のみあり、円盤中央に1孔のみ穿孔される。鏡の模造具と思われる。

紡錘車 石製紡錘車は川久保遺跡SB28から出土した。1146は滑石製紡錘車で、1147は白色軟質の凝灰岩円礫中央に穿孔途中の孔が認められるものである。片側表面が剥落し、穿孔途中で欠損・廃棄

された可能性がある。形状から紡錘車と考えたが断定はできない。

砥石 1148～1156があり、当該期の遺構出土品はすべて図示した。石材は凝灰岩、頁岩、粘板岩、砂岩などの堆積岩を用いる。このなかで凝灰岩は灰白色細粒石質で、平安・中世遺構出土の凝灰岩砥石と質感が異なる。近在で入手したのではなく流通品かもしれない。1150・1151・1153は端部に穿孔され、携帯用砥石と思われる。1156は砥石ではないが、棒状の円礫の表面に線状の擦痕が認められる。手持ちして擦る行為に使用されたと思われるが、具体的な用法は不明である。

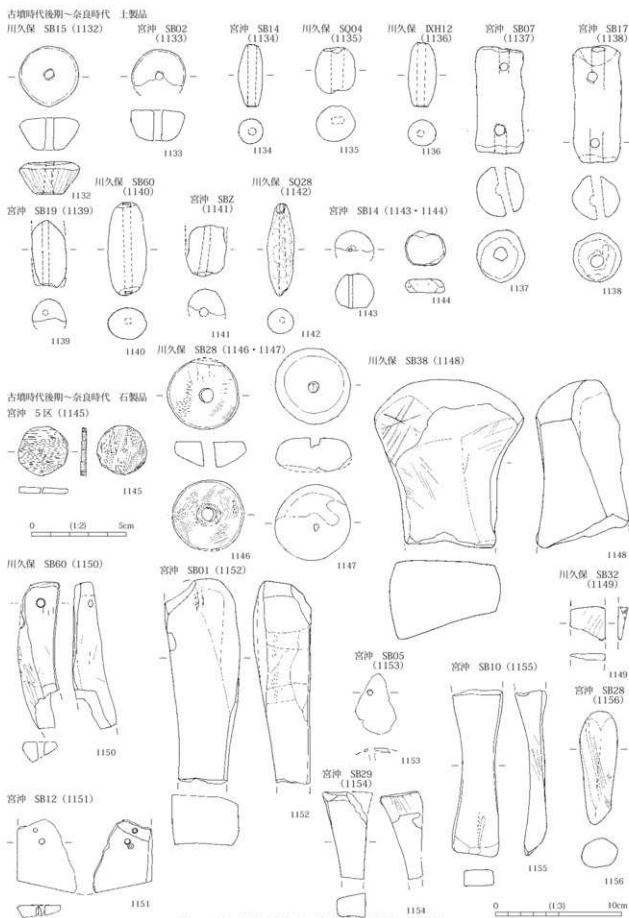
石錘 安山岩を中心とした長さ10cm、幅10cm、厚さ2～3cmの扁平な円礫の短辺側縁2カ所を打ち欠いたもので、平均重量は約590gとかなり大きく重い。出土遺構は宮中SB02・13・25など5・6期の住居跡から出土したが、1遺構で複数出土することはない。形状は縄文時代の石錘に似るが、短辺側面を打ち欠く違いがあり、礫自体が大きいことから投網の錘ではないと思われる。詳細は不明である。また、周囲に加工を伴う類似品はSB23隅で集中的に出土したこも編石と思われる礫がある。ただし、SB23例は円筒形に近いもので、石錘と捉えた礫とは形状が異なって同じ性格のものとも言い切れない。

削痕のある軽石 1166・1167がある。軽石の周囲を金属器で削ったと思われるもので、各削り面の接する角は尖る。何らかの形を作り出すために削ったものではなく、砥石に近い使用法かもしれない。類似品として川久保2区1面出土の1167も便宜的にここに掲載したが、古墳時代後期の川久保SB16・17、平安時代川久保SB18、中世遺構からもわずかに類似品が出土し、当該期に限定できるとは言い切れない。

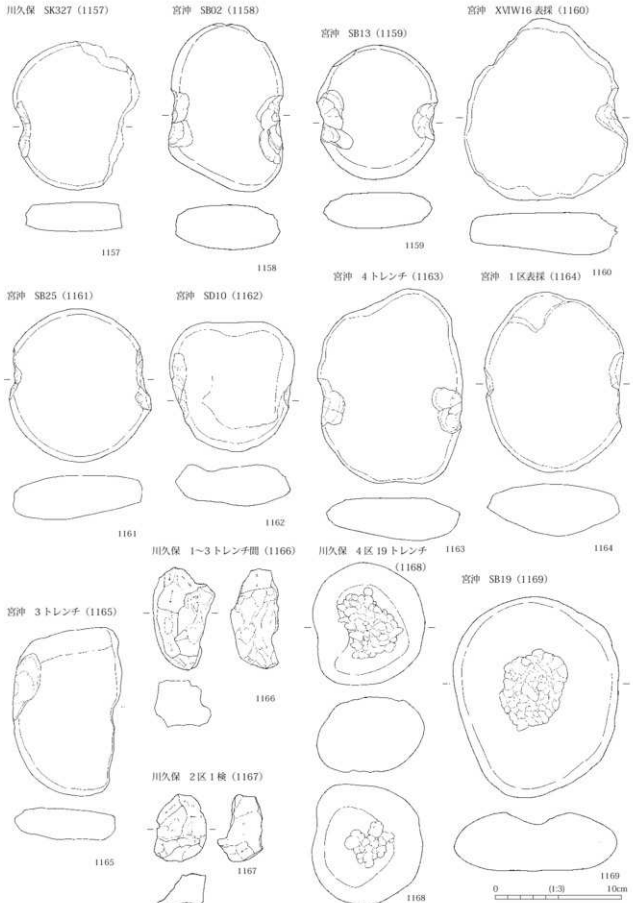
敲打痕のある礫 1168は拳大より大きめの自然礫の平坦面の両面に敲打痕が認められる。1170は棒状の円礫の1縁辺を打ち欠いた後に敲打が加えられている。紐を掛けるための造作とみられ、石錘に類するとも思われるが、長さ約26.0cm、幅約9.5cm、厚さ約6.0cmと大きく、用途は異なると思われる。出土遺構は中世川久保SD60だが、平安時代・中世に類似品がなく、打ち欠き後に敲打を加える加工法は古墳時代後期の石製品に認められることから、ここに掲載した。1169・1171は扁平円礫の平坦面中央に敲打を加えたものだが、凹石や石鉢の製作途中のものかもしれない。

研磨痕のある礫 1176の1点を図示した。手で握れるサイズの円礫の平坦面が擦られて平滑になっている。同様のものはあまり出土しておらず、他時代のものとも考えたが、出土した川久保SB51周囲の土層や下層に礫が含まれないため、当該期の可能性から掲載した。凹石や石鉢に用いられたとも考えたが、大きさが異なって別に台石とセットになると思われる。なお、1178はこの研磨痕のある礫と同じ川久保SB51の床面上から出土した扁平礫だが、上・下面は平坦ながら加工痕は認められなかった。

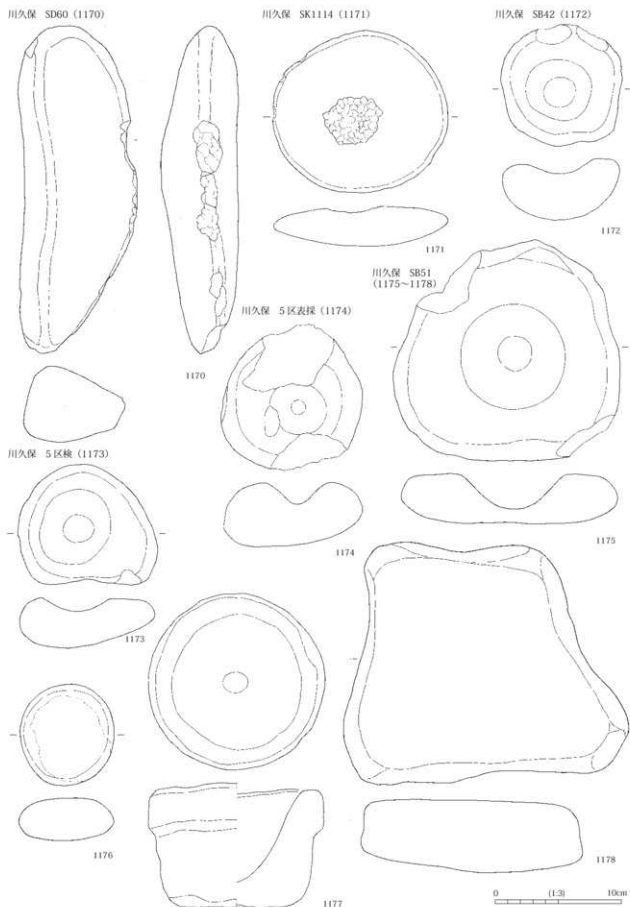
凹石・石鉢 当該期遺構出土品はすべて掲載した。扁平な安山岩などの円礫中央に、直径5～8cm、深さは1～3cm、断面形はU字形の浅い円形の凹面が造り出されたもので、凹面内面は研磨で平滑となる。ただ、顕著な研磨はなく、敲打痕と思われる凹凸がわずかに残る。類似した凹石は中世にもあるが、中世の凹石は円礫に近い厚さのある多孔質安山岩を用い、中央の凹面は直径に比して深いV字に近い断面形となる違いがある。石材と窪みの形状の違いから、遺構外出土ながら1173も当該期のものと考えられる。1174は石材が古墳時代後期のものと同じ安山岩だが、凹面の形状はやや深く中世のものに近く時期は断定できなかった。また、凹石に類似したものとして1177の石鉢がある。器形全体が敲打で整形されるが、凹面が大きく深い容器形である。内面が研磨されている。



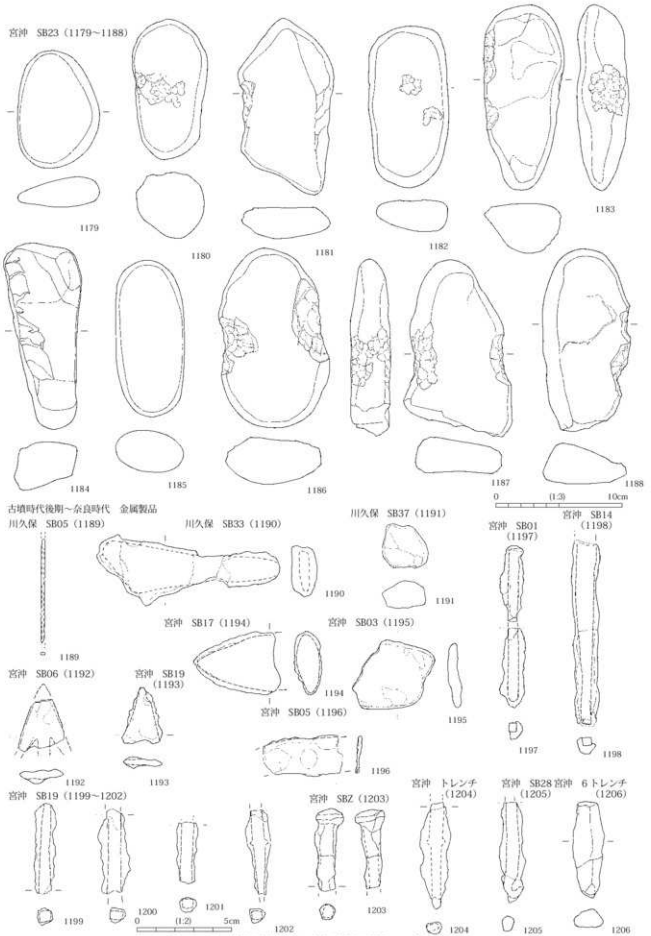
第148図 古墳時代後期～奈良時代土製品、石製品1



第149図 古墳時代後期～奈良時代石製品2



第150図 古墳時代後期~奈良時代石製品3



第151図 古墳時代後期～奈良時代石製品4、金属製品

る点は凹石と同じだが、深い容器形で使用方法まで同じとは断定できない。これらの凹石・石鉢は住居跡出土が多いことから生活器材とみられ、1遺構1点前後の出土から大量に使用するものではないと思われる。

こも編石 むしろを編むための錘と考えられているもので、こも編石と思われる類似規模の楕円礫が複数集中出土した例には、川久保SB28・55、宮沖SB12・13・23がある。集中出土ではないが類似規模の礫が多く出土した例として川久保SB16・17がある。宮沖SB23出土例のみ礫に加工痕が認められて図示した。宮沖SB23から10点出土した礫のなかで加工痕がない1179・1184・1185で、1184は礫中央に帯状の摩耗が認められた。これ以外は加工が加えられている。1180・1183・1187は円礫側辺を敲打し、1181・1183・1186・1188は薄い縁辺部を打ち欠いた後、鋭角となる剥離角を敲打で潰している。1182は円礫平坦面に敲打痕があるが、台としての使用による痕跡と思われる。なお、こも編み石の出土個数と平均重量は川久保SB28で19個473g、同SB55で26個582g、宮沖SB12で23個762g、同SB13で17個で600g、同SB23は10個424gである。川久保SB12の礫平均重量はやや重い、他は424～585gで平均520gである。

(4) 古墳時代後期～奈良時代の金属製品 (第151図 PL65)

鉄製品は錆落とせせず、X線撮影も1面のみなので断面形及び側面の細かな形状は把握できていない。また、当該期の遺構出土品を掲載したが、他時代の混入品も含まれる可能性がある。

金属製品には銅製品と鉄製品がある。川久保SB05出土の1189は断面長方形の細棒状銅製品だが、器種不明で、川久保SB05が中世SLO2・03と重なることから混入の可能性がある。1192・1193・1204・1202は鉄鏃で、1202・1204はX線撮影で棘蓋が確認された。1202と近接して出土した1199～1201も鉄鏃と思われる。他の器種は不明で、1190・1196は刀子、1194・1195は鏃の破片だろうか。1197・1205は先端が欠損するが曲がっているようにもみえ、中世の釘の可能性がある。また、1203も釘だろうか。なお、1191は川久保SB37出土だが、混入した中世の鉄塊系遺物の可能性がある。

4 古墳時代後期～奈良時代のまとめ

詳細な年代比定に課題を残したが、本遺跡では古墳時代前期以後に一度人間の活動が途切れ、5世紀後半頃から遺跡居住者が現れ、8世紀初頭まで継続すると捉えられた。宮沖1区のSB09や27は大きい竪穴住居跡で、宮沖遺跡は住居跡密度も高いが、それ以外の川久保から宮沖5区に至る広範囲に住居跡と掘立柱建物跡が散的に分布して中核的な施設は認められなかった。また、玉類や須恵器、鉄製品が多く出土したわけでもなく、羽口等の鍛冶関連遺物も出土しないので有力な居住者が住む集落跡とは想定しにくい。一方、土鍾の出土から河川漁業に関わる集落跡と捉えられ、水田跡は確認されなかったが農業も行ったと思われる。ところで、中野・館山市域には、5世紀代に現われて6世紀前半まで継続する遺跡がいくつかあり、本遺跡もそうした遺跡の一つと捉えられるが、今のところ本遺跡のような7～8世紀に続く集落跡はないようである。こうした長期に渡る本遺跡の特徴を周辺遺跡のなかで少し考えてみたい。

本遺跡の出現する5世紀後半頃、シナノ内には類似時期に出現する遺跡がいくつか知られ、カマドの採用、杯類を中心とする個人食器の増加・煮炊具の変容・須恵器の流入など生活様式全般に大きな変化が知られる。この変革期を挟んで継続する屋代遺跡群では5世紀中頃に「炉→炉・カマド→カマド」の変化が捉えられ(水沢1998)、カマド出現時に炉を併用するあり方からも外来文化を間接的に受け入れた形とみら

れる。本遺跡の6世紀にかかる2期住居跡にはカマドと炉を併用した可能性がある川久保SB28・49など住居跡があり、これも前段階からのカマド・炉併用の痕跡とみられるならば、本遺跡に居住した人物はシノノ内の近接地域から移動した者と考えられよう。

この時期のシノノでは善光寺平南部から下伊那へ前方後円墳の分布の中心が移るが、一方で北信地域でも盆地北部に5世紀初頭頃から新たな前方後円墳や積石塚古墳が出現し、5世紀後半には大室古墳群などが出現する変化が認められる。大雑把な見方だが、善光寺平南部の長野市南部から千曲市にかけて古墳時代前期以来の旧来勢力の古墳群、その北側の盆地中央の長野市・須坂市・中野市南部の千曲川東岸を中心に積石塚古墳、そのさらに北部の長野市北部や飯綱町、中野市域に前方後円墳が分布する。いわば、3つの地域の住み分けのような構成が5世紀を通じて形づくられるように見える。そのなかで5世紀中頃のカマドの普及にみるような新たな文化の流入があったと捉えられる。もちろん、長野市大屋山古墳では積石塚古墳との関連が注目される合掌型石室がそれ以前の継続的な古墳造営の途中から加わりと捉えられており、カマド同様に新しい文化を在地在が受け入れるような形も含んだ上での分布域の形成と思われる。

下伊那の飯田地域の前方後円墳の陰に隠れた感のある、中野市や飯綱町の前方後円墳だが、飯田地域の前方後円墳同様に畿内との関係のなかで新たに出現したことは十分考えられる。岩崎卓也氏は、善光寺平南部では竪穴式石室を用いる一方、中野市域の5～6世紀前半の古墳が割竹形木棺を用いることに注目し、同棺が畿内大型古墳の陪塚的存在に用いられることから、「棺制」を想定する都出比呂志氏の説を引いて畿内「棺制」を受容した被葬者と捉えた。その背景には越の国に眠みをきかせる拠点と述べている(岩崎1989)。

隣接する新潟県では、古墳時代中期に南魚沼地域の飯綱山古墳群など古墳が集中する中核地となることが知られる(柑粕1986)。銀留短甲や馬具など中野市の古墳と類似した副葬品を出土する点からも、後代の北陸道や東山道とは別に中野市と南魚沼をつなぐ信濃川沿いの内陸ルートが重視されていたと考える説がある(桑原1986)。この説は、東北地方の古墳時代後期土師器が北信の土師器の系譜を引くとの松本建速氏(松本2011)の説にも通じるが、中野市域に前方後円墳が出現する背景を説明するには魅力的ではある。

上記の善光寺平の古墳分布も、南部の旧来の勢力圏、その北側にさまざまな技術をもつ外来者を含む集団、更に北側の最前線側に畿内と結びついた集団が配置されるような空間構成とみられなくはない。そして、このシノノ北半で杯Cを共有するのは背景の異なる集団ながら、一つの地域的なまとまりがあつてのことともみられる。このような地域的なまとまりのなかで、異なる集団が配置されるのは計画的な配置と思われ、北側に畿内政権に近い者が配置されるのは日本海側の北進施策によるもので、旧来の古墳造営者が居た善光寺平は兵站基地のような場所と位置づけられた可能性も考えられる。この盆地内の区分を当てはめれば、本遺跡はシノノ北端のフロント地域に含まれることになる。本遺跡では出土鉄鏡に北進政策を担った片鱗が窺えそうだが、他に特殊遺物もなく、専門的な技術者の存在も想定できない。そんな遺跡が兵站基地の一つというのはなかなかイメージとして結びつかないが、これは当該期の北進政策が複数集落を包括する豪族中心に進められた可能性から説明できるようにも思われる。つまり、その役割を担った豪族はそれぞれ複数の農業経営のムラを包括した集団の代表者でもあったがために、豪族の動向に従って本遺跡が出現したとも考えられる。ただし、周辺の古墳では5世紀前半に遡るとされるものもあり、本遺跡の出現自体は若干遅れて加わったものかもしれない。

新潟県での古墳分布では古墳時代前期に新潟平野まで進出しながらも、中期に南魚沼地域、さらに6世

紀後半には高田平野に分布の中心が移って徐々に後退すると捉えられており(桑原 1986)、信濃川沿いルートがそのまま維持されることはなかったようだ。これはシナノにおいて、佐久から上野を通る東山道ルート重視の方向に転換したこと、さらに海沿いの北陸ルートに変わったこともあるかもしれない。憶測をたくましくすれば、こうした動きのなかで中野市域を通過する信濃川沿いルートが放棄され、本遺跡3期頃の住居跡減少に繋がったのではないだろうか。また、それまで豪族を介した地域把握のあり方は、6世紀後半には装飾付太刀副葬の中小古墳がシナノ各地に認められるように中小豪族を個別把握する方向へ変化したとされる(松尾 2008)。このような特定豪族に帰属する集団の繋がりが解体し、より個別に把握されるようになったことが集落毎に消長差を生じた背景にあるとも考えられる。本遺跡は漁業をはじめ生活が継続できる条件や、古墳時代後期に越後の中核地となる高田平野へ通ずるルートにも近い場所であって、杯C類主体から、杯1類主体へ変化する段階に、再び地域社会全体にかかわる大きな編成があったにも関わらず、その間も本遺跡は存続し得たと思われる。

杯1類は、器形の特徴から7世紀の金属器指向の杯(西 1975)とみられ、8世紀の律令期の須恵器につづく動向の先駆けと考えられる。本遺跡の須恵器を伴わないI類杯主体の時期を、鳥羽氏は屋代古代0期(古墳9期)と捉えたのも同様の理由と推察される。古代の食器が儀礼の共食行為における政治的な道具として位置づけられていたとすれば、こうした金属器志向は畿内での用法と共に普及した可能性が考えられる。その影響がどのような経緯や経路で及んだものかは不明だが、上記からも豪族を介さない、より直接的なあり方と思われる。やや遅れながらも甕の調整方法も類似時期に変わっていることから、土器生産や供給体制の変化を伴っていた可能性があり、把手付鍋が当該期にみられることやケズリ主体のなかに薄く焼成良好なハケ調整甕が含まれるように外来移住者も含む大きな動きがあったのかもしれない。また、類似形態の杯は上野に近い佐久地域とは出現時期差があると思われ、シナノ全域に同時に認められるのではなく地域毎にさまざまな経緯で進展したとみられる。こうした具体的な様相は本遺跡のみでは限界もあり、詳細は今後の課題として残される。

憶測を一つ述べるならば、7世紀中葉の淳足・磐舟の嚮に代表される新たな北進施策が背景にある可能性は関連するようと思われる。この動きがシナノ経由で上越に至るものか、北陸経由かまでは検討できていないが、近隣地域として北信地域も関わるところがあったと思われる。それはやや遅れるが中野市の茶臼峯窯跡の成立とも関わった地域編成の動きとして捉えられるかもしれない。また、本遺跡で杯1類出現頃にもう一つ注意される点としてミガキの甕Cの出現がある。この甕は鉢や甕と同じミガキ調整方法が甕に施されただけとも思われるが、新潟県で近年分布が指摘される東北北部系甕(加藤学 2004)と似た特徴をもつ。この東北系の甕は口縁が長く全体がミガキ調整され、日本海沿岸域を中心に分布が知られる。量的にも少なく、内陸までどの程度入り込んでいたのかは課題であるが、本遺跡でも709のような可能性のあるものが出土している。やや、シナノからみれば突飛な甕が新潟県では6世紀後半頃〜7世紀前半に認められ、本遺跡のミガキ甕出現時期とは重なることから、関連がないとも言い切れない。シナノの人間が越後で間接的にも接触したところで流入したのだろうか。

本遺跡はその後、8世紀初頭頃の7期に途絶する。その途絶の背景は不明だが、松本平の古代遺跡では7世紀後半に新たな古代集落編成が始まり、それまで集落がなかった場所に集住してくる様相が捉えられている(小平 1990)。その動きは本遺跡の6期にあたるが、それより若干は遅れながらも水田耕作地を中心に集住が進められる編成に従って、本遺跡の居住者も移住を余儀なくされたものかもしれない。

第6節 平安時代の遺構と遺物

1 平安時代の概要（第152・153図）

概要：本遺跡では8世紀前半以後の遺構・遺物は検出されておらず、9世紀後半に竪穴住居跡が出現して11世紀まで断続的に認められる。後述するように遺構は大きく4時期に分けられ、9世紀後半～末の平安時代1・2期（以下時代略）では川久保1・2区と宮沖1区、10世紀中頃～後半の平安3期と11世紀の平安4期は川久保1・2・3区に遺構が分布する。10・11世紀の竪穴住居跡分布場所に近い川久保1区では12世紀後半の竪穴建物跡が検出されたが、炉や柱穴を伴う建物構造の違いや12世紀前半の居住遺構が不明なことから、12世紀後半の竪穴建物跡は平安時代後期の竪穴住居跡と関連するとは断定し得ず、中世で扱う。今回の調査域では平安時代の水田跡は検出されず、水田耕作を行っていた確証は得られなかったが、川久保SB10・44では鍛冶炉や鉄滓が検出され、鍛冶を行っていたことは捉えられた。

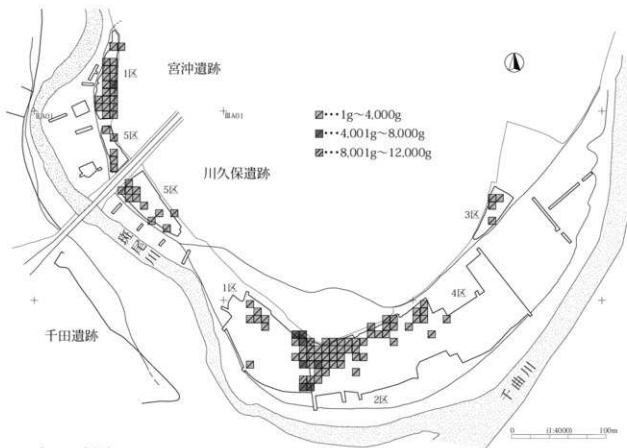
検出遺構は竪穴隅にカマドが位置する小型の竪穴住居跡、若干の掘立柱建物跡と土坑がある。隣接する飯山市では、本遺跡と類似したカマドが竪穴隅に寄った小型竪穴住居跡や、掘立柱建物跡が主体となる遺跡が認められている。平安時代に居住遺構が掘立柱建物主体へ変化する越後に通ずる特徴と思われる。注目される遺物として川久保SB24から武蔵型台付甕、川久保SB52から計量カップともされるコップ形須恵器杯B、川久保SB18から漆紙ではないが薄い被膜が付着した土器がある。武蔵型台付甕は信濃川沿いの新潟県魚沼地方でも出土し（春日2007）、信濃と越後との交流を物語る。

検出面と土層：大部分の平安時代遺構は、古墳時代後期～奈良時代遺構と同じIV層上面か、IV層が分布しない場所ではⅦ・Ⅷ層上面で検出された。川久保1区南東部～2区西部のみは、浸食地形NR1c・NR1dやその周辺に堆積した土層が分布し、平安時代遺構検出面はNR1cのⅢ3層内で複数面にわかれる。NR1cの1a層（Ⅲ2層）はNR1d形成時の東岸に堆積した土層で、川久保1区北部のⅢ2層もNR1d北岸に堆積した土層と捉えた。各土層の検出遺構は川久保SB18がNR1cの1e4層上面で検出され、川久保SB10・11は上面のNR1d形成以後の1a層上面（Ⅲ2層）で検出した。これ以外の川久保SB44・46は1a層上面が検出面にあたる。川久保SB20、SK65はNR1bの3層で検出した。NR1cは出土土器から奈良時代以後に形成されたと捉えられ、川久保SB18はNR1cの下限時期を知る鍵となり、川久保SB10・11はNR1d形成の下限時期を知る遺構と捉えられる。なお、川久保1区北部のⅢ2層上面で平安時代土器が少量出土したが、下面では平安時代遺構は検出されなかった。また、川久保1区南東部のNR1c下層の調査は実施していないが、急速に西側へ落ち込んで居住遺構は存在しないとみられる。

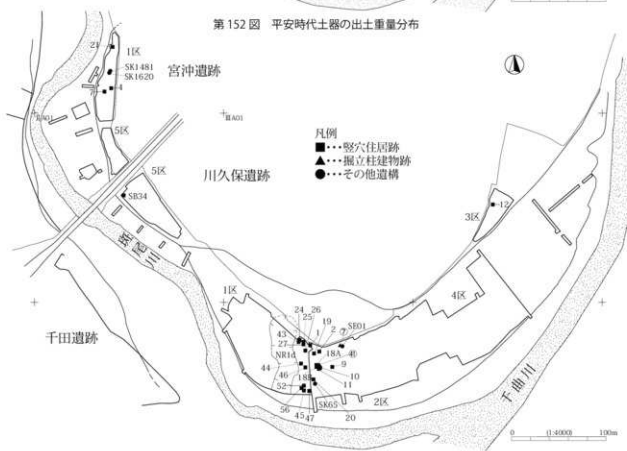
平安時代の洪水土層は千曲川・斑尾川合流地点左岸の川久保1・2区のみで捉えられた。小規模な洪水土層はNR1c埋土中に複数あり、規模の大きな洪水はNR1cとNR1dを形成した2回が捉えられる。それ以後、浸食地形の形成は認められず、12世紀後半の竪穴建物跡が千曲川・斑尾川近くまで分布することから平安時代後期以後は洪水が少ない環境と思われる。

2 平安時代の遺構

平安時代遺構は検出面や出土遺物から抽出した。竪穴住居跡は川久保SB01・02・09・10・11・12・18A（・B）・19・20・24・25・26・27・34・43・44・45・46・47・52・56、宮沖SB04・07・21の計24軒、掘立柱建物跡は川久保ST07・41の2棟、土坑は川久保SK65・SE01と宮沖SK1481・1620の3基があ



第152図 平安時代土器の出土重量分布



第153図 平安時代の主要遺構分布概略

る。川久保SB18A・Bは2軒の重複とも思われたが確定できず、川久保SB34は炭化物散布範囲から方形の平面形と捉えたが、掘り込みが不明瞭で竪穴住居跡と断定しきれなかった遺構である。土坑SK1481と1620は調査時に隣接する別土坑としたが、同一土坑の底部残存部を別に捉えた可能性がある。掘立柱建物跡は少ないが、竪穴住居跡と重複する柱穴が複数捉えられ、認定した数以上は存在すると思われる。遺構の概要分布図には、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑のみを図示した。

(1) 竪穴住居跡 (第26・27表)

竪穴住居跡隅にカマドを配し、柱穴は判然としない小型のものが多い。川久保SB44・46は越後の竪穴住居跡と類似する壁際に柱穴を配する構造で、川久保SB01とSB18はL字に折れるカマド煙道を有する。

第26表 平安時代竪穴住居跡一覧表(1)

遺跡	SB	地区	グリッド	検出面	平面形	主軸方位	南北	東西	壁	高さ	床面	施設	カマド 炉
川久保	01	2区	IX H02	1面 NR1c 1層	不整形方形	N13° W	3.5	3.7	直	40	浅い掘方で平坦	Ph16基(重複遺構含む)	南辺東隅 石組粘土カマド 造替2基あり、新カマド煙道屈曲
重複関係・備考	重複なし												
川久保	02	2区	IX H03・08	1面 NR1c 1層	長方形	N10° E	4.1	3	直	56	浅い掘方で平坦	Ph8基(重複遺構含む)	東辺南より 石組粘土カマド
重複関係・備考	重複なし												
川久保	09	2区	IX H15・20	1面 NR1b 1層	方形	N1° W	5.1	4.8	直	24	浅い掘方 部分的に壁溝	Ph17基(重複遺構含む)	不明(現用水で削平)
重複関係・備考	現用水で上面削平 焼失住居跡か												
川久保	10	2区	IX H18	1面 NR1b 1層	長方形	N6° E	5.1	4.2	直	30	浅い掘方 中央部窪む	Ph14基 壁溝	北辺西隅 石組粘土カマド
重複関係・備考	SB11を切る 焼失住居跡か												
川久保	11	2区	IX H13・18	1面 NR1b 1層	長方形	N30° E	7.2	5.7	直	20	浅い掘方	Ph3基 壁溝	南辺東隅 石組粘土カマド
重複関係・備考	SB10に切られる												
川久保	12	3区	IX M06・11	1面VII層	方形?	N26° W	2.7以上	4.7	直	20	浅い掘方	Ph7基(重複遺構か) 壁溝	北辺隅 石組粘土カマドか 廃絶時に破壊される
重複関係・備考	Ph207・209～211・215～220に切られる 遺存不良で半分ほど遺存												
川久保	18A	2区	IX H13	1面 NR1b3層	方形?	N82° W	1.7以上	3.1	直	34	浅い掘方 平坦	中央に不整形な落ち込み	なし
重複関係・備考	SB16を切り、Ph255・257を切る SF11、ST41との重複確認していない 床面上に集石												
川久保	18B	2区	IX H13・18	1面 NR1b3層	方形	N82° W	3.1	3.1	直	66	浅い掘方 平坦	Ph2基	東辺南より 石組粘土カマド 煙道L字形
重複関係・備考	同上												
川久保	19	2区	IX H07	1面 NR1c1層	不明	不明	不明	不明	不明	不明	なし	カマド火床のみ?	
重複関係・備考	カマド下部のみの残存												
川久保	20	2区	IX H22・23、M02	1面 NR1b 3層	方形	N10° W	3.6	3.3以上	直	22	浅い掘方 仔細不明	Ph1基(焼土ブロック・炭化物)	南辺東隅
重複関係・備考	Ph231～235・238・239に切られる												
川久保	24	1区	IX B25、C21	南東1面 VII層	方形	N68° W	3.5	3.2	斜	28	浅い掘方 中央壁隙	Ph5基	東辺南隅 石組粘土カマド
重複関係・備考	SB43を切る												
川久保	25	1区	IX C21、H01	南東1面 VII層	長方形	N72° W	3	3.9	直	24		Ph4基	不明 北辺西隅より
重複関係・備考	SB27を切る												
川久保	26	1区	IX H01・06	南東1面 NR1c1層	不整形方形	N37° W	3.3	3.2	直	22	浅い掘方 中央壁隙	カマド右袖脇に集石	南辺東隅 石組粘土カマド
重複関係・備考	重複なし												
川久保	27	1区	IX H01	南東1面 VII層	長方形	N87° W	3.5	2.7以上	直	6	浅い掘方 中央壁隙	Ph3基	北辺東隅 石組粘土カマドか
重複関係・備考	SB25に切られる												
川久保	34	5区	II M02・03	2面III層	方形?	N3° W	3.6以上	3.3以上	なし	0	床・壁方不明	焼土3カ所	不明
重複関係・備考	炭化物・焼土散布範囲												

第27表 平安時代竪穴住居跡一覧表(2)

通称	SB	地区	グリッド	検出面	平面形	主軸方位	南北	東西	壁	深さ	床面	施設	カマド
川久保	43	1区	IX B25, C21, G05, H01	南東1面 V層	方形	N66° E	2.9 以上	3.3	直	26	浅い掘方 中央壁 敷	Pit2基	西辺南隅 石組粘 土カマドか
重複関係・備考 SB24に切られる													
川久保	44	1区	IX G15・ 20, H11・ 16	南東1面 NR1c1層	長方形	N13° W	6.0 以上	4.6	直	40	浅い掘方 中央か らカマド前壁敷	Pit19基 鋳冶炉1	南辺東隅 石組粘 土カマド
重複関係・備考 本跡床面検出 Pitに重複遺構含む													
川久保	45	1区	IX M06	南東1面 V層	不整形	N86° E	2.7	3.4	斜	22	浅い掘方 軟弱	Pit2基	北辺西隅か 火床の み
重複関係・備考 SB56を切り、SF36に切られる													
川久保	46	1区	IX H16	南東1面 NR1c1層	長方形	N15° W	3.5	4.5	直	40	浅い掘方 中央か らカマド周辺壁敷	Pit8基	南辺西隅 石組粘 土カマド
重複関係・備考 SK656・655・669・689・1944に切られる													
川久保	47	1区	IX M07	南東1面 V層	台形	N22° W	3.5	3.5	直	19	浅い掘方 中央壁 敷	Pit8基	南辺東隅 石組粘 土カマド
重複関係・備考 SF39, SK1940に切られる													
川久保	52	1区	IX M01・ 06	南東1面 V層	方形	N15° W	3.5	4.5	直	26	浅い掘方	Pit8基	南辺東隅 石組粘 土カマド
重複関係・備考 SK701・702に切られる SB56に切られる													
川久保	56	1区	IX M01・ 06	南東1面 V層	方形	N22° W	4.4	4.1	斜	18	浅い掘方 壁敷	Pit5基	南辺西隅 石組粘 土カマド
重複関係・備考 SB45に切られる SB52切る													
宮沖	04	1区	XVI W06	2面 IV層上層	方形	N8° E	4.4	4.3	直	30	浅い掘方で壁敷	Pit7基 焼土址1基	南辺東隅 石組粘 土カマド
重複関係・備考 SB05・25・28・29を切り、SK1004・1058・1284・1350・1698, SLO1に切られる													
宮沖	07	1区	XVI V10・15	2面 IV層上層	長方形	N4° W	5.5	4.7	直	22	浅い掘方 壁敷	Pit20基 壁溝	南辺東隅 石組粘 土カマド
重複関係・備考 埋土中に焼土 SK980・989・985・1394・1451・1454・1456・1468・1810・1811, SLO1に切られ、SB14・18・26を切る													
宮沖	21	1区	XVI R06	2面 V層	方形?	N88° E	3.0 以上	2.6	直	30	浅い掘方 壁敷	Pit6基	西辺南隅 石組粘 土カマドか
重複関係・備考 SK1820切る													

川久保SB01 2区1面 IX H02 (第154図 PL19)

川久保2区北西隅、NR1c上面で検出した。検出当初は1軒と捉えたが、精査中に東西に近接するカマド火床2基が検出され、2軒の重複の可能性も考えられた。しかし、東カマド火床出土土器が西カマド火床前出土の土器と接合し、2基の火床は同じ煙道を利用したカマドの造り替えによる1軒と結論した。他に重複遺構はない。北壁はトレンチにかかったが、平面形はカマド周辺が不整形となる方形とみられる。埋土は上層に暗褐色砂質土、床面近くに炭化物や焼土を多く含む土層、床上面に炭化物・焼土を含まない土層が認められた。床面や床下で検出した施設はピット16基とカマド2基がある。多くのピットは浅いタライ状で、Pit4・13は床下検出である。Pit1・11・15とPit4・12・13、Pit3・5は近接し、埋土に焼土・炭化物を多く含んで少量ながら鉄滓も出土した。Pit6・7・10・16は平面形から柱穴とも思われたが、やや浅く断定できない。Pit9は底面が不整形で植物の根痕の疑いがある。カマドは南壁東隅に東西2基の火床があり、東カマドは左袖が現存する石組粘土カマドで、煙道は鍵手に折れて西カマドの石組を伴う煙道へ続く。西カマドは火床のみの残存で、本跡は拡張と共に東カマドへ造り替えたと思われる。土器は平安4期土器が少量混入するが、カマド出土の土師器裏から本跡の時期は平安1期と思われる。

川久保SB02 2区1面 IX H03・08 (第154図 PL19)

川久保2区北西隅、NR1cの1a層で検出し、重複遺構はない。平面形は約4×3mの長方形で、東壁南寄りにカマドがある。床面は平坦でピット8基とカマドが検出された。カマド周辺のPit1・2・7は小型の不整形な平面形で、V字に近い断面形の類似ピットが近接することから植物の根痕と思われる。カマドは石組粘土カマドと思われるが、中央に不整形な落ち込みがあり、火床と捉えた焼土範囲も外側に偏って

いる。廃絶時にカマド石組の石が抜かれ、植物の根による攪乱を受けている可能性がある。遺物はカマド周辺から出土した土器がわずかにあり、本跡の時期は平安1期と思われる。

川久保SB09 2区1面 IX H15・20 (第155図 PL19)

川久保2区西部、NR1b上面で検出。他遺構との重複はないが、南側2/3が現用水路に削平される。平面形は4.8～5.1mのやや隅が丸い方形である。埋土中層に炭化材・焼土ブロックを含む暗褐色土層があり、炭化材は用水路の削平を免れた北側1/3ほどに遺存する。棒状の炭化材が放射状、あるいは北辺と平行して認められ、屋根の垂木材と思われる。床面直上の炭化物を含まない暗褐色土層の堆積は屋根の焼失・崩落以前のものだが、性格は明らかにし得なかった。壁はほぼ垂直で、床面は平坦で部分的に堅緻である。床面上でピット17基が見つかった。Pit6・8・15は柱穴とみられ、浅いながらPit11もその可能性はある。Pit7は西辺と平行して位置する方形の落ち込みで、性格は不明である。Pit3・5・9、2・14・17は南北方向に直線的に並ぶように見え、重複する中世建物跡柱穴の可能性もある。カマドは削平を受けて不明で、本跡北西隅のカマド芯材と思われる礫集中も焼土は検出されなかった。また、北東隅のPit1は浅く、埋土から礫が検出されたが、これもカマドとは断定できなかった。本跡の時期は平安4期と思われる。

川久保SB10 2区1面 IX H18 (第155図 PL19)

川久保2区西部、NR1cの1a層(Ⅲ2層)上面で検出。本跡が川久保SB11の床面を深く切る。平面形はやや隅の丸い長方形で、埋土は上層に暗褐色土層、中層に下層の洪水土層起源の褐色シルト・細砂ブロックを含む暗褐色土層、下層に炭化物・炭化材や焼土粒を含む黒褐色土層が認められた。下層に含まれる炭化材は遺存不良で、南東部周辺に棒状の炭化材が認められたが、大部分は細片である。壁はほぼ垂直で、床面は北西部がやや低い。深い掘方を伴わず、掘削面を均した床面である。施設はピット8基、鍛冶炉1基と付随施設と思われる不整形な窪み1基、壁溝、カマドがある。Pit5・6とPit7・8はカマド反対側に北辺と平行して並び、本跡柱穴と思われる。柱穴状のPit1・9・12・18は不規則な配置で、Pit19も浅く柱穴ではないと思われる。これらは重複する柱穴の可能性もある。なお、ピット番号は調査時のまま用い、Pit2～4、10・11は欠番である。壁溝はカマド南辺を除いて途切れながら東、南、西辺際を廻る。断面はU字か逆台形である。その底面には直径10cm以下の円形のPit13～15が検出された。壁の保護施設の痕跡とも思われるが詳細は不明である。鍛冶炉は床面中央南よりに位置するPit16である。平面形は1辺20cm強の方形の浅い掘り込みの南西隅と北東隅に羽口を差し込んだと思われる浅く短い溝が付く。周囲は被熱で赤化し、内底は青く還元して鉄滓が出土した。Pit16に隣接する浅い不整形なPit17は鉄滓・鉄製品が出土したものの、直接被熱による赤化した範囲は認められなかった。フイゴの送風装置が金床の設置痕跡と思われる。遺物は土器、鉄製品、羽口などがあり、土器は少量しかない。鉄製品は鍛冶炉周辺や北西部周辺で多く出土した。なお、北西部の土器は埋土中層の出土である。本跡の時期は平安4期と思われる。

川久保SB11 2区1面 IX H13・18 (第155図 PL19・20)

川久保SB10に本跡中央部を切られる。平面形は7.2×5.7mの長方形で、埋土は上層に暗褐色土層があり、壁際に褐色土、下層に褐色土小ブロックを含む暗褐色土層が入る。壁はほぼ垂直で、床面は掘削土を均した浅い掘方である。施設はピット3基と壁溝、カマドがある。ピットはカマド西脇にPit3→2→1の順に重なるが、Pit3は柱穴状で埋土に焼土ブロックを多く含む。Pit1・2は長軸約80cmの土坑状で、埋土中に人頭大を中心とする礫を混じり、Pit1から炭化材が出土した。Pit1・2はカマド焚口斜め前において使用時に開口していた可能性は低いと思われる。壁溝は東辺から北東隅周辺のみ認められた。カマドは南

辺東隅寄りに位置する石組粘土カマドで、天井部は崩落し火床上やカマド前に長さ40cmほどの礫が散在する。それらの礫下には拳大円礫が数個出土した。カマド材の一部と思われるが、詳細は明らかにできなかった。遺物はSB10に削平されてわずかに出土した。本跡の時期は平安4期と思われる。

川久保SB12 3区1面 IX M06・11 (第156図 PL20)

川久保3区の段丘縁の緩斜面に立地し、斜面上方の北東部のみ残存する。上部は現代の掘削に削られ、中世川久保ST16やその関連柱穴が重なって遺存不良である。他遺構との重複では本跡を川久保ST16(Pit207・209～211・215～217・220)が切る。本跡北壁際上面で検出された焼土との関連は不明である。また、調査時に壁際で検出した柱穴を本跡Pit1～7としたが、配列からST16の関連建物柱穴と思われる。本跡は残存部から1辺約4.7mの方形に近い平面形と思われ、壁は斜面上方の北辺が垂直で、床面は浅い掘方を均したものである。壁溝は北壁際を廻り、北西隅でカマド芯材礫と思われる礫集中と焼土が確認された。石組粘土カマドと思われるが、礫は動かされて構築当初のものはない。遺物は平安時代の土器類がわずかにあり、本跡の時期は平安4期と思われる。

川久保SB18A・B 2区1面 IX H13・18 (第156図 PL20)

川久保2区のNR1c東端にあり、西側はNR1cの1e4層、東側はNR1bの4c層上面で検出した。本跡上部はNR1cの1d層に覆われる。古墳時代後期SB16を切り、Pit255・257に切られる。床面検出のPit1はST41柱穴と捉えられ、直接重複は確認していないが、床面上で検出できたことから本跡が切られると思われる。東壁際上の焼土跡SF11はカマド煙道の残骸と思われる。本跡は検出時に長方形の1軒の住居跡と捉えたが、精査中に床面の段差が見つかり、2軒が重複する可能性が想定された。そこで北側をA、南側をBとした。検出面から床面までの深さはSB18Aが34cm前後、SB18Bが66cm前後を測る。SB18A・Bの東西辺は一致して南北に平行移動した位置関係にあるが、重複の可能性に気付いたのは土層観察用ベルトを撤去した後で、出土遺物からは時間差が捉えられず、2軒の重複は確定できなかった。SB18A・Bが1軒ならば、南北約4.8m、東西約3.1mの長方形の平面形で、別ならば、SB18Aは南北残存長1.7m以上で、SB18Bは3.1mである。SB18Bは約3.1m四方の方形の平面形となる。いずれも床面は平坦ながら浅い掘方を均した程度で中央付近が堅くしめる。SB18Aの床面上にカマド石と思われる長さ40cmほどの礫が散在し、中央に炭化物を多く含む不整形な浅い落ち込み1基を検出した。被熱による赤化範囲は認められなかった。SB18Bはビット2基、カマドがある。ビット配置に規則性はなく、重複するST41柱穴の可能性もある。カマドは東壁南寄りに位置する粘土カマドと思われ、煙道は焚口から壁に沿ってL字形に折れて南へ1.7mほど続き、壁は石組を伴って1個のみ蓋石が残っていた。遺物は少量の土器があり、漆紙ではないが薄い被膜状の付着物がある黒色土器A杯1249が出土した。本跡の時期は平安1期と思われる。

川久保SB19 2区1面 IX H07 (第157図)

川久保2区NR1c調査中に、検出された石の設置痕を伴う窪み焼土をカマド火床と捉えて住居跡と認定した。火床に接して検出されたカマド袖石痕と思われる浅い窪みから、カマド軸は南・北方向と捉えられる。南側がやや開くが、本遺跡内の平安時代住居跡カマドは南辺(南東)に位置するものが多いことから、焚口は北側と思われる。隣接するSBO2床面の標高と比べると、火床面は30cm前後低いが、緩やかに傾斜する地形の低い場所にある点に加えて上部を削った可能性があり、検出面が異なるものではないと思われる。火床周囲から平安時代の土師器類が少量出土した。本跡の時期は平安1期と思われる。

川久保SB20 2区1面 IX H22・23、M02・03 (第157図 PL19)

川久保2区西部に位置し、NR1b調査中に3層上面で床面が露呈しカマドは一部のみしか確認できなかった。構築面は1層まで上がると思われるがNR1cとの関連は把握できなかった。床面の残存範囲から1辺約3.3～3.6mの方形の平面形と思われる。南東隅にカマド火床と煙道の一部が認められ、南西隅に焼土や炭化物の散布や炭化物・焼土ブロックを含むPit1が検出された。Pit1内で直接火を焚いた痕跡は確認できなかった。遺物はカマド火床周辺からわずかに土器が出土した。本跡の時期は平安2期と思われる。

川久保SB24 1区南東1面 IX B25、C21 (第157図 PL20)

川久保1区南東部のNR1cの南脇にある。土石流堆積土層上面の黄褐色シルトⅦ層で検出し、他遺構との重複では本跡がSB43を切る。また、床面検出のPit3・5は隣接する時期不明のSK555と直線的に並ぶようにみえ、重複する掘立柱建物跡柱穴の可能性がある。平面形は1辺3.2～3.5mのやや隅の丸い方形で、埋土は上層に灰白色ブロック混じりの灰黄褐色土層、下層に灰黄褐色シルト層があり、層境に炭粒が分布する。土器は埋土下層の中央付近から西壁際にかけて出土した。床面は浅い掘方を均した貼床で、わずかに中央が窪み深い。施設はビットとカマドがあるが、重複する掘立柱建物跡柱穴と思われるPit3・5以外のPit1・2・4も浅く、壁やカマド焚口前に位置して本跡施設と断定できない。カマドは東辺南隅近くに位置する石組粘土カマドで、煙道は南へ湾曲する。火床奥壁側に支脚の立石が残るが、天井は遺存せず、袖際に石組痕と思われる窪みがあって焚口西側にカマド石と思われる礫が散在する。廃絶時に壊された可能性がある。カマド内から土器器片が多く出土した。本跡の時期は平安2期と思われる。

川久保SB25 1区南東1面 IX C21、H01 (第158図 PL20)

川久保1区南東部のNR1c脇のⅦ層で検出した。南東側へ傾斜する地形にあって、本跡とSB27が重複する周辺で火床2基が並んで検出された。床面標高との比較から高い側の火床をSB25、低い側をSB27カマドとし、わずかな埋土の残存から本跡がSB27を切るかと捉えた。平面形は南北長約3.0m、東西長3.9mの長方形で、埋土は灰黄褐色土を基調として上層に焼土粒や炭化物粒を混じる。壁は若干斜めで、床面はやや堅くわずかに南側へ傾斜する。施設はビット4基とカマドがある。Pit1・2は壁際に北辺と平行して並ぶ柱穴で、Pit3は中央寄りに位置して重複する掘立柱建物跡柱穴かもしれない。Pit4は西壁際に位置し入口施設とも思われる。平面直径50cmほどの穴で隣接して地山礫が露出する。本跡南東側寄りにある火床をカマドと捉えたが、遺存不良で袖痕跡は確認できなかった。すぐ脇のSB27Pit1は本跡カマド関連施設の可能性もある。出土土器はわずかしかない。本跡の時期は平安1・2期と思われる。

川久保SB26 1区南東1面 IX H01・06 (第158図 PL20)

川久保1区南東部、NR1c上面で検出。他遺構との重複はない。平面形は1辺3.2～3.3mの南東隅のカマドが飛び出た不整形である。埋土は上層に黒褐色砂質土、下層に灰黄褐色土があり、北西部の床面直上周辺に炭化物を多く混じる土層がある。壁はほぼ垂直で、床は浅い掘方を均したもので、西側が若干低く中央部が堅くする。カマドは南辺東隅に位置する石組粘土カマドで、袖がわずかに住居側に延びるが、火床部は南壁から飛び出てカマドの軸は若干西に振る。裏の掛口は南壁より出るとみられる。カマド右袖側の南壁際の窪んだ床上に長さ40cmほどの平石と人頭大礫を積み重ねた集石が検出された。その平石上から完形の土器器杯が出土した。集石はカマド石組の礫を集めた可能性があるが、詳細は捉えられなかった。他に施設はない。カマド周辺から出土した土器から本跡の時期は平安3期と思われる。

川久保SB27 1区南東1面 IX H01 (第158図 PL21)

川久保1区南東部のNR1c脇のⅦ層上面で検出。SB25南辺に入れたトレンチにかかって発見され、わ

ずか埋土の残存からSB25に本跡が切られると捉えられた。南辺は現排水路に壊される。平面形は東西長約3.5m、南北長2.7mの長方形である。床は浅い掘方を均したもので、平坦だがあまり堅くない。施設はピット3基とカマド火床と捉えた焼土がある。Pit1はSB25との境に位置し、埋土に焼土粒を多く混じる。調査時に本跡内施設と捉えたが、SB25カマド関連施設の可能性がある。Pit2・3は東壁際にあり、形状からPit2は柱穴と思われるが、Pit3は浅い円形の落ち込みで性格は不明である。カマドは火床と思われる焼土と、煙道と思われる炭化物を多く混じる溝状の落ち込みを北辺東隅で検出した。上部をSB25に削られ遺存状態は悪い。本遺跡の平安時代住居跡は南辺カマドが多いなかで、特異な例となるが、他に焼土は認められなかった。遺物はカマド周辺で土器がわずかに出土した。本跡の時期は平安2期と思われる。

川久保SB34 5区2面 II M02・03 (第160図 PL21)

川久保5区2面北端に位置し、半分は調査区北側へ延びる。炭化物・焼土や土器が直角三角形に分布するように認められ、方形を呈する遺構の南東隅にあたって竪穴住居跡の可能性も考えた。平面規模や形態から住居関連遺構とは思われるが、掘り込みは不明瞭で竪穴住居跡と断定し得ない。他遺構との重複では本跡がSB35・37を切る。規模は1辺3.3m以上である。東辺の炭化物層下面と調査区境周辺に長軸40cmほどの被熱で焼しまった焼土3カ所がみつかった。炭化物は約1cmの厚さに水平に認められ、掘り込みや堅い床面は確認できなかった。調査時の所見では直径15～20cm、深さ約15cmのピットが2基検出されたと記録があるが、位置は記録漏れにより不明である。遺物は少量ながら古墳時代や平安時代土師器が出土し、平安時代の可能性があると捉えたが、時期の詳細は不明である。

川久保SB43 1区南東部1面 IX B25、C21、G05、H01 (第157図 PL21)

川久保1区南東部NR1c脇のVII層上面で検出。他遺構との重複では、本跡北側はSB24に切られる。床下で検出した時期不明のSK736～739は、床面検出のPit1・2と直線的に並ぶようにみえ、見逃した本跡と重複する建物跡柱穴の可能性もある。なお、SK738の縁にかかって出土した杯は大部分が本跡内に入り、本跡の土器と捉えられる。平面形は残存範囲から1辺3.3mほどの方形と思われる。埋土は上層にぶい黄褐色土層、下層に灰黄褐色土層があり、北西部から完形に近い杯や礫、カマド内から土師器甕や完形に近い須恵器杯が出土した。壁は南～西辺の一部のみ残存し、床面は平坦ながら軟弱で、浅い掘方を均した程度である。床面で検出したピット2基は重複する掘立柱建物跡柱穴の可能性もある。深さは20cm前後である。カマドは西辺南隅にあり、火床と支脚と袖の石組の礫がわずかに残存して遺存不良である。石組粘土カマドで、住居跡廃絶時に壊されたと思われる。本跡の時期は平安1期と思われる。

川久保SB44 1区南東部1面 IX G15・20、H11・16 (第159図 PL21)

川久保1区南東部NR1c上面に設定したトレンチ壁にかかって発見された。中世と思われる柱穴が重複し、床面検出ピットにも中世の柱穴が含まれる可能性がある。平面形は南北6.0m、東西4.6mの長方形で、埋土は上層に砂質の強い灰黄褐色シルトや砂ブロックを混じる土層、中層にやや暗い灰黄褐色粘質土層が堆積する。床面上には炭化物を多く混じる褐灰色土層があり、北部床面上には炭化材やカヤ状の炭化物が認められた。カヤ状炭化物は繊維が直交方向のものが認められ、入母屋の屋根材の可能性もある。その上の中層の灰黄褐色土が土層根が断定できなかった。壁は若干斜めで床面は浅い掘方を均したもので、西側に傾斜して中央からカマド前付近が堅い。施設はピット19基と鍛冶炉1基、カマドがある。ピットの多くは柱穴と捉えられ、壁際にPit4・5、並行してPit1・2・9・16～18が並び、壁立の構造と思われる。Pit19も壁際にあるが、やや大きく本跡施設と断定できない。Pit16～19は床下検出ながら床面で見逃したと思われる。中世柱穴埋土に近いPit7、周囲と異なる黒褐色土埋土のPit9は本跡を切る柱穴の可能

性があり、Pit9・10は不整形な断面形で根痕と思われる。床面上の土層と共通する炭化物を混じる埋土のPit3は廃絶時に開口していたと思われる。最下層から大量の鉄滓が出土し、鍛冶関連施設と捉えられたPit13、それに切られるPit14は本跡施設と認定し得る。鍛冶炉はPit13南西に隣接した直径20cmほどの円形の落ち込みで、縁は被熱で赤化し、短く細い溝が東・北辺に付属する。西側はPit6と重複して不明瞭だが、わずかに窪んで溝が存在した可能性がある。これらの溝は鍛冶炉中央へ向かって傾斜し、羽口を設置した痕跡と思われる。鍛冶炉内では被熱部分より下方に炭化物が大量に出土し、その上部には灰黄褐色土が認められた。鍛冶炉上部施設は確認できなかった。カマドは南東隅に位置する石組粘土カマドで、袖内は2段前後に礫を積んで、壁際の天井石が遺存する。カマド軸方向と直交方向の焚口内に重なって出土した礫も天井石の一部と思われる。火床は赤化せず不明瞭ながら支脚石を埋設した穴が検出された。出土遺物はわずかしかない。なお、Pit13埋土のサンプル13,041.2gをふるいと磁石で選別したところ、土壌分9,350.2g、砂鉄533.5g、炭化物・石や7mmを越える磁石に付着しない鉄滓377.3g、4～7mmの磁石付着なしの鉄滓1,402.7g、同磁石付着なし鉄滓143.1gに分けられた。本跡の時期は平安4期と思われる。

川久保SB45 1区南東部1面 IX M06 (第159図 PL21)

川久保1区南東端NR1c南岸の黄褐色シルトⅦ層上面で検出した。SF36の断面を観察するトレンチで下部に竪穴住居跡が捉えられ、その精査中に東・西2カ所のカマド火床が検出された。2軒の重複の可能性から、土層観察用ベルトを観察し直したところ東側火床の西・北脇にわずかな壁の立ち上がりが見られた。その土層観察用ベルトの南・東延長先に入れたトレンチで平行する東・南壁が認められて本跡を認定した。平面形が不整形で規模も小さく、周辺の住居跡と異なる北辺カマドとなることや、周囲の検出土層と類似した色調の埋土でトレンチを入れながら平面形を確定したことから、平面形の認定に不安が残る。他遺構との重複では、本跡がSB56を切り、本跡とSB56をSF36が切る。平面形は東西3.4m、南北2.7mの不整形形で、上部に中世以後の水田耕作土の基本土層Ⅱ層褐色粘質土とSF36の焼土・炭化物を混じる土層が載り、その下に本跡埋土の黄灰色砂質シルトがある。壁は若干斜めで、床面は浅い掘方を均した程度で軟弱である。施設はピット2基とカマド火床がある。Pit1は柱穴と思われるが、周囲に対応するものがなく、重複する掘立柱建物跡柱穴の可能性もある。また、Pit2はカマド石を抜き取った痕跡と思われる。カマドは火床のみ残存し、脇から礫が1個出土した。石組粘土カマドと思われる。遺物は軟質須恵器杯Aやカマド火床周辺から出土した土師器裏破片がある。本跡の時期は平安2期と思われる。

川久保SB46 1区南東部1面 IX H16 (第160図 PL21)

川久保1区南東部NR1c上面で検出。煙道の検出から本跡は捉えられたが、検出土層と埋土が類似して平面形は識別しにくく、トレンチを入れながら確定した。他遺構との重複は中世と思われるSK656・655・669・689・1944に切られ、本跡が切る遺構はない。平面形は東西4.5m、南北約3.5mの長方形で、埋土は灰黄褐色砂質土や粘質土を主体とし、床面上に粘性の強い土層と炭粒を含む薄い土層が部分的に認められた。壁はほぼ垂直で、床は浅い掘方を均したもので中央からカマド周辺が堅い。施設はピット8基とカマドがある。Pit1～4は北・南壁際に2基ずつ並び、いずれも直径30～40cmの円形で、深さ20cm前後の柱穴と思われる。整理事業の検討でPit3は本跡を切るSK669と位置が重なることが判明したが、SK669の掘り残しかは断定できなかった。Pit8は床下検出ながら、Pit7やPit5・6と方形に並び、床面上で見逃した関連柱穴と思われる。カマドは南西隅に位置する石組粘土カマドで、天井部は残存せず、石組と思われる礫が周囲に散在する。また、カマド下部で大きな落ち込みを確認した。埋土に焼土粒を含

まず遺物出土もない。カマド構築の際や改築に伴う造作か、本跡以前の別遺構か根痕等か判断できなかった。遺物は南東付近床面上から土器が少量出土した。本跡の時期は平安3期と思われる。

川久保 SB47 1区南東部1面 IX M07 (第158図 PL22)

川久保1区南東部のNR1c南岸のⅦ層上面で検出した。検出面で、やや不鮮明ながら落ち込みが捉えられ、トレンチを入れたところで完形や完形に近い土器の出土や堅い床面が確認されて本跡を認定した。トレンチを入れながら平面形を確定したが、北辺東部はやや不整形で範囲認定に不安が残る。重複遺構は中世と思われるSF39、SK1940に本跡が切られ、南辺は近世以後の水田造成で削平される。平面形は北西部がやや突出した台形で、1辺3.5mを測る。埋土は灰黄褐色土層を基調とし、炭粒の含まれ方から分層した。壁はやや斜めで、床面は浅い掘方を均したもので中央が堅く、地山のⅦ層下にある土石流堆積層中の礫が頭を出す。施設はビット8基とカマドがある。Pit1・5は性格不明ながら土坑状で、他は柱穴とみられる。Pit2・3・4・8は方形に配置され、Pit6・7はPit3・4と近接し、柱穴とも思われたが断定できない。Pit2から黒色土器A杯Aが出土した。カマドは南辺東隅に位置する石組粘土カマドである。遺存不良で焚口脇と袖中央の石組のみ遺存し、調査当初は西側が焚口と思われたが、石組の配置から焚口は北側と結論した。火床には支脚が検出された。遺物は埋土中からわずかな出土だが、カマド内から裏破片、焚口前や火床周辺から完形や完形に近い黒色土器A杯Aが出土した。本跡の時期は平安2期と思われる。

川久保 SB52 1区南東部1面 IX M01・06 (第160図 PL22)

川久保1区南端のNR1c南岸のⅦ層上面で、SB56の不明瞭な北壁を確認するトレンチで本跡床面が見えられた。SB56はすでに精査中で前後関係は直接確認できなかった。SB52・56重複部分で杯類が複数出土したが、同様の杯がSB56内で認められたことから本跡をSB56が切ると思われる。他に中世と思われるSK701・702に本跡が切られる。また、北西部床下で焼土粒・炭化物を含む落ち込みを検出したが、本跡範囲に収まる位置関係から本跡施設のPit8とした。平面形は1辺3.5～4.5mの方形で、埋土最上層に廃絶以後の堆積と思われるにぶい黄褐色砂質土層、中位から床面上に焼土・炭化物を多く混じる土層と少ない土層が交互に認められた。炭化材は出土していない。床面は浅い掘方を均したもので、中央が堅く南部は軟弱である。床面上ではビット8基とカマド、床下でビット1基を検出した。このうち、Pit6は整理作業での検討でSK701と重なることが判明し、本跡施設ではないと思われる。确实な本跡施設は完形に近い杯3個と小型甕を出土したPit1、床下検出の炭化物・焼土粒を含む埋戻しされたと思われるPit8がある。一部重複しながらPit1・8中間に位置するPit2も関連施設と思われる。他は柱穴状だが、配置に規則性は認めがたく、本跡施設と断定できない。カマドは南辺東隅にある石組粘土カマドで、廃絶以後に壊されて右袖脇に礫が散在し、左袖は残存しない。火床から支脚が検出された。遺物はカマド周辺と床面北側、Pit1内から出土し、本跡の時期は平安1期と思われる。

川久保 SB56 1区南東部1面 IX M01・06 (第159図 PL22)

川久保1区南東部NR1c南岸のⅦ層上面で検出。SF36断面を確認するトレンチで、下層に住居跡が捉えられ、その精査中に検出された火床2基から本跡とSB45の重複が捉えられた。SB45との重複関係は土層観察用ベルトの観察と、本跡と重なる範囲にSB45のカマド火床が位置することからSB45が本跡を切るかと捉えた。また、本跡精査中にSB52との重複が捉えられたが、前後関係は直接確認できなかったものの、重複部分から出土した完形に近い杯類と同様の杯が本跡範囲内で出土したことから、SB52を本跡が切ると捉えた。なお、南辺は近世以後の水田造成で削平されるが、その付近で検出されたPit6とPit7は本跡カマド火床より南外側に位置することから整理作業で別遺構とした。平面形は南北約4.4m、東西

4.1m の方で、上部に近世水田耕作土と思われる褐灰色粘質土層やSF36の炭化物・焼土粒を多く含む土層が載り、本跡埋土は黄灰色の砂を含む粘質シルト層を主体とする。床面上に焼土粒を含む土層が部分的に分布する。遺物はSB52重複付近で完形に近い杯類、カマド火床から裏破片、Pit3内から土器片が出土した。壁はやや斜めで、床面は浅い掘方を均したものが比較的堅く平坦である。施設はビット5基とカマド1基がある。ビットは南辺に沿って並び、Pit1はカマド石組礫の抜き取り痕と思われる。Pit2・8は上面で裏破片が出土し、Pit3も埋土中から裏破片が出土した。柱穴と思われるが、床面上では対応する柱穴が見当たらず、本跡の柱穴と断定はできない。Pit4は形状や埋土から重複する中世の柱穴と思われる。カマドは南辺西隅にある石組粘土カマドである。遺存不良で石組の礫は廃絶時に抜かれた可能性がある。本跡の時期は平安1期と思われる。

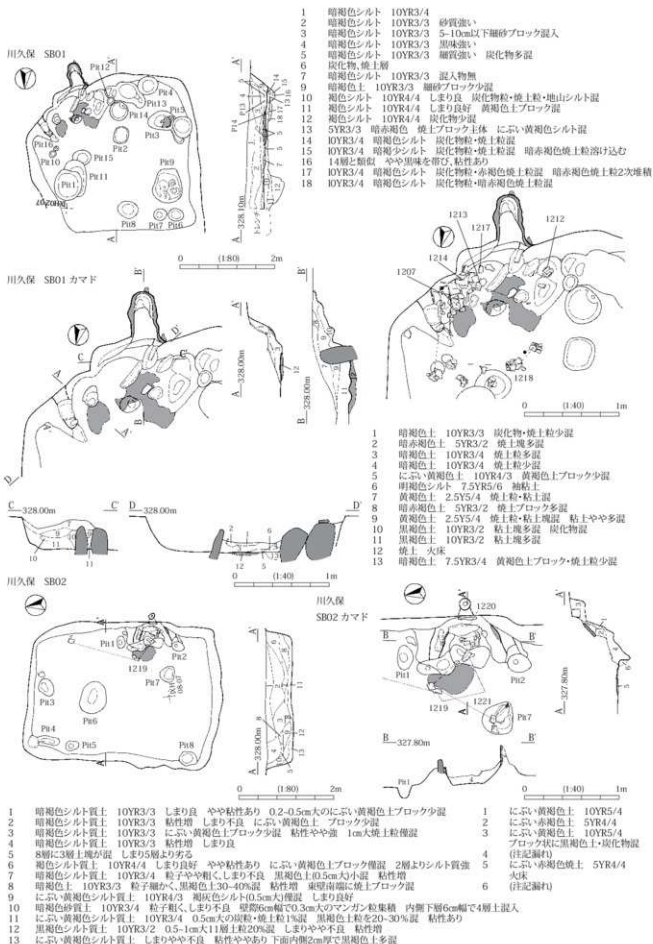
宮沖 SB04 1区2面 XVI W06 (第161図 PL22)

宮沖1区2面中央東よりに位置し、平成18年度の試掘トレンチで発見され、平成19年度に精査した。他遺構との重複では中世建物跡柱穴SK1004・1058・1284・1350・1698、中世畑跡SL01に切られ、古墳時代後期SB05・25・28・29、ST36を切る。南・西辺は明瞭に検出されたが、東・北辺は不明瞭でトレンチを入れながら確定した。本跡平面形は1辺4.3～4.4mのやや隅の丸い方で、埋土は暗褐色土を基調として床面上に黄褐色土ブロックを多く含む土層と焼土・炭化物をやや多く含む土層が認められ、埋土中から出土した土器は少ない。壁は西辺が若干斜めながらほぼ垂直で、床は堅緻だが掘方を均した程度で浅く、床面上で本跡が切る住居跡ビットや掘立柱建物跡柱穴まで検出したと思われる。床面上でビット7基、焼土1基、カマドを検出した。カマドは南辺東隅に位置する石組粘土カマドで、左袖は壊されて周囲に礫が散乱する。Pit1上部・2・5は類似した浅い土坑状で、埋土に炭化物・焼土粒・土器片を含む。調査時に本跡ビットとしたPit1下部・4は整理作業の検討でST36柱穴と捉えられた。Pit1は平安時代土器も多く出土したが、上部と下部の形状が異なることから本跡ビットとST36柱穴が重なったと思われる。遺物はPit1・2・5・7から平安時代土師器・小型裏片、Pit3・4・6は少量の平安時代土師器と共に古墳時代土師器が多く出土した。なお、Pit1上部・2・7と埋土・カマド(1361)、Pit1上部とカマド(1357・1360)、Pit7と埋土(1356)、Pit4とカマド出土土器が接合した。カマドとビット出土土器が接合した背景には、カマド改築に際してカマド廃材や土器がビットに埋められて一部が残存したか、構築材として再利用されたと思われる。焼土は床面中央に東西60cm、南北50cmほどの赤化範囲が認められたが、性格は不明である。本跡の時期は平安2期と思われる。

宮沖 SB07 1区2面 XVI V10・15 (第161図 PL22)

宮沖1区2面の中央西寄りIV層上面で検出。他遺構との重複は、中世のSL01、SK980・989・985・1394・1451・1454・1455・1456・1468・1810・1811に本跡が切られ、本跡が古墳時代後期のSB14・18・27を切る。平面形は5.5×4.7mの南北方向にやや長い長方形を呈し、埋土は黄褐色ブロックを多く含む褐灰色土層で、人為的に埋められたと捉えられる。床は浅い掘方を均したもので、中央南側が方形に浅く窪む。この窪み内は黄褐色土ブロックを多く含む土層で充填されていたが、下面にも堅い床面があって貼り直されている。床面上でビット20基、壁溝、カマドを検出したが、Pit2・3・5・8・10・12・13・20は重複する別遺構と捉えられた。Pit1～4や床下検出SK1768・1769が方形に並ぶと認められたが、整理作業の検討でPit2・3はST29、31の柱穴と捉え、主柱穴とは断定しなかった。Pit16は上面に焼土が載っていることから本跡施設と思われ、床下検出のSK1768～1772は本跡施設と断定できない。また、床面中央の浅い方形の窪みには、接続する浅い溝状の落ち込みが検出され、黄褐色

第3章 検出された遺構と遺物

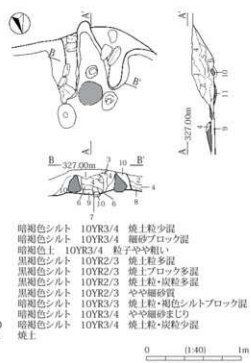


第154図 川久保 SB01・02

川久保 SB09



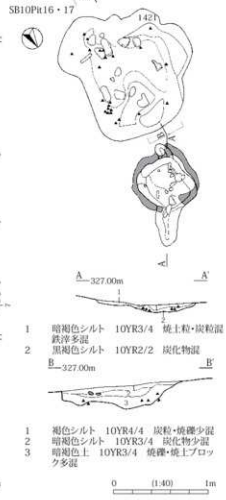
川久保 SB10 カマド



川久保 SB10・SB11

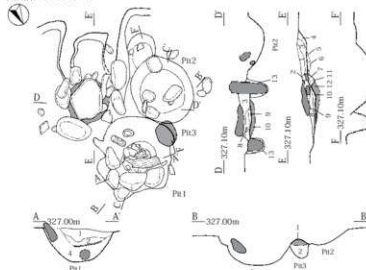


川久保



第 155 図 川久保 SB09・10・11

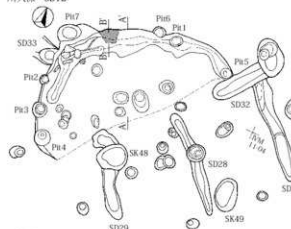
川久保 SB11 カマド



- 1 暗褐色シルト 10YR3/4 焼土粒・黄褐色シルトブロック少混
- 2 にぶい黄褐色シルト 10YR4/3 しまり良 粘性なし
- 3 黒褐色粘質土 10YR2/3 焼土粒・炭粒多混
- 4 暗褐色シルト 10YR3/4 焼土粒・炭粒少混
- 5 黒褐色シルト 10YR2/3
- 6 暗赤褐色焼土 5YR3/3
- 7 暗褐色粘質土 10YR3/3 焼土粒
- 8 黒褐色粘質土 10YR2/3 焼土粒・炭粒混 しまり良 粘性あり
- 9 暗褐色粘質土 10YR3/3 炭化物混
- 10 暗褐色粘質土 7.5YR3/4 焼土粒多混
- 11 にぶい黄褐色粘質土 10YR4/3 しまり弱 粘性あり
- 12 暗褐色土・褐色焼土 5YR3/6・7.5YR5/6
- 13 黒褐色粘質土 10YR2/3 炭化物・焼土粒少混 粘性強

- 1 暗褐色シルト 10YR3/4 やや砂質 焼土粒・炭粒少混
- 2 黒褐色粘質土 10YR2/2 焼土粒・炭粒多混
- 3 暗褐色シルト 7.5YR3/3 焼土ブロック・炭化物主体
- 4 暗褐色粘質土 10YR3/3 焼土粒・炭粒混

川久保 SB12



- (SB11 Pi2)
- 1 暗褐色シルト 10YR3/4 焼土粒・褐色土ブロック少混
 - 2 褐色シルト 10YR4/4 黄褐色土ブロック少混
- (SB11 Pi3)
- 1 極暗赤褐色・黒褐色土 5YR2/4-2/2 焼土ブロック混在 固くしまる
 - 2 暗褐色シルト質土 10YR3/4 焼土ブロック混

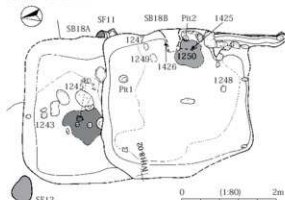
(SPA-SPA)

- 1 黒褐色土 10YR2/3 にぶい黄褐色シルトブロック少混
- 2 黒褐色土 10YR2/2 にぶい黄褐色シルトブロック少混
- 3 黒褐色土 10YR2/2 しまり良・粘性強 にぶい黄褐色土ブロック混 固くしまる(粘味)

(SPB-SPB)

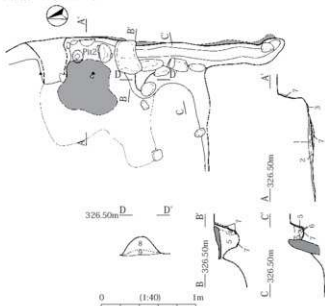
- 1 暗褐色焼土 5YR5/6
- 2 黒褐色土 10YR2/2 にぶい黄褐色土ブロック少混
- 3 黒褐色土 10YR2/2 にぶい黄褐色土ブロック多混

川久保 SB18A・B



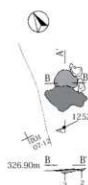
- 1 にぶい黄褐色土 10YR4/3 焼土粒・炭粒多混 固くしまる
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3 炭化物薄層状に混
- 3 暗褐色土 10YR3/3 焼土粒・炭粒多混
- 4 極赤褐色土 5YR2/4 焼土ブロック混在
- 5 黒褐色土 10YR3/2 炭化物中にぶい黄褐色土粒混
- 6 黒褐色土 10YR3/2 炭化物を層状に敷混
- 7 極暗褐色焼土 7.5YR2/3
- 8 にぶい黄褐色土 10YR4/3 褐色土上粒混
- 9 灰黄褐色土 10YR5/3 にぶい黄褐色土ブロック少混

川久保 SB18B カマド



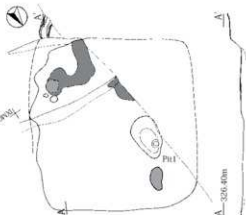
第156図 川久保 SB11・12・18A・18B

川久保 SB19

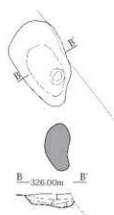


- 1 褐色砂 10YR4/4 焼土粒・炭粒混
- 2 褐色砂 10YR4/4 焼土ブロック混
- 3 明赤褐色砂 5YR5/6 焼土
- 4 焼土ブロック

川久保 SB20

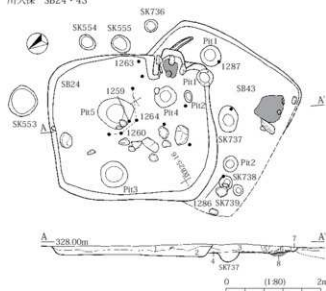


川久保 SB20Pn1



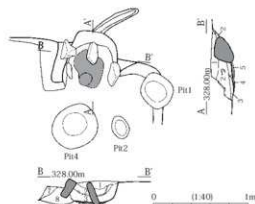
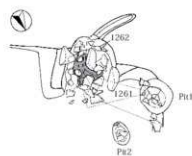
- 1 褐色砂 10YR4/4 炭化物多混
- 2 褐色砂 10YR4/4
- 3 明褐色土 2.5YR5/8 焼土ブロック・炭化物混在

川久保 SB24・43

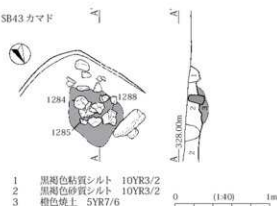


- 1 灰黄褐色土 10YR5/2 1cm以下の暗褐色粘質土・灰白色土のブロック多混
1・2層境に所々薄く炭層あり
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 炭粒少混
- 3 灰黄褐色砂質シルト 10YR4/3 炭多混
- 4 灰黄褐色砂質シルト 10YR4/2
- 5 焼土ブロック
- 6 黒褐色土砂質シルト 10YR3/2
- 7 黒褐色粘土質シルト 10YR3/2
- 8 褐色焼土 5YR7/6

川久保 SB24 カマド



川久保 SB43 カマド



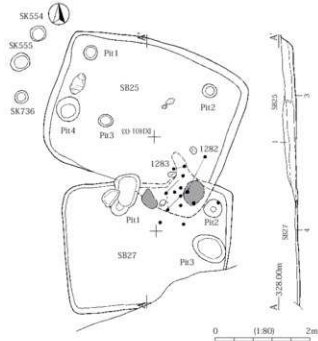
- 1 黒褐色粘質シルト 10YR3/2
- 2 黒褐色砂質シルト 10YR3/2
- 3 褐色焼土 5YR7/6

- 1 灰黄褐色粘質シルト 10YR5/2 黄灰白色シルトブロック多混
- 2 黒褐色砂質シルト 10YR3/2 焼土ブロック・炭粒多混
- 3 黒褐色砂質シルト 10YR3/2 1cm以下の焼土ブロック・炭粒多混
- 4 暗褐色砂質シルト 7.5YR3/4 焼土ブロック多混 炭少量混
- 5 灰黄褐色粘質シルト 5YR4/3 焼土ブロック多混
- 6 暗褐色シルト 7.5YR3/4
- 7 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2
- 8 灰黄褐色粘質シルト 10YR5/3 黄灰白色シルトブロック多混

第157図 川久保SB19・20・24・43

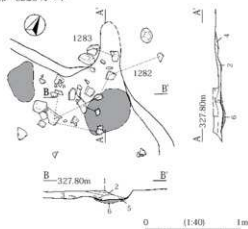
第3章 検出された遺構と遺物

川久保 SB25・27



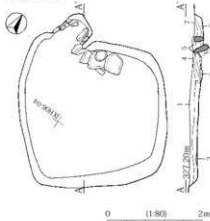
- 1 灰黄褐色細砂質シルト 10YR5/2 粘性あり 礫・焼土粒・炭粒少混
- 2 灰黄褐色細砂質シルト 10YR4/2 粘性あり 1cm以下の灰白色細砂ブロック混
- 3 灰黄褐色シルト 10YR6/2 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土ブロック混
- 4 灰黄褐色細砂質シルト 10YR4/2 粘質あり

川久保 SB25 カマド

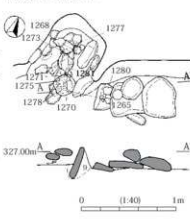


- 1 灰黄褐色土 10YR5/2 1-2cm下黄灰白色シルトブロック多混
- 2 暗赤褐色焼土 2.5YR3/2
- 3 灰黄褐色砂質シルト 10YR5/2 焼土ブロック少混 1-2cm下黄灰白色シルトブロック混
- 4 黒色炭層 10YR2/1
- 5 灰黄褐色砂質シルト 10YR4/2 焼土ブロック多混
- 6 暗赤褐色焼土 2.5YR3/2

川久保 SB26

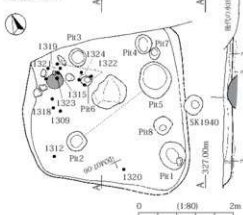


川久保 SB26 カマド



- 1 黒褐色細砂質シルト 10YR3/1 炭粒多混
- 2 灰黄褐色細砂質シルト 10YR4/2 粘性強く、ややしまる 1cm以下の暗褐色粘質土ブロック・炭粒少混
- 3 黒褐色土 10YR3/1 炭化物多混
- 4 灰黄褐色砂質シルト 10YR4/2 炭化物少混
- 5 灰黄褐色砂質シルト 10YR4/2 黄灰白色シルトブロック多混
- 6 黒色土 10YR2/1 炭化物・炭灰混在
- 7 灰黄褐色細砂質シルト 10YR5/2 炭化物・炭粒少混
- 8 灰黄褐色細砂質シルト 10YR5/2 焼土粒・炭粒多混
- 9 灰黄褐色細砂質シルト 10YR4/2 粘性あり、しまる

川久保 SB47



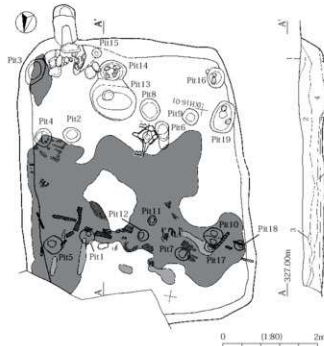
川久保 SB47 カマド



- 1 灰黄褐色砂質シルト 10YR5/2 砂多混 細砂質炭粒多混
- 2 灰黄褐色砂質シルト 10YR5/2 やや粘性あり 褐色シルトブロック多混
- 3 にぶい黄褐色シルト 10YR5/4 砂混 しまり良好(粘床)
- 1 黒褐色土 10YR3/1 炭・灰・焼土粒多混
- 2 褐色砂質土 10YR4/4 炭・焼土なし

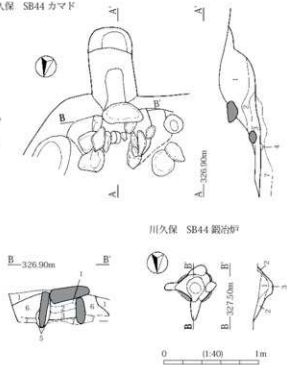
第158図 川久保 SB25・26・27・47

川久保 SB44



- 1 灰黄褐色シルト 10YR5/2 細砂多混 やや粒子粗い・砂主体
- 2 灰黄褐色シルト 10YR5/2 細砂少混
- 3 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 細砂ブロック多混 砂粒混
- 4 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 炭粒多混(東北壁脇多)
- 5 相灰粘質シルト 10YR4/1 炭粒少混
- 6 褐色砂質土 10YR4/4 灰黄褐色粘土少混
- 7 にぶい黄褐色シルト 10YR5/3 灰白色シルトブロック混
- 8 灰黄褐色シルト 10YR4/2 炭粒多混
- 9 にぶい黄褐色シルト 10YR5/3 灰白色シルトブロック多混
炭粒・鉄滓多混
- 10 灰黄褐色シルト 10YR5/2 黄灰白色シルトブロック混

川久保 SB44 カマド



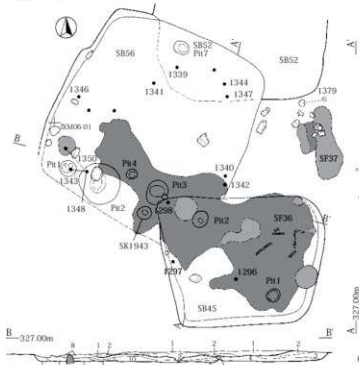
(SB44 カマド)

- 1 灰黄褐色砂質シルト 10YR4/2 焼土・炭粒少混
- 2 灰黄褐色粘質シルト 10YR5/2 炭粒・焼土粒少混
- 3 黒褐色炭屑 10YR3/1
- 4 暗褐色粘質土 10YR3/4 炭化物多混
- 5 褐色粘質土 10YR4/4 砂混
- 6 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 砂混
- 7 褐色砂質土 10YR4/4 灰黄褐色粘土少量混

(SB44 竪穴)

- 1 灰黄褐色シルト 10YR4/2 砂混
- 2 灰黄褐色シルト 10YR4/2 炭化物少混
- 3 黒色土 10YR2/1 炭化物・鉄滓小片混

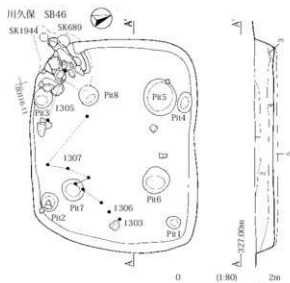
川久保 SB45・56



- 1 相灰粘土 10YR6/1 にぶい黄褐色(10YR7/2)
細砂ブロック混
- 2 相灰粘質シルト 10YR5/1 砂多混
- 3 黒褐色砂多混シルト 10YR3/1 炭粒・焼土粒多混
- 4 黄灰色砂混シルト 2.5Y5/1 灰黄色(2.5Y7/2)シルト
ブロック多混
- 5 黄灰色砂多混シルト 2.5Y5/1 焼土粒・炭粒多混
- 6 黒褐色粘質土 10YR3/1
- 7 灰黄褐色砂混シルト 10YR5/2
- 8 黒褐色砂混シルト 10YR3/1 炭粒・焼土粒多混
- 9 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2
- 10 黄灰色シルト 2.5Y5/1
- 11 黄灰色砂混粘質シルト 2.5Y5/1 焼土粒・炭粒多混
- 12 暗灰黄色粘質粘質シルト 2.5Y5/2 焼土粒少混
- 13 黒褐色砂多混シルト 10YR3/2 炭粒・焼土ブロック
・焼土粒多混
- 14 暗灰黄色粘質シルト 2.5Y5/2

第159図 川久保 SB44・45・56

第3章 検出された遺構と遺物



- 1 灰黄褐色砂質シルト 10YR4/2 全体的に細砂質
1-2cm下細砂ブロック多混
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR5/2
- 3 灰黄褐色土 10YR5/2 炭粒混
- 4 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 2層より粘性強
- 5 にぶい黄褐色シルト 10YR6/2 粘性あり

川久保 SB52

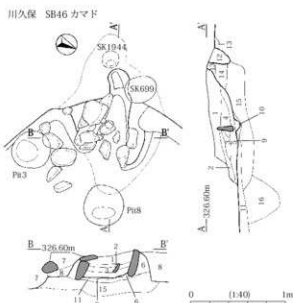


- 1 にぶい黄褐色砂質シルト 10YR5/3 砂均一に混 しまりあり 粘性強い
 - 2 灰黄褐色土 10YR4/2 炭粒少混 所々準大炭化材混
 - 2' 灰黄褐色土 10YR4/2 炭粒少混 所々準大炭化材混 焼土粒混
 - 3 灰黄褐色土 10YR4/2 細く炭粒少混 準大炭化材少混
 - 4 褐色シルト 10YR4/1 砂混むが粘性強くしまる 炭粒多混
 - 5 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 炭粒多混
 - 6 にぶい黄褐色シルト 10YR6/3 灰黄褐色(10YR4/2)シルトにぶい黄褐色
(10YR6/3)細砂ブロック混在
- pi4 黒褐色砂質シルト 10YR3/2 炭粒少混 砂ブロック混

川久保 SB34

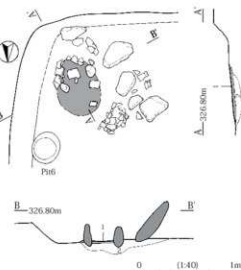


- 1 褐色シルト 7.5Y4/4 団結した焼土
- 2 暗赤褐色シルト 5YR3/6 団結した焼土
- 3 暗赤褐色シルト 5YR3/2 炭少量混部分あり



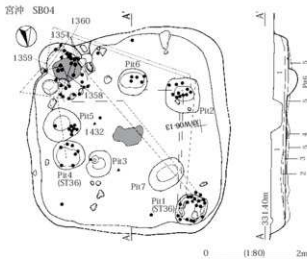
- 1 灰黄褐色シルト 10YR4/2 砂質強い
- 2 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 炭粒・焼土粒少混
- 3 灰黄褐色粘質シルト 10YR5/2
- 4 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 炭粒・焼土粒少混
- 5 黒褐色土 10YR3/1 炭・炭混在
- 6 黒褐色粘質土 10YR3/2 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルトブロック混
- 7 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 炭粒・焼土粒少混
- 8 黒褐色土 10YR3/1 炭粒・焼土粒多混
- 9 暗赤褐色砂質シルト 5YR3/2 炭土粒少混
- 10 にぶい黄褐色シルト 10YR4/3 粘性弱く、炭化物やや多混
- 11 にぶい黄褐色シルト 10YR4/3 灰黄褐色(10YR5/2)砂質シルト小ブロック多混
- 12 暗褐色シルト 10YR3/3 炭粒少混
- 13 暗褐色土 10YR3/4 灰黄褐色(10YR5/2)シルトブロック少混
- 14 褐色砂質シルト 10YR4/4 粘性弱く、炭化物少混
- 15 褐色シルト 10YR4/4 粘性弱く、にぶい黄褐色(10YR5/4)土・灰黄褐色
(10YR5/2)土の小ブロック少混
- 16 灰黄褐色砂質シルト 10YR5/2 粘性弱

川久保 SB52 カマド



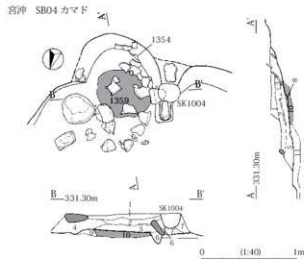
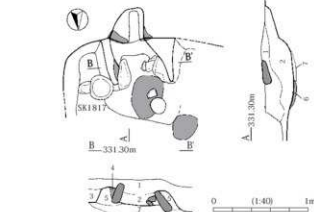
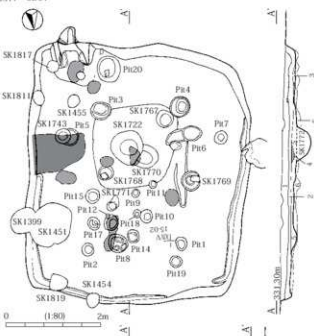
- 1 焼土
- 2 灰黄褐色土 10YR4/2 灰白色土ブロック少混

第160図 川久保 SB34・46・52



- 1 黒褐色粘質土 10YR3/2 細い焼土粒・炭粒少混
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1cm大の黄褐色土ブロック多混
- 3 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 細い黄褐色土ブロック少混 焼土粒・炭粒少混
- 4 焼土
- 5 褐色粘質土 10YR4/1 1cm大焼土粒・黄褐色土粒多混

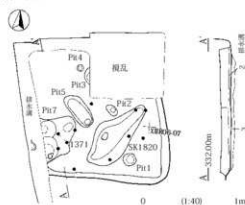
宮沖 SB07



- 1 褐色粘質土 10YR4/1 1-3cm大焼土ブロック少混
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1-3cm大黄褐色土ブロック多混 焼土粒・炭粒少混
- 3 黒褐色粘質土 10YR3/1 焼土ブロック少混
- 4 褐色粘質土 10YR4/1 1cm大焼土粒・炭粒多混
- 5 黒褐色粘質土 10YR3/1 焼土粒・炭粒多混
- 6 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 炭粒・焼土粒少混 粘性強く、しまる
- 7 褐色粘質土 10YR4/1 黄褐色土粒少混
- 8 褐色土 7.5Y7/6 焼土主体
- 9 に、黄褐色粘質土 1cm大黄褐色土ブロック多混
- 10 褐色土 7.5Y7/6
- 11 褐色粘質土 10YR4/1 1cm大焼土粒・黄褐色土粒多混

- 1 褐色粘質土 10YR4/1 1cm大黒褐色・黄褐色土ブロック少混 炭粒・焼土粒少
- 2 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1cm大黄褐色土ブロック多混
- 3 2層に炭粒多混
- 4 に、褐色土 7.5Y5/4 焼土
- 5 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 炭粒・焼土粒多混
- 6 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 1-3cm大黄褐色土ブロック多混

宮沖 SB21



- 1 黒色粘質土 10YR2/1 粘性・しまりあり 炭化物・黄褐色土ブロック10%混
- 2 黒褐色粘質土 10YR3/1 黄褐色土ブロック混 1層より軟らかく、硬さい
- 3 黒褐色シルト 10YR3/2 粘性・しまり良 炭化物混(湿方)

- 1 褐色粘質土 10YR4/1 炭粒・焼土粒少混
- 2 黒褐色粘質土 10YR3/1 炭化物・焼土ブロック多混
- 3 灰黄褐色粘質土 10YR4/2
- 4 焼土
- 5 黒褐色粘質土 10YR3/2 1-3cm大黄褐色土ブロック多混
- 6 焼土
- 7 黒褐色粘質土 10YR3/2 1cm以下の黄褐色土ブロック多混

第161図 宮沖SB04・07・21

土ブロックを多く含む土で充填されていた。性格は不明である。これ以外に中央から北部で焼土6基が検出された。焼土1のみ細かい焼土粒からなるが、他は直接被熱で赤化する。埋土に炭化材の出土もなく、焼土の性格は不明である。カマドは南辺東寄りにある焚口脇のみ平石を立てた粘土カマドで、袖石が若干内側に傾く。カマドの中心軸は南辺に対してやや西に振っており、北西カマド脇で検出された焼土は古いカマド火床かもしれない。壁溝は浅いながら西・北・東辺北側まで黒褐色土層の帯状の落ち込みと明瞭に認められ、東辺南側から南辺のSB27との重複部分はやや不明瞭である。遺物は埋土より小破片が散漫に出土し、カマド内からはほとんど出土していない。土器は古墳時代後期～奈良時代土器片が5.836gと多く、焚口脇に礫を立てるカマド形態も古墳時代後期～奈良時代に認められる。奈良時代住居跡の可能性はあるが、本跡が古墳時代末のSB14を切り、平安時代土器876gを出土したことから、平安時代の遺構と捉えた。なお、須恵器双孔棒状土鍾(1137)が東壁の壁溝内から出土した。本跡の時期は平安1・2期とも思われるが不明である。

宮沖SB21 1区2面 XIV R06 (第161図)

宮沖1区2面北端で検出された。北東部は現代の攪乱で壊され、西辺は調査区外へ延びて全容は不明だが、西壁際にカマド火床が認められ、平面形は1辺3.0m強のやや菱形に近い方形と思われる。他遺構との重複では本跡が古墳時代前期SK1820を切る。埋土は地山の黄褐色ブロックをわずかに含む黒褐色粘質土層で、東壁際にやや明るい黒褐色土、床面に黄褐色土ブロックを含む黒褐色土が分布する。壁は東壁が若干斜めながらほぼ垂直で、床面は浅い掘方を均したもので比較的堅い。調査時にピットと捉えたものは5基あり、Pit6は古墳時代前期土器の出土から整理作業でSK1820に変更した。Pit1～4は柱穴とみられるが、本跡の辺とは異方向に並ぶように見受けられ、重複遺構と思われる。Pit5・7は不整形な形状から根拠の疑いがある。西辺南寄りの床面上の焼土をカマド火床と捉えたが、調査区境にあって構造や規模は不明である。平安時代の土器片が散漫に出土した。本跡の時期は平安1期と思われる。

(2) 掘立柱建物跡 (第28表)

当該期の掘立柱建物跡は川久保ST07・41の2棟のみある。川久保1区南東部や川久保2・5区などでも平安時代土器を出土した柱穴が認められ、上記の数以上の掘立柱建物跡が存在すると思われる。掘立柱建物跡は規模が捉えきれなかったが、2×3間前後と思われ、柱穴は川久保ST07ではSK07のみ大き目だが、それ以外は小型で中世の柱穴と大差ない。川久保ST41の柱穴は大きく比較的規模が類似する。

第28表 平安時代掘立柱建物跡一覧表

遺跡	ST	調査区	地区	柱配置		桁				柱穴			
				梁×桁	長さ(m)	柱間寸法(m)	長さ(m)	柱間寸法(m)	長さ(m)	柱間寸法(m)	柱方向	平面形	平面規模(平均cm)
川久保	07	2区1面	IX H05, I01	倒柱 2以上×3以上	7	1.8～3.1	2.4以上	2.4	N60° E	円・楕円形	20～50 (30)	327.70～327.82 (327.75)	18～48
川久保	41	2区1面	IX H13	倒柱 2×2	3.6	1.4～1.6	3	1.84・1.70	N2° E	円形	30～60 (47.3)	325.70～326.08 (325.82)	38～76

川久保ST07 2区1面 IX H05, I01 (第162図)

川久保2区1面北部のIV層上面で検出した。整理作業の柱穴配置検討で、柱穴分布が希薄ななかでPit3・4・6・7とSK07がL字形に並ぶと認めて認定した。重複する遺構はないが、本跡内に入るSEO1は本跡施設ではないと思われる。本跡北半は調査区へ延び、梁行と桁行規模は不明である。調査区内では桁行

3間以上(7.0m以上)、梁行1間以上(2.2m以上)の側柱建物跡と捉えられた。桁行の方位はN60°Eで、桁行の柱間寸法は西より1.8、2.1、3.1mと一定しない。柱穴は直径20～40cmの円形で、深さはSK07のみ検出面から底面まで50cmと深く、他は20cm前後だが、底面標高は327.70～.80mと近似する。埋土はⅢ層基調の黒褐色土で、SK07より須恵器甕が出土し、本跡は平安1・2期と思われる。

川久保5T41 2区1面 IX H13 (第162図)

川久保2区NR1bの4c層上面で検出。整理作業で古墳時代後期川久保SB16内のPit1・2で平安時代土師器小型甕や甕片が出土し、改めてSB16のピット配置を検討したところPit6・2・3が東西に直線的に並び、Pit2から南直交方向にPit1・SK66、さらにSK66の西直交方向にSB18Pit1が位置すると見受けられた。断片的ながら柱穴が方形に並ぶ可能性から、2×2間の総柱建物跡と捉えた。隣接するSB18内に重なる部分や、SB16Pit3から南へ続く柱穴は未確認である。規模は東西2間で約3.0m、南北は2間約3.6mを測る。棟方向は不明だが、南北方向の柱穴の並びはN2°Eで、ほぼ方位を合せている。出土遺物は古墳時代土師器と平安時代土師器小型甕・甕片があり、本跡の時期は平安1・2期と思われる。

(3) 土坑 (第29表)

出土遺物から平安時代と捉えた土坑は3基あり、それぞれ川久保1・2区、宮沖1区の竪穴住居跡分布に近い場所で検出された。

第29表 平安時代土坑一覧表

土坑	位置	調査区 調査面	平面形	長軸×短軸 (cm)	断面形	深さ (cm)	埋土の特徴・出土遺物・備考
川久保SK65	IX M02・03	2区1面	不整長方形	290×224	U字形?	30	埋土は黒褐色砂質土 微量量含む。土層出土
川久保SE01	IX I01	2区1面	楕円形	137×99	U字形	74	埋土は黒褐色砂質土基調 小規模な井戸跡か
宮沖SK1481	XVI R21	1区2面	楕円形?	50×32	逆台形	12	本来、SK1620と同一墓坑の一部と思われる 大型片土器出土
宮沖SK1620	XVI Q25	1区2面	楕円形	52×40	逆台形	10	本来、SK1481と同一墓坑の一部と思われる 大型片土器出土

川久保SE01 2区1面 IX I01 (第162図)

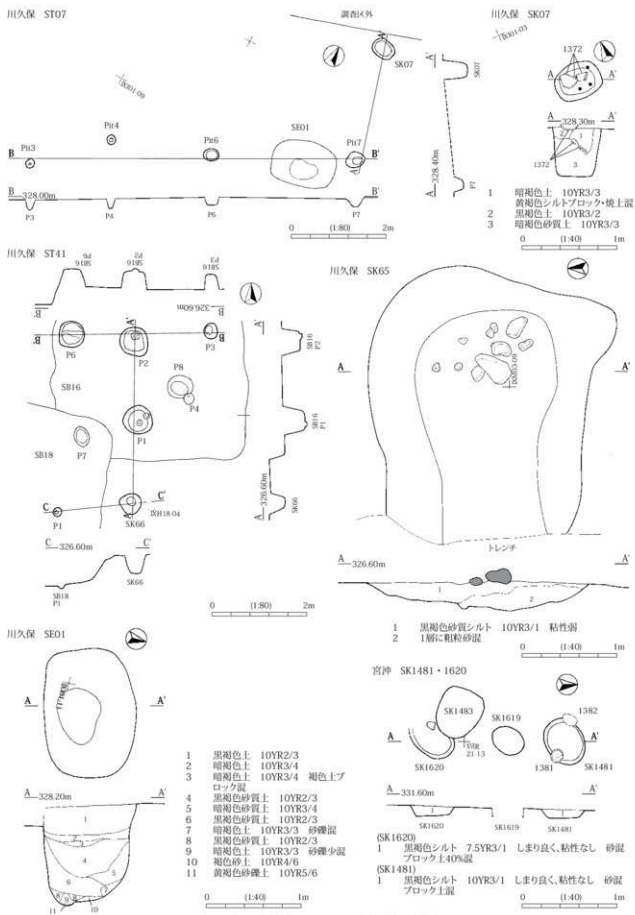
川久保2区北部に位置し、IV層上面の1面で検出した。直接重複しないがST07内に位置する。平面形は長軸約1.4m、短軸約1.0mの楕円形で、断面形はU字形で深さ約1.1mを測る。埋土は下部に暗～黒褐色の砂質土、中層に埋め土と思われるブロック土を含む暗褐色土、最上部に黒褐色土が入る。遺物は破片ながら平安時代の須恵器や土師器破片が出土し、平安3・4期の井戸跡とみられる。

川久保SK65 2区1面 IX M02・03 (第162図)

川久保2区1面の南西端、NR1b上面で検出した。西側はトレンチにかかって形状の詳細は不明である。残存部分の平面形は長軸約2.9m、短軸約2.4mの隅丸長方形とみられ、断面形は立ち上がりか緩やかなU字形である。埋土は腐植した砂質土で、下部にやや粒子の粗い砂が含まれる。また、埋土上層から拳大～人頭大の礫や破片が出土した。性格不明ながら出土土器から平安1期の土坑と判断した。

宮沖SK1481・1620 1区2面 XVI Q25・R21 (第162図)

宮沖1区北部の2面で検出した。SK1481とSK1620を別の土坑として調査したが、南北約1m離れて位置し、SK1481から完形や完形に近い黒色土器A杯A・黒色土器長頸瓶、SK1620からも同様に黒色土器A杯Aが出土した。宮沖遺跡内で平安時代土器を出土した土坑は周囲になく、近接して土器を同様に出土することから同じ土坑の底部を別に捉えたものと考えた。平面形はそれぞれ長軸0.5mほどの楕円形を呈して深さは10cmと浅い。同一土坑ならば平面形は長軸1mを超える長楕円形とみられ、完形や完形に近い食膳具や壺の出土から墓跡の可能性はある。平安2期と思われる。



第162図 川久保 ST07・41、平安時代の土坑

(4) 焼土跡

出土遺物から平安時代と捉えられた焼土跡は川久保 SF36・37 のみがある。

川久保 SF36・37 1区南東1面 IX M01・06 (第159図)

川久保1区南東部1面で、川久保 SB45・56 上部で炭化材や焼土粒を多く混じる土層が東西約5.6m、南北約2.5mの不整楕円形に認められ SF36 と捉えた。また、その北東部に近接して南北約1.5m、東西約0.6mの楕円形焼土と、炭化物質を挟んで長軸0.6m、短軸0.2mに並ぶ焼土を SF37 と捉えた。SF36・37 は隣接し、関連する焼土跡と考えられる。出土遺物は黒色土器 A 杯 A や土師器小型甕があり、平安時代の遺構と捉えたが、下層の川久保 SB45・56 の土器を混入した中世遺構の可能性もある。

3 平安時代の遺物

(1) 平安時代の土器

ア 概要

ここでは竪穴住居跡出土を中心とする9～12世紀前半の土器について記述する。11世紀後半～12世紀前半の土器は中世の柱穴や遺構外から出土したものが散見されるが、厳密な型式学的な検討を加えられず、中世に当該期土器の一部を掲載した可能性がある。平安時代の土器は川久保1～3・5区、宮沖1・5区などの段丘上の広範囲で出土し、川久保4区のみ出土していないが、これは平安時代遺構がトレンチで確認できず、土器が含まれるⅢ層を掘削したことによる。上記の土器分布を遺構分布に重ねると、竪穴住居跡が検出された川久保1区南東端～2区西部、宮沖1区では土器出土量が多いが、遺構がない川久保1区・5区、宮沖5区でも土器は出土し、何らかの遺跡居住者の活動領域であった可能性が窺える。なお、焼物種や器種分類は松本平の古代土器分類(小平1990)を参照したが、土師器甕や須恵器甕を初めとして中信地域と土器様相が異なることから厳密な分類を行わず援用にとどめた。時期区分は後述する。

イ 焼物種

土師器、黒色土器、須恵器、軟質須恵器、少量の灰釉陶器とわずかながら緑釉陶器がある。

土師器：明褐色を基調とした酸化炭焼成の土器で、ロクロ調整、タタキ成形など須恵器と同様の調整方法によるものが多い。なお、椀や皿の高台片など土師器・黒色土器の識別ができなかった破片は計測に際して黒色土器・土師器と表記した。

黒色土器(内黒)：内外面に炭素を吸着させた土器で、内面のみ黒色処理したものを黒色土器 A、内・外面を黒色処理したものを黒色土器 B と呼称した。ロクロ調整で基本形を形づくり、黒色処理の前処理でミガキ調整を伴う。黒色土器 A は杯・椀類など多くあり、黒色土器 B は壺・小型壺・小椀など少量ある。

須恵器：古墳時代以来の青灰色の還元炭焼成の硬質な焼物で、ロクロ調整、タタキ成形による。土師器とは比較的識別しやすいが、軟質須恵器との識別が難しい個体がある。

軟質須恵器：須恵器より焼成温度が低く、やや軟質で灰色を基調として内・外底周辺に黒斑を残す焼物。須恵器の焼成不良品ともみられるが、杯類のみあり、内底面の造作は黒色土器杯と同様に体部の立ち上がりがかたで、内底と体部の境が屈曲しない。時期区分の指標となることもあり、ここでは須恵器と分離した。杯 A のみがあり、1254 は灰白色に近い色調の緻密な胎土で搬入品の可能性がある。

灰釉陶器・緑釉陶器：東海地方で焼成されたと思われる釉を掛けた陶器である。

ウ 器種 (164図)

ここでは食膳具、貯蔵具、煮炊具に大別し、各器種について記述する。

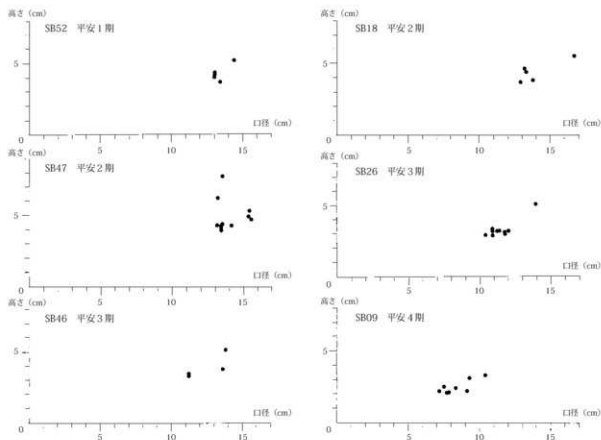
(ア) 食膳具

杯A・杯B・蓋・椀・小椀・皿・盤・鉢など食物を盛ると思われる器種を食膳具と総称する。食膳具には多様な器種・焼物種があり、組合せもさまざまある。竪穴住居跡別で最も出土量が多いのは川久保SB47の62片2,274gで、川久保SB52の22片1,116g、川久保SB01の144片1,089gが続く。多い例でも1～2kg台で、少ないものは川久保SB27の3片13g、同SB34の7片46g、同SB25の3片85gがある。住居跡の遺存状況によって出土土器量が異なって単純に比較しにくい、善光寺平南部や松本平の古代集落遺跡の竪穴住居跡土器出土量に比べて少ない。時期別に竪穴住居跡出土土器内の食膳具出土量を比較すると、平安1・2期は1～144片13～1,116g、平均27.1片532.5gで住居跡出土土器の重量比15.3%、破片数比18.6%程度である。一方、平安3期では2軒しかないが、76・44片、1559g・866gで、平均60片1,212.5gで住居跡出土土器のなかでの食膳具の出土重量比47.2%、破片数では61.9%を占める。平安4期は5～150片87～958gまでであるが、平均64.6片741.8gで重量比は49.2%、破片数比71.7%である。時期を追って食膳具の比率が高まるが、11世紀の竪穴住居跡出土の食膳具重量・破片数は、それ以前の住居跡出土土器に比べて多いわけではなく、貯蔵具・煮炊具種の出土量減少と土器が食膳具を中心とする傾向が反映されて、食膳具の比率のみ高まると理解される。

焼物種の構成は黒色土器Aが全時期を通して5～6割を占め、黒色土器の多さが当地域の特色と思われる。混入の可能性のあるものも含めて竪穴住居跡出土の焼物種を重量比で比較すると、平安1・2期では須恵器：軟質須恵器：黒色土器A：土師器：灰軸陶器が28.5：8.1：58.9：2.3：0.1で残りが土師器か黒色土器Aか識別できないものである。平安3期では須恵器：黒色土器A：土師器が0.2：48.0：51.8で、平安4期では須恵器：黒色土器A：土師器：灰軸が2.1：48.4：42.1：7.4である。一貫して黒色土器Aが主体で、須恵器の減少と土師器の相対的な増加と灰軸陶器が増える推移が窺える。

器種の構成では平安1・2期は須恵器・軟質須恵器・黒色土器Aの杯Aを中心に、黒色土器A・灰軸陶器の椀・皿があり、平安3期ではやや小型化した土師器杯Aとやや大きめの黒色土器A杯A、黒色土器A椀、灰軸陶器椀、平安4期では小型化した土師器杯Aが2法量と黒色土器A椀・杯A、黒色土器A・土師器盤や小椀が加わる。このなかで須恵器杯Bと蓋は小片が多く、確実に伴うと言い得る例はわずかしがなく、土師器椀も小椀以外は出土量が少ない。また、10・11世紀の大きめの黒色土器A杯Aは、越後で無台椀と呼称される椀の高台省略形とみられる。11世紀の土師器杯Aは2法量あり、信濃の他地域でも大・小の2法量だが、本遺跡はいずれも小型で、浅いものは他地域にも認められる小皿状の杯ながら、深めのもは小椀の高台省略形とみられる。大量量の杯Aの確実な例は捉えられなかった。

杯A 体部が直線的に斜めに開いた平底逆台形の器形で、焼物種は須恵器、黒色土器A、軟質須恵器、土師器がある。土師器と軟質須恵器の底部調整は回転糸切りが多く、黒色土器A杯Aに外底～周辺を回転、手持ちヘラケズりするものがある。第163図に各住居跡出土杯Aの法量を図示したが、大きく3グループが認められる。一つは川久保SB18・47・52の例で、口径13.1～14.1cmで器高は3.7～4.3cmと6.2・7.8cmの黒色土器Aを中心に須恵器・軟質須恵器杯Aと、口径15.3～15.5cmで器高4.7～4.9cmの黒色土器杯Aという、口径が異なる2種で構成されるグループである。もう一つは川久保SB26・46を代表とする口径10.4～12.0cm、器高2.9～3.2cmの土師器杯Aと、口径13.8cm、器高4.3～5.2cm黒色土器A杯Aからなるグループ、もう一つは川久保SB09を代表とする口径7.2～10.4cm、器高2.2～3.1cmの小型の土師器杯Aからなるグループである。川久保SB26・46の2法量の杯Aは焼物種が異なり、黒色土器A杯Aの1278は高台を省



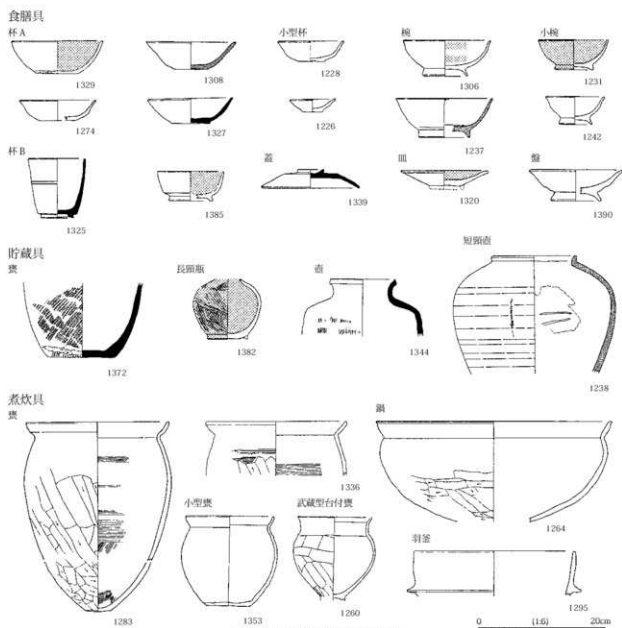
第163図 平安時代竪穴住居跡出土杯A法量分布

略した椀にあたると思われる。また、川久保SB09では小型杯Aに口径7.1～8.3cm、器高3.2～3.6cmと口径9.1～10.4cm、器高4.0cmの2グループが見受けられる。口径9.1～10.4cmで器高4.0cmの1228・1229は高台省略の小椀とみられ、口径7.1～8.3cm器高3.2～3.6cmの杯Aが、11世紀に大・小2法量分化する杯Aの小型杯Aに該当すると思われる。川久保SB18・47・52の法量は松本平の古代土器編年で示された法量分布による時期区分では松本平7・8期、川久保SB26・46は同10・11期、川久保SB09は器高では同14期前後にあたると思われる。ここでは松本平編年7期を川久保・宮沖遺跡の平安1期、松本平8期を平安2期、10・11期を平安3期、14期を平安4期に対応すると捉える。

本遺跡では高台を省略した椀＝杯Aが多い特徴がある。出土土器の計測作業では厳密な法量まで含めた識別ができず高台の有無のみで椀と杯Aをわけたが、杯Aと椀の識別ができない体部破片は杯椀と呼称した。当地域では、高台を付けた椀・皿の有無を時期区分の指標とにくい。

杯B・蓋 奈良時代から継続する腰が折れた器体に高台が付く器形で、蓋がセットになる。杯Bは須恵器が中心で1385の黒色土器Aがわずかにある。竪穴住居跡埋土出土量が少ない上に破片出土が多く、一部は奈良時代の混入品も含まれる可能性がある。1325は口径に比して器形が高いコップ形で、体部に2条沈線がつき、計量カップの可能性が指摘される器形(和田2011)に類似する。蓋は端部を「く」字形に折り、握みは宝珠形と1339の輪状がある。

椀・皿 黒色土器A・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器がある。深い器体で高台が付く器形を椀、口径の大きな浅い器体で高台が付く器形を皿とした。上述したように、高台の有無で椀と杯Aを識別し、口縁破片



第164図 平安時代土器器種分類

等で高台の有無が不明なものは杯碗とした。高台省略の碗相当の法量の器も杯 A としたため、碗自体は少ない。碗は黒色土器 A を主体に土師器は小碗が認められたが、土師器碗は不明瞭で、他に灰釉陶器碗はわずかにある。また、黒色土器碗は灰釉陶器碗と同様に体部が直線の 1387 と、腰の張る深い器体の 1389 があるが、9 世紀でも深碗に近い器形の 1319、11 世紀でも体部が直線の 1232 があり、碗の形態差を時期区分の指標とにくい。なお、灰釉陶器は 1234 が光ヶ丘 1 号～大原 2 号窯式、1293 は虎浜山 1 号窯式、1237 は丸石 2 号窯式と思われる。緑釉陶器は図示した 1388 の 1 個体がある。破片資料ながら体部が緩やかな S 字を描く 1209・1210 は尾張系山茶碗のⅢ・Ⅳ型式と思われ、全周しない鈿の羽釜、柱状高台付杯や小型杯類に伴うもので混入と思われる。皿は 1320 など黒色土器 A がわずかにある。

盤 1235・1294・1390 など高台の付く浅い小型皿形の器形で、土師器がある。

鉢 平底で杯 A より大きめの器形を鉢とした。図示し得たものはない。

(イ) 貯蔵具

貯蔵具は壺・甕がある。竪穴住居跡の貯蔵具の焼物種別合計では須恵器 108 片 6.941g、黒色土器 B1 片 14g、灰釉陶器 7 片 880g で、須恵器が主体である。甕など大型貯蔵具は須恵器のみしかなく、黒色土器や灰釉陶器は壺類が少量ある。須恵器は県内産が主体と思われるが、当該期に搬入されている可能性がある佐渡小泊窯製品は識別できなかった。竪穴住居跡毎の貯蔵具の出土比は、全時期を通して破片数比では 1 割以下で、重量比は 5 割を占める住居跡もあるが、2～3 割が少量で、基本的に 1 割前後かそれ以下が多い。土器出土量が少ないなかでは混入品でも数値に大きな影響が出て単純に比べにくい、SB34 を除いて SB18 を二つに分離した場合、1 軒あたり平均では破片数 4.9 片、重量 338.2g となる。

壺 出土量は少なく、竪穴住居跡出土貯蔵具の破片数比で 27.8%、重量比で 29.1% にあたる。壺類にはさまざまな器形があり、黒色土器 B 短頸小型壺 1211、須恵器長頸瓶 1259、黒色土器 B の同 1382、灰釉陶器の 1365 がある。9 世紀後半前後のものが多い。他に須恵器のタタキ調整を残す短口縁の壺 1344、灰釉陶器短頸壺 1238 がある。

甕 大型貯蔵具は須恵器甕があるが、全体形が窺えるものがない。須恵器甕の 1372 も下半部の破片で全体形は不明である。他に肩に凸帯がつく信濃固有の須恵器四耳甕が川久保 SB52、宮沖 SB04 から出土した。内面調整はナデ調整で平底となる。佐渡小泊産須恵器甕の有無は検討できなかった。

(ウ) 煮炊具

煮炊きに関わると思われる器種をまとめる。すべて土師器で、甕・小型甕・羽釜・鍋があり、甕は確認できなかった。竪穴住居跡出土煮炊具は合計 1,798 片 45,065g で、その内訳は小型甕 244 片 5,543g、甕 1,400 片 36,769g、鍋 99 片 1,436g、羽釜 34 片 904g、甕・羽釜の識別ができなかったもの 15 片 218g、武蔵型台付甕 6 片 195g で、圧倒的に甕が多い。ただし、甕には信濃や越後のさまざまな産地のものが含まれる可能性はあるが、仔細な識別はできなかった。各時期の竪穴住居跡別出土土器に占める煮炊具の割合は 9 世紀代の平安 1・2 期では重量比平均 73.3%、破片比では平均 75.2% と比較的高いが、10 世紀代の平安 3 期では重量比平均 67.1%、破片比平均 31.9%、平安 4 期では重量比平均 29.4%、破片比平均 21.3% となる。小型甕、甕、鍋はいずれも類似した胎土と成形・調整方法によるが、後述するように口縁形態は多様なものがあり、複数産地の搬入品で構成される可能性がある。特に口縁端部を面取し、尖らせるものは北陸方面の影響が強いように思われる。わずかだが武蔵型の台付甕も 1 個体出土している。

甕 北陸方面の甕と同様の砲弾型の器形で、胴部中央から上部がやや張り、底部は小さい平底か、丸底となる長胴の甕である。外面は縄を巻いた棒や格子目・平行タタキ痕、内面に当て具痕を残すタタキ成形により、胴外面下部をタテケズリ、内面下半をタテ方向のハケ、上部は一部回転を利用したカキメで当て具痕を消して胴上部をロクロナデする。平安 3 期の 1307 にはケズリがなく内外底面をナデ調整する。口縁形態には 1322・1349 など外へ直線的に開いて端部を上方向へ揃みあげるものや、1245 の外へ直線的に開いて端部が尖るもの、1288 の口縁端面を面取するもの、1282・1283 の直線的に開いて端部を丸く納めるもの、1275・1307 のように内湾させるものがある。これらのパリエーションが同一竪穴住居跡出土品に認められるので、複数産地のものがあると思われるが、口縁端部を屈曲、尖らせるもの、面取するものは 9 世紀に多く、内湾するものは 10 世紀に多い傾向はある。春日氏の越後の古代甕の整理によると（春日 2007）、内湾するものは北信型、面取外傾するものを北陸型として、さらに新潟県内の小地型に触れられている。本遺跡で出土した甕は、信濃型に加えて越後産の甕が含まれる可能性がある。甕の流通状況の解明には、より詳細

な分類が必要だが、今回は十分な検討できなかった。

小型甕 平底のロクロ調整甕で、胎土は長胴甕と同じである。胴外面下部や底面をヘラケズリするものがあるが、胴外面にカキメを残すものはない。口縁形態は土師器甕と同様に、直線的に外へ開くもの、内湾ぎみ、あるいは内側に屈曲気味となるものがある。破片は9世紀代の竪穴住居跡から普遍的に出土しており、9世紀に限れば1軒あたり13.9片325.2g前後出土している。10世紀の平安3期では図示したSB26の1281の1個体があるが、平安4期以後では確認できなかった。

武蔵型台付甕 口縁は「コ」字形で胴部をケズリ調整する。1260の9世紀末頃の武蔵型甕が1個体出土した。信濃では千曲川上流域の東信地方に多く分布し、本遺跡例も東信地域からの搬入品かもしれない。

羽釜 胴部から口縁は直線的に立ちあがり、胴上部に鐙がつく。鐙が全周するものと途切れるものがある。途切れるものは柱穴や検出面出土が多い。川久保SB01から出土した1216は山茶碗や白磁碗と共に混入した可能性がある。胎土は砂粒を多く含み、色調も暗褐色系で、ロクロ調整が顕著でないなど土師器甕と様相が異なる。出土量はわずかで全体形が窺えるものはない。

鍋 甕と類似した成形方法によるため、破片では甕と識別しにくいものもあると思われるが、識別し得たものには川久保SB24の1264がある。接合しない破片が多いが、同一個体である。これ以外に識別し得た破片はなく、個体数は少ないとみられる。

ウ 個別出土例

以下には竪穴住居跡を中心とする代表的な遺構出土土器を報告する。実測個体の比率は土器重量比で、個体数は肉眼観察による推定である。個体数は破片数が多いほど誤差を生じやすく、あくまでも目安に過ぎない。器種の「杯椀」は杯か椀か識別できない破片を指し、「甕釜」も胴部破片で甕か羽釜か判断つかないもの、黒色土器・土師器は底部破片などで黒色土器Aか土師器か識別できなかったものを指す。

川久保SB01 (第166図)

床上～埋土から平安時代土器9,067g、古墳時代前期土器635g、古墳時代後期土器811g、不明土器1,610gと、ピットから土師器甕や黒色土器A杯片など平安時代土器1,018gが出土した。本跡の時期は平安1期と思われるが、わずかに平安4期～12世紀の土器を混入する。平安1期の土器は8,602gで、内訳は黒色土器A杯A30片27個体587g、同椀2片2個体20g、同杯椀58片39個体238g、黒色土器B小型壺1片1個体14g、黒色土器・土師器椀2片2個体8g、須恵器杯A17片13個体68g、同蓋3片3個体15g、同甕13片13個体385g、同壺4片3個体34g、土師器小型壺41片28個体880g、同甕328片77個体6,353gがある。平安4期～12世紀の土器は465gあり、土師器杯A7片7個体77g、同杯椀20片20個体63g、同羽釜15片4個体312g、灰緑陶器椀・山茶碗4片4個体10g、白磁碗1片1個体3gである。山茶碗は緩やかにS字を描く器形である。土師器杯には平安1期の黒色が曖昧なものを含む。図示した土器は黒色土器A杯Aが2個体190g(1207・1208)、黒色土器B小型壺1個体14g(1211)、土師器小型甕2個体425g(1212・1215)・同甕4個体2,166g(1213・1214・1217・1218)、羽釜1個体186g(1216)、山茶碗2個体6g(1209・1210)の合計2,987gで、床上～埋土出土平安時代土器の重量比で32.9%に相当する。口縁5/8以上の遺存は黒色土器A杯1個体(1207)と小型甕1個体(1212)のみで、他は3/8以下である。

川久保SB02 (第166図)

床上～埋土から平安時代土器1,914g、古墳時代後期土器418g、古墳時代前期土器409g、不明土器470gが出土した。平安時代土器は須恵器杯Aが17片17個体89g、同蓋2片2個体48g、同甕10片

10 個体 95g、黒色土器 A 杯 A が 7 片 7 個体 30g、同杯碗 16 片 16 個体 69g、土師器杯碗 5 片 5 個体 26g、同杯 A 1 片 1 個体 7g、土師器小型甕 5 片 4 個体 220g、同甕 56 片 51 個体 1,326g である。土師器杯や杯碗片は小片のため識別できないもので、須恵器・黒色土器 A が主体である。また、碗と断定できたものはない。口縁遺存 2/8 以下しかなく、図示したものは土師器小型甕 1 個体 188g (1219)、同甕 2 個体 847g (1220・1221) の合計重量 1,035g で、土師器甕類の 66.9%、平安時代土器全体の 54.1% にあたる。ピットからは Pit6 より古墳時代前期土器 3g、Pit8 より古墳時代後期土師器 7g が出土した。本跡は平安 1 期である。

川久保 SB09 (第 166 図 PL59)

床上～埋土より平安時代土器 927g、古墳時代後期土器 282g、時期不明土器 145g、Pit5 から平安時代土師器杯 A1 片 1 個体 2g、Pit6 から平安時代土師杯 A1 片 1 個体 7g、Pit12 から不明土器 2g、床下から平安時代土師器杯 A1 片 1 個体 7g、古墳時代後期土器 31g・不明土器 3g が出土した。口縁遺存 5/8 以上は土師器小型杯 A 7 個体 (1222～1228)、黒色土器 A 碗 1 個体 (1230) で、他は 4/8 以下である。床上～埋土出土土器の内訳は須恵器甕 5 片 1 個体 115g、土師器杯 13 片 8 個体 69g、同小型杯 A 8 片 8 個体 375g、同杯碗片 6 片 6 個体 32g、同甕 5 片 4 個体 51g、同小型甕 1 片 1 個体 3g、黒色土器 A 小碗 4 片 1 個体 104g、同碗 1 片 1 個体 45g、黒色土器 B 小碗 1 片 1 個体 100g、同杯碗 7 片 3 個体 19g、同碗 1 片 1 個体 14g である。土師器杯 A 8 個体 375g (1222～1229)、黒色土器 A 碗 1 個体 45g (1232) 同小碗 1 個体 104g (1231)、黒色土器 B 小碗 1 個体 100g (1230) の合計 624g を図示し、出土重量比 67.3% にあたる。本跡の時期は平安 4 期である。

川久保 SB10 (第 166・167 図)

床上～埋土中から平安時代土器 2,545g、古墳時代前期土器 5g、古墳時代後期土器 52g、不明土器 290g が出土した。Pit4 から古墳時代後期土器 8g、不明土器 2g、Pit9 から黒色土器 A 碗 1 片 1 個体 79g、同杯碗 2 片 2 個体 15g、不明土器 1g、Pit10 から不明土器 2g、SB10・11 検出時に平安時代土器 335g、古墳時代後期土器 74g、不明土器 107g が出土した。床上～埋土の平安時代土器は灰軸陶器壺 2 片 1 個体 745g、同碗 5 片 2 個体 139g、須恵器杯 A が 9 片 5 個体 30g、同甕 5 片 5 個体 840g、同長頸瓶 1 片 1 個体 2g、土師器杯 A29 片 24 個体 163g、同小型杯 1 片 1 個体 5g、同盤 3 片 3 個体 25g、同甕 20 片 14 個体 185g、同小型甕 5 片 4 個体 30g、同羽釜 2 片 1 個体 15g、黒色土器 A 碗 6 片 6 個体 191g、同杯 A3 片 3 個体 25g、同杯碗 44 片 20 個体 150g がある。灰軸陶器碗は 1234 が大原 2 号窯式、1237 が丸石 2 号窯式と思われる、1238 胴部に焼成前の亀裂補修痕がある。図示したのは灰軸陶器壺 1 個体 745g (1238)、同碗 2 個体 139g (1234・1237)、土師器小型杯 A1 個体 5g (1233)、同盤 1 個体 15g (1235)、黒色土器 A 碗 1 個体 135g (1236) の合計 1,039g で平安時代土器の 40.8% にあたる。口縁遺存は 3/8 以下しかない。平安 4 期と思われる。

川久保 SB11 (第 167 図)

床上～埋土から平安時代土器 1,705g、古墳時代後期土器 69g、不明土器 195g、Pit 1 から不明土器 8g、Pit 2 から平安時代土師器杯碗 1 片 1 個体 1g と不明土器 7g が出土した。床上～埋土の平安時代土器の内訳は須恵器甕 4 片 4 個体 417g、同杯 1 片 1 個体 2g、灰軸陶器碗 2 片 2 個体 6g、土師器小型杯 A10 片 6 個体 185g、同碗 1 片 1 個体 30g、同小碗 2 片 1 個体 90g、同杯碗 6 片 6 個体 25g、同甕 5 片 5 個体 98g、同羽釜 1 片 1 個体 36g、甕釜 15 片 14 個体 218g、同小型甕 6 片 4 個体 44g、黒色土器 A 碗 12 片 5 個体 247g、同杯 7 片 6 個体 80g、同杯碗 26 片 17 個体 227g である。図示したのは土師器小

型杯Aの2個体110g(1239・1240)、黒色土器A椀1個体105g(1241)、土師器小椀1個体90g(1242)の合計305gで平安時代土器の重量比17.9%にあたる。口縁遺存5/8以上は土師器杯(1239・1240)のみある。本跡は平安4期と思われる。

川久保SB12

床上～埋土から平安時代土器319gと不明土器少量が出土した。平安時代土器の内訳は黒色土器A杯椀1片1個体2g、土師器羽釜5片3個体232g、同裏1片1個体9g、同盤3片1個体76gで、口縁遺存1/8以下しかなく、図示し得た土器はない。土師器盤や羽釜の出土から平安4期と思われる。

川久保SB18 (第167図 PL59)

重複住居跡の可能性からA・B別に土器を採取したが、当初1軒として一括取り上げた土器は平安時代土器268g、弥生時代後期6g、古墳時代後期80g、不明土器40gがあり、内訳は須恵器杯Aが2片2個体16g、土師器小型裏4片4個体26g、同裏20片8個体205g、黒色土器A杯1片1個体21gがある。

SB18Aの埋土より平安時代土器1,220g、古墳時代後期土器36g、不明土器73gが出土した。内訳は食膳具が須恵器杯A7片7個体306g、同杯Bが1片1個体7g、同蓋1片1個体2g、黒色土器A杯A2片1個体18g、同盤1片1個体16gの合計349gで28.6%、貯蔵具は須恵器長頸瓶1片1個体19gで1.6%、煮炊具は土師器小型裏2片1個体12g、同裏33片14個体840gで852g69.8%を占める。杯Aは須恵器と黒色土器Aがあり、口縁遺存5/8以上は須恵器杯Aの1個体(1243)しかない。須恵器杯A2個体219g(1243・1244)、土師器裏2個体700g(1245・1246)の合計919gで重量比75.3%を図示した。

SB18Bは平安時代土器1,870g、古墳時代後期土器306g、不明土器50gが出土した。平安時代土器の内訳は、食膳具が須恵器杯Bが1片1個体10g、同蓋1片1個体8g、軟質須恵器杯Aが2片2個体20g、黒色土器A杯Aが3片3個体638g、同杯椀2片2個体24gの合計700gで37.4%を占め、貯蔵具は須恵器裏2片2個体132gで7.1%、煮炊具は土師器小型裏3片3個体222g、同裏33片14個体816gの合計1,038g55.5%にあたる。口縁遺存度5/8以上は黒色土器A杯Aの3個体(1247～1249)のみある。黒色土器A杯A3個体638g(1247～1249)、小型裏1個体195g(1250)の合計833g、出土土器重量比で44.5%を図示した。SB18Bの土師器裏は小片で図示し得なかった。SB18Bに軟質須恵器片が含まれるが、小片で積極的に時期差と断定しにくく、須恵器杯Aの存在からは平安1期と思われる。1245・1246はSB18AとB出土土器が接合した。

川久保SB19 (第167図)

床上～埋土から平安時代土器586g、古墳時代前期土器35g、古墳時代後期土器152g、不明土器26gと焼粘土塊が出土した。平安時代土器は須恵器杯Aが2片2個体200g、同杯Bが1片1個体13g、同裏1片1個体14g、黒色土器A杯椀2片2個体12g、土師器裏21片8個体317g、同小型裏5片5個体30gがあり、須恵器杯Aの2個体200g(1251・1252)、出土土器重量比34.1%を図示した。口縁遺存度5/8以上は須恵器杯A1個体(1252)しかなく、他は1/8以下の遺存である。本跡は平安1期である。

川久保SB20 (第167図)

床上～埋土より平安時代土器338g、古墳時代後期土器59g、不明土器30gが出土した。平安時代土器の内訳は須恵器杯A・Bが1片1個体16g、同裏2片2個体81g、須恵器杯Aが1片1個体49g、黒色土器A杯A1片1個体10g、土師器小型裏5片5個体24g、同裏7片5個体158gがある。床下から土師器裏1片1個体2g、黒色土器A杯A1片1個体5g、古墳時代後期土器50gが出土した。口縁遺存は1/8以下のみで出土量も少ない。須恵器杯Aの1個体49g(1253)の14.5%を図示した。平安2期と思われる。

川久保SB24 (第167・168図 PL59)

床上～埋土中より平安時代土器 8,202g、古墳時代前期土器 106g、古墳時代後期土器 91g、中世焼物 12g、不明土器 70g が出土した。平安時代土器の内訳は須恵器杯 A が 1 片 1 個体 6g、同杯 B が 1 片 1 個体 17g、同蓋 1 片 1 個体 4g、同壺 2 片 1 個体 34g、同長頸瓶 1 片 1 個体 270g、同甕 15 片 4 個体 2,756g、軟質須恵器杯 A が 6 片 4 個体 248g、黒色土器 A 杯 A が 7 片 5 個体 227g、同杯碗 14 片 8 個体 105g、土師器小型甕 34 片 11 個体 577g、同武蔵型台付甕 6 片 1 個体 195g、同甕 140 片 67 個体 2,327g、同鍋 99 片 1 個体 1,436g である。口縁遺存 5/8 以上は黒色土器 A 杯 A が 1 個体 (1258)、土師器小型甕 2 個体 (1260・1261) のみで、他は 4/8 以下の遺存である。図示したのは軟質須恵器杯 A が 3 個体 237g (1254～1256)、黒色土器 A 杯 A が 2 個体 122g (1257・1258)、須恵器長頸瓶 1 個体 270g (1259)、土師器小型甕 1 個体 398g (1261)、同武蔵型台付甕 1 個体 195g (1260)、同甕 2 個体 1,127g (1262・1263)、同鍋 1 個体 1,436g (1264) の合計 3,785g で、床上～埋土出土土器の重量比 46.1% にあたる。本跡の時期は平安 2 期と思われる。

川久保SB25

平安時代土器 547g、古墳時代後期土器 103g、不明土器 26g がある。平安時代土器の内訳は須恵器杯 A が 3 片 3 個体 85g、同甕 1 片 1 個体 24g、土師器小型甕 4 片 4 個体 39g、同甕 26 片 18 個体 399g でいずれも口縁遺存 2/8 以下である。図示し得た土器はない。平安 1・2 期と思われる。

川久保SB26 (第168図 PL59)

床上～埋土中より平安時代土器 4,276g、古墳時代前期土器 21g、古墳時代後期土器 550g、不明土器 77g が出土した。平安時代土器の内訳は須恵器杯 A が 1 片 1 個体 5g、同甕 3 片 3 個体 67g、黒色土器 A 杯 A が 5 片 4 個体 158g、同碗 10 片 8 個体 497g、同杯碗 19 片 18 個体 92g、土師器杯 A が 16 片 16 個体 593g、同碗 2 片 1 個体 86g、同杯碗 20 片 12 個体 90g、黒色土器・土師器碗 1 片 1 個体 5g、黒色土器 A 鉢 2 片 1 個体 33g、土師器小型甕 8 片 8 個体 490g、同甕 46 片 17 個体 2,010g、同羽釜 3 片 2 個体 150g である。口縁遺存 5/8 以上は土師器杯 A が 1 個体 (1267)、同甕 1 個体 (1271) で、他は 4/8 以下である。黒色土器 A 碗 2 個体 188g (1279・1280)、土師器杯 A が 9 個体 537g (1265～1270・1272～1274)、黒色土器 A 杯 A が 1 個体 123g (1278)、土師器小型甕 1 個体 408g (1281)、同甕 3 個体 1,685g (1271・1275・1277)、同羽釜 1 個体 117g (1276) の合計 3,058g で、平安時代土器の重量比 71.5% を図示した。土師器杯 A は小型化しているが分化していない。羽釜は鈎が認められないが、内湾ぎみに直立する口縁の形状から認定した。平安 3 期と思われる。

川久保SB27 (第168図)

床上～埋土から平安時代土器 2,359g、古墳時代後期土器 67g、不明土器 15g、Pit4 から平安時代須恵器甕 1 片 1 個体 13g、土師器甕 8 片 8 個体 313g が出土した。平安時代土器の内訳は黒色土器 A 杯碗 3 片 3 個体 13g、土師器小型甕 6 片 6 個体 86g、同甕 52 片 27 個体 2,260g で、出土土器の大半がカマド出土の煮炊具で 99.4% にあたる。いずれも口縁遺存は 4/8 以下である。図示したのは土師器甕 2 個体 1,619g (1282・1283) で床上～埋土出土土器の平安時代土器の重量比 68.6% に当たる。平安 2 期と思われる。

川久保SB34

床上で平安時代土器 153g、古墳時代後期土器 470g、不明土器 125g が出土した。平安時代土器の内訳は須恵器杯 A が 4 片 4 個体 25g、同蓋 1 片 1 個体 13g、同壺 1 片 1 個体 5g、同甕 1 片 1 個体 28g、黒色土器 A 杯 A が 2 片 2 個体 8g、土師器小型甕 1 片 1 個体 9g、同甕 3 片 1 個体 65g である。古墳時代後

期土器は黒色土器A杯18片15個体110g、同盤3片2個体68g、同壺4片2個体68g、土師器小型壺1片1個体7g、同甕19片18個体192g、同甕1片1個体15g、同高杯1片1個体10gがある。図示したのは古墳時代後期黒色土器A盤1個体45g(562)で、古墳時代後期内の9.6%、全体の6.0%に該当する。平安時代・古墳時代後期土器はいずれも口縁遺存1/8以下しかない。SB35からの混入と思われる古墳時代後期土器が多いが、平安時代遺構がない川久保5区内で一定量平安時代土器が出土したことから平安時代の遺構と考えた。時期の詳細は不明だが、須恵器杯の出土から平安1期以後と思われる。

川久保SB43 (第169図)

床上～埋土から平安時代土器2,086g、不明土器2gが出土した。他にPit1から古墳時代後期土器1片1個体5gが出土した。平安時代土器は食膳具が須恵器杯Aが1片1個体170g、黒色土器A杯Aが4片4個体349gの合計519gで24.9%、煮炊具は土師器小型甕10片5個体89g、同甕31片23個体1478gで合計1,567gの75.1%である。食膳具は杯Aのみあり、67.2%が黒色土器A、残りが須恵器で、平安1期と思われる。口縁遺存5/8以上は須恵器杯Aが1個体(1284)のみで他は2/8以下しかない。図示したのは須恵器杯Aが1個体170g(1284)、黒色土器A杯Aが2個体337g(1285・1286)、土師器甕2個体446g(1287・1288)の合計953gで床上～埋土出土土器の重量比45.7%にあたる。平安1期と思われる。

川久保SB44 (第169図)

床上～埋土から平安時代土器1,012g、不明土器42g、羽口が41片827g出土した。平安時代土器の内訳は、食膳具が灰釉陶器碗3片3個体96g、黒色土器A杯Aが3片2個体38g、同碗17片6個体272g、同杯碗8片8個体51g、土師器盤3片2個体67g、同杯Aが20片14個体127g、同杯碗5片5個体22gの合計673gで66.5%、貯蔵具が須恵器甕1片1個体19gの1.9%、煮炊具が土師器甕8片8個体69g、同小型甕3片1個体34g、同羽釜6片4個体217gの合計320gで31.6%を占める。貯蔵具は小破片で混入の可能性があり、煮炊具の甕や小型甕もわずかで本跡に伴うとは断定できない。土師器杯Aは2法量あるが、小型杯と高台省略の小碗とみられる。図示したのは虎渓山1号窯式と思われる灰釉陶器碗1個体90g(1293)、黒色土器A碗1個体33g(1292)、土師器杯Aが3個体77g(1289～1291)、同盤1個体36g(1294)、同羽釜1個体99g(1295)の合計335gで床上～埋土出土土器の重量比33.1%にあたる。平安4期と思われる。なお、羽口(1398～1401)は土製品の項に掲載した。

川久保SB45 (第169図)

埋土より平安時代土器982gが出土し、内訳は軟質須恵器杯Aが1片1個体130g、土師器小型甕3片2個体320g、同甕17片10個体532gである。図示したのは軟質須恵器杯Aの1個体130g(1296)、土師器小型甕2個体320g(1297・1298)の合計450gで重量比45.8%にあたる。残る54.2%の土師器甕は小片で図示し得なかった。口縁遺存度5/8以上は軟質須恵器杯A1個体(1296)、4/8遺存が土師器小型甕1個体ある。他は1/8以下である。これ以外に本跡と川久保SB56の重複が捉えられる以前に一括して取り上げた土器は、平安時代土器3,391gがあり、内訳は灰釉陶器皿1片1個体5g、須恵器杯Aが5片5個体60g、同杯Bが1片1個体5g、同甕3片3個体150g、黒色土器A杯Aが12片8個体275g、同杯碗9片9個体75g、同碗1片1個体25g、同皿1片1個体25g、土師器小型甕44片31個体616g、同甕155片82個体2,155gである。土師器小型甕・甕の推定個体数は多いが、小片が多く誤差を含む。出土土器は口縁遺存3/8以下しかない。図示したのは黒色土器A杯Aが1個体40g(1299)と土師器小型甕1個体326g(1300)で、合計366gの出土土器重量比10.8%にあたり、図示し得ない甕小片が63.6%を占める。平安2期と思われる。

川久保SB46 (第169図 PL59・60)

床上～埋土より平安時代土器 3547g、古墳時代後期～奈良時代土器 195g、不明土器 8g が出土した。古墳時代後期～奈良時代須恵器は混入と思われる横瓶 1 個体 195g である。平安時代土器の内訳は、食膳具が土師器杯 A が 26 片 13 個体 487g、黒色土器 A 椀 9 片 2 個体 205g、同杯 A が 3 片 1 個体 156g、同杯椀 6 片 2 個体 18g の合計 866g で 24.4%、煮炊具は土師器甕 5 片 2 個体 2,601g、同小型甕 6 片 1 個体 20g、同羽釜 3 片 3 個体 60g の合計 2,681g で 75.6% を占め、貯蔵具はない。土師器杯 A は法量分化しておらず、土師器甕は胴部に縄目タタキを残してケズリは認められない。図示したのは土師器杯 A が 4 個体 345g (1301～1304)、黒色土器 A 杯 A が 1 個体 156g (1305)、同椀 1 個体 160g (1306)、土師器甕 1 個体 2,240g (1307) の合計 2901g で出土土器の重量比 81.8% にあたる。口縁遺存 5/8 以上は土師器杯 A が 3 個体 (1301～1303) と同甕 1 個体 (1307) があり、他は 3/8 以下しかない。本跡の時期は平安3期と思われる。

川久保SB47 (第170図 PL60)

床上～埋土より縄文土器 30g、弥生土器 10g、古墳時代後期土器 193g、平安時代土器 5,054g、不明土器 2g が出土した。平安時代土器の内訳は、食膳具が須恵器蓋 1 片 1 個体 15g、軟質須恵器杯 A 3 片 3 個体 103g、黒色土器 A 杯 A が 22 片 20 個体 1,414g、同椀 1 片 1 個体 213g、同杯椀 32 片 25 個体 310g、同皿 3 片 2 個体 219g の計 2,274g で 45.0%、貯蔵具は須恵器壺 5 片 2 個体 153g、同甕 3 片 3 個体 39g の計 192g で 5.8%、煮炊具は土師器甕 104 片 97 個体 2,349g、同小型甕 21 片 16 個体 239g の計 2,588g で 51.2% を占める。口縁遺存 5/8 以上は黒色土器 A 杯 A が 3 個体 (1309・1314・1318)、同皿 1 個体 (1320)、同椀 1 個体 (1319)、口縁遺存 4/8 は黒色土器杯 A が 2 個体あり、他は 3/8 以下の遺存である。食膳具は軟質須恵器が杯 A の 6.8% を占め、平安2期と思われる。図示したのは黒色土器 A 杯 A が 10 個体 1,267g (1309～1318)、同椀 1 個体 213g (1319)、同皿 1 個体 174g (1320)、軟質須恵器杯 A が 1 個体 85g (1308)、土師器甕 3 個体 972g (1322～1324)、同小型甕 1 個体 81g (1321) の合計 2,792g で重量比 55.2% にあたる。縄文土器 (56) は第3章第2節に掲載した。

川久保SB52 (第170・171図 PL60)

床上～埋土より平安時代土器 5,775g、不明土器 55g、ビットから平安時代土器小型甕 4 片 4 個体 135g、同甕 6 片 4 個体 100g が出土した。平安時代土器の内訳は須恵器杯 A が 3 片 2 個体 303g、同杯 B が 1 片 1 個体 195g、黒色土器 A 杯 A が 6 片 6 個体 558g、同杯椀 12 片 10 個体 60g、須恵器甕 (四耳壺) 7 片 3 個体 543g、土師器小型甕 16 片 8 個体 545g、同甕 143 片 35 個体 3,571g である。食膳具は須恵器・黒色土器 A 杯 A、須恵器杯 B など 1,116g 19.3%、貯蔵具は須恵器甕 543g 9.4%、煮炊具は土師器甕・小型甕の 4,116g 71.3% である。杯 A は黒色土器 A 64.8%、須恵器 35.2% で、確実に椀と認定し得た破片はない。口縁遺存 5/8 以上は黒色土器 A 杯 A が 3 個体 (1328～1330)、須恵器杯 A が 2 個体 (1326・1327)、小型甕 1 個体 (1333)、甕 1 個体 (1337) で、甕類は小片が多い。1325 の須恵器杯 B はコップ形容器で、計量に用いられた可能性が指摘されるものと類似する (和田 2011)。図示した土器は須恵器杯 A が 2 個体 303g (1326・1327)、同杯 B が 1 個体 195g (1325)、黒色土器 A 杯 A が 3 個体 488g (1328～1330)、土師器小型甕 3 個体 495g (1331～1333)、同甕 5 個体 1,686g (1334～1338) の合計 3,167g で出土土器重量比 54.8% にあたる。平安1期と思われる。

川久保SB56 (第171図)

床上～埋土より平安時代土器 4,723g が出土し、他に Pit 3 から平安時代土師器甕 7 片 6 個体 285g が

出土した。平安時代土器の内訳は、食膳具が黒色土器A杯A17片13個体793g、須恵器蓋1片1個体158gの計951gの20.2%、貯蔵具が須恵器壺3片2個体592gで12.5%、煮炊具は土師器小型甕19片12個体690g、同甕71片33個体2,490gの合計3,180gの67.3%を占める。口縁遺存5/8以上は須恵器壺1個体(1344)、黒色土器A杯A2個体(1340・1341)、土師器甕1個体(1347)があり、他は3/8以下の遺存である。図示したのは黒色土器A杯Aが4個体553g(1340～1343)、須恵器蓋1個体158g(1339)、同壺1個体562g(1344)、土師器小型甕3個体255g(1345・1346・1348)、同甕3個体895g(1347・1349・1350)の計2,423gで床上～埋土出土土器の重量比51.3%に相当する。1339は内面が研磨され、転用碗の可能性もある。平安1期と思われる。

宮沖SB04 (第172図 PL60)

床上～埋土より平安時代土器7,418g、古墳時代後期～奈良時代土器6,256g、弥生時代後期～古墳時代前期土器548g、不明土器3,675g、羽口1片10gが出土した。平安時代土器内訳は、食膳具が奈良時代の可能性も含む須恵器杯18片18個体80g、同蓋11片8個体90g、同盤1片1個体12g、土師器盤1片1個体10g、軟質須恵器杯Aが11片10個体252g、黒色土器A杯Aが7片7個体202g、同杯碗18片18個体135gの合計781gの10.5%、貯蔵具は須恵器壺1片1個体7g、同甕(四耳壺)11片1個体403gの合計410gで5.5%、煮炊具は土師器小型甕32片25個体805g、同甕164片49個体5,422gの合計6,227gで84.0%にあたる。食膳具杯類は軟質須恵器杯Aが口縁遺存5/8以上だが、黒色土器Aは3/8以下で、須恵器は小片で図示し得なかった。古墳時代後期土器も平安時代土器と同量ほど出土したが、周囲の重複住居跡からの混入と思われる。他にPit1から古墳時代後期土器381gと平安時代土師器甕11片9個体189g、Pit2から平安時代土師器甕26片25個体235g、同小型甕4片2個体57g、須恵器杯A1片1個体5gと古墳時代後期土師器甕類83g、不明土器22g、Pit3から古墳時代後期土器31g、奈良時代～平安時代須恵器杯1片1個体5g、Pit4から古墳時代後期土器883g、不明土器22g、Pit5から平安時代須恵器杯1片1個体8g、古墳時代後期土器218g、古墳時代前期土器40g、Pit6から古墳時代後期土器208g、平安時代土師器甕3片3個体20g、不明土器28g、Pit7から古墳時代後期土器197g、平安時代土師器甕2片2個体64g、不明土器18g、ビット不明から古墳時代土師器10gが出土した。Pit1・2・7は平安時代土器が一定量出土したが、他はわずかな出土である。また、ビットから平安時代土師器甕片など煮炊具が出土したが、出土量は少ないながら個体数は多い。なお、Pit1・2・7とカマド出土土器が接合した。Pit4は古墳時代後期土器で占められ、本跡施設ではない可能性がある。図示したのは黒色土器A杯Aが1個体80g(1352)、軟質須恵器杯A1個体170g(1351)、土師器小型甕3個体565g(1353・1355・1356)、同甕7個体4,696g(1354・1357～1362)の合計5,511gで、ビットを含む平安時代土器8,001gの68.9%にあたる。軟質須恵器の出土から平安2期と思われる。混入した古墳時代後期土器は古墳時代後期～奈良時代の項に掲載した。

宮沖SB07 (第172図)

床上～埋土中から平安時代土器876g、古墳時代後期～奈良時代土器5,836g、弥生時代後期～古墳時代前期土器275g、弥生時代中期土器12g、土錘177g、不明土器3,820gが出土した。平安時代土器の内訳は須恵器杯Aが8片8個体69g、同壺6片6個体62g、土師器小型杯Aが4片2個体77g、同碗12片10個体68g、黒色土器・土師器碗1片1個体3g、黒色土器A杯Aが6片6個体58g、同杯碗8片8個体46g、土師器甕42片40個体339g、同小型甕3片3個体19g、灰釉陶器瓶5片1個体135gがある。口縁遺存8/8は土師器杯A1個体(1364)のみで、他は1/8しかない。奈良時代土器は須恵器杯A8片

6 個体 74g、同杯 B が 3 片 2 個体 66g、同裏 2 片 2 個体 250g、同蓋 3 片 3 個体 25g あり、古墳～奈良時代と思われる破片は土師器裏 192 片 166 個体 2.981g、須恵器壺 5 片 5 個体 62g、同裏 41 片 26 個体 1.460g、ミニチュア土器 3 片 3 個体 40g である。古墳時代後期と思われる土器は須恵器杯蓋 3 片 2 個体 70g、同裏 1 片 1 個体 6g、黒色土器 A 杯 80 片 78 個体 585g、同壺 8 片 7 個体 115g、同高杯 1 片 1 個体 27g、土師器壺 1 片 1 個体 32g がある。

古墳時代後期～奈良時代土器の破片数は多いが、推定個体数も多い。また、口縁遺存 3/8 が 2 個体あるが他は 1/8 である。他に Pit3 から古墳時代後期土器 1 片 10g、Pit4 で古墳時代後期～奈良時代土器 148g、不明土器 11g、Pit10 で古墳時代後期～奈良時代土器 48g が出土した。いずれも口縁 3/8 以下の遺存である。図示したのは土師器小型杯 A が 2 個体 77g (1363・1364)、灰釉陶器瓶 1 個体 135g (1365) の合計 212g で、平安時代土器の 24.2% にあたる。古墳時代後期土器は古墳時代後期～奈良時代の項に掲載した。平安時代土器が一定量出土して平安時代遺構と考えたが、遺存良好な土器は平安 4 期の土師器小型杯 A のみで、他に平安 1・2 期の黒色土器 A 杯 A などが混在して詳細な時期は断定できなかった。古墳時代後期～奈良時代の須恵器杯 A・B・蓋も一定量あり、土師器裏片の出土量も多いことから奈良時代の可能性も残る。

宮沖 5B21 (第 172・173 図)

床上～埋土より縄文土器 166g、弥生時代中期土器 26g、弥生時代後期～古墳時代前期土器 3.635g、古墳時代後期～奈良時代土器 907g、平安時代土器 1.135g、不明土器 410g が出土し、Pit1 から古墳時代後期土器 37g、弥生土器 8g、不明土器 2g、Pit2 から弥生～古墳時代前期土器 86g、Pit5 から平安時代土器 524g、古墳時代前期土器 40g、中世焼物 11g、不明土器 4g、カマド掘方から縄文土器 14g、弥生～古墳時代前期土器 397g、古墳時代後期土器 16g、平安時代土器 515g、不明 10g が出土した。Pit5 は重複する中世の建物跡柱穴の可能性が有る。埋土中の平安時代土器の内訳は食膳具が須恵器杯 A3 片 3 個体 25g、同杯 B が 1 片 1 個体 23g、黒色土器 A 杯 A が 13 片 8 個体 331g で合計は 379g33.4%、貯蔵具は須恵器壺 1 片 1 個体 21g で 1.9%、煮炊具は土師器小型裏 3 片 3 個体 79g、同裏 26 片 19 個体 656g で合計 735g64.7% にあたる。杯 A は須恵器 7.0%、黒色土器 A が 93.0% である。口縁遺存 5/8 以上はなく、黒色土器 A 杯 A が 3/8・4/8 が 2 個体 (1368・1369) のみで他は 2/8 遺存以下である。図示したのは黒色土器 A 杯 A が 3 個体 283g (1366・1368・1369)、土師器裏 1 個体 174g (1371) の合計 457g で、埋土出土土器の重量比 40.3% にあたる。他に Pit5 の黒色土器 A 杯 A 1 個体 52g (1367)、土師器小型裏 1 個体 72g (1370) を図示した。平安 1 期と思われる。

川久保 SE01

弥生時代中期土器 25g、古墳時代前期土器 68g、古墳時代後期土器 30g、平安時代土器 246g、不明土器 81g が出土した。平安時代土器の内訳は須恵器杯 A が 2 片 2 個体 15g、同杯 B が 1 片 1 個体 30g、同蓋 1 片 1 個体 3g、同裏 2 片 2 個体 30g、黒色土器 A 杯 A が 3 片 2 個体 10g、土師器杯 5 片 5 個体 49g、杯碗 4 片 4 個体 20g、同裏 2 片 2 個体 13g、同小型裏 3 片 3 個体 76g がある。口縁遺存 3/8 以下で、別個体と思われる破片が多い。図示し得た土器はない。土師器杯片を含むことから平安 3・4 期と思われる。

川久保 5K65 (第 173 図)

平安時代土器 887g、古墳時代後期土器 37g、不明土器 77g が出土した。平安時代土器の内訳は須恵器杯 A が 5 片 4 個体 72g、同杯 B が 3 片 1 個体 28g、同裏 5 片 3 個体 192g、黒色土器 A 杯 A が 6 片 6 個体 322g、土師器裏 13 片 6 個体 102g、同小型裏 11 片 9 個体 171g である。口縁遺存 5/8 以上は黒色土

器A杯Aが1個体(1375)のみで、他は4/8以下である。図示したのは黒色土器A杯Aが2個体285g(1374・1375)と須恵器杯Aが1個体60g(1373)で、合計345gで重量比38.9%に相当する。平安1期と思われる。

宮沖 SK1481・1620 (第173図 PL60)

同一土坑底面を別々に捉えた可能性があり、両土坑合わせて平安時代土器655g、古墳時代前期土器63g、不明土器12gが出土した。平安時代土器の内訳は黒色土器A杯Aが10片5個体321g、黒色土器B長頸瓶1片1個体256g、土師器甕?1片1個体10g、同小型甕2片2個体68gである。口縁遺存5/8以上は黒色土器A杯Aが1個体(1381)で、他は3/8以下である。図示したのは黒色土器A杯Aが3個体266g(1381・1383・1384)と黒色土器B長頸瓶1個体256g(1382)の合計522gで出土土器重量比79.7%にあたる。

その他の土器 (第173図 PL60)

上記以外に、柱穴や他時代の遺構に混入して出土した土器、検出面で出土した土器がある。1376は土師器小型甕、1377は軟質須恵器杯A、1380は土師器小型杯で、川久保1・2区柱穴出土である。検出面や他遺構に混入した土器では、川久保遺跡では平安1・2期の黒色土器Aの杯Aと椀(1385～1387)、緑軸陶器(1388)、平安4期と思われる黒色土器A小碗(1389)、土師器盤(1390)、土師器羽釜(1391)を図示した。宮沖遺跡では平安4期と思われる土師器小椀(1392)、小型杯(1393・1395)、軟質須恵器杯A(1394)、土師器羽釜(1396・1397)がある。これらの平安4期の土器は遺構が捉えられなかった地区で出土しており、中世と捉えた柱穴に当該期のものがある可能性がある。

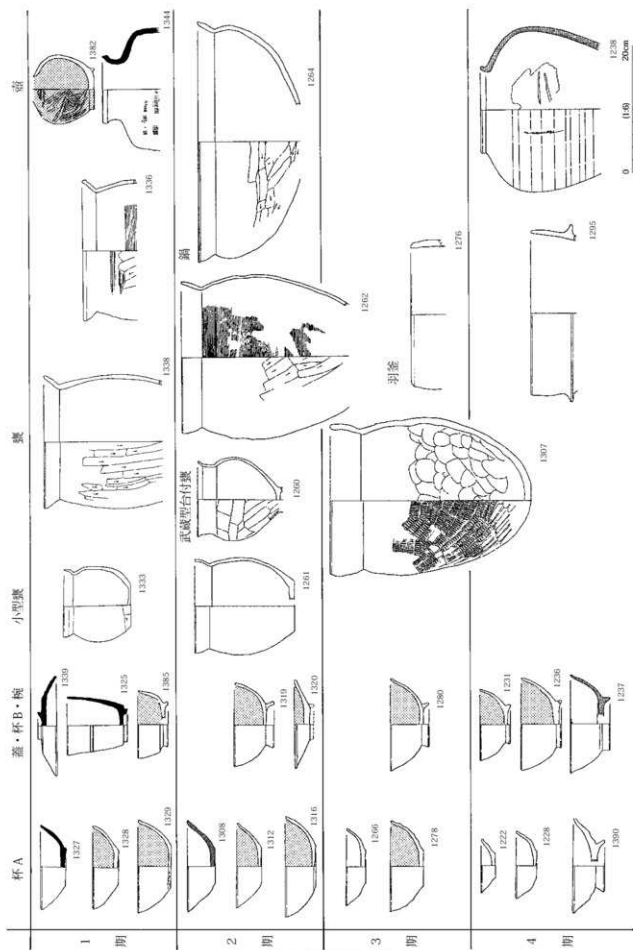
エ 出土土器の特徴

これまでの長野県における古代土器編年検討では焼物種構成、器種構成、杯Aの法量変化に着目されてきた。ここでも、この3点に注目して本遺跡の竪穴住居跡出土土器の年代を検討したい。

まず、焼物種の構成である。今回は住居跡埋土出土の小破片までカウントした混入品を含む集計であるため特定時期の様相だけを捉えにくく、出土量がわずかな須恵器、黒色土器Aなど単一焼物種のみ出土例もあって量的な比較に限界はある。さらに、出土量が少ない灰軸陶器は指標としにくく、黒色土器Aは各時期で一定量あってあまり大きな増減は認められない。そのなかで、黒色土器Aと須恵器・軟質須恵器・土師器の構成に着目すると、①須恵器と黒色土器A、②須恵器・軟質須恵器・黒色土器A、③黒色土器A・土師器の3種の組合せが見出せる。やはり、須恵器と土師器は伴出する事例が少なく、これまでに明らかにされている古代土器の焼物種構成変化(小平1990)に照らすと、①→②→③への変遷と捉えられる。

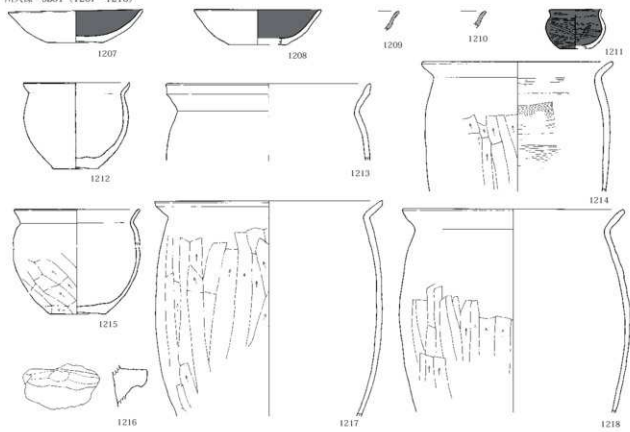
次に器種構成だが、①・②グループには須恵器杯Bや蓋が若干認められ、杯Aのみの例と、黒色土器Aの椀・皿を含む例がある。ただ、杯B・蓋・椀・皿ともに出土量が少なく、特に高台省略の無台椀が存在する可能性があり、識別材料としてはやや弱い。③グループでは土師器杯Aが1法量のみ川久保SB26・46と土師器小型杯Aや盤・小椀を含む川久保SB09・10・11・44に大別し得る。

以上の焼物種構成比と器種構成から、およそ4時期にわかれる予想が得られる。そこで、各時期を平安1～4期と呼称する。この焼物種と器種構成を松本平の古代編年(小平1990)に対比すると、軟質須恵器を伴う例は松本平8期前後に認められ、須恵器を含む例はそれに先立つ松本平7期に対比されると思われる。出土量が少なく、器形変化が見出しにくい土器様相のなかでは断定しにくいだが、本遺跡では前者を平安2期、後者を平安1期とする。平安1期では本遺跡の場合は須恵器比率が低く、須恵器杯Bの出土

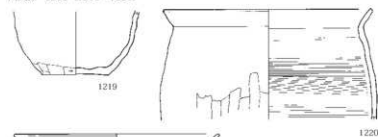


第165図 平安時代土器の時期区分

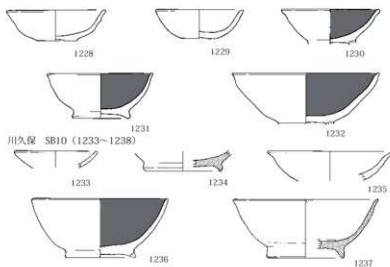
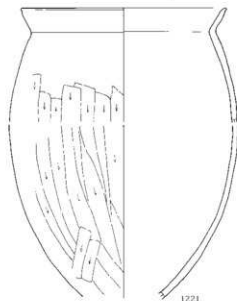
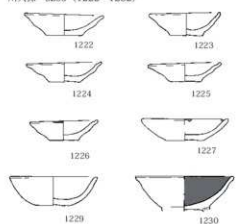
川久保 SB01 (1207~1218)



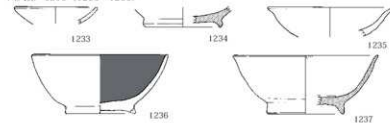
川久保 SB02 (1219~1221)



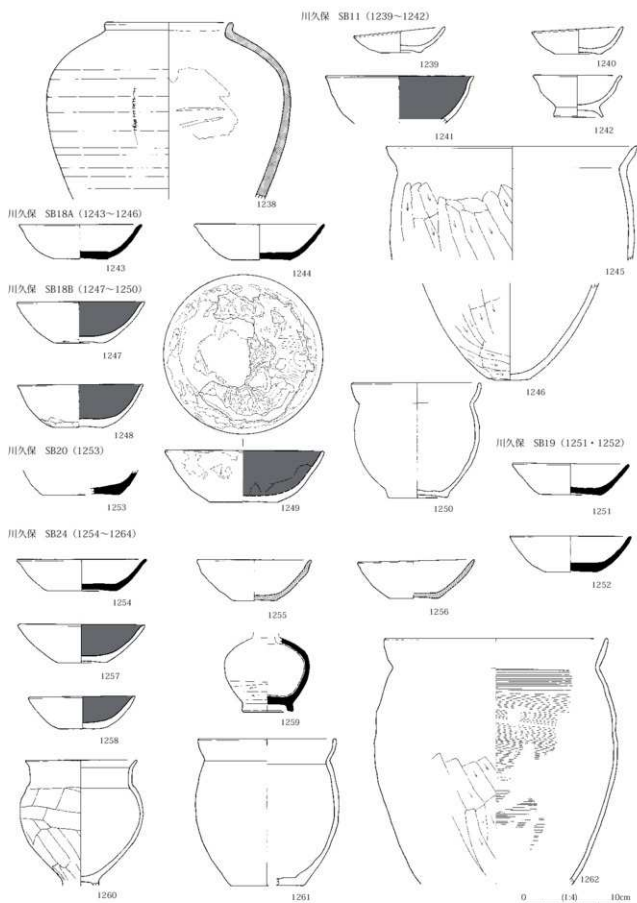
川久保 SB09 (1222~1232)



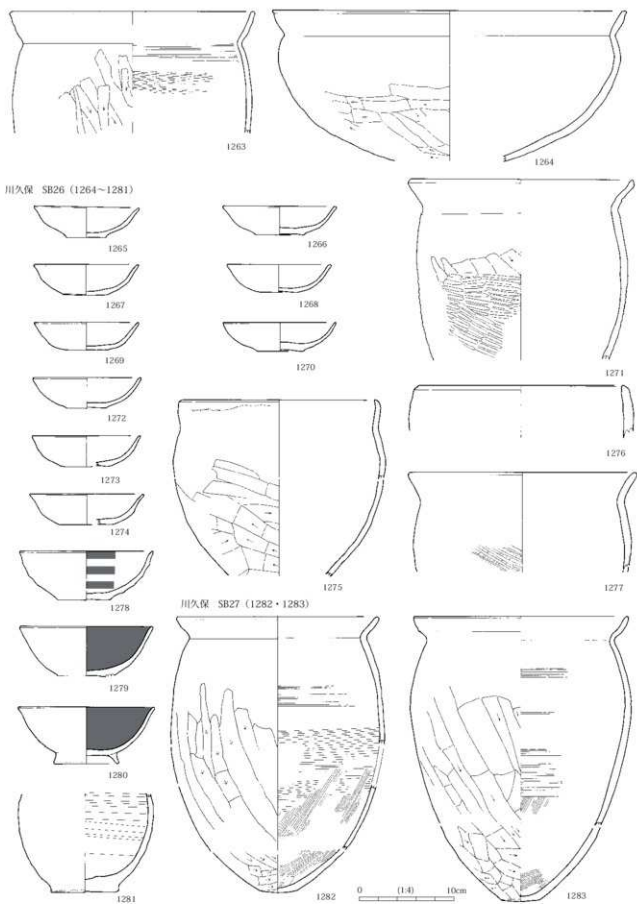
川久保 SB10 (1233~1238)



第166図 平安時代土器 1

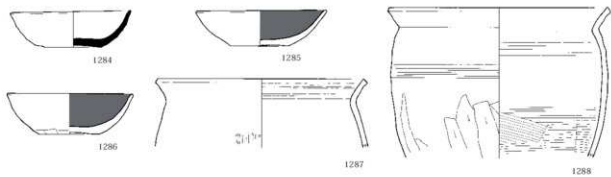


第167図 平安時代土器 2

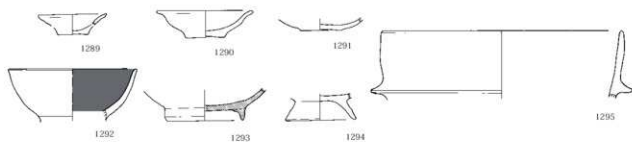


第168図 平安時代土器 3

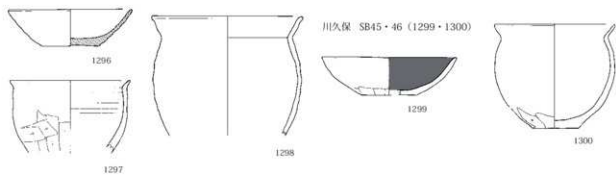
川久保 SB43 (1284~1288)



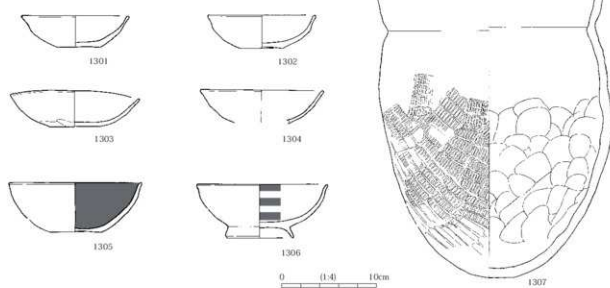
川久保 SB44 (1289~1295)



川久保 SB45 (1296~1298)



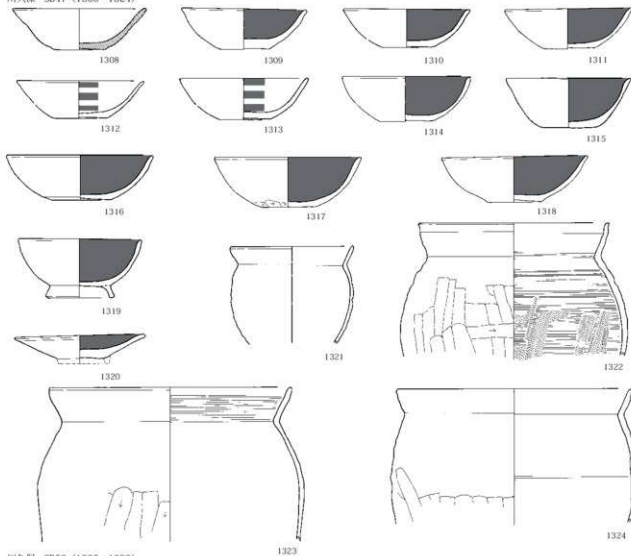
川久保 SB46 (1301~1307)



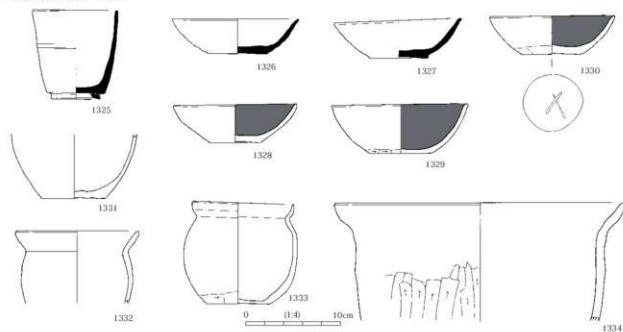
0 (1:4) 10cm

第169図 平安時代土器4

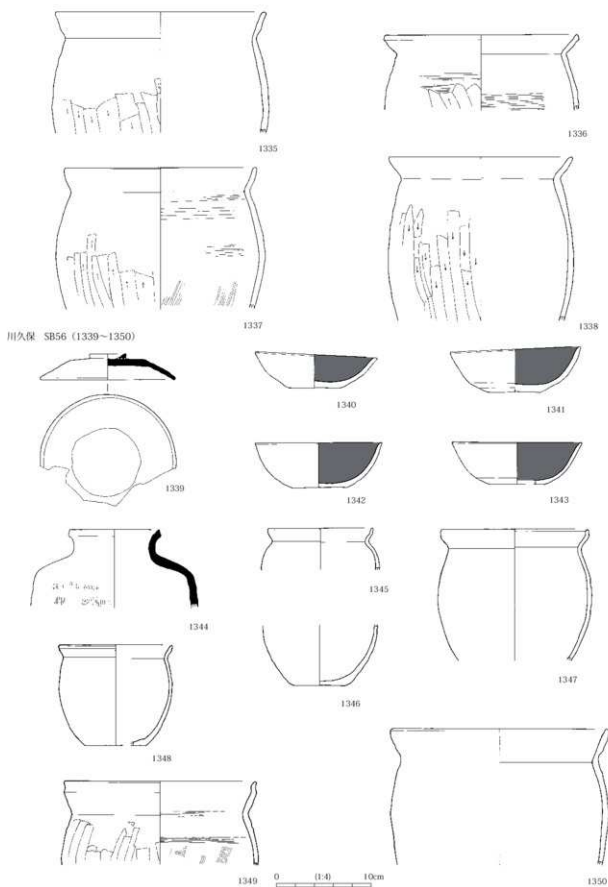
川久保 SB47 (1308~1324)



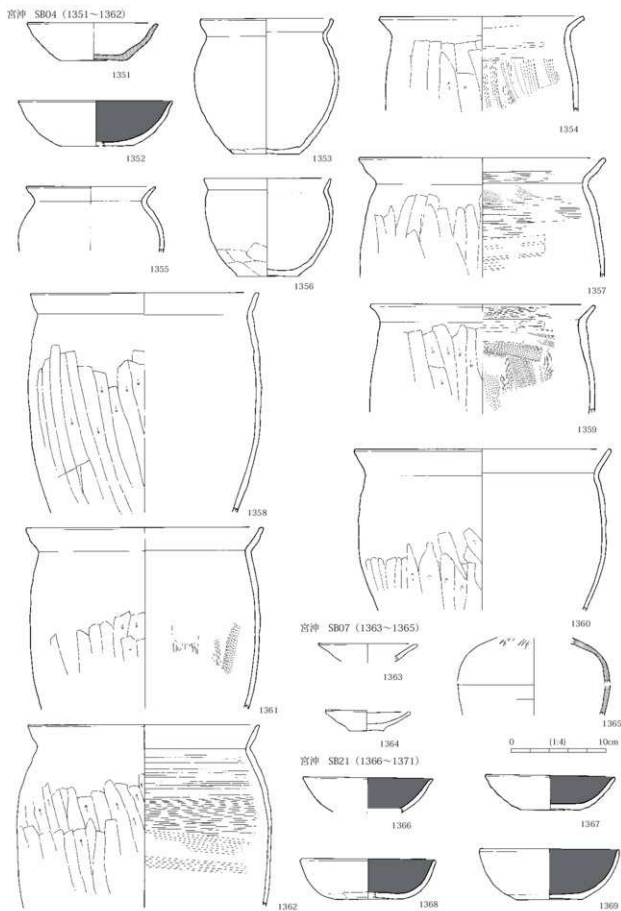
川久保 SB52 (1325~1338)



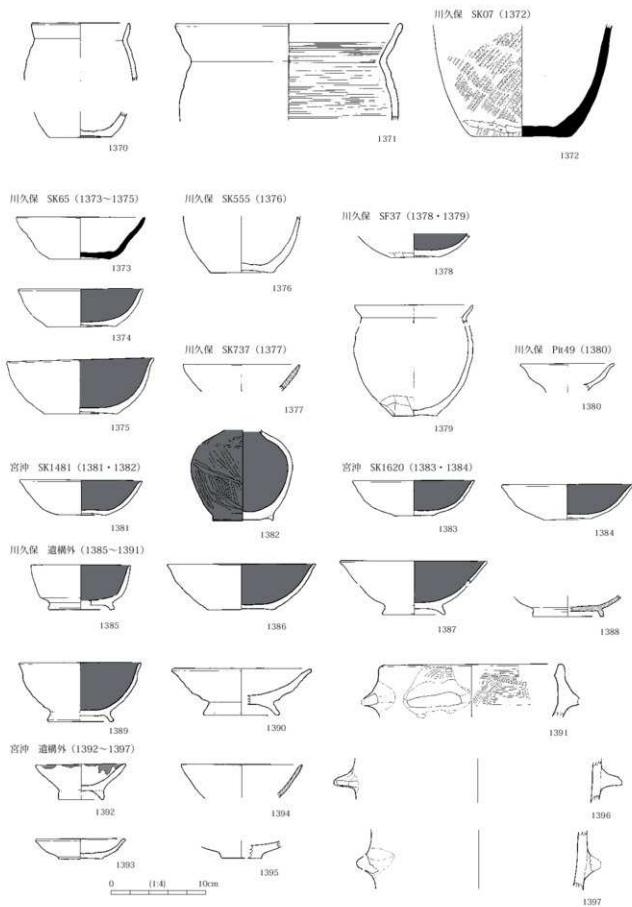
第170図 平安時代土器 5



第171図 平安時代土器6



第172図 平安時代土器7

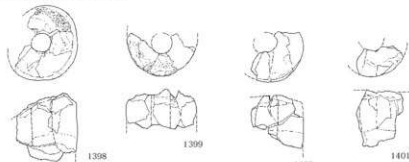


第173図 平安時代土器8

第3章 検出された遺構と遺物

平安 土製品

川久保 SB44 (1398~1401)



平安 石製品

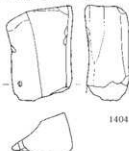
川久保 SB02 (1402)



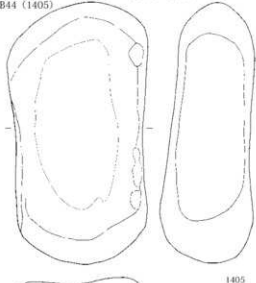
川久保 SB46 (1403)



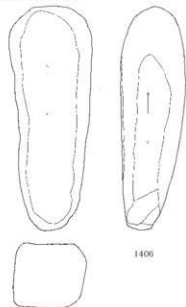
川久保 SB18 (1404)



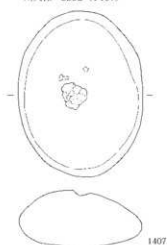
川久保 SB44 (1405)



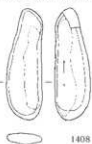
宮沖 SB04 (1406)



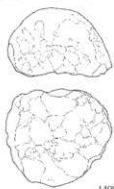
川久保 SB52 (1407)



川久保 SK65 (1408)



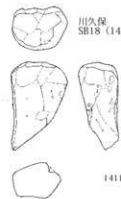
川久保 SB01 (1409)



川久保 SB10 (1410)



川久保 SB18 (1411)



川久保 SB10 (1412)

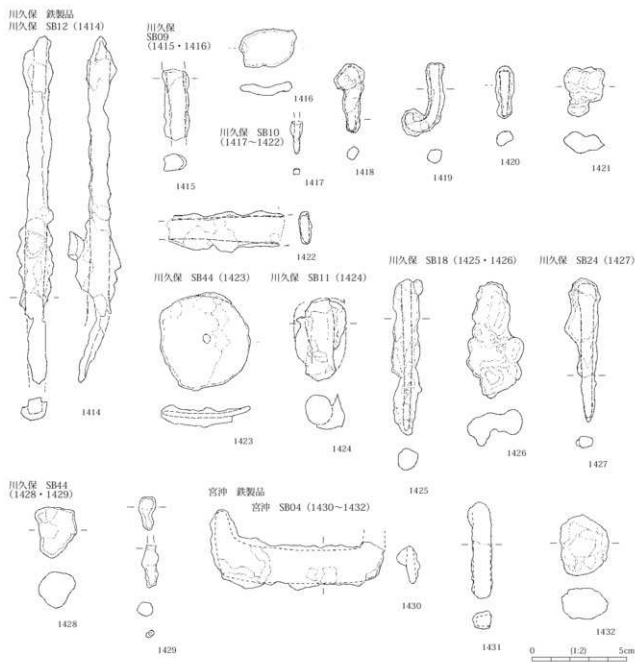


川久保 DH17 (1413)



0 10cm 30cm
(1402~1413)

第174図 平安時代土製品、石製品



第175図 平安時代金属製品

量もわずかなので確実に6期まで遡ると断定できない。また、③グループのなかで土師器杯Aの法量には川久保SB26・46の口径10.4～12.0cm器高2.9～3.2cmのグループと、川久保SB09の口径7.2～10.4cm、器高2.2～3.1cmの土師器小型杯を含むグループがある。前者は松本平10・11期前後、後者は松本平14期前後に対比し得ると思われる、それぞれ本遺跡の平安3、平安4期とする。

なお、上記の各時期に伴う土師器甕だが、平安1期には端部を摘みあげるように尖らせるもの、面取するもの、直線的に開くものがあり、土師器小型甕は甕口縁と同様に内湾ぎみに屈曲するものと直線的に開くものがある。平安2期では直線的に開いて端部が丸く納めるものがやや多いように見受けられるが、少量屈曲するものがある。平安3期では内湾する口縁の形態で、胴部にタタキをそのまま残すものがある。平安4期では羽釜が伴うが出土量は少ない。

上記の様相を中信地域や北信地域南部の古代土器検討と比べると、いくつか地域的な特徴として捉えられることがある。一つは灰軸陶器が少ないことに加え、黒色土器 A が継続的に一定量存在すること、食膳具類の出土量・種類共に少ないこと、さらに高台省略と思われる碗の存在や、松本平で捉えられた法量に一致しないものが含まれ、食膳具の器形もあまり厳密に分かれていないと思われる点である。これは古代食器が階層制の表現や儀礼的使用という背景の元で使われた器ながら、当地域ではそうした儀礼や表現の必要性や徹底が必要なかったものかもしれない。また、甕形態など北陸系の影響が認められるものが含まれ、北陸に近い当地域の地理的な特徴も認められる。そのなかで、9世紀後半～末にかけては武藏型台付甕など遠隔地間の土器移動が捉えられた。

以上の土器時期区分を松本平古代土器編年等の年代観に当てて整理すると、平安1期が9世紀中頃～後半、平安2期が9世紀末、平安3期が10世紀後半、平安4期が11世紀中頃に該当しよう。各住居跡の時期は、平安1期が川久保 SB01・02・18A・18B・19・43・52・56・宮沖 SB21、平安2期は 20・24・27・45・47・宮沖 SB04、1・2期の識別できなかった住居跡に川久保 SB25、平安3期が川久保 SB26・46、平安4期は川久保 09・10・11・12・44 が該当する。これ以外の川久保 SB34・宮沖 SB07 は不明である。本遺跡は9世紀後半～末前後、10世紀中頃～後半、11世紀に断続的に利用されたと思われる。

(2) 平安時代の土製品 (第174図 PL63)

土製品は羽口のみがある。特に鍛冶炉が検出された川久保 SB44 の Pit13 から羽口片が多数出土した(1398～1401)。ほかに宮沖 SB04 でも出土し、川久保 SB10・44 など鍛冶炉が検出された竪穴住居跡の存在からも平安期の本遺跡で鍛冶が行われていた可能性が知られる。

(3) 平安時代の石製品 (第174図 PL64・65)

石製品には、砥石、削痕のある軽石、敲打痕のある礫、研磨痕のある礫がある。砥石は住居跡から3点出土し、すべて図示した。いずれも小型で薄い長方形断面の砥石で一端が欠損する。石材は泥岩、頁岩、凝灰岩といった古墳時代後期～奈良時代同様の堆積岩を用いるが、凝灰岩は古墳時代後期～奈良時代のものよりやや粒子が粗く、堅い石材で色調も灰色に近い。1402・1404 は穿孔され、携帯用の砥石と思われる。なお、1404 の砥石は穿孔片側をわずかに削るように決っている。

削痕のある軽石 1411 は側面に削りというより研磨に近い使用痕が認められる。同時期の遺構からの出土例が少なく、当該期のものか不明である。敲打痕のある礫は 1407 の 1 点がある。偏平な円礫中央に敲打による痕跡を残すが、これも同時期遺構の出土例がなく混入の疑いもある。研磨痕のある礫では 1406 は自然礫に近い形状ながら砥石に使われたとみられ、1408 は薄い小さな自然円礫の片側面を中心に研磨痕が残る。礫自体を持って研磨した可能性がある。1405 は断面長方形の礫で、あまり顕著な研磨痕は認められない。砥石として使用したのものか不明である。

(4) 平安時代の鉄製品 (第175図 PL65)

竪穴住居跡出土鉄製品を中心に掲載したが、混入品が含まれる疑いがある。1414 は先端がやや細く若干折れる形状から槍鉋としたが、先端を欠損し断定できない。1422 は刀子、1423 は紡錘車、1430 はいわゆる芋引金である。他は器種不明で、1416 が板状鉄製品、1415・1417～1420・1424・1425・

1427・1429・1431 が棒状鉄製品である。1421・1426・1428・1432 は鉄塊系遺物と思われ、弱いながら磁石の反応が若干認められる。川久保 SB10・18・44、宮沖 SB04 から出土し、一部のみ掲載した。

4 平安時代のまとめ

平安時代の竪穴住居跡は平安1・2期の9世紀後半～末、平安3期の10世紀後半、平安4期11世紀中頃のものか捉えられ、本遺跡は断続的に利用された遺跡と捉えられた。しかし、遺構は9世紀後半～末には川久保、宮沖遺跡まで広域に竪穴住居跡が散在するが、10・11世紀では川久保遺跡の千曲川沿いの地区に集中する違いがある。ここでは各時期の様相について少し検討したい。

まず、9世紀後半～末の平安1・2期の集落跡である。本遺跡と同時期の遺跡として中野市栗林（県理文1994）、柳沢遺跡（県理文2012）、飯山市北原遺跡（飯山市教委1980・1985）など比較的多くある。そのなかで北原遺跡は須恵器も一定量認められ、杯Bを含む様相からも9世紀前半に遡る可能性があり、掘立柱建物跡が一定数認められる特徴がある。それ以外の遺跡は小規模住居跡から構成される。長野県内の松本平や善光寺平では、9世紀後半～末頃に8世紀以来継続してきた集落跡の多くが途絶し、一方で山間地に小規模集落跡が出現することが知られている（原1996）。本遺跡も出現時期や集落跡様相から9世紀後半頃から山間地等に出現する小規模集落跡と同様の遺跡とも思われる。出土遺物には特殊品として計量カップとも思われる須恵器杯Bもあるが、芋引金と思われる鉄製品があり、農業生産を基盤とする遺跡と思われる。

ところで、本遺跡の所在する中野・飯山市周辺では、8世紀には須恵器窯跡や工房と思われる遺跡があるが、一般的な集落跡は不明瞭である。そのため、小型竪穴住居跡からなる集落跡の出現を当地域内の集落変遷のなかでは捉えにくく、中野・飯山市周辺の小規模集落跡居住者がどこから来たのか、その出身地が問題となる。そこで注目されるのは、竪穴隅にカマドを設けた竪穴住居跡である。信濃では竪穴隅に位置するカマドは松本平の8・9世紀にもわずかに認められるが、主体は10世紀後半～11世紀とされる（望月1990）。その一方で、越後では7世紀末頃に北陸西部から伝わった隅カマドがあり、それと共に壁際に柱穴が並ぶ構造の竪穴住居跡が認められるという。（春日1996）これらの竪穴住居跡は9世紀には減少するが、それまでは継続するようである（春日1996・野村2009）。この竪穴隅にカマドを有する竪穴住居跡が中野・飯山地域に認められ、本遺跡の川久保 SB44 のように壁際に柱穴を配置する竪穴住居跡の存在や、当地域の8世紀集落跡が不明瞭なことを考え併せれば、9世紀後半に越後方面から人間が移入した可能性も考えられるのではないと思われる。ただし、土器では無台碗、口縁端部を積みあげるような造作の土師器甕、信濃での出土が少ない鍋の存在など越後に通ずる様相もみられるが、須恵器凸帯付四耳壺など信濃の土器が含まれており、越後の土器様相そのものでない。そのなかで、武蔵型甕は信濃川沿いの魚沼地域でも出土が知られており（春日2007）、本遺跡でも出土したことから、信濃川沿いの交通や交流の活性化に伴って、小規模農業経営者が信濃北部域に散居移住する動きと捉えられるかもしれない。長野市北部の南条遺跡の ASB14・16、DSB33・47 等（長野市教委2005）でも9世紀末の隅カマドの住居跡があり、越後からの移住者や影響を受けた居住者は長野市北部周辺まで及んでいたと思われる。

信濃に認められる石組カマドが本遺跡で認められる点は課題として残るが、上記のような少なくとも9世紀後半の小規模集落跡居住者には国を越える遠距離移動居住者が存在した可能性はあると考える。さらに、憶測を述べるならば、国を越えての移動が越後・信濃の国境地帯のグレーゾーン域の中野・飯山地

域に認められることは、個人が国毎に戸籍で把握されるシステムが崩壊していたことを示すとも考えられる。しかしながら、現時点では検証が不足しており、ここでは一つの可能性として提示しておく。

それ以後、一旦居住が途絶し、再び本遺跡では10世紀に千曲川に近い場所に川久保SB26・46の2軒が認められる。この2軒は、近接しながらも規模や柱穴の有無など建物構造が異なる竪穴住居跡で、居住者もそれぞれ異なる可能性がある。そのなかで川久保SB46は11世紀の川久保SB44と類似した壁際に柱穴が並ぶ構造で、類例は越後にある。また、前後する時期の竪穴住居跡が千曲川沿いの中野市牛出遺跡、栗林遺跡でも確認されているので、川沿いに移動しながら断続的に遺跡が営まれたものかもしれない。なお、越後では当該期には竪穴住居跡は使われなくなっているため、9世紀に越後から移動もしくは強く影響を受けた居住者であったとしても、10・11世紀には伝統的な建物構造を維持する当地域に根付いて独自の地域文化をもつ集団になっていたと思われる。続いて11世紀に川久保SB09・10・11・12・44の竪穴住居跡が現われるが、上記10世紀の竪穴住居跡の分布場所と同じ場所に認められた。そして、川久保SB10・44は鍛冶炉が検出され、少なくとも鍛冶に関連する居住者であることが知られた。前後の時期の住居跡がないことから、継続的な居住ではなく短期居住の可能性もある。類似時期の遺跡は、中野市栗林遺跡、牛出遺跡等の千曲川沿いや、中野市間山、新野遺跡等の東部山麓にある。地域内を漂泊する職人のような居住者像と捉え得るか詳細は不明である。

なお、この平安4期の竪穴住居跡の分布地点に近い川久保1区10面中・南部では、12世紀～13世紀初頭と思われる竪穴建物跡川久保SB21～23、29、48、57が検出され、それと近接した場所で増場を出土した川久保SK327が見つかった。この川久保SB21～23、29、48、57の竪穴建物跡は中世で扱ったが、平安4期の竪穴住居跡と類似した半地下式の竪穴建物跡が隣接した場所に分布し、その周辺で金属加工に関わる活動が想定される点は平安4期の竪穴住居跡の様相と類似している。このことから平安4期の竪穴住居跡の居住者と、中世初期の竪穴建物跡居住者が関連する可能性も考えられる。しかし、竪穴建物跡の内部施設は平安時代竪穴住居跡のようなカマドではなく炉であることや、柱穴が比較的明瞭に認められる違いがある。さらに平安4期では竪穴住居跡内に鍛冶炉が検出され、竪穴居住者が鍛冶を行う可能性が捉えられたが、川久保SK327がこの竪穴居住者の活動に関連する遺構とも言い切れない。このことから平安4期の竪穴住居跡と川久保1区10面の竪穴建物跡の居住者が関連するとは断定しなかった。

第7節 中世の遺構と遺物

1 中世の概要

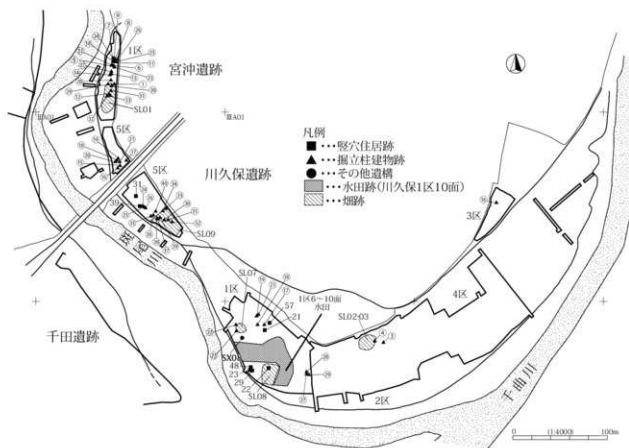
概要：中世の遺構は調査域内の各地区で検出され、水田を中心に継続的な利用が認められる。河岸段丘上では川久保1・2・5区、宮沖1・5区を中心に居住遺構と水田・畑跡が検出され、川久保4区でも中近世の水田耕作土層や耕作地の区画溝と思われる溝跡が検出された。川久保1区では、10面の畑跡・水田跡と掘立柱建物跡がモザイク状に分布する景観から、9面水田跡以上に川久保1区全域が水田域となる土地利用の変化が捉えられ、時期をおって段丘上へ水田域が拡大する様相が捉えられた。しかし、宮沖1区で検出された掘立柱建物跡から、中世後半期に再び居住域に戻る場所もあって水田域が一様に拡大したとは言い切れない。氾濫原内の川久保6区、宮沖2～4区では中世と断定できた遺構はないが、用水跡と思われる宮沖SD09が段丘上から氾濫原方向へ延びていることや、斑尾川対岸の氾濫原内の千田遺跡10区で中世水田跡や畑跡が検出されたことから、氾濫原内も耕作地に利用されていたと思われる。

検出面と土層：中世の遺構は、洪水土層に被覆される遺構を基本土層Ⅱ～Ⅲ層上面、掘り込まれる遺構をⅢ2・Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ（・Ⅸ層）上面で検出した。中世遺構は、水田化以前ではⅢ層上面、水田域拡大以降はⅡ層群内に遺構検出面があるが、地区毎に土層堆積が異なって検出面数が異なる。川久保1区のみ複数の洪水土層の堆積があってⅡ層内で6～10面の計5面の検出面があり、川久保2区ではNR1b・NR1c上面のⅢ2層～Ⅳ層上面にあたる1面しかない。斑尾川沿いの川久保5区は洪水土層に被覆されたⅡ層中1面とⅢ層上面の2面、宮沖1区ではⅢ層上面とⅣ層上面の計2面がある。これ以外の擾乱が著しい宮沖5区ではⅤ・Ⅷ層上面、洪水土層堆積がない川久保3区は段丘Ⅱの黄褐色シルト層の1面で検出した。

上記の遺構検出面のなかで川久保1区6～10面と川久保5区1面がⅡ層中の洪水土層に被覆された遺構面にあたる。また、宮沖1区1面と川久保5区2面では、還元化した褐色土の掘り込まれる遺構をⅢ層上面で検出し、宮沖1区2面はⅢ層基調埋土の遺構を調査2面のⅣ層上面で検出した。川久保5区2面と宮沖1区1面は同じ褐色土の遺構が検出されたが、川久保5区2面は中世前期、宮沖1区1面は中世後期と捉えられ、類似した埋土ながら、異なる時期の遺構と捉えられた。これは地点毎の水田化の違いや地下水位の関係、後代の上層水田耕作時の土中金属溶脱の在り方の差で生じたと思われる。

なお、洪水土層に被覆された川久保5区1面と川久保1区水田跡との対応関係だが、川久保5区では出土遺物がないため遺物年代からは比定できない。洪水土層からみると川久保5区内で認められた洪水土層は2枚あって、川久保5区1面はその下層洪水土層に被覆される。南方に隣接する川久保1区では川久保5区側の北部まで及ぶ洪水土層は1・8面を被覆する洪水土層2枚があるので、対比させると川久保5区1面は川久保1区8面に対比されると推測される。

この中世は他時代に比べて出土遺物が少なく、遺物からの遺構時期の比定が難しい。しかし、検出面が複数あり、その検出面からある程度絞り込める。川久保1区10面と南部検出遺構は洪水土層に被覆され、出土遺物から12～13世紀前半のものと思われる。また、洪水土層は堆積環境が変わる区切りの土層となり、遺構埋土と色調が大きく異なることから上層遺構の見逃しの有無を確認しやすい利点がある。川久保1区10面を被覆する洪水土層は1区北部まで及ばないが、1区8面水田跡を被覆する洪水土層が上層に載るので1区10面北部の遺構は8面水田跡以前の所産と捉え得る。ただし、近世の水田造成によって1区8面水田跡が削平された川久保1区中央東寄りの地点は上層の近世遺構が混じる可能性がある。



第176図 中世の主要遺構分布概略

さらに、川久保5区1面は川久保1区8面水田跡に対応すると想定したが、これにより川久保5区南部2面検出遺構は川久保1区8面水田跡より古い14世紀以前と思われる。ただし、洪水土層の被覆がない川久保5区北部から宮沖5区は中世以後の遺構も含む可能性は残る。また、宮沖1区1面の掘立柱建物跡は同じ灰褐色系の埋土で、一部の柱穴から15～16世紀の内耳鍋が出土した。埋土が類似することは、類似時期の環境条件によって生成された可能性があり、宮沖1区1面検出遺構は15～16世紀の所産と捉えた。その下層の宮沖1区2面にも中世と思われる建物跡が検出されたが、古墳～平安時代遺構検出面にもあたり、古墳～平安時代の掘立柱建物跡とは柱穴の形状を中心に識別した。

なお、中世の地形環境だが、中世には千曲川の浸食地形の形成は認められず、平安時代までに形成された地形のなかで低地として残った千曲川・斑尾川沿いの川久保1・5区周辺が洪水土層の堆積で地表面が上昇・平坦化する変化と認められる。洪水土層は時期毎に増減があり、川久保1区10面前後の12～13世紀前半頃まで洪水土層の堆積があまりなく、川久保1区10面以後から8面までの13世紀後半～14世紀頃まで複数の洪水土層が認められる。段丘上に水田域が拡大する川久保1区9面水田跡はこの時期にあたる。このなかで川久保1区8面水田跡を被覆する洪水土層がもっとも広く分布し、中世で最大の洪水と捉えられる。その後の川久保1区5～7面の15世紀中頃～17世紀は洪水が少ない環境と思われる。

また、斑尾川の流路の位置は、千田遺跡10区5面では氾濫原西崖際まで大きく蛇行していたが、砂礫層により埋没し東側へ移動し、その後も徐々に東側へ移動して千田10区2面ではほぼ現位置に落ち着いている。千田遺跡10区5面は出土遺物もなく時期の詳細は不明だが、川久保1区10面に対応する可能性がある。斑尾川の中世の流路移動は宮沖遺跡では明確には捉えられなかった。

2 中世の遺構

遺構は竪穴建物跡8棟、掘立柱建物跡56棟、墓跡や関連遺構4基、土坑72基、溝跡29条、焼土跡34カ所、畑跡6面、水田跡6面がある。居住遺構の掘立柱建物跡は川久保1・2・3・5区、宮沖1・5区など広範囲に分布し、竪穴建物跡は川久保1・5区に分布する。土坑も居住遺構の分布範囲内で検出されたものが多いが、地区毎に数や形態が異なる。井戸跡は検出されず、墓跡は川久保1区10面のみで検出された。水田跡は洪水土層に被覆されたものが川久保1区を中心に検出され、畑跡や耕作関連の溝跡は調査区広域で検出された。川久保1区10面は出土遺物から12～13世紀前半頃の所産と捉えられ、県内で数少ない当該期の集落景観が捉えられた事例といえる。

(1) 掘立柱建物跡 (第30・31表)

川久保1区10面・2区1面・同3区・5区2面、宮沖1区1面・2面・同5区で中世と思われる掘立柱建物跡が捉えられた。各地区では多数の柱穴が検出されたため調査時に掘立柱建物跡の検討が行えず、その認定はごく一部にとどまった。そのため整理作業では調査地区、検出面毎に柱穴配列を検討して建物跡を追加認定した。欠落する柱穴や、桁・梁行の柱穴の並びが悪い建物跡もあって、認定に課題も残るが、ここでは可能性がある遺構として報告する。また、近接して類似規模・構造の建物跡が捉えられた場合は、建て替えの関係を捉えた。掘立柱建物跡の時期は出土遺物がわずかで、多くの掘立柱建物跡は検出面と小型柱穴からなる形状から中世と判断した。

ア 川久保1区南東部～2区北部の掘立柱建物跡 (第278・284図)

川久保1区のNR1c上面の川久保1区南東部と同2区北部のIV層上面で掘立柱建物跡と柱穴の集中が認められた。川久保1区南東部では整理作業の柱穴配列検討からST27～29の3棟、川久保2区北部では調査時にST03・04の2棟が捉えられた。ST27のみ梁行3間×桁行3間で、他の掘立柱建物跡は梁行2間×桁行3・4間である。また、川久保2区北部では近接してST07が検出されたが、ST07は平安時代須恵器が出土し、平安時代と捉えた。ST03・04は柱穴が畑跡SLO2・03と重複し、川久保1区10面同様に畑地と建物跡が近接して分布する景観と思われる。出土遺物はほとんどないが、川久保1区南東部の掘立柱建物跡周辺から白磁碗や柱状高台杯片が採取され、時期は12～13世紀と思われる。

川久保ST03 2区1面 IX E21・22、J01・02 (第177図)

川久保2区の北部、ST04東側にある。1面のIV層上面で検出した柱穴が長方形に並ぶと認められ調査時に認定した。梁行2間×桁行2間以上で、東桁行北延長先にあるPit42を含めると桁行4間約7.6m、Pit43まで3間約6.2mを測る。本跡内に位置するPit7は形状から根の攪乱と思われる。柱穴はいずれも浅く、深さは10～20cmほどで、埋土はⅢ層の黒褐色砂質土を基調とする。出土遺物はない。棟方向は異なるが、Pit42・43まで含めるとST04と類似した規模で、柱穴の形状から中世と捉えた。

川久保ST04 2区1面 IX D25、E21、I05、J01 (第178図)

川久保2区北西部、ST03に隣接して位置し、IV層上面検出の柱穴が長方形に並ぶと認められて調査時に認定した。他遺構との重複ではSLO3に本跡が切られる。梁行2間×桁行3間の副柱建物跡と捉えたが、南桁行西端柱穴の位置は攪乱にあたる。東桁行北端Pit1は梁行ラインからずれて位置し、本跡柱穴ではないかもしれない。また、南梁行中間柱穴は捉えられなかった。出土遺物はないが、本跡の時期は柱穴の形状から中世と捉えた。ST03とは規模が類似する。

川久保ST27 1区南東部1面 IX H16・21 (第181図)

川久保1区南東部のNR1c上面で検出された柱穴の配列を整理時に検討して認定した。本跡範囲内に位

第3章 検出された遺構と遺物

第30表 中世掘立柱建物跡一覧表(1)

遺跡	ST	調査区	地区	柱配置		桁		梁		棟方向	柱穴		
				梁×桁	長さ(m)	柱間寸法(m)	長さ(m)	柱間寸法(m)	平面形		平面規模(平均cm)	底面標高(平均m)	深さ
川久保03	2区1面	IX E21-22, J01-02	倒柱 2×2(3) 以上	4.1(6.2) 以上	1.8~2.3	4.1	1.9×2.1	N48° W	円形	26~38 (33)	327.12~327.32 (327.24)	14~22	
川久保04	2区1面	IX D25, E21, J05, J01	倒柱 2×3	8.4	2.3~3.0	3.4	1.7×1.7	N40° E	円形	24~40 (32)	327.06~327.34 (327.23)	16~30	
川久保16	3区1面	IV M06-07, 11-12	総柱 2×5	11.2	2.1~2.4	5.3	2.5×2.8	N46° W	円形	14~78 (30)	330.72~331.64	5~56	
川久保17	1区10面	IX A15, B11	倒柱 2×3	7.34	2.28~2.73	4.45	2.25×2.2	N82° W	円形	14~52 (28.9)	330.72~331.64	10~36	
川久保18	1区10面	IX A14-15	倒柱 2×3	6.13	1.41~2.58	4.3	2.26×2.04	N89° W	円形	18~76 (33.2)	327.69~327.95 (327.6)	9~18	
川久保19	1区10面	IX A09-10	倒柱 27×3	6.97	2.22~2.56	4.02	(2.017- 2.017)	N76° W	円形	19~38 (27.2)	327.84~328.34 (328.09)	10~40	
川久保21	1区10面	IX A09-10	倒柱 2×3	8.06	2.02~3.16	4.3	2.3×2.0	N58° E	円形	20~40 (27.7)	327.77~328.04 (327.93)	10~32	
川久保22	1区10面	IX A12-17	倒柱 2×2以上	3.03以上	2.84~3.03	4.87	2.6×2.27	N68° W	円形	24~38 (27.9)	327.25~327.83 (327.55)	11~50	
川久保23	1区10面	IX A17	倒柱 2×3	7.76	2.11~3.14	4.88	2.64×2.24	N86° E	円形	18~32 (22.2)	327.1~328.02 (327.6)	14~47	
川久保24	5区2面	II M14-15, 20, N11	倒柱 2×3	7.97	2.23~3.27	4.4	1.76×2.64	N32° W	円形	16~72 (40.7)	328.86~329.46 (329.2)	6~46	
川久保25	5区2面	II M14-15, 20, N11	倒柱 2×3	8.38	2.34~3.43	4.47	2.12×2.35	N8° W	円形	12~42 (27.5)	329.0~329.41 (329.15)	15~30	
川久保26	5区2面	II M14-15, 20, N11	倒柱 2×3	8.03	2.08~3.06	4.45	2.11×2.34	N7° E	円形	14~40 (24.5)	329.03~329.64 (329.18)	11~34	
川久保27	1区南東1面	IX H16-21	総柱 3×3	7.6	2.29~2.86	7.45	2.28× 1.93-2.7	N38° E	円形	17~46 (26.3)	326.33~326.68 (326.52)	8~24	
川久保28	1区南東1面	IX H16-21	倒柱 3×3以上	7.04以上	1.66~2.53	3.87 ?	(1.93 ? - 1.94 ?)	N75° W	円形	14~30 (23.7)	326.38~326.60 (326.5)	10~22	
川久保29	1区南東1面	IX H16-21	倒柱 2×2(3) 以上	5.33以上	2.48~2.79	4.39	2.19 ? - 2.2 ?	N82° W	円形	12~24 (20.2)	326.46~326.59 (326.53)	5~18	
川久保30	5区2面	II N17-18, 22-23	倒柱 2×3	8.9	2.7~3.2	4.3	2.3×2.0	N39° W	円形・ 楕円形	20~44 (33.6)	328.78~328.96 (328.85)	14~56	
川久保31	5区2面	II N18-23, 24	倒柱 2×3 ?	8	2.5~3.1	3.9	1.9×2.0	N62° W	円形・ 楕円形	22~40 (30.0)	328.56~329.00 (328.78)	14~46	
川久保32	5区2面	II N23-24	倒柱 2×3 ?	7.8	2.0~2.9	3.8	1.8×2.0	N48° W	円形・ 楕円形	20~36 (31.1)	328.60~329.04 (328.77)	12~34	
川久保33	5区2面	II N12-13, 17-18	倒柱 2×3	7.2	2.18~2.7	3.87 ?	2.14× 1.73 ?	N78° W	円形・ 楕円形	22~52 (30.9)	328.82~329.01 (328.95)	15~38	
川久保34	5区2面	II N12-13, 17-18	倒柱 2×3	7.3	2.25~2.75	4.24	2.32 ? - 1.92 ?	N78° W	円形・ 楕円形	32~70 (43.3)	328.75~329.00 (328.88)	26~55	
川久保35	5区2面	II N16-21	倒柱 2×3	6.76	2.08~2.98	4.68	2.41×2.27	N72° W	円形	23~47 (31.9)	328.52~329.12 (328.76)	24~64	
川久保36	5区2面	II N16-17, 21	倒柱 2×3	7.14	2.06~2.64	4.19	2.14×2.05	N80° W	円形	21~40	328.57~328.98 (328.87)	23~60	
川久保37	5区2面	II N16-17, 21-22	倒柱 2×3	6.77	2.17~2.45	4.52	2.26 ? - 2.26 ?	N86° E	円形	18~40(27.7)	328.73~328.93 (328.85)	6~38	
川久保38	5区2面	II N16-17, 21-22	倒柱 2×3	6.68	2.05~2.52	4.2	2.12×2.08	N78° W	円形	22~42(31.2)	328.55~328.88 (328.74)	15~63	
川久保39	5区2面	II N16-17, 21-22	倒柱 2×3	7.24	2.53~3.06	4.64	2.02×2.62	N72° W	円形	18~40(27)	328.76~328.98 (328.85)	20~38	
川久保40	5区2面	II N11-12, 16-17	倒柱 2×3	8.45	2.5~3.11	4.22	1.78×2.44	N88° E	円形	22~49(33)	328.92~329.11 (329.01)	20~40	
宮沖01	1区1面	X V V 05, 10, W 01-06	総柱 4×3以上	3	1.9~2.8	6.0以上	(0.9) 1.9	N 3° W	円形・ 方形	58~84, 26~ 40	330.68~331.08, 330.95~331.28	52~ 82, 10 ~46	
宮沖05	1区1面	X VI Q20-25, R16-21	倒柱 2×3(4) 以上	7.6以上	2.3~2.9	3.8	1.8×2.0	N78° W	円形	20~36 (27)	331.10~331.52 (331.28)	10~52	
宮沖06	1区1面	X VI Q20-25, R16-21	倒柱 2×3以上	7.3以上	1.8~2.9	4	1.7×2.3	N88° W	円形	20~40(30)	331.06~331.56 (331.31)	16~40	
宮沖07	1区1面	X VI R11-16	倒柱 2×3以上	7.6以上	2.3~2.7	4.9	2.1~2.8	N50° W	円形・ 楕円形	20~40 (25)	331.14~331.68 (331.41)	8~50	

第31表 中世掘立柱建物跡一覧表(2)

遺跡	ST	調査区	地区	柱配置		桁		梁		棟方向	柱穴		
				梁×桁	長さ(m)	柱間寸法(m)	長さ(m)	柱間寸法(m)	平面形		平面規模(平均cm)	底面標高(平均m)	深さ
宮沖	08	1区1面	XVI R11-16	側柱 2×4 ?	8.4 ?	1.7~2.6	4.9	2.4~2.5	N34° W	円形	20~60 (32)	331.08~331.64 (331.36)	14~56
宮沖	09	1区1面	XVI R11-16	側柱 2×4 ?	6.4以上	1.6~ 2.0(2.6)	4.2	2.5~2.4	N44° W	円形・ 楕円形	20~34 (27)	331.06~331.70 (331.44)	16~48
宮沖	10	1区1面	XVI R11-16	側柱 2×3以上	7.0以上	2.0~2.6	4.6	(2.3-2.3)	N87° W	円形・ 楕円形	16~44 (32)	331.02~331.46 (331.32)	10~60
宮沖	11	1区1面	XVI R11-16	側柱 2×3以上	4.7以上	1.4~1.7	4.7	2.6~2.1	N86° E	円形・ 方形	22~48(31)	331.10~331.46 (331.27)	20~60
宮沖	12	1区1面	XVI V 15, W11	側柱 2×3以上	7.9以上	2.3~3.0	4.3	2.0~2.3	N98° E	円形	20~54 (32)	330.80~331.18 (331.13)	10~32
宮沖	13	1区1面	XVI Q25, R21,V05, W01	側柱 2×4 ?	7.9(7.6) 以上 ?	1.5(1.8)~ 2.5	4.4	2.1~2.3	N80° W	円形・ 楕円形	16~40 (26)	331.10~331.56 (331.32)	26~46
宮沖	14	1区1面	XVI Q25, R21,V05, W01	側柱 2×3以上	6.2以上	1.8~2.3	3.3	1.6~1.7	N80° W	円形・ 楕円形	22~50 (31)	331.02~331.24 (331.15)	20~54
宮沖	15	5区1面	II H07-11- 12	側柱 2×3	6.5	1.9~2.2	3.4	1.6~1.8	N61° E	円形	16~30 (24.4)	329.88~330.12 (330.00)	10~40
宮沖	16	5区1面	II H07-11- 12	側柱 2×3	6.7	2.2~2.6	3.9	(1.9~2.0)	N41° E	円形	16~60 (24.9)	329.80~330.10 (329.82)	16~41
宮沖	17	5区1面	II H03-07- 08	側柱 ? 2以上×2 以上	5.9以上	2.4	2.8以上	1.9が2.6	N22° W	円形	16~30 (20.2)	330.16~330.26 (330.20)	2~22
宮沖	18	5区1面	II H01-02- 06-07	側柱 2×3 ?	7.6	2.3~2.8	4.3	2.0~2.3	N46° E	円形	16~40 (25.7)	329.90~330.24 (330.08)	14~32
宮沖	19	5区1面	II H01-02- 06-07	側柱 2×3 ?	7	2.5~2.6	3.9	1.9~2.0	N58° E	円形	16~38 (24.7)	329.88~330.40 (330.12)	8~38
宮沖	20	5区1面	II H01-06- 07-11-12	側柱 2×5	12.2	2.3~2.6	4.6	(2.3)	N14° W	円形	23~34 (26.8)	329.76~330.18 (329.94)	6~40
宮沖	21	5区1面	II H01-02- 06-07-11- 12	側柱 2 ? ×5	12.2	2.3~2.6	4.8	(2.4)	N3° E	円形	20~43 (23.7)	329.98~330.14 (330.07)	8~26
宮沖	22	1区2面	XVI Q20- 25,R16-21	側柱 2×3	7.05	1.84~2.76	3.85	2.03-1.82	N54° W	円形	19~56(31.9)	330.8~331.44 (331.17)	9~47
宮沖	23	1区2面	XVI Q20- 25-R16-21	側柱 2×2以上	5.36以上	2.31~3.05	4.34	2.17 ? · 2.17 ?	N72° W	円形	17~33(24.3)	331.08~331.56 (331.28)	7~32
宮沖	24	1区2面	XVI R11-16	側柱 2×3	6.97	2.16~2.27	4.33	1.89-2.44	N29° E	円形	20~44(28.4)	331.14~331.40 (331.24)	17~32
宮沖	25	1区2面	XVI R11-16	側柱 2 ? ×3	6.54	1.9~2.38	3.44	1.72 ? · 1.72 ?	N38° E	円形	26~68(44.9)	330.84~331.53 (331.27)	6~62
宮沖	26	1区2面	XVI R11-16	側柱 2以上× 2以上	2.5以上	2.5	1.56 以上	1.56	N38° E	円形	43~61(50)	331.08~331.44 (331.25)	15~44
宮沖	27	1区2面	XVI Q25- R21	側柱 2×3 (2×4)	7.64(8.8)	1.78~3.02	4.13	2.0~2.13 (2.2~2.4)	N88° E (N86° E)	円形	24~155 (52.4)	330.86~331.38 (331.04) (331.19)	7~44
宮沖	28	1区2面	XVI V05- W01	側柱 2×3	7.8	2.1~2.94	3.76	1.56~2.2	N78° W	円形	19~36(24.9)	330.99~331.29 (331.21)	4~27
宮沖	29	1区2面	XVI V05- 10,W01	側柱 2×4	8.81	1.75~2.58	3.64	1.82 ? · 1.82 ?	N32° E	円形	17~76(27.7)	330.64~331.22 (331.03)	5~39
宮沖	30	1区2面	XVI V10- W06	側柱 2×3	7.91	2.46~3.0	4.62	2.3~2.32	N64° W	円形	18~29(24.9)	330.90~331.28 (331.06)	5~35
宮沖	31	1区2面	XVI V10- 15,W06-11	側柱 2×3	8.07	2.38~3.04	4.03	2.01 ? · 2.02 ?	N80° W	円形	19~44(30.8)	330.60~331.07 (330.87)	12~34
宮沖	32	1区2面	XVI V14- 15-19-20- W11-16	側柱 2×3	8.94	2.53~3.51	4.65	2.66~1.99	N89° W	円形	12~38(22.7)	330.46~331.01 (330.76)	6~34
宮沖	33	1区2面	XVI V15- 20,W11-16	側柱 2×3	7.16	1.96~2.9	3.64	1.82 ? · 1.82 ?	N15° E	円形	20~50 (29.4)	330.47~331.03 (330.77)	10~38

置するSF29との関係は不明である。本跡は直線的に並ぶSK595・679・663・682を西桁行、東側に平行して直線的に並ぶSK608・615・633を中央桁行、その東側に平行するSK605・635とSK621・648を東桁行として、梁行3間×桁行3間の総柱建物跡と捉えた。北東部の柱穴は川久保1・2区境のトレンチにかかって不明で、内部の柱穴も捉えられなかったものがある。また、SK608はST29の柱穴としても妥当な位置にあり、その帰属関係は断定できなかった。本遺跡内では梁行3間×桁行3間の建物跡は本跡のみで、重複する梁行2間×桁行3間の側柱建物跡2棟の一部をまとめて捉えた可能性がある。遺物はSK595から平安時代の土師器3gが出土した。NR1c上層のⅢ2層上面検出で平安時代以後と捉えられ、柱穴の形状や周囲からの出土遺物から中世と捉えた。

川久保ST28 1区南東部1面 IX H16・21 (第181図)

川久保1区南東部、NR1c上面検出の柱穴の配列を整理作業で検討して認定した。ST27・29と重なって位置し、ST29は規模や構造が類似して建て替えの関係と思われる。本跡範囲内に位置するSF29との関係は不明である。本跡は直線的に並ぶSK659・599・603を北桁行、約3.8m離れて平行するSK681・687・614・611を南桁行とする側柱建物跡と捉えた。梁行中間の柱穴は捉えられなかったが、柱間寸法から梁行2間と思われ、桁行は3間と捉えたが東延長先にあるSK604まで延びて桁行4間の可能性がある。各柱穴の底面標高は傾斜下方の西側ほど低く、約20cm内外の幅がある。出土遺物はない。本跡の時期はⅢ2層上面にあつて平安時代以後と捉えられ、周囲で検出された土器から中世と捉えた。

川久保ST29 1区南東部1面 IX H16・21 (第181図)

川久保1区南東部のNR1c上面で検出された柱穴の配列を整理時に検討して本跡を認定した。規模や構造が似るST28とは建て替えの関係と思われる。本跡は直線的に並ぶSK664・608・606を北桁行、平行して直線的に並ぶSK632・619・622を南桁行、西端のSK664と632を結ぶライン中間のSK667を西梁行中間の柱穴とする梁行2間×桁行2間以上の側柱建物跡と捉えた。本跡東側は川久保1・2区境に入れたトレンチにかかって規模は不明である。SK608はST27の柱穴でも妥当な位置にあり、帰属関係は断定できなかった。出土遺物はないが、ST28同様に本跡時期は中世と捉えた。

イ 川久保1区10面北部の掘立柱建物跡 (第269～271図 PL23)

川久保1区10面北部のⅢ2層上面では中央東寄りと北西部で柱穴群が検出された。整理作業でそれぞれ柱穴の配列を検討し、川久保1区中央東寄りではST17～21、北西部でST22・23を認定した。Ⅲ2層検出で平安時代以後の遺構と思われるが、1区中央東寄りのST20は柱穴から近世陶磁器が出土し、上面で見逃した近世建物跡と捉えられた。ST20周辺の川久保1区中央東寄りでは近世水田造成で9面水田跡まで削平されており、近世遺構は層位的に分離できなかった。この周辺に位置するST17～19・21は近世の可能性もある。一方、川久保1区北西部の掘立柱建物跡は、上層に8面水田跡を被覆する洪水土層やその耕作土層があり、近世面と分離していて中世の所産とみられる。

川久保ST17 1区10面 IX A15、B11 (第178図)

川久保1区中央東寄りに位置し、南にSB21、東にSB57が隣接する。整理作業での柱穴配列の検討から本跡は直線的に並ぶSK260・576・563・253を北桁行、その南に平行して直線的に並ぶSK403・398・389・254を中央桁行、さらにその南に平行して直線的に並ぶSK364・395・558を南桁行とする梁行2間×桁行3間の総柱建物跡と捉えた。南桁行の東から2番目柱穴はトレンチにかかって不明で、北桁行の西から3番目柱穴はSK428に該当する可能性がある。本跡範囲内にある川久保SK400は内部施

設と断定はできない。柱穴や建物跡の形状から中世と考えたが、出土遺物はなく、近世の可能性も残る。

川久保 ST18 1区10面 IX A14・15 (第178図)

川久保1区10面の中央東寄りのST17西側に位置する。整理作業の検討で、直線的に並ぶSK366・290・361・362を南桁行、その西端のSK366から北直交方向に並ぶSK482・503・366を西梁行、東端SK362から北直交方向に並ぶSK280・285・362を東梁行とする梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。北桁行中間の柱穴は捉えられず、桁行の長さは周囲の掘立柱建物跡より短い。本跡も建物跡や柱穴の形状から中世と捉えたが、出土遺物はなく、近世の可能性も残る。

川久保 ST19 1区10面 IX A9・10 (第178図)

川久保1区10面の中央東寄り、ST18北側でST21に重なって位置する。整理作業の検討から、直線的に並ぶSK311・437・434・432を北桁行、その南側に平行して直線的に並ぶSK190・332・197を南桁行とする梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。梁行中間の柱穴や南桁行東から2番目柱穴は不明である。本跡は建物跡や柱穴の形状から中世と捉えたが、出土遺物はなく、近世ST20に重なって位置して近世の可能性もある。

川久保 ST21 1区10面 IX A9・10 (第179図)

川久保1区10面の中央東寄りにST19と重なって位置する。整理作業の検討で、本跡は直線的に並ぶSK380・335・438・435を北桁行、それと平行して直線的に並ぶSK308・494・493・431を南桁行、東端のSK435・433・431を東梁行とする梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。西梁行中間の柱穴は捉えられず、本跡中央にあるSK192・510は、中央桁行ラインから位置がずれるので、本跡柱穴と捉えなかった。本跡も建物跡や柱穴の形状から中世と考えたが、出土遺物はなく、近世の可能性もある。

川久保 ST22 1区10面 IX A12・17 (第179図)

川久保1区10面北西部のST23北側に位置する。整理作業の検討で直線的に並ぶSK324・509を北桁行、それと平行して直線的に並ぶSK418・296を南桁行とする梁行2間×桁行2間以上の側柱建物跡と捉えたが、西側は調査区北境のトレンチにかかって規模は不明である。東端にあるSK509と296を結ぶラインの中間に位置するSK472は東梁行中間の柱穴の可能性もある。出土遺物はない。本跡の時期は検出面と建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

川久保 ST23 1区10面 IX H17 (第179図)

川久保1区10面北西部のST22南側に位置する。他遺構との重複ではSL07に切れ、本跡内にあるSF13・14との関係は不明である。整理作業での柱穴配列の検討から、直線的に並ぶSK343・244・245・224を南桁行、それと平行して直線的に並ぶSK298・468を北桁行、南桁行西端SK343から北直交方向に位置するSK322を西梁行中間の柱穴とする梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。北西部は調査区外に延びる。本跡柱穴は、1区10面検出のSK244・245・224が底面標高327.9～328.0m前後、10面で見逃して下層調査中に検出したSK298・343・322・468は底面標高が327.1～327.4mで、底面標高に50cm以上の差があって同一建物跡の柱穴との認定に課題を残す。しかし、SK244・245・224底面が掘り足らなかった可能性があり、ここでは可能性がある掘立柱建物跡として掲載する。出土遺物はないが、柱穴の形状や検出面から中世と考えた。

ウ 川久保3区の掘立柱建物跡 (第286図)

川久保3区の段丘縁辺にかかる緩斜面で柱穴が集中して検出された。調査では柱穴の一部がSA02や

SB12 ピットと捉えられたが、柱穴集中の範囲内にはN46° W方向に約1.2～1.4m間隔で平行する柱穴列がいくつか認められ、その柱穴列の長さが建物跡の桁行に当たると思われた。そこで、整理作業ではこの桁行と想定された平行する柱穴列のなかで、間隔1.2～1.4mでは狭すぎるので、1列おき(=梁行柱間寸法が2.4～2.8m)の柱穴の組み合わせとして検討し、ST16を認定した。ST16柱穴に含まれなかった平行する柱穴列が他にもあり、類似規模の建物跡が平行移動して建て替えられていると思われる。また、梁行・桁行と平行した短く浅い建物跡に伴う雨水排水用溝と思われる溝跡5条が検出された。これらの溝跡も掘立柱建物跡の建て替えに伴って造り替えされたと思われ、溝跡数からは梁行方向で最低3回の建て替えが推測されたが、各溝跡に伴う掘立柱建物跡は認定し得なかった。

川久保ST16 3区 IV M06・07・11・12 (第177図)

川久保3区北部の段丘縁近くであり、調査時にSB12ピットやSA02とされた柱穴の配列を整理作業で検討し、認定した。本跡は直線的に並ぶSB12Pit2・6、Pit74を北桁行、平行して直線的に並ぶSK42内の窪みからPit165・212・222、SA02Pit1・4を中央桁行、南側に平行して直線的に並ぶPit191・186・176、SA03Pit1を南桁行とする総柱建物跡と捉えた。中央桁行柱穴は直線的で等間隔に並ぶが、南桁行の東から1・3番目、北桁行西端、西から1・4・5番目柱穴は捉えられなかった。また、中央と南桁行柱穴の底面標高は類似するが、北桁行柱穴の底面標高はやや高い。南桁行に平行するSD26は本跡に伴うと思われる。出土遺物はPit165から古墳時代後期土師器6g、不明土器8gが出土し、周辺のピットから平安時代の土師器片が少量出土した。本跡の時期はSB12を切るので平安時代以後と思われ、近世陶磁器が全く出土していないことや、建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

エ 川久保遺跡5区2面の掘立柱建物跡 (第264～266図 PL23)

川久保5区2面ではⅢ層上面で、褐灰色土を埋土とする柱穴が多数検出された。柱穴は斑尾川寄りの西側に多く分布し、土石流堆積層の巨礫が露出する川久保5区北・東部や、地形的に低い南部は分布が散漫である。川久保5区中央西部と、南部では直線的に柱穴が並ぶように捉えられたことから、整理作業では2カ所それぞれで柱穴の配列を検討した。中央西部はL字形に位置するSD101・102、その西側に竪穴建物跡SB39が位置し、これらが掘立柱建物跡と関連した遺構と仮定して同方位の柱穴配列を検討した。また、南部は柱穴の散漫な分布のなかで、直線的に並ぶと認められる柱穴列から掘立柱建物跡を検討した。これらの柱穴配列の検討からST24～26・30～40の14棟を認定した。建物跡は梁行2間×桁行3間の側柱建物跡が多い。川久保5区では掘立柱建物跡が検出された他地区で出土していない13世紀後半～14世紀前半頃の遺物が認められ、この時期の掘立柱建物跡が含まれる可能性がある。

川久保ST24 5区2面 II M14・15・20、N11 (第180図)

川久保5区中央西部にST25・26と一部重なって位置する。整理作業の柱穴の配列検討から、本跡は直線的に並ぶSK1083・1484・1351・1225を西桁行、同じく直線的に平行して並ぶSK1447か1446・1125・1208か1209・1251を東桁行、SK1121を北梁行中間の柱穴とする長方形に柱穴が配置されるように認められたことから、梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。南梁行中間には柱穴は検出されず、個々の柱穴の底面標高や平面規模は幅がある。また、東桁行柱穴は重複、あるいは近接してSK1446・1447、SK1208・1209、SK1224・1225があるが、いずれが本跡柱穴かは断定できなかった。出土遺物はSK1446から白磁碗1片3gとSK1208・1484より古墳時代後期土器それぞれ34g・15g出土し、本跡の時期は検出面と出土遺物から中世と捉えた。

川久保 ST25 5区2面 II M14・15・20、N11 (第180図)

川久保5区中央西部のSD101・102周辺にある。ST25はST24・26と一部重なって位置し、SD101・102と棟方位は同じである。本跡は直線的に並ぶSK1084・SB39Pit3・1108・1138を西桁行、それと平行して直線的に並ぶSK1126・1383・1368・1162を東桁行、南梁行中間のSK1143を含めて長方形に柱穴が配置されると捉え、梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と認定した。西桁行北から2番目柱穴のSB39Pit3は位置からSB39と重複した本跡柱穴と捉えた。北梁行中間柱穴は捉えられなかった。出土遺物はSK1383から古墳時代後期～奈良時代の土師器甕40g、不明土器13g、SK1368から弥生時代後期裏1片32gがある。本跡の時期は建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

川久保 ST26 5区2面 II M14・15・20、N11 (第180図)

川久保5区中央西部にST24・25に重なって位置する。整理作業の柱穴配列検討から、本跡は直線的に並ぶSK1124・1087・1312・1477を西桁行、平行して直線的に並ぶSK1205(1204)・1408・1246・1161を東桁行、北梁行中間のSK1128、南梁行中間のSK1215を含めて長方形に配置される柱穴から梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。各柱穴の底面標高もほぼ類似する。SD101・102と本跡棟方向はほぼ同じである。SK1563から不明土器9g出土した。本跡時期は検出面から中世と捉えた。

川久保 ST30 5区2面 II N17・18・22・23 (第182図)

川久保5区南部に位置する。整理作業の柱穴配列の検討から、直線的に並ぶSK1748・1631・1573・1567を南桁行、平行して直線的に並ぶSK1651・1610・1588・1559を北桁行、南梁行中間に位置するSK1563を含めてコ字形の柱穴配置が認められた。南桁行西端のSK1748はやや位置がずれ、西梁行中間の柱穴は捉えられなかったが、梁行2間×桁行3間前後の側柱建物跡と捉えた。本跡はST31・32と重なって位置し、規模・構造も類似するので建て替えの関係と思われる。東梁行東端のSK1559はST31の柱穴でも妥当な位置にあり、帰属関係は断定できなかった。出土遺物はSK1748から古墳時代後期土師器32g、SK1631から古墳時代後期土師器7g、SK1588から古墳時代後期～奈良時代土師器173gがある。いずれも小片である。本跡の時期は検出面から中世と捉えた。

川久保 ST31 5区2面 II N18・23・24 (第182図)

川久保5区南部で検出された柱穴配列を整理作業で検討して認定した。本跡は直線的に並ぶSK1600・1559・1546を南桁行、平行して直線的に並ぶSK1612・1596・1554を北桁行、SK1549を東梁行中間の柱穴とする梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。北・南桁行西から2番目、西梁行中間柱穴は捉えられず、桁行は1間西へ延びる可能性がある。また、本跡南桁行北から3番目のSK1559はST30柱穴でも妥当な位置にあるが、帰属関係は断定できなかった。本跡と重なるST30・32は規模・構造が類似し、建て替えの関係と思われる。出土遺物はSK1593より古墳時代後期土器11gと不明土器5gが出土した。本跡時期は検出面から中世と捉えた。

川久保 ST32 5区2面 II N23・24 (第182図)

川久保5区南部で検出された柱穴配列を整理作業で検討して認定した。本跡は直線的に並ぶSK1599・1545・1526を南桁行、平行して直線的に並ぶSK1598・1593・1529を北桁行、東梁行中間のSK1528を含めて長方形に柱穴が配列すると認められ、梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。本跡と重なる類似規模のST30・31とは建て替えの関係と思われる。東桁行北から3番目と西桁行北から2番目、北梁行中間の柱穴は捉えられなかった。北梁行は延びる可能性がある。遺物はSK1526から古墳時代後期須恵器68g、SK1593から古墳時代後期土器11g、不明土器5gが出土した。検出面から中世と捉えた。

川久保 ST33 5区2面 II N12・13・17・18 (第183図)

川久保5区南部にST34と重なり、一部調査区外へ延びる。本跡は直線的に並ぶSK1695・1672・1666・1659を基準に、SK1695からその北直交方向に位置するSK1692を西梁行と捉えて認定したが、柱穴が少なく断定はできない。東側半分以上が調査区外へ延び、桁行西側の柱穴は捉えられなかった。調査区内の規模は梁行1間以上、桁行3間以上で、遺物はSK1672から時期不明の土師器8gが出土したのみである。本跡の時期は検出面から中世と捉えた。

川久保 ST34 5区2面 II N12・13・17・18 (第183図)

川久保5区南部にST33と重なって位置する。本跡は、直線的に並ぶSK1702・1694・1667・1668を北桁行、平行して直線的に並ぶSK1710・1679・1674を南桁行と捉え、SK1668の南直交方向にあるSK1662を結ぶラインを東梁行としてコ字形に配置される柱穴から認定した。梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えたが、西梁行中間と南桁行東端柱穴は捉えられなかった。各柱穴は平面形がやや大きく、深いものが多い。遺物はSK1710から青磁碗(1451)1片18gと古墳時代後期土器93g、SK1702から古墳時代土器76g、SK1674から古墳時代後期土器22g、古墳時代後期～奈良時代土器67g、SK1667から古墳時代後期土器19gが出土した。本跡の時期は検出面や青磁碗の出土から中世と捉えた。

川久保 ST35 5区2面 II N16・21 (第184図)

川久保5区中央西部に位置し、南西部はトレンチにかかった。整理作業の柱穴の配列検討から認定し、本跡は直線的に並ぶSK1835・1817・1794・1772を北桁行、平行して直線的に並ぶSK1844・1800・1780のラインを南桁行、北桁行西端のSK1835から南直交方向にあるSK1843を結ぶラインを西梁行、東端のSK1772から南直交方向にあるSK1838・1780を結ぶラインを東梁行とする梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。桁行柱穴列の東側延長先にはSK1735、SK1755が位置するが、それぞれST40、ST37柱穴と捉えた。出土遺物はSK1780から古墳時代後期土師器43g、SK1794から古墳時代後期黒色土器A12gが出土した。本跡の時期は検出面から中世と捉えられ、類似した形態で重なって位置するST36～39と本跡は建て替えの関係と思われる。

川久保 ST36 5区2面 II N16・17・21 (第184図)

川久保5区中央西部にST35・37～39と重なって位置する。整理作業時の検討で、本跡は直線的に並ぶSK1814・1789・1736を北桁行、平行して直線的に並ぶSK1807・1804・1798・1753を南桁行、SK1810を西側梁行中間柱穴、東側をSK1758と捉え、規模から梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。遺物はSK1753から古墳時代後期土師器81g、SK1804から古墳時代後期黒色土器A・土師器122g、SK1807から古墳時代後期土師器15gが出土した。遺物は混入と思われる、本跡は検出面と建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。類似形態で重複するST35・37～39と本跡は建て替えの関係と思われる。

川久保 ST37 5区2面 II N16・17・21・22 (第184図)

川久保5区2面の中央西部にST35・36・38・39と重なって位置する。整理作業の柱穴配列の検討から認定した。本跡は直線的に並ぶSK1795・1759・1740を北桁行、平行して直線的に並ぶSK1847・1850・1629・1630を南桁行と捉えた。このなかでSK1629はST39の柱穴としても妥当な位置にあるが、帰属関係は断定できなかった。梁行中間の柱穴と北桁行柱穴の東から2番目の柱穴も捉えられなかったが、規模から梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と思われる。出土遺物はSK1795から古墳時代後期土師器裏ほか4片44g、SK1630から古墳時代後期土師器173g、SK1629から古墳時代後期黒色土器A・土師器41gがあるが、下層のSB60から混入したと思われる。本跡の時期は検出面と建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。類似位置にあって形態も類似するST35・36・38・39と本跡は建て替えの関係と思われる。

川久保ST38 5区2面 II N16・17・21・22 (第184図)

川久保5区中央西部に位置し、整理作業での柱穴配列の検討から認定した。本跡は直線的に並ぶSK1760・1755・1857・1647を北桁行、平行して直線的に並ぶSK1849・1626・1853を南桁行、北桁行東端のSK1647から南直交方向にあるSK1634・1853を東梁行とする梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。西梁行中間柱穴や南桁行西から2番目柱穴が捉えられず、桁行は西側調査区外へ延びる可能性がある。遺物はSK1626・1755・1760・1853・1857から古墳時代後期土器等がそれぞれ172・22・22・12・15gが出土し、いずれも下層遺構からの混入と思われる。本跡の時期は検出面と建物跡や柱穴の形状から中世で、重なって位置するST35～37・39と本跡は建て替えの関係と思われる。

川久保ST39 5区2面 II N16・17・21・22 (第184図)

川久保5区中央西部にST35～38と重なって位置する。整理作業の検討で、本跡は直線的に並ぶSK1738・1744・1644を北桁行とし、その西端のSK1738の南直交方向にあるSK1763と、東端のSK1644の南直交方向にあるSK1638・1578が平行した位置にあることから認定した。南桁行の中間柱穴が捉えられず、ここでは可能性のある建物跡として掲載する。規模から梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と思われる。南桁行東から3番目柱穴はST37のSK1629が該当するとも考えたが、本跡南桁行の中間に寄りすぎたので認定しなかった。遺物はSK1644・1725・1735・1757から古墳時代後期土器等が22・23・31・63g出土した。遺物はいずれも下層遺構からの混入と思われ、本跡の時期は検出面や建物跡と柱穴の形状から中世で、重複して位置するST35～38は本跡と建て替えの関係と思われる。

川久保ST40 5区2面 II N11・12・16・17 (第183図)

川久保5区中央付近、ST35～39の北側にある。整理作業での柱穴配列検討から、本跡は直線的に並ぶSK1725・1722・1703を北桁行、それと平行して直線的に並ぶSK1812か1811・1771・1735・1712を南桁行、北桁行東端のSK1703から南直交方向のSK1709・1712を結ぶラインを東梁行とする梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。北桁行西端の柱穴は5区を分別調査した際の地区境にあたって捉えられなかったが、やや位置がずれるSK1255か1271に当てられる可能性がある。遺物はSK1709から古墳時代後期～奈良時代土師器23g、SK1771から古墳時代後期黒色土器A12g、SK1811から古墳時代後期黒色土器Aと土師器59gが出土した。本跡時期は検出面と建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

オ 宮沖遺跡1区1面の掘立柱建物跡 (第251～253図 PL23)

宮沖1区1面では黒褐色土層のⅢ層上面で褐色土の柱穴を検出した。埋土が還元化した褐色系となった成因は一旦水田化された後に居住域に転用されたためか、居住地放棄後の水田化に際して構築時期が新しい遺構埋土は水の浸透で還元化しやすかったことが考えられる。一方、宮沖1区2面の中世柱穴はⅢ層起源の黒・暗褐色系埋土で1面の柱穴埋土と様相が異なる。この1面柱穴からは内耳銅片が出土し、15・16世紀の所産と捉えた。隣接する宮沖5区や川久保5区にも同時期の掘立柱建物跡が分布する可能性はあるが、褐色系埋土の柱穴は見出しにくく、内耳銅片の出土もないため抽出できなかった。宮沖1区1面の掘立柱建物跡ではST01のみ調査時に認定したが、他は整理作業の柱穴配列検討から認定した。柱穴は1区北部と中央北寄り、中央南部にかけての3カ所で集中すると認められ、北部ほど柱穴の密集が高い。これらの柱穴の集中地点は掘立柱建物跡の建て替えを繰り返した場所と想定し、柱穴集中地点毎に柱穴の配列を検討した。

北部は段丘縁辺近くの狭い範囲に柱穴が密集する。その南側はSD01を伴う後代の水田造成で削平されるが、削平際周辺で柱穴分布が希薄となり、中央北寄りの柱穴集中とはわずかだが空閑地を隔てる。この柱穴集中南端に直線的に並ぶ柱穴が認められ、その柱穴列を手掛かりにST05・06・10・11を認定した。

また、柱穴の集中する範囲の北西部に南西―北東方向に並ぶ柱穴列が認められ、これを梁行とする ST07～09 を認定した。いずれも東側は調査区外へ延びるが、梁行 2 間 × 桁行 3 間以上の類似した規模の建物跡と思われる。中央北寄りでは後代の水田造成で上部が削平されているが、建て替えと思われる近接・隣接して位置する柱穴を手掛かりに ST13・14 を認定した。また、中央～南部は柱穴分布が希薄だが、調査時に ST01、整理作業の検討で南側に梁行 2 間 × 桁行 3 間以上の ST12 が捉えられた。

宮沖 ST01 1区1面 XVI V05・10、W01・06 (第185図 PL24)

宮沖 1 区 1 面中央にあり、調査時に認定した。東部は調査区外へ延びる。本跡は、中央に平面形が直径 56～84cm の円形で、深さ 52～80cm の SK280・291・292・506 が方形に配置され、3m ほど外側に離れて直径 26～40cm の平面形が円形や方形で、深さ約 10～46cm の柱穴 SK256・255・254・253・476・294・297・453・287・275・277 がコ字形に取り囲む。異なる規模の柱穴から構成されるが、これは建物の構造に関連すると思われる。中央と外側の柱穴は同じ直線上には並はず、桁・梁を 1 本の材で貫く構造ではないと思われる。また、外側北・南辺柱穴列の東部と西辺中央南寄りで柱穴間隔が 0.9m と 1.9m の狭い場所が認められる。遺物は SK253 から古墳時代後期土師器など 26g、SK254 から古墳時代後期～奈良時代の土師器 115g、SK256 から古墳時代後期～奈良時代の土師器・須恵器 37g、SK277 から古墳時代後期黒色土器 A など 41g、SK280 から古墳時代前期土師器 74g と古墳時代後期～奈良時代の土師器・須恵器が 371g、SK290・291 から古墳時代後期～奈良時代の土師器・須恵器 287g、SK292 から古墳時代後期土師器 8g、SK287 から古墳時代前期土師器 7g と古墳時代後期土師器 36g、SK294 から時期不明の須恵器と古墳時代後期土師器 32g、SK297 から古墳時代後期黒色土器 A など 16g、SK476 から古墳時代後期～奈良時代の土師器 10g と平安時代黒色土器 A 19g、SK506 から古墳時代前期土師器 115g と古墳時代後期～奈良時代の土師器 38g が出土した。いずれも下層の住居跡遺物を混入したものと認められ、本跡の時期は検出面から中世と捉えた。

宮沖 ST05 1区1面 XVI Q20・25、R16・21 (第185図)

宮沖 1 区 1 面北部に位置する。整理作業での柱穴配列の検討で、本跡は N80° W 前後の方向に直線的に並ぶ SK1187 (1186)・142・20・120 を北桁行、それと平行して位置する SK155・161 (162・163)・135・127 を中央桁行、SK1148・171・176・444 を南桁行とする梁行 2 間 × 桁行 3 間の総柱建物跡と捉えた。東側は調査区外へ延びる可能性がある。遺物は SK20 から古墳時代前期土師器 15g、SK135 から時期不明土器 4g、SK155 から古墳時代後期土師器など 33g、SK161 から古墳時代後期土師器 22g、SK1148 から時期不明の須恵器 9g、SK176 から古墳時代後期土師器 17g、SK444 から古墳時代前期土師器 20g が出土した。ST05 と ST06 は類似した規模・形態の建物跡で、位置も重なることから建て替えの関係と思われる。本跡の時期は検出面と建物跡の形状から中世と捉えた。

宮沖 ST06 1区1面 XVI Q20・25、R16・21 (第185図)

宮沖 1 区 1 面の北部に ST05 と重なって位置する。整理作業での検討で ST05 の柱穴から東へ 0.8m 平行移動した位置にある柱穴の配置から本跡を認定した。ST05 は重なって位置する類似規模の建物跡で建て替えの関係と思われる。本跡は直線的に並ぶ SK1185 (1184)・104 (103)・125 (124)・119 を北桁行、それと平行して直線的に並ぶ SK154・138・186 (185) を中央桁行、SK168・172・189・191 を南桁行とする梁行 2 間 × 桁行 3 間の総柱建物跡と捉えた。本跡の東側は調査区外へ延びる可能性がある。また、中央桁行東側柱穴が捉えられず、北桁行の柱穴は 2 基ずつ近接・重複して、部分的に建て替えられた

可能性がある。遺物はSK168から内耳鍋1片4gと古墳時代～奈良時代の土師器32gがあり、SK185から古墳時代後期土師器13g、SK104から古墳時代後期土師器6g、SK154から古墳時代前期土師器35g、SK138から弥生時代後期と思われる土器88g、SK189から古墳時代後期～奈良時代土師器10g、SK191から時期不明土器5gが出土した。本跡の時期は検出面と内耳鍋の出土から中世と捉えた。

宮沖 ST07 1区1面 XVI R11・16 (第186図)

宮沖1区1面北部でST08・09と重なって位置する。整理作業の柱穴の配列検討から、直線的に並ぶSK829・429・37を北桁行、それと平行するSK17・27・62・81を中央桁行、さらに南側に平行するSK21・66・95(96)・111・113を南桁行とする梁行2間×桁行3間の総柱建物跡と捉えた。本跡は調査区際に位置し、東側は調査区外へ延びる可能性がある。北・中央桁行柱穴の底面標高は331.14～331.68mと幅はあるが、南桁行柱穴は331.24～331.38mと近似する。SK95・96はST07・08のいずれの柱穴と断定できなかった。遺物はSK81から内耳鍋1片20g(1454)と古墳時代後期～奈良時代の土師器15g、SK21から古墳時代前期土師器7g、古墳時代後期土師器91g、SK27から古墳時代後期～奈良時代の須恵器10g、SK95・96から古墳時代前期土師器49g、SK113より古墳時代後期～奈良時代土師器6gが出土した。本跡の時期は検出面と内耳鍋の出土から中世と捉えた。位置は重なるが、形態が異なるST08・09とは建て替えの関係とは捉えなかった。

宮沖 ST08 1区1面 XVI R11・16 (第186図)

宮沖1区1面北部でST07・09と重なるように位置し、ST09とは建て替えの関係と思われる。整理作業での柱穴配列の検討から、本跡は直線的に並ぶSK833・02・40を北桁行、平行して直線的に並ぶSK57か58・67か69・95か96・111・123を南桁行、北桁行西端のSK833から南直交方向にあるSK11・57か58を結ぶラインを西梁行と捉えた。本跡の東側は調査区外へ延びて規模は不明である。南桁行西から2番目柱穴はSK67か69と思われるが、柱間寸法はSK67が等間隔ながら、底面標高はSK67が331.08mと他の柱穴より低く、いずれが本跡柱穴か断定できなかった。また、南桁行3番目柱穴のSK95・96はST07・08柱穴でも妥当な位置にあって帰属関係は断定できなかった。確定しきれなかった柱穴があるが、調査区内の規模は梁行2間×桁行4間以上の側柱建物跡と捉えられる。同じ側柱建物跡のST09は建て替えの関係と思われる。遺物はSK02から古墳時代後期～奈良時代の土師器45g、SK11から古墳時代後期～奈良時代の土師器17g、SK40から古墳時代後期～奈良時代の土師器9g、95・96から古墳時代前期土師器49gが出土した。本跡の時期は検出面と建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

宮沖 ST09 1区1面 XVI R11・16 (第186図)

宮沖1区1面北部にST07・08と重なって位置する。整理作業での柱穴配列の検討から、本跡は直線的に並ぶSK06・04・39を北桁行、SK114か61・70・91か1196・117を南桁行、北桁行西端のSK06から南直交方向に並ぶSK25・61か114を西梁行とする梁行2間×桁行3間以上の側柱建物跡と捉えた。本跡の東側は調査区外へ延びて規模は不明である。南桁行西端の柱穴は重なるSK61・114、西から3番目柱穴はSK91・1196のいずれが本跡柱穴かは断定できなかった。柱穴は直径20cm前後と小さく、底面標高は高いSK39と低いSK114を除くとほぼ331.40～331.58mである。重なって位置するST08とは建て替えの関係と思われる。遺物はSK04から古墳時代後期～奈良時代土師器22g、SK25から古墳時代後期～奈良時代の土師器8g、SK39から平安時代の須恵器18g、SK61から古墳時代後期土師器19g、古墳時代前期土師器39g、不明土器2g、SK70から古墳時代前期土師器27gが出土した。本跡の時期は検出面と、建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

宮沖 ST10 1区1面 XVI R11・16 (第186図)

宮沖1区1面北部にST07～09・11と重なって位置し、規模も類似するST11は本跡と建て替えの関係と思われる。整理作業での柱穴配列の検討から、本跡は直線的に並ぶSK12・426・180を北桁行、平行して直線的に並ぶSK1192・100・89・85を南桁行とする側柱建物跡と捉えた。梁行はその長さから2間と思われ、桁行は東側が調査区外へ延びて3間以上としかわからない。段丘縁辺の緩斜面にかかる北西隅と西梁行中間の柱穴は捉えられなかった。遺物はSK12から古墳時代前期土師器4g、SK89から不明土器3g、SK100から時期不明の須恵器7gが出土した。本跡の時期は検出面から中世と捉えた。

宮沖 ST11 1区1面 XVI R11・16 (第186図)

宮沖1区1面北部にST07～10と重なって位置し、規模・形態が類似するST10は、本跡と建て替えの関係と思われる。本跡は直線的に並ぶSK59(60)・26・32・43を北桁行、それと平行して直線的に並ぶSK143か144・101・108・115か116を南桁行とし、北桁行西端のSK60か69から南直交方向に並ぶSK1195とSK143か144を結ぶラインを西梁行とする側柱建物跡と捉えた。桁行の柱間寸法が短いので、SK26・43・101・115(116)は本跡を東へ平行移動した位置にある別の建物桁行柱穴かもしれない。遺物はSK144からカワラケ1片12gと古墳時代前期土師器31g、古墳時代後期土師器10g、不明土器16g、SK32から古墳時代後期～奈良時代の土師器25g、SK43から古墳時代後期～奈良時代の須恵器182g、SK60から古墳時代後期黒色土器Aや土師器と縄文土器29g、SK101から奈良時代須恵器17gと不明土器10g、SK108から不明土器6g、SK116から内耳鍋1片7gと古墳時代後期黒色土器A5g、不明土器7gが出土した。本跡の時期は検出面とカワラケの出土から中世と捉えた。

宮沖 ST12 1区1面 XVI V15, W11 (第189図)

宮沖1区1面の南部に位置し、整理作業での柱穴配列の検討から認定した。本跡は直線的に並ぶSK363・308・314・318を北桁行、それと平行して直線的に並ぶSK340・335・467を南桁行とし、北桁行東端のSK318から南直交方向にあるSK325・467を東梁行とする梁行2間×桁行3間以上の側柱建物跡と捉えた。西側の柱穴は段丘縁辺の緩斜面、南西隅柱穴は試掘トレンチにかかって捉えられなかった。また、本跡内に位置する方形の土坑SK499と本跡の関連は不明である。柱穴の底面標高は331.10mと330.80～.90m前後の二者がある。遺物はSK308から古墳時代後期～奈良時代の土師器25g、SK318から時期不明土器15g、SK325から古墳時代後期土師器15g 平安時代土師器5gと不明土器5g、SK335から古墳時代後期～奈良時代の土師器25g、SK467から古墳時代後期～奈良時代の土師器10gと弥生時代後期土器10gと時期不明土器4gが出土した。本跡の時期は検出面と建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

宮沖 ST13 1区1面 XVI Q25, R21, V05, W01 (第188図)

宮沖1区1面の中央北寄りで検出された柱穴の配列を整理作業で検討して認定した。重なって位置するST14とは建て替えの関係と思われるが、梁行長は本跡のほうが長い。本跡は直線的に並ぶSK479か480・205・491・193を北桁行、平行して直線的に並ぶSK222・229・241か242・245を南桁行、北桁行東端のSK193から南直交方向に位置するSK251・245を結ぶラインを東梁行と捉えた。南桁行西端と北桁行東から2番目の柱穴は捉えられず、西側範囲は確定できなかった。北桁行西端柱穴をSK479とすると桁行は約7.9m、SK480では約7.6mを測る。柱間寸法は1.5(1.8)～2.5mだが、南桁行は2.0～2.3mと等間隔で、柱穴底面標高は北桁行が331.50m前後、南桁行で331.20m前後と北・南桁行で若干異なる。遺物はSK205から平安時代の黒色土器A2gと不明土器7g、SK222から古墳時代後期土師器44gと同須恵器2g、SK251から古墳時代後期土師器18gが出土した。本跡の時期は検出面から中世と捉えた。

宮沖 ST14 1区1面 XVI Q25、R21、V05、W01 (第188図)

宮沖1区1面の中央北寄りで見出された柱穴の配列を整理作業で検討して認定した。重なって位置するST13とは建て替えの関係と思われるが、本跡のほうが梁行長は短い。本跡は直線的に並ぶSK213・207か208・235・195か194を北桁行、平行して直線的に並ぶSK220か221・174・229・243・244を南桁行と捉えた。東端のSK195とSK244を結ぶライン中間のSK249を東梁行中間の柱穴と捉えた。中央桁行東から2番目柱穴は、近接するSK231に当たるかもしれない。また、西側へ延びる可能性はあるが、調査区内で梁行2間×桁行3間と捉えられた。柱穴の底面標高は331.10～331.20m前後と一定する。SK213から古墳時代後期土器11g、SK195から古墳時代後期～奈良時代土器79g、SK235から古墳時代後期土器5g、SK221から不明土器22gが出土した。本跡の時期は検出面から中世と捉えた。

カ 宮沖遺跡5区1面の掘立柱建物跡 (第261図 PL24)

宮沖5区の中央以北は現代の建物基礎で攪乱され、南に隣接する川久保5区3面、北に隣接する宮沖1区2面に相当するⅣ・Ⅴ・Ⅷ・Ⅸ層上面で古墳時代後期～奈良時代の遺構と共に中世の柱穴を検出した。整理作業では、攪乱の少ない5区南部で見出された柱穴を中心に配列を検討しST15～21を認定した。

宮沖 ST15 5区1面 II H07・11・12 (第188図)

宮沖5区南部で見出された柱穴の配列を整理作業で検討して本跡を認定した。本跡はSB01を切り、SK784に切られる。ST16・20・21と重なって位置するが、直接切合わず、本跡内に位置するSF08・13・14との関係は捉えられなかった。本跡は直線的に並ぶSK756・595・596を北桁行、それと平行して直線的に並ぶSK610・768・771を南桁行、東端のSK771の北直交方向に位置するSK752を東梁行中間の柱穴として柱穴がコ字形に配列すると認めて、梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。西側へ延びる可能性はあるが、捉えられた桁行の長さはST16と類似し、位置が重なることから本跡と建て替えの関係と思われる。北桁行東端の柱穴はSK784に切られ、西梁行中間の柱穴、南桁行西から2番目の柱穴は捉えられなかった。柱穴の底面標高は329.88m前後で、地山のⅨ層が高い南東部は330.11m前後と浅い。遺物はSK771から古墳時代後期黒色土器A38gが出土した。本跡の時期は宮沖SB01を切ることから奈良時代以後の所産で、建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

宮沖 ST16 5区1面 II H07・11・12 (第188図)

宮沖5区南部で見出された柱穴の配列を整理作業で検討して本跡を認定した。本跡がSB01を切り、直接切合わないが本跡はST15・20・21と重なって位置する。本跡内部に位置するSF13・14との関係は不明である。本跡は直線的に並ぶSK758・608・593・623を北桁行、平行して直線的に並ぶSK1808・766・783を南桁行と捉えた。南桁行西端と梁行中間柱穴は捉えられず、西側へ延びる可能性がある。調査域内では梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。類似規模で重なるST15と本跡は建て替えの関係と思われる。遺物はSK783から古墳時代前期土器17g、古墳時代後期土器59gが出土した。本跡の時期はSB01を切ることから奈良時代以後のもので、建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

宮沖 ST17 5区1面 II H03・07・08 (第189図)

宮沖5区南東端で見出した柱穴の配列を整理作業で検討し、直線的に並ぶSK719・739・629と北端のSK719から東直交方向に位置するSK674・720がL字形に配置されると認めて本跡を認定した。南側と東側は調査区外に延び、規模は東西1間以上×南北2間以上としか捉えられない。また、西辺の柱穴列上に連なるように柱穴が見出され、認定し得なかった建て替えの建物跡が重なる可能性がある。なお、各柱穴は浅いが、上面に現代の攪乱が入り、検出面が深くなったことによる。出土遺物はない。本跡の時期は柱穴や建物跡の形状から中世と捉えた。

宮沖 ST18 5区1面 II H01・02・06・07 (第189図)

宮沖5区南部で検出された柱穴配列を整理作業で検討して本跡を認定した。本跡は直線的に並ぶSK560・1447・772・660を北桁行、それと平行するSK689・584を南桁行、北桁行西端のSK560から南直交方向に位置するSK1782が長方形に並ぶと捉えて認定した。南桁行東端の柱穴はSK781に切られた可能性があり、南桁行東から2番目柱穴や西端柱穴、東梁行中間の柱穴は捉えられなかった。本跡は梁行2間×桁行3間の側柱建物跡で、重複するST19は本跡と建て替えの関係と思われる。遺物はSK584から古墳時代後期～奈良時代土師器21gが出土した。本跡時期は建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

宮沖 ST19 5区1面 II H01・02・06・07 (第189図)

宮沖5区南部にST18と重複して位置し、整理作業での柱穴配列の検討から本跡を認定した。本跡は直線的に並ぶSK561・656・662を北桁行、それと平行して直線的に並ぶSK694・711を南桁行、北桁行の西端SK561の南直交方向のSK698と694を結ぶラインを西梁行、東端のSK662から南直交方向に位置するSK669を含めてコ字形に配置する柱穴から認定した。北桁行東から2番目柱穴はSK659、南東隅の柱穴はSK781に切られた可能性があり、本跡は梁・桁行の長さから梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。重複するST18とは規模や形態が類似し、本跡と建て替えの関係と思われる。出土遺物はない。本跡の時期は建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

宮沖 ST20 5区1面 II H01・06・07・11・12 (第187図)

宮沖5区南部に位置し、整理作業での柱穴の配列検討から本跡を認定した。重なって位置するST21とは形状や棟方向が類似し、本跡と建て替えの関係と思われる。他遺構との重複では本跡SK866がST21のSK865を切る。本跡は直線的に並ぶSK1434・701・1788・638を西桁行、それと平行して直線的に並ぶSK866・688・709・611を東桁行とし、西桁行北端のSK1434と東桁行北端のSK866と中間のSK548を結ぶラインを北梁行、西桁行南端のSK638と東桁行南端のSK611の中間のSK1254を結ぶラインを南梁行と捉えた。SK1254のみ他柱穴より浅い。本跡の西桁行北から2・3番目柱穴、東桁行の北から2・5番目柱穴は捉えられなかったが、桁行規模はST21と類似した梁行2間×桁行5間の側柱建物跡と思われる。SK1788は宮沖5区のSD14・15調査時に検出したが、埋土の特徴から上面で見逃した遺構として本跡の柱穴に加えた。遺物はSK1434から時期不明の須恵器16g、SK611から古墳時代後期の黒色土器A18g、SK638から古墳時代後期土師器12gが出土した。本跡の時期は中世と思われるが、桁行規模がST21と同様に長く、宮沖5区内の他建物跡と時期が異なる可能性がある。

宮沖 ST21 5区1面 II H01・02・06・07・11・12 (第187図)

宮沖5区南部に位置し、整理作業の柱穴配列検討から本跡を認定した。重複して位置するST20は規模が類似し、建て替えの関係と思われる。他遺構との重複では本跡SK865がST20のSK866に切られる。本跡は直線的に等間隔で並ぶSK865・568・692・591・756・761を西桁行、その東側約4.4m離れて平行して並ぶSK791・754・612を東桁行と捉えた。東桁行柱穴の2・3・5番目柱穴は捉えられなかったが、建て替えの可能性があるST20と桁行長が類似することから、本跡は梁行2間×桁行5間の側柱建物跡と思われる。遺物はSK568から古墳時代後期の須恵器・土師器26gが出土した。本跡の時期は中世と思われるが、ST20と共に桁行が長く、宮沖5区内の他建物跡とは時期が異なる可能性がある。

キ 宮沖1区2面の掘立柱建物跡 (第254～256図 PL24)

宮沖1区2面ではⅢ層起源の黒・暗褐色や褐灰色系埋土の柱穴が検出された。宮沖1区2面は古墳～平安時代遺構の検出面に当たるが、宮沖1区1面と類似した小円形の平面形で、竪穴住居跡を切るように検

出されたものが多いことから中世の柱穴と捉えた。これらの柱穴は15～16世紀と推測された宮沖1区1面より下層にあって、宮沖1区2面では平安時代末と思われる土師器小型杯や羽釜片、白磁碗片や龍泉窯系画文青磁碗が出土したことから11世紀末頃～13世紀前半頃のものと思われる。ただし、柱穴内から中世の遺物が出土したものはほとんどない。柱穴はIX層礫が露出する段丘縁道を除いて調査区内に散漫に認められた。整理作業では小型の柱穴を抽出し、その配列を検討してST22～33の12棟を捉えた。このなかでST25・26はやや大きな柱穴で、古墳時代後期～奈良時代の掘立柱建物跡の可能性も残る。整理作業で捉えた掘立柱建物跡は梁行2間×桁行3間が多く、ST30・32が総柱建物跡だが、他は側柱建物跡である。それより大きな建物跡は梁行2間×桁行4間の側柱建物跡ST27・29があるが、突出した規模の掘立柱建物跡はない。棟方向は地形方向に合わせたものが多いが、南北を棟方向とするST24～26・29・33と、東西を棟方向とするST22・23・27・28・31・32が捉えられた。

宮沖 ST22 1区2面 XVI Q20・25、R16・21 (第190図)

宮沖1区2面北部にある。柱穴の配列を整理作業で検討して本跡を認定した。棟方向が少しずれるが、形態・規模が類似し、重なって位置するST23は本跡と建て替えの関係と思われる。他遺構との重複では本跡が古墳時代SB16を切る。本跡は直線的に並ぶSK1507・1267・1171・1475を北桁行、それと平行して直線的に並ぶSK1741・1151・1131を南桁行、桁行西端のSK1507・1741と中間のSK1157をつなぐラインを西梁行、桁行東端のSK1475・1131と中間のSK1279を結ぶラインを東梁行と捉えた。南桁行の東から2番目柱穴は捉えられなかったが、規模から梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と思われる。このうち、SK1131はST23柱穴、SK1267もST24の柱穴としても妥当な位置にあるが、帰属関係は断定し得なかった。段丘縁道のSK1507・1741は他柱穴よりやや大きく、隣り合うSK1267・1151は底面標高が他柱穴より低いなど、本跡柱穴はすべて同じ形状ではない。遺物はSK1507から古墳時代後期～奈良時代の須恵器・土師器など259g、古墳時代前期土師器31g、SK1151から古墳時代後期土師器・黒色土器A16g、SK1157から不明土器2gが出土した。本跡の時期は建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

宮沖 ST23 1区2面 XVI Q20・25、R16・21 (第190図)

宮沖1区2面北部で検出された柱穴の配列を整理作業で検討して本跡を認定した。他遺構との重複では本跡が古墳時代後期SB16を切る。重なって位置するST22は形態が類似し、建て替えの関係と思われる。本跡は直線的に並ぶSK1183・1162・1169を北桁行、平行して直線的に並ぶSK1147・1718・1131を南桁行と捉えた。南桁行西から3番目のSK1131はST22の柱穴でも妥当な位置にあり、帰属関係は断定できなかった。また、西梁行中間の柱穴が捉えられず、本跡東側も調査区外へ延びる可能性があって桁行規模の詳細は不明である。梁行は長さから2間、桁行は2間以上の側柱建物跡とみられる。出土遺物はないが、建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

宮沖 ST24 1区2面 XVI R11・16 (第190図)

宮沖1区2面の北部で検出された柱穴の配列を整理作業で検討し、本跡を認定した。SK1214・1181を結ぶラインを西桁行、それと平行して直線的に並ぶSK1531・1515・1170を東桁行、西桁行北端のSK1214と東桁行北端のSK1531の中間にあるSK1228を結ぶラインを北梁行、西桁行南端のSK1181と東桁行南端のSK1170の中間に位置するSK1267を結ぶラインを南梁行と捉えた。西桁行北から2・3番目の柱穴と、東桁行北から3番目の柱穴が捉えられなかったが、西桁行はSD10と重なる位置にあたって見逃した可能性がある。捉えられなかった柱穴もあるが、規模から梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と思われる。また、SK1267はST22柱穴でも妥当な位置にあたるが、帰属関係は断定できなかった。遺物はSK1515から時期不明土器8gが出土した。本跡は建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

宮沖 ST25 1区2面 XVI R11・16 (第190図)

宮沖1区2面北部の調査区東境付近にST24・26と重なって位置する。ST26とは柱穴の形状や棟方向が類似し、本跡と建て替えの関係と思われる。本跡は整理作業の柱穴配列検討から認定した。本跡東側は調査区外へ延びて全容は捉えられなかったが、本跡は直線的に並ぶSK1226・1223・1205・1519を西桁行、その東側に平行するSK1574・1576か1577を結ぶラインを東桁行とする梁行1間以上、桁行3間以上の建物跡と捉えた。遺物はSK1519から古墳時代前期土師器と弥生時代土器61gが出土したのみである。柱穴の平面規模は直径40cm前後と、他の中世掘立柱建物跡よりも大きい。古墳時代後期～奈良時代と捉えられた掘立柱建物跡柱穴よりは小さく、中世の可能性があると考えてここに掲載した。

宮沖 ST26 1区2面 XVI R11・16 (第190図)

宮沖1区北部の調査区東境付近にST24・25と重なって位置する。本跡は整理作業での柱穴配列の検討で、SK1517・1218か1219のラインとSK1219から東直交方向に位置するSK1570のラインがL字形に並ぶと認められて認定した。大部分は東側調査区外へ延びて、わずかな範囲しか確認し得なかったが、本跡は類似規模の柱穴からなるST25と関連する建物跡と捉えて認定した。柱穴は直径40～50cmと中世と捉えた柱穴よりやや大きい。中世の可能性を考えてここに掲載した。遺物はSK1219から古墳時代前期土師器5gが出土した。

宮沖 ST27 1区2面 XVI WQ25, R21 (第192図)

宮沖1区中央北寄りにあり、整理作業での柱穴配列の検討から認定した。他遺構との重複では本跡が古墳時代後期SB12・16を切る。本跡は直線的に並ぶSK1575・1123・1129・SB16Pit6か1131を北桁行、それと平行して直線的に並ぶSK1101・1616・1734か1090・1234か1111を南桁行、北桁行西端のSK1575と南桁行SK1101、その中間に位置するSK1429を結ぶラインを西梁行とする梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。東梁行中間の柱穴は捉えられず、北桁行東端がSB16Pit6か隣接するSK1131、南桁行東端の柱穴もSK1111か隣接するSK1234のいずれかは断定できなかった。SK1575は2基の土坑が重複している可能性があり、礫が集中する深い部分のみを本跡柱穴と捉えた。また、SB16Pit6はSB16床面で検出されて当初ビットとされたが、位置から重複する本跡の柱穴と捉え直した。遺物はSK1575から古墳時代後期土師器・黒色土器Aなど2.005gと古墳時代前期土師器56g、弥生時代後期土器2g、時期不明土器90gが出土し、SK1090から古墳時代後期～奈良時代土師器230gと古墳時代前期土師器139gと不明土器35g、SK1429から古墳時代後期土師器21gと古墳時代前期土師器26g、SK1616から古墳時代前期土師器95gと不明土器3gが出土した。SK1575はやや大きい。他の柱穴は小型で、その形状から本跡の時期は中世と捉えた。

宮沖 ST28 1区2面 XVI V05・W01 (第192図)

宮沖1区2面中央にあり、整理作業での柱穴配列の検討から認定した。他遺構との重複では本跡が奈良時代SB05と古墳時代前期SB20・22を切る。本跡は直線的に並ぶSK1261・1073・1076・1080を北桁行、それと平行して直線的に並ぶSK1057・1304・1044・1238を南桁行、北桁行西端のSK1261と南桁行西端のSK1057と中間に位置するSK1065を結ぶラインを西梁行、北桁行東端のSK1080と南桁行東端のSK1238と中間に位置するSK1049を結ぶラインを東梁行として、梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。東梁行中間のSK1049はやや南に寄っている。遺物はSK1049から古墳時代後期～奈良時代の土師器37g、SK1044から古墳時代後期～奈良時代の土師器14g、SK1304から平安時代土師器10gが出土した。出土土器は混入の可能性があり、本跡は柱穴と建物跡の形状から中世と捉えた。

宮沖 ST29 1区2面 XVI V05・10、W01 (第191図)

宮沖1区中央付近にあり、一部ST30と重なって位置する。他遺構との重複では本跡が平安時代SB07と古墳時代後期SB18を切る。整理作業での柱穴配列の検討から認定した。本跡は直線的に並ぶSK1061・1015・1019・1231・1591を西桁行、それと平行して直線的に並ぶSK1352・1248・1033・999・SB07 Pit 2を東桁行とする梁行2間×桁行4間の側柱建物跡と捉えた。北東隅柱穴SK1352がやや大きい。東桁行南端のSB07Pit2は、SB07と重複する本跡柱穴と捉えた。北・南梁行中間の柱穴は不明である。遺物はSK1352から古墳時代後期～奈良時代281g、古墳時代前期6g、不明土器30g、SK1591から弥生土器257gと古墳時代前期土師器77g、SK1015から時期不明土器3gが出土した。いずれも小片である。本跡の時期は建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

宮沖 ST30 1区2面 XVI V10、W06 (第191図)

宮沖1区中央付近にST29と一部重なって位置する。整理作業で2面検出の柱穴の配列検討から本跡を認定した。他遺構との重複では本跡SK961が古墳時代後期SB28を切る。本跡柱穴のSK1237と奈良時代SB05、SK1000・1284と平安時代SB04との重複関係は見逃した。また、SK1284はST31柱穴でも妥当な位置にあるが、帰属関係は断定できなかった。本跡は直線的に並ぶSK1028・1041・1237を北桁行、その南に平行するSK1023・1244・1058・1699を中央桁行、さらに南に平行するSK1556・1000・1284・961を南桁行と捉えた。北東部は調査区外へ延び、調査区内では梁行2間×桁行3間の総柱建物跡と捉えた。各柱穴の底面標高に差はあるが、長方形に柱穴が配置する。遺物はSK1000から古墳時代後期～奈良時代の土師器8gが出土した。本跡の時期は建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

宮沖 ST31 1区2面 XVI V10・15、W06・11 (第191図)

宮沖1区中央南寄りにあり、2面検出の柱穴配列を整理作業で検討して認定した。他遺構との重複では本跡が古墳時代後期SB14・28を切り、直接切り合わないがST30がわずかに重なる。本跡は直線的に並ぶSK1454・1286・1284・1725を北桁行、それと南側に平行して直線的に並ぶSK1295・1627・950を南桁行と捉えた。南桁行西端の柱穴の位置にSB07Pit3が位置するが、SB07Pit3は床面検出ながらSB07と重複する本跡柱穴の可能性もある。また、SK1284はST30の柱穴でも妥当な位置にあるが、帰属関係は断定できなかった。梁行中間の柱穴が捉えられなかったが、梁行は規模から2間と思われる、桁行は3間の側柱建物跡と捉えた。遺物はSB07Pit3から古墳時代後期土師器10gが出土した。本跡はSB14・28を切ることから古墳時代以後のものとして捉えられ、建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

宮沖 ST32 1区2面 XVI V14・15・19・20、W11・16 (第192図)

宮沖1区中央南よりに位置し、2面検出の柱穴配列を整理作業で検討して認定した。本跡は直線的に並ぶSK1298・1714・981か982・1639を北桁行、その南側に平行して直線的に並ぶSK994・1694・970を中央桁行、さらに南に平行して直線的に並ぶSK922・923・1669・1660を南桁行とする梁行2間×桁行3間の総柱建物跡と捉えた。東梁行中間の柱穴は捉えられなかった。他遺構との重複では、直接切り合わないがST33の一部が重なり、本跡が古墳時代後期SB14・19を切る。遺物はSK1298から古墳時代後期～奈良時代の土師器18g、SK970から古墳時代後期～奈良時代須恵器4gが出土した。本跡の時期は古墳時代後期SB14を切るので古墳時代後期以後と捉えられ、建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

宮沖 ST33 1区2面 XVI V15・20、W11・16 (第191図)

宮沖1区中央南よりに位置し、2面検出の柱穴の配列を整理作業で検討して認定した。他遺構との重複では、本跡が古墳時代後期SB14・19を切り、直接切り合わないがST32が本跡範囲に重なる。本跡は

直線的に並ぶSK993・973・969・924を西桁行、その東側に平行して直線的に並ぶSK1529・1396・1661・1663を東桁行とする梁行2間×桁行3間の側柱建物跡と捉えた。梁行中間の柱穴は捉えられず、桁行は延びる可能性もある。遺物はSK969から時期不明土器7g、SK973から古墳時代後期黒色土器A5gが出土した。遺物は重複するSB14・19からの混入とみられ、本跡の時期は重複関係から古墳時代後期以後と捉えられ、建物跡や柱穴の形状から中世と捉えた。

(2) 竪穴建物跡 (第32表)

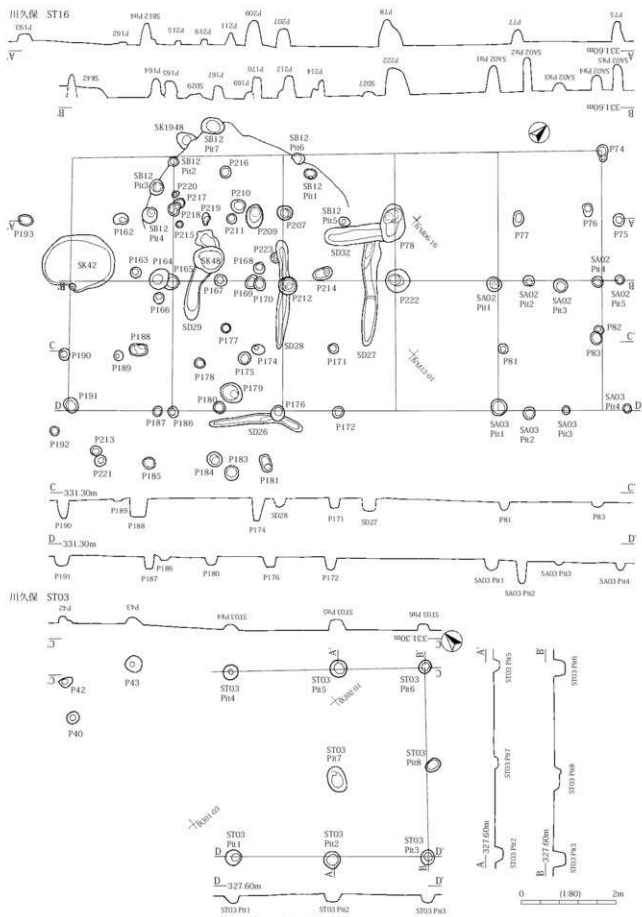
方形・長方形の半地下式建物跡で、内部施設はないながら、平坦な床面を有して規模からも竪穴建物跡の可能性のある遺構も扱う。竪穴建物跡は川久保1区10面ではSB21・22・23・29・48・57の6棟、川久保5区2面でSB31・39の2棟が検出され、宮沖遺跡では検出されなかった。川久保1区の竪穴建物跡は方形・長方形の平面形で柱穴と地床炉が検出されたが、川久保5区の竪穴建物跡の平面形は方形だが、掘り込みが浅く、地床炉も柱穴も判然としな。川久保1区10面の竪穴建物跡は掘立柱建物跡分布域から外れて位置し、中央東寄りにSB21・57、中央西端付近にSB23・29・48が近接して位置する。これに対して、川久保5区の竪穴建物跡は掘立柱建物跡の分布域内にある。なお、中世竪穴建物跡と類似した形態の川久保SB30は、ほぼ完形の須恵器蓋が出土したことから奈良時代の竪穴住居跡とした。

川久保SB21 1区10面 IX B16 (第193図 PL24)

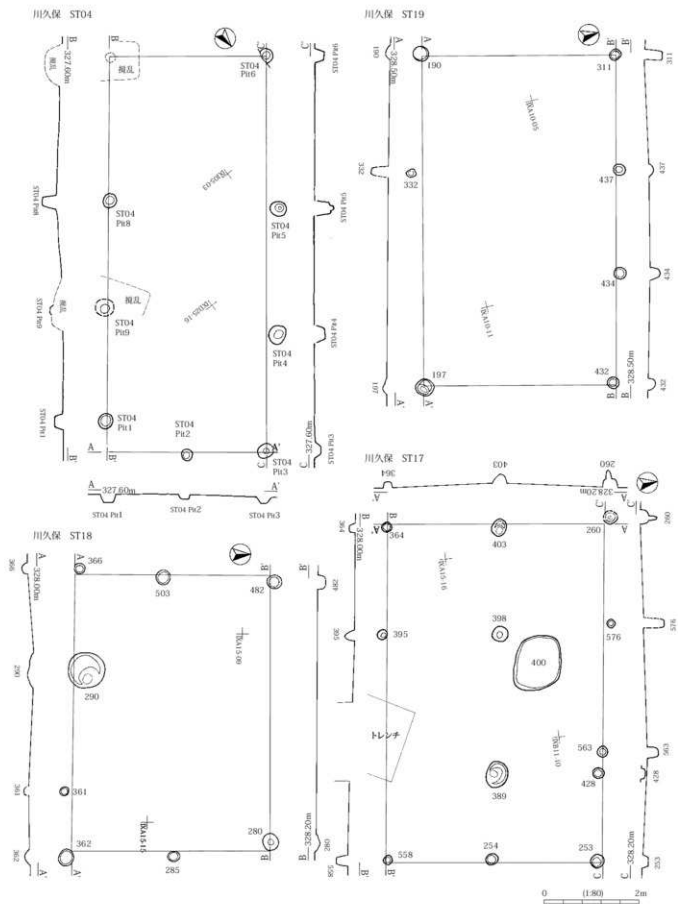
川久保1区10面の中央東寄りにSB57と近接して位置し、1区中央の土層観察用ベルト断面にかかって発見された。他遺構との重複では本跡が中世のSK775・776に切られ、北西隅はトレンチにかかった。平面形は1辺4m弱のやや隅の丸い方形で、主軸を方位に合わせる。埋土は灰黄褐色粘質シルトを基調として、埋土上層中央から西側にかけて焼土ブロックを混じる炭層があり、間層を挟んで地床炉周辺の北東床面上の下層に炭層がもう1枚認められた。床面は厚さ約3cmの褐色粘質土の貼床が全面に認められ、四隅近くに2基ずつ、北・南辺中央付近に各1基の合計10基のピットが検出された。ピットの平面形は直径25～35cm前後の円形で、深さ約20～30cmを測る。Pit7以外は灰黄褐色シルトの柱痕跡が確

第32表 中世竪穴建物跡一覧表

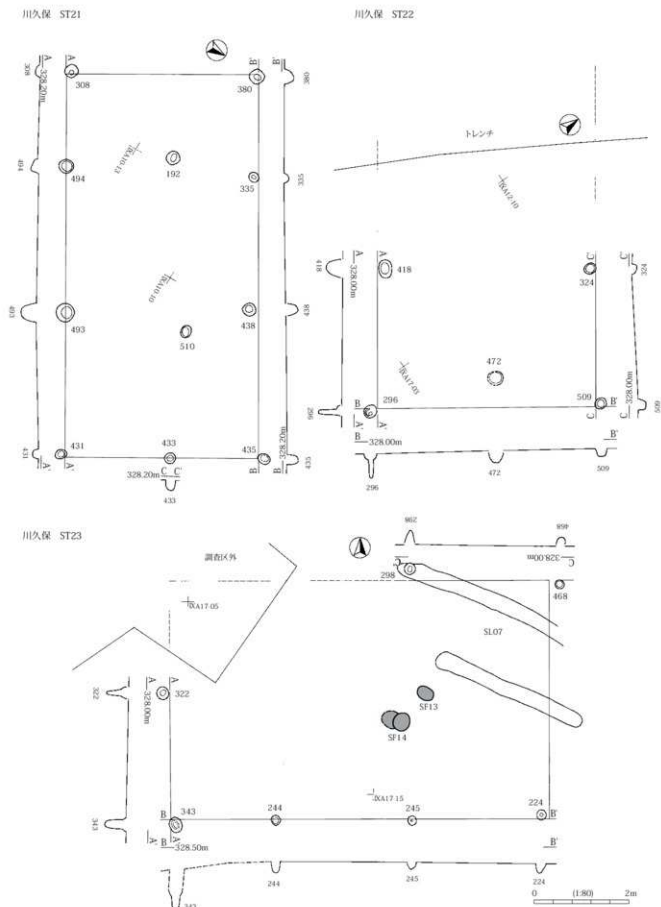
遺跡	SB	地区	グリッド	検出面	平面形	主軸方位	南北(m)	東西(m)	壁	深さ(cm)	床面	施設	カマド 炉
川久保21	1区	IX B16	10面 Ⅲ・2層	方形	N8° W	3.9	3.5	直	42	厚さ3cmの貼床	Pit10基	北東隅近く 地床炉1基	
重複関係・備考	SK775・776に切られる												
川久保22	1区	IX G16	10面 Ⅲ・2層	方形	N3° W	6.2	5.7	斜	30	軟弱	Pit11基	北西隅、南東隅近く 地床炉各1基	
重複関係・備考	SL08に切られる。周面に浅い溝状窪みあり												
川久保23	1区	IX F19	10面 Ⅲ・2層	方形?	N30° W	2.4以上	4.6以上	直	10	堅緻	Pit2基	北東隅近く 地床炉1基	
重複関係・備考	SB29・48を切る。SK764不明												
川久保29	1区	IX F19	10面 Ⅲ・2層	方形?	N78° W	2.6以上	5.0以上	直	27	軟弱	Pit4基	不明	
重複関係・備考	SB23に切られ。SB48を切る												
川久保31	5区	II M04・09	2面 Ⅲ・V層	不整形長方形	N3° W	3.7以上	2.7以上	直	10	軟弱	不明	不明 中央より 焼土粒・炭粒集中	
重複関係・備考	重複なし												
川久保39	5区	II M14・15	2面 Ⅲ・V層	方形	N26° E	5.7以上	5.7以上	直	24	軟弱	Pit23基	北東隅近く2基 地床炉?	
重複関係・備考	重複なし												
川久保48	1区	IX F19	10面 Ⅲ・2層	方形?	N73° W	4.2以上	5.0以上	斜	14	やや軟弱	床面上のSK一部本跡 Pitか	北西隅近く 地床炉1基	
重複関係・備考	SB23・29、SK715に切られ。SK711～714、716・717～720・763～765不明												
川久保57	1区	IX B11	10面 Ⅲ・2層	長方形	N4° W	5.7	2.7以上	直	30	軟弱	Pit3基	北東隅近く 地床炉	
重複関係・備考	SK422・SD54に切られる												



第 177 図 川久保 ST03・16

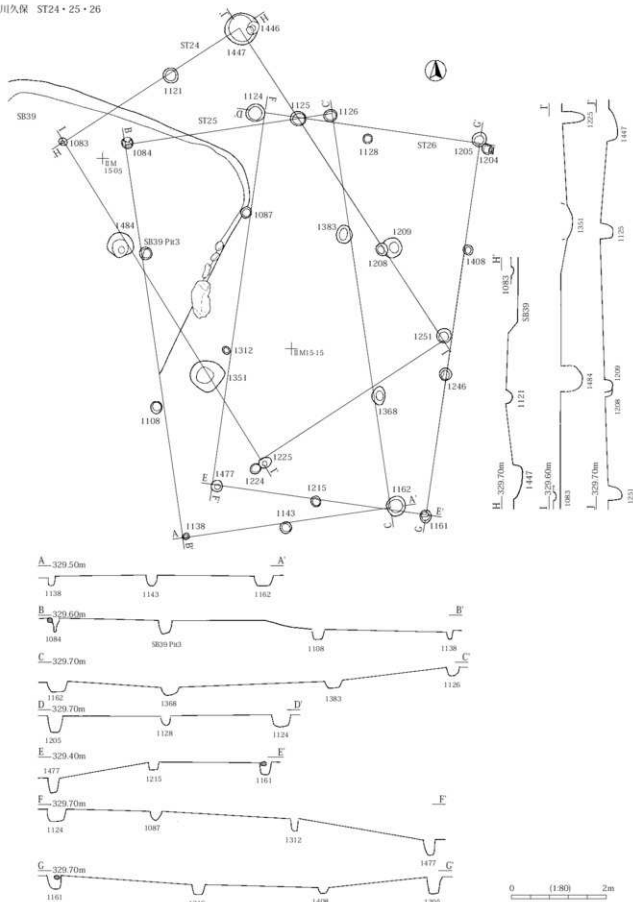


第178図 川久保ST04・17・18・19

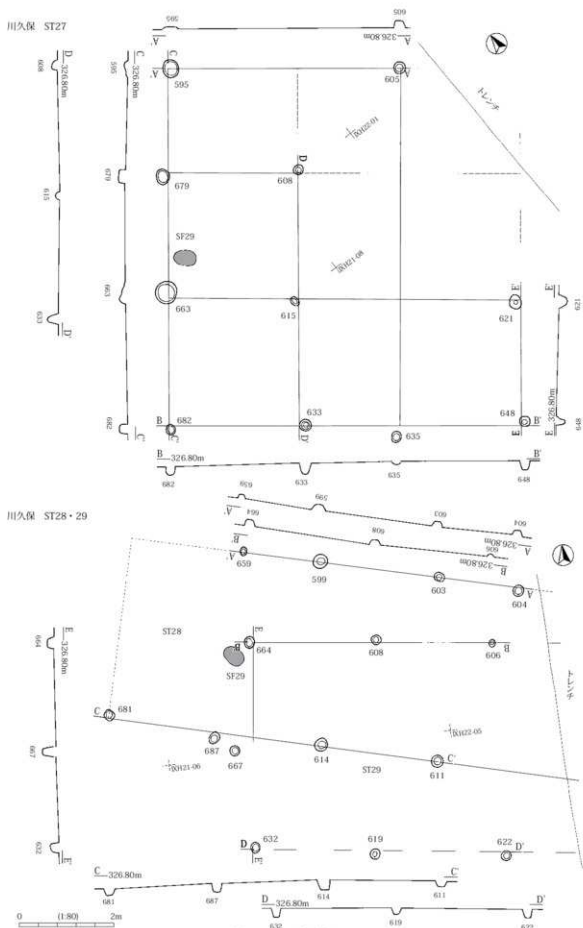


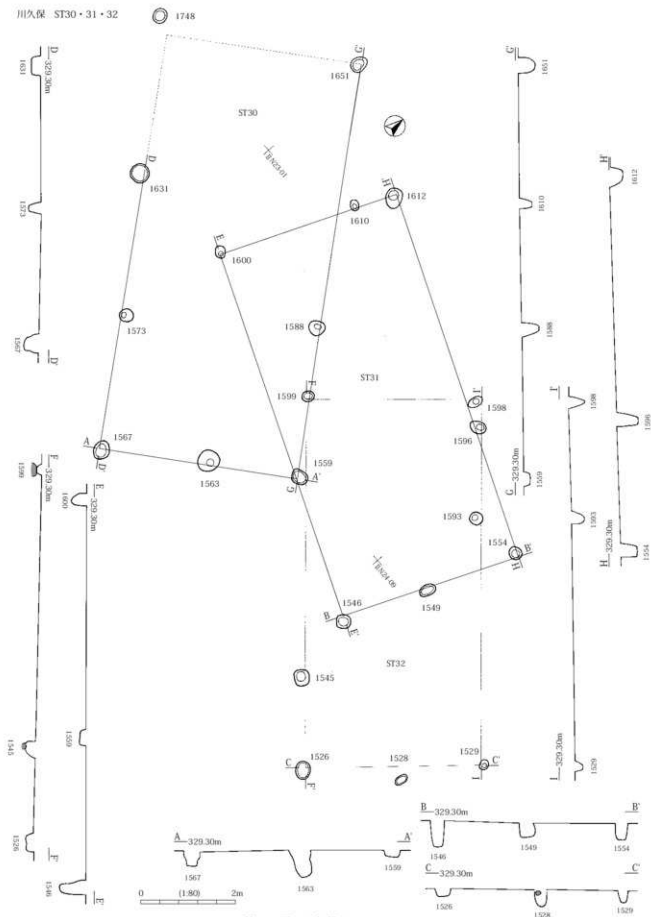
第179図 川久保ST21・22・23

川久保 ST24・25・26

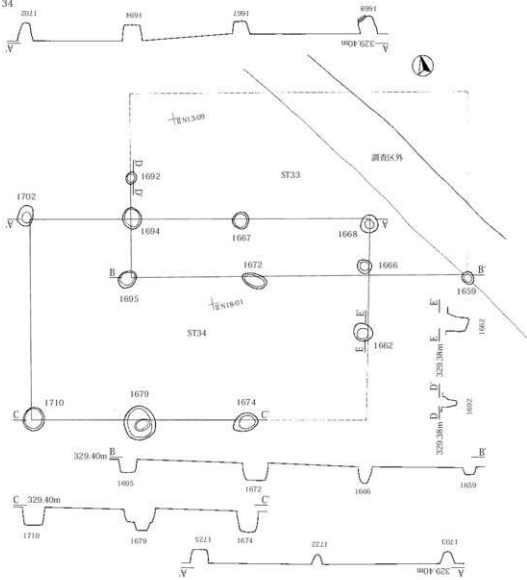


第180図 川久保ST24・25・26

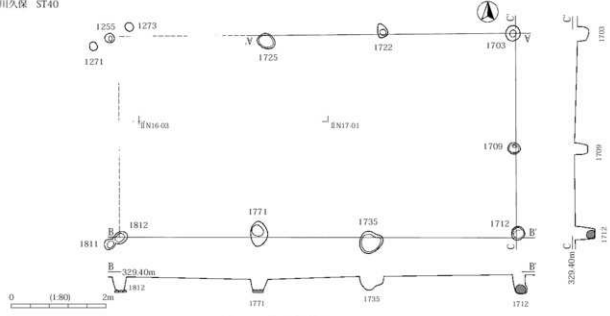




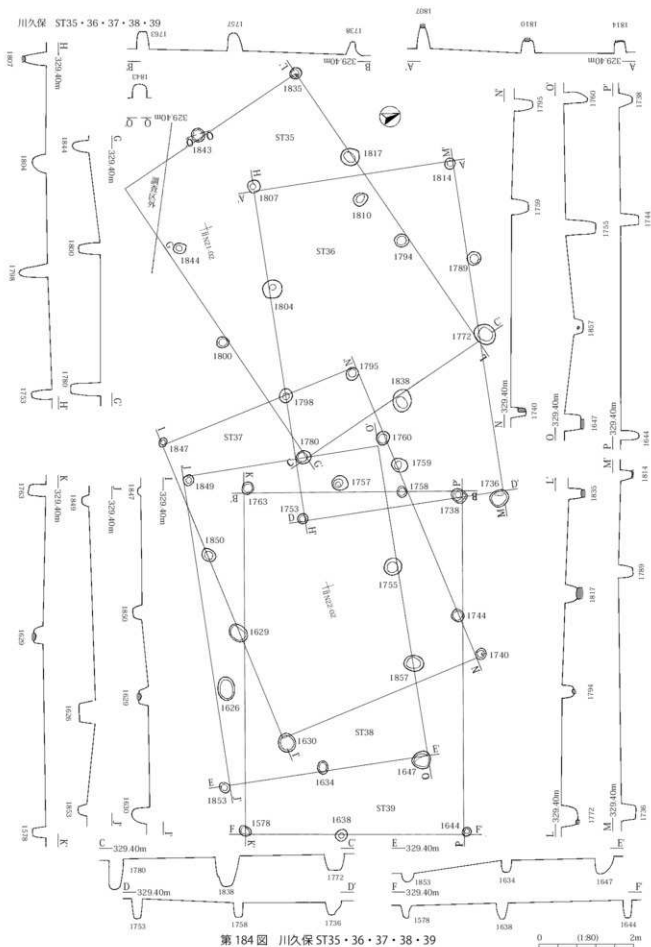
川久保 ST33・34

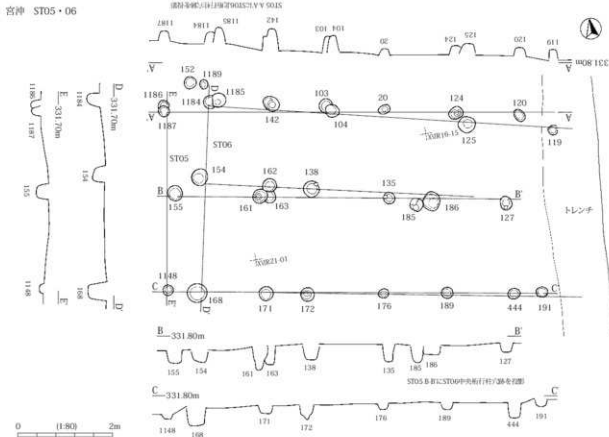
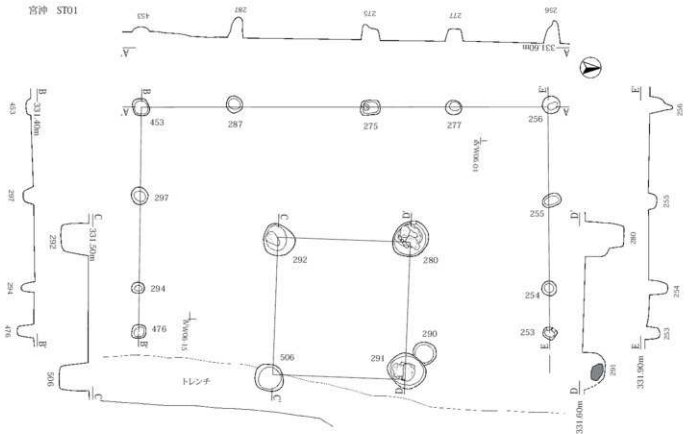


川久保 ST40



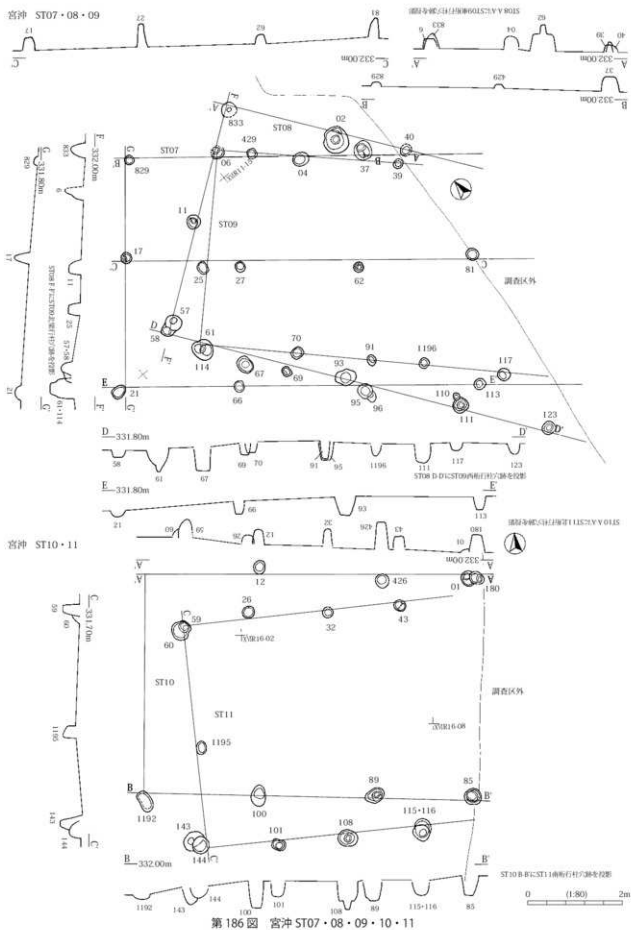
第183図 川久保ST33・34・40



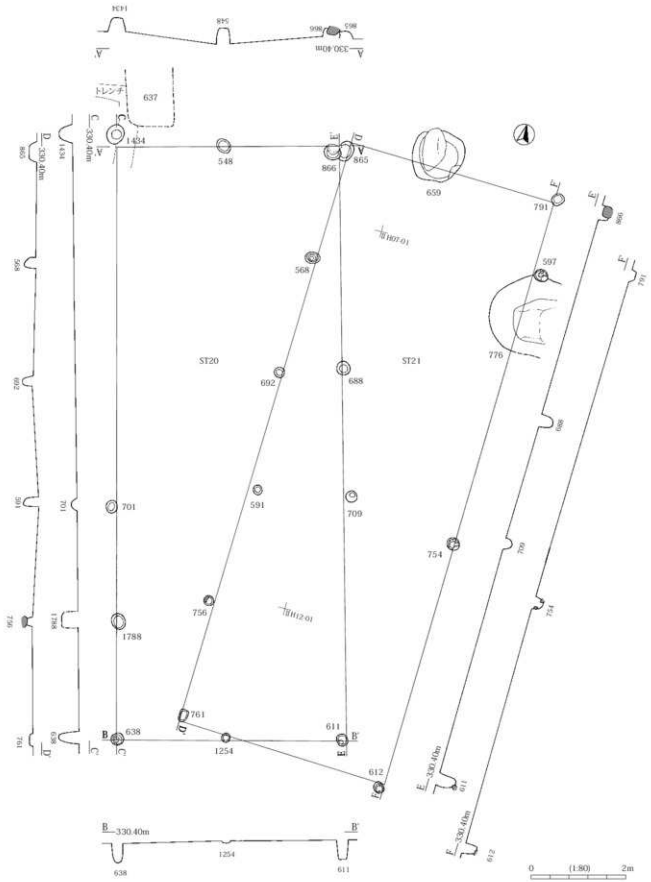


第185図 宮神ST01・05・06

第3章 検出された遺構と遺物

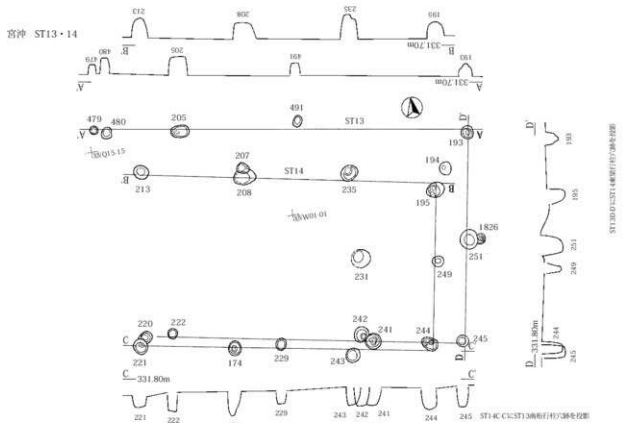


宮沖 ST20・21

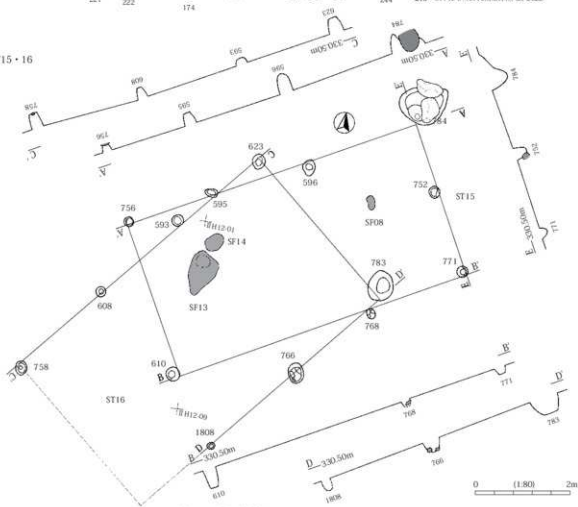


第187図 宮沖ST20・21

第3章 検出された遺構と遺物

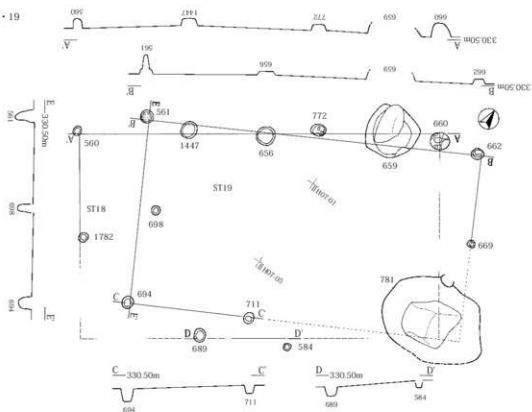


宮沖 ST15・16

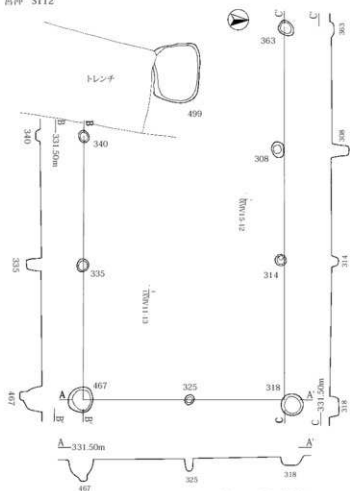


第188図 宮沖 ST13・14・15・16

宮神 ST18・19

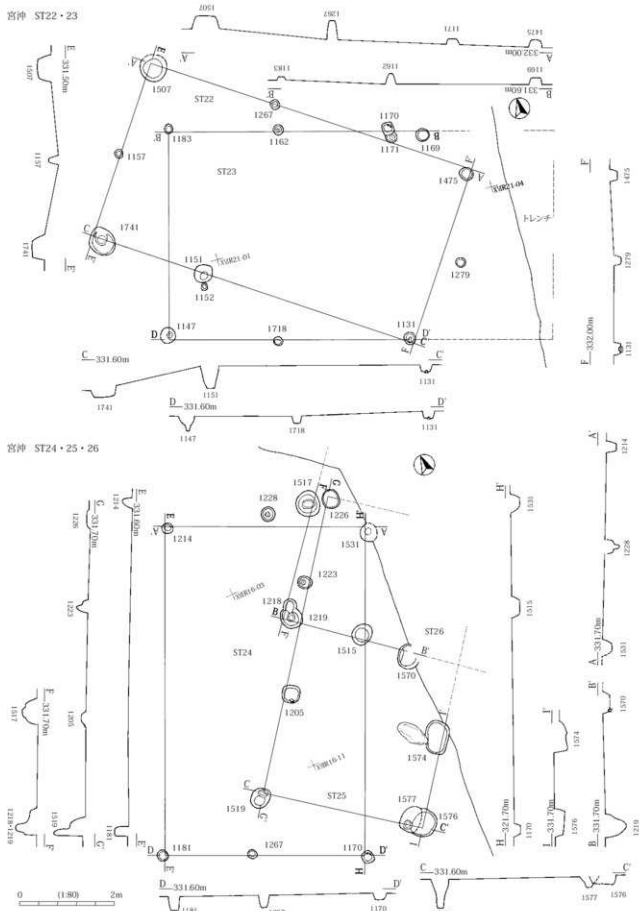


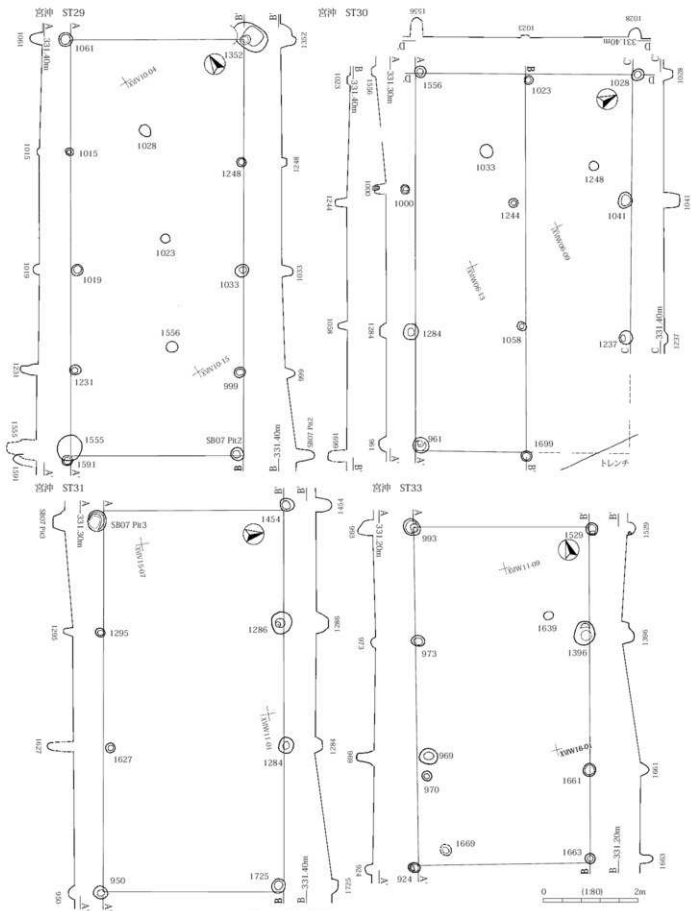
宮神 ST12



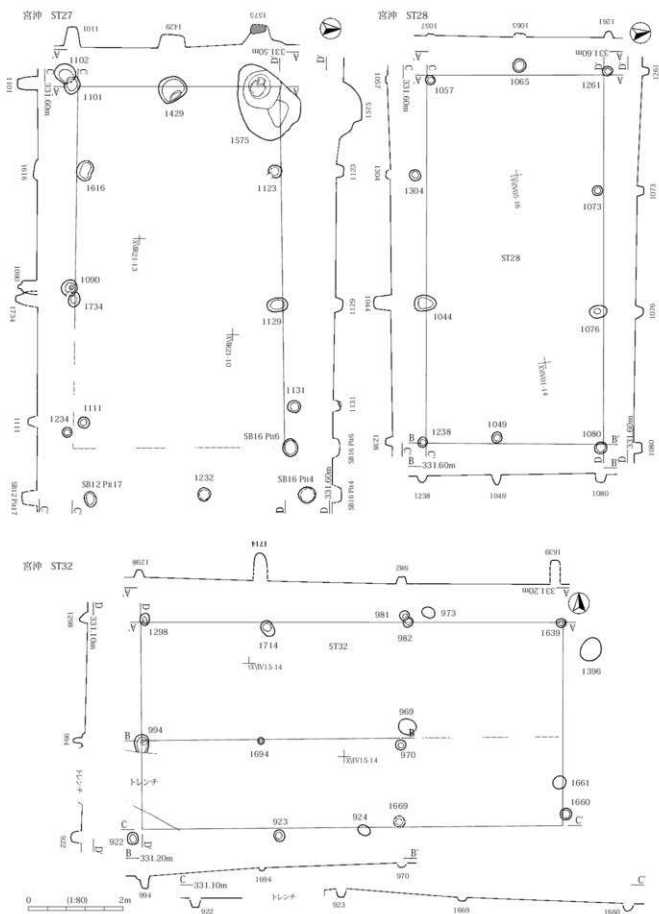
第189図 宮神 ST12・17・18・19

第3章 検出された遺構と遺物





第191図 宮沖 ST29・30・31・33



第192図 宮沖ST27・28・32

認できた。炉は北東隅の柱穴近くにあり、床面が堅く焼きしまっていた。その上面には炭や灰黄褐色粘土、さらに弱く焼けた焼土ブロックが載っており、炉周囲や上部に構築物を伴う可能性も考えたが、断定し得なかった。遺物は平安時代の土師器小型甕や須恵器甕 69g、白磁碗 1片 7g、不明土器 2g が出土した。

川久保 SB22 1区 10面 IX G16 (第193図 PL24)

川久保1区10面南西部の三角州状微高地にある。SLO8 検出時に洪水土層が方形に落ち込むと認められ、トレンチを入れたところで埋土上部に SLO8 耕作土層、その下層に本跡床面が捉えられた。ただし、埋土と周囲の検出土層が類似し、焼土近くの壁は炭層の分布から捉えられたが、他の壁は識別しにくかった。本跡西辺や東・南辺の外側に 0.6～1.0m 離れて平行する幅 1.0～1.2m、深さ約 3～10cm の浅い溝状の落ち込みが検出された。埋土は砂混じり褐灰色土で、屋根からの滴水が流れた痕跡か、竪穴周囲の周堤帯外側の排水用溝と思われる。本跡廃絶以後は窪地のまま SLO8 の畑とされ、最終的に川久保1区10面被覆洪水土層で埋没している。平面形は1辺6m前後の方形で、主軸を方位に合わせる。壁は若干斜めで、床面は軟弱で微細な凹凸がある。床面上でピット16基と炉と思われる焼土2基を検出した。ピットは北・南辺に沿って直線的に3基ずつ、西辺と東辺中央の壁際に1基ずつあり、いずれも直径約30cm前後の円形の平面形で床面から20cmほどの深さを測る。焼土は北西隅と南東隅の2基あり、周囲に炭化物が分布する。カワラケ2片10gと不明土器片7gが出土し、カワラケ1個体(1433)を図示した。

川久保 SB23 1区 10面 IX F19 (第194図)

川久保1区10面南西部の三角州状微高地の調査区西際にあり、半分以上が調査区外へ延びる。他遺構との重複では、本跡が SB29・48 を切り、床面で検出した SK764 は位置的に重複する別遺構と思われるが、前後関係は捉えられなかった。平面形は調査区内の規模から1辺5～6mの方形か長方形と思われる。主軸方位は若干西に振る。埋土は SB22 同様に最上層に1区10面被覆洪水土層、その下に畑耕作土層の褐灰色土層、下層に薄い炭化物層と黄灰色土層がある。壁は垂直で、東辺の一部は見誤った。床面は SB29・48 埋土中にあるが、比較的堅緻で明瞭に捉えられ、南側がやや低い。床面でピット2基と炉と思われる焼土1基を検出した。床面検出の SK708 は、調査時に帰属関係は捉えられなかったが、Pit1 とともに北辺に平行し、本跡柱穴と捉えた。炉と思われる焼土は南東壁際にあり、直接被熱で赤化する。出土遺物は鉄製はさみ(1542)、土師器碗2片41g(1435)とカワラケ3片27g(1434)があり、図示した。

川久保 SB29 1区 10面 IX F19 (第194図 PL25)

川久保1区10面南西部の三角州状微高地にある。他遺構との重複では SB23 に切られ、SB48 との重複は検出面で見逃したが、SB48 床面が本跡埋土中に認められないので本跡が SB48 を切ると思われる。南側は調査区外へ延び、調査区内の規模から1辺5～6mの方形の平面形と思われる。壁はほぼ垂直で、床面は軟弱だが平坦で、ピット3基と SK705・706 を検出した。ピット3基と SK705 はほぼ北辺に平行し、本跡の柱穴の可能性はある。SK706 との関係は捉えられなかった。炉は検出されなかった。埋土と Pit2 からカワラケ2個体の合計200gが出土し(1436・1437)、いずれも図示した。

川久保 SB31 5区2面 II M04・09 (第194図 PL25)

川久保5区2面で検出。長方形の黒褐色シルトの落ち込みが認められ、トレンチで壁と平坦な床面が確認され、規模からも竪穴建物跡とした。傾斜上方の東・北壁は明確に捉えられたが、傾斜下方の西・南辺は浅く途切れ、検出された平面形は不整長方形である。本来は1辺4m前後の方形か長方形と思われる。主軸を方位に合わせている。壁はほぼ垂直で、検出面から床面まで10cm未満と浅い。埋土は黒褐色シル

ト層で、直径1～3cmの礫を少量混入する。床面は地山のⅩ層土石流堆積層を均したもので平坦ながら貼床は確認できなかった。また、中央南寄り直径約1mの不整形の焼土粒・炭集中が認められたが、被熱で赤化した面はなく炉と断定しなかった。埋土中より鉄製鎌(1552)や古墳時代前期土師器43g、古墳時代後期や奈良時代の須恵器・土師器171g、平安時代土師器・軟質須恵器31g、中世のカワラケ2gと不明土器120gが出土した。カワラケの出土から本跡の時期は中世と捉えた。

川久保SB39 5区2面 II M14・15 (第194図 PL25)

川久保5区2面北西部の柱穴が集中する範囲にある。傾斜下方の南壁は浅く途切れ、残存範囲から平面形は1辺5.7m前後の方形を呈すると思われる。埋土は灰黄褐色シルト質土で、炭化物・焼土粒が全体に混じり、西と東壁際から炭化材がわずかに出土した。壁は垂直で、東壁中央北よりにⅩ層の礫が露出し、それに沿って20～60cm大の礫3個が並んで検出された。床面は浅い掘方を均したもので軟弱で、焼土2基とピット23基が検出された。焼土は北東隅に並んで位置し、いずれも被熱で赤化した堅く焼きしまる。炉と思われる。ピットは平面形が直径20cmの円形で、深さ10～20cmを測る。ピットは中央付近に分布するが、Pit3はST25柱穴と捉えられ、重複する掘立柱建物跡柱穴を本跡ピットと誤認した可能性がある。ピット埋土は灰黄褐色土で、Pit1と14は炭化材が混じる。また、北東壁際のPit23は長軸約100cm、短軸約80cm、深さ13cmと大きく、Pit9は平面形が方形で他のピットと異なる。遺物はカワラケ1片35g(1438)、平安時代土師器89g、奈良時代須恵器41g、時期不明須恵器455g、古墳時代後期土師器・須恵器1,431g、縄文土器31g、時期不明土器532gがある。カワラケ1個体(1438)を図示した。

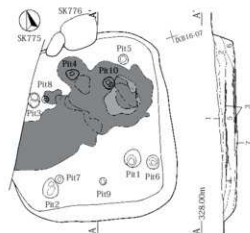
川久保SB48 1区10面 IX F19 (第194図 PL25)

川久保1区10面南西部の三角州状微高地にある。他遺構との重複では、本跡がSB23、SK715、SF22に切れ、SK711～714、716・717～720・763～765との関係は捉えられなかった。SB29との重複関係は検出面で見逃したが、本跡床面がSB29埋土中で検出されなかったので本跡がSB29に切られると思われる。本跡西側はトレンチにかかる。また、埋土上層に洪水土層で被覆された畑の畝跡が認められ、廃絶以後に畑に転用されている。調査区内で1辺5～6mの方形長方形の平面形と思われ、主軸方位はSB29と類似する。壁は斜めで、床面は軟弱で若干南側へ傾斜する。帰属するピットは捉えきれなかったが、帰属関係が不明でSKで扱ったSK711～714、716・717・720が本跡柱穴かもしれない。炉は中央西寄りにあり、被熱で床面が赤化する。出土遺物はない。

川久保SB57 1区10面 IX B11 (第193図 PL25)

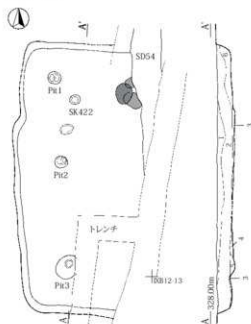
川久保1区10面の中央東寄りにあり、1区中央トレンチ壁にかかって発見された。他遺構との重複では本跡が中世のSK422に切られる。南辺は8面水田跡のSD54が本跡床面近くまで達し、東辺はトレンチにかかった。確認できた規模は東西長が2.7m以上、南北長が約5.7mで平面形は長方形と思われる。主軸は方位に合わせる。平面形は長方形で、2軒の重複の可能性も考えたが、床面と床面直上の褐灰色土層が同じ高さで連続し、平面形では西辺にずれがないこと、炉と思われる焼土2基も近接していることから一軒と結論した。埋土は灰黄白色シルトブロックを含む灰黄褐色土層を主体とし、床面上に薄い褐灰色粘質土層が認められた。壁は垂直で、床面は平坦ながら軟弱で、ピット3基と炉2基が検出された。ピットは西壁際に沿って並び、炉は北辺東よりにあって、上面と南側はSD54に切られる。一部灰層が覆う赤化範囲が二つ隣接して認められ、造り替えられた可能性がある。埋土から同安窯系青磁碗1片10g、珠洲薬か壺片1片16gがあり、他に平安時代土師器・須恵器18g、時期不明須恵器壺96g、古墳時代後期土師器60g、不明土器26gがある。青磁碗1個体(1439)を図示した。

川久保 SB21



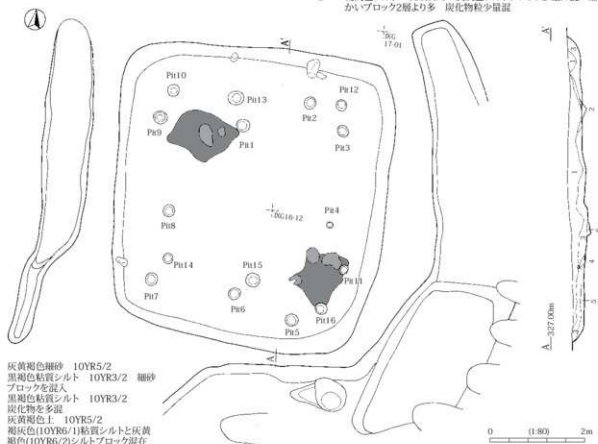
- 1 褐灰色シルト 10YR5/1 粘性あり ややしるる 砂混 にふい・黄褐色シルト(10YR7/2)ブロック少量混
- 2 褐灰色粘質土 10YR5/1 シルト質 にふい・黄褐色シルト(10YR7/2)ブロック混在(埋め上)
- 3 褐灰色粘質土 10YR5/1 炭化物多量に混
- 4 褐灰色砂質シルト 10YR5/1 にふい・黄褐色(10YR7/2)シルトブロック多量混(埋め上)
- 5 褐灰色シルト質土 10YR6/1 黒褐色粘質(10YR3/2)シルトブロックにふい・黄褐色(10YR7/2)シルトブロック多量混(埋め上)
- 6 灰白色シルト質粘土 10YR7/1 褐灰色(10YR6/1)粘質土ブロック少量混
- 7 褐灰色粘質土 10YR6/1 ブロックなし

川久保 SB57



- 1 褐灰色シルト 10YR5/1 にふい・黄褐色(10YR7/2)シルトブロック少量混
- 2 灰黄褐色シルト 10YR5/2 にふい・黄褐色(10YR7/2)シルトブロック多量混
- 3 褐灰色粘質土 10YR6/1 粘性強い シルトブロック にふい・黄褐色粘質シルト 10YR5/3 にふい・黄褐色(10YR7/2)シルトブロック多量混
- 4 灰黄褐色粘質シルト 10YR4/2 黒褐色(10YR3/2)粘質土ブロック混
- 5 褐灰色シルト 10YR4/1 黄灰色シルトブロック多量に混 細かいブロック2層より多 炭化物少量混

川久保 SB22

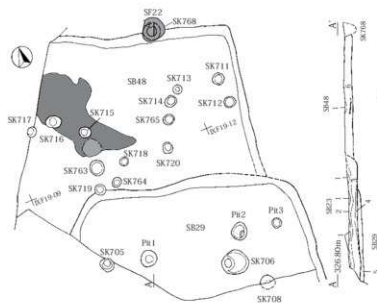


- 1 灰黄褐色細砂 10YR5/2
- 2 黒褐色粘質シルト 10YR3/2 細砂ブロックを混入
- 3 黒褐色粘質シルト 10YR3/2
- 4 炭化物を多混
- 5 灰黄褐色土 10YR5/2
- 6 褐灰色(10YR6/1)粘質シルトと灰黄褐色(10YR6/2)シルトブロック混在

第193図 川久保SB21・22・57

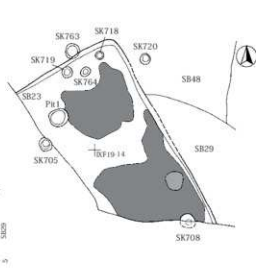
第3章 検出された遺構と遺物

川久保 SB29・48

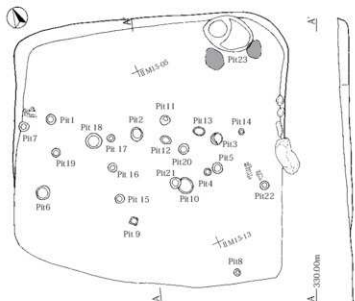


- 1 黄褐色シルト 2.5Y5/3 炭粒・焼土微小混
- 2 灰白色細砂 2.5Y8/1
- 3 黄灰色シルト 2.5Y5/1 灰白色シルトブロック多混
- 4 炭・焼土層 上下に1cm炭層 中間に焼土ブロック多混
- 5 褐灰色粘質土 10YR5/1 炭化物少混
- 6 黄灰色粘質シルト 2.5Y5/1 粘性強い、細かい灰白色シルトブロック多混

川久保 SB23

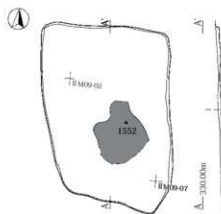


川久保 SB39

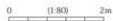


- 1 灰黄褐色シルト質土 10YR4/2 粘性あり炭・土粒(0.1-0.5cm)が5%程度全面に混入

川久保 SB31



- 1 黒褐色シルト 10YR2/2 白色粒子・赤褐色粒子(0.1cm位)を多混 1-3cm大の礫混入



第194図 川久保SB23・29・31・39・48

(3) 土坑 (第33・34表)

柱穴以外の大きな穴を土坑として報告する。出土遺物が少なく、中世と認定する根拠は少ないが、中世陶磁器や石臼・石鉢などの遺物出土や、他の中世遺構と同じ検出面で検出されたことを根拠とした。川久保2・3区の土坑は遺物出土もなく、中世と断定する根拠は弱い、その可能性からここに掲載した。

土坑は性格不明のものが多いが、各地区で検出された土坑は形状や数が異なり、それぞれの土地利用状況のなかで構築されたと思われる。川久保1区10面では鍛冶関連遺物を出土した土坑や、耕作地内で検出された耕作関連施設と思われる土坑があり、この地区では墓跡が検出されているので土坑墓も含まれると思われる。斑尾川沿いの段丘に位置する川久保5区や宮沖5区では、巨礫を混じる土石流堆積層の礫が露出し、その礫を土中に埋めて片付けた土坑や、礫を掘りだした痕跡と思われる土坑も多くある。また、宮沖1区1面と同5区では長方形・方形の土坑が検出されたが、宮沖1区1面が15・16世紀の遺構面と捉えられ、当該期の居住域内の施設と思われる。以下には地区毎に土坑を報告する。

ア 川久保1区10面の土坑

SK177・182・271・282・327・330・338・344・345・382・400・419・420・421・463・492・507・SH03・SH04 (第195・196図 PL25)

川久保1区10面北部を中心に土坑が散在的に検出された。南部は10面を被覆する洪水土層に覆われ、その下で検出したSH03・04は中世と捉えられ、洪水土層が及ばない北部でも1区8面水田跡が上層にある地点で検出された土坑は中世と捉え得る。しかし、近世水田跡に上層が削平された川久保1区中央東寄りで検出された土坑の一部は近世のものがある。

第33表 中世土坑一覧表(1)

土坑	調査区	調査面	グリッド	平面形	長軸×短軸 (cm)	断面形	深さ (cm)	埋土の特徴・出土遺物・備考
川久保SK03	2区1面	IX H04	円形	58×52	長方形	8	遺物なし SL08 隅 上面礫あり	
川久保SK13	2区1面	IX I07	円形	88×86	長方形	48	古墳前期 20g, 古墳後期 7g, 平安 5g, 亀裂面に切られる	
川久保SK14	2区1面	IX H03	楕円形	80以上×68	U字形	8	遺物なし 底面凹凸あり 根痕か	
川久保SK15	2区1面	IX H03	円形	54×52	U字形	47	遺物なし 根痕か	
川久保SK32	3区1面	IV M12	長方形	178×62	長方形	18	遺物なし 性格不明 縄文陥穴か	
川久保SK42	3区1面	IV M11	不整形円形	152×120	U字形	26	平安 43g, 不明 12g 性格不明	
川久保SK43	3区1面	IV M16	楕円形	92×72	逆台形	36	古墳前期 16g, 不明 5g 根痕か	
川久保SK44	3区1面	IV M21	長方形	72×60	長方形?	34	平安 2g, 不明 5g 性格不明	
川久保SK45	3区1面	IV Q05	楕円形	124×80	逆円形?	72	遺物なし 根痕か	
川久保SK46	3区1面	IV M21	楕円形	86×72	U字形?	46	遺物なし 根痕か	
川久保SK48	3区1面	IX M11	不整形円形	64×62	逆台形	16	平安 4g 柱穴か	
川久保SK49	3区1面	IV M11	楕円形	68×47	逆台形	20	遺物なし 柱穴か	
川久保SK54	2区2(1)面	IX M03	楕円形	172×132	U字形	13	遺物なし 底面凹凸あり 根痕か	
川久保SK177	1区10面	IX B06	隅丸方形	126×68	逆台形	15	遺物なし 礎出土	
川久保SK182	1区10面	IX A10	楕円形	122×96	不整形	30	古墳後期 10g 底面凹凸あり 根痕か	
川久保SK271	1区10面	IX B06	楕円形	100×72	逆台形	12	遺物なし 炭化物多量混	
川久保SK282	1区10面	IX A15	円形	92×90	U字形	15	平安 2g 2段の浅いくぼみ	
川久保SK325	1区10面	IX A22	楕円形	195×144	逆台形	32	SK767 切る 遺物なし, ブロック土置 竈坑か トレンチ・掘直し切られる, 中世 7片 80g(1513・1521), 平安 1106g, 古墳後期 215g, 不明 78g, 埴輪(1521), 土師 (1513) 煎釜軽石(1527) 鉄製品(1543~1546) 磁多量	
川久保SK327	1区10面	IX A10-15	円形	280×251以上	U字型?	46		
川久保SK328	1区10面	IX A22	不整形	103×65	U字形	13	遺物なし SK325・767 間津溝跡の一部か	
川久保SK329	1区10面	IX A22	不整形長方形	164×74	浅いくぼみ	10	遺物なし SK325・767 間津溝跡の一部か	
川久保SK330	1区10面	IX A10	楕円形	138×100	U字型?	26	中世 2片 408g(図 1514), 平安 68g, 奈良 47g, 不明 13g 土師(1514) 磁多量	
川久保SK338	1区10面	IX B06	楕円形?	85×70以上	不整形	26	トレンチにかかる 遺物なし 底面凹凸あり	
川久保SK344	1区10面	IX A10	円形	89×82	U字形	16	古墳後期 19g, ブロック土置 浅いくぼみ	
川久保SK345	1区10面	IX A15-10	不整形	176以上×134	不整形	18	SK327に切られる 遺物なし 不整形 底面凹凸あり 根痕か	
川久保SK382	1区10面	IX A18	円形?	150×128	逆台形	14	遺物なし ブロック土置	
川久保SK400	1区10面	IX B11	隅丸長方形?	128×88	逆台形	8	遺物なし ブロック土置	
川久保SK419	1区10面	IX A12-17	円形?	150×139	逆台形	20	SL07に切られる, 中世 1片 7g(図 1442) ブロック土置	

第34表 中世土坑一覧表(2)

土坑	調査区	グリッド	平面形	長軸×短軸 (cm)	断面形	深さ (cm)	埋土の特徴・出土遺物・備考
川久保 SK420	1区 10面	IX A13	楕円形	186×170	逆台形	28	遺物なし ブロック土置
川久保 SK421	1区 10面	IX A13	円形	167×162	長方形	24	遺物なし ブロック土置
川久保 SK463	1区 10面	IX A13	楕円形	126×96	長方形	40	古墳後期 9g ブロック土置
川久保 SK492	1区 10面	IX A10	楕円形	127×102	逆台形?	12	SK344に切られる 遺物なし 礎1点 浅い窪み
川久保 SK507	1区 10面	IX A15	長楕円形	104×60	逆台形?	6	中央に礎 古墳後期 12g ブロック土置
川久保 SK767	1区 10面	IX A22	楕円形?	154×74 以上	U字形?	18	SK325に切られる 遺物なし 墓坑か
川久保 SK1233	5区 2面	II N06	円形	63×59	逆台形	14	遺物なし 浅い窪み
川久保 SK1236	5区 2面	II M15	円形	154×136 以上	逆台形?	18	SD102に切られる 古墳後期 37g、不明 8g 性格不明
川久保 SK1334	5区 2面	II N06-07	不整形長方形?	350×268	逆台形	22	古墳後期 43g、古墳前期 6g、不明 12g 土中金属溶剤の副産物
川久保 SK1335	5区 2面	II N07	円形	218×214	逆台形	18	古墳後期 68g 土中金属溶剤の副産物
川久保 SK1345	5区 2面	II M08	楕円形	80×63	逆台形	12	遺物なし 浅い窪み
川久保 SK1347	5区 2面	II M15	楕円形	60×44 以上	浅い窪み	6	SK1346に切られる 遺物なし 浅い窪み
川久保 SK1349	5区 2面	II M15	円形	60×54	U字形	17	遺物なし 浅い窪み
川久保 SK1355	5区 2面	II N06-07	楕円形	88×46	浅い窪み	8	遺物なし 浅い窪み
川久保 SK1467	5区 2面	II M09	楕円形	108×70 以上	逆台形	18	遺物なし 浅い窪み
川久保 SK1595	5区 2面	II N19	円形	72×71	不整形長方形	14	平安 73g、奈良 76g、不明 7g 浅い窪み
川久保 SH03	1区 10面	IX G22	長方形	116×87	逆台形	10	遺物なし 上面礫
川久保 SH04	1区 10面	IX G22	方形	98×92	U字形	22	遺物なし SL08 礫 上面礫あり
宮沖 SK192	1区 1面	XVI R21	長方形	76×61	長方形	20	遺物なし 上面礫1個 ブロック土置
宮沖 SK499	1区 1面	XVI V15	長方形	124×98 以上	長方形	26	トレンチにかかると 奈良～平安 4g、古墳後期～奈良 15g、不明 10g 炭粒・焼土粒
宮沖 SK505	1区 1面	II B05	長方形?	128 以上×114	長方形?	26	トレンチにかかると 中世 1片 50g(図 1457)、奈良 10g、古墳後期～奈良 30g、不明 35g 礎1
宮沖 SK632	5区 1面	II H07	長方形	96×28	U字形	32	遺物なし 短溝状
宮沖 SK633	5区 1面	II H07	長方形	76×36	長方形	40	遺物なし 短溝状
宮沖 SK634	5区 1面	II H02	楕円形	72×58 以上	逆台形?	20	遺物なし ブロック土置 浅い窪み
宮沖 SK635	5区 1面	II H17	楕円形?	112×96	U字形	36	中世 2片 30g、古墳後期～奈良 27g、不明 3g ブロック土置
宮沖 SK636	5区 1面	II H11	楕円形	78×48	浅い窪み	8	遺物なし 炭粒少量 浅い窪み
宮沖 SK637	5区 1面	II H01	長方形	197×105	長方形	56	奈良 30g、古墳後期～奈良 35g、不明 7g ブロック土置 SK639と類似
宮沖 SK639	5区 1面	II B25-C21	長方形	176×99	長方形	36	古墳後期～奈良 5g、古墳後期 6g、不明 7g 石臼(1536) ブロック土置 SK637類似
宮沖 SK659	5区 1面	II H02	楕円形	112×108	不整形U字形	54	遺物なし 破片づけ遺構
宮沖 SK665	5区 1面	II H02	楕円形	64×52	浅い窪み	6	SK666を切る 古墳後期～奈良 7g 浅い窪み
宮沖 SK666	5区 1面	II H02	円形?	56×48 以上	U字形	28	SK665に切られる 土層 SK666と一括 浅い窪み
宮沖 SK668	5区 1面	II H02	楕円形	78×56	U字形	21	遺物なし 細砂埋土 浅い窪み
宮沖 SK776	5区 1面	II H07	楕円形	206×186	逆台形?	48	遺物なし 破片づけ遺構
宮沖 SK779	5区 1面	II H02	楕円形	68×56	U字形	20	SK780を切る 遺物なし 浅い窪み
宮沖 SK780	5区 1面	II H02	楕円形	114×73 以上	U字形	60	SK779に切られる 遺物なし 浅い窪み
宮沖 SK785	5区 1面	II H11	楕円形	94×54	U字形	18	奈良～平安 1g、古墳後期 5g、不明 12g ブロック土少量
宮沖 SK786	5区 1面	II H11	楕円形	59×32 以上	長方形	26	遺物なし 柱穴か
宮沖 SK789	5区 1面	II B20	円形?	96 以上×104	浅い窪み	10	攪乱かかると 古墳後期～奈良 11g、古墳後期 5g、古墳前期 12g、不明 22g ブロック土置
宮沖 SK790	5区 1面	II B20	楕円形	80×70	長方形	28	奈良 12g、古墳後期～奈良 26g、古墳前期 8g、不明 25g 小ブロック土置
宮沖 SK1293	5区 1面	II C16	円形?	110 以上×120 以上	U字形?	20	攪乱に切られ 5803切る 古墳後期 16g、不明 30g 小礫混
宮沖 SK1353	1区 2面	XVI W16	不整形	174 以上×110 以上	逆台形?	14	トレンチにかかり、SK1353切る 奈良 364g(図 871)、不明 6g 礎置
宮沖 SK1354	1区 2面	XVI W16	楕円形?	82 以上×32 以上	浅い窪み	13	トレンチ×SK1353に切られる 遺物なし 炭粒・焼土粒少量
宮沖 SK1383	1区 2面	XVI V10	長方形	90×74	逆台形	20	古墳後期～奈良 40g、不明 13g
宮沖 SK1450	5区 1面	II H06	楕円形	202×84 以上	逆台形?	20	調査区外かかると 古墳後期～奈良 79g、不明 3g 浅い窪み
宮沖 SK1551	1区 2面	XVI V10	楕円形	70×60	長方形	16	古墳後期～奈良 31g、不明 4g
宮沖 SK1595	1区 2面	XVI W11	長方形	68 以上×52	浅い窪み	4	トレンチにかかると 不明 146g 観浴間連遺構

川久保 1区 10面 で検出された土坑では、SK382・400・419・420・421・463 は平面形や規模、ブロック土を混じる褐色土層を埋土とする点が共通し、類似した性格の土坑と思われる。SK177・330・507 は埋土に礫を混じり、いずれも長方形に近い長楕円形の平面形である。SH03・04 は 1区南部の SL08 脇に位置し、礫が多く検出されたことから当初は集石遺構としたが、下面に掘り込みを伴う土坑と捉えられた。礫を混じる特徴は SK177・330・507 と類似する。これ以外に埋土に炭化物を多く含む SK271・338、浅いすり鉢状で礫や埴間が出土した観浴間連遺構と思われる SK327 がある。これ以外の SK182・

282・344・345は不整形な平面形で底面に凹凸がある形状から根による攪乱の疑いがあり、近接する浅い土坑SK492も同様と思われる。また、SK348も段丘縁辺の調査区際に位置する大きな窪みだが、底面に凹凸があって根の痕跡とも思われて積極的に土坑と認定しなかった。なお、SK325・767・328・329は隣接するSX08と類似した形態で、墓跡の可能性があり別に後述する。

土坑の遺物は、SK419から白磁碗1片7g(1442)、SK327から白磁碗1片3g、カワラケ4片55g(1443～1446)、土鍾1点5g(1513)、埴塙1点17g(1521)と、平安時代須恵器・軟質須恵器1,106g、古墳時代後期土師器・須恵器215g、不明土器78gが出土した。SK330から奈良・平安時代須恵器・土師器128gや珠洲と思われる甕1片394gや土鍾1点14g(1514)が出土した。SK182から古墳時代後期土師器10g、SK282から平安時代黒色土器A杯2g、SK344から古墳時代後期黒色土器A杯19g、SK507から古墳時代後期土師器12g、SK463から古墳時代後期土師器9gが出土した。

イ 川久保2区1面の土坑

SK03・13・14・15・54 (第196・279・280図)

川久保2区1面北部を中心に土坑が散漫に検出された。出土遺物はほとんどなく中世とする根拠も弱い。SK03・13はⅢ層上面検出で、埋土はⅡ層由来と思われる、中世の可能性を考えた。また、SK14・15は中世柱穴と近接する場所で検出されたが、不整形な形状から根の攪乱の可能性がある。SK54は川久保2区2面検出ながらNR1bを切るように位置する。出土遺物はないが、NR1bが埋没した古墳時代後期以後の所産とみられ、上面で見逃した可能性がある。周辺に古墳時代後期～奈良時代遺構もなく、近接するSK65から平安時代土器が出土したが、本跡では平安時代の土器が全く出土していないことから、平安時代以後の可能性を考えて中世で掲載した。遺物はSK13から平安時代須恵器杯5g、古墳時代前期土師器20g、古墳時代後期黒色土器A7gと不明土器32gが出土した。

ウ 川久保3区1面の土坑

SK32・42・43・44・45・46・48・49 (第196・197図)

川久保3区では段丘縁辺の緩斜面にかかって土坑数基が検出された。3区には洪水土層の被覆もなく、土坑からの出土遺物もわずかで積極的に中世と断定する根拠はない。しかし、近世陶磁器も全く出土していないことから近世とも断定できず、便宜的にここに掲載する。SK32は長方形の土坑で隣接する縄文時代の陥穴SK31と平面形は似るが、浅いことに加えて底面上でピットは検出されず、陥穴と認定しなかった。SK48・49は柱穴の可能性もある。他の土坑は、段丘斜面に点在するが、底面に凹凸が認められ、埋土は黄褐色土や褐色土など地山土層と類似することから、根の攪乱の疑いがある。

エ 川久保5区2面の土坑

SK1233・1236・1334・1335・1345・1346・1347・1349・1355・1467・1595 (第197・198図)

川久保5区2面では中世柱穴の分布範囲内やその周辺から、円形や不整形の浅い落ち込みが検出された。中世の遺物出土もなく、中世とする根拠は中世掘立柱建物跡と同じ検出面で検出されたことがあり、5区南部は川久保1区8面に対比される5区1面の下層にあたるので中世と捉え得る。5区検出の土坑は円形・楕円形・不整形円形などの平面形で、方形・長方形はない。また、浅い土坑が多く、地山の土石流堆積層IX層中の礫を掘り起こした痕跡や、部分的な土中金属の溶脱で異なった色調を土坑と誤認したもの、根の攪乱の疑いがあるものもある。SK1334・1335は輪郭がやや曖昧な円形・不整形の平面形で、底面にIX層の礫多数が検出された。窪地もしくは礫が集中して水が浸透しやすかったために土中金属が溶脱して色調が異なった部分を土坑と誤認した可能性がある。また、SK1233・1355・1345・1347・1349・

1467・1595は円形、楕円形の浅い窪みで根の痕跡か、礫を掘りだした痕跡と思われる。SK1236は比較的整った円形の平面形で、SD102に切られる。単独の浅い土坑だが、性格は不明である。

遺物はSK1236から古墳時代後期土師器・須恵器37gと不明土器8g、SK1334から古墳時代後期土師器43gと古墳時代前期土師器6g、時期不明の須恵器39g、時期不明土器12g、SK1335から古墳時代後期の土師器68g、SK1595から奈良時代須恵器76gと平安時代土師器3gと不明土器7gが出土した。混入と思われる土器のみで、上記以外の土坑からの出土遺物はない。

オ 宮沖1区1面の土坑

SK192・499・505 (第198図)

中世と思われる土坑にはSK192・499・505がある。SK505は長軸1.3m以上、短軸約1.2mの長方形土坑で内耳鍋1片50gが出土した。SK499も長軸約1.3m、短軸約1.0mの類似形状の土坑である。この2基は内耳鍋を出土した宮沖5区SK635と類似し、検出面と出土土器から15・16世紀の土坑と思われる。この形状の土坑は宮沖遺跡内に散漫に認められ、掘立柱建物跡と共に存在した可能性がある。検出数が少ないので掘立柱建物跡内の施設ではないと思われる。SK192は小型方形土坑で、性格は不明である。

遺物はSK499から古墳時代後期～平安時代の土師器・須恵器19gと不明土器10g、SK505から内耳鍋1片50g(1457)と古墳時代後期～奈良時代の土師器・須恵器40g、不明土器35gが出土した。

カ 宮沖1区2面の土坑

SK1353・1354・1383・1551・1595 (第198図)

宮沖1区2面は古墳時代～中世前期までの遺構が検出され、中世遺物を出土した土坑がないこともあって積極的に中世と断定し得る根拠は弱い。そのなかで1面の見逃しの可能性もあるが、基本土層Ⅱ層を起源とする褐灰色系埋土のSK1353・1354・1383は中世の土坑と捉えた。SK1551は段丘縁辺に単独で位置する円形土坑で埋土はⅢ層起源の黒褐色土ながら、周囲に古墳時代後期～奈良時代と思われる遺構がなく、川久保SK13に類似する形状から中世で扱った。SK1595は古墳時代後期SB14埋土土層で検出された土坑で、鍛造薄片や羽口出土から鍛冶関連遺構と思われ、中世と思われる柱穴分布範囲内において中世と考えたが、平安時代の可能性もある。遺物はSK1353から奈良時代須恵器364gとミニチュア土器6g、SK1383から古墳時代後期～奈良時代の土師器40gと不明土器13g、SK1551から古墳時代後期～奈良時代の須恵器31gと不明土器4g、SK1595から不明土器1gと羽口2片145gが出土した。このなかでSK1353出土の重複するSB06の遺物と思われる須恵器高杯・杯A(871・1098・1099)を図示した。

キ 宮沖5区1面の土坑

SK632・633・634・635・636・637・639・659・665・666・668・776・779・780・785・786・789・790・1293・1450 (第198・199図 PL25)

宮沖5区では古墳時代～中世の遺構を同一面で検出したが、中世と捉えられた土坑がいくつかある。長方形の土坑SK639は石臼を出土し、近接して位置する類似形状のSK637も中世の土坑と捉えた。内耳鍋を出土したSK635は宮沖1区SK499・505と平面形や褐灰色基調の埋土が共通し、同様の性格の土坑と思われる。SK665・666・779とSK634・668はⅡ層起源と思われる褐灰色埋土で、それぞれ連なって並ぶ浅い土坑である。SK668は上層に砂層が入る。溝状で深い長楕円形のSK632・633も褐灰色基調の埋土で中世の可能性があると捉えた。SK659・776はST18・19を切ると捉えられたが、この2基は大きな礫が入っているため礫を埋めて片付けた遺構と思われる。これ以外ではⅢ層起源の黒～暗褐色土を基調とする土坑で楕円形の浅い土坑SK636・785・1450、やや大きめの円形の土坑SK789・1293、小型の

川久保 SK177



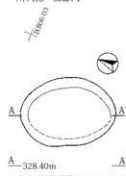
1 にぶい黄褐色細砂 10YR4/3
白色-橙色の砂礫-細粒子混 炭
少混 15cm大礫混

川久保 SK182



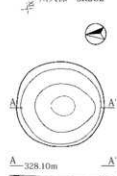
1 灰黄褐色粘土 10YR4/2 しまり
良好 粘性強 鉄分の集積
2 黒褐色シルト質細砂 10YR3/2
しまりなし 細礫-炭少混

川久保 SK271



1 黒褐色シルト 10YR3/2
炭多混

川久保 SK282

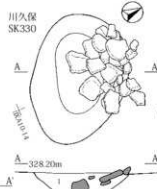


1 にぶい黄褐色シルト
10YR4/3 鉄分多

川久保 SK327

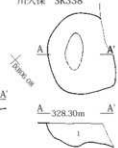


1 灰黄褐色シルト 10YR4/2 やや砂質 炭少混 鉄分集積
2 1層に褐色砂(10YR4/4)をブロック状に多く混入
3 黒褐色シルト 10YR3/2 やや砂質 炭少量混 灰黄褐色シルトブロック状に混
4 黒褐色シルト 10YR3/2 粘性あり 灰黄褐色シルトブロックなし



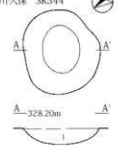
1 黒褐色シルト 10YR3/2
灰黄褐色シルトブロック混

川久保 SK338



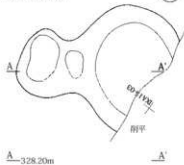
1 にぶい黄褐色シルト
10YR4/3 鉄分の集積あり
炭多混 炭上少混

川久保 SK344



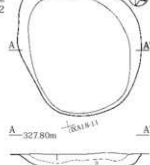
1 にぶい黄褐色砂質シルト
10YR5/3 黒褐色
シルトブロック混

川久保 SK345



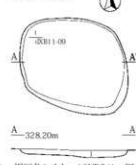
1 灰黄褐色粘土 10YR4/2 しまり-粘性強
0.5-1cm大の炭混 鉄分集積

川久保 SK382



1 褐色シルト 10YR5/1 1-5cm黄灰白色の
ブロック混
2 褐色粘質シルト 10YR5/1 1-2cm大黄灰
白色シルトブロック少混

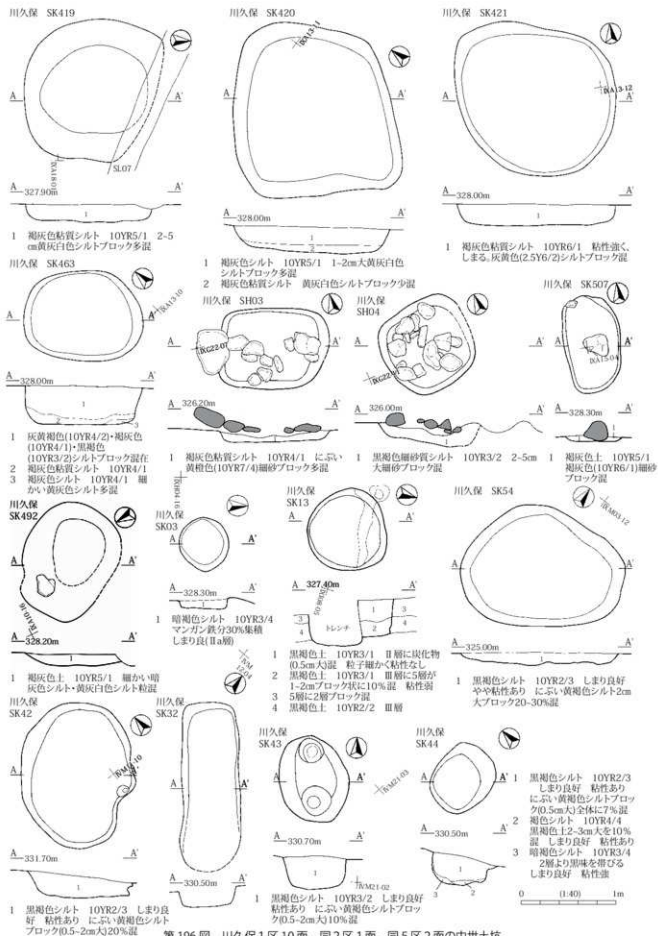
川久保 SK400



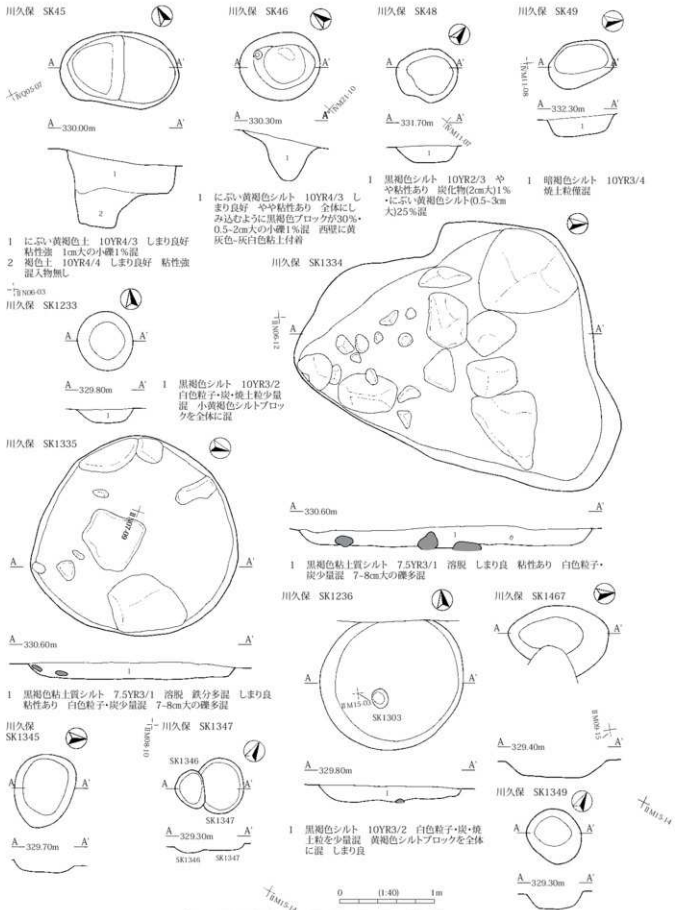
1 褐色シルト 10YR5/1 細かい
黄灰白色シルトブロック少混

第195図 川久保1区10面の中世土坑

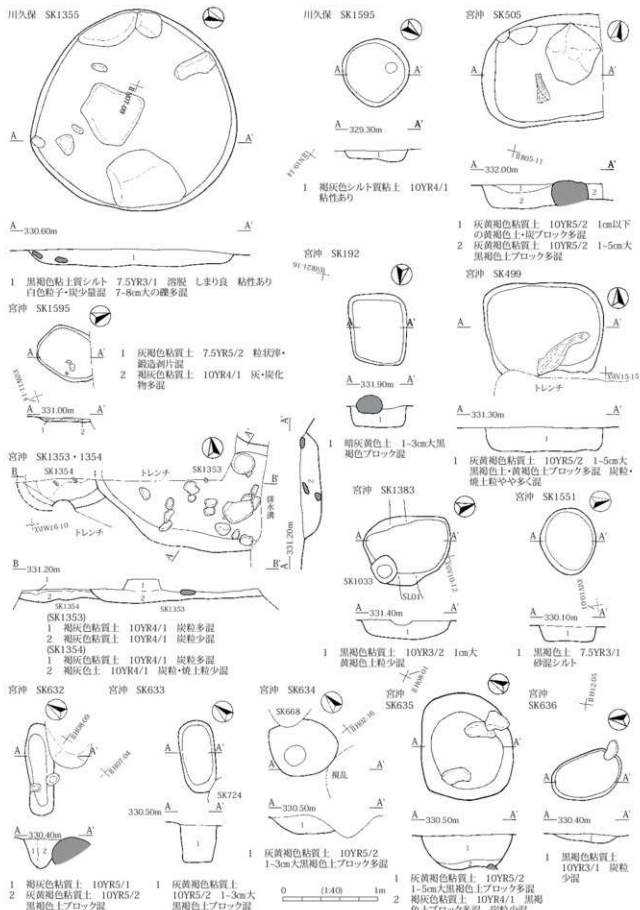
第3章 検出された遺構と遺物

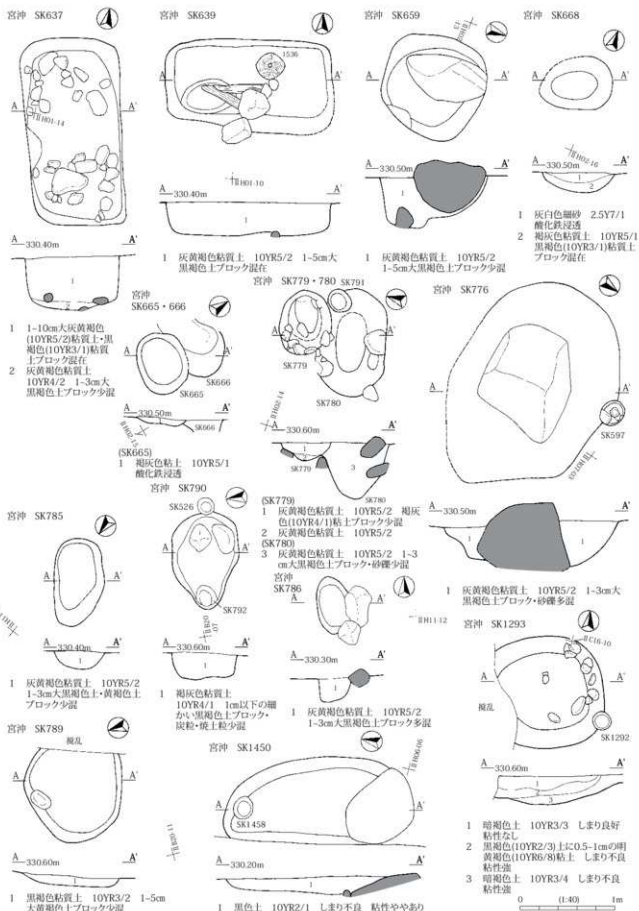


第196図 川久保1区10面、同2区1面、同5区2面の中世土坑



第197図 川久保3区1面、同5区1面の中世土坑





円形の土坑SK636がある。性格は明らかにし得なかった。中世遺物の出土はなく、積極的に中世土坑と断定できないが、可能性のある土坑として掲載する。川久保5区同様にIX層の礫を掘り出した痕跡や根の痕跡を捉えたと思われるものもある。

(4) 墓跡

墓跡とその可能性がある遺構は川久保1区10面のみで検出された。人骨を出土したSM01と、周囲を溝で区画して中央に土坑を配置する墓跡の可能性のあるSX08、SX08と類似した遺構の可能性のあるSK325・767・328・329がある。短刀のみ出土したSQ32も墓跡に関連する可能性から、ここに掲載した。川久保SM01 1区10面 IX A05 (第200図 PL26)

川久保1区10面の中央東寄りに位置し、検出面で人骨が露出した。墓坑や木棺の痕跡は捉えられなかったが、脇で検出された礫は木棺側板を押さえたものであり、検出面で露出したことから上部は土饅頭のように土を盛り上げていた可能性がある。人骨は遺存不良ながら全身骨が残る。顔を東に向けて頭位を南とする伸展葬で、左手を胸上で曲げ、右手は伸ばす。頭蓋骨から足先の骨分布範囲まで長さ約1.6mで、身長は1.5m強と思われる。副葬品はない。時期は検出面から12～13世紀前半と思われる。

川久保SX08 1区10面 IX A23 (第200図 PL26)

川久保1区10面北西部、水田域に隣接した微高地端に位置し、南側は9面水田跡に削平される。中央に幅1.4m、南北約2.3mの長方形の土坑があり、周囲を幅60cmほどの溝が区画する。溝は台形にめぐり、区画範囲は東西約4.4m、南北約4.6m以上の規模で、北西隅が土橋状に切れる。中央の土坑(SK552)は底面までの深さ約60cmで、埋土はブロック土を混じる埋め土で、底面上に厚さ1cmで粉状になった炭化材が長方形に認められた。また、土坑上面では拳大の河川礫が集中して検出され、関連すると思われる礫が本跡周辺の上部9面水田跡畦内にも多く認められた。周囲を区画する溝は、断面U字形で、深さ約20cmと浅く、北辺で礫数点が出土した。土坑や溝内から遺物や骨は出土しなかったが、形状から墓跡の可能性を考えた。時期は検出面から12～13世紀前半と思われる。

川久保SK325・767・328・329 1区10面 IX A22 (第200図)

川久保1区10面のSX08西隣りに位置する。長軸約1.9m、短軸約1.5mのSK325と、長軸約1.5m、短軸約0.8m以上のSK767が重複して位置し、東側に溝状に細長く連続するSK328・329が隣接する。SK325埋土はブロック土を混じり、埋め土と捉えられる。SK325・767を中心に溝状のSK328・329が近接する形状がSX08に似るとも思われ、同様の遺構の可能性からここに掲載した。出土遺物はない。

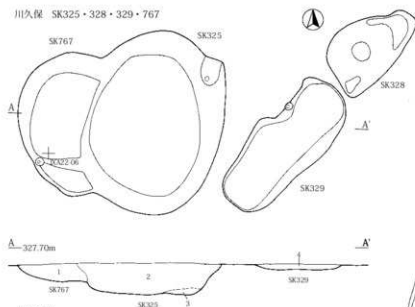
川久保SQ32 1区10面 IX B06 (第272図)

川久保1区10面の中央西寄りで鉄製短刀(1551)が1点単独で出土した。掘り込みは確認できず、人骨や他の遺物出土もない。墓跡副葬品であった根拠は得られなかったが、平安時代後期～鎌倉時代の墓跡内に短刀が副葬される例があることから、墓跡関連遺物と考えここに掲載した。

(5) 溝跡

畑関連の畝間溝、水田内の用水、掘立柱建物跡付属の溝はそれぞれ畑跡・水田跡・建物跡で掲載し、ここでは単独で検出された溝跡を中心に掲載する。屋敷区画溝と思われる川久保5区SD101・102・104、土地区画に関わる溝と思われる川久保SD09～11、川久保SD24・25、用水と思われる川久保SD03・07・08、宮沖SD09・11がある。

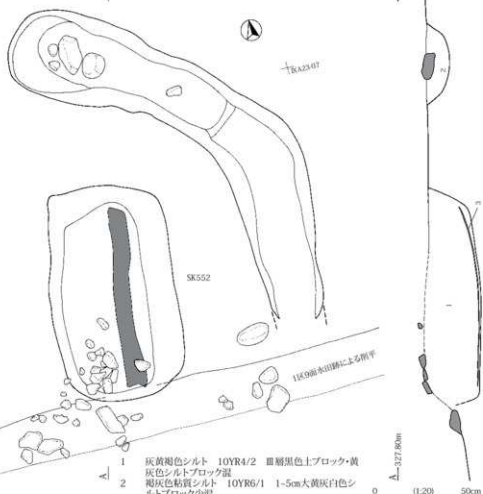
川久保 SK325・328・329・767



- (SK767)
1 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 しまり・粘性強 酸化鉄集積 黄褐色細砂少混
(SK325)
2 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 黄褐色細砂大きなブロック混
3 にぶい黄褐色シルト 10YR4/3
(SK329)
4 灰黄褐色粘土 10YR4/2 しまり・粘性強 酸化鉄集積

川久保 SX08

川久保 SM01



- 1 灰黄褐色シルト 10YR4/2 ■ 層黒色土ブロック・黄
褐色シルトブロック混
2 灰褐色粘質シルト 10YR6/1 1-5cm大黄灰白色シル
トブロック少混
3 黑色炭層

第200図 川久保1区10面の露跡

ア 屋敷地区画溝

川久保SD101・102・104 5区2面 II M10・20、N15 (第264・265図)

川久保5区2面北西部の柱穴が集中する範囲にある。SD101はN8°E方向の長さ約6.5m、幅約40cm、深さ約8cmの溝跡で、その北端から西約4m離れてN79°W方向の長さ約3.0m、幅約40cm、深さ約8cmのSD102が位置する。このSD101と102が90°折れたし字形の区画を形づくり、その範囲内にST26や掘立柱建物跡柱穴が集中的に検出された。SD102は短い溝跡ながら、その北側は柱穴分布が粗くなるので、本来はもっと長い溝で、屋敷地を区画していた溝と思われる。他遺構との重複関係は、SD101がSK1287・1292を切り、SK1293・1289・1249との重複関係は捉えられなかった。SD102はSK1236を切り、SK1447は本跡精査後に検出したが、前後関係は直接確認できなかった。SD101の南側の約8m延長先に、N70°W方向に西へ延びるSD104がある。SD104は幅約20cm、深さ約7cmで西端が調査区外へ延びて調査区内で長さ約2.5mを測る。走行方向はSD102に近く、SD101と共に南北約14mの屋敷地を区画するとも思われる。出土遺物はない。

イ 土地区画溝

川久保SD24・25 3区 IV L20・25、M16・21、Q04・05 (第285図)

川久保3区南西部の段丘縁辺の緩斜面にかかる付近で傾斜方向のSD25と等高線方向に直交するSD24が検出された。SD25はN51°W方向の直線的な溝跡で、北端は調査区外へ延び、南端は急斜面にかかる付近で浅く途切れる。長さ約10mを確認した。雨水の浸食で南下端は幅広くなるが、斜面上方では幅約40cmほどである。最深部が浸食で細くなったV字形の断面形である。SD24はSD25と直交するN37°E方向の直線的な溝跡で西端は調査区外へ延び、交差付近で一旦途切れる。調査区内で約28mを測る。幅は約60～80cm前後で、底面が平坦な逆台形の断面形で、傾斜下方の壁はわずかししか残存しない。埋土は暗褐色土層で遺物は混入と思われる古墳時代土師器しかない。畑の区画溝の可能性もある。

川久保SD09～11 4区1面 IV V09・10・14・15・20、W06・16～18・21 (第248図)

川久保4区北東部のNR1a内から東岸にかけて、約7～8m間隔にN80°W方向に平行する溝跡SD09～11を検出した。古墳時代前期水田跡SL04の北延長先を確認する拡張区のⅢ7層上面で検出したが、埋土にSL04を覆うⅢ6層の土石流堆積物が混じり、Ⅲ6層より上層から掘り込まれる遺構と捉えられる。いずれの溝跡も西端は調査範囲外へ延び、調査区内ではSD09が長さ21m以上、SD10が30.5m以上、SD11が9m以上を測る。幅は約30～80cmを測る。地形傾斜と関係なく低地から微高地まで貫いて直線的に構築されることから、畑跡などの耕作地区画溝と思われる。出土遺物はなく、時期の詳細は不明だが、Ⅱ層より下層の段丘上が水田化される以前の可能性から中世と推測した。

宮沖SD05・06 1区1面 XVI M21、R01 (第251図)

宮沖1区北端の段丘斜面にかかる場所でN32°W方向に平行して直線的なSD05・06を検出した。いずれも遺存不良でSD05の南端は調査区外へ延び、長さ約8.5m、SD06は断片的な残存で長さ約2.4mを測る。SD05は途中で土橋状に途切れることから区画溝と捉えた。遺物はSD05から古墳時代後期土器29gが出土し、中世とする根拠は弱い。川久保3区SD24・25同様の遺構と考えてここに掲載した。

ウ 用水

川久保SD03 2区1面 IX H03・08 (第279図)

川久保2区北西隅のⅢ層上面で検出。蛇行しながらN20°W方向に流れ、北端は調査区外へ延びて南端はSB02と重複する付近まで長さ6mほどが検出された。幅約40cm、深さは最大40cmを測る。断面形はU字形である。蛇行する形状から流水があったと推測される。出土遺物はなく、Ⅲ層上面検出で、中

世以後と思われる。中世とする根拠は弱い、その可能性からここに掲載した。

川久保SD07 2区1面 IX D25、E21・22、F24・25、X A21 (第284図)

川久保2区北部のNR1a南岸付近のⅢ層上面で検出。東西方向に長く伸びた溝跡東端に南北方向の溝跡が接続するT字形の溝跡だが、類似する埋土から関連する1本の溝跡と捉えた。他遺構との重複では本跡がST03と関連する柱穴Pit43を切る。本跡の東西方向の溝跡は西端が調査区外へ伸び、途中トレンチ等を挟んで総延長約50mを測る。直線的ではなく、西側はN68°W、東側がN87°E方向の緩やかなカーブを描く。東端に接続する南北方向の溝跡は浅く4.5mほどの遺存である。幅約60cm、深さ約30cmの断面U字形で、埋土はⅡ層を基調として最下層にブロック土を混じる土層、中位に黒褐色砂質土層、上部にブロック土を混じる土層、最上層に砂層が堆積する。遺物は古墳時代前期土器59g、古墳時代後期の土器473g、平安時代の土器12g、時期不明土器25gがある。埋土の特徴から段丘上が水田化された中世以後のものと考えられるが、近世遺物が混じらないことや、隣接する1区では近世の用水跡は傾斜方向が多いことから中世の可能性があると捉えた。

川久保SD08 2区1面 X H07・12 (第277・279図)

川久保2区西端のNR1c上面で検出した。1・2区調査区境付近にあるが、西端の延長先は1区では検出されず、2区内で長さ8mほど調査した。断面U字形で深さ10cm、底面には凹凸があって流水があったと捉えられた。遺物は平安時代の土器166g、古墳時代後期土器127g、古墳時代前期土器3gと時期不明土器118g、白磁碗1片25g(1461)が出土した。出土遺物から、段丘上部が水田化した後の中世用水跡と考えられる。

宮沖SD09・11 1区2面・5区1面 II B15、C11、V19・24、B04・05 (第256・260図)

SD09は宮沖5区1面、SD11は宮沖1区2面で検出した。両者は直接接続することは確認できなかったが、断面形状や埋土が類似し、SD11の南延長先からSD09が分枝する可能性からまとめて掲載した。SD09は宮沖5区北端にあり、SB02を切って調査区をN64°E方向に直線的に横断する。幅約80cm、深さ約40cm、断面形は逆台形を呈し、埋土は底面上に薄い砂層、上部に暗褐色・褐色土が入る。SK852・1729・1359や、SB02 Pit 11・12との重複関係は直接確認できなかった。出土遺物は古墳時代前期土器244g、古墳時代後期～奈良時代土器1,556gと不明土器292gがある。氾濫原方向へ伸び、氾濫原内に中世水田跡が存在した可能性を示唆する。

SD11は宮沖1区南西端をN28°W方向に緩やかにカーブしながら調査区を横切る。2面のSB10・11を切り、2面のSL01、SK869・1559・1561・1562、1面柱穴SK392・395・401・403・496が本跡上面に位置する。幅約80～150cm、深さ約40cmで、断面形は逆台形で、埋土は底面上に褐色粘質土と砂層、中位に黒褐色粘質土、最上部に厚く黒褐色土が入る。下層の砂層と底面の形状から流水があったと捉えられる。遺物は古墳時代前期土器2,141g、古墳時代後期～平安時代の土器4,683g、不明土器1,684gが出土した。古墳時代前期と奈良時代の土器は重複するSB10・11からの混入とみられる。SD09・11は段丘上に立地する用水と捉えられ、出土遺物から平安時代以後のもので、15・16世紀と捉えられた宮沖1区1面柱穴が上面に重なる重複関係から、中世と捉えた。川久保1区では9面水田跡以後に段丘上の緩斜面まで水田化されたことと捉えられたが、この水田域拡大と関連して造られた用水と思われる。ただし、宮沖1区2面柱穴や畑跡に切れ、長期に使用されなかった可能性がある。

(6) 焼土跡 (第35表)

被熱で赤化した範囲が捉えられた単独の遺構を焼土跡とした。出土遺物を伴わないものが多いが、検出

第35表 中世焼土跡一覧表

遺跡・遺構	調査区 調査面	グリッド	平面形	長軸 × 短軸 (cm)	状態
川久保 SF13	1区 10面	IX A17	円形	62×42	32×26cmと40×33cmの円形の被熱で赤化した範囲が2か所隣接して捉えられた。
川久保 SF14	1区 10面	IX A17	円形	36×27	被熱で赤化した範囲と捉えられた。
川久保 SF15	1区 10面	IX F20	円形	32×30	被熱で赤化した範囲と捉えられた。
川久保 SF16	1区 10面	IX F20	楕円形	86×74	北端 52×34 cm の範囲が顕著に赤化し、周囲は弱く焼ける。
川久保 SF17	1区 10面	IX F20	不整形円形	56×52	中央 30×40cm が顕著に焼ける、周囲は弱く被熱で赤化する。
川久保 SF18	1区 10面	IX F20	円形	72×68	中央 34×33cm が顕著に焼ける、周囲は弱く焼けて赤化する。SF18 と隣接する。
川久保 SF19	1区 10面	IX F20	不整形円形	54×52	南側端 20×52cm が三日月状に顕著に焼ける。SF18 と隣接する。
川久保 SF20	1区 10面	IX F20	不整形円形	77×66	中央 24×22cm が円形に顕著に焼ける。北側に炭化物散布。
川久保 SF21	1区 10面	IX F20	円形	62×50	顕著に被熱で赤化する。
川久保 SF22	1区 10面	IX F20	不整形円形	52×48	弱く被熱で赤化する。
川久保 SF24	1区 10面	IX F20	楕円形	48×32	東端 26×22cm 範囲が顕著に被熱で赤化し、周囲が弱く赤化する。
川久保 SF25	1区 10面	IX F20	不整形円形	52×48	弱く被熱で赤化する。
川久保 SF26	1区南東 1面	IX H16	不整形円形	170×84	内部に 26×24cm、26×20cm、72×62cm の円形・不整形円の焼土が並び、炭化物の散布が認められる。複数の焼土が隣接する可能性あり。
川久保 SF27	1区南東 1面	IX H16	円形	42×40	SF28 と隣接し、被熱により赤化した範囲と捉えられた。
川久保 SF28	1区南東 1面	IX H16	円形	34×30	SF27 と隣接し、被熱により赤化した範囲と捉えられた。
川久保 SF29	1区南東 1面	IX H16	円形	50×36	被熱で赤化した範囲と捉えられた。隣接して石と炭化物散布が認められた。
川久保 SF30	5区 2面	II M14	楕円形	90×60	0.5×0.4 m 範囲が顕著、その周囲が弱く焼ける。炭化物散布わずか。SB39 関連焼土跡か。
川久保 SF31	5区 2面	II M08	連円形	82×46	被熱で赤化した範囲が2つ連なる。横に黄褐色ブロックを含む堅硬な面がある。
川久保 SF33	5区 2面	II M08	不整形楕円形	88×32	直接被熱で赤化した範囲と捉えられる。SB37 埋土上部にあるが中世と断定できず。
川久保 SF34	1区南東 1面	II H21	不整形円形	198×126	不整形な炭化物の散布範囲。
宮沖 SF01	1区 1面	XVI R21	不整形円形	40×30	単独で位置する焼土跡。被熱で赤化した範囲と認められた。上面水田耕作で削平か。
宮沖 SF02	1区 1面	XVI Q15	不整形円形	44×38	段丘斜面に SF03 と隣接する。被熱で赤化した範囲と認められた。
宮沖 SF03	1区 1面	XVI Q15	不整形円形	126×94	段丘斜面に SF02 と隣接する被熱で赤化した範囲と認められた。北側に炭化物散布あり。
宮沖 SF04	5区 1面	II H06	不整形円形	56×46	被熱で赤化した範囲と認められた。
宮沖 SF05	1区 1面	XVI V20	不整形円形	88×44	単独で位置する焼土跡。被熱で赤化した範囲と認められた。
宮沖 SF06	1区 1面	XVI V15	不整形円形	38×34	単独で位置する焼土跡。被熱で赤化した範囲と認められた。
宮沖 SF07	5区 1面	II C16	不整形円形	40×28	SB03 埋土上面で検出。SF09～12 と近接する。被熱で赤化する。
宮沖 SF08	5区 1面	II H07	楕円形	32×18	小規模な焼土跡。被熱で赤化した範囲と捉えられた。
宮沖 SF09	5区 1面	II C16	楕円形	46×22	SB03 埋土上面で検出。SF10～12 が隣接する。SK617 に切られる。被熱で赤化する。
宮沖 SF10	5区 1面	II C16	楕円形	50×22	SB03 埋土上面で検出。SF09・11・12 が隣接する。被熱で赤化する。
宮沖 SF11	5区 1面	II C16	楕円形	52×30	SB03 埋土上面で検出。隣接して SF09・10・12 がある。被熱で赤化する。
宮沖 SF12	5区 1面	II C16	不整形円形	80×20 以上	SB03 埋土上面にあり、東側は調査区外へ延びる。被熱で赤化し、SF09～11 が隣接する。
宮沖 SF13	5区 1面	II H12	円形	40×34	SF13 と隣接する。被熱で赤化した範囲と認められた。
宮沖 SF14	5区 1面	II H12	楕円形	94×58	SF12 と隣接する。中央に 32×22cm の強く被熱で赤化した範囲があり、周囲に弱い被熱範囲が広がる。

面から中世と推定した。中世の柱穴分布域に重なって認められ、建物内施設もあると思われる。

川久保 1区では 1区 10面の北西部の ST23 と重なって位置する SF13・14 (第 270 図)、1区南西部の三角洲微高地の SB48 北側で SF15～22・24・25 (第 273 図)、1区南東部 1面 で SF26～29・34 (第 278 図) を検出した。SF22 は SB48 を切る。いずれも直径 50～80cm 前後の円形に焼土が近接して検出されたが、同時に複数形成されたものではなく、類似場所で個別に形成された焼土跡が集積したと思われる。

川久保 5区 2面では SF30～33 (第 264 図) を検出した。後に SF32 は奈良時代 SB37 のカマドの一部と判明し、近接する SF31・33 も同様の焼土跡かもしれない。SF30 は隣接する中世の SB39 と関連すると思われる。

宮沖 1区 1面では、SF01～03・05・06 を検出した。SF01・05・06 (第 252・253 図) は柱穴の分布範囲内に散在し、建物内の施設とも思われる。SF02・03 (第 251 図) は宮沖 1区 1面の北西段丘斜面にあり、柱穴のない場所にあつて単独の遺構と捉えられた。

宮沖 5区 1面では中央～南部で SF04・07～14 (第 260・261 図) を検出したが、中世とする根拠は弱い。SF04 は南部の柱穴の密集する場所にあり、建物内施設の可能性がある。SF07・09～12 は II 層直下の SB03 埋土上面で検出された。近接することから関連する遺構と思われるが、性格は不明である。

(7) 畑跡

畑跡には川久保1区10面SL07・08、川久保2区1面SL02・03、川久保5区1面SL09、宮沖1区2面SL01がある。川久保SL08・09は水田跡踏で検出されたが、他の畑跡は中近世水田跡の下層に位置し、水田化される以前の遺構と捉えられる。これらの畑跡は、畝や畝間の溝から認定したが、遺存状態や検出状況により遺構範囲や単位の捉え方は一様ではない。川久保SL08・09は被覆する洪水土層を除去して畑跡の畝を検出し、川久保SL02・03、07と宮沖SL01は畑耕作土層下面に残る畝間の溝から認定した。前者では耕作土下面調査を実施しておらず、畑跡の範囲は洪水土被覆範囲しか捉えていない。また、川久保SL07は個別に検出された溝が平行することから、畝間の溝と捉えて整理作業でSL07にまとめた。川久保SL02・03は同じ場所に重なる異なる方向の畝間の溝を別々の遺構と捉えられたが、同じ畑地内の異なる時期の畝間の溝を捉えた可能性がある。宮沖SL01は90°反転した方位の畝間の溝も含めて、同じ畑跡内の耕作痕としてまとめて捉えた。ここでは調査時の認定にしたがって報告する。

川久保SL02・03 2区1面 IX D24・25、I03・04・05 (第282・284図 PL26)

川久保2区北西部に重なって位置する。SL02はⅡ層下部から認められはじめてⅢ層上面で明瞭に検出され、SL03はその下層のⅢ層下部～Ⅳ層上部で検出された。SL02・03は同所の上下層に重なり、検出層位からSL02が新しいと捉えられるが、洪水土堆積により地表面上昇するなかで連続耕作された上層部分と下層部分を別に捉えた可能性がある。

SL02は幅20～25cm、深さ5cmの南北方向の畝間の溝が約1.2～1.3m間隔で並列する。南北14m東西約21mの範囲で確認した。ただし、畝間の溝の埋土はⅡ層基調で褐色土ブロックを含む。出土遺物は古墳時代後期の土師器片があるが、本跡埋土はⅡ層を基調とすることから、水田化前後の中世の所産と思われる。

SL03は中世柱穴と思われるPit15を切り、Pit16に切られる。幅10～15cm、深さ5cm前後の南北方向の畝間の溝が約20～40cm間隔で並列する。畝間の溝の間隔は狭く、複数の耕作痕が重なる可能性がある。畝間の溝は若干「く」字形に湾曲し、SL02と方位が異なる。また、溝の底面は凹凸が著しい。出土遺物は混入と思われる古墳時代後期の土器片がある。

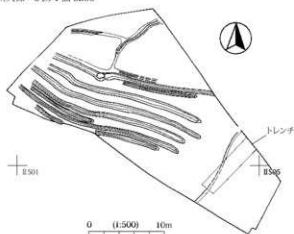
川久保SL07 1区10面 IX A12・13・17・18 (第270図 PL26)

川久保1区10面の北部の微高地にあり、Ⅲ-1層黒褐色土層を除去したⅢ-2層上面で検出した。中世のST22・23を切る。N70°W方向に長さ3.4～6.0mの溝4本が並列する様相から畑跡と捉えた。その範囲は南北7m、東西6mほどだが、南西方向に約6m離れて1本同方向の短い溝があり、これを含めると南北長12m以上と思われる。また、東側に隣接してN30°W方向の溝1本、南西部にN40°Wの短い溝があり、SL02・03同様に異なる耕作時の畝間の溝が重なる可能性がある。

川久保SL08 1区10面 IX G16・17・21・22、L01・02 (第273・274図 PL26)

川久保1区10面の南西部三角州状微高地の東側緩斜面にあり、10面を被覆する洪水土層を除去して畝を検出した。本跡は、南側が調査区外へ延び、

川久保 5区1面SL09



第201図 川久保SL09

東側は水田跡脇の溝 SD68 際、北・西側は洪水土被覆が薄く途切れるまでの東西約 13m、南北約 18m の範囲で検出した。耕作土層下面での畝間の溝は確認していないが、三角州状微高地頂部北西部にある SB22 埋土土層に畝が認められ、微高地頂部まで畑跡が広がっていたと捉えられる。洪水土層に被覆される範囲で畝間の溝は 14 条ほど確認された。中央東端に南北 3.4m、東西 3.4m ほど畝が途切れる空間地が認められたが、ここで集石を伴う SH03・04 を検出した。畝間の溝は傾斜方向の N2° E 方向に並列し、幅約 0.6m、長さ最大約 13m で、深さは 20cm 前後、間隔は約 1m である。畝間の溝内には 0.8 ~ 1.4m 間隔に直径約 40 ~ 60cm の円形の洪水土層が落ち込む浅い窪みが検出された。畝間の溝内には作物を栽培する場所ではないと思われるが、規則的に並ぶことから栽培植物の根の痕跡の可能性はある。栽培植物とすれば、窪みの間隔から直径 0.4 ~ 0.7m ほどの枝葉に成長する作物と思われる。出土遺物はない。本跡の時期は 1 区 10 面の洪水土層に覆われることから 13 世紀前半頃と思われる。

川久保 SLO9 5 区 1 面 II N21・S01 (第 201 図)

川久保 5 区 1 面南部の斑尾川に面した段丘縁辺近くに位置し、上部は川久保 1 区 8 面水田跡を被覆する洪水土層に対比し得るとされる洪水土層に被覆される。東側は水田跡となり、南・西側は調査区外へ延び、北側は洪水土層の被覆が浅く途切れて不明となる。本跡は東西約 30m、南北約 10m の範囲で検出され、畝間の溝が 8 条確認できた。畝間の溝は一部間隔が狭いが、約 1m 間隔に並列する。出土遺物はないが、本跡の時期は川久保 1 区 8 面水田跡に対比される可能性から、14 世紀前後と思われる。

宮沖 SLO1 1 区 2 面 XVI V10・15・20・24・25、W06・11・16・21、II B05 (第 255・256 図 PL26)

宮沖 1 区南部の 2 面で、南北約 31m、東西 17m の範囲に畝間の溝と思われる平行・直交する短い溝が複数検出された。西側は段丘縁辺まで認められ、東側は調査区外へ延びる。北と南の範囲は捉えられなかったが、検出範囲より広がる可能性がある。他遺構との重複では宮沖 SD11 や平安時代以前の竪穴住居跡を切り、中世と思われる柱との重複関係は捉えきれなかった。畝間の溝は埋土がⅢ層を基調として東西、南北方向のものがあり、複数時期のものが重なるとされる。宮沖 1 区 1 面の下層に位置し、宮沖 SB04 を切るので平安時代～室町時代の所産で、中世前期の可能性はある。出土遺物は最も新しい土器は平安時代黒色土器 A 杯 1 片 28g で、他は古墳時代後期～奈良時代の土器のみある。

(8) 水田跡 (第 36 表)

川久保 1 区では洪水土層に覆われた水田跡が多く存在し、比較的広い範囲で遺存する 8・9・10 面水田跡と、川久保 1 区南部の NR1d の窪地地形内のみ遺存する 6・7 面水田跡を調査した。その上層の 5 面水田跡は、近世 4 面水田跡と類似位置に畦が認められ、出土遺物にも唐津を含むことから近世で扱った。他に川久保 5 区 1 面でわずかに水田跡が検出された。この川久保 1・5 区以外の調査区では中世洪水土層の被覆が少ないなかで、連続耕作されたため水田跡の遺存状態が悪く調査し得なかった。また、斑尾川氾濫原内では、調査の安全上トレンチのみの調査ながら、確実に中世と断定し得る水田面は確認されなかった。ただし、中世用水と思われる宮沖 SDO9 が氾濫原方向へ延びているので氾濫原内に水田跡が存在した可能性は高い。おそらく、中世以後の斑尾川の浸食や耕地再編成で遺存しなかったと思われる。

今回の調査で最も古い中世水田跡の様相が捉えられたのは川久保 1 区 10 面で、ここでは NR1d や NRO6 の窪地地形内のみ水田域と認められた。上層の 8・9 面水田跡では北部の微高地まで水田域が拡大し、近世に至るまでの間は居住遺構が検出されない。この水田域拡大に併せて用水も変化が認められた(第

第36表 中世水田跡面積計測表

水田No	通跡	地区名	平均m	水田No	通跡	地区名	平均m	水田No	通跡	地区名	平均m
1	川久保	1区6面	(179.3)	10	川久保	1区8面	(116.9以上)	8	川久保	1区9面	(57.3)
2	川久保	1区6面	112	11	川久保	1区8面	(100.3)	9	川久保	1区9面	(61.5)
3	川久保	1区6面	65.3	12	川久保	1区8面	(11.3以上)	10	川久保	1区9面	計測不能
4	川久保	1区6面	95.6	13	川久保	1区8面	149.1	11	川久保	1区9面	72.3
5	川久保	1区6面	52.5	14	川久保	1区8面	(12.7以上)	12	川久保	1区9面	33.1
6	川久保	1区6面	67.2	15	川久保	1区8面	185.2	13	川久保	1区9面	(61.3以上)
7	川久保	1区6面	151.3	16	川久保	1区8面	(84.1以上)	14	川久保	1区9面	48.5
8	川久保	1区6面	147.6	17	川久保	1区8面	74.8	15	川久保	1区9面	(95.2以上)
9	川久保	1区6面	137.1	18	川久保	1区8面	160.4	16	川久保	1区9面	32.8
10	川久保	1区6面	(244以上)	19	川久保	1区8面	(55.5以上)	17	川久保	1区9面	77.3
1	川久保	1区7面	(36.0以上)	20	川久保	1区8面	79.5	18	川久保	1区9面	8.4
2	川久保	1区7面	44.7	21	川久保	1区8面	64.4	19	川久保	1区9面	15.1
3	川久保	1区7面	42.2	22	川久保	1区8面	54.0	20	川久保	1区9面	(90.1)
4	川久保	1区7面	26.9	23	川久保	1区8面	55.9	21	川久保	1区9面	15.7
5	川久保	1区7面	(56.4)	24	川久保	1区8面	63.7	22	川久保	1区9面	132.4
6	川久保	1区7面	62.1	25	川久保	1区8面	57.7	23	川久保	1区9面	119.6
7	川久保	1区7面	39.2	26	川久保	1区8面	(44.8)	24	川久保	1区9面	34.8
8	川久保	1区7面	122.3	27	川久保	1区8面	(14.1以上)	25	川久保	1区9面	(30.4以上)
9	川久保	1区7面	62.3	28	川久保	1区8面	49.7	1	川久保	1区10面	(182.7)
10	川久保	1区7面	101.1	29	川久保	1区8面	70.8	2	川久保	1区10面	33.7
11	川久保	1区7面	194.4	30	川久保	1区8面	70.9	3	川久保	1区10面	67.6
12	川久保	1区7面	(70.8)	31	川久保	1区8面	48.5	4	川久保	1区10面	計測不能
13	川久保	1区7面	(18.3以上)	32	川久保	1区8面	(46.0以上)	5	川久保	1区10面	60.5
14	川久保	1区7面	172.7	33	川久保	1区8面	(64.8以上)	6	川久保	1区10面	44.1
1	川久保	1区8面	(34.4以上)	34	川久保	1区8面	(57.6以上)	7	川久保	1区10面	23.3
2	川久保	1区8面	(58.4以上)	35	川久保	1区8面	(25.9以上)	8	川久保	1区10面	77.7
3	川久保	1区8面	(40.8以上)	1	川久保	1区9面	66	9	川久保	1区10面	72.9
4	川久保	1区8面	(37.9以上)	2	川久保	1区9面	101.3	10	川久保	1区10面	68.9
5	川久保	1区8面	29.3	3	川久保	1区9面	(43.2)	11	川久保	1区10面	111.6
6	川久保	1区8面	計測不能	4	川久保	1区9面	計測不能	12	川久保	1区10面	91.1
7	川久保	1区8面	29.1	5	川久保	1区9面	(265.2以上)	13	川久保	1区10面	67.3
8	川久保	1区8面	(48.9)	6	川久保	1区9面	142.1	14	川久保	1区10面	9.2
9	川久保	1区8面	247.6	7	川久保	1区9面	136.8	15	川久保	1区10面	(48.8以上)

202図)。川久保1区10面水田跡では、NR1dの窪地地形内のみSD61・62があり、SD61北部の屈曲部付近に設けた堰で水位を上げて脇のSD68へ水を流している。9面水田跡では微高地上方から流れる用水SD58・59・67が新たに出現し、NR1d内のSD60はSD58・59に接続するように変化している。8面水田跡では微高地上方からの用水はSD54、NR1d内の用水はSD55に継承されるが、SD55は南端が千曲川まで延びずに川久保1区内で収束して細長い溜池状となる。7面水田跡ではNR1d内の溝は認められず、微高地上方からのSD52・53のみとなるが、微高地上方からの用水も6面水田跡に伴うと推測したSD64を最後に消え、用水が再出現するのは近世3面水田跡である。なお、宮沖SD09・11は斑尾川上流側から取水した段丘上の幹線用水と思われる、川久保1区9面の微高地上への水田域拡大に伴って出現した可能性がある。

この中世水田跡の畦には土を盛り上げたもののみあり、近世の石を芯材とする畦や土留用の杭を伴う畦は認められなかった。中世水田跡の区画は、地形変換点付近を除いて畦位置が重ならないものが多く、近世水田跡のように同じ場所で畦を継続的に維持する志向はあまり感じられない。その一方で方位に合わせた畦が認められる特徴がある。川久保1区10面水田跡では中央付近に比較的方向に一致した畦が認められ、NR1dの窪地地形に合わせた畦と併存する。9面水田跡ではNR1d内にも方位に合わせた畦が認められ、8面水田跡もほぼ同様で、東西方向の等高線方向に近い畦が比較的方向に一致する。しかし、南北方向の畦は、長く通るものはNR1d周辺しかなく、川久保1区北部の微高地上は途絶する短い畦が多い。それ以後の6・7面水田跡はNR1d窪地地形の狭い範囲のみしか確認できなかったが、7面水田跡に方位を合わせたと思われる畦がある。

各水田跡の年代は、出土遺物から10面水田跡が13世紀前半、9面水田跡はわずかな出土遺物からだが14世紀前半頃、7・8面水田跡は時期不明だが9面と6面水田跡中間の14～15世紀中頃と思われる、6面水田跡は15世紀中頃、5面水田跡は17世紀頃と推測された。

川久保1区6面水田跡 1区6面 IX B・G・L地区 (第203図 PL26)

川久保1区南東部のNR1dの窪地地形に位置する。本水田跡は上層5面水田跡、下層7面水田跡ともに洪水砂層の被覆はわずかで、遺存状態も不良である。水田跡範囲もNR1dより外側では近世水田跡に削平されて残存しない。この6面水田跡は5面水田跡から20cmほど下層にある洪水土の砂が上層の耕作でブロック状に含まれる土層下面で検出した。上下の水田耕作土層が強粘土で、畦の盛り上がりは捉えられず、水田耕作土層の段差や、ブロック状の洪水土層が認められない帯状範囲を畦と推定して水田区画を捉えた。一部は上層の疑似畦畔が含まれる可能性があって単一時期の畦と言い切れないところもあるが、6面水田跡の区画はNR1d内の段差で大きく2段に分かれ、そのなかを等高線方向の畦で細かく区切り、水田1枚の面積は狭い。また、NR1dの北西上方で微高地上方から続くSD64を検出した。

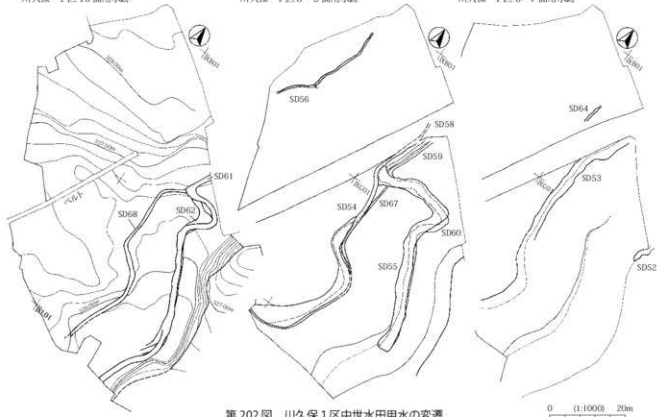
SD64は川久保1区北部の10面で検出し、細長い土坑SK207と捉えたが、南端延長先に還元化した灰色の帯状の面が続くと認められ溝跡と捉え直した。遺構番号は整理作業で変更した。北端は浅く消え、南端は途切れながら長さ約14mほど確認した。埋土にはぶい黄褐色シルト～砂質粘土で、遺物は石臼・石鉢と思われる破片(1535・1534)がある。近世水田跡では本跡の場所に南北方向の畦が検出されておらず、同様の区画と推測される5面水田跡に本跡が伴う可能性は低いと思われる。7面水田跡のSD53と近接し、走行方向も類似することからSD53に続く6面水田跡の用水と推測した。SD64から石臼と石鉢片とも思われる石製品が出土し、年代はSD53に近いと思われる。

6面水田跡の遺物は混入と思われる古墳時代後期土師器甕、須恵器甕 36g、平安時代須恵器甕や黒色土

川久保 1区10面用水跡

川久保 1区8・9面用水跡

川久保 1区6・7面用水跡



第202図 川久保1区中世水田用水の変遷

器A杯柄片180g、不明土器46gがあり、中世では玉縁の青磁碗1片8g(1474)、古瀬戸平碗1片12g(1473)、珠洲壺片1片185gが出土した。出土した古瀬戸平碗から15世紀後半頃の所産と思われる。

川久保1区7面水田跡 1区7面 IX B・G・L地区 (第203図 PL26)

川久保1区南東部のNR1dの窪地地形内で検出した。5・6面水田跡同様に被覆する洪水土層が薄い上に、NR1d窪地地形外側は近世水田耕作で削平されて耕作土層が遺存しない。強粘土層に挟まれた洪水土層の砂がブロック状に混じる土層を除去して検出したが、6面水田跡同様に上層水田の耕作が及んでいる可能性に加え、7面水田跡耕作土層と上層耕作土の強粘土層が癒着し、明確な層界面として検出できなかったところが多い。そのなかで洪水土層の砂ブロックの分布が少ない帯状空白地や、水田面の段差から区画を捉えたが、上層水田跡の疑似畦畔が含まれる可能性がある。NR1dの窪地地形西縁や北辺で細長く狭い階段状の水田区画が捉えられたが、これはNR1d窪地地形内の堆積増加と共に耕作土層が上昇し、そのなかで徐々に水田区画が外側へ拡張されたためにできた痕跡と思われる。

7面水田跡の水田区画はNR1dの窪地地形内ではNR1d西岸と平行する段差で上下2段の区画に大きく分かれ、そのなかを東西方向の短い畦で区画したとみられる。区画は6面水田跡と似るが、東西方向の畦は方位に一致する。また、NR1d西岸にSD53、東岸にSD52が検出された。SD53は下層8面と重なる位置にあるSD54を継承したもので、SD52は本水田跡のみに認められた。8面のNR1dの窪地地形内にあった8面水田跡のSD55を継承する用水は本水田跡では認められなかった。

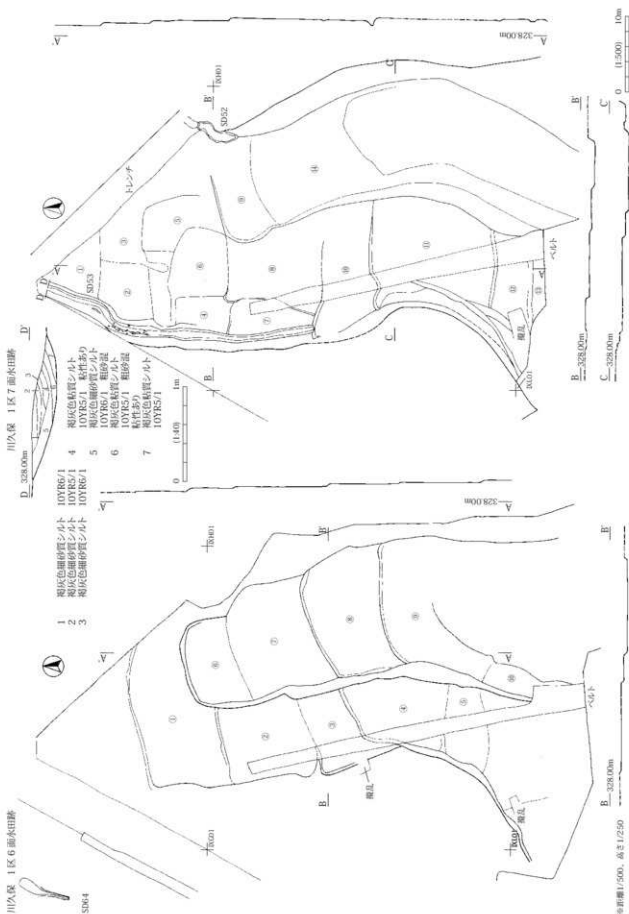
SD52はNR1d東岸のIX B25、G05グリッド付近にあり、北端は調査区外へ延び、一部トレンチにかかった。調査した範囲で長さ約7.8mを測る。調査区東壁の土層観察で8面水田跡を被覆する洪水土層を切っているが、6面水田耕作土層まで立ち上がらないことから、7面水田跡前後の用水と捉えた。蛇行しながらN18°E方向に流れ、底面は流水による凹凸が認められた。幅は140cm前後で断面U字形である。埋土は褐色粘質土で礫多数が混じり、埋め戻されたとみられる。出土遺物はカワラケと思われる土器片1片19g(1462)、平安時代の土器1131g・古墳時代後期の土器78g・不明土器97gがある。

SD53はNR1d西岸のIX B12・16・17・21、G01・06グリッドに位置し、北端は調査区外へ延び、南端はNR1d西岸中程の水田跡に接続する。長さ約36mを測る。本跡は8面水田跡のSD54を継承した用水と思われる。溝跡は北部でN26°E方向、途中わずかに蛇行して中央付近はN2°Eと比較的方位に一致している。幅約140cmで、断面U字形で深さ10cm程度である。埋土は細砂質のシルトと粘性のある褐色シルトが交互に堆積し、底面上に粘性の強い土層が認められた。また、中央北寄りの岸沿いで、護岸施設と思われる直径20cm前後の河川礫が並ぶように検出された。出土遺物は石鉢(1540)がある。

7面水田跡の出土遺物は混入と思われる古墳時代前期土器77g・同後期土器63g・平安時代土器215g・不明土器246gがあり、中世の遺物は青白磁合子1片3gのみあるが、これも混入の可能性もある。また、SD53の石鉢出土から本水田跡の年代は15世紀中頃以後と思われる。

川久保1区8面水田跡 1区8面 IX A・B・F・G・K・L地区 (第204・206図 PL27)

川久保1区にあり、北部の微高地まで洪水土層に被覆された水田面が遺存する。調査は洪水土層を除去して盛り上がる畦を検出したが、近世水田耕作により削平された1区中央東寄りや、被覆洪水土層が薄い南西部の三角州状微高地は水田跡の詳細は捉えられなかった。8面水田跡は北部の微高地まで水田が確認され、北から南へ緩やかに傾斜する地形にあって階段状に水田を配し、中央より西側は等高線方向に長い水田跡、東側のNR1d窪地地形内は小さな水田跡が並ぶ。用水は微高地上方から流れ下るSD54・56があり、NR1d西岸を南へ流れる用水SD54の途中から分水してNR1d内の最低部に位置するSD55がある。SD56



第203図 川久保1区6・7面水田跡



第204図 水田内の用水 (川久保SD54・55)



第205図 上層水田畦の転写痕 (川久保1区9面水田跡)

以外は位置的に重なる9面水田跡SD58・59・60・66を継承したものとみられる。8面水田跡のSD54・56は蛇行しているが、川久保1区北部ではSD56とSD54の間隔が約24m、SD54とNR1d東岸間も約25mで等間隔に位置する。これらの用水によって大きく南北に細長く区切られた中を東西方向の畦で区切るとみられるが、用水や東西方向の畦には大畦と認められるものはない。この8面水田跡の水田区画は下層の9面水田跡と似ているが、9面水田跡より地形傾斜や等高線方向に近い畦が多い。水田面では足跡等の窺のみ認められ、耕作痕は認められなかった。

SD54はNR1d西岸のIX B 11・16・21、G01・06・11・12・17・22・L 01グリッドに位置し、1区中央ベルトにかかった部分は1区10面で追加調査した。北端と南西端は調査区外へ伸び、調査区内で長さ約84mを測る。北部の途中からSD55へ分水し、本跡と接するNR1d内の水田跡は水口が開く。幅は40～60cmで、深さは北端が15cmで、遺存状態が悪い南部は2・3cmほどしかない。出土遺物はない。

SD55はNR1dの窪地地形中央のIX B21～24、G03・09・14・19・24グリッドに位置する。SD54から取水して9面SD60と重複する位置をS字状に流れるが、南端は畦で区切られて細長い溜池状となる。長さ約62m、幅は約220～240cmと一定し、断面は逆台形で底面はわずかに南側が低い。水田面からの深さは10～26cmで、南部ほど浅い。埋土は8面水田跡を覆う洪水土である。出土遺物はない。

SD56は北部の微高地のIX A03・08・13・17・18・22グリッドに位置する。北端は近世水田跡で削平され、南端は南西部付近の水田跡に注ぎ込む部分まで長さ約29.4mを測る。本跡の北端はN0°Wと方位に一致するが、途中でN18°E方向へ屈曲し、北端から20m付近でN48°E方向に折れる。幅は約40～50cm、断面形はU字形を呈し、深さは5cm前後と浅い。出土遺物はない。

8面水田跡から珠洲すり鉢3片337g(1476・1477)、同壺と思われる破片1片34g、古墳時代前期土師器36g・平安時代土師器・須恵器74g・不明土器322gがある。中世遺物は9面水田跡のものより古いもので、混入品の可能性があり、本水田跡の時期は7～9面水田跡間の14～15世紀としかわからない。川久保1区9面水田跡 1区9面 IX A・B・F・G・K・L地区 (第205・207図 PL27)

川久保1区9面水田跡は、南部と北西部1/3ほどが厚い洪水土層に覆われて良好に遺存する。南西部の三角州状微高地や、NR1d内の東側は洪水土層の被覆が薄く遺存不良である。また、1区北部の微高地の北東部は8面水田跡までの水田耕作で削平されて遺存せず、北西部の微高地際は洪水土層の被覆がわずかで足跡等の窺のみが遺存するか、耕作土層のみの水田跡しか捉えられなかった。なお、1区中央ベルト北西脇は排土搬出重機の通路口として最後に調査したが畦は遺存不良で詳細は捉えられなかった。

川久保 1区8面水田跡



第206図 川久保1区8面水田跡

この9面水田跡も北から南へ傾斜する地形に階段状の水田を造成しており、1区の北部微高地まで水田域としていることが確認された最も古い水田跡である。水田跡の区画は10面水田跡と類似するが、10面水田跡では地形に合わせた畦が多かったNR1d窪地地形内も、9面水田跡では方位に合わせた畦が認められ、全体的に方位を合わせた畦が多く認められる。大畦や小畦などの畦の規格差は認められなかったが、用水SD58・59とSD67を結ぶ南北方向の畦ラインと、SD58・59とSD60が接続する周辺から西側に続く東西方向の畦ラインの通りが比較的良好で、大きな区画を形づくるようにみえる。10面水田跡の様相を継承しながら方位にあわせる畦が増えている。水田面は足跡等の窪みのみ確認され、耕作痕は認められなかった。なお、9面水田跡の南東部のNR1d窪地地形内では畦と同幅の土中金属の浸透差による帯状範囲が検出された(第205図)。上層水田畦の下部が土中金属の浸透等で転写されたものと考えられる。その位置は上層8面水田跡の畦とも異なり、8面水田跡以前に別の水田区画があったことが推測される。

本水田跡の溝跡はSD57、SD58・59、SD60、SD67がある。SD58・59はNR1d窪地地形西岸に位置し、1区中央付近で南へ続くSD67と東へ折れてNR1d窪地地形内へ延びるSD60に分岐する。SD60は10面水田跡SD61・62、SD58・59は10面水田跡SD68の上層にあり、それぞれ継承する用水と捉えられる。

SD57はIX A12～14グリッド周辺の9面水田跡耕作土層下で検出した。N82°W方向に延びる直線的な溝跡で西端は調査区外へ延び、東端は近世水田で削平されて浅く途切れる。幅60cmで長さ約12.8mである。断面U字形で深さ10cmと浅い。周囲の畦と同方向で畦を造成した痕跡と思われる。

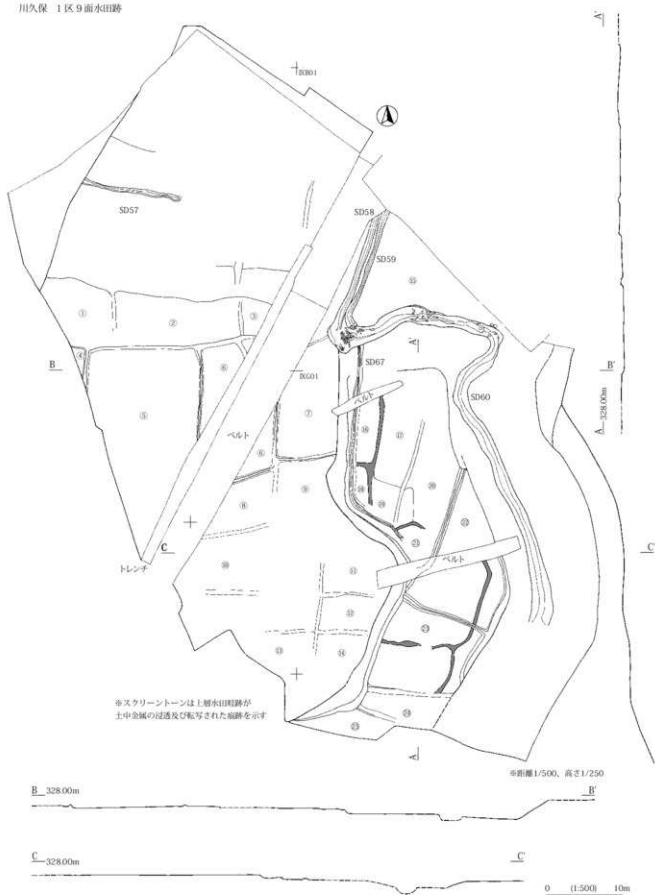
SD58・59はIX B12・16・17・21グリッドにあり、SD58と59が並列する。北部は調査区外へ延び、微高地側から低地へN22°E方向へ延びて南端はSD67と60が分岐する付近まで捉えられた。SD58・59は1区東壁土層観察から、南側SD59から北側SD58へ通り替えられたと捉えられた。SD58埋土は砂を多く含む黄灰色砂質土、SD59が黒褐色砂質土で、洪水砂層埋土のSD58が9面水田跡に伴う溝跡と思われる。調査区内で確認した長さはSD58が14.2m以上で、幅約80cm、深さ約10cmで、SD59は長さ14.6m以上で、幅40～80cm、深さ約10cmである。いずれも断面U字形を呈す。遺物は、SD58から青磁碗1片3gと古墳時代後期～平安時代の土師器241g、不明土器50g、SD59から龍泉窯系画花文青磁碗片1片8g(1463)、珠洲?甕1片54gと古墳時代前期～平安時代の土師器407gが出土し、SD59とSD60接続部から古墳時代後期土師器28gと珠洲すり鉢1片26g(1464)が出土した。

SD60はIX B21～23、G03・08・09・14・19グリッド付近にあり、NR1dの窪地地形中央を南へ流れる。SD58・59、SD67との接続付近から始まり、N75°E方向に折れて東部で大きく蛇行して南部はN26°W方向に直線的に続く。南端は8面SD55が立ち上がる付近まで確認できたが、南端の検出面をやや深く削平してしまい南端の様相は捉えられなかった。調査区内で確認した長さは約66mである。幅は約160～200cm、検出面から底面までの深さは40cmほどで、断面形はU字形を呈し、幅に比して浅い。埋土は砂層や黒褐色土が交互に堆積し、流水があったと捉えられる。埋土には9面水田跡を被覆する砂層は認められなかったが、上層に重なる8面水田跡SD55が本跡上部を削平した可能性がある。SD58・59から分岐する形状から9面水田跡に伴う用水と捉えた。また、北端で礫が集中的に検出(PL27)され、北東部カーブ地点の東岸に護岸施設と思われる数本の杭列が検出された。SD60から1個体と思われるカワラケ6片22g、龍泉窯系蓮弁文青磁碗2片17g、白磁皿2片4g、古墳時代前期～平安時代土師器835g、不明土器109g出土した。カワラケ1個体(1465)を図示した。

SD67はIX B21、G02・07・11・12・17・22、IX L01・02グリッド付近に位置し、SD58・59と

第3章 検出された遺構と遺物

川久保 1区9面水田跡



第207図 川久保1区9面水田跡

SD60 分岐点付近から NR1d 低地西岸脇に沿って N8° E 方向に直線的に伸び、途中から地形に合わせて緩やかに湾曲する。全体的に遺存不良で南端は浅く途切れ、部分的に底部のみしか遺存しない。確認した長さは約 28.4m で、幅は 60cm 前後である。10 面 SD68 を踏襲しながらも、微高地上から流れる SD58・59 から取水するように造り替えられた用水と思われる。出土遺物はない。

9 面水田跡の出土遺物は中世の珠洲すり鉢、青磁碗がわずかにあり、大部分は混入と思われる平安時代の須恵甕・蓋・杯などである。なお、8～9 面水田跡の中間土層で古墳時代後期土器 135g・奈良～平安時代土器 186g、カワラケ 1 片 6g (1479)、白磁碗 2 片 54g (1480・1482)、青磁碗 1 片 7g (1483)、越前と思われる壺 1 片 50g (1478) が出土した。本水田跡の時期は、最も新しい焼物である SD59・60 接続部出土の珠洲すり鉢 (1464) から 14 世紀と思われる。

川久保 1 区 10 面水田跡 1 区 10 面 IX A・B・F・G・K・L 地区 (第 209 図 PL27)

川久保 1 区 10 面水田跡は中央西部の NR06 と南部の NR1d の窪地地形内で検出された。水田域は帯状窪地地形内のみであり、1 区南西部の三角州状微高地や北部の微高地は掘立柱建物跡や竪穴建物跡、畑跡が検出された。南部には洪水土層が厚く堆積しているが、NR06 の窪地地形北西部は砂層の被覆がわずかで水田面が捉えられなかった。この 10 面水田跡は 1 区内である程度広く調査し得た水田跡の最下層にあたるが、NR1d の窪地地形内ではこの水田跡下層に水田耕作土層 2 枚が確認され、水田化された時期はさらに遡る。この下層水田跡は被覆する洪水砂層がわずかで、NR1d の窪地地形内の南部しか遺存しないため面的調査は行っていない。水田区画は NR1d の窪地地形西岸にある SD68 より西側は N8° E 前後か直交方向、SD68 より東側の NR1d 窪地地形内では N62° E や N80° W など地形に合わせた畦が認められる。個々の水田 1 筆は 1 辺 6 × 6 ~ 14 × 8m まで規模に差がある。用水は NR1d の窪地地形内で最低部に SD61、NR1d 西岸に SD68 が配置される。SD61 の北部屈曲部に堰を設けて水位を上げて SD68 へ流していると捉えられ、10 面では SD61 が基軸の用水となっていると捉えられる。なお、SD61 の堰は、SD61 が上層 SD60 と同じ場所に重なっていたため、9 面水田跡調査時に誤って掘り出してしまったが、SD68 が検出された。10 面水田跡では NR1d 窪地地形内に溝跡が認められ、SD62 → SD61 へ変遷し、同じ位置に 9 面水田跡では SD60、8 面水田跡で SD55 へ継承されていると捉えられた。

SD61・62・68 (第 210 図 PL27) は NR1d 内の、IX B21 ~ 24、G03・09・14・19・24 グリッド周辺に位置する。SD61・62 は NR1d 窪地地形内の最低部にあり、SD61 中南部は 9 面水田跡 SD60 と重なっているため 9 面調査時に見誤って両者を一緒に調査したが、SD60 北東端が SD61 とずれていることから別の溝跡と判明した。また、SD62 は北東部のトレンチ調査で SD61 下層で確認され、10 面水田跡より下層の水田跡に伴うと捉えられたが、SD61 と重なる部分が多く併せて調査した。SD68 は 10 面調査時に SD61 の堰脇に検出され、SD61 に関連する溝跡と捉えられた。

SD61 は NR1d の窪地地形の最低部に位置し、北端と南端は調査区外へ延びる。北部は N26° E 方向から調査区内に入って大きく蛇行し、中部から N22° W 方向へ比較的直線的となり、南部は NR1d の傾斜と同じ N28° E 方向に緩やかに折れて調査区外へ延びる。調査区内で長さ約 78.4m を測る。幅は約 230cm で、断面形は北部で逆台形、南部では U 字形となり、深さ 50cm 前後である。埋土は砂質土と黒褐色粘質土が交互に堆積し、流水があったと捉えられる。北部では掘り直された可能性が捉えられた。本跡内の施設には堰と護岸施設がある。堰 (第 208 図) は北部の蛇行する場所にあり、岸脇の木根に横

材の丸木数本の端部を引っ掛け、溝内中央の下流側に打ち込んだ杭でこの横材を固定している。堰のある場所のSD61西岸上にSD68があり、堰で水位を上げてSD68へ用水を流している。護岸施設は堰のある場所からやや下流側の西岸にあり、細長い横材1本を壁に沿って置き、杭で固定する。この護岸施設の場所はSD62と重複する部分に当たり、かつてSD62があった場所の軟弱な岸を補強したものである。出土遺物は中世の青磁碗1片9g、白磁碗1片8gがあり、他に平安時代土器840g、古墳時代後期土器41g、古墳時代前期土器17g、弥生土器12g、縄文土器87g、不明土器46gがある。また、SD60と一緒に調査した北部から平安時代土器7g・不明土器4gが出土した。このなかで縄文土器1個体87g(55)を図示した。

SD62は堆積土層が少ない北端ではほぼSD61と同じ位置に重なるが、SD61北部の護岸施設が検出された付近で大きく西側に蛇行してずれ、中部以南で再び同じ位置に重なってSD61脇にわずかに残存する。南部は途中までしか確認できず、調査範囲で確認した長さは49.0mである。位置が重なるSD61と同様とすれば調査区外まで続くと思われる。幅は部分的にしか残存せず仔細不明だが、北部では140cm前後で断面は逆台形で深さは50cmほどを測る。埋土はSD61同様に黒褐色土と砂が互層に堆積する。本跡内の施設はないが、北部のSD61とずれた場所は幅広くなり、礫が充填されていた。SD61へ造り替えるために礫で埋め戻された可能性がある。遺物はカワラケ3片3g、山茶碗1片42g、珠洲甕3片209g、珠洲壺1片24g、常滑三筋壺2片90g、青磁碗2片20g、白磁鉢類1片3g、白磁碗4片28gがあり、他に古墳時代前期土器132g、古墳時代後期～奈良時代の土師器・須恵器1,929g、平安時代の土師器・須恵器1,016g、奈良～平安時代須恵器48g、時期不明須恵器1427g、不明土器625gと土鍾1点20gがある。このうち、同安窯系青磁碗(1467)、龍泉窯画花文青磁(1466)、白磁Ⅳ類碗(1470)、同Ⅴ類碗(1471)、常滑三筋壺(1468・1472)、山茶碗(1469)、奈良～平安時代と思われる須恵器甕(788-1・2)、土鍾(1515)を図示した。788には線刻が認められる。

SD68はSD61の堰周辺の西岸から認められ、NR1dの窪地地形西岸に沿って位置し、南端は検出時に誤って削平したが、調査区外まで延びると思われる。調査区内では長さ約60mを測る。北部はN3°E方向で、途中で大きく湾曲して南部はN18°E方向となる。幅60～100cmで、深さ約12～20cmを測る。断面はU字形で、埋土は10面水田跡を被覆する洪水土の砂層が入る。出土遺物はない。本跡はSD61に設けた堰で水位を上げて用水を流した溝跡でNR1d窪地地形内西側の水田跡に配水したものである。

川久保1区10面からは白磁碗1片4g、平安時代灰釉陶器・須恵器・土師器等342g、古墳時代後期土器73g、古墳時代前期土器40g、不明土器50gがある。出土土器は少量しかない。

3 中世の遺物

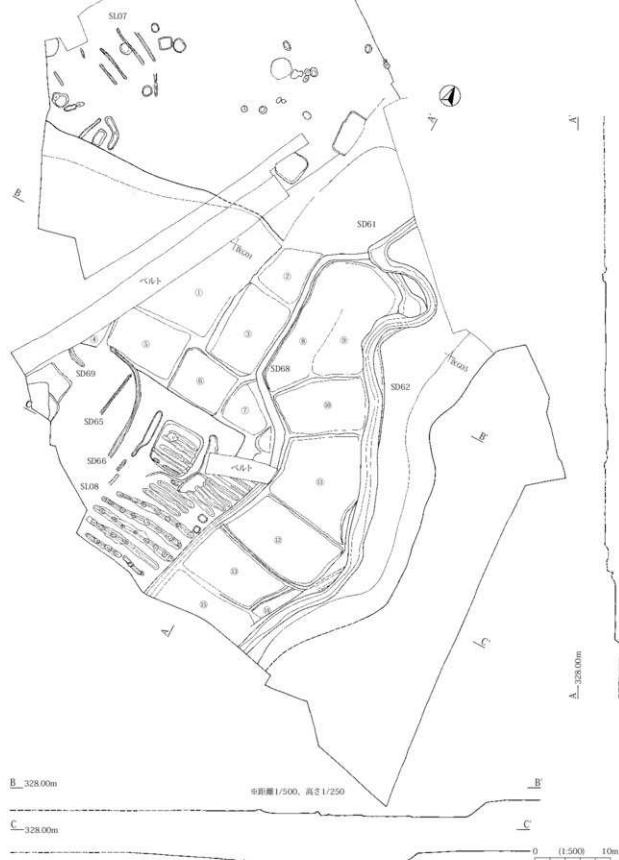
(1) 中世の焼物 (第211・212図 PL61・62)

出土した中世焼物は約306片7,057gと少ないが、川久保1・2・5区、宮沖1・5区など広範囲から出土した。12～13世紀前半のものが多く、14～15世紀前半がわずかで、15世紀中頃から16世紀の焼物は少量ある。良好な一括資料はなく、いずれも小片で少量の出土である。

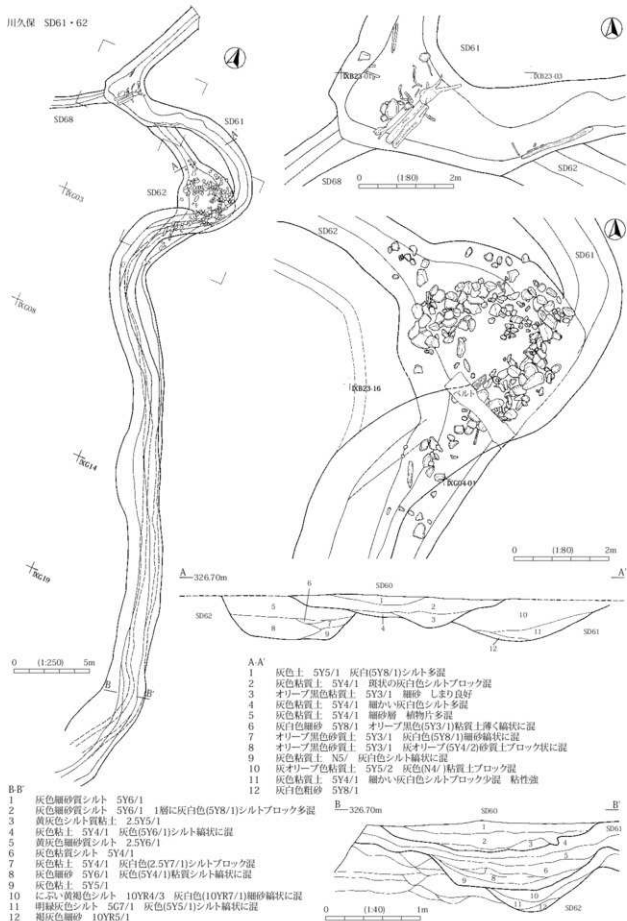


第208図 用水内の堰(川久保SD62)

川久保 1区10 面水田



第209図 川久保1区10面水田跡



第210図 川久保SD61・62

ア 焼物種と器種

中世焼物には中国産磁器、国内産陶器の珠洲・山茶碗・常滑・越前と思われる焼締陶器、古瀬戸・大窯製品、県内で生産されたと思われる土器のカワラケ、内耳鍋、須恵質すり鉢などがある。

中国産磁器 中国産磁器は白磁、青白磁、青磁、青花がある。白磁は体部破片が多く、時期が特定し得ないものも多い。碗16片と皿7片、鉢?1片の合計24片あり、碗は横田・森田氏の分類に照らせば(森田・横田1978)Ⅳ類2片・Ⅴ類5片・Ⅷ類3片で、皿は、Ⅸ類1片、15世紀頃の白磁小皿1片、16世紀と思われる白磁皿1片がある。他に鉢と思われる破片が1片あるが時期の詳細は不明である。白磁は12・13世紀では碗が主体で、15・16世紀は皿が少量ある。青磁は碗のみがあり、同安窯系青磁碗2片、龍泉系青花文青磁碗7片、同蓮弁文青磁碗4片、同無文青磁碗1片、玉縁青磁碗2片、細線蓮弁文青磁碗1片、体部破片で詳細不明な破片を含めて合計26片ある。12世紀後半～13世紀前半頃のものが多く、13世紀後半～14世紀前半や15～16世紀のものが少量ある。ほかには青白磁・白磁合子と思われる破片2片、青花碗1片、青磁香炉1片、褐釉壺1片が出土している。

珠洲 すり鉢13片、壺14片、甕12片、壺・甕不明1片の合計40片ある。これ以外に珠洲と須恵器との識別に迷った破片として壺1片、甕1片がある。すり鉢は吉岡氏の時期区分(吉岡1994)に照らせば、珠洲Ⅰ期1片、Ⅱ期2片、Ⅱ・Ⅲ期2片、Ⅲ期1片、Ⅲ～Ⅳ期1片、Ⅳ期2片で、Ⅴ期以後の所産は確認できなかった。壺類はタタキのT種とロクロ調整で胴部に櫛描文を施すR種があり、珠洲Ⅱ期と思われる破片3片、Ⅲ期1片、Ⅲ～Ⅳ期1片で、小片で壺・甕の識別ができないながらⅡ期前後と思われる破片1片がある。甕は胴部破片が多く、時期の詳細は不明である。珠洲製品はⅠ期がわずかで、Ⅱ～Ⅲ期を中心とし、Ⅳ期のものまで少量出土している。

山茶碗 碗7片、皿1片あり、藤沢氏の編年(藤沢1982b)に照らせば、識別できたものでは粗い胎土の尾張系の4型式山茶碗がある。これ以外に平安時代住居跡出土の灰釉陶器とした破片に山茶碗片との識別に迷った破片がある。東濃産山茶碗や尾張5型式以後と思われる山茶碗は確認できなかった。

常滑(越前) 常滑は三筋壺3片、甕2片あるが、加賀・八尾・越前といった常滑の影響を受けて成立した北陸地域の生産地の製品の可能性もある。常滑とやや異なる胎土の甕器系壺口縁(1478)1片は越前の可能性がある。三筋壺は近接地点から出土したもので、胎土も類似し、同一個体の可能性がある。

古瀬戸 前期様式(藤沢1995a)瓶類1片、後期様式(藤沢1991)Ⅲ・Ⅳ期と思われる平碗2片、小片ながら瓶類と思われる破片2片のみある。長野県で出土する古瀬戸は北部ほど器種も量も減る傾向が知られるが、本遺跡ではこの傾向により小皿類や鉢、すり鉢は出土せず、破片数が少ない。

大窯製品 古瀬戸より出土量は多い。丸皿4片、内ハゲ皿1片、折縁内ハゲ皿1片、天目茶碗1片がある。皿類が多くすり鉢は出土していない。丸皿は口縁部を欠落するため時期の詳細は不明だが、藤沢氏の編年(藤沢1986)に照らせば、他の製品は16世紀後半が中心とみられる。

カワラケ 中世の素焼の土器皿で46片出土し、他に柱状高台杯2片、平安時代後期の可能性もある土師器小椀2片の合計50片ある。本遺跡では12世紀の陶磁器出土から、12世紀の土師器小型杯も含まれると思われるが、県内では当該期の土師器杯類は出土例が少なく様相が不明で抽出しきれなかった。形態的には平安時代後期の土師器杯と類似すると思われ、類似時期の土器ながら平安時代と中世に別に掲載した土器もあると思われる。1459は小さな底部から胴部が斜めに立ち上がる浅い皿形の土器で、川久保SB09～11・44出土品に近い形態で、平安時代後期の可能性もある。また、混入品と思われる宮沖SB10出土1393、宮沖SB07出土の1363・1364は平安時代に掲載したが、12世紀の可能性はある。柱

状高台の杯類は12世紀の所産と思われる。なお、柱状高台杯の1487の底部は、図では高台状に見えるが、底部中央に製作時に生じた空洞がある。後続する時期のものでは川久保1区堅穴建物跡SB22・23・29出土の1433・1434・1436・1437など内湾ぎみに口縁が立ち上がる形態のものがあり、これらは中世のカワラケとして扱った。川久保SB57から同安窯系青磁碗片(1439)が出土し、内湾ぎみのカワラケは12世紀後半頃のものと思われる。なお、川久保SB23から小碗の底部片(1435)が出土したが、同時期のものかは断定できなかった。13世紀のカワラケは手づくねとロクロ調整のものが認められる。川久保SK327から手づくね1443・1444とロクロ調整1445・1446の二者が認められ、川久保SD60は1465などロクロ調整のもののみがある。川久保SD60からの出土量は少なく、ロクロカワラケのみの段階があるとは言い切れない。当該期のロクロカワラケは底径が大きく、内湾ぎみに胴部が立ち上がり、器壁の厚さは均一で、内底面にヨコナデを施す。1486も13世紀の所産と思われる。15・16世紀のカワラケは内耳鍋を出土した宮沖1区1面柱穴や川久保1～5面水田跡出土の1455・1456・1577・1584が該当すると思われる。内湾ぎみの口縁でやや造りが厚い傾向が窺える。1485は16世紀でもやや時期が下る可能性がある。

内耳鍋 口縁内面2カ所に半円形の把手(耳)が付く桶形の器形で、宮沖1区1面と川久保1区の1～5面水田跡等から127片が出土した。中世焼物の破片数で41.5%に当たる。いずれも小片で全体の形を窺えるものはない。口縁形態は外反するもの(1507)、短く外反するもの(1508・1457)、直立ぎみの口縁内面にナデの凹凸を顕著に残すもの(1454・1509)があり、内湾するものは捉えられなかった。長野市周辺で認められる瓦質内耳鍋も今回の調査では出土していない。口縁形態から15世紀後半、16世紀中頃のものがあると思われるが、口縁部以外の破片は15・16世紀の幅でしか捉えられなかった。

在地産すり鉢 県内で生産された須恵質のすり鉢(鋤柄1985)で、調整にロクロを使用せず、外底は砂底で体部はハケ調整後にナデ調整する。識別し得た破片は4片あり、他に可能性がある破片が1片ある。13世紀後半～14世紀前後のものと思われるが、本遺跡では検出面や近世遺構に混在して出土したものであり、時期の詳細は不明である。

イ 焼物の出土状況と組成

中世焼物は少量ずつが散漫に出土し、良好な一括資料に恵まれなかった。ここでは地区・調査面毎と、時期別の焼物の概要を整理する。時期の詳細が捉えきれなかった陶磁器は71片23.2%あり、他にも12～13世紀と思われるカワラケ、15～16世紀と思われる内耳鍋など詳細な時期まで捉えられなかった土器も多い。以下に述べる時期別の焼物破片数は、複数世紀にわたる長い時期幅でしか捉えられない焼物片は除外し、断定はできない可能性がある焼物片を加え、前後の世紀にかかるものは両時期で重複してカウントしたものである。

11世紀末～12世紀前後の土器には小型杯類、罍が全周しない羽釜、直線的な体部の小碗、柱状高台杯などが含まれると思われるが、平安時代後期土師器との識別が不十分で、破片数値は示しにくい。そこで一部の土器を含めた12～13世紀前半までの焼物としてまとめた。該当する焼物破片は合計69片があり、中世焼物の約23%が該当する。内訳はカワラケ4片・柱状高台杯2片、土師器碗と思われる破片2片、13世紀を含むやや長い時期幅でしか捉えられない手づくねカワラケやロクロカワラケが16片、白磁碗はIV類碗2片・V類碗5片・VIII類碗3片の計10片、青白磁・白磁合子2片、青磁碗は同安窯系青磁2片・龍泉窯系画花文碗7片と蓮弁文青磁碗4片・無文青磁碗1片の計14片、山茶碗は碗7片・皿1片の計8片、

珠洲はすり鉢がⅠ期1片・Ⅱ期2片、Ⅱ・Ⅲ期2片、壺（・甕）がⅡ期3片の計8片、常滑三筋壺は3片である。これ以外に時期の詳細を捉えきれなかった白磁・珠洲・常滑片もあるので、実数は多いと思われる。上記のカウントした焼物産地は中国産磁器26片38%、国産陶器19片約28%、残りがカワラケ類24片34%となる。国産陶器の内訳は山茶碗42%、常滑16%、珠洲42%で、東海産と北陸産焼物が近似した比率である。当該期の組成の特徴は青磁・白磁・山茶碗・カワラケなど多様な産地から選ばれた焼物食膳具があって、種類も豊富である。また、貯蔵具も珠洲と常滑壺・甕、調理具は珠洲があり、内面に研磨痕が認められる山茶碗などもすり鉢に利用されていた可能性がある。

当該期では遺構から出土した破片は少ないが、白磁Ⅳ・Ⅴ・Ⅷ類碗は宮沖SK578、川久保SK419から出土し、同安窯系青磁碗は川久保SB57、龍泉窯系画花文青磁碗が宮沖5区1面の柱穴、尾張4型式頃の山茶碗・常滑三筋壺・白磁Ⅳ・Ⅴ類碗は川久保SD62から出土した。また、川久保SK327から手づくね・ロクロカワラケ・白磁碗片が出土し、珠洲Ⅱ期すり鉢は川久保SK1011から出土した。川久保1区10面の遺構は12～13世紀前半の焼物が多く、宮沖1区2面、同5区1面、川久保5区2面の柱穴では11世紀末～12世紀前半頃の土器も含まれる可能性がある。

13世紀後半～14世紀の焼物は白磁Ⅹ類皿1片、珠洲すり鉢4片・壺2片、古瀬戸瓶類1片、在地産すり鉢類5片、上記と重なるが龍泉窯系蓮弁文青磁碗4片、カワラケ16片で最大33片11%ほどに当たる。青磁碗やカワラケを重複してカウントしているので実数は少ないと思われる。当該期のすり鉢は珠洲を中心に在地産すり鉢が加わる。出土状況では、龍泉窯系蓮弁文青磁碗が川久保SD60、川久保SK1677・1710・1752から出土し、珠洲Ⅱ・Ⅲ期すり鉢や壺は川久保1区8面水田跡や川久保SK1260・1261・1099、珠洲Ⅳ期すり鉢は川久保5区2面と川久保SD59・60と川久保1区9面水田跡から出土した。また、Ⅹ類白磁皿や古瀬戸前期様式瓶類片は川久保5区2面検出面で出土した。龍泉窯系蓮弁文青磁碗は川久保1区9面SD60と川久保5区2面から出土し、川久保1区10面からは出土していない。川久保1区9面水田跡は川久保SD59・60出土の珠洲すり鉢1464からも14世紀頃に埋没したと思われるが、造成は13世紀に遡る可能性がある。また、掘立柱建物跡が検出された川久保5区2面でⅩ類白磁皿や蓮弁文青磁碗が出土し、9面水田跡に代表される段丘上方への水田域拡大の一方で、居住域は斑尾川上流域側の川久保5区などに集中するようになった可能性がある。

14世紀後半～15世紀前半の焼物は不明で、15世紀中頃～後半では古瀬戸平碗2片、白磁皿1片、青磁碗2片、内耳鍋3片、カワラケは当該期の可能性がある4片の合計12片、中世焼物の4%ほどしかない。調理具・貯蔵具も欠落し、食膳具もわずかだが、中国産磁器と古瀬戸が類似した数である。16世紀の焼物は火鉢6片・天目茶碗1片の計7片、青花碗1片、細線蓮弁文青磁1片、白磁皿1片、内耳鍋2片の12片で4%ほどしかないが、15・16世紀としか捉えられなかった内耳鍋片多数あって実数は多いと思われる。北陸で多く認められる当該期の越前も確実なものではなく、調理具と貯蔵具は見当たらない。食膳具では東海産大窯製品が輸入陶磁器よりも多く認められる。15世紀の古瀬戸平碗や玉縁青磁碗は川久保1区6面水田跡から出土し、15・16世紀の内耳鍋は川久保1区5面水田跡より上層の水田跡から出土した。また、宮沖1区1面では宮沖SK81・116・168・201・315・461・505、宮沖5区で宮沖SK635、宮沖1区2面で宮沖SK928からも内耳鍋が出土した。宮沖1区1面遺構から多く出土し、15・16世紀の遺構面と捉えられ、宮沖SK928は見逃した1面遺構の可能性がある。また、川久保1区5面水田跡からは唐津すり鉢や青花碗が出土し、16世紀の大窯製品は川久保1区4面水田跡に混じって出土した。

以上から、12～13世紀前半の焼物は川久保1区10面・同2区1面・同5区2面、宮沖1区2面・同5区1面の広範囲で出土しているが、13世紀（後半）前後～14世紀の焼物は川久保1区9面水田跡、同5区2面など限られた地区から出土し、その後、14世紀後半～15世紀前半の焼物が不明瞭である。そして、15世紀の焼物は川久保1区6面水田跡、16世紀の焼物は川久保1区5面水田跡以上から出土し、両者にかかると思われる内耳鍋は宮沖1区を中心に出土している。時期毎に焼物の出土地区が異なる傾向は本遺跡内の土地利用状況と関連すると思われる。

（2）中世の土製品（第213図 PL63）

中世の土製品には土鉢、羽口、埴場がある。土鉢は3点あり、すべて図示した。いずれも細身の円筒形の土鉢で、1514は半分欠損し、その破断面が研磨される。羽口は川久保5区2面から出土し、中世遺構の検出面出土なのでここに掲載したが、中世とする根拠は弱い。埴場は川久保1区SK327から出土し、1520は高温で土器口縁が発泡し、1521は融けた銅鉛滓が付着する。鋳銅に用いられた可能性があり、SK327では鉄製品も出土したことから、金属加工に関わる遺構と思われる。

（3）中世の石製品（第213・214図 PL64・65）

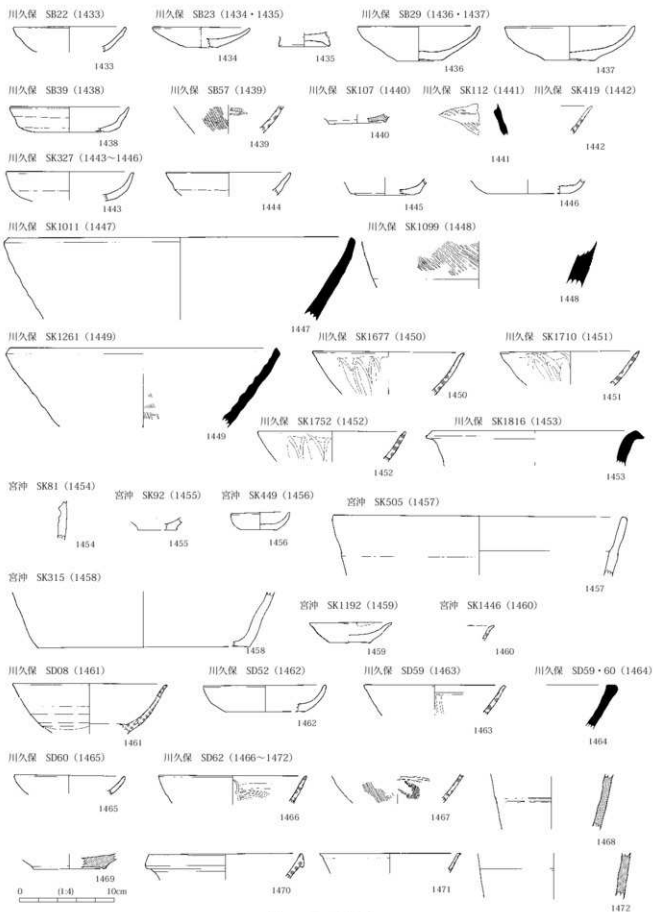
中世の石製品には砥石、削痕のある軽石、凹石、研磨痕のある石、石臼、石鉢がある。砥石1517・1519・1526、1523・1524は中世遺構から出土し、他は検出面やトレンチ出土ながら中世遺構出土砥石と類似した形状・石材で中世の可能性のあるものとしてここに掲載した。長方形断面の小型品が多く、1524のように側面に加工痕をわずかに残すものがある。石材は凝灰岩が多く、1518が粘板岩、1522が砂岩、1523が頁岩、1525が泥岩、1528・1526が安山岩である。なお、1522は途中まで穿孔され、1528は研磨によると思われる線状痕が確認できるが、石全体は研磨されていない。1526は多孔質の安山岩製の大きな砥石である。何の研磨に用いられたものかは明らかにし得なかった。

削痕のある軽石は1531の1点がある。類似した軽石は平安時代の遺構からも出土し、混入の疑いがある。凹石は中世遺構からは1532の1点のみ出土したが、近世で掲載した凹石も中世の可能性はある。安山岩製で凹面の内面は研磨される。1533は凹石状の自然面を残す石だが、一部研磨痕が認められる。

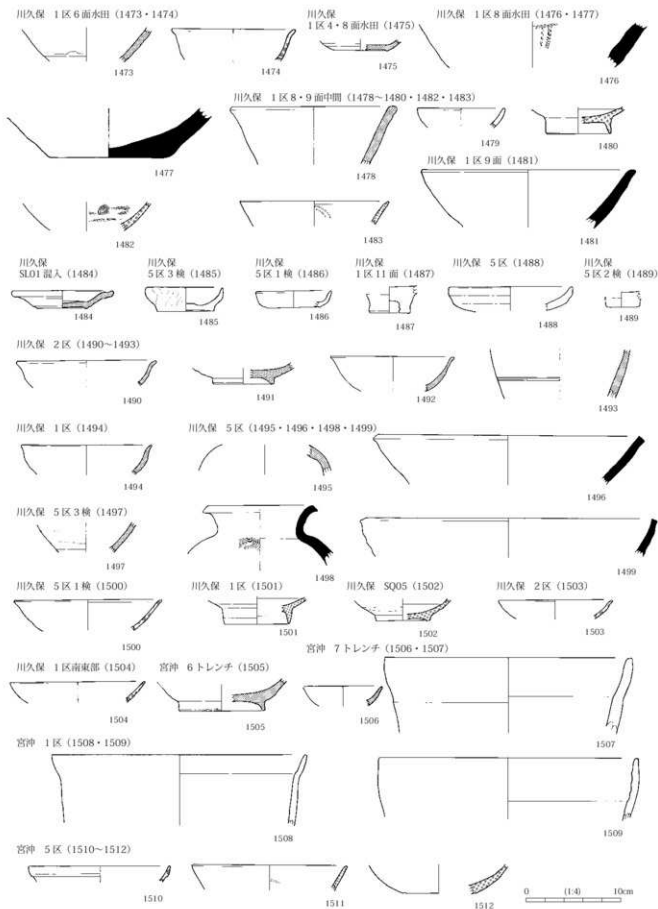
石臼はいずれも安山岩製で、宮沖SK639出土の1536のみ全体形が残るが、他は破片である。石鉢は1540があり、石臼と同じ安山岩製で、内面は研磨で擦り減る。体部外面の中ほどに刃幅が広い鑿、下部は細い鑿の整形痕が残る。また、1534は研磨された平滑面があり、石鉢破片の可能性はある。1534は石鉢のように断面形は弧を描かず一端は厚く、もう一端側は薄い板状で断定はできない。石材は中世石製品に多い黒色多孔質安山岩製である。

（4）中世の金属製品（第214・215図）

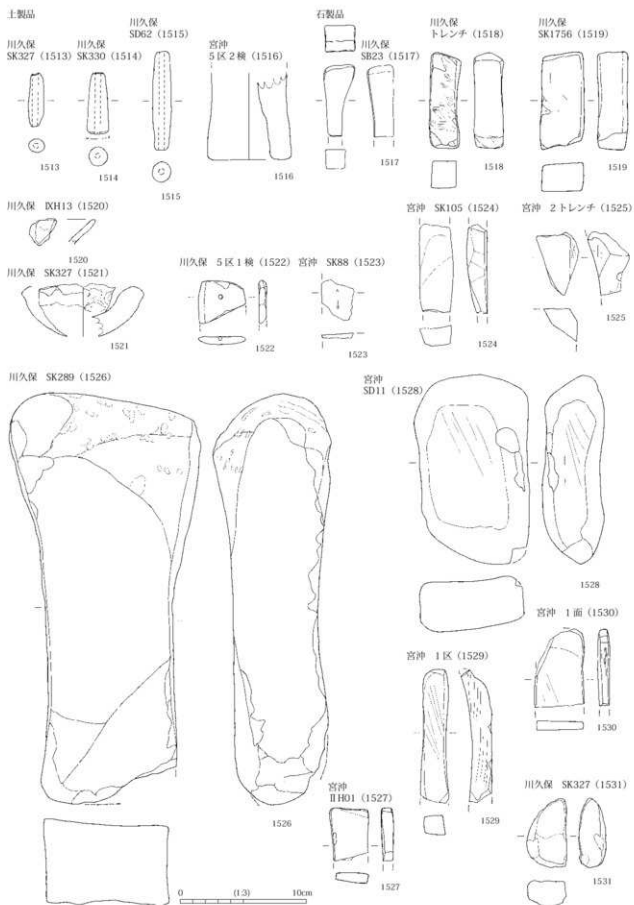
1542がハサミ、1550が釘、1551が短刀、1552が鎌、1554と1562が紡錘車である。1559は鉄鍬だが、破片で混入品の可能性がある。また、1553は鎌と思われる、基部端部を折り返す。1544・1555、1558・1561が棒状鉄製品で、1650は刀子とも思われ、1648・1649は板状鉄製品、1547・1548・1549・1556・1557・1560は鉄塊系遺物か鉄滓片と思われる。埴場を出土したSK327からは鉄釘片も出土している。また、川久保SB57からも鉄滓小片が出土した。



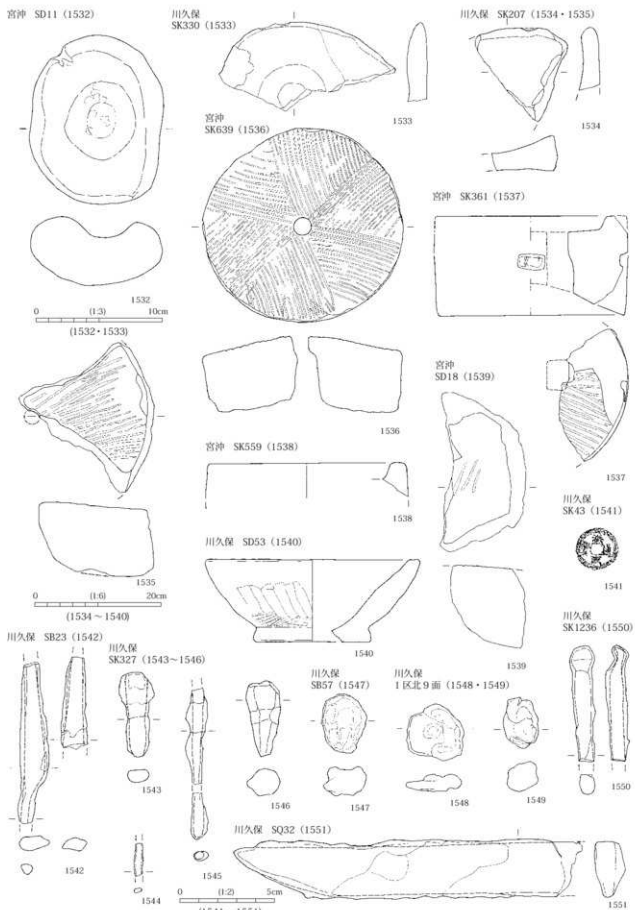
第 211 図 中世埴物 1



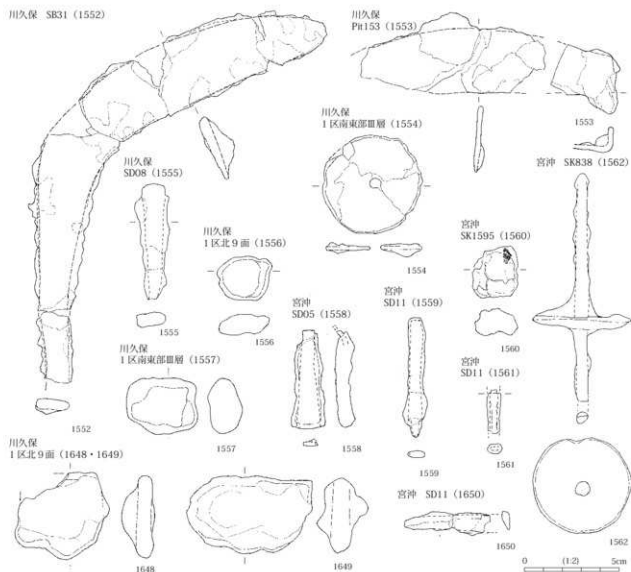
第212図 中世埴物2



第 213 図 中世土製品、石製品 1



第214図 中世石製品2、金属製品1



第215図 中世金属製品2

4. 中世のまとめ

本遺跡では、松本平編年14期(小平1990)前後と捉えた平安時代後期の川久保SB09～11・44に続く遺構は明確には捉えられなかった。しかし、15期(小平1990)に伴うとされる広域流通品の山茶碗や白磁Ⅳ・Ⅴ類が、遺跡内の各地区から出土し、それに続く時期の中世焼物が出土したことから、広域にわたる安定的な遺跡居住者の活動が認められると考えて松本平編年の15期以後を中世で扱うこととした。

この平安時代後期から中世への展開については、平安時代竪穴住居跡も、中世竪穴建物跡も川久保1区10面の千曲川寄りの近い場所に分布すること、さらに平安時代後期の川久保SB10・44での鍛冶が検出や、川久保1区10面のSK327の増場出土から、金属加工に関わる居住者が想定できる類似点があり、関連も考えられる。しかし、川久保SK327が竪穴建物跡居住者と関連する遺構とは言い切れないところもあって、居住が連続するとは言い切れない。特に、中世では耕作地の明確化と継続的な維持、掘立柱建物跡を中心とする大きな違いがある。なかでも耕作地を中核に展開する点は平安時代後期からの単純な連続ではないことを示唆する。

この耕作地を中心とする初源的な景観は川久保1区10面に求められ、ここでは畑地や帯状の水田域を

挟んで掘立柱建物跡が散在する景観が捉えられた。松本平編年の14・15期前後と思われる罫が全周しない羽釜や、口径10cm、高さ2cmを切る小型土器器杯類は、宮沖1・2区や川久保2・5区柱穴周辺の広域で出土した。これらの土器は後続する白磁Ⅷ類や龍泉窯系画花文青磁碗の出土分布域と類似した範囲から出土しており、掘立柱建物跡が散在的に分布する川久保1区10面水田跡と同様の景観が松本平編年の15期前後から生まれた可能性がある。

川久保1区10面ではNR1dやNR06など帯状窪地地形のみに水田域が限られ、その周辺に畑地が広がる景観が捉えられた。畑地が多い可能性がある。それが川久保1区9面水田跡では北部微高地へ水田域が拡大し、それまで存在した居住遺構や畑地が水田域に変わっている。川久保1区9面水田跡の埋没時期は、伴う用水跡SD60出土の珠洲すり鉢1464を珠洲Ⅳ期とみて14世紀と想定したが、下層の川久保1区10面の遺構から13世紀後半の陶磁器が出土しておらず、川久保1区9面水田跡は13世紀後半には形成された可能性がある。この水田域の拡大は段丘上に新たに用水を敷設したことで実現したと思われる、その用水跡とみられるのが宮沖SD09・11である。この水田域拡大の契機は川久保1区10面～8面までの厚い洪水土層にみられる洪水の多発も考えられるが、畑地の減少と水田域拡大という点からは耕地編成を目的としていたと思われる。

一方、居住域だが、13世紀前半までの焼物は広域で出土し、居住遺構は分散的に存在したと捉えられる。しかし、13世紀の龍泉窯系蓮弁文青磁碗は川久保5区と川久保1区でしか出土せず、13世紀後半の白磁Ⅷ類や古瀬戸瓶子も川久保5区のみ出土である。このことから当該期の居住域は川久保5区に限定されたと思われる。川久保5区では区画溝を伴って掘立柱建物跡や柱穴が密集して検出され、これは川久保1区10面や川久保2区1面検出の掘立柱建物跡群には認められない様相で、13世紀後半頃の居住遺構の特徴と言えるかもしれない。

その後、14～15世紀前半までの遺構として川久保1区7面水田跡、それに続く15世紀中頃～後半の川久保1区6面水田跡、16～17世紀を含む川久保1区5面水田跡がある。川久保1区7面水田跡は直接年代を示す出土遺物はなく、上下水田跡年代から推測した年代なので断定できない。14～15世紀前半頃までは遺跡内での出土遺物が少ないこともあり、具体的な水田跡や居住遺構の様相はつかめなかった。ただ、川久保1区5～7面水田跡は洪水土層の被覆がわずかで、水田跡自体が川久保1区NR1dの窪地地形内のみしか遺存しないことから、洪水が少ない環境とは推測された。

その後の様相では、15世紀後半頃から掘立柱建物跡が宮沖1区1面で検出され、宮沖遺跡を中心とする斑尾川上流側が再び居住域になっていることが知られた。一方、耕作地の様相は、川久保1区では15・16世紀頃の洪水土層は確認されず、遺物も近世遺構に混入して出土したのみで様相は不明である。近世の川久保1区4面水田跡では一部が屋敷地となった可能性から水田域が減少した可能性がある。その後、斑尾川記蓋原内の水田跡は近世からと捉えられたことや、近世水田跡と中世水田跡の畦の継承のされ方に違いがあることから、近世に耕作地の再編成や造成が進められたと思われる。

以上のように、本遺跡では中世において耕作地の継続的な維持が特徴と捉えられた。その耕作地は12世紀後半の畑地を中心とする耕作地と居住域が散在する景観から、水田域の拡大と居住域が斑尾川上流側の川久保5区などに集約される方向で展開したと思われる。そして、14～15世紀後半の様相が不明瞭ながら、15世紀後半～16世紀にかけて宮沖1区周辺が居住域になるが、川久保1区では水田域が減少した可能性も考えられる。そして、近世では再び水田域を中心とする耕作地の編成が行われた可能性が知られた。このように、本遺跡では居住域を含めた耕作地編成が数度行われながらも、基本的に耕作地を継続的に維持する志向によって農業に立脚する遺跡であったと捉えられる。

第8節 近世の遺構と遺物

1 近世の概要（第216図）

概要：近世に関わる土層は基本土層Ⅱ層の水田耕作土層に含まれ、現景観同様に段丘上から斑尾川氾濫原内までの大部分が耕作地に利用されたと捉えられる。段丘上では川久保1区のみ洪水土層に被覆された水田面とそのなかに屋敷跡が捉えられたが、他の調査区では耕作関連遺構と思われる土坑や溝跡が若干検出され、川久保5区や宮沖5区では水田耕作土層のみを確認した。また、斑尾川氾濫原では川久保6区、宮沖3・4区のトレンチ調査で洪水土に被覆された水田跡や溝跡が確認された。

検出面と土層：近世の遺構は還元化した灰色系の水田耕作土Ⅱ層に含まれ、川久保3区を除く広い範囲に認められる。しかし、段丘上の大部分では洪水土層に被覆された遺構面は認められず、Ⅰ層に上部を削平されるか、Ⅱ層の連続耕作により畦は遺存せず、古墳時代～中世遺構検出面で溝跡等のみ検出されたところが多い。そのなかで川久保1区では洪水土層で被覆された複数の水田面が良好に遺存し、近世では1～5面水田跡を調査した。1～4面水田跡は比較的広範囲が洪水土層に被覆されるが、その下層の5面水田跡は洪水土層が薄く、千曲川寄りのNR1d窪地地形内のみ遺存する。この川久保1区5面を含む7面までの水田跡はNR1dの窪地地形内のみ遺存し、この間は洪水が少ない環境であったと思われる。4面水田跡以後は洪水土層に覆われた水田面が連続し、居住遺構は認められない。洪水土層は川久保1区千曲川寄りの水田数筆分しか分布しないものも多くあり、すべての洪水土層は把握できなかった。川久保1区4面水田跡は、水田区画の在り方や被覆洪水土層の厚さから千田10区1面水田跡と対応し、その被覆洪水土層は出土焼物から「戊の溝水」（1742）にあたる可能性がある。

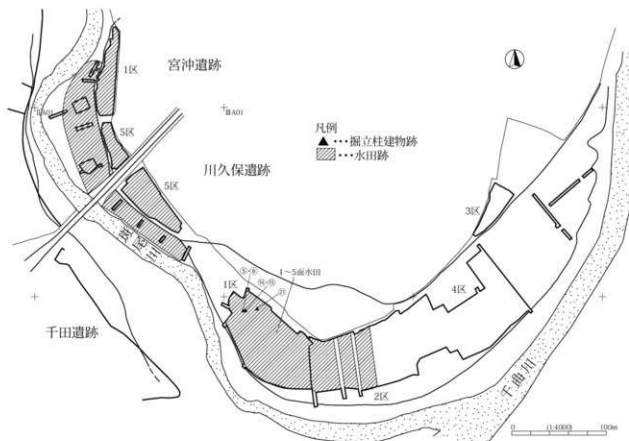
2 近世の遺構

近世遺構には河岸段丘上の川久保1区で近世の屋敷跡と洪水土層に被覆された水田跡1～5面、川久保2・4区で溝跡と土坑数基、宮沖1区1面で溝跡があり、斑尾川氾濫原内の宮沖3・4区や川久保6区では洪水土に被覆された近世水田跡数面をトレンチで確認した。検出遺構の種類や遺存状態が調査区毎に異なるため、地区毎にまとめて報告する。

（1）川久保1区近世屋敷跡（第217図 PL29）

川久保1区北端では、2面水田跡調査時に1面水田跡耕作土層を除去すると中世8面水田跡を被覆する洪水土層が露出し、その上面で掘立柱建物跡や土坑を検出した。遺構は掘立柱建物跡ST05・06・14・15を中心に、その南西側に土坑SK125、117、156、130、123、151、161、286、287が分布し、建物内には屐と考えられるSK108・121が位置する。礎石建物跡は確認されなかった。これらの遺構は一定場所に近接・集中し、縦統的に遺構配置が維持された居住空間と考えて屋敷跡と捉えた。屋敷跡周囲の区画施設は検出されていないが、南・東側は水田域と境を接すると思われる。西側はトレンチおよび調査区外にかかって不明である。

屋敷跡と水田面の関係だが、水田域からの土層が途切れて直接確認できなかったものの、2面水田跡SD43、3面水田跡SD47が掘立柱建物跡ST05・06に重なって位置することから、同時存在は考えにくく、SD47と屋敷内の施設と思われるSK161との重複関係から、屋敷跡は少なくとも3面水田跡以前のものと考えられる。さらに、SK161は4面水田跡畦を切っており、屋敷跡は3・4面水田跡間に存続時期



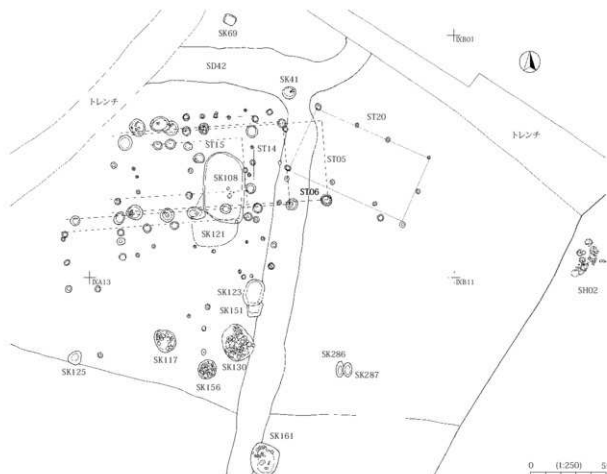
第 216 図 近世の主要遺構分布概略

の一点が捉えられる。ただし、屋敷跡の遺構からは 4 面水田跡の出土焼物より古い 17 世紀の焼物が出土しており、屋敷跡範囲は変化しながらも、その出現は 4 面水田跡以前に遡る可能性がある。4 面水田跡以前に存在するならば、当初は狭い範囲であったが、それが 4 面水田跡を被覆する洪水で埋没した後に SK161 の場所まで拡大した可能性も考えられる。屋敷跡は 3 面水田跡の出土遺物との比較からも、3 面水田跡の時期には消滅したと推測される。なお、遺構図は便宜的に 4 面水田跡に掲載した。

出土遺物は、個々の遺構から少量ずつ出土した近世焼物がある。掘立柱建物跡や土坑出土品を合計すると、唐津呉器手碗 5 片、同刷毛目碗 1 片、同すり鉢 1 片、伊万里碗 2 片、同皿 1 片、越中瀬戸壺 2 片、瀬戸美濃系陶器志野皿 1 片、同灰軸碗 1 片、在土土器焙塔 6 片がある。出土量は少ないが唐津呉器手碗を中心に唐津の比率が高く、すり鉢も 1 個体ながら唐津産である。これ以外に内耳鍋など中世の土器や、越中瀬戸や志野皿など 17 世紀の遺物も混じる。最も新しい焼物は図示していないが、コンニャク判の伊万里碗破片が認められ、屋敷跡の消滅時期は 18 世紀にかかると考えられる。

ア 掘立柱建物跡 (第 35 表)

川久保 1 区北部の近世屋敷調査で検出された柱穴配列を整理作業で検討し、川久保 ST05・06・14・15 を認定した。いずれも西側は調査区外へ延びて規模は不明だが、4 棟は同じ場所に重複して位置し、建て替えの関係と思われる。柱穴の平面形はいずれも円形だが、規模は直径 40～100cm 前後まであり、直径 100cm 前後の大きめの柱穴では柱を固定したと思われる礎が検出された。また、ST05・06・14・15 の範囲内で、梁行方向に細長い皿と思われる浅い窪み SK108・121 が検出された。ST05・06・14・15 以外に建物跡と認定できなかった柱穴があり、SK121 に伴う建物跡も捉えられなかったことから、認定した以上の掘立柱建物跡が存在する可能性がある。さらに、1～3 面水田跡間に削平された川久保 1 区



第217図 川久保1区近世屋敷跡

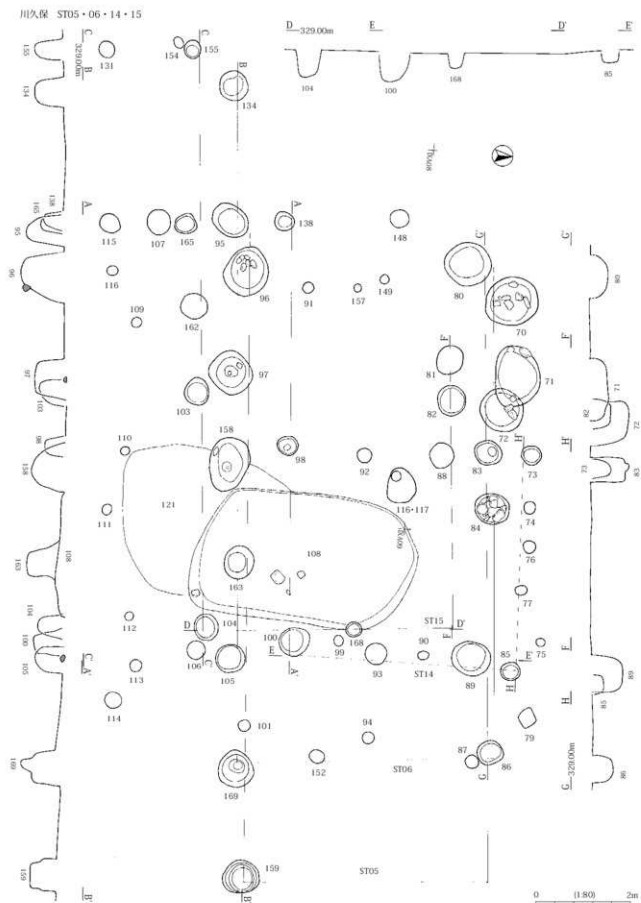
第37表 近世掘立柱建物跡一覧表

遺跡	ST	調査区	地区	柱配置 梁×桁	桁				棟方向	柱穴			
					長さ (m)	柱間寸法 (m)	長さ (m)	柱間寸法 (m)		平面形	平面規模 (平均cm)	底面構高 (平均m)	深さ
川久保	05	1区 2面	IX A 03・ 04・08・09	側柱? 27×3以上	13.0以上	4.0~4.7	5.2	(2.6・2.67)	N85° E	円形	52~114 (80)	327.68~328.20 (327.90)	42~90
川久保	06	1区 2面	IX A 03・ 04・08・09	側柱? 27×4以上	14.4以上	2.9~4.3	5.4	(2.7・2.77)	N85° E	円形	52~94 (75)	327.68~328.14 (327.89)	34~82
川久保	14	1区 2面	II A 03・ 04・08・09	側柱 1×2以上	8.8以上	4.0~4.8	5.2	(2.6・2.67)	N85° E	円形	40~64 (45)	327.94~328.32 (328.16)	26~68
川久保	15	1区 2面	II A 03・ 04・08・09	側柱 17×3以上	12.4以上	3.7~4.9	5.3	(3.2・2.17)	N85° E	円形	32~62 (48)	327.98~328.18 (328.10)	32~60
川久保	20	1区 10面	IX A 04・ 05・09・10	側柱 2×3	8.03	2.28~ 2.92	4.73	2.4・2.33	N24° W	円形	18~43 (30.4)	327.94~328.27 (328.11)	10~25

中央東側の10面検出の柱穴からST20を認定した。出土焼物から近世と捉えたが、ST04・05・14・15と棟方向も形状も異なり、ST04・05・14・15との関係は明確にできなかった。

川久保ST05 1区2面 IX A03・04・08・09 (第218図 PL29)

ST05は長方形に並ぶ柱穴SK80・83・89・159・105・158・96から認定した。北桁行東端柱穴は不明で、北西のSK80はやや浅く平面形も他柱穴と様相が異なる。梁行1間約5.2mで、SK92・93を梁行中間柱穴として梁行2間とも考えたが、他柱穴より小さく、ST05の建て替えと捉えたST06・14も梁行中間柱穴が不明瞭なことから本跡柱穴と認定しなかった。柱穴は円形の平面形で直径75cm、検出面から底面までの深さも最大90cmを測る。遺物はSK96から唐津呉器手碗1片5g、伊万里鯨皮手碗1片2g、在土土器焙烙1片14g、SK89から不明土器1片3g、他に古墳時代後期土師器片が出土した。



第218図 川久保ST05・06・14・15

川久保ST06 1区2面
IX A03・04・08・09 (第218図 PL29)

ST06はST05の西へ約2.5m平行移動した位置にあり、長方形に並ぶ柱穴SK72・86・169・163・97・134から認定した。南桁行柱穴列は比較的明瞭で、北桁行東から2番目柱穴は不明である。西側はトレンチにかかって本跡の規模は不明である。また、厩と思われるSK108と本跡柱穴SK163が重複する。SK163周囲が高く掘り残されておらず、そのままでは

柱が腐りやすいため同時存在の可能性は低い。本跡も梁行1間5.4mと長い、中間柱穴は捉えられなかった。柱穴は平面円形で直径約75cm、深さは検出面から底面まで最大82cmを測り、ST05同様に規模が大きい。SK72から唐津呉器手碗1片4g、SK97から在土器焙烙2片21g、SK134から在土器焙烙1片20gが出土した。

川久保ST14 1区2面 IX A03・04・08・09 (第218図)

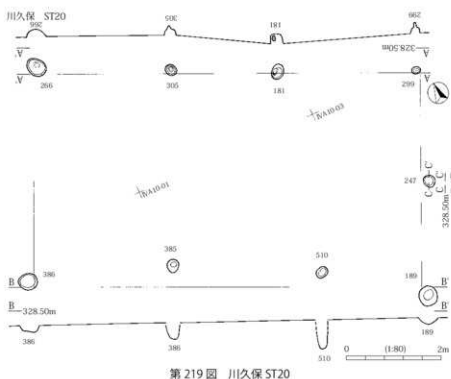
ST14は等間隔にコ字形に並ぶ柱穴SK73・85・100・98・138から認定した。ST05・06とほぼ重なるが、柱穴平面形は円形で、規模は直径約45cmとST05・06より小さく、建物跡規模はST15に類似する。SK85から唐津呉器手碗1片50g(1565)が出土した。

川久保ST15 1区2面 IX A03・04・08・09 (第218図)

ST15はST05・06・14と重なって位置し、西側はトレンチにかかる。直線的に等間隔で並ぶSK104・103・165・155を南桁行柱穴、SK103北直交方向にあるSK82を北桁行柱穴と捉えた。北桁行東端柱穴は不明で、北桁行内に欠落する柱穴がある。また、東端SK104の北直交方向にあるSK168が梁行中間に位置するが、同様の梁行中間柱穴はST05・06・14では捉えられず、本跡の柱穴と認定しなかった。柱穴はST14同様に直径48cm前後と小さく浅い。また、本跡東端に厩と考えられるSK108が収まる。SK108より越中瀬戸壺2片135g(1566)が出土した。

川久保ST20 1区10面 IX A04・05・09・10 (第219図)

川久保1区10面検出のSK266・305・181・299・247・386・189が長方形に並ぶことから認定した。西梁行中央柱穴と南桁行柱穴が不明で、南桁行ラインからやや内側に入って位置するSK385やSK510が該当するとも思われたが、底面標高が他柱穴より低く、別の建物跡柱穴と捉えた。西梁行中央柱穴は不明だが、SK286・186より西側に柱穴は検出されず、西側へは延びないと思われる。SK266から在土器内耳鍋1片4g、SK181から唐津呉器手碗1片168g(1567)が出土し、本跡を近世とした。出土焼物はST05・06と時期的に近いが、棟方向も形態も異なり、その関係は明らかにし得なかった。



第219図 川久保ST20

イ 土坑（第220図 第36表 PL29・30）

近世屋敷跡内の川久保ST05・06・14・15南西側で、屋敷内施設と思われる川久保SK117、123、125、130、151、156、161、286、287の土坑を検出した。他に屋敷跡北東方向のやや離れた場所で川久保SK69を検出したが、屋敷跡の関連施設かは不明である。また、ST05・06・14・15に重なって甃と思われる川久保SK108・121を検出した。SK108は長軸約4.6m、短軸約2.7mの長楕円形の平面形で底面は平坦ながら若干窪む。埋土はブロック土を含み、上部に礫が数個検出された。

近世屋敷内の土坑のなかでSK117・130・156・161は平面形が円形・楕円形で、断面形は長方形で埋土中に礫を多く混じる特徴がある。形状が類似する土坑が近接し、同じ機能の土坑を造り替えたと思われる。SK130は長軸約2.4m、短軸約2.0m、深さ約90cm、SK161が長軸約2.3m、短軸約1.9mで深さ約50cmと規模が大きく、他の土坑と様相が異なる。その底面は下方1.6mほどまで土中金属が溶脱されて還元化した。浅いながら液体を溜める施設であったと思われる。SK161は3面水田跡調査時に検出したが、3面SD47に切られ、3面水田跡以前の所産と思われる。なお、表中のSK161の深さの計測値は3面検出時のものである。SK123、151は重複して位置するが、SK123は埋土が砂質土で開きしていた可能性がある。SK151は炭化物や焼土粒を含む浅い土坑で、SK286・287は長軸1.0m、短軸0.5mほどの楕円形の土坑が2基並ぶが、性格は不明である。1区10面検出しながら唐津片の出土から上面見逃しの近世遺構と捉えた。SK342は1区9面SD42に重なる位置で検出した。出土遺物はないが、埋土や形状から近世柱穴と思われる。出土遺物はSK117から伊万里碗1片5g、同皿1片17g、瀬戸美濃陶器灰釉丸碗1片4g、在地土器焙烙1片13g、SK125から同志野皿1片3g、Ⅲ期唐津すり鉢1片20g、在地土器焙烙1片23g、SK130から唐津呉器手碗1片22g、在地土器焙烙1片10g、SK287から唐津刷毛目碗1片7g、同呉器手碗1片5g、SK125から鉄鍋片(1593)、釘(1594・1596)が出土した。これ以外のSK123・151・156は遺物がない。

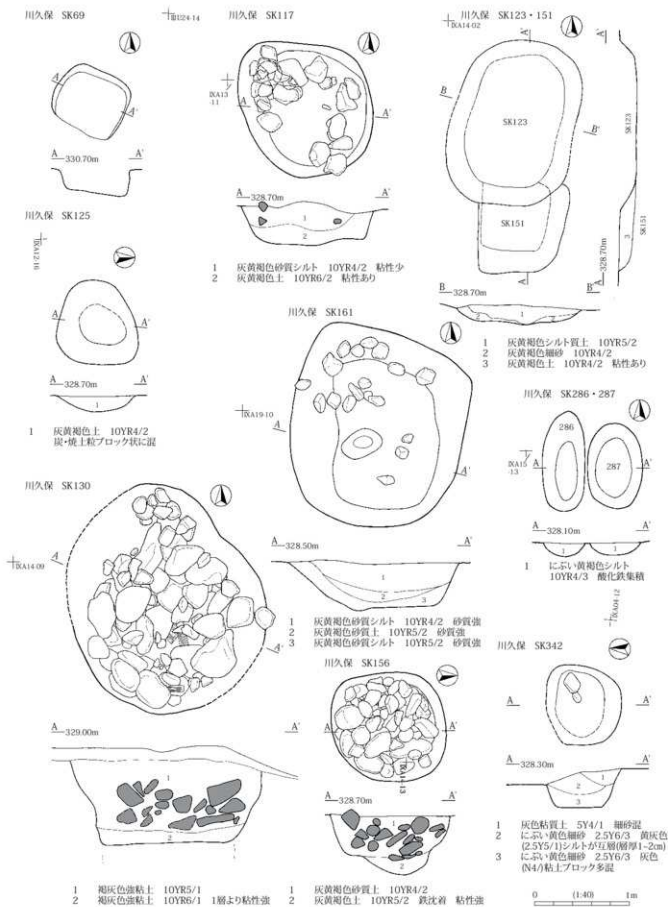
第38表 近世土坑一覧表

遺跡・遺構	調査区 調査面	グリッド	平面形	長軸×短軸 (cm)	断面形	深さ (cm)	埋土の特徴・出土遺物・備考
川久保SK69	1区3・4面	Ⅲ U24	長方形	78×68	U字形	27	遺物なし 他土坑と離れて位置
川久保SK117	1区3・4面	Ⅸ A13	不整楕円形	158×136	逆台形	55	近世6片78g
川久保SK123	1区3・4面	Ⅸ A14	楕円形	178×128	逆台形	18	SK151を切る 遺物なし 埋土中層細砂
川久保SK125	1区3・4面	Ⅸ A12	不整楕円形	92×84	U字形	16	近世5片60g 埋土・焼土・ブロック混
川久保SK130	1区3・4面	Ⅸ A14	不整楕円形	243×200	逆台形	104	近世3片33g 埋土礫多混
川久保SK151	1区3・4面	Ⅸ A14	不整方形?	90×88	逆台形?	17	SK123に切られる 遺物なし
川久保SK156	1区3・4面	Ⅸ A13	楕円形	134×120	逆凸形?	60	遺物なし 埋土礫多混
川久保SK161	1区3・4面	Ⅸ A19	不整方形	207×183	逆台形	46	近世1片10g 埋土礫多混
川久保SK286	1区3・4面	Ⅸ A15	楕円形	106×48	U字形	14	古墳前期7g 見逃して10面検出
川久保SK287	1区3・4面	Ⅸ A15	楕円形	90×58	U字形	12	近世2片12g 見逃して10面検出
川久保SK342	1区3・4面	Ⅸ A04	円形	93×82	逆台形	38	遺物なし 埋土灰色粘土
川久保SH02	1区3・4面	Ⅸ B07	楕円形?	272×108	不明	不明	近世1片17g 火葬墓
川久保SK21	4区1面	X B22	長方形	125×62	不明	不明	弥生中期32g 埋土礫充填
川久保SK22	4区1面	X B22	長方形	120×70	不明	不明	遺物なし 埋土礫充填
川久保SK23	4区1面	X B22	方形	41×39	不明	不明	遺物なし
川久保SK24	4区1面	X B21	楕円形	70×46	不明	不明	遺物なし
川久保SK26	4区1面	X B17	長方形	74×56	不明	不明	遺物なし 埋土礫混
川久保SK25-a	4区1面	X B17	不整方形	62×60	不明	不明	遺物なし 埋土礫充填
川久保SK25-b	4区1面	X B17	長方形	119×82	不明	不明	遺物なし 埋土礫充填
川久保SK27	4区1面	X B16	長方形	158×94	長方形	76	弥生 345g 不明91g 埋土礫充填
川久保SK28	4区1面	X B12	円形	170×160	不明	不明	弥生 21g 埋土上部礫充填
川久保SK29	4区1面	X B13	不整円形	113×102	フラスコ形	54	近世1片10g 平安 11g 不明 16g 埋土礫充填

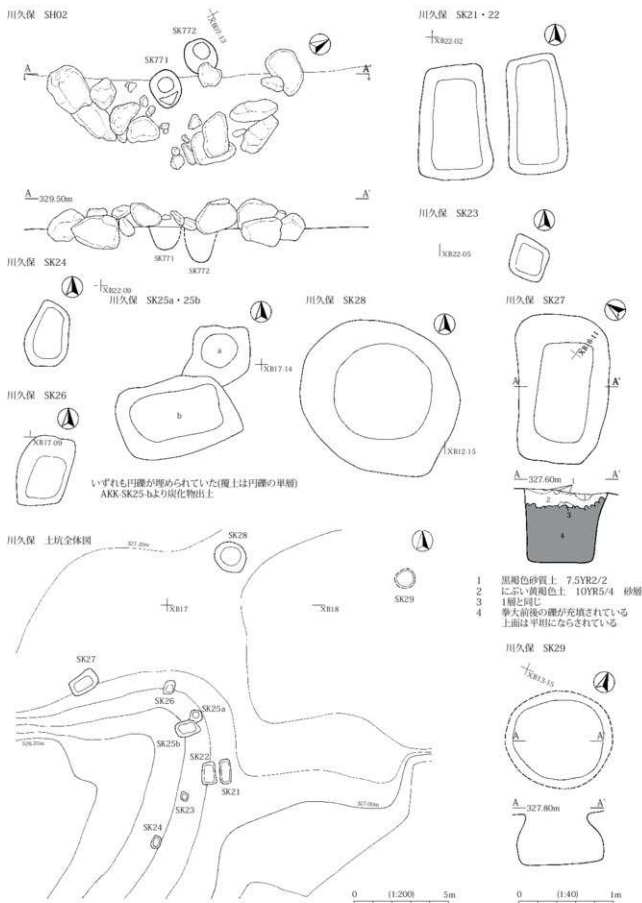
ウ 墓跡

川久保SH02 1区2面 Ⅸ B07（第221図 PL30）

川久保1区中央東西ベルト上の東端付近に位置する。北半分はベルト設定時のトレンチにかかり、南半



第220図 川久保1区近世屋敷跡内の近世土坑



第221図 川久保SH02、川久保4区の近世土坑

分ほどのみ遺存する。川久保1区2面水田跡のやや幅の広い畦脇で検出した。上面には礫が半円形に配置され、その中央に火葬骨を納めた直径0.3～0.4mの円形のSK771・772の土坑2基が検出された。周辺から唐津IV・V期すり鉢や凹石（1588・1590）が出土した。検出面や出土焼物から屋敷跡以後の遺構と考えられるが、便宜的にここに掲載した。

（2）川久保2・4区の溝跡と土坑（第221図 第38表 PL30）

千曲川に面した川久保2・4区で耕作関連施設と思われる溝跡や土坑が検出された。

川久保5D01 2区1面 IX H02・03・07～10（第276・278・280図）

川久保2区北西部のⅡ層中で検出した。東西方向の浅い溝状遺構と認められたが、埋土はシルト質の洪水土を混じり、南壁の立ち上がり不明瞭で水田造成痕か、洪水で埋まった水田跡の残存部分を捉えた可能性もある。川久保2区内の高所にあり、高台まで及ぶ洪水土を埋土とすることや出土遺物から川久保1区1面水田跡以後の所産と思われる。出土遺物は瀬戸美濃磁器染付4片14g、在地窯裏1片4g、瀬戸美濃連房土瓶1片1g、同蓋1片2g、他に古墳時代前期～平安時代土器403gと不明土器864gがあり、鉄製品の楔（1597・1598）を図示した。

川久保5K21～24、25a・b、26～29 4区2面 X B12・13・16・17・21・22（第221図 第38表 PL30）

川久保4区ではトレンチ調査で1面遺構が確認されなかったため、2面検出面まで掘り下げて調査したが、南西部でSK21～24、25a・b、26～29の10基の土坑を検出した。平面形は円形・長方形・不整形長方形で規模も1辺0.4～1.6mとさまざまだが、いずれも礫が隙間なく充填されている。遺物はSK29より肥前陶胎碗片1片10gが出土し、近世の遺構と判明した。本跡は耕地内の礫を埋めて片付けた遺構と思われる。なお、川久保2区にも円形土坑川久保SK13などが散在的に検出されたが、本跡のように礫を充填しておらず、群としてまとまらない。また、近世の遺物もないので中世の土坑と捉えた。

（3）川久保1区1～5面水田跡（第39表）

川久保1区のⅡ層上部で、千曲川洪水土層に被覆される近世水田跡1～5面を調査した。1～4面水田跡は5面水田跡より厚い洪水土層に被覆されて広い範囲を調査し得たが、5面水田跡はNR1dの窪地内のみしか残存しない。ただし、1～4面水田跡の被覆洪水土層も畦上りまで覆うものはわずかで、一筆毎の畦で洪水土層が途切れ、1～4面間には千曲川寄りの水田跡数筆のみ被覆する部分的な洪水土層もある。そうしたなかで、同一調査面を覆う洪水土層を認定する方法が課題であったが、調査では被覆洪水土層の層厚や、同じ畦構造、溝跡との関係を勘案しながら同じ洪水土層を特定した。また、中央ベルトの土層から順次洪水土層を追って掘り広げて畦を検出し、その畦を共有する上下方の水田面を覆う洪水土層を同一面と捉えた。同じ畦区画の水田面で複数の洪水土層の被覆が認められる場合は、その最下層の洪水土層被覆面を同じ調査面と捉えた。このように、各水田面は厳密には同一



第222図 同所に重なる近世水田跡畦（川久保1区）

第39表 近世水田跡面積計測表

水田No	遺跡	地区名	平均㎡	水田No	遺跡	地区名	平均㎡	水田No	遺跡	地区名	平均㎡
1	川久保	1区1面	(37.6以上)	7	川久保	1区2面	(145.3以上)	21	川久保	1区3面	(186.4以上)
2	川久保	1区1面	(160.8以上)	8	川久保	1区2面	401.6	22	川久保	1区3面	52.4
3	川久保	1区1面	112.4	9	川久保	1区2面	283.2	23	川久保	1区3面	61.5
4	川久保	1区1面	(253.7以上)	10	川久保	1区2面	(68.9以上)	24	川久保	1区3面	44.1
5	川久保	1区1面	136.1	11	川久保	1区2面	(64.5以上)	25	川久保	1区3面	44.3
6	川久保	1区1面	(164.9以上)	12	川久保	1区2面	(49.9以上)	26	川久保	1区3面	(82.3以上)
7	川久保	1区1面	(183.9以上)	13	川久保	1区2面	(147.7)	27	川久保	1区3面	(140.1以上)
8	川久保	1区1面	(37.5以上)	14	川久保	1区2面	149.2	1	川久保	1区4面	139.6
9	川久保	1区1面	(105.3以上)	15	川久保	1区2面	201.2	2	川久保	1区4面	(177.5)
10	川久保	1区1面	(205.3)	16	川久保	1区2面	149.3	3	川久保	1区4面	(75.3以上)
11	川久保	1区1面	(175.9)	17	川久保	1区2面	84.9	4	川久保	1区4面	(150.3以上)
12	川久保	1区1面	178.3	18	川久保	1区2面	(174.3以上)	5	川久保	1区4面	162.5
13	川久保	1区1面	216.0	19	川久保	1区2面	(34.9以上)	6	川久保	1区4面	(313.5)
14	川久保	1区1面	121.6	20	川久保	1区2面	78.9	7	川久保	1区4面	(217.7)
15	川久保	1区1面	158.8	21	川久保	1区2面	(42.3以上)	8	川久保	1区4面	(296.3)
16	川久保	1区1面	(58.1以上)	22	川久保	1区2面	(121.5以上)	9	川久保	1区4面	(26.7以上)
17	川久保	1区1面	(232.8以上)	23	川久保	1区2面	(183.7以上)	10	川久保	1区4面	(97.6以上)
18	川久保	1区1面	(243.7)	24	川久保	1区2面	(247.5)	11	川久保	1区4面	(133.1以上)
19	川久保	1区1面	67.1	1	川久保	1区3面	97.3	12	川久保	1区4面	(267.1以上)
20	川久保	1区1面	163.2	2	川久保	1区3面	(150.7)	13	川久保	1区4面	307.6
21	川久保	1区1面	132.7	3	川久保	1区3面	(74.8)	14	川久保	1区4面	268.7
22	川久保	1区1面	73.2	4	川久保	1区3面	(89.5以上)	15	川久保	1区4面	(60.4以上)
23	川久保	1区1面	181.5	5	川久保	1区3面	(172.7以上)	16	川久保	1区4面	78
24	川久保	1区1面	(62.4以上)	6	川久保	1区3面	(149.9以上)	17	川久保	1区4面	(192.1以上)
25	川久保	1区1面	(57.9以上)	7	川久保	1区3面	189.3	18	川久保	1区4面	51.7
26	川久保	1区1面	(48.3以上)	8	川久保	1区3面	198.9	19	川久保	1区4面	292.9
27	川久保	1区1面	(159.5以上)	9	川久保	1区3面	(411.5)	1	川久保	1区5面	46.5
28	川久保	1区1面	(124.4以上)	10	川久保	1区3面	(262.3)	2	川久保	1区5面	102.7
29	川久保	1区1面	(174.9以上)	11	川久保	1区3面	(47.2以上)	3	川久保	1区5面	199.1
30	川久保	1区1面	235.1	12	川久保	1区3面	(112.0以上)	4	川久保	1区5面	252
31	川久保	1区1面	(170.0以上)	13	川久保	1区3面	111.2	5	川久保	1区5面	67.5
32	川久保	1区1面	(134.5以上)	14	川久保	1区3面	(18.4以上)	6	川久保	1区5面	(82.4)
1	川久保	1区2面	84.1	15	川久保	1区3面	171.3	7	川久保	1区5面	148.8
2	川久保	1区2面	(210.4)	16	川久保	1区3面	(72.4以上)	8	川久保	1区5面	(51.2以上)
3	川久保	1区2面	(163.2以上)	17	川久保	1区3面	199.1	9	川久保	1区5面	116.4
4	川久保	1区2面	(157.2以上)	18	川久保	1区3面	(139.3)	10	川久保	1区5面	(165.1以上)
5	川久保	1区2面	(165.1以上)	19	川久保	1区3面	109.3				
6	川久保	1区2面	(159.6以上)	20	川久保	1区3面	118.5				

洪水上層で被覆された水田面と特定し得たものではなく、同じ区画が維持された一定の時間幅を含む。

近世水田面のなかで、最も古い様相が捉えられたのが川久保1区5面水田跡である。5面水田跡は川久保1区南東部のNR1dの窪地内だけに遺存し、NR1d周囲は上層の水田耕作で削られて遺存しない。出土遺物は16世紀の焼物もあるが、わずかに唐津すり鉢(1579)が出土し、上層の4面水田跡と重なる畦があることから17世紀前後の水田跡と捉えた。近世の水田跡が広域に捉えられたのはその上層の4面水田跡である。4面水田跡は傾斜方向に通りの良い南北方向の畦で区切り、そのなかを比較的等間隔に等高線と平行する湾曲した東西畦で区画する。水田1筆は方形ではないが、同一規格によって区画されている印象を受ける。この様相は千田10区1面水田跡も類似し、ほぼ同時期の水田跡と思われる。3面水田跡以上では洪水上層の枚数も層厚も増え、川久保1区屋敷跡は消滅して水田跡に変わっている。また、3面以上では畦の接続する場所が微妙にずれて通りが悪く、1筆毎に畦が修築されているように見受けられる。しかし、基本的に近世水田跡は畦が類似場所に重なってその位置を固持する指向が強く、畦位置がずれるものが多い中世水田跡とは異なる(第222図)。

畦の構造では3～5面水田跡畦は土を盛り上げたものしかないが、2面水田跡には下端に杭を伴う畦、1面水田跡で20～30cm大の河川礫を芯に入れた石芯畦(第225図)が川久保1区北部に多く認められた。杭を用いた畦は杭間に枝等を編み込んで土留めとしたものと思われ、千曲川寄りの段丘縁付近のやや

急傾斜地の比高差が大きな畦下端に認められる。

水田跡内の施設として用水がある。用水は1～3面で確認され、4・5面では確認されなかった。中世7～10面では用水が認められるが、中世後半期の6面で減少し、その後途絶している。そして、3面水田跡から用水が出現し、1～3面では1区北西部の高台に認められる。このなかでSD42は近代の揚水ポンプ場からの取水用水に重なっており、近代の所産とも考えたが、SD42から取水するSD41に重なって2面SD43、3面SD47が検出され、揚水ポンプ場から取水する以前に段丘上方から流れる用水が存在すると捉えた。これらの1～3面の用水は高台にある川久保1区北西部の水田を灌水し、順次川久保1区南東部のNR1d低地へ向かって水口を通して配水したと思われる。

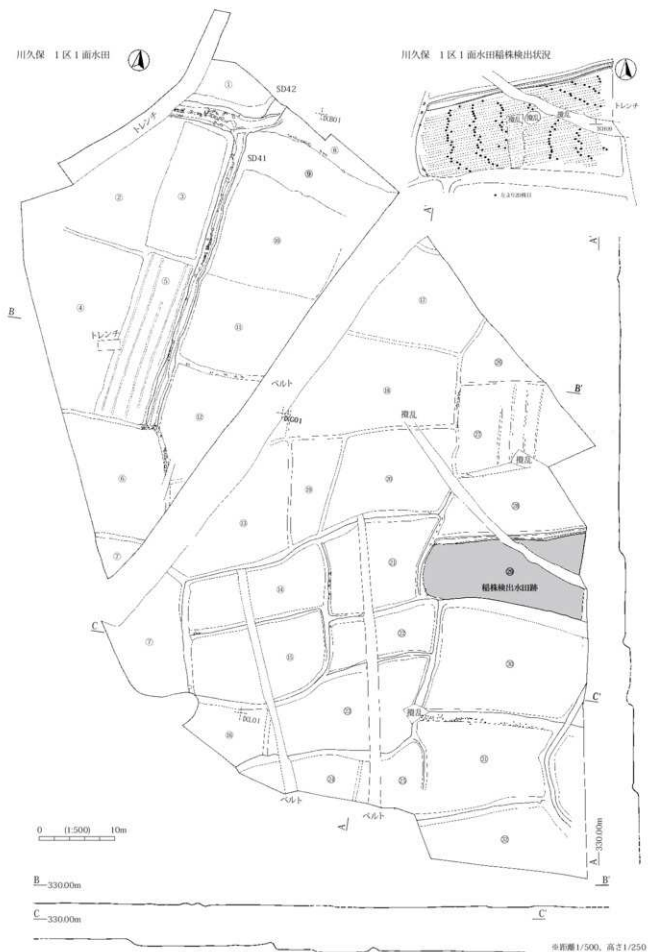
各水田面では足跡等の浅い窪みしか認められないものが多いが、1～3面水田跡では畑の畝間溝と類似した平行溝が検出された。1面では北部の一部の水田跡のみ、2・3面は中央付近に認められ、1面の畝間溝状の溝は間隔が広く、2・3面は間隔が狭く複数の溝が重なる。なお、1区中央ベルトを挟んだ1筆の水田面内のベルト北側は3面水田跡、ベルト南側は2面水田跡で畝間の溝状の溝が検出された。2面水田跡から掘り込まれた溝跡が3面水田跡に達した可能性もあるが、ベルト北側の洪水砂層の対比を見誤った可能性が高い。これらの平行溝群の性格は不明ながら、4面水田跡以下には認められず、1～3面水田跡も千曲川寄りの低い場所には認められない。3面水田跡から鉄製馬鋤歯(1604)が出土したが、馬鋤耕作痕としては間隔が広く、長方形水田の短辺方向の溝もあって断定できない。また、二毛作や早害時の畑作転用の可能性についても確証は得られなかった。

川久保1区1面水田跡 1区1面 III U、IX A・B・F・G・H・K・L・M地区 (第223図 PL28)

川久保1区中央ベルト脇のトレンチ土層観察で、基本土層II層上部に比較的厚い洪水土層で覆われた水田面を確認し、善光寺地震に伴う洪水時に埋没した水田跡と予想して調査したが、近代の所産と判明した。水田跡は千曲川へ向って低くなる緩斜面に階段状の水田を造成し、中央ベルトより北側の高い場所は洪水土被覆がわずかで部分的にしか検出できなかった。また、南端の水田跡では1面水田跡耕作土層が上層水田面に削平されたと思われ、2面に特徴的な杭の痕跡を残す畦が検出された。

水田区画では、中央東側に位置がずれる畦があるが、全般的に2面水田跡畦と類似位置にある。また、傾斜方向に近い南北方向の畦の通りは比較的良好だが、一筆毎に接続部分がずれて十字に交差するものは少ない。畦は畦芯に石を埋め込んだ石芯畦(第225図)が認められたが、すべての畦では認められず、個々の水田毎に設置されたと思われる。水田面では足跡等の浅い窪みしか検出されなかった水田面が多いが、北部のSD41西側の一筆の水田跡では浅く平行する溝が検出され、中央東よりの水田跡一筆では稲株痕が捉えられた。稲株痕は長さ21m×幅10mの水田内に20～30cm間隔に長さ20mほどの稲株列が34条ほど捉えられた(第223・226図)。稲株列は傾斜上方の北畦と平行し、不整形な南東部は短く平行するように隙間を充填している。稲株の間隔は、20株分で最大3.2m、平均で2.5～2.6mの長さを測り、平均13～14cm間隔に植えられている。用水は調査区北部の高い場所にSD41・42があり、南東隅に1面水田跡畦と一致する場所に現在の用水が重なる。1面水田跡では洪水に被覆された溝跡は確認されなかったが、この用水も1面水田跡に存在した可能性がある。

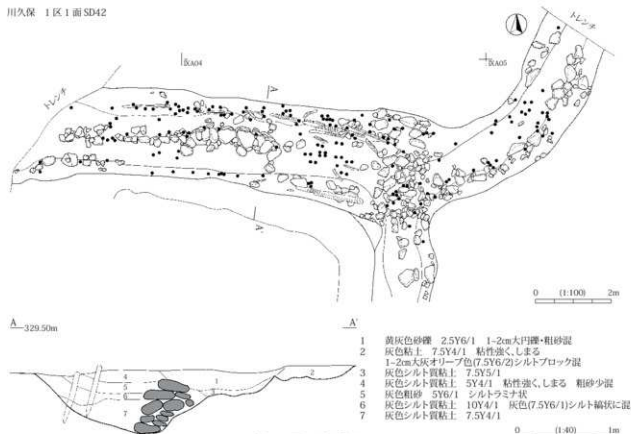
SD41・42(第224図 PL28)は1区1面のIX A03・04・05・09・14・19・24グリッドに位置する。SD42は幅広い規模から幹線用水とみられる。SD42は近年まで存在した揚水ポンプ場からの用水の位置に重なるが、本跡から水田域へ分岐するSD41の下面には2面のSD43、3面のSD47が確認され、揚水ポンプから取水する以前は段丘上方から取水したとみられる。SD41との接続する以西では低い石積み



第 223 図 川久保 1 区 1 面水田跡

伴っており、埋没して浅くなると杭と横木を用いた護岸に変化し、最後に流路を南側へ移して杭で護岸されたかと捉えられた。石積み以前の形態は不明だが、石積みがないSD41接続部以東の様相から、浅い溝跡であった可能性がある。SD42からはガラス片や土人形、近代の焼物、近世の焼物が出土した。唐津は呉器手碗1片16g、同碗2片155g、同小椀1片8g、同皿1片41g、同すり鉢3片83gなど計8片、伊万里は碗3片7g、同小碗1片21g、同皿4片14g、同そば猪口1片19g、同鉢等3片10gで計12片、肥前陶胎碗3片19g、瀬戸美濃陶器は灰釉碗1片3g、同鉢1片69g、同瓶掛1片202g、同こね鉢1片5g、同土瓶1片10gなど計5片、瀬戸美濃磁器染付は碗14片176g、同小椀2片52g、同皿3片25g、同湯のみ1片28g、同酒杯1片7gで計21片、在地窯製品は土瓶1片6g、片口1片2g、徳利1片3g、蓋1片14g、すり鉢2片226g、壺7片2,320gの計13片、産地不明陶器は壺1片5g、在地産土器は焙烙18片251g、同火鉢2片48gがある。他に古墳時代後期～平安時代土器93gと不明土器78gが出土した。下層の近世屋敷跡に隣接する場所で近世屋敷跡の焼物も混入するが、V期伊万里、瀬戸美濃磁器染付、在地窯製品・在地土器が多い。瀬戸美濃磁器染付碗(1571)、唐津呉器手碗(1572)、在地土器焙烙(1573)、在地窯壺(1570)、櫛(1601)、簪(1605)、煙管吸口(1602-1603)、銅銭(1607～1612)を図示した。

川久保 1区1面SD42



第224図 川久保SD42

SD41はSD42から取水し、1区中央西南端水田までN10°E方向に約40m直線的に続く。中央付近の西岸に長さ20cmほどの河川礫を1～2段積んだ石積みが認められ、その裏面は灰黄褐色土で充填されていた。幅60～70cmで断面形は西岸が緩やかなU字形で深さ約20cmである。埋土は底面上に粗砂を含むふい黄褐色土、その上層にブロック土を混じる埋め土が載る。出土遺物は越前すり鉢1片95g(1569)、在地窯香炉?1片17g、越中瀬戸壺類1片4g、伊万里小瓶・碗2片15g、中世土器すり鉢1片9gや凹石(1591・1592)、磨石(1589)、釘(1599)が出土した。

川久保1面水田跡出土焼物には、瀬戸美濃磁器碗6片21g、同皿2片5g、同徳利1片2g、同蓋1片4gや在地窯土鍋1片6g、同焙烙2片27g、伊万里碗2片18g、同皿1片5g、同青磁碗1片4g、唐津皿1片2g、同碗1片4g、同呉器手碗2片5g、同鉢1片6g、肥前陶胎碗1片7g、産地不明磁器4gである。これ以外は混入と思われる中世内耳鍋52gと平安時代土器18g・不明土器17gが出土した。産地・焼物種別では瀬戸美濃磁器染付10片、在地窯製品2片、在地産土器2片、伊万里4片、唐津5片、肥前陶胎碗1片で、食膳具を中心に瀬戸美濃磁器染付が半分以上を占める。また、石盤片が出土した。石盤は明治5年の学制施行以後、県内では明治8・9年には用いられたことが知られ、川久保1区1面水田跡の上限年代は明治5年と捉えられる。また、川久保1区1面水田跡と同様に瀬戸美濃磁器染付を出土した千曲川沿いの洪水土層で被覆された水田跡として長野市石川条里遺跡12区近世面がある(県埋文1997)。石川条里遺跡12区近世面では明治20年代中頃作製の旧公園には一致しない畦が確認されたことから公園が整備される以前と推測される。この洪水土層が本遺跡1面水田跡を被覆する洪水土層と同じとすれば、川久保1区1面水田跡は明治20年代中頃を下限とする、明治5～20年代の所産と推測される。



第225図 石を芯材とする畦(川久保1区1面)



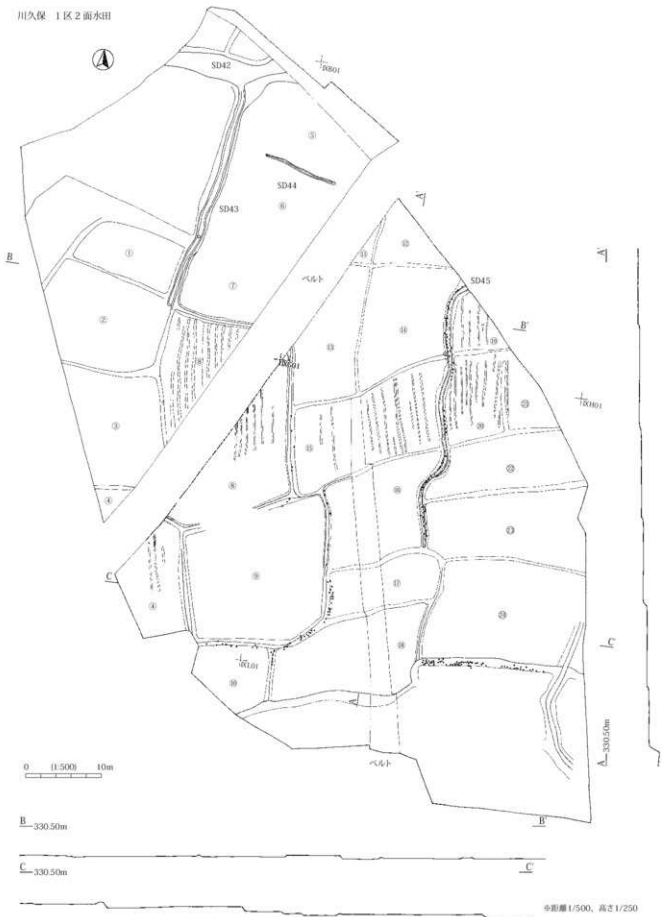
第226図 稲株痕検出状況
(川久保1区1面水田跡 稲株はマーキングしている)

川久保1区2面水田跡 1区2面 III U、IX A・B・F・G・H・K・L・M地区 (第227図 PL28)

川久保1区1面水田跡下層に認められた洪水土層を除去して検出した。1面水田跡同様に千曲川に向かって傾斜する地形上に階段状に水田を造成する。洪水土層は1区北部の高台までは及ばず、北部は1面耕作土層を除去したところで8面水田被覆砂層が露出して近世屋敷跡の遺構群が検出された。この屋敷跡は上述したように3～4面前後のもので、本水田跡に伴わないと考えられる。また、千曲川寄りの最下段水田面は杭痕跡が検出され、類似した畦は2面水田跡に特徴的に認められるので、1面水田跡以上の耕作によって2面水田跡耕作土層は削平された可能性がある。

2面水田跡の区画は1面と類似するが、中央東より南北方向のSD45があり、その周辺の区画が異なる。区画はほぼ傾斜方向の南北方向の畦が長く続くが、直線的ではなく水田区画毎に畦が湾曲、蛇行して通りは悪い。土を盛り上げた畦が多いが、千曲川寄りの段丘縁辺の傾斜面にかかる南部では畦下やSD45の岸際に杭跡の小円形の落ち込みが密集して検出された。杭跡は間隔をあけて点在するものもあるので、杭間に枝等を編み込んで土留めとしたものと思われる。調査区中央部付近の水田面で畝間溝状の平行する溝が多数確認された。調査区中央のベルトにかかった一筆と思われる水田跡では、ベルト南部は2面、北部は3面で畝間溝状の溝を検出した(第230図)。本来2面で掘り込まれた溝が3面に達したとも考えたが、2・

川久保 1区2面水田



第 227 図 川久保 1 区 2 面水田跡

3面水田跡では畦位置が変わらないため、ベルト北側は調査面を見誤って掘り下げ足りなかった可能性が高い。水田内の配水は、西側は1面SD41と重なる位置にあるSD43が中央西端水田跡に流れ込み、そこから低い南東方向へ水口を介して配水し、東側のSD45脇にある水田跡はSD45から取水する。他に浅い溝跡SD44が検出されたが、畦の造成痕と思われる。

SD43は1面SD41とほぼ重なってIX A04・09・14・19・24グリッドに位置する。北端はSD42から分岐し、南端は中央西寄りの水田跡まで直線的にN10°E方向に約31m延びる。幅約80～100cmで深さ約15cmの浅いU字形の断面形で、埋土は砂層である。護岸施設は伴わない。出土遺物は唐津碗1片11g、伊万里碗1片5g、在土土器焙烙2片59gあり、他に古墳時代後期～平安時代土器20g、不明土器2gがある。

SD45は1区東部のIX B18・23、G03・08・13グリッドに位置する。2面のみで確認された傾斜方向の溝跡で、全体的にN2°W方向に若干蛇行しながら約36m続く。幅約20cmで残存する深さは4cmほどと浅く、カーブする蛇行部分を中心に小円形の護岸杭と思われる痕跡が認められた。本跡中央南寄りの蛇行する場所の畦上には溝跡と思われる浅い窪みが見つかり、1面水田跡には残存しなかった2面水田跡以後の造り替えの溝が存在すると思われる。それに伴うと思われる杭跡は2面水田畦上で検出された。出土遺物は唐津呉器手碗1片4g、肥前陶胎碗2片11gがある。

SD44は1区北部のIX A10、B06グリッドにあり、N73°W方向に直線的に延びる長さ約10mほどの溝跡で、等高線方向に延びることから畦造成痕と捉えた。

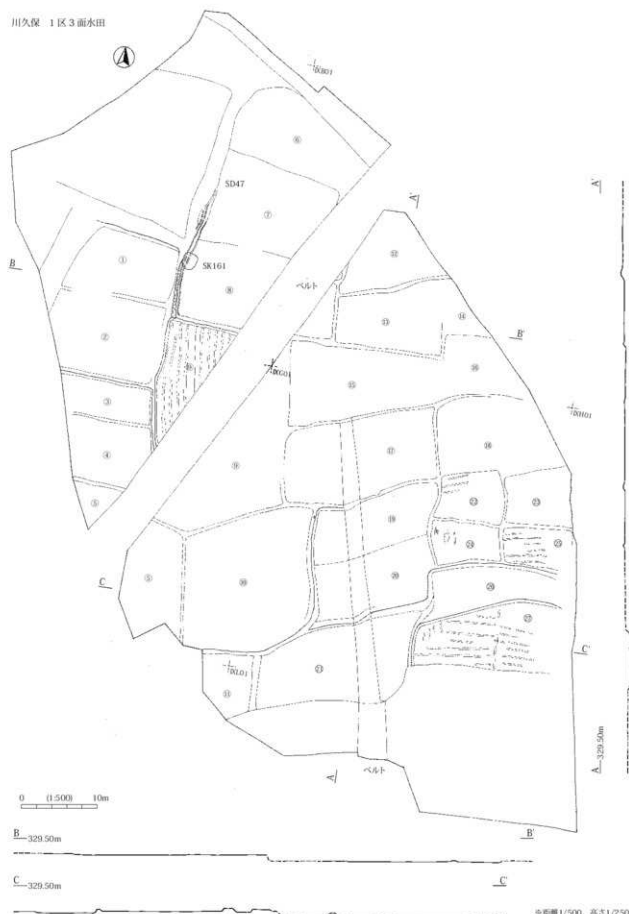
川久保2面水田面から採取された焼物は伊万里碗3片30g、同瓶類1片17g、唐津呉器手碗3片55g、同鉢1片19g、同すり鉢1片19g、肥前陶胎碗6片50g、同香炉?1片9g、瀬戸美濃磁器1片3g、瀬戸美濃陶器志野皿1片1g、古墳時代後期～平安時代土器78g、不明土器6gがある。いずれも小片で図示し得た遺物はない。すり鉢は1片唐津産で、碗は伊万里と唐津が同数で肥前陶胎碗が若干多い。瀬戸美濃磁器1片は混入の疑いがあり、肥前V期の伊万里碗と同IV・V期の唐津すり鉢を含むことから2面水田跡は18世紀末～19世紀前半頃の所産と思われる。

焼物の年代からは2面水田跡が善光寺地震に伴う洪水によって埋没した可能性がある。この洪水は長野市で千曲川へ合流する犀川が善光寺地震による土砂崩落で塞ぎ止められ、それが決壊して発生したもので、新幹線建設に伴う発掘調査では犀川沿岸の長野市川中島が下遺跡、今里遺跡においてその土層が確認された(原理文1998)。川中島で認められた洪水土層は山地由来の黄褐色を呈する粘性の強いシルト質土層だが、2面水田跡が被覆洪水土層の粒子は細かいながら他の洪水土層と大差ない。土質からは同一視しにくいが、ここでは出土焼物の年代から善光寺地震に伴う洪水で被覆された可能性を指摘するにとどめる。

川久保1区3面水田跡 1区3面 IX A・B・F・G・H・K・L地区(第228図 PL28)

川久保1区2面下面に位置し、比較的厚い洪水土層で被覆された水田面として調査した。1区南部の低い場所ほど洪水土層の被覆が厚く遺存状態は良好だが、北・西部は被覆洪水土層が薄く残りが悪い。また、1区中央西側の中央ベルトを挟んだ1筆の水田跡では、ベルト北側は3面で畝間溝状溝が検出され、ベルト南側では2面で同様の溝が検出された。これはベルト北側の調査面の対比を誤った可能性がある。3面水田跡は距離66mで50cmほど下がる緩傾斜地に階段状に水田を造成する。洪水土層の被覆が薄い川久保1区中央付近で4面水田跡と重なる位置の畦が多いが、中央以南の千曲川寄りでは洪水土層が厚く畦の位置がずれる傾向がある。また、本跡水田面では南東部に小型の水田跡が多く分布し、近世を通じて平均

川久保 1区3面水田



第228図 川久保1区3面水田跡

水田面積が最も小さい。この小さな水田跡は4面水田跡以後に南北方向の約16～20m間隔の畦が現われたことに伴って生まれたとみられる。また、等高線方向の東西畦も、一筆毎にずれて水田一筆毎に補強・維持されたと見受けられる。畦は杭を伴う畦や石芯畦は認められず、土を盛り上げたもののみある。水田面では畝間溝状の浅く細い平行溝が南東部を中心に検出された(第230図)。南北と東西方向の二者あり、両者が同一調査面で重なるように検出された水田面もある。これらの埋土は砂質土や砂ブロックを含むが、本調査面の洪水土層で埋没したものではなく、2・3面間の水田跡耕作痕が本水田面に達した可能性も考えられる。用水跡はSD43に重なる位置に検出されたSD47のみがある。

SD47は川久保1区のIX A14・19・24グリッドに位置する。SD43と重複して位置し、SD43に切られて南部側に18mほどしか遺存しない。SD41・43同様に本来は32m前後の長さと思われる。また、屋敷跡内施設と思われるSK161を本跡が切る。走行方向はN10°Eで若干蛇行する。幅約20cm、深さ10cmほどで、埋土は底面上に褐色灰色粘土層、中に細砂層が入る。SD47は上層SD41・43と重なって位置するが、上層のSD41・43の南端は本跡に伴う畦西側の水田跡に接続するが、本跡は畦東側の水田跡に流れ込む。出土遺物はない。

3面水田跡からは伊万里碗2片10g、同皿2片5g、同瓶類1片6g、唐津皿2片34g、同碗1片5g、同呉器手碗12片244g、同銅緑釉碗2片80g、同鉢3片58g、同すり鉢4片253g、肥前陶胎碗3片26g、瀬戸美濃陶器菊皿1片4g、同丸皿1片5g、同碗1片3g、越中瀬戸壺1片14g、他に中世在地土器内耳鍋17片195g、白磁皿1片27g、奈良時代～平安時代土器172g、不明土器74gと混入と思われる瀬戸美濃磁器17gが出土した。近世屋敷跡の遺物を含むため肥前Ⅱ・Ⅲ期の焼物もあるが、出土物に肥前Ⅳ期製品を含むことから、本水田跡は18世紀の所産と思われる。唐津すり鉢1個体237g(1574)、鉄製馬鋤歯(1604)、銅製馬鈴(1606)を図示した。

川久保1区4面水田跡 1区4面 IX A・B・F・G・H・K・L地区(第231図 PL29)

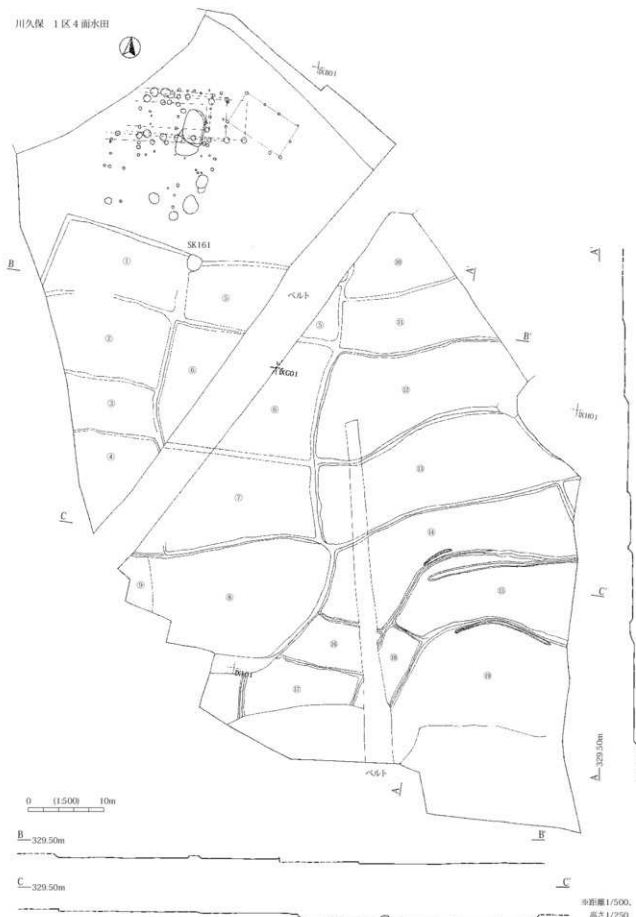
川久保1区中央ベルトの上層観察で、3面水田跡下層に厚い洪水砂層に被覆された遺存良好な水田面が捉えられ、川久保1区4面水田跡として調査した。4面水田跡を覆う洪水土層は川久保1区北部の高所まで及ばず、耕作土層も上層水田跡に削平されて遺存しない。また、南部も1・2面水田跡やそれ以後の水田造成で削平されている。中央南寄り周辺は比較的厚い洪水砂層に覆われて遺存良好であり、近世水田跡のなかで最も古い様相が広く捉えられた。近世屋敷跡は上述したように屋敷跡関連施設と思われるSK161が4面水田畦を切り、3面SD47に切られる関係から、少なくとも3～4面水田跡間に存在していることは捉えられた。第231図には同時存在ではないが、屋敷跡を4面水田跡に加えて掲載した。



第229図 足跡痕(川久保1区3面水田跡)



第230図 畝間の溝跡状溝(川久保1区3面水田跡)



第 231 図 川久保 1 区 4 面水田跡

4面水田跡は千曲川へ向かって距離70mで標高1mほど下がる緩傾斜地にあり、階段状に水田を造成する。傾斜方向に近い南北方向に長く通る畦で区切り、そのなかを等高線方向の畦で区画する。畦は直線的ではなく等高線に沿った湾曲したものが多く、比較的揃った間隔で十字に交差し、長く通る等高線方向の畦からも広範囲を同じ計画により区画している印象を受ける。斑尾川対岸の千田遺跡10区1面水田跡の区画も類似し、出土遺物がないながら本調査面と同時期と思われる。なお、5面水田跡調査時にNR1d周囲の4面水田跡



第232図 畦復旧に関連する溝（川久保1区4面水田跡）

の耕作土層下面の水田造成痕の検出を試みたが、水田造成による段差や畦は4面水田跡の畦と類似位置に確認された。5面水田の畦も4面水田跡と類似した区画と思われる。

4面水田の畦は土を盛り上げたもののみで、用水は検出されず、すべて水口を介した配水である。また、南東部の水田面で畦脇に平行する溝が検出された（第232図）。水田1筆内で取まり、埋土は砂層で洪水直後の畦の保水性を高めるための畦補修用に粘土を掘り出した痕跡か、畦を探した痕跡と思われる。他に耕作痕跡は認められなかった。

4面水田跡から出土した遺物は唐津鉢1片5g、同異器手碗3片7g、在土器焙烙1片60g、大窯丸皿2片38g、唐津皿1片19g、中世在地産土器内耳鍋212g、中国褐釉壺1片26g、奈良時代～平安時代土器127g、不明土器125gがある。このなかで在土器焙烙1個体60g（1575）を図示した。4面水田跡を覆う洪水土層は出土焼物と3面水田跡年代との関係から戊の満水（寛保二年（1742））の可能性がある。川久保1区5面水田跡 1区5面 IX B・G・H・L地区（第233図 PL29）

川久保1区南東部NR1dの窪地内のみ検出された。ここは千曲川に近い低地で、洪水土が堆積しやすい環境から、他地点では上層耕作で削平された水田面も遺存していた。しかし、5面水田跡南端を除いて全面を覆う洪水土層は認められず、上層耕作によりブロック状にしか洪水土の砂層が残存しない。そのなかで5面水田跡はそのブロック状に砂層を含む土層を目安に検出し、砂層が分布しない帯状範囲や水田面の段差から区画を捉えた。上層水田跡の疑似畦畔や造成痕も含まれる可能性があつて、すべて同時期とは言い切れない。水田区画は北端と南端に4面水田跡と異なる位置の畦が捉えられたが、概ね4面水田跡の区画に類似すると捉えられ、5面水田跡が4面水田跡へ継承された可能性が捉えられた。水田区画は6～12m間隔の等高線方向に長く通る畦で带状に区画し、その内部を直交する傾斜方向の短い畦で区切る。個々の水田面は等高線方向の緩やかにカーブし、あまり整ってはいない。

出土遺物は唐津すり鉢1片12g、青花皿1片4g、中国青磁碗1片12g、カワラケ2片25g、内耳鍋12片212g、平安時代土器118g、古墳時代後期土器28g、古墳時代前期土器22g、不明土器216gがある。この内、唐津すり鉢1個体19g（1579）、青花皿1個体4g（1580）、カワラケ2個体25g（1577・1578）、内耳鍋1個体36g（1581）を図示した。16世紀の焼物を含み、近世焼物は唐津すり鉢1片のみだが、近世4面水田跡と類似した区画であることから17世紀頃の水田跡と思われる。なお、本調査面出土ではないが、4～8間隔の掘削中に出土した大窯内はげ皿1個体（1575）、同皿1個体（1576）も図示した。

川久保 1区5面水田



第233図 川久保1区5面水田跡

(4) 宮沖1区1面の水田関連遺構

斑尾側沿いの上流側にある宮沖1区1面では、Ⅲ層上面でⅡ層が落ち込む溝跡数条が検出された。中世の柱穴を切り、水田を造成したと思われる平坦面に伴うとみられるものがあることから中世以後の水田造成に関わる痕跡と捉えた。

宮沖SD01・02 1区1面 XVI Q25、R21、V05、W01 (第250・251図)

宮沖1区1面の北部で検出した。SD01は平坦面の下端に位置するL字形の溝跡で、北辺はN71°W方向に約7m、東辺はN18°E方向に8.5mほど続く。埋土は褐灰色粘質土で出土遺物はない。水田造成痕か、畦を盛り上げるための土を掘り出した痕跡と思われる。SD02はN12°W方向に湾曲する長さ約9.2mの溝跡で、南端で重複するSD19との前後関係は捉えられなかった。本跡に伴う平坦面は捉えられなかったが、SD01と同様の畦構築に関連する痕跡と思われる。SD01とSD02は直接重複しないが、異なる走行方位で別時期の可能性はある。

宮沖SD03・04 1区1面 XVI R06・11・16 (第250図)

SD04は1区北端段丘斜而端部を削り込む平坦面下端からN0°EW方向に直線的に約14m続く。北端は段丘2下端を削った平坦地際まで続き、水田造成や畦構築に伴う痕跡と思われる。南端付近で検出されたN72°W方向の細いSD03は本跡と関連すると思われる。いずれも深さは4～8cm前後しかない。

宮沖SD19～21 1区1面 XVI V05・10、W01・06 (第251図)

SD19～21は宮沖1区中央付近にあり、検出面でN76～80°W方向の還元化した灰色土の落ち込みと認められて溝跡としたが、底面や壁の境が不明瞭で水田畦下部が溶脱した範囲を捉えた可能性がある。近接して並列することから、継続的な水田区画の畦の造り替えの痕跡と思われる。

(5) 川久保6区と宮沖3・4区の斑尾川氾濫原内の水田跡 (第13図)

斑尾川氾濫原内の左岸側では宮沖遺跡から川久保6区にかけて斑尾川が大きく蛇行し、広い蛇行洲が形成される。その蛇行洲にかかる宮沖遺跡2～4区と南端の川久保6区で氾濫原内の調査を実施した。調査はHWL(計画洪水位)にかかって洪水時に本流が流れ込む危険性からトレンチ調査とした。

斑尾川の氾濫原内の土層は、下層に砂礫層、上層に細砂・シルト・粘土などの細粒堆積物が堆積する。礫層からあまり間層を隔てていない細粒堆積物層を母材とした水田耕作土層と洪水土層が交互に認められたが、細粒堆積層中で中世前期以前に遡ると捉えられた土層はない。通常、蛇行洲は蛇行流の湾曲化運動に伴って徐々に湾曲内側へ堆積土を堆積させて外側へ向かって拡大するとされるが、段丘寄りの場所に古い細粒堆積物が遺存しないことから、斑尾川は河川傾斜が急なため洪水時の直線流が発生しやすく、河道移動を頻繁に起こした可能性がある。それにより古い河道は砂礫で埋没し、上層の細粒堆積物も一旦掃流され、河川が安定した環境下で再び細粒堆積物を堆積することを繰り返しているとみられる。この細粒堆積物層は斑尾川上流側ほど薄く、その供給源に千曲川が関与しているとみられる。氾濫原内の細粒堆積物層は基本土層Ⅱ層に対比されるものの、堆積土層の薄さに加えて浸食作用も加わるためか、川久保1区ほどの厚い堆積はない。また、氾濫原内では広域に被覆する洪水土層もなく、水田毎の耕作状況によって洪水土層の遺存状況が異なっており統一的な基本土層として把握できなかった。

遺構は基本土層Ⅱ層の細粒堆積物層中で確認された水田跡がある。水田跡の時期は詳細不明だが、宮沖4区2面水田跡は、唐津Ⅲ期より鉢や同器手碗が出土し、川久保1区4面に対比される可能性があり、その2面からあまり厚い堆積土層を隔てない3面も時期的に大きく遡らないと推測される。川久保1区では中世前期に10～8面水田面を埋める厚い洪水土層があるが、宮沖4区では近世の2面以下に厚い洪水

土層に被覆された水田面が存在しないことから、少なくとも川久保1区8面以下に遡る水田面は残存しない可能性が捉えられた。ただし、宮沖5区では中世の用水と思われるSD09が段丘上から氾濫原方向へ延びており、中世前期に氾濫原に水田跡が存在した可能性はある。以下にはやや広めのトレンチで水田面の様相を調査した宮沖3・4区の水田跡について報告する。

宮沖3区水田跡 3区1・2面 XVI V21～23、II B01～03 (第13図 PL30)

宮沖3区は宮沖遺跡周辺に形成された斑尾川蛇行洲の頂部に近い場所において、下層礫層上の細粒堆積物層が薄い。トレンチ全体を被覆する洪水土層はなく、水田跡1筆ごとに洪水土層の遺存状況が異なって水田面の対比は困難であった。そのなかで近似層と思われた砂混じり土や砂層で覆われる中位の水田面を1面とし、下層礫層に近い洪水土層に被覆された水田面を2面として精査した。下層砂礫層は現河床面へ緩やかに傾斜しながらも、その上面には窪みや高まりなど微細な凹凸地形が認められ、広い平坦面はない。水田跡は現斑尾川と同方向の窪みや高まり等の微地形方向に細長い区画を形づくり、それが蛇行洲の傾斜に沿って階段状に並ぶとみられる。1面で確認された水田跡1筆は幅8m、長さ11m前後の長方形である。2面は遺存不良で区画の詳細を捉えきれなかったが、1・2面間に大きな水田区画の変化は捉えられない。水田面では浅い窪みしか捉えられなかった。出土遺物は1面で唐津呉器手碗1片19gと古墳時代前期土師器7gが出土したのみである。配水は蛇行洲頂部付近を斜めに横断する宮沖SD18から取水して畦越しに配水するとみられる。このSD18は宮沖4区や宮沖3～4区中間のトレンチでは確認できず、3区以南で水口を介しての配水に変わるとみられる。

SD18はXVI V22、II B02グリッドにあり、宮沖3区南東隅をN30°E方向に斜めに横断する。1・2面では若干ずれながらも類似位置に重なって位置する。数度の掘り直しが認められ、1・2面にそれぞれ存在して上・下層にわけて調査した。下層は幅100cm前後で、底面は流水で浸食された断面U字形の蛇行流痕が残る。上層溝は幅100cm前後だが、直線的に変化し、位置は徐々に斑尾川よりへ移動していると捉えられたが、1面以後の上層には継承されており本跡は途絶している。

遺物は上層から、唐津呉器手碗1片4g、越中瀬戸すり鉢1片3g、伊万里瓶類1片27g(1586)、大窯丸皿1片2g、在地土器内耳鍋4片43gと混入の古墳時代～平安時代土器338gが出土した。下層は伊万里皿1片2g、肥前Ⅱ期唐津碗1片72g(1585)、中国産細線蓮弁文青磁碗1片6g、在地土器内耳鍋8片201gと弥生～奈良時代土器49gがある。16世紀の焼物も混在するが、川久保1区3～5面水田跡と類似時期の焼物が認められる。

宮沖4区水田跡 4区1～3面 II G12・13・17・18 (第13図 PL30)

宮沖4区は宮沖3区の下流側の蛇行洲が狭まる場所にあたる。宮沖4区の西側は斑尾川に面して大きく落ち込み、調査地区内は2段の平坦面から構成される。中央に攪乱が入って水田跡は遺存不良だが、宮沖3区よりは広く均一の洪水砂層で被覆され、合計3面の水田跡を調査した。1～3面間に大きな区画変化はなく、ほぼ同じ位置に畦が踏襲されている。宮沖3区1面では川久保1区2～3面水田跡検出の畝間溝状溝と類似した溝が検出され、ほぼ同時期と思われる。その下の2面水田跡から唐津Ⅲ期すり鉢1片11g、同呉器手碗3片19g、焙烙1片13g、産地不明の碗1片7gが出土した。産地不明の碗の年代は明らかにし得なかったが、他の焼物は川久保1区4面水田跡出土焼物と類似し、時的に同じと思われる。宮沖4区3面は2面の下約20cm下層にあり、砂礫層上からも20cm前後である。出土遺物はないが、2面からあまり堆積土層を挟まず、時的に近い時期と思われる。

3 近世の遺物

(1) 近世の焼物 (第235図 PL62)

近世焼物は川久保1区屋敷跡周辺と同1区1～5面水田跡、宮沖SD18など限られた遺構から出土し、16世紀末～19世紀に至る241片が採取された。時期がある程度識別できるもので17世紀86片、18世紀33片、18世紀末～19世紀前半34片である。他に小片で時期の識別が難しい伊万里碗・皿・瓶類35片、瀬戸美濃灰釉碗3片、唐津碗・すり鉢13片、編年検討が進んでおらず時期不明の焙烙・土人形など37片ある。17世紀の焼物片は川久保1区屋敷跡周辺での出土が多い。また、18世紀末以後の焼物は川久保SD42から近代以後の陶磁器に混じって出土したが、一部のみしか採取しえず、実数は上回る。川久保1区に限ってみると、17世紀と18世紀末～19世紀前半の陶磁器が多く、18世紀は少ないとみえるが、遺跡自体は江戸時代を通じて耕作地に利用され、18世紀の焼物の少なさが活動の低調さの反映とはみられない。

ア 焼物種と器種

近世の焼物には唐津、伊万里、肥前陶胎染付など北部九州産の焼物、瀬戸美濃陶器、瀬戸美濃磁器、越中瀬戸、越前、京焼、県内の在地産土器類、地方窯製品がある。

唐津(盛2000、宮田2000) 総数89片あり、近世焼物の36.9%を占める。碗57片・皿5片・鉢7片・すり鉢18片、香炉?1片、器種不明1片ある。碗はⅠ・Ⅱ期碗が5片、クリーム色の釉を全面施釉するいわゆる呉器手碗が42片、銅緑釉碗が2片、刷毛目碗が1片、時期仔細不明の碗が7片ある。碗全体の50.9%を唐津が占め、なかでも呉器手碗は37.5%に相当する。この呉器手碗は肥前Ⅲ期を中心とし、川久保1区近世屋敷周辺や川久保1区3・4面水田跡から出土した。川久保1区近世屋敷跡や3面水田跡以下で肥前陶胎碗が出土しない点と相対的な関係とみられ、この呉器手碗が肥前Ⅲ～Ⅳ期前半頃の当地域の主体の碗と思われる。若干の使用時間幅はあると思われるが、時期別破片数では肥前Ⅲ期としてカウントした。皿は肥前Ⅰ期1片、Ⅱ期3片、Ⅳ期1片、Ⅰ・Ⅱ期1片しかない。すり鉢は少ないながら、すり鉢全体の85.7%を唐津が占め、肥前Ⅰ期?1片、Ⅱ期2片、Ⅰ・Ⅱ期1片、Ⅲ期7片、Ⅳ・Ⅴ期6片、時期不明1片で、やはり17世紀後半頃が多い。鉢は刷毛目鉢が7片ある。

伊万里(大橋1989、野上2000) 磁器染付を中心として総数50片出土し、近世焼物内の20.8%を占める。碗26片・小碗1片・そば猪口1片・皿12片・鉢1片・徳利2片・瓶類7片である。碗は唐津より少ないが、全体の22.3%を占め、皿は伊万里では42.9%と多く、17世紀後半～19世紀前半のものが多い。また、越中瀬戸のお歯黒壺以外の花瓶や一輪ざし等の瓶類はすべてを占める。時期の判明した破片は鯉皮手と思われる碗など肥前Ⅱ期2片、Ⅲ期1片、Ⅳ期2片で、最も多いのがⅤ期で8個体である。

肥前陶胎染付(松下2000、中野2000) 伊万里同様に体部外面に呉須や鉄軸で文様が描かれ、全面施釉された灰・暗灰色胎土の厚い雑な造りの印象を受ける焼物である。産地は長崎県佐佐、平戸とされ、碗20片と香炉?1片、皿1片があり、近世焼物内の9.2%、碗では17.9%占める。川久保1区2面水田跡から多く出土し、4面以下では出土していない。また、碗の破片数は唐津呉器手碗、伊万里碗に続くが、唐津呉器手碗が1区3・4面水田跡からの出土が多く、1区1・2面水田跡で伊万里は肥前Ⅴ期のものが認められるので、肥前陶胎碗は呉器手碗と伊万里が主体となる中間の18世紀後半頃を中心に多く用いられたとみられる。

瀬戸美濃陶器(藤沢1987・1988・1989) 17世紀前半と18世紀末～19世紀の所産がある。前者は志野等の皿6片・碗1片で、後者は皿1片・鉢1片・捏鉢1片・瓶掛1片・土瓶1片など調理具・調度具

も含む。他に時期不明の灰釉碗3片ある。出土数は合計15片6.2%に過ぎない。

瀬戸美濃磁器 (服部 1993) 19世紀以降に伊万里に後続するように多く搬入されている。ただし、近代・現代のものが中心で、調査では選択的に採取したため碗や皿など食器のみ9片3.7%がある。また、長野県内でも須坂や藤沢焼などの磁器焼成窯が知られるが、それらの製品は識別できていない。これらの磁器焼成窯は短期にしか存続しない点からも出土品に含まれる可能性は低いと思われる。

越中瀬戸 (宮田 1997) 砂粒を含む灰白色の胎土で錆釉を施すものが多い。唐津を模倣する皿等は比較的識別しやすいが、すり鉢は瀬戸美濃陶器すり鉢との識別に迷うものもある。越中瀬戸の可能性もあるものも含めて7片、近世焼物の2.9%を占める。器種は、お歯黒壺と思われる壺4片・すり鉢2片・皿1片である。壺類の破片数は多いが、同一個体の可能性があり、実数はそれほど多くないと思われる。周辺の遺跡の様相からは皿類がもう少し多く存在するとも思われるが、調査域内ではあまり出土しなかった。

越前 (田中 2006) 1片0.4%のみ出土した。越前の壺・甕出土は当地域では中世でも出土が珍しく、すり鉢に至っては確実な例はないが、川久保SD41から越前すり鉢と思われる破片が出土した。口縁の形態や内面の御目から17世紀末頃の所産と思われ、越中瀬戸と共に北陸経由で搬入されたと思われる。

京焼 18世紀末～19世紀前半頃の徳利1片のみある。0.4%に過ぎない。

在地窯製品 松代焼、赤塩焼、須坂焼など県内の近世末以後の陶器窯製品と思われるもので、新潟県の地方窯製品が含まれる可能性はあるが、詳細な産地は識別できず在地窯とまとめた。多くは18世紀末～19世紀の所産で、碗、徳利、鉢、土瓶、甕など合計9片3.7%ある。この内、碗は胎土から在地窯産と考えたが、産地は特定できず、遠隔地からの搬入品かもしれない。

在地産土器 県内で生産されたと思われる土器類で焙烙26片・土人形2片・器種不明品10片の合計38片15.8%ある。焙烙は編年検討が進んでおらず時期不明で、土人形類は近世末～近代の所産と思われる。

イ 焼物の組成

良好な一括資料はないため、焼物の生産年代と産地、器種から全体の傾向を整理する。まず、焼物産地だが、本遺跡出土焼物は九州の唐津・波佐見(平戸)・伊万里などの製品が多く、越中瀬戸、越前を加えると日本海域で流通する焼物が多く搬入された傾向が知られる。なかでも、消耗器材と思われるすり鉢は少量越中瀬戸があるものの、唐津が主体となる。一方、陸路を通じて流通したと思われる瀬戸美濃製品は近世初頭と近世末頃にしかなく、陸路を通じての焼物搬入は限られたようだ。

時期別の産地の変化では、16世紀は少量の青花や青磁・白磁と共に大窯製品が一定量認められ、内陸流通品も認められる。16世紀の越前すり鉢が長野県内でもあまり確認されない点もこれと関連しよう。ただし、大窯製品の出土量は長野県中南部に比べると少なく、その流通量は少ないとみられる。16世紀末頃から肥前1期の唐津碗・皿とすり鉢に加え、越中瀬戸などが加わって日本海域で流通する焼物の搬入が増える。一方、瀬戸美濃製品も16世紀から継続して17世紀前半も志野丸皿や菊皿が搬入されている。しかし、17世紀後半では唐津と伊万里が主体となって、瀬戸美濃製品や越中瀬戸は認められなくなる。日本海域の広域流通品のなかで、製品の陶法が進み、より大量に生産される焼物が主体を占めるようになったと思われる。また、当該期には食器が皿主体から碗主体へ変化する。18世紀では出土焼物が少なく詳細不明だが、碗は肥前陶胎焼が多く認められる。伊万里より陶器碗が主体に用いた理由は不明だが、長野市周辺でも伊万里は多く認められるので流通量の減少ではなく、価格や使用方法など遺跡居住者の選択による可能性がある。18世紀末以後は唐津・伊万里に加えて再び瀬戸美濃連房製品や京焼、在地の近在窯製品などが認められ、出土量も増加している。

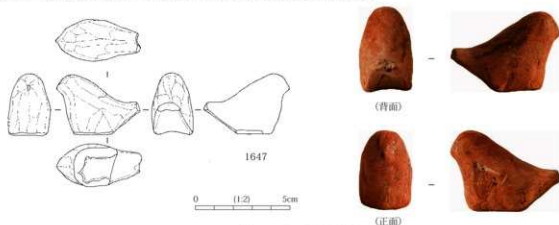
器種の構成は、食膳具は碗 112 片、小碗 5 片、そば猪口 1 片、皿 28 片、鉢 10 片、徳利 5 片の合計 161 片で、調理具はすり鉢 21 片、捏鉢 1 片、土瓶 3 片、焙烙 26 片の合計 51 片、貯蔵具類は壺・甕 5 片、花瓶・瓶類 7 片の合計 12 片、調度具は瓶掛 1 片、香炉 3 片の計 4 片で、他に器種不明 11 片、土人形 2 片がある。出土焼物の 66.8% が食膳具類で、21.2% の調理具が続く。食膳具では、碗類が食膳具類の 72.7% と多いが、皿類は 17.4% しかない。ただし、皿は 16 世紀末～17 世紀前半では食膳具内の比率が高く、17 世紀後半の唐津呉器手碗の増加により碗の比率が増加している。碗の増加の背景には漆器の皿の存在も考えられるが、碗自体を多用する使用方法によるかもしれない。そして、18 世紀末からは調理具や調度具類等も種類が増えていることが知られる。

(2) 近世の土製品 (第 234 図)

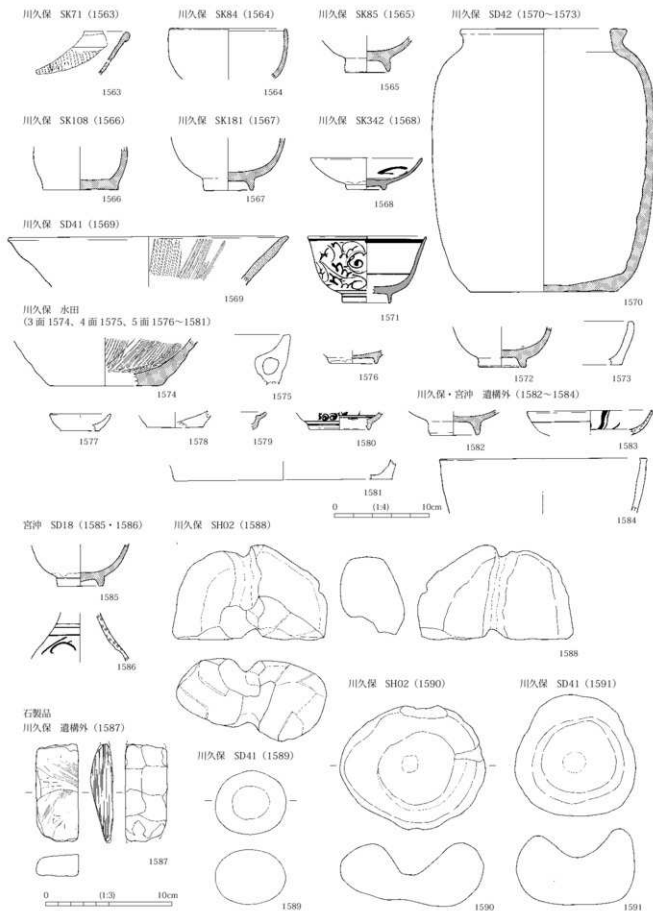
近世の土製品には、素焼きの土人形と鳥形土製品がある。土人形は古墳時代後期川久保 SBO6 に混入して出土した神像と思われる型造りの頭部破片と、宮沖 5 区 1 面出土の福助人形がある。鳥形土製品は平成 16 年度、川久保 1 区東部の試掘トレンチ内から出土した。川久保 1 区中央付近の地表面下約 1m の水田耕作土層中から出土し、出土土層の標高を平成 17 年度調査の土層に対比すると、川久保 1 区 2 面水田跡と 3 面水田跡の中間前後にあたる。他時代の混入の可能性もあるが、出土層位から近世の所産としてここに掲載した。類似土製品は長野市川田条里遺跡でも出土しており、水田跡からの出土である点は共通する。土人形は精選された細かい均一な粘土を用いるが、この鳥形土製品は砂を多く含む胎土で、褐色を呈して焼成は良好である。手づくね成形で、表面はナデ調整され、底部周囲の粘土を底部側にナデ込んだものが、板の上でつぶれて底部中央が不整形方形ぎみに窪む。

(3) 近世の石製品 (第 235～237 図 PL64)

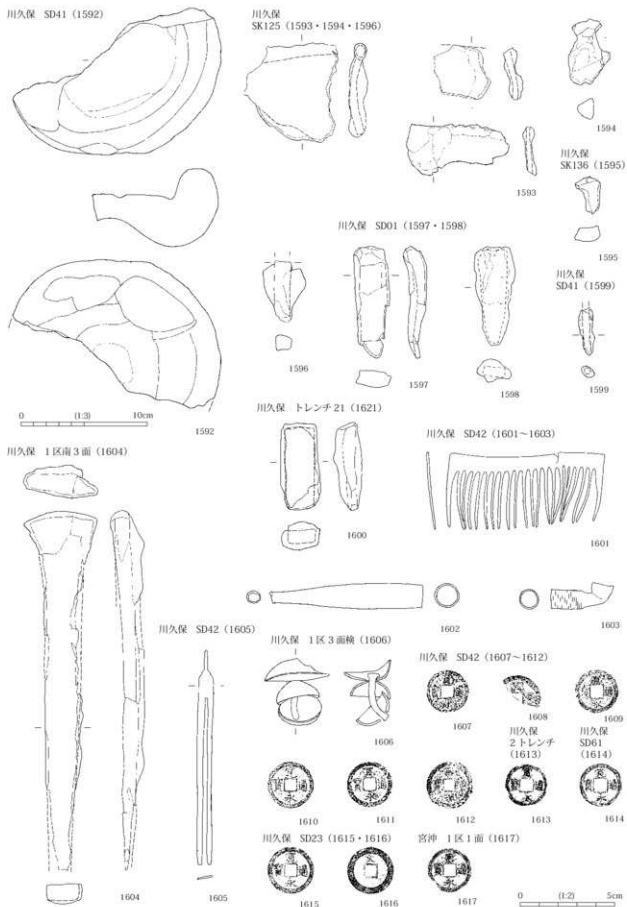
近世遺構出土の石製品には砥石、凹石、研磨痕のある石があるが、形状や成形痕から近世と特定できたものはわずかで、他時代の混入石製品も含まれる可能性がある。砥石 (1587) は側面に鋸の切断痕、裏面にノミ状工具の整形痕があり、上面と側面 1 面のみが研磨されている。成形痕から近世の所産と思われる。凝灰岩製で石質から群馬砥沢産の可能性が高い。球状の研磨痕のある石製品 (1589) は、近世遺構出土ながら中世以前の混入品の可能性が高い。他に多孔質安山岩製凹石 (1590・1591)、石製容器 (1592)、多孔質安山岩製の半割した自然円礫の側面に溝状の造作が加えられたもの (1588) があるが、用途は不明である。これ以外の検出面やトレンチ出土の時期詳細不明の石製品も便宜的にここに掲載した。安山岩製の凹石 (1618)、円礫の断面に研磨痕を残す軽石 (1619)、川久保 1 区周辺で採取された石臼 (1620・1621・1622) がある。石臼は近世屋敷跡の遺物の可能性がある。



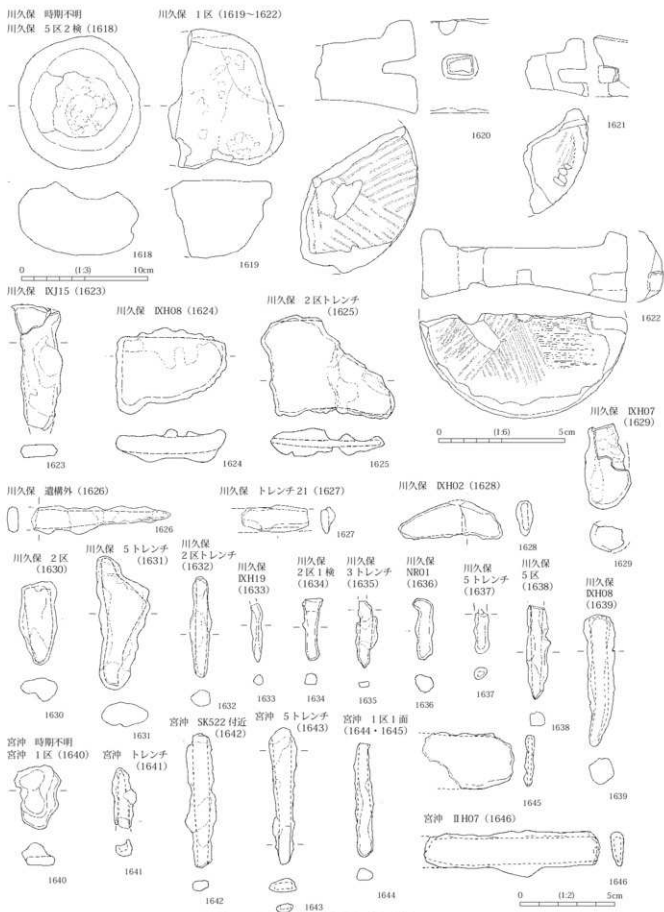
第 234 図 鳥形土製品



第235図 近世焼物・石製品1



第236図 近世石製品2、金属製品



第237図 時期不明石製品、金属製品

(4) 近世の金属製品 (第236・237図)

鉄製品と青銅製品、銭貨がある。検出而出土等の時期不明な製品も併せて掲載する。鉄製品は川久保近世屋敷跡のSK125から鉄鍋と思われる鉄片(1593)、釘?(1594・1596)、SK136から鉄鍋片?(1595)、川久保SD41から鉄釘(1599)、川久保SD01から楔(1597・1598)が出土し、トレンチ出土の楔(1600)も類似した形状、錆の状態から近世と捉えた。近世の鉄製品は黄褐色の粉状の錆で覆われ、薄い板状に割られる遺存不良のものが多く、平安・中世鉄製品には板状に刺落すものは少なく、鉄の素材自体の違いがあるように思われる。また、川久保1区3面水田跡からは馬蹄歯と思われる鉄製品(1604)が出土した。銅製品は川久保SD42から煙管(1602・1603)、簪(1605)、川久保1区3面水田跡から馬具飾りと思われる銅製品(1606)が出土した。これ以外にベッコウと思われる櫛(1601)がSD42から出土した。銭貨はSD42から複数出土し、全て「寛永通宝」(1607～1612)である。

上記以外に検出而等出土で時期不明の鉄製品がある。川久保5区出土品(1638)は中世の可能性があるが、それ以外は近世遺構検出而や近世遺構が検出された地区等の出土で近世の可能性はある。器種不明品が多く、1599・1623・1630・1636、1645は板状鉄製品で、1630は楔、1645は鎌かもしれない。他は棒状で1626・1628・1646は刀子状の鉄製品で、1632～1639・1641・1644は釘と思われる。1629・1631・1640は器種不明である。

4 近世のまとめ

近世では川久保3区などを除いて水田を中心とする耕地利用が捉えられ、なかでも千曲川の洪水土で埋没した複数水田跡が捉えられた川久保1区では、二つの知見が得られた。

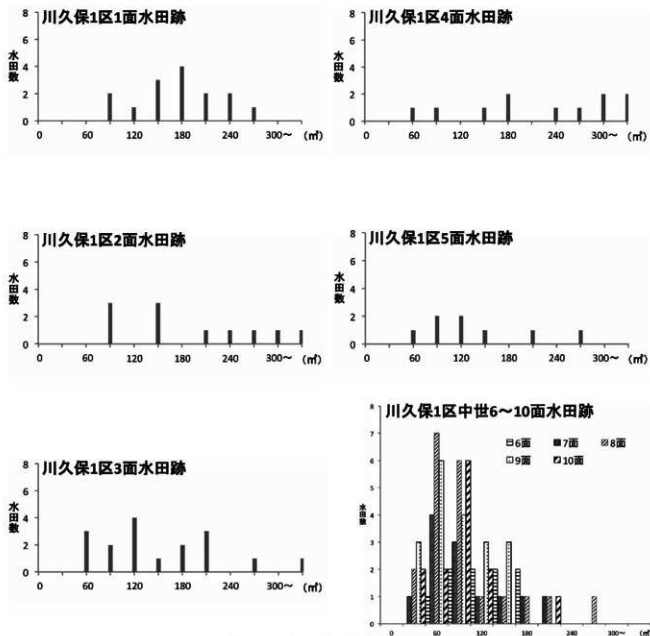
一つは近世の千曲川洪水についてである。川久保1区水田跡の時期は5面水田跡が17世紀前半、4面水田跡が17世紀後半～18世紀前半、3面水田跡が18世紀後半頃、2面水田跡が18世紀末～19世紀前半、1面水田跡が明治5～20年代中頃と推測され、4面水田跡被覆洪水土層が戊の満水(1742)、2面水田跡被覆洪水土層が善光寺地震に伴うものである可能性を推測した。

このなかで室町時代～江戸時代前期の5～7面水田跡は被覆洪水土層も薄く、水田跡もNR1dの狭い範囲のみしか遺存しないが、江戸時代中期頃の4面水田跡以後は広域を被覆する洪水土層が複数認められ、時期によって洪水発生の増減があることが知られる。中野市周辺の洪水を天然記念物の飯盛松年輪と比較した小林暉輝氏によると(小林1971)、記録が残るなかで1629～1710年までは旱害記録が多く、1699～1772年は水害記録が増加し、1772～1860年まで水害記録が減少、1860～1920年まで水害被害が再び増加し、1920年以後は水害記録が減少するという。洪水多発と減少期を周期的に繰り返すと捉える。17世紀の洪水減少と18世紀の洪水増加傾向は調査所見と一致し、川久保近世屋敷跡も17世紀の洪水の減少傾向のなかで出現したと思われる。

また、4面水田跡を被覆する洪水土層を出土焼物から戊の満水で埋没した可能性を推測した。この戊の満水と近似時期の焼物は長野市松代城・城下町跡周辺で享保二年(1717)と想定されている焼土層から出土している。松代城下町遺跡A7区3次面(西元2005)では、瀬戸美濃系陶器と肥前系陶器の量は4:5で、残りが少量の肥前系磁器と不明土器とされる。瀬戸美濃陶器は灰軸輪ハゲ皿完形14枚、鉄軸片口4～5個体、御室碗1個体、肥前系陶器は瑠璃釉小皿完形37枚、呉器手碗2個体、刷毛目腰張碗破片2個体がある。本遺跡の4面水田跡出土焼物には瀬戸美濃陶器は含まれないが、伊万里が少量で呉器手碗を含み、肥前陶胎碗を含まない点は類似し、ほぼ似た時期の可能性はある。また、戊の満水で埋没したと想定されている水田跡調査例には東御市(旧東部町)の所沢川沿いの八名の上遺跡(東部町教委2002)、

久保田遺跡（東部町教委 1995）、18世紀頃の洪水土層被覆水田跡と報告される例として佐久市中長塚遺跡Ⅰ・Ⅱ、松の木遺跡Ⅰ・Ⅱ（佐久市教委 2001）がある。佐久市濁り遺跡水田A（佐久市教委 1996）もその前後と推測されている。いずれも千曲川上流域の支流沿いの水田遺跡だが、比較的広範囲に調査された八名の上遺跡、濁り遺跡、松の木遺跡の水田跡を川久保1区4面水田跡と比較すると、水田内に用水を敷設せず水口で配水する点、傾斜方向の畦が長く通り、そのなかを等高線方向の畦で区画する点は似ている。ただ、濁り遺跡では傾斜方向の畦に大・小畦の二者があり、水田面積も8.4～89.9㎡と小さい。

このように出土焼物や遺構から川久保1区4面水田跡を被覆する洪水土層を戊の満水にあてられる可能性はあるが、断定にはいくつか課題もある。一つには伝えられる被害の大きさに比べて遺跡で認められる痕跡が小さいように感じられる。戊の満水は台風によって、土石流や土砂崩落を伴いながら、佐久地方など上流域から下流域飯山市周辺まで甚大な被害を生じたとされる。しかし、善光寺平南部の長野市石川条里、千曲市更埴条里遺跡、千曲川沿いの中野市柳沢遺跡でも該当する洪水土層は明瞭に捉えられていない。



第 238 図 水田面毎の水田面積グラフ

また、川久保1区4面水田跡の被覆洪水土層の範囲は、同8面、同1面を被覆する洪水土分布範囲には及ばず、1区屋敷跡施設と捉えたSK161が4面水田畦を切ることから、戊の満水以後も屋敷跡が継続していた可能性がある。ただし、戊の満水の被害の大きさも、それ以前の17世紀洪水減少期に千曲川近くまで生産・居住領域が拡大していたため、被害が増大したことが背景にあるかもしれない。さらに、本遺跡は斑尾川との合流地点に近くあって流れが弱まって掃流の流れにならなかった可能性もある。いずれにしても、川久保1区4面水田跡がそれ以前の1701、1728、1731年の千曲川洪水（中村他1991）に当たった可能性も含め、戊の満水の考古学的知見が増えたところで改めて検討される必要はあると思われる。

二つ目は近世の水田跡の変遷が捉えられたことがある。近世以前の川久保1区5～7面水田跡は遺存不良で中世からの連続関係の詳細を明らかにし得なかったが、8～10面水田跡と比べると、中世では地形変換点を除いて畦位置が移動しやすいこと、水田1筆の平均面積が狭い特徴がある。川久保1区1～4面水田跡の面積平均は最小が川久保3面水田跡の130.1㎡、最大は4面水田跡の172.6㎡である。一方、中世水田跡は最小で川久保10面水田跡の68.5㎡、最大でも9面水田跡の103.9㎡である。これは近世に堆積土増加による地形平坦化が進み、より大きな水田を造成しやすい環境になったこともあろうが、近世における水田経営主体の農民のあり方に関連するようと思われる。また、水田面積の分散では、中世水田跡は分散幅が狭く類似面積が多い傾向が見て取れるが、近世水田跡ではいくつかの面積規模グループに分かれながら全体の分散幅が広い傾向にある。

水田面積平均と分散幅と比較すると、中世前半期の川久保1区8～10面水田跡と近世1～4面水田跡は平均面積も分散幅も異なり、両者は直接連続しないとみられる。この近世の様相がどこまで遡るかは、室町時代前後の水田跡が遺存不良で今回の調査では把握できなかったが、対岸の千田遺跡10区では16世紀に畑地だった場所が近世には部分的にも水田化されており、当地域では近世に新たな耕地編成があった可能性が捉えられた。川久保1区4面水田跡も近世当初の姿ではないが、比較的整った区画で、千田10区水田跡と類似し、同様の編成が行われた可能性がある。

17世紀には戦国時代に荒廃した耕作地を立て直すため、さまざまな新田開発が行われたことが知られているが、本遺跡でも水田拡大志向の元、旧来の耕地の編成が進められた可能性がある。さらに、本遺跡ではこの水田化を目指した耕地再編成によって近世の基礎的な村落デザインが決定され、以後は畦を維持しようとする強い志向が近世を通じて踏襲されたと思われる。

ただし、近世の畦位置を維持する志向のなかでも、川久保1区4面水田跡は1筆面積平均が最大で、3面水田跡が最も小さく、2面水田跡で再度拡大しているように、水田面積は若干変化している。また、畦も4面水田跡では比較的通りが良いが、上層ほど水田1筆毎のずれを生じており、次第に水田1筆毎に維持される傾向が強まるように見受けられた。その変化の背景は明らかにし得なかった。

17～18世紀初頭は開発増加と共に人口増加があったが、18世紀前半頃から人口増加に停滞傾向が生まれたことが知られている（山田1989）。それは開発地域の限界に達したこと、災害や飢饉の多発、近世前期の経済体制の行き詰まりと都市への人口流出などが想定されている。その一方で、単婚を中心とする家族数の少ない世帯が増えることも指摘されており、18世紀後半では4～5人の単婚小家族が一般的とされる。億圓ながら、こうした小世帯の増加、家族労働力の小ささによって小面積水田が出現したのかもしれない。さらには貨幣経済の発展のなかで土地売買も水田分割化と関連するのかもしれない。水田跡の在り方は社会構成等とも無関係ではなかったと思われる。

第4章 結 語

替佐築堤に関わる斑尾川左岸域の発掘調査は、平成16年度(2004)に川久保遺跡から着手され、平成19年度(2007)の宮沖遺跡の調査で終了した。遺跡は千曲川・斑尾川のごく近距離に立地し、調査前では遺構がどの程度存在するか不明なところもあったが、発掘調査の結果、弥生時代～近世に至る遺構が確認し得た。各時代の様相は、すでに述べているので全体を通して二点ほどまとめを記しておきたい。

遺跡の立地環境と遺跡居住者の活動

川久保・宮沖遺跡は千曲川・斑尾川沿いに立地するが、この環境下では洪水を受けやすい短所と、漁業による食糧確保のしやすさ、水田用水の引きやすさ、河川交通の便などの利点があると思われる。短所とみられる千曲川・斑尾川の洪水だが、今回の発掘調査で各時代とも頻繁に発生せず、時代によって発生の状況が異なることが知られた。気象条件がどのように洪水発生の多寡と関連するかのメカニズムまではわからないが、洪水が少ないと捉えられた弥生時代中期後半、古墳時代後期～奈良時代、平安時代後半頃、室町時代後半～江戸時代前期では遺構が千曲川近くまで分布する。弥生時代中期後半では水田跡が存在した可能性が知られたが、それ以外の時期の古墳時代後期～奈良時代と平安時代後半頃は千曲川近くまで竪穴住居跡が分布し、居住域の利用が認められた。

一方、洪水が多いと捉えられた弥生時代後期初頭、平安時代前期、古墳時代前期、鎌倉時代後半～室町時代前期、江戸時代後半では、弥生時代後期初頭や平安時代前期に竪穴住居跡が認められるが、それ以外の時期は生産域に利用されている。洪水の多い時期には居住域より生産域に利用することのほうが多かったとみられる。それは多少の洪水なら生産域への影響が少なかったこともあると思われるが、なかには大きな影響を受けたと思われるものがあり、その洪水とその後の様相には対症的な二つのケースがみられた。

ひとつは古墳時代前期で、この時期にIV層の洪水土層堆積で水田域の多くが埋没し、その後の水田跡は川久保SL04のみしか捉えられなかった。川久保SL04も土石流堆積層で埋まった後は生産遺構も居住遺構も途絶えている。この古墳時代前期の場合は、もともと居住集団の規模が小さく投入できる労働力が少ないので、それに合った水田跡を造成しやすい地形である本遺跡地が選ばれたが、労働力規模が小さいために大きな洪水には対応しきれなかったものかもしれない。

もう一つのケースは川久保1区の中世水田跡で、中世は川久保1区10面水田跡を覆う洪水土層まで大きな洪水土層は認められないが、この洪水土層上部の9面水田跡から段丘上方への水田域拡大が認められた。段丘上方への水田域拡大は、畑地を水田域とする耕地再編成が主目的であったと思われるが、1区10面水田跡を被覆する洪水土層以後から段丘上方への水田域拡大が認められることから、洪水への対処法の一つであった可能性も考えられる。これ以後の中世では耕作が連続する。

以上のような洪水への対応や影響もさまざまあるが、本遺跡が断続的にも長期に営まれた背景には、川の恩恵を受ける利点のほうが大きかったと思われる。その利点の一つである漁業に関してみれば、各時代で網罟が出土しており、各時代での漁業への関わりが捉えられた。また、洪水が多いと思われた平安時代だけは川沿いにも竪穴住居跡が認められたが、これは洪水の発生状況とは別の理由によると思われる。平安時代後期では鍛冶炉を伴う竪穴住居跡がみつかり、鍛冶関連の居住者が居たことが捉えられた。製鉄炉は検出されなかったが、砂鉄の入手や、鉄塊系遺物や炭など製鉄に必要な原料や物資、製品

流通に河川交通が関わっていたこともあるのかもしれない。関連して、新潟県の信濃川沿いでは本遺跡でも出土した武蔵型甕が出土している(春日 2007)ことから、川沿いの人間移動や物資移動も考えられる。こうした川の恩恵を得ながら、本遺跡では断続的にも長期に渡る居住があったと思われる。

千曲川・信濃川沿いの交流の変遷

また、今回の調査では本遺跡をめぐる千曲川・信濃川沿いのさまざまな地域との交流のようすも知られた。本遺跡で本格的な遺跡居住者の活動が認められたのは弥生時代中期後半からで、当該期の栗林式土器の出土から、本遺跡は栗林式土器を用いる集団の一部が住み着いたとみられた。他地域との交流を示す遺物はないが、中野・飯山市周辺の弥生時代中期後半の遺跡が千曲川沿いや、千曲川と平行して線状に遺跡が分布するのは、川沿いの沖積地で稲作を営む集落をつなぐ交通路があったことによる可能性がある。

弥生時代中期後半から後期への移行期に際し、一部北陸地域の影響の可能性も考える説もある(千野 2001)が、本遺跡ではその様相は明確に捉えられなかった。しかし、弥生時代後期初頭頃の東北地方南部に分布圏をもつ天王山式土器が出土し、長野県内での新たな出土例を加えられた。本遺跡の位置関係から信濃川沿いの人間の移動や交流があったことが知られる。

弥生時代後期から古墳時代の移行期では、当地域の土器は北陸系土器→東海系・畿内系→畿内系土器の影響を受けた土器が現れ、その間に弥生時代後期の箱清水式土器が解体する過程と捉えられている。本遺跡ではその東海系から畿内系土器の影響が強まる時期に出現したと捉えられた。東海・畿内で作られたと思われる土器はわずかで、伝統的な土器を多く用いることから、シナノ外からの移住者がつくった遺跡ではなく、当地域内での分村のような拡散によって、本遺跡が出現したと捉えた。当地域の土器や墓制は、善光寺南南部よりも東海色が強いとする意見があり(土屋 1998)、これに従えば、当該期の越後方面への北上拠点の一つとも考えられる。越後では信濃川沿いに古墳時代前期古墳が分布することからも、当地域を経由する信濃川沿いに北上するルートが重要な役割を担ったと思われる。

また、古墳時代後期に本遺跡で再び竪穴住居跡が現れるが、出土した黒色土器 A 杯の形から、居住者はシナノの人間と捉えられた。ただし、この時期には本遺跡を含む中野・飯山市で多くの遺跡が認められ、中野市域に前方後円墳が認められることから東北地方、越後方面への畿内政権の進出政策が関わった可能性も推測される。この時期も前代からの信濃川沿いルートを継承するものではないだろうか。

その後、当地域では奈良時代の集落遺跡が不明瞭となり、平安時代前期から再び居住遺構が現れる。この時期の土器様相や竪穴住居跡の形態が越後と類似する特徴から、越後方面からの移入者や交流の活発化が推測される。ただし、カマドは信濃に多くある石組粘土カマドで、越後からの移住者とばかりは断定できず、この点は課題として残される。その後の平安時代中期以後は竪穴住居跡が引き続き構築されており、掘立柱建物跡主体に移行する越後は様相が異なることから、中野・飯山市域は越後に系譜をもつ文化を継承しつつ、そのまま当地域で独自の文化を担う集団になっていたと思われる。

以上のように、本遺跡ではさまざまな地域との交流が認められた。北陸に近いからと言っても、北陸との関係のみが強いわけではないことが知られる。なかでも古墳時代には東海・畿内などの土器に象徴されるように、南から北への文化の流れが認められ、古墳時代後期頃までは信濃川沿いに北上するルートも重要視されていたのではないかと考えられる。奈良時代には行政区分でもある北陸道と東山道の役割の比重が増し、このルートは奈良時代に一旦途絶するが、平安時代には人々や物資が行き来する越後・信濃をつなぐ道として別の形で復活再生したと思われる。

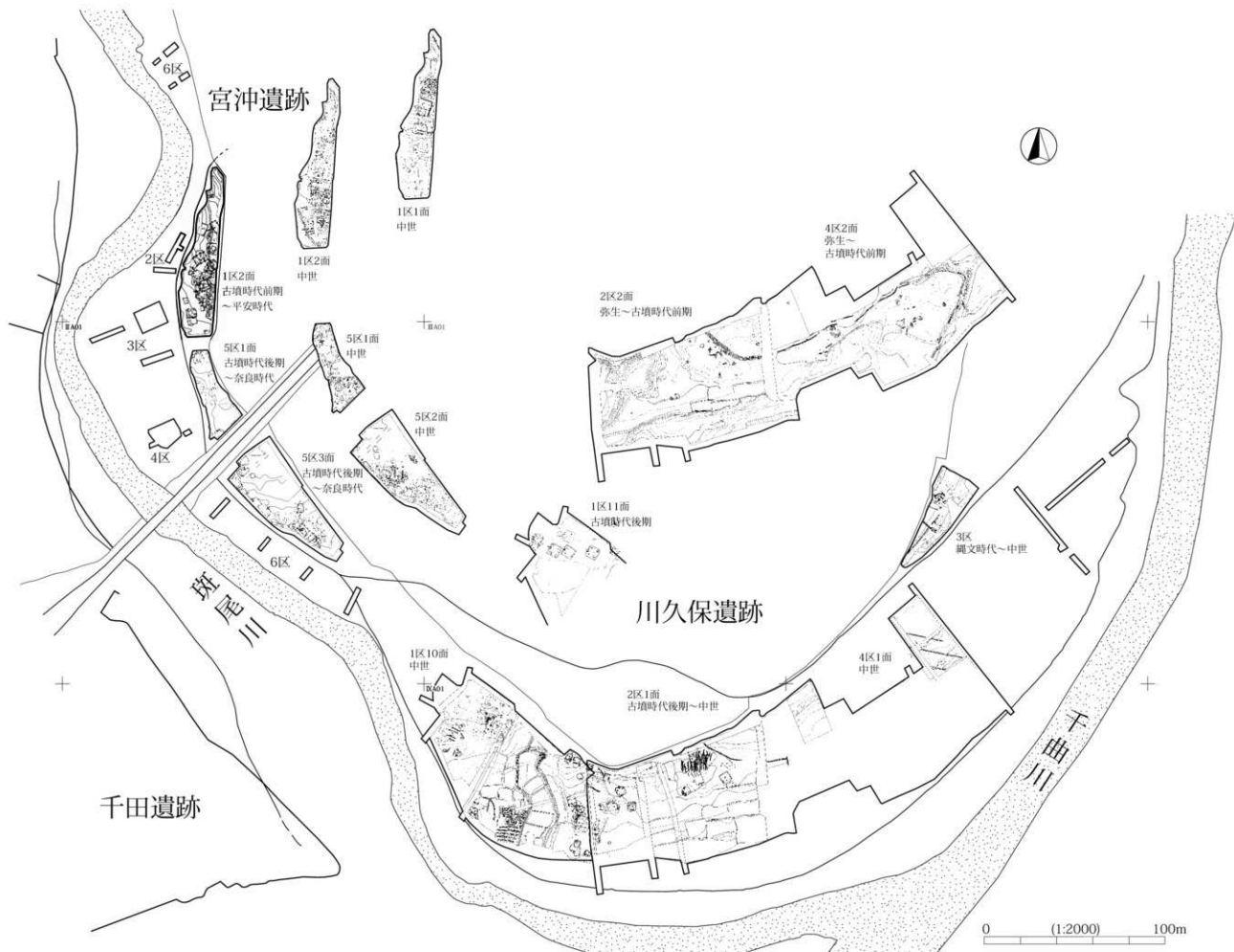
参考文献

- 赤羽貞幸・加藤碩一・富樫茂子・金原啓司 1992 『中野地域の地質』通商産業省工業技術院 地質調査所
- 青木一男 1996 「松原遺跡 弥生編」整理中間報告『長野県埋蔵文化財センター紀要』5 長野県埋蔵文化財センター
- 青木一男 1998a 「第4章 第1節 中部高地型櫛文系土器群の理解」『松原遺跡 弥生・総論編』6 長野県埋蔵文化財センター
- 青木一男 1998b 「第4章 第2節 古墳時代前期の土器の理解」『松原遺跡 弥生・総論編』6 長野県埋蔵文化財センター
- 青木一男 1998c 「第4章 第5節 長野盆地南部の集落動向」『松原遺跡 弥生・総論編』6 長野県埋蔵文化財センター
- 青木一男 2000 「第1章 第3節 栗林式土器の観察」『松原遺跡 弥生・総論編』3 弥生中期・土器本文 長野県埋蔵文化財センター
- 青木和明・飯島克己・若狭敬 1988 「箱清水式と樽式土器」『弥生文化の研究』4 雄山閣
- 青木和明 1990 「5 古墳前期 (2) 遺物」『篠ノ井遺跡群Ⅲ』長野市教育委員会
- 赤塩 仁 1994 「弥生時代後期から古墳時代初期の土器様相」『栗林遺跡・七瀬遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1990 「V 考察 1 廻間式土器」『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 甘粕 健 1986 「第四章 第一節 古墳時代の概観」第二節 古墳文化の形成『新潟県史』通史編 1 新潟県
- 飯山市教育委員会 1978 『田草川尻遺跡Ⅱ』
- 飯山市教育委員会 1980 『長野県飯山市旭遺跡群北原遺跡発掘調査報告書』
- 飯山市教育委員会 1984 『田草川尻遺跡Ⅲ』
- 飯山市教育委員会 1985 『北原遺跡Ⅳ』
- 飯山市教育委員会 1986 『飯山の遺跡』
- 飯山市教育委員会 1986 『田草川尻遺跡Ⅳ』
- 飯山市教育委員会 1990 『千劫遺跡の研究』
- 飯山市教育委員会 1991 『田草川尻遺跡Ⅶ』
- 飯山市教育委員会 1992 『有尾遺跡』
- 飯山市教育委員会 1992 『田草川尻遺跡Ⅷ』
- 飯山市教育委員会 1994 『南原・深沢遺跡』
- 飯山市教育委員会 1994 『勘介山古墳測量調査報告書』
- 飯山市教育委員会 1995 『須多ヶ峯遺跡』
- 飯山市教育委員会 1997 『放伝寺2号古墳』
- 飯山市誌編纂委員会 1993 『歴史編(上)』
- 石川日出志 2000 「天王山式土器弥生中期説への反論」『新潟考古』第11号 新潟県考古学会
- 石川日出志 2002 「栗林式土器の成立過程」『長野県考古学会誌』99・100 長野県考古学会
- 石川日出志 2012 「栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」『中野市柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 家田淳一 2000 『陶器の編年 2. 播鉢・鉢・片口・水指・茶入・土瓶・水注・灯火具』九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会
- 岩崎卓也 1989 「IV まとめ」『七瀬古墳群・田妻中畷古墳群』中野市教育委員会
- 岩田 隆 1997 「第6章 第2節 越前」『中・近世の北陸』桂書房
- 内田律雄 2009 『古代日本海の漁撈』同成社
- 大竹正和 2002 『日本海東縁の地震発生ポテンシャル』『日本海東縁の活断層と地震テクトニクス』東京大学出版会
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』ニューサイエンス社
- 小野正敏 1982 「14～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会
- 河西克造 2000 「第2章 第5節 川田条里遺跡における自然災害痕跡と水田の消長」『川田条里遺跡』第3分冊 (財)長野県埋蔵文化財センター
- 加藤 学 2004 「新潟県域における北方系の土器器表 事例紹介と問題提起」『古代阿賀北地域の土器様相』新潟公庫土器研究会
- 春日真実 1996 「越後における5世紀から8世紀の竪穴建物の変遷」『新潟考古学談話会会報』第16号 新潟考古学談話会
- 春日真実 2007 「越後における古代の煮炊具について」『新潟考古』18

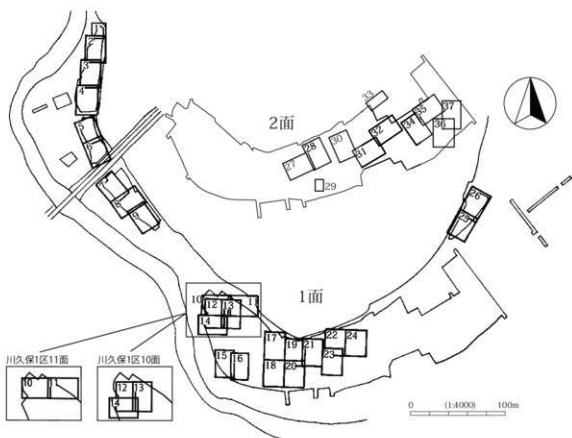
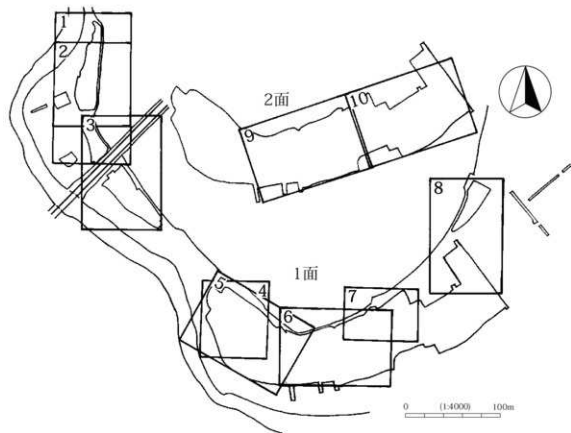
- 金井久次・桐原 健 1958 「長野県中野市赤岩神宮寺下遺跡調査概報」『信濃』Ⅲ 10-8
- 桐原 健 1956 「北信濃替佐の弥生式石器」『信濃』Ⅲ -8-6
- 桑原正史 1986 「第4章 第6節 大和政権と越佐」『新潟県史 通史編1』新潟県
- 小平和夫 1990 「第3章 第5節 古代の土器」『松本市内その1 総論編』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 小林謙一 2008 「縄文時代の年代(東日本)」『総覧 縄文土器』アムプロモーション
- 小林暁暉 1971 「飯盛マツ年輪の一考察」『高井』第19号 高井地方史研究会
- 木島平村教育委員会 1997 「根塚遺跡・大塚遺跡・平塚遺跡」
- 木島平村教育委員会 2002 「根塚遺跡」
- 佐久市教育委員会 2001 「西一本柳遺跡群V・VI 中長塚遺跡I・II 松の木遺跡I・II」
- 佐久市教育委員会 1996 「濁り遺跡」
- 笹澤 浩 1986 「箱清水式土器の文化圏と小地域」『歴史手帳』14-1 名著出版
- 笹澤 浩 1988 「時代と編年(2)古墳時代の土器」『長野県史 考古資料編4』長野県史刊行会
- 笹澤 浩 1996 「粟林式土器」『日本土器事典』雄山閣
- 笹澤 浩 2010 「第一章 第一節 草原と森の狩人の活躍」『第二節 稲作農業のはじまりと古墳の出現』『豊野町の歴史』豊野町誌刊行委員会
- 佐藤平八 1993 「第二節 山と水をめぐる変化」『飯山市誌 歴史編(上)』飯山市誌編集委員会
- 三水村教育委員会 1992 「三水村の文化財」
- 信濃史料刊行会 1956 「信濃史料第1巻」
- 白石太一郎 2006 「第3章 須恵器の暦年代」『年代のものさし 陶器の須恵器』大阪府立近つ飛鳥博物館
- 信州大学教育学部歴史研究会編 1982 『信州史事典①松本藩』名著出版
- 上越市史編さん委員会 2004 『上越市史 通史編1 自然・原始・古代』
- 鶴橋俊夫 1985 「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」『信濃』38-4
- 長野市教育委員会 1985 「須坂市遺跡詳細分布図」
- 田島明人 2009 「古墳確立期土器の広域編年—東日本を対照とした検討(その3)」『石川県埋蔵文化財情報』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 田中照久 2006 「越前 近世の越前」『江戸時代のやきもの 記念講演会・シンポジウム資料集』(財)瀬戸市文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 田辺昭三 1981 「第三章 須恵器生産の展開」『須恵器大成』角川書店
- 増原長剛 1986 「古墳に造られた経塚二例」『高井』第74号
- 千野 浩 2001 「第4章 天王山式土器と天王山式の文様要素を取り入れた吉田式土器について」『長野吉田高校グラウンド遺跡Ⅱ』長野市教育委員会
- 佃 栄吉・栗田泰夫・奥村晃史 1990 「長野断層系から発生する善光寺聖地地震再来間隔と断層変位量推定 ボーリング及びトレンチ発掘調査報告」『地震予知連絡会議会報』44
- 塚原弘昭 2011 『長野県の地震入門』しなのき書房
- 土屋 積 1997 「第9章 第2節 弥生時代後期から古墳時代前期の土器」『飯田古屋敷・玄照寺跡・がまん潭遺跡・沢田銅土遺跡・清水山窯跡・池田端窯跡・牛出古窯遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 土屋 積 1998 「第6節 成果と課題—善光寺北部の古墳出現前後—」『牛出・葦山・風呂屋・対面所・飛山・大谷地・八号堤遺跡』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 寺島孝典 1999 「長野盆地南部の様相」『99 シンポジウム長野県の弥生土器編年発表要旨』
- 寺内隆夫 1998 「第5章 第1節 弥生時代の土地利用」1998 『原代遺跡群・更埴条里遺跡 弥生・古墳時代編』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 寺内隆夫 2003 「山屋敷1 遺跡出土土器にみる中部高地地域・関東地方との交流関係」『上越市史 資料片2 考古』上越市史編さん委員会
- 寺沢 薫 2000 『王権誕生』講談社
- 東部町教育委員会 2002 「久保の上遺跡」
- 東部町教育委員会 1995 「久保田・宮の反・善福寺」
- 鳥羽英継 1998 「第5章 第3節 古墳時代の土器編年」『更埴条里遺跡・原代遺跡群 弥生・古墳時代編』(財)長野県埋蔵文化財センター

- 鳥羽英継 2000 「第4章 第1節 3 善光寺平南部の古墳時代前期～古代の土器編年」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群 総論編』(財)長野県埋蔵文化財センター
- 豊野町誌刊行委員会 2001 『豊野町の資料(一) 豊野町誌5』
- 豊田村教育委員会 1980 『南大原遺跡』
- 豊田村教育委員会 1994 『飯綱平遺跡』
- 豊田村教育委員会 2005 『飯綱平遺跡II』
- 中村鉄治・田中毅・酒井建次、湯本軍一監修 1995 『一目でわかる地域の歴史年表』北信ローカル社
- 中野亮一 2009 「第4章 第3節 小結」『西ツツ屋遺跡・表町遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 中野市教育委員会 1979 『安源寺遺跡II』
- 中野市教育委員会 1989 『七瀬古墳 田麦中畝古墳群』
- 中野市教育委員会 1995 『安源寺遺跡』
- 中野市教育委員会 1996 『西条・岩船遺跡群発掘調査概報』
- 中野市教育委員会 1997 『西条・岩船遺跡発掘調査報告書』
- 中野市教育委員会 2003 『安源寺遺跡』
- 中野市教育委員会 2006 『長野県中野市遺跡詳細分布図』
- 中野晴久 1995 「生産地における編年」『常滑焼と中世社会』小学館
- 中野雄二 2000 「波佐見」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 中村次郎 1981 「第2章 第5節 長丘丘陵」『中野市誌 自然編』中野市誌編纂委員会
- 中村 浩 1993 「古墳時代須恵器の編年の研究」柏書房
- 中山誠二 2009 「中部高地の弥生時代集落とその景観変化」『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究刊行委員会
- 中沢道彦 2008 「佐野式土器」『総覧 縄文土器』アムプロモーション
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1994 『粟林遺跡 七瀬遺跡』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1997a 『石川条里遺跡 第1分冊』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1997b 『飯田古屋敷遺跡・安照寺跡・がまん淵遺跡・沢田銅土遺跡・清水山窯跡・池田端窯跡・牛出古窯遺跡』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1998a 『屋代遺跡群・更埴条里遺跡 弥生・古墳時代編』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1998b 『牛出遺跡 並山遺跡 風呂屋遺跡 対面所遺跡』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1998c 『浅川扇状地遺跡群 三才遺跡』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1998d 「第5章 於下遺跡 第6章 今里遺跡」『籾ノ井遺跡群 石川条里遺跡 築地遺跡 於下遺跡 今里遺跡』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1998e 『松原遺跡 弥生・総論編6 弥生後期・古墳前期』
- 長野県埋蔵文化財センター 2000a 『松原遺跡 弥生・総論編3 弥生中期土器本文』
- 長野県埋蔵文化財センター 2000b 『松原遺跡 弥生・総論編7』長野県埋蔵文化財センター
- 長野県埋蔵文化財センター 2000c 『松原遺跡 弥生・総論編8 総論・自然科学分析』
- 長野県埋蔵文化財センター 2004 『川久保遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2012 『中野市柳沢遺跡』
- 長野県埋蔵文化財センター 2012 『南曾峯遺跡』
- 長野市教育委員会 2005 『南条遺跡』
- 中野晴久 1995 「生産地における編年」『常滑焼と中世社会』小学館
- 費田 明 2000a 「第1章 第3節 4(2) 文様帯の設定」『松原遺跡 弥生総論3』長野県埋蔵文化財センター
- 費田 明 2000b 「第1章 壺形土器の文様帯構造と変遷」『松原遺跡 弥生総論7』長野県埋蔵文化財センター
- 仁科良夫・松島信幸・赤羽貞幸・小坂共栄 1985 「長野県の活断層」『信州大学理学部紀要』第20巻第2号 信州大学理学部
- 西 弘海 1975 「土器様式の成立とその背景」小林行雄古稀記念論文集『考古学論考』(1986『土器様式の成立とその背景』真陽社 に再録)
- 西元正憲 2005 「第IV章 第1節 松代城下町跡出土陶磁器の様相」『松代城下町跡』長野市教育委員会
- 西山克己 1990 「第4章 第11節 遺跡に見られる自然災害」『籾ノ井遺跡群』(財)長野県埋蔵文化財センター

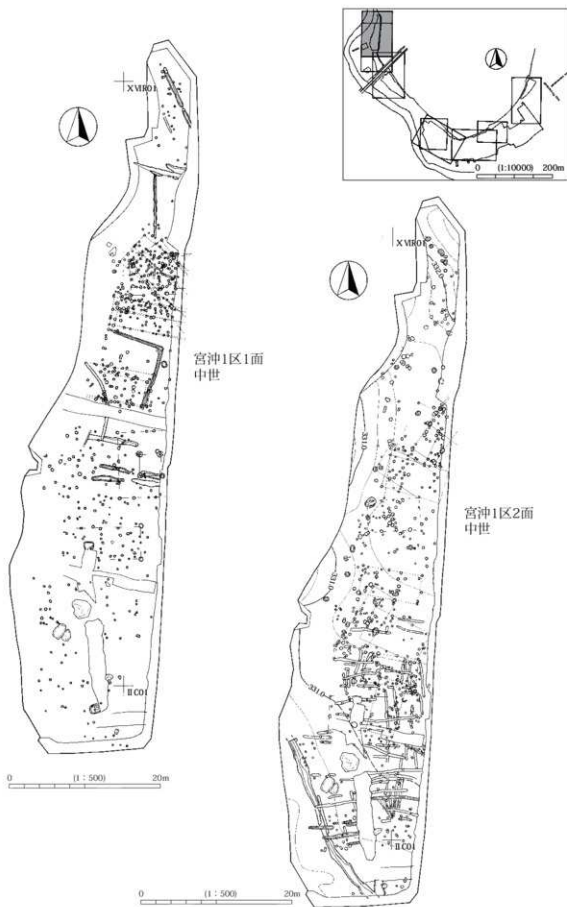
- 野土建紀 2000 「磁器の編年(色絵以外) 1. 碗・小杯・皿・紅皿・紅猪口」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 野村忠治 2009 「第V章 古代の遺構と遺物」『宇安遺跡』上越市教育委員会
- 服部 郁 1993 「幕末から明治の瀬戸窯」『遺跡にみる幕末から明治(江戸遺跡研究会第6回発表要旨)』江戸遺跡研究会
- 花岡弘・西山克己 1995 「信濃の6世紀・7世紀の土器様相」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 原 明芳 1989 「第7章 第2節 吉田川西遺跡における食器の変容」『吉田川西遺跡(財)長野県埋蔵文化財センター』
- 原 明芳 1996 「信濃における奈良・平安時代の集落展開」『帝京大学 山梨文化財研究所研究報告』第7集 帝京大学山梨文化財研究所
- 馬場伸一郎 2007 「大規模集落と手工業生産にみる弥生中期後葉の長野盆地南部」『考古学研究』54-1 考古学研究会
- 馬場伸一郎 2009 「磨製石斧の「流通」と「交易」」『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究刊行委員会
- 廣田和徳 1999 「第V章 第1節 土器」『榎田遺跡』第2分冊 長野県埋蔵文化財センター
- 2000 「第1章 第5節 太田郷から太田荘へ」『豊野町誌 歴史編』豊野町誌刊行会
- 藤木久志編 2007 『日本中世気象災害史年表稿』高志書院
- 藤沢良祐 1982a 「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』第8号
- 藤沢良祐 1982b 「灰釉陶器および山茶碗の型式編年」『研究紀要』1 瀬戸市歴史民俗資料館(2008「中世瀬戸窯の研究」高志書院に再録)
- 藤沢良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要』V 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤沢良祐 1987 「本業焼の変遷(1)」『研究紀要』VI 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤沢良祐 1988 「本業焼の変遷(2)」『研究紀要』VII 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤沢良祐 1989 「本業焼の変遷(3)」『研究紀要』VIII 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤沢良祐 1991 「古瀬戸古窯址群II—古瀬戸後期様式の編年」『研究紀要』X 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤沢良祐 1993 「第4章 瀬戸・美濃大窯の編年」『瀬戸市史』陶磁史篇四 瀬戸市史編纂委員会
- 藤沢良祐 1995a 「古瀬戸古窯址群III—古瀬戸前期様式の編年」『研究紀要』3輯
- 藤沢良祐 1995b 「東濃型山茶碗の型式編年」『尾呂』瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤森栄一 1947 「千曲川下流長峰・高丘の弥生土器」『考古学』8-8
- 松尾昌彦 2008 「古墳時代の東国経営」『古墳時代の実像』土生田純之編 吉川弘文館
- 松下久子 2000 「平戸・三川内」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 松本市教育委員会 1996 『竹淵遺跡II』
- 松本建速 2010 「蝦夷は古代日本国領域からの移住者か」『東北学』第22号 東北芸術工科大学 東北文化センター
- 水沢教子 1998 「第5章 第4節 弥生・古墳時代の集落」『屋代遺跡群・更埴条里遺跡 弥生・古墳時代編(財)長野県埋蔵文化財センター』
- 宮坂武男 2001 『図解 山城探訪 十一集 水内資料編』長野日報社
- 宮崎泰史 2006 「第2章 5 陶色の変遷」『年代のものさし 陶色の須恵器』大阪府立近飛鳥博物館
- 宮田進一 1997 「第4章 第4節 越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会 桂書房
- 望月 映 1990 「第3章 第1節 古代の聚落(住居址)」『総論編(財)長野県埋蔵文化財センター』
- 森 峰雄 2000 「陶器の編年 1. 碗・皿」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 高田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 山田正子 1989 「第三章 第三節 離農の動き」『長野県史 通史編』第6巻 近世三 長野県史刊行会
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
- 和田一之輔 2011 「4 商業活動 度量衡」『平城京事典(独)奈良文化財研究所編』
- 渡邊明和 2001 「第VII章 まとめ 1 弥生土器」『八幡山遺跡発掘調査報告書』新津市教育委員会
- 渡辺敏泰 1994 「第V章 第1節 栗林遺跡周辺の地形形成過程」『栗林遺跡・七瀬遺跡(財)長野県埋蔵文化財センター』
- 渡辺敏泰 1994 「第三章 第1節 遺跡の概要」『栗林遺跡・七瀬遺跡(財)長野県埋蔵文化財センター』



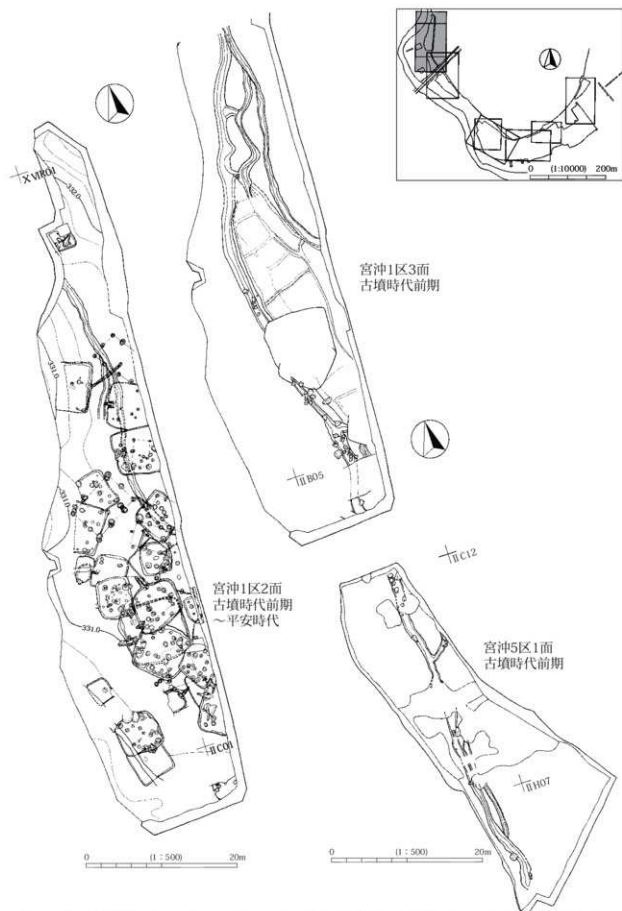
第 239 図 川久保・宮沖遺跡遺構全体図



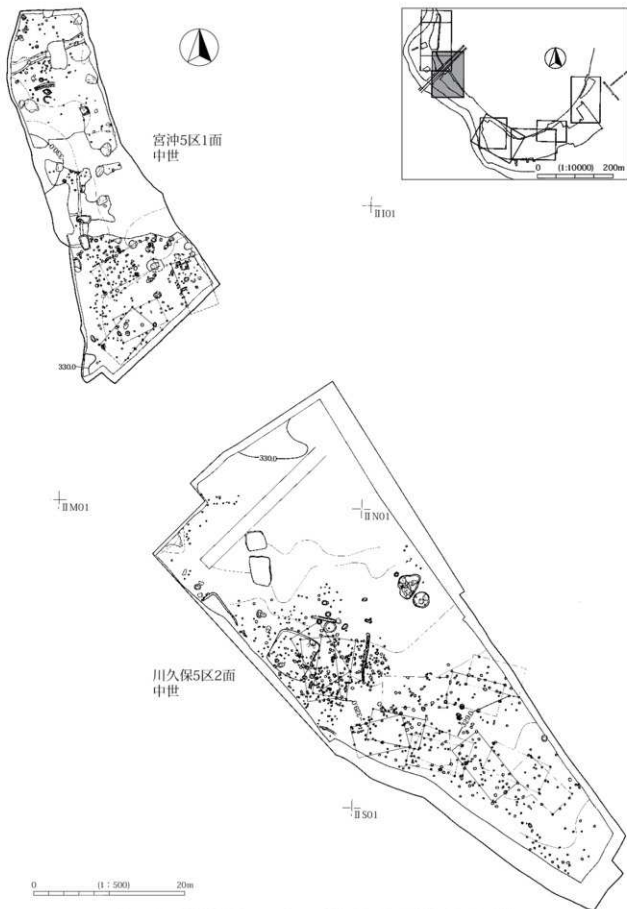
第 240 図 遺構割付図の位置



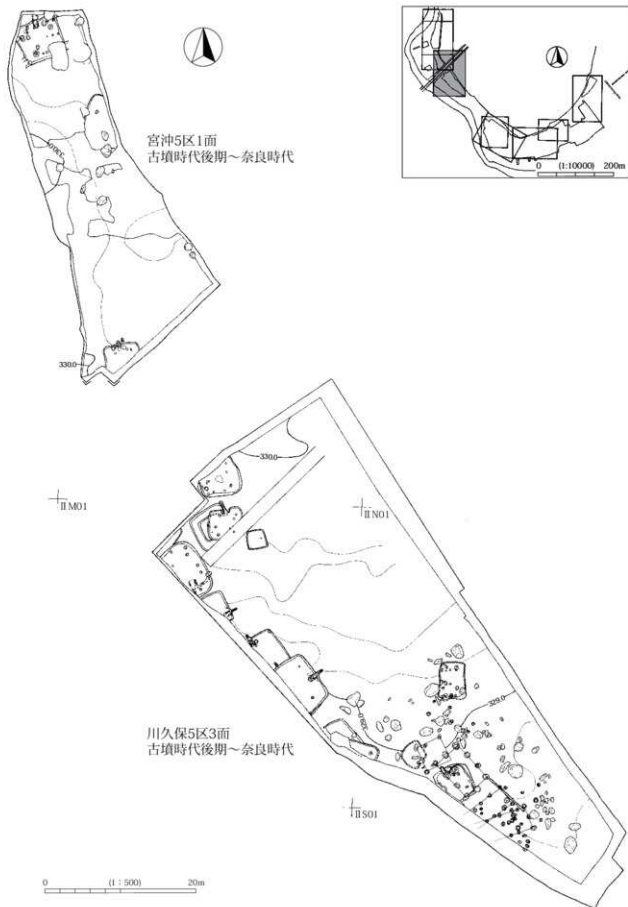
第241図 割付遺構図 (1:500) 1 宮沖1区1・2面1中世



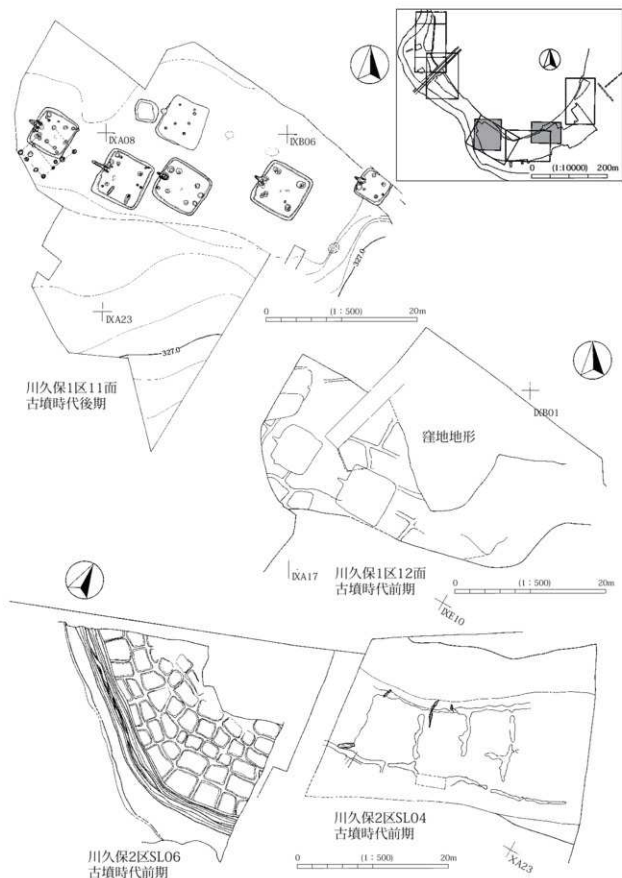
第 242 図 削付遺構図 (1 : 500) 2 宮沖 1 区 2 面 1 古墳時代前期～平安時代、同 1・5 区 3 面 2 古墳時代前期



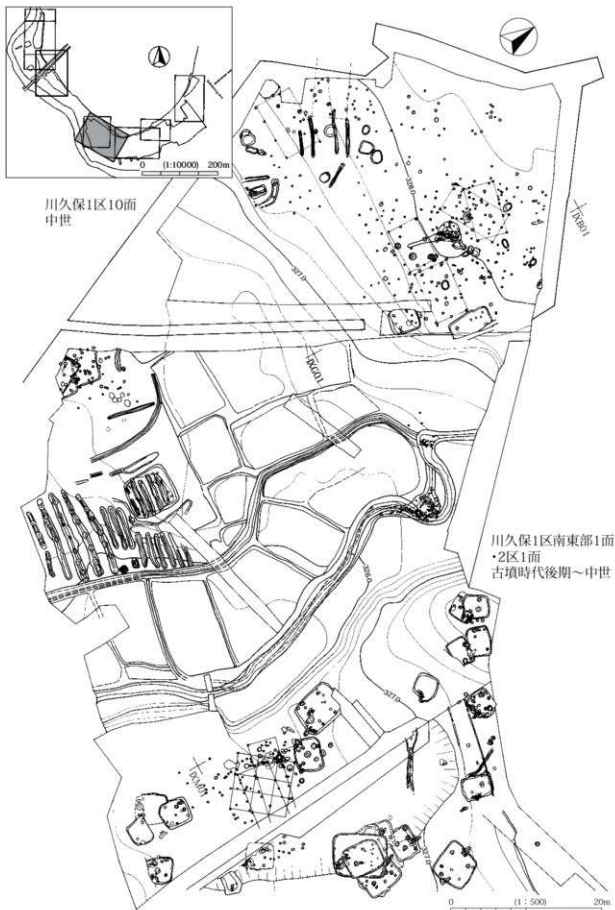
第 243 図 割付遺構図 (1 : 500) 3 宮沖 5 区 1 面・川久保 5 区 2 面 3 中世



第244図 割付遺構図(1:500) 4 宮沖5区1面・川久保5区3面3古墳時代後期～奈良時代



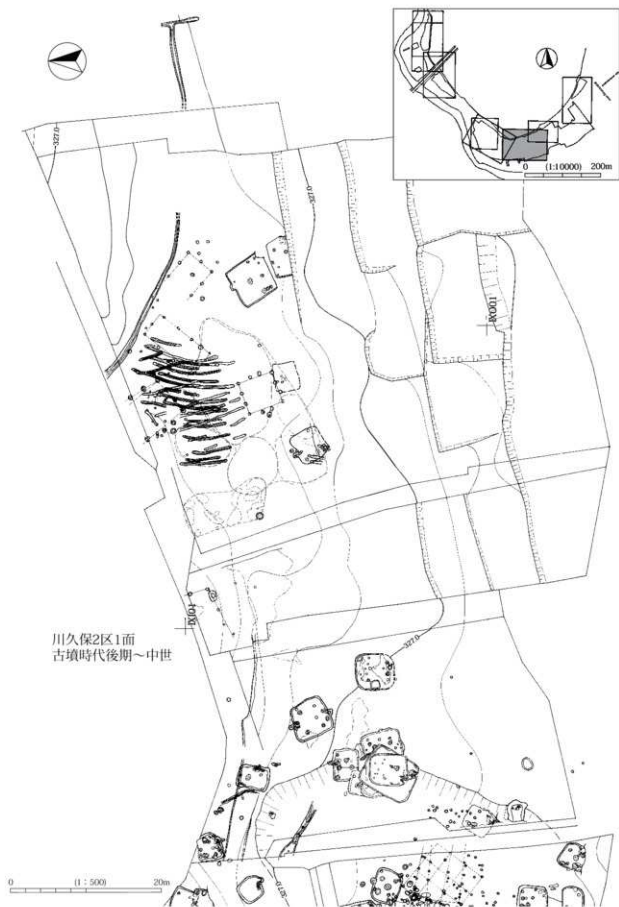
第245図 割付遺構図 (1:500) 5 川久保1区11面4古墳時代後期、
同1区12面4古墳時代前期、同2区SL04・067古墳時代前期



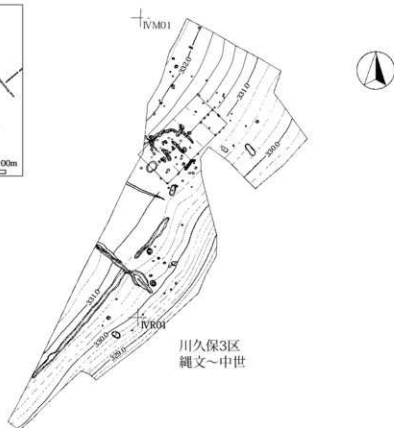
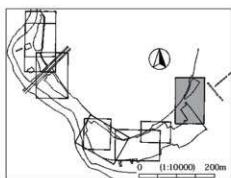
川久保1区10面
中世

川久保1区南東部1面
・2区1面
古墳時代後期～中世

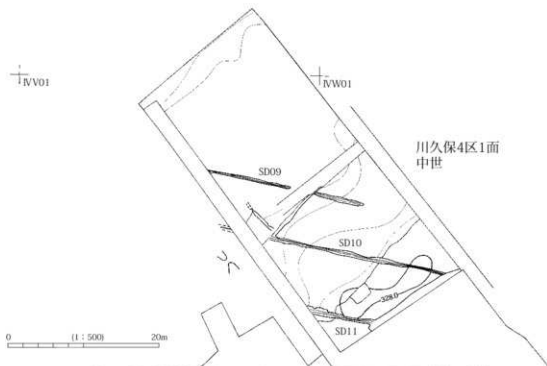
第 246 図 割付遺構図 (1 : 500) 6 川久保 1 区 10 面・南東部 1 面、同 2 区 1 面 5 古墳時代後期～中世



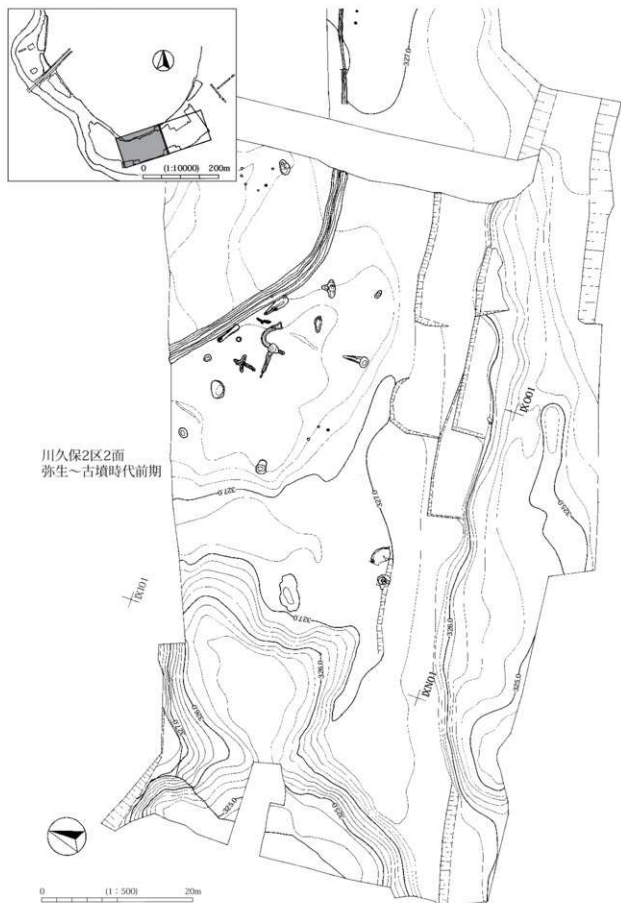
第247図 割付遺構図(1:500) 7 川久保2区1面6古墳時代後期～中世



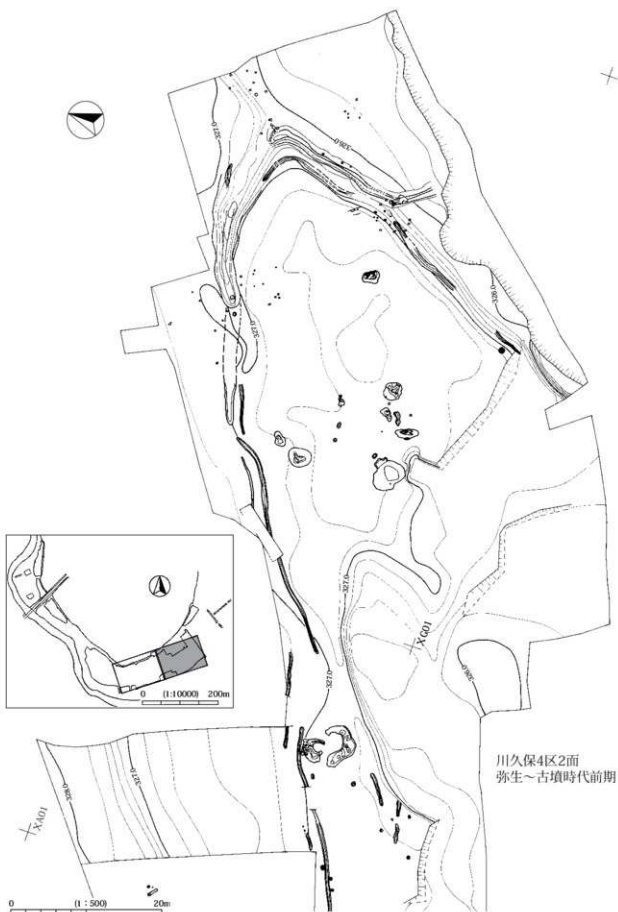
IVQ01



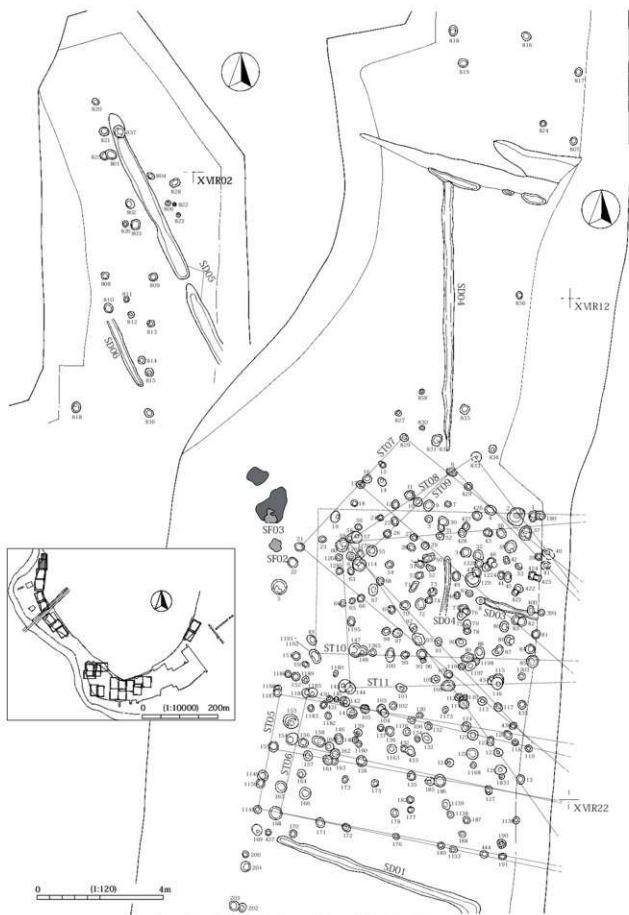
第 248 図 割付遺構図 (1:500) 8 川久保3区、同4区1面8縄文～中世



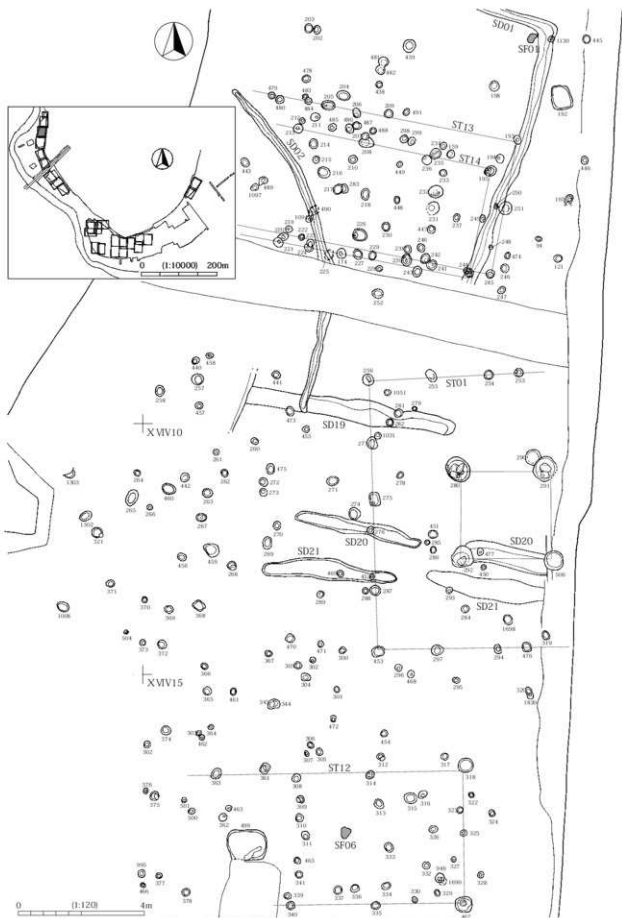
第249図 割付遺構図(1:500) 9 川久保2・4区2面9弥生~古墳時代前期



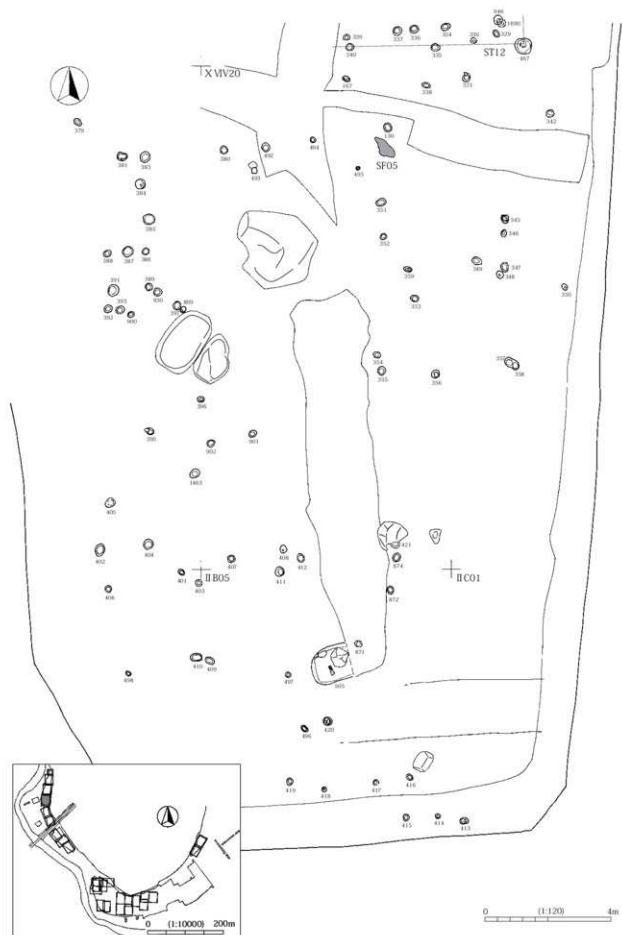
第250図 割付遺構図 (1:500) 10 川久保2・4区2面 10 弥生～古墳時代前期



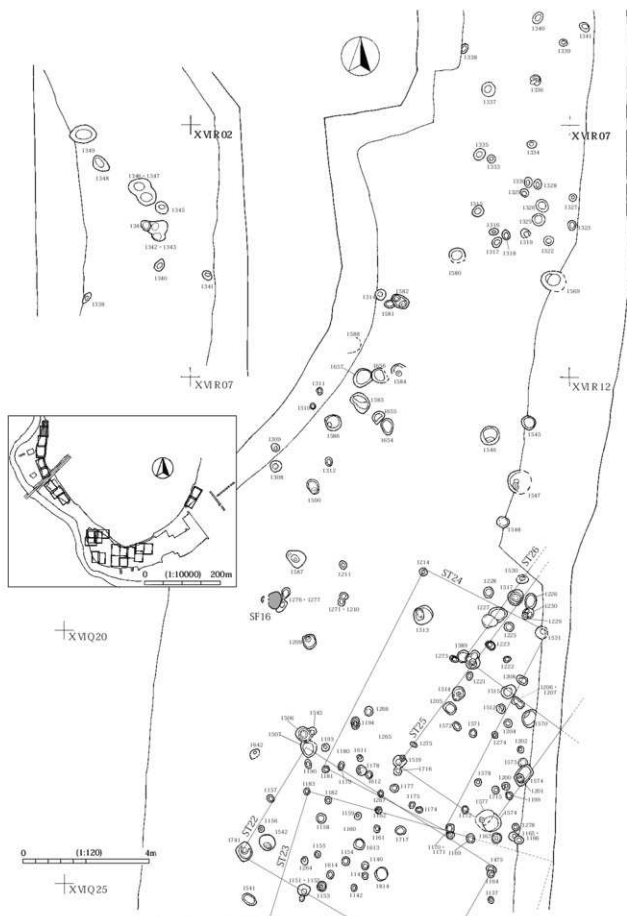
第251図 割付遺構図 (1:120) 1 宮沖1区1面1・2中世



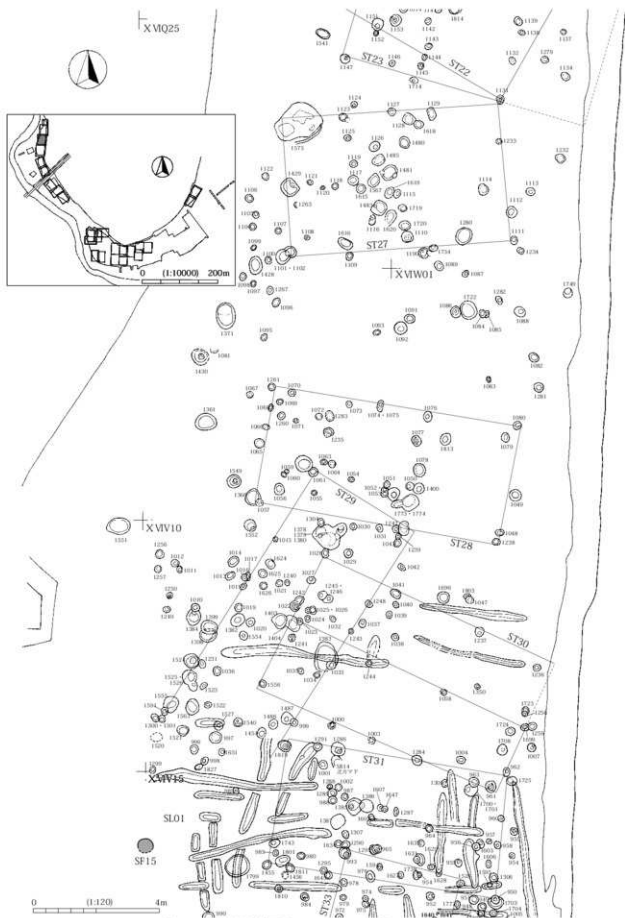
第252図 割付遺構図(1:120) 2 宮中1区1面3中世



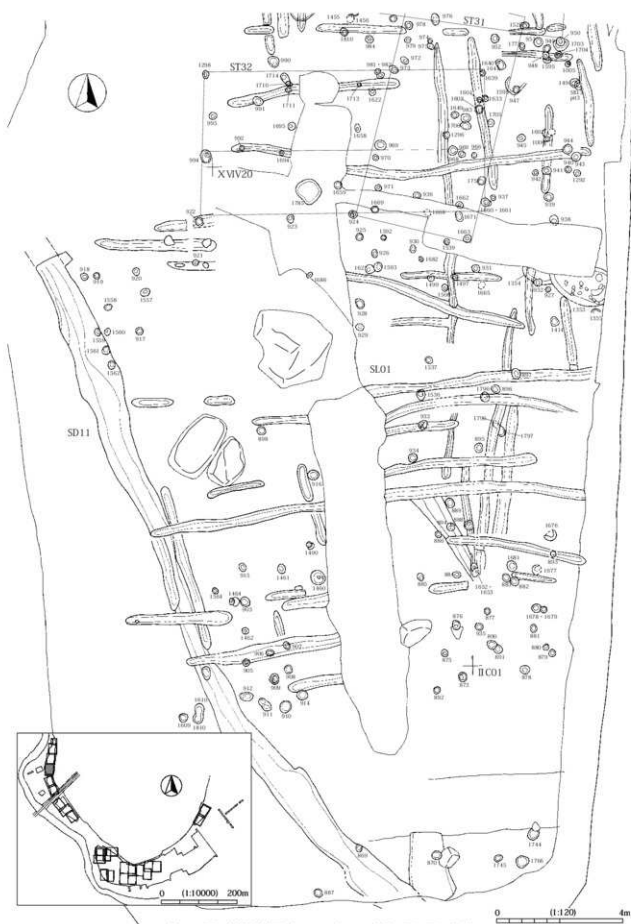
第253図 割付遺構図(1:120) 3 宮沖1区1面4中世



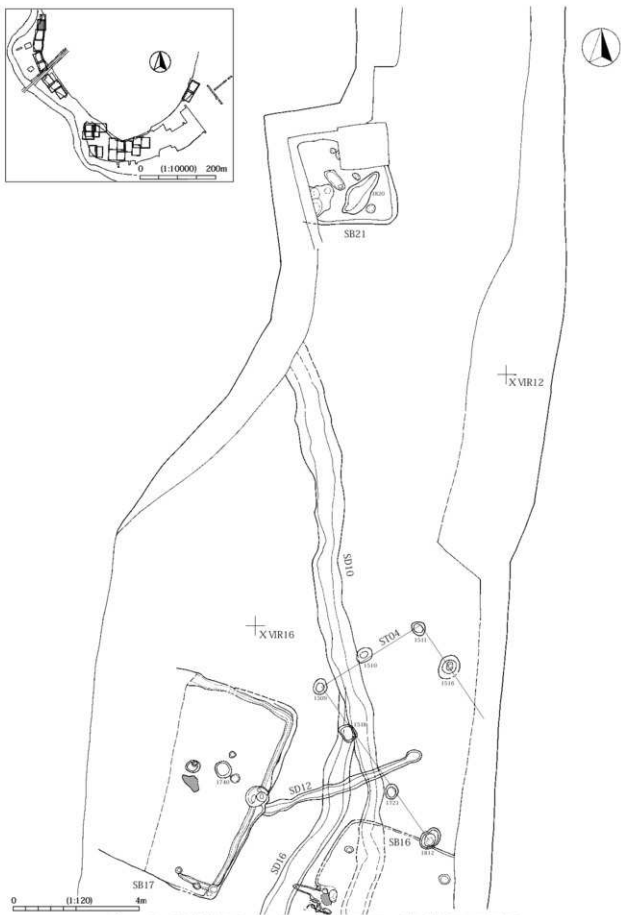
第254図 割付遺構図 (1:120) 4 宮沖1区2面1・2中世



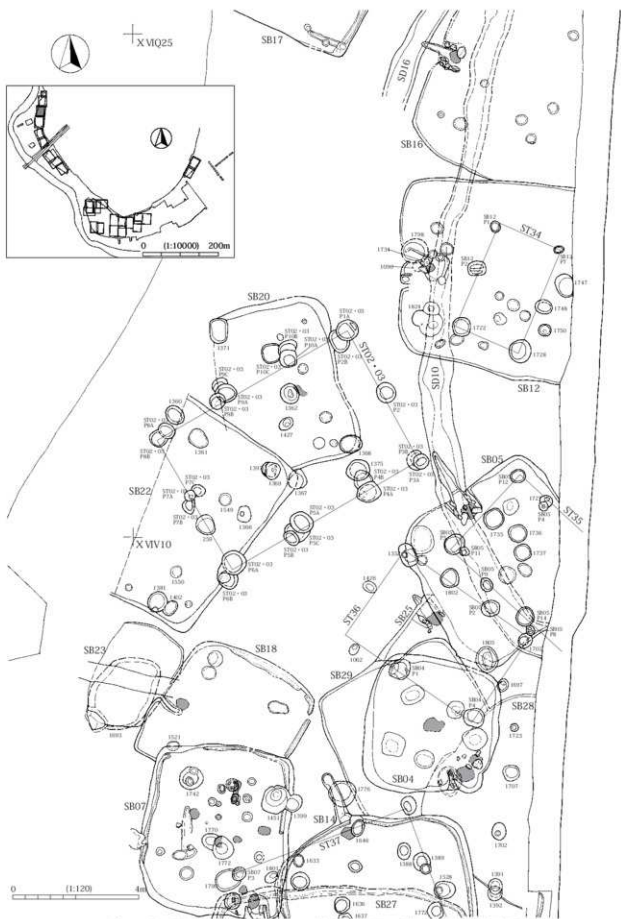
第255図 割付遺構図(1:120) 5 宮沖1区2面3中世



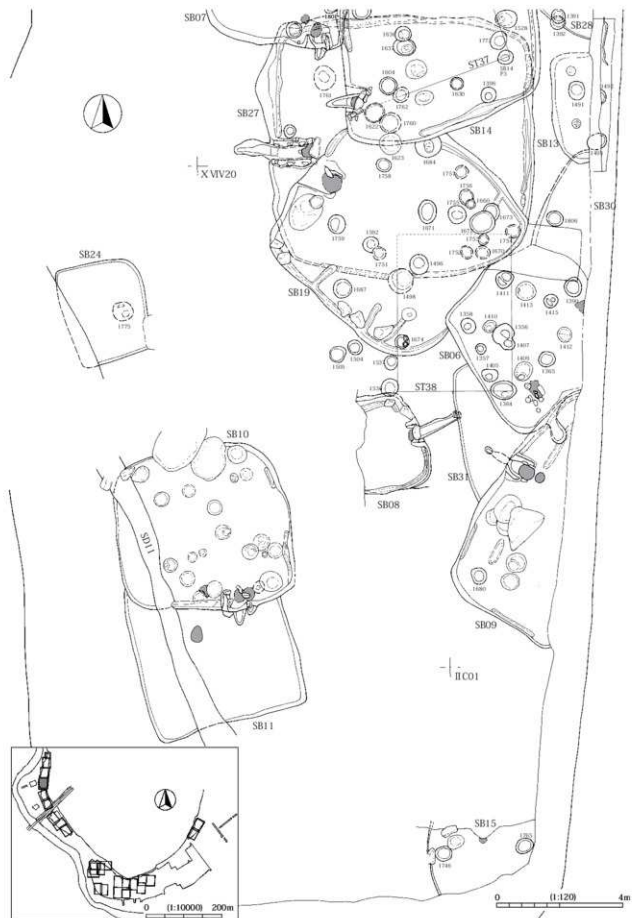
第256図 割付遺構図(1:120) 6 宮沖1区2面4中世



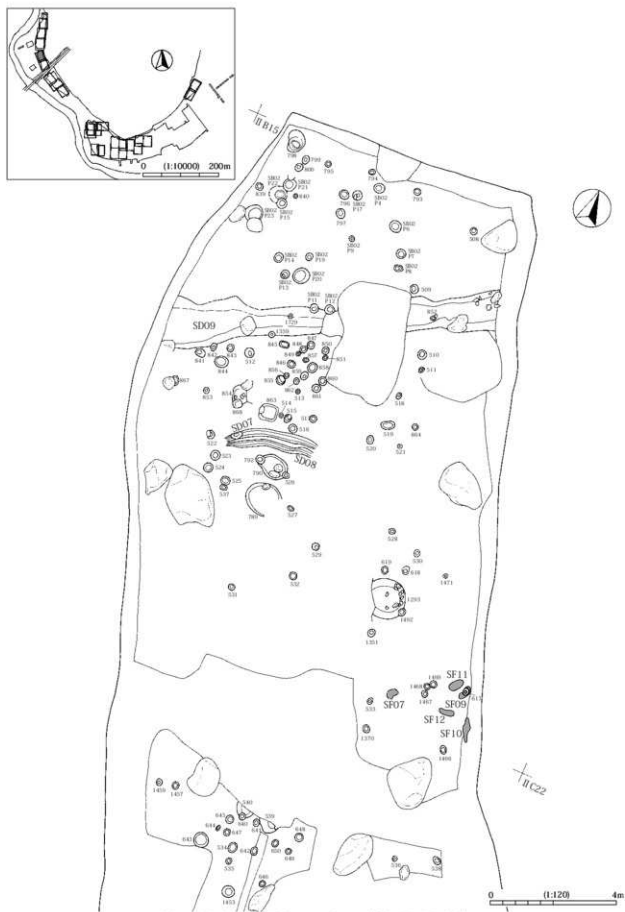
第 257 図 割付遺構図 (1 : 120) 7 宮沖 1 区 2 面 2 古墳時代後期～平安時代



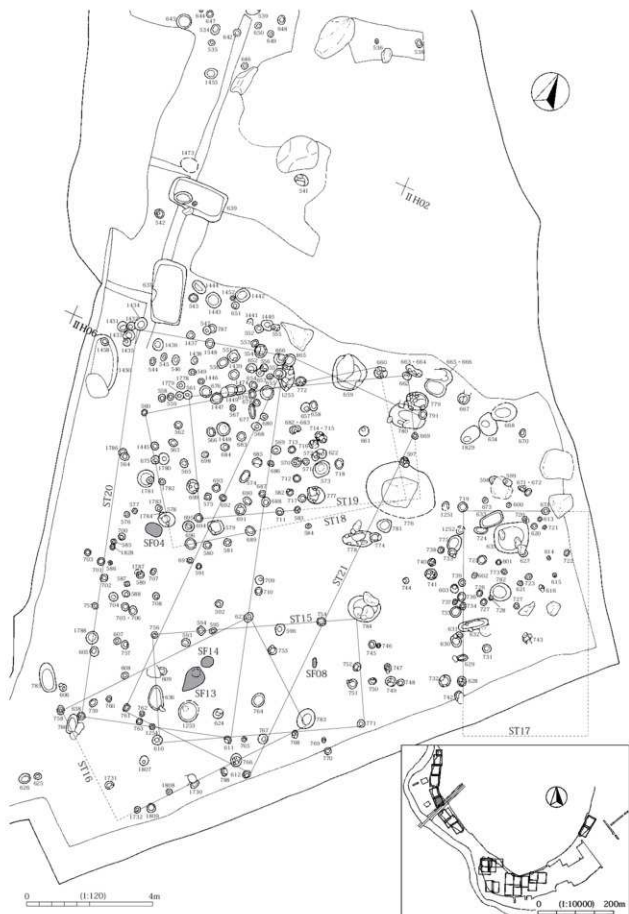
第258図 削付遺構図(1:120) 8 宮沖1区2面3古墳時代後期~平安時代



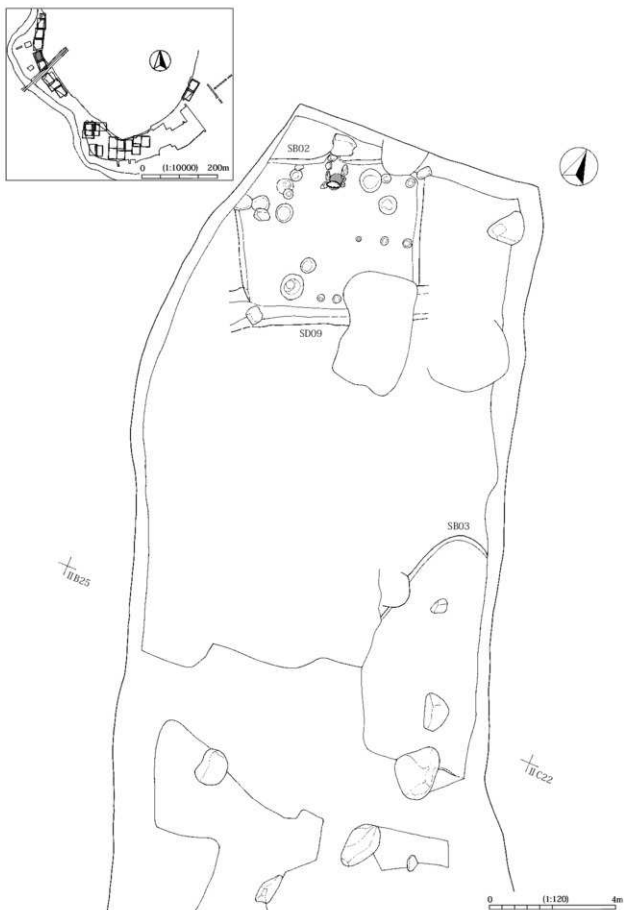
第259図 割付遺構図 (1:120) 9 宮沖1区2面4古墳時代後期~平安時代



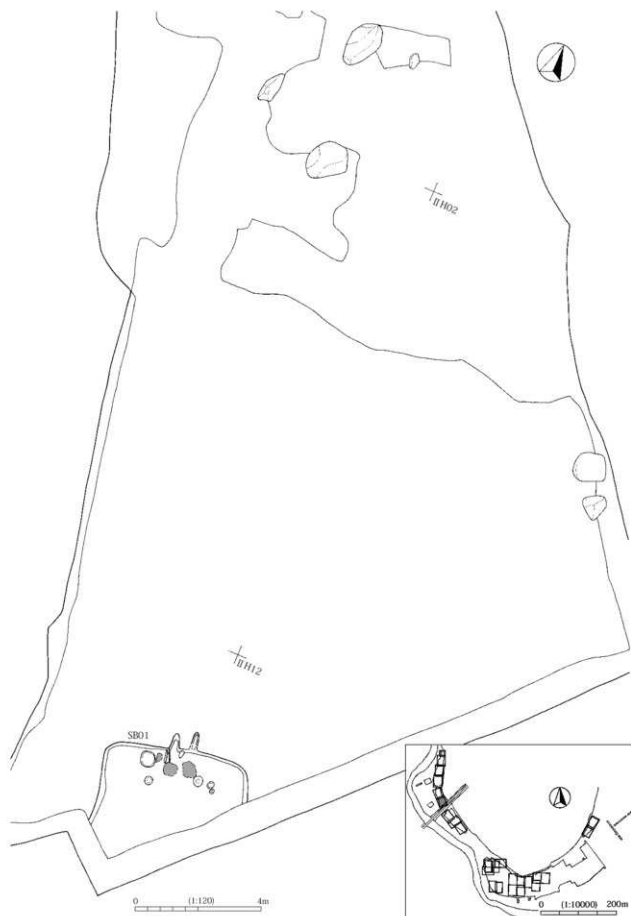
第260図 割付遺構図(1:120) 10 宮沖5区1面5中世



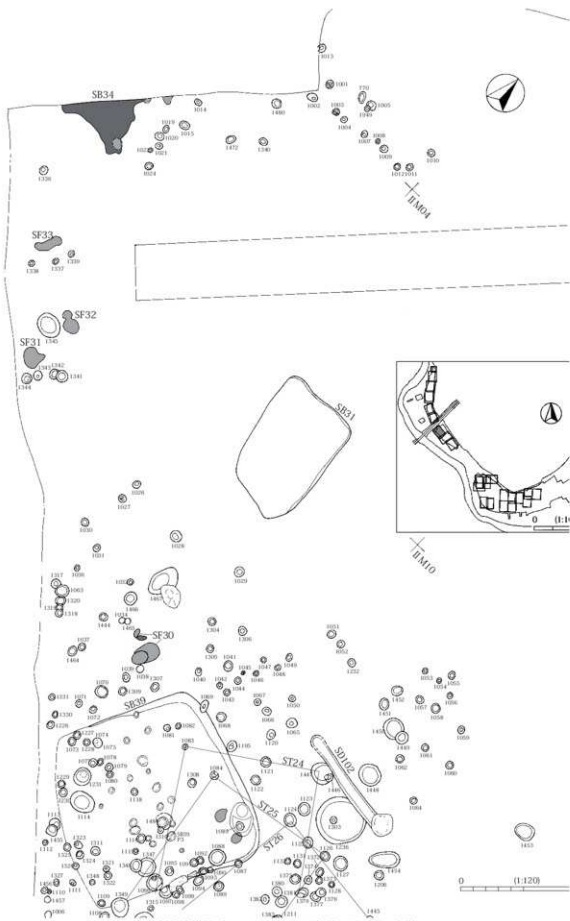
第261図 割付遺構図(1:120) 11 宮沖5区1面6中世



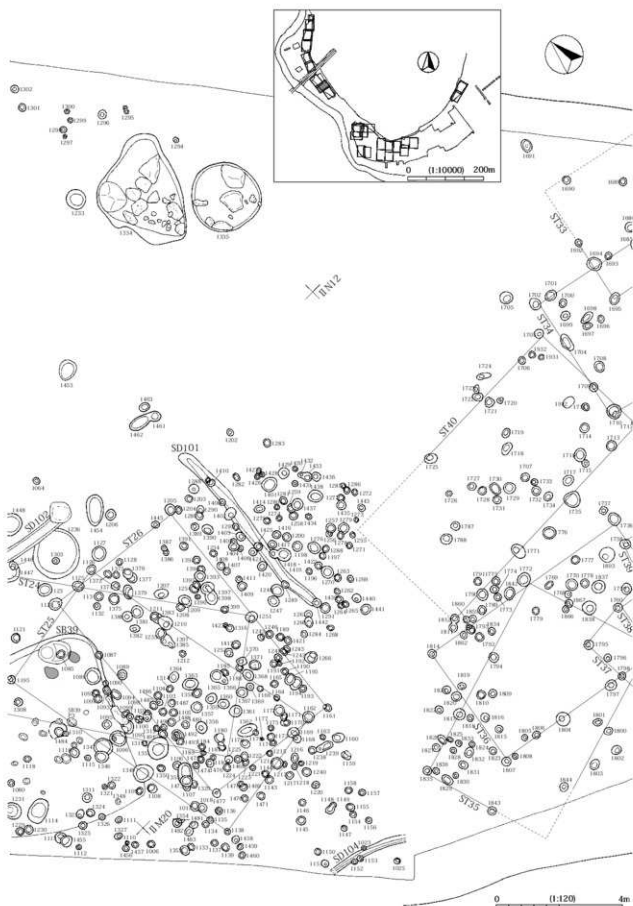
第262図 割付遺構図(1:120) 12 宮沖5区1面5古墳時代後期~奈良時代



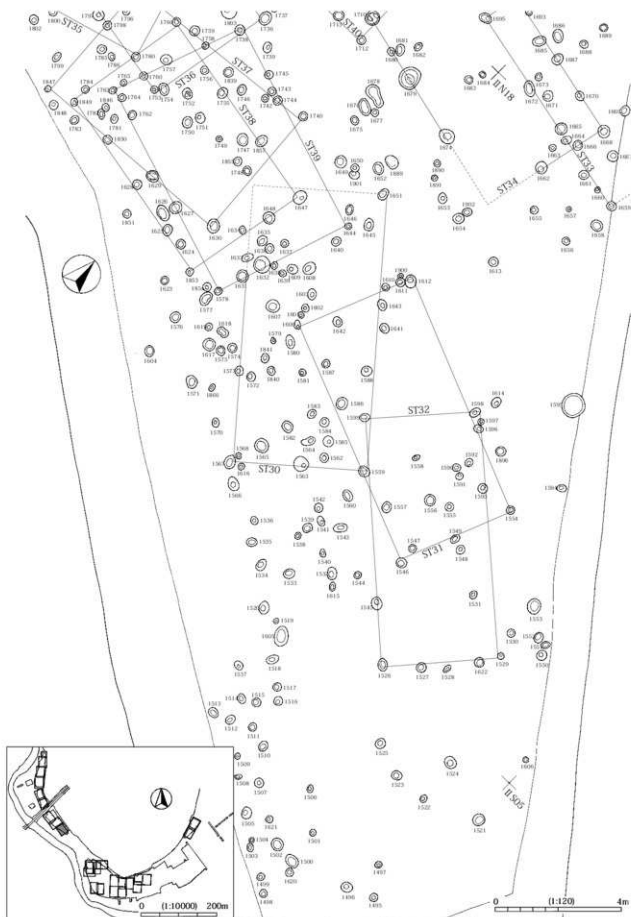
第 263 図 割付遺構図 (1 : 120) 13 宮沖 5 区 1 面 6 古墳時代後期～奈良時代



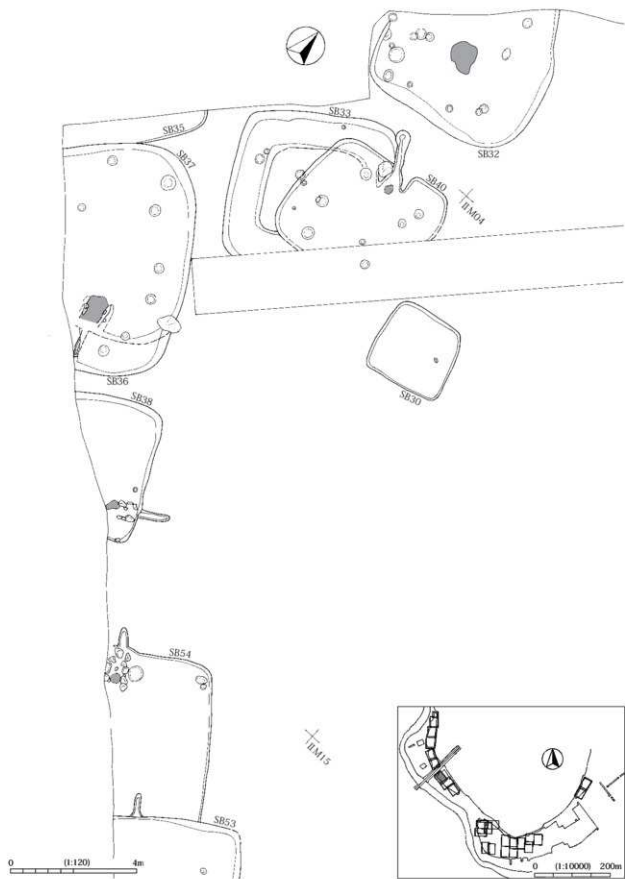
第264図 割付遺構図(1:120) 14 川久保5区2面7中世



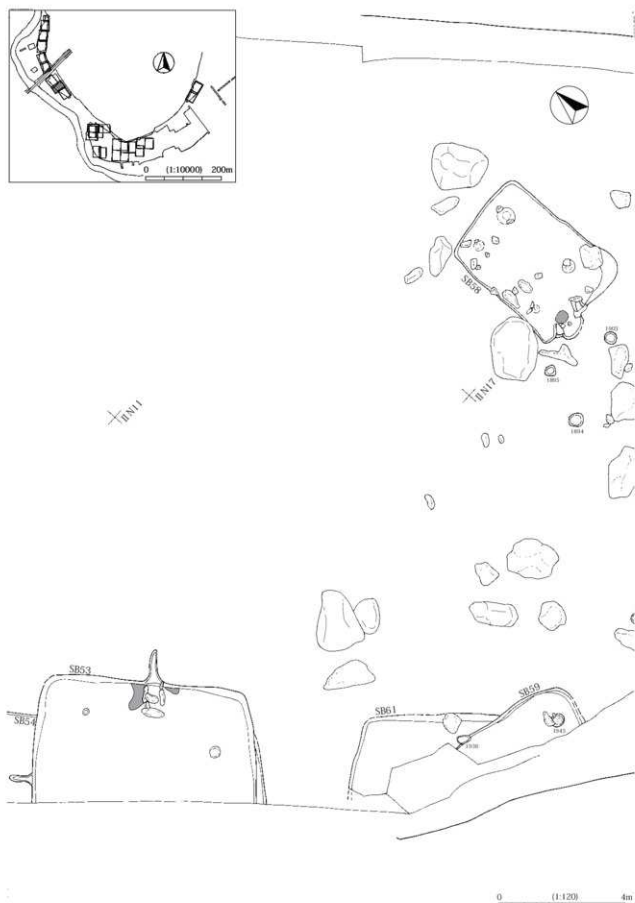
第265図 割付遺構図(1:120) 15 川久保5区2面8中世



第266図 割付遺構図 (1 : 120) 16 川久保5区2面9中世



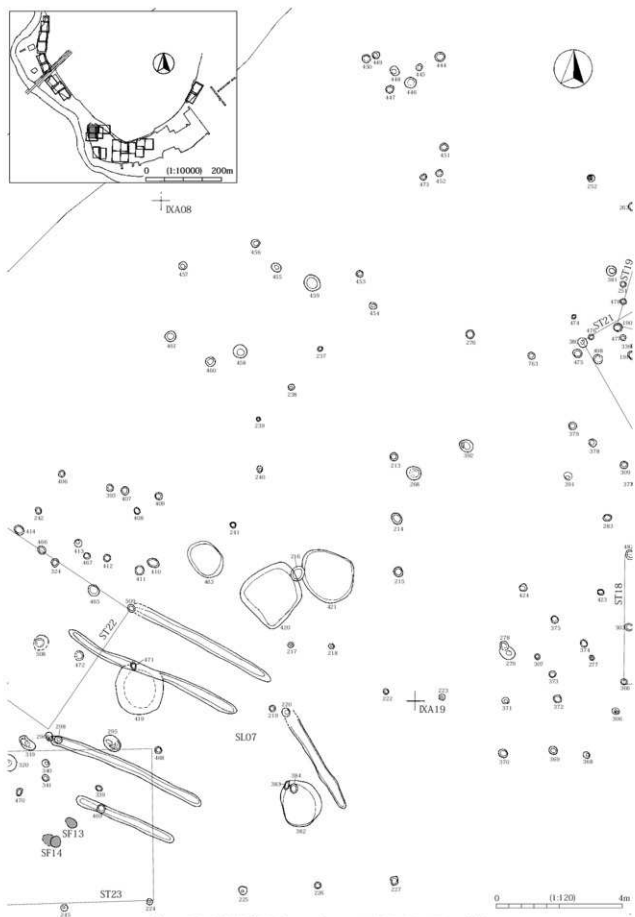
第267図 割付遺構図 (1 : 120) 17 川久保5区3面7古墳時代後期~奈良時代



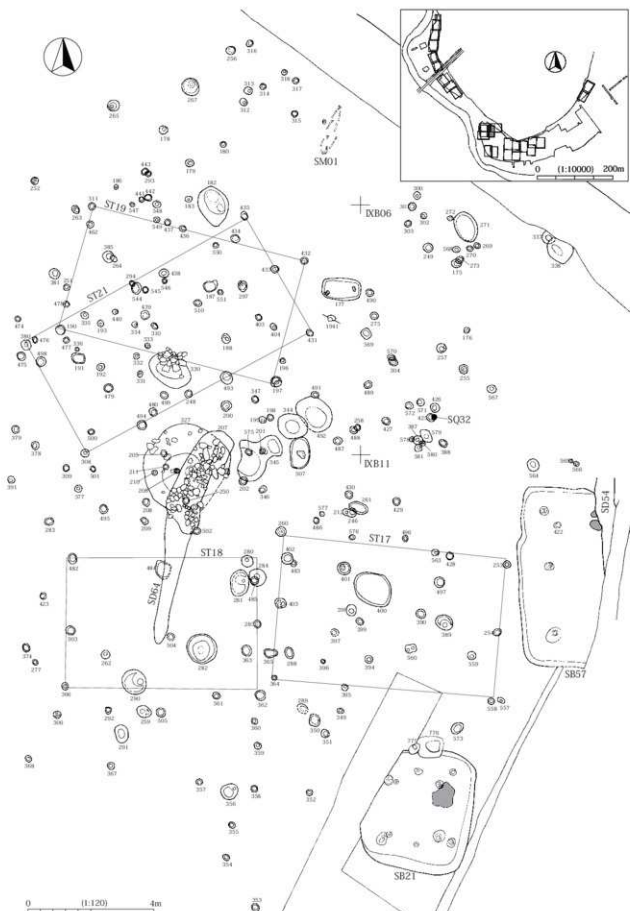
第 268 図 割付遺構図 (1 : 120) 18 川久保 5 区 3 面 8 古墳時代後期～奈良時代



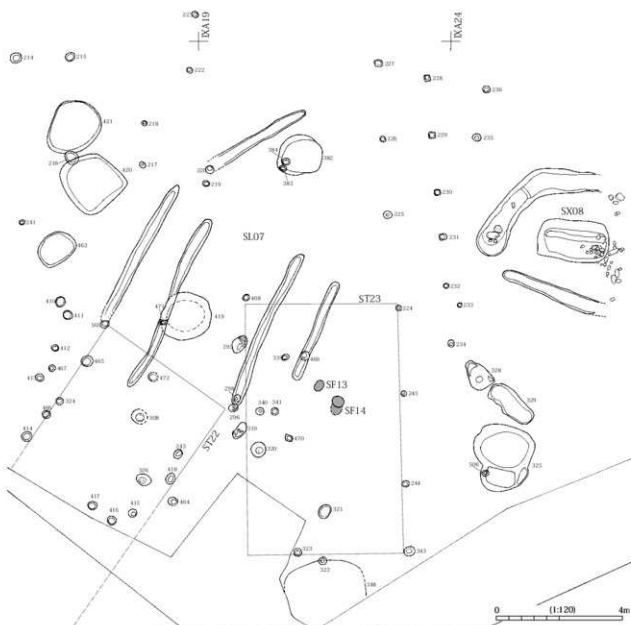
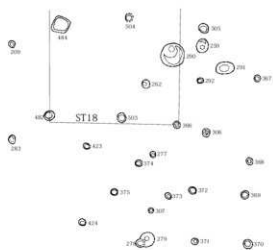
第 269 図 割付遺構図 (1 : 120) 19 川久保 5 区 3 面 9 古墳時代後期～奈良時代



第270図 割付遺構図(1:120) 20 川久保1区10面12中世



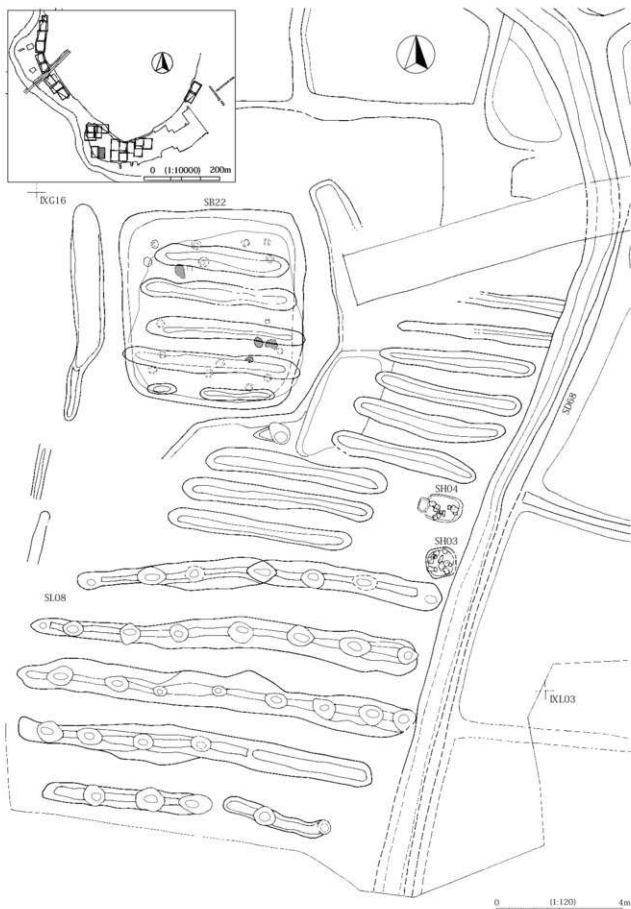
第271図 割付遺構図 (1:120) 21 川久保1区10面13中世



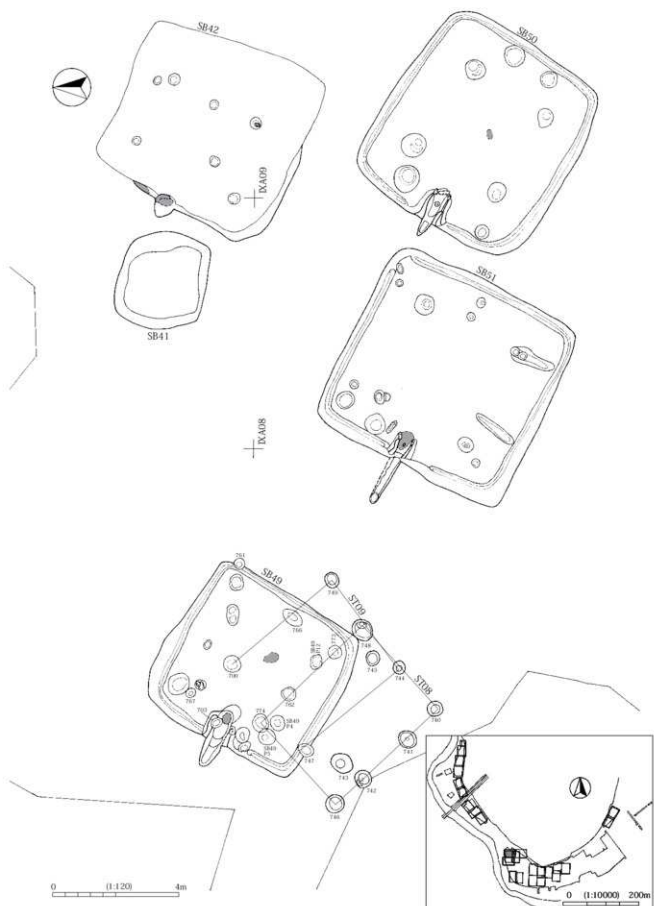
第272図 割付遺構図(1:120) 22 川久保1区10面14中世



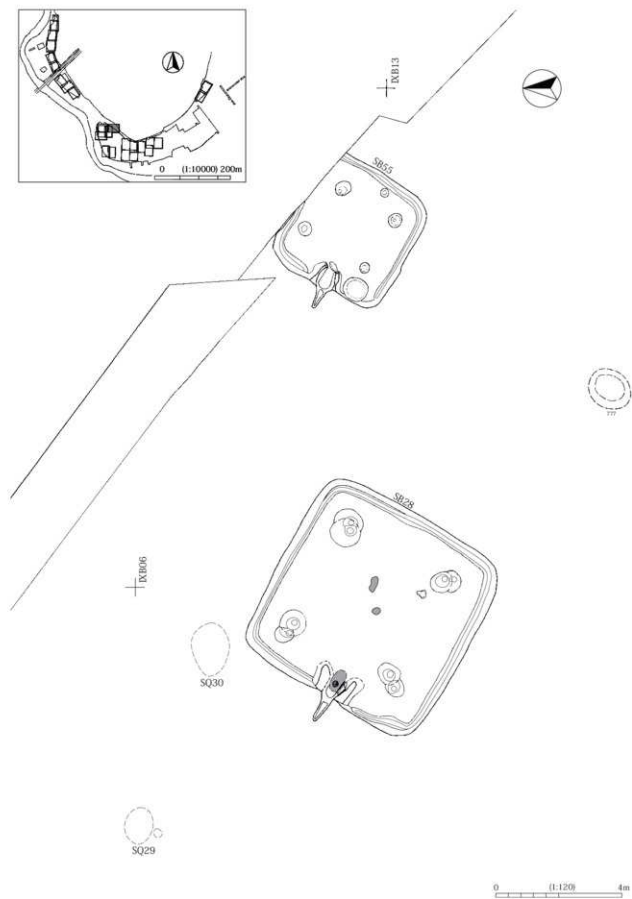
第273図 割付遺構図(1:120) 23 川久保1区10面15中世



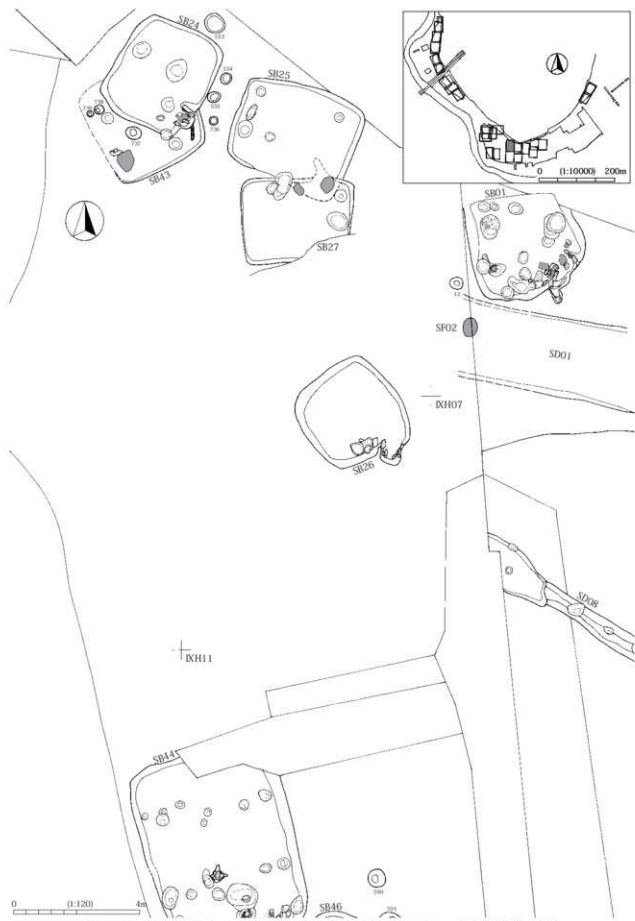
第 274 図 割付遺構図 (1 : 120) 24 川久保 1 区 10 面 16 中世



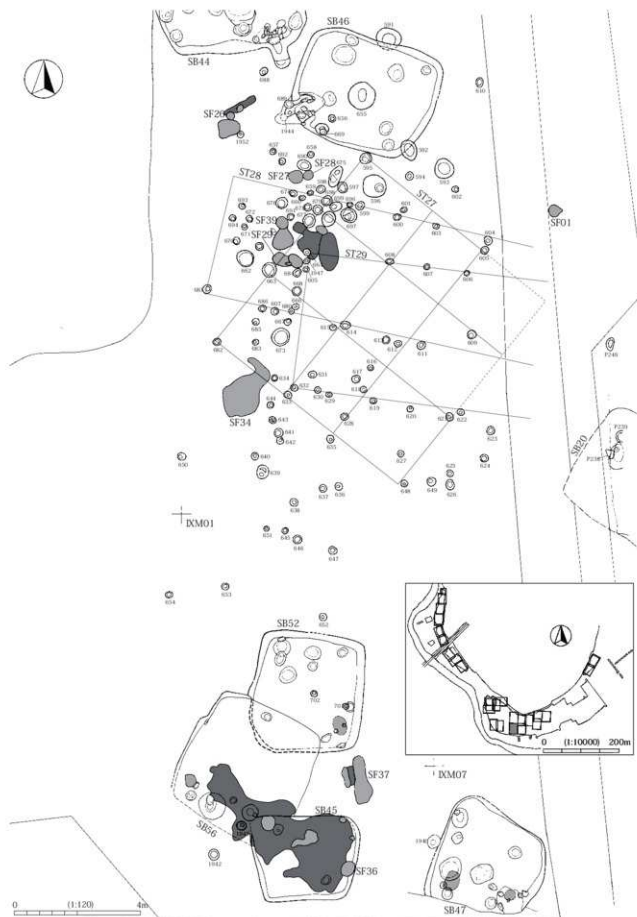
第 275 図 割付遺構図 (1 : 120) 25 川久保 1 区 11 面 10 古墳時代後期



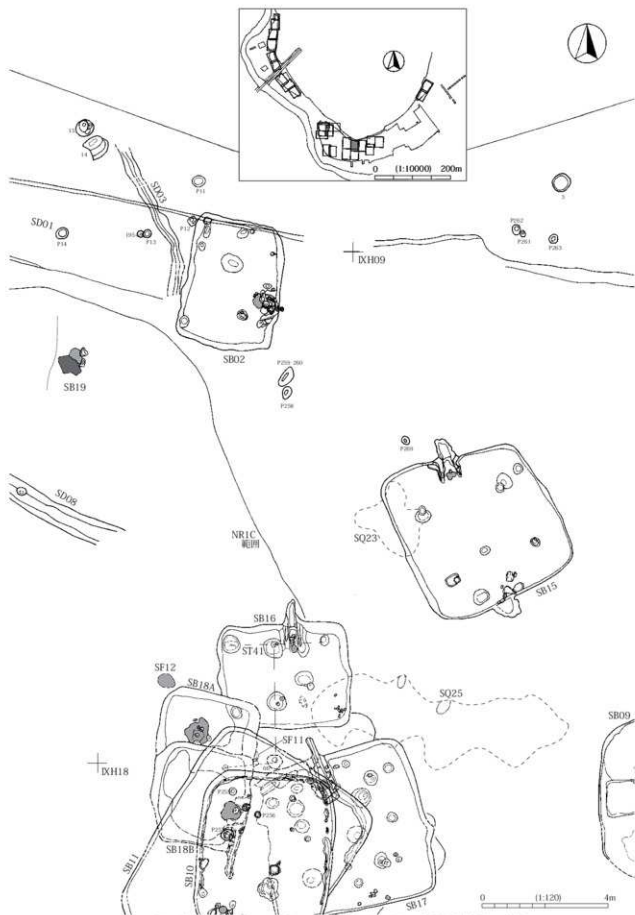
第 276 図 割付遺構図 (1 : 120) 26 川久保 1 区 11 面 11 古墳時代後期



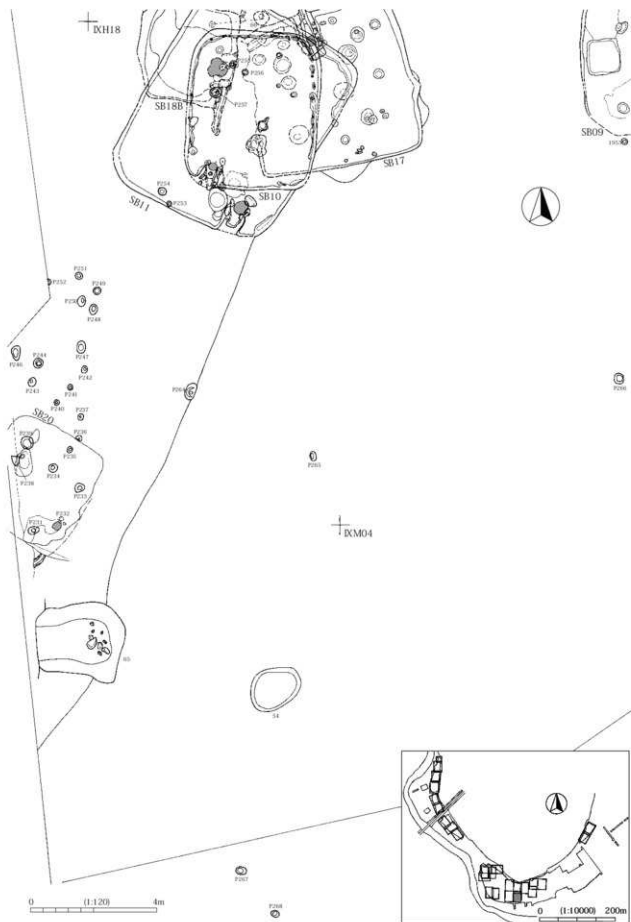
第277図 割付遺構図 (1:120) 27 川久保1区南東部・2区1面17 古墳時代後期～中世



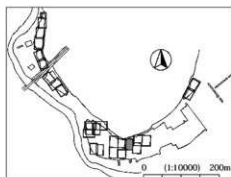
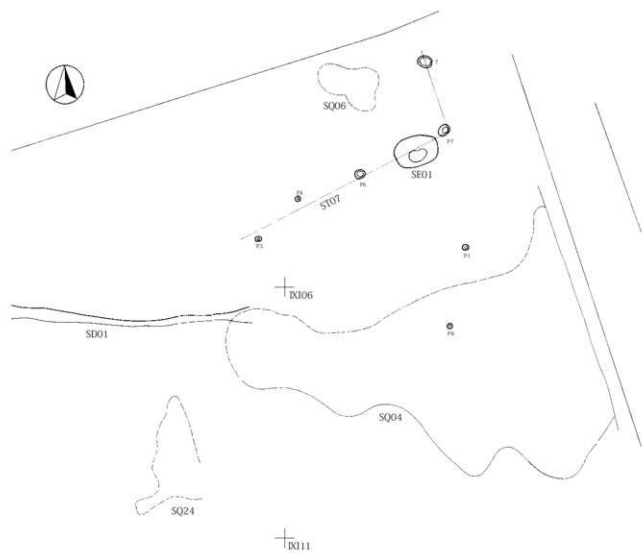
第 278 図 割村遺構図 (1 : 120) 28 川久保 1 区南東部・2 区 1 面 18 古墳時代後期～中世



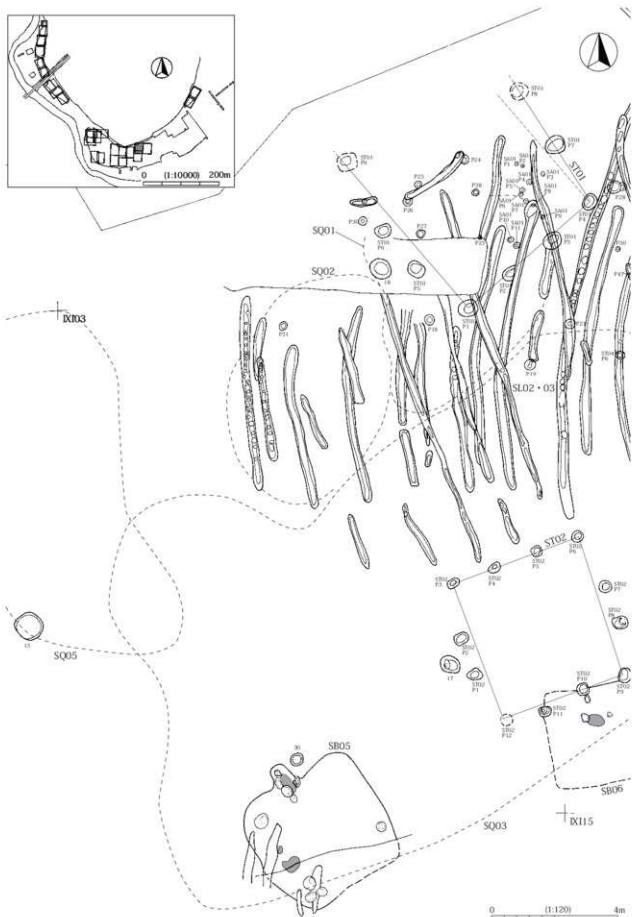
第 279 図 割付遺構図 (1 : 120) 29 川久保 2 区 1 面 19 古墳時代後期～中世



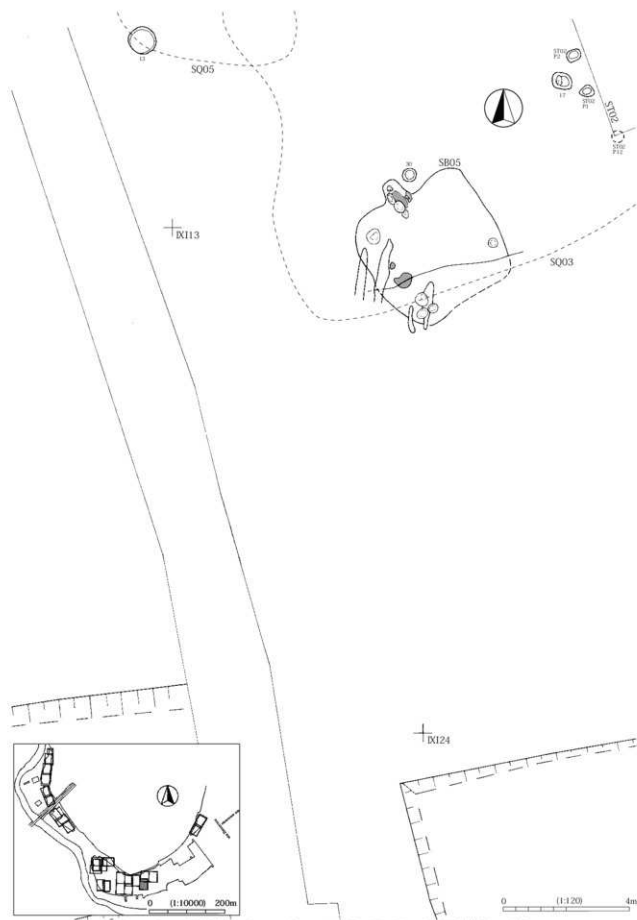
第280図 割付遺構図 (1:120) 30 川久保2区1面20 古墳時代後期~中世



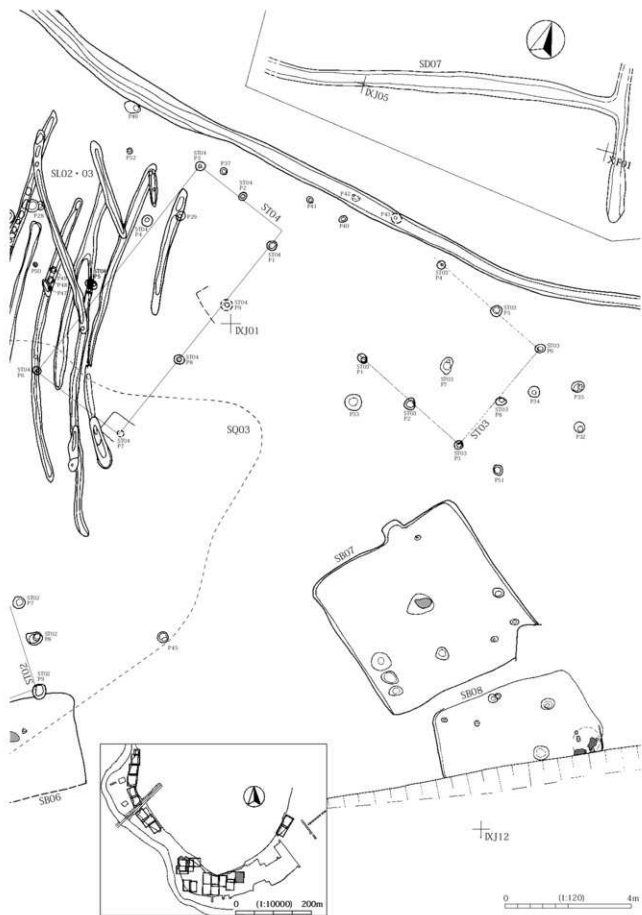
第281図 割付遺構図 (1:120) 31 川久保2区1面21古墳時代後期~中世



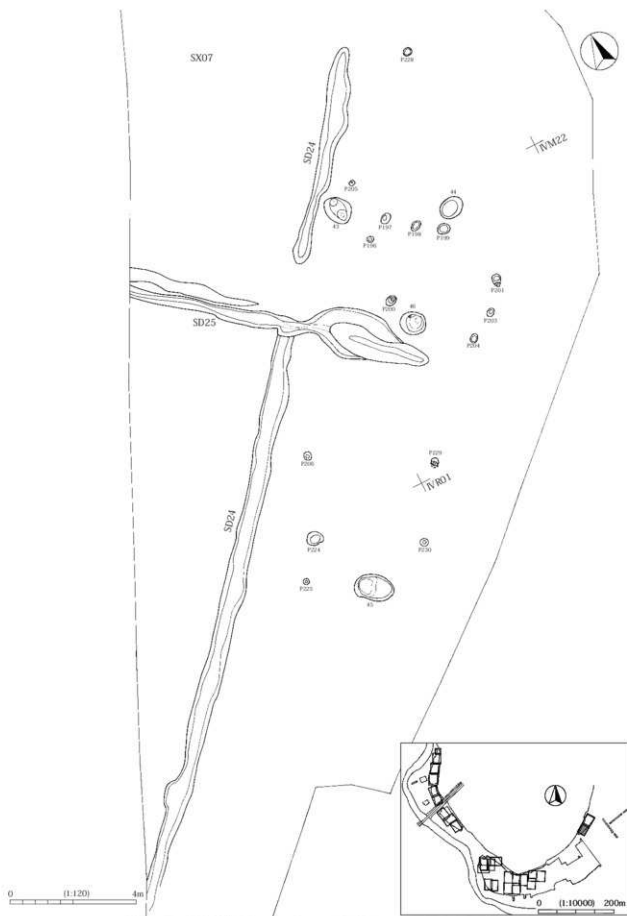
第 282 図 割付遺構図 (1 : 120) 32 川久保 2 区 1 面 22 古墳時代後期～中世



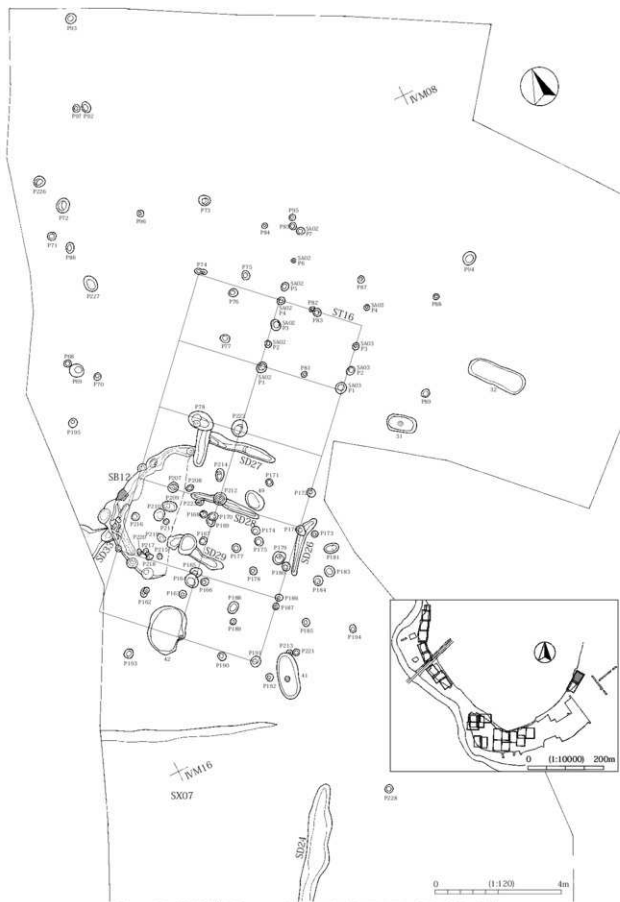
第283図 割付遺構図 (1:120) 33 川久保2区1面23 古墳時代後期～中世



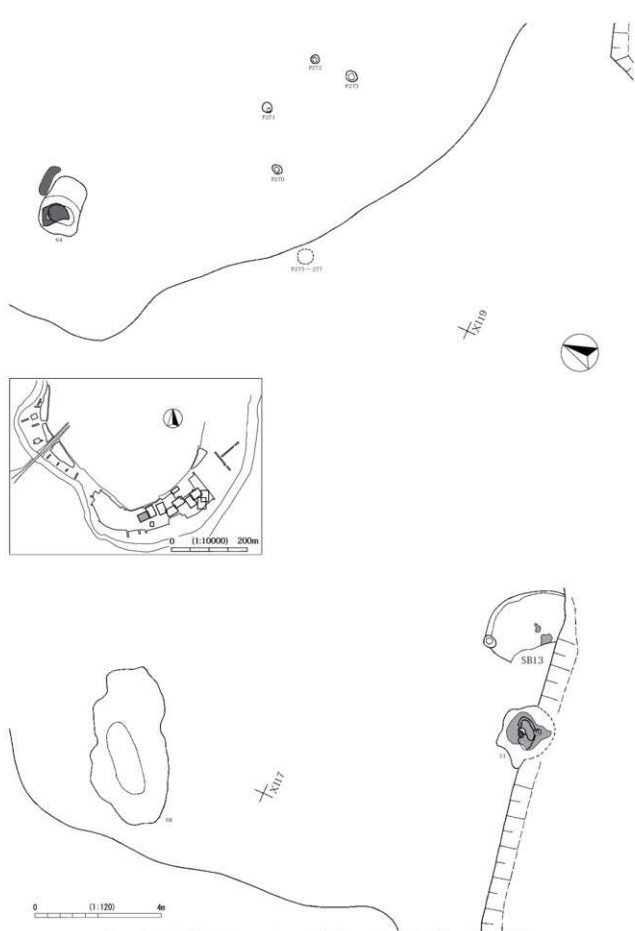
第284図 割付遺構図 (1:120) 34 川久保2区1面24古墳時代後期~中世



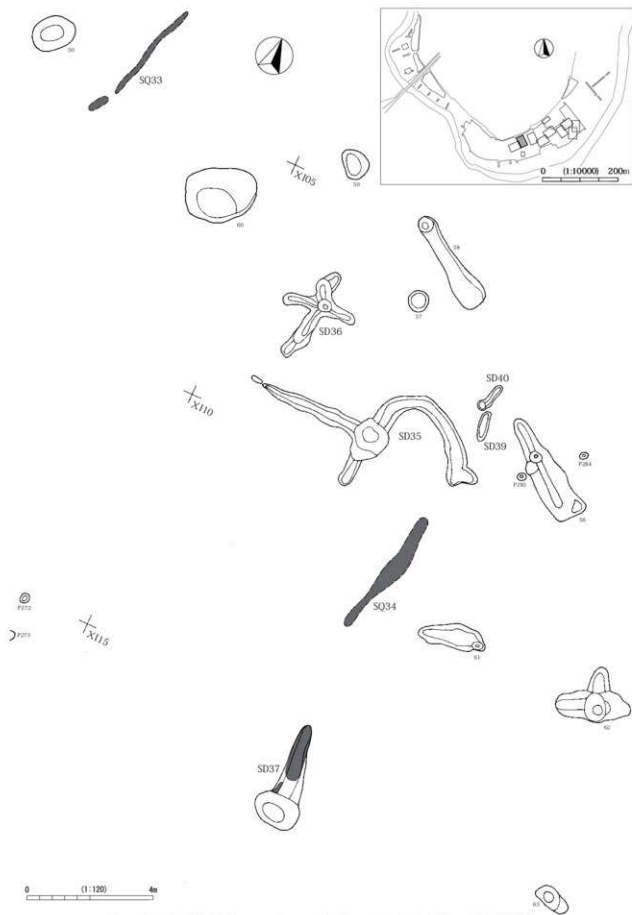
第285図 割付遺構図 (1 : 120) 35 川久保3区1面25縄文時代~中世



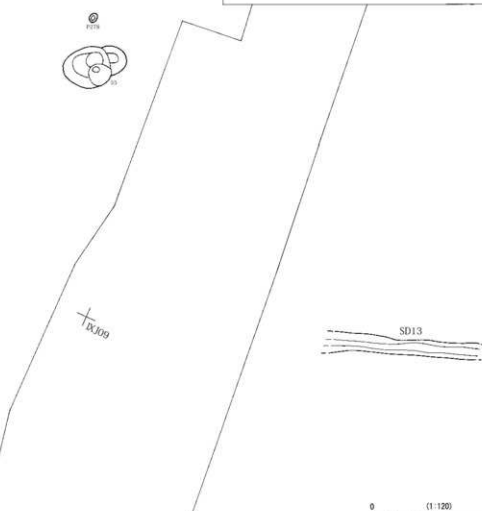
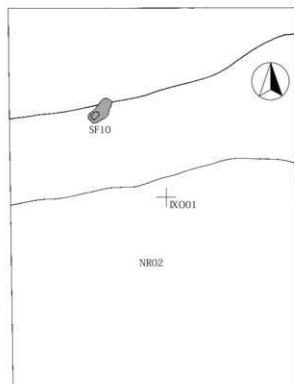
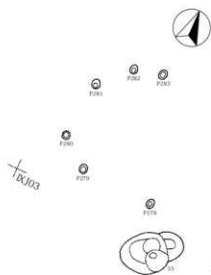
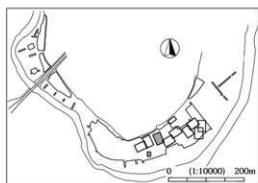
第 286 図 割付遺構図 (1 : 120) 36 川久保 3 区 1 面 26 縄文時代～中世



第 287 図 割付遺構図 (1:120) 37 川久保 2・4 区 2 面 27 弥生~古墳時代前期

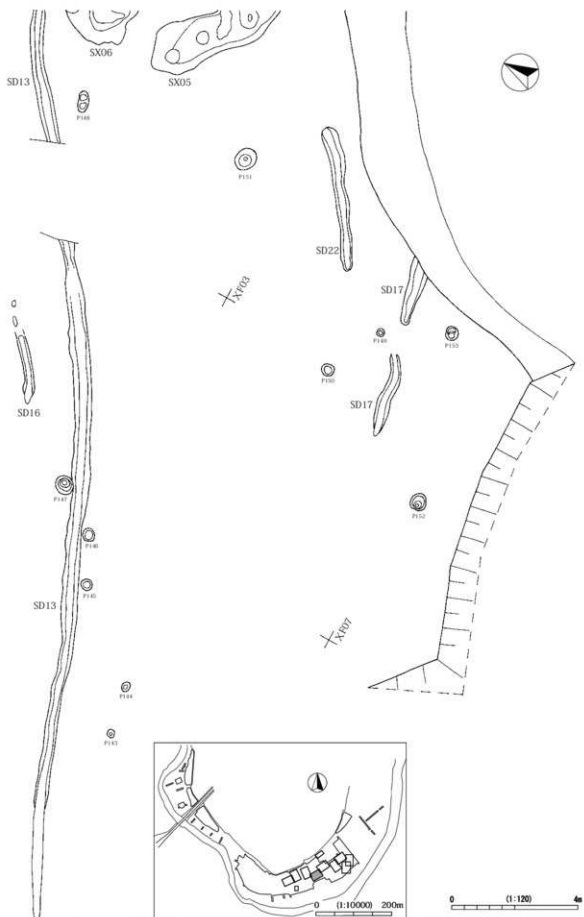


第 288 図 割付遺構図 (1:120) 38 川久保 2・4 区 2 面 28 弥生~古墳時代前期

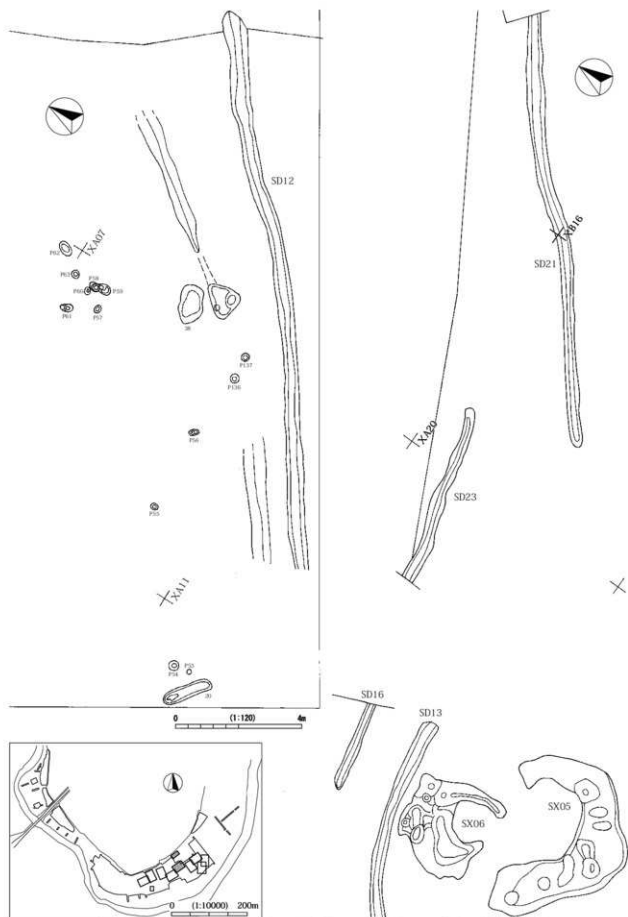


0 (1:120) 4m

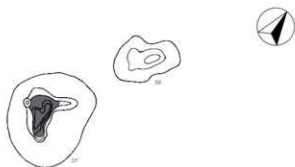
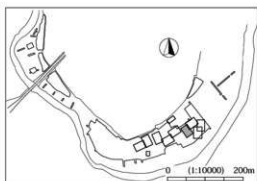
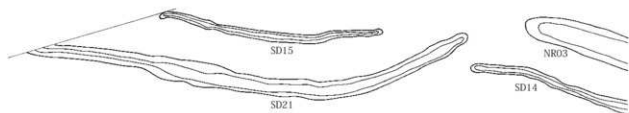
第 289 図 割付遺構図 (1 : 120) 39 川久保 2 ・ 4 区 2 面 29 ・ 30 弥生 ~ 古墳時代前期



第 290 図 割付遺構図 (1 : 120) 40 川久保 2・4区 2面 31 弥生~古墳時代前期



第 291 図 割付遺構図 (1:120) 41 川久保 2・4 区 2 面 32・33 弥生~古墳時代前期



XB18

P124

P125

P126

SX03

35

P127

SX01

SX02

P128

34

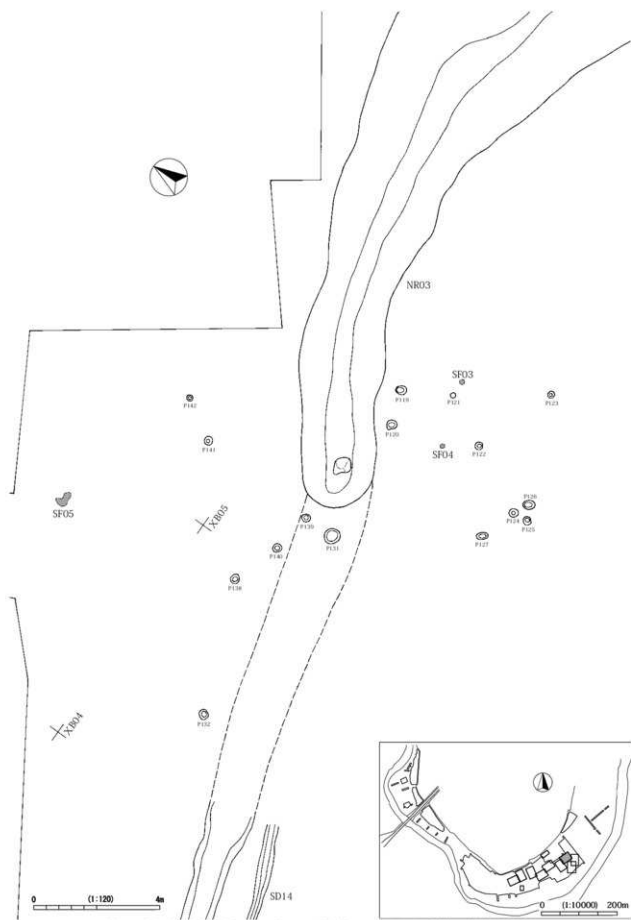
XB20

33

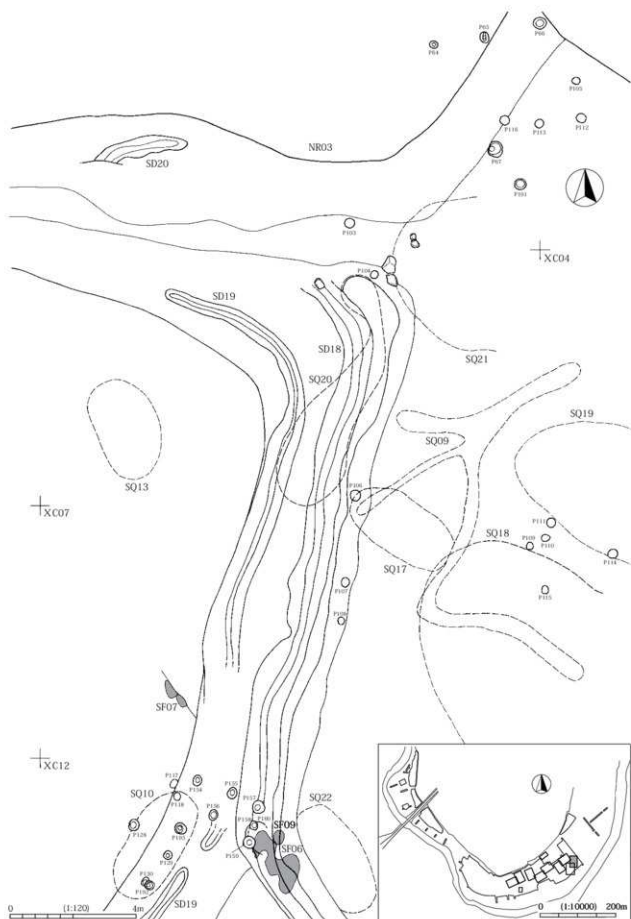
P129

0 (1:120) 4m

第 292 図 割付遺構図 (1 : 120) 42 川久保 2・4 区 2 面 34 弥生~古墳時代前期



第 293 図 割付遺構図 (1 : 120) 43 川久保 2・4 区 2 面 35 弥生～古墳時代前期



第 295 図 割付遺構図 (1 : 120) 45 川久保 2・4 区 2 面 37 弥生~古墳時代前期

川久保・宮神遺跡調査区全景 1

左：川久保2・4区

全景（西より）

右：川久保2・4区

全景（東より）



川久保2区2面全景

(東より)



川久保1区4面水田

跡全景（北西より）



川久保1区10面全
景（北西より）左：川久保1区10・
11面全景（南より）
右：川久保5区2面
全景（西より）宮沖1～5区全景（北
より）

川久保・宮沖遺跡土層

左：川久保 20 トレンチ土層（西より）
 右：川久保 21 トレンチ SD18・19 土層（東より）



左：川久保 2 区 NR1a 土層（北西より）
 右：川久保 NR1b・1c 完備状況（北東より）



左：川久保 NR1b・1c 土層（北より）
 右：川久保 1 区中央ベルト土層（南西より）



左：川久保 5 区西壁土層（東より）
 右：宮沖 1 区東壁土層（西より）



左：宮沖 1 区 3 面下層土層（南西より）
 右：宮沖 2 区 9 トレンチ土層（南西より）





左：川久保SK41完
掘状況（北東より）
右：川久保SK31完
掘状況（南より）



川久保4区弥生土器
集中出土地点全景（北
東より）



左：川久保SQ09土
器出土状況（西より）
右：川久保SQ10土器
出土状況（北西より）



左：川久保SQ11土
器出土状況（南より）
右：川久保SQ12土
器出土状況（北より）

弥生時代遺構 2

左：川久保 SQ13 土器出土状況（北より）
 右：川久保 SQ17 土器出土状況（北より）



左：川久保 SQ15 土器出土状況（北西より）



左：川久保 SQ16 土器出土状況（北より）
 右：川久保 NR03 土器出土状況（北より）



左：川久保 NR03 土器出土状況（西より）
 右：川久保 SK37 土層（西より）



左：川久保 SK33 完器状況（西より）
 右：川久保 SK51 埋土中出土状況（西より）





左：川久保SB13遺物出土状況（南より）
右：川久保SB13完掘状況（南東より）



左：宮沖SB11完掘状況（北より）
右：宮沖SB20完掘状況（西より）



左：宮沖SB22完掘状況（西より）
右：宮沖SB24土器出土状況（北より）



左：宮沖SB24完掘状況（北より）
右：宮沖SB31完掘状況（東より）



左：宮沖SK1549土器出土状況（西より）
右：宮沖SK1820土器出土状況（西より）

古墳時代前期遺構 2

左：宮沖SD10 遺物
出土状況（北西より）
右：宮沖SD10 遺物
出土状況（西より）



左：宮沖SD10 遺物
出土状況（南より）
右：宮沖SD10 遺物
出土状況（西より）



左：宮沖1区3面水
田跡完掘状況（北より）
右：宮沖1区3面水
田跡完掘状況（北より）



左：川久保1区12
面水田跡完掘状況（北
より）
右：川久保1区12
面水田跡完掘状況（南
東より）



左：川久保SL04 完
掘状況（北西より）
右：川久保SL04 水
口完掘状況（東より）





左: SQ26・27 遺物
出土状況 (北東より)
右: SQ26 土器出土
状況 (南西より)



左: SQ26 土器出土
状況 (西より)
右: SQ26 土器出土
状況 (東より)



左: SQ27 土器出土
状況 (南より)
右: SQ27 土器出土
状況 (南より)

古墳時代後期～奈良時代遺構 1

左：川久保 SB05 遺物出土状況（南より）
右：川久保 SB06 遺物出土状況（南より）



左：川久保 SB07・08 遺物出土状況（南より）
右：川久保 SB15 遺物出土状況（南東より）



左：川久保 SB15 完掘状況（南東より）
右：川久保 SB15 カマ下遺物出土状況（南東より）



左：川久保 SB16 完掘状況（南より）
右：川久保 SB16 カマ下遺物出土状況（南西より）



左：川久保 SB17 完掘状況（南西より）
右：川久保 SB17 カマ下完掘状況（南東より）





左：川久保SB28 完
 掘状況（南より）
 右：川久保SB28カマ
 下完掘状況（南より）



左：川久保SB30 完
 掘状況（南より）
 右：川久保SB33 完
 掘状況（南東より）



左：川久保SB35 遺
 物出土状況（西より）
 右：川久保SB36 完
 掘状況（北より）



左：川久保SB36・
 37 完掘状況（西より）
 右：川久保SB41 完
 掘状況（南より）



左：川久保SB38カマ
 下遺物出土状況（西
 より）
 右：川久保SB38 完
 掘状況（東より）



古墳時代後期～奈良時代遺構 3

左：川久保 SB40 完
 畢状況（南より）
 右：川久保 SB40 カマ
 下完畢状況（南より）



左：川久保 SB42 掘
 方検出状況（南より）
 右：川久保 SB49 完
 畢状況（南より）



左：川久保 SB49 カマ
 下完畢状況（南より）
 右：川久保 SB50 完
 畢状況（南より）



左：川久保 SB50 カマ
 下完畢状況（南より）
 右：川久保 SB51 完
 畢状況（南より）



左：川久保 SB51 カマ
 下完畢状況（南より）
 右：川久保 SB51 炭
 化材出土状況（南西
 より）





左：川久保SB53完
 陥状況（南西より）
 右：川久保SB53カ
 マ下遺物出土状況（南
 西より）



左：川久保SB54完
 陥状況（東より）
 右：川久保SB55完
 陥状況（南より）



左：川久保SB55カマ
 下完陥状況（南より）
 右：川久保SB58完
 陥状況（北より）



左：川久保SB58カマ
 下完陥状況（北より）
 右：川久保SB59完
 陥状況（南より）



左：川久保SB60礫
 出土状況（南より）
 右：川久保SB60完
 陥状況（南より）

古墳時代後期～奈良時代遺構 5

左：川久保 SB61 須
恵部遺出土状況（南
東より）



右：川久保 SB61 完
全状況（北より）



左：川久保 SB62 完
全状況（西より）



右：宮沖 SB01 完備
状況（南より）



左：宮沖 SB01 カマ
下完備状況（南より）



右：宮沖 SB02 礎出
土状況（南より）



左：宮沖 SB02 完備
状況（南より）



右：宮沖 SB02 カマ
下遺物出土状況（南
より）



左：宮沖 SB03 遺物
出土状況（南より）



右：宮沖 SB03 完備
状況（南より）





左：宮沖 SB05 遺物
出土状況（南東より）
右：宮沖 SB05 完掘
状況（南東より）



左：宮沖 SB05 カマド
完掘状況（南東より）
右：宮沖 SB06 完掘
状況（北西より）



左：宮沖 SB06 旧カマド
下完掘状況（北西より）
右：宮沖 SB06 新カマド
下完掘状況（北西より）



左：宮沖 SB08 完掘
状況（西より）
右：宮沖 SB08 カマド
下完掘状況（西より）



左：宮沖 SB09 完掘
状況（南より）
右：宮沖 SB09 カマド
下完掘状況（東より）

古墳時代後期～奈良時代遺構 7

左：宮沖SB10 上層床
面完成状況（北より）
右：宮沖SB10 カマ
ド1・2完成状況（北
より）



左：宮沖SB10 下層床
面完成状況（北より）
右：宮沖SB10 下層
カマド3完成状況（北
より）



左：宮沖SB12 完成
状況（西より）
右：宮沖SB12 カマ
ド完成状況（東より）



左：宮沖SB13 完成
状況（南より）
右：宮沖SB13 こも
石出土状況（南より）



左：宮沖SB14 完成
状況（東より）
右：宮沖SB14 目カマ
ド完成状況（南より）





左：宮沖SB14新カマ
下完掘状況（東より）
右：宮沖SB15完掘
状況（東より）



左：宮沖SB16完掘
状況（西より）
右：宮沖SB16カマ
下完掘状況（東より）



左：宮沖SB17完掘
状況（西より）
右：宮沖SB18完掘
状況（東より）



左：宮沖SB18カマ
下完掘状況（東より）
右：宮沖SB19完掘
状況（南より）



左：宮沖SB19カマ
下掘遺物出土状況（東
より）
右：宮沖SB19カマ
下完掘状況（東より）

古墳時代後期～奈良時代遺構 9

左：宮沖 SB23 完掘
状況（西より）
右：宮沖 SB25 カマ
下完掘状況（東より）



左：宮沖 SB25・29
完掘状況（西より）
右：宮沖 SB28 完掘
状況（北より）



左：宮沖 SB27 完掘
状況（南より）
右：宮沖 SB27 カマ
下遺物出土状況（東
より）



左：宮沖 SB30 完掘
状況（北東より）
右：川久保 ST01 完
掘状況（東より）



左：川久保 ST02 完
掘状況（南より）
右：川久保 ST10 完
掘状況（南より）





左：川久保ST11完
掘状況（東より）
右：宮沖ST02・03
完掘状況（北より）



左：川久保SQ04・05
遺物出土状況（南西
より）
右：川久保SQ23遺物
出土状況（南東より）



左：川久保SQ24 遺
物出土状況（南より）
右：川久保SQ25 遺物
出土状況（南西より）



左：川久保SQ28 遺
物出土状況（南より）
右：川久保Pn32 遺
物出土状況（北より）



左：宮沖SK250（東
より）
右：宮沖SK1806 遺
物出土状況（西より）

平安時代遺構 1

左：川久保 SB01 完
 備状況（北西より）
 右：川久保 SB01 カマ
 下完備状況（北より）



左：川久保 SB02 完
 備状況（西より）
 右：川久保 SB02 カマ
 下完備状況（西より）



左：川久保 SB09 遺
 物出土状況（南より）
 右：川久保 SB10・11
 完備状況（北東より）



左：川久保 SB10 カマ
 下完備状況（北より）
 右：川久保 SB10Pc10
 ・17完備状況（北西
 より）



左：川久保 SB10Pc10
 完備状況（北東より）
 右：川久保 SB11 カマ
 下完備状況（北東より）





左：川久保SB11 Pit
・2 遺物検出状況（北
東より）



右：川久保SB12完
館状況（南より）



左：川久保SB12カマ
下完館状況（東より）



右：川久保SB18完
館状況（西より）



左：川久保SB18カマ
下棟遺完館状況（北
より）



右：川久保SB24完
館状況（北より）



左：川久保SB24カマ
下遺物出土状況（北
より）



右：川久保SB25完
館状況（北西より）



左：川久保SB26完
館状況（北より）



右：川久保SB26カマ
下完館状況（北より）

平安時代遺構3

左：川久保 SB27 完
 掘状況（南より）
 右：川久保 SB34 横
 出状況（東より）



左：川久保 SB43 完
 掘状況（北より）
 右：川久保 SB43 カマ
 下完掘状況（北より）



左：川久保 SB44 完
 掘状況（北より）
 右：川久保 SB44 カマ
 下完掘状況（北より）



左：川久保 SB44 掘治
 砂完掘状況（北より）
 右：川久保 SB45 カマ
 下完掘状況（南東より）



左：川久保 SB46 完
 掘状況（北より）
 右：川久保 SB46 カマ
 下完掘状況（北東より）





平安時代遺構 4
左：川久保SB47 完
備状況（北より）
右：川久保SB47 カマ
下完備状況（北西より）



左：川久保SB52 完
備状況（北より）
右：川久保SB56 完
備状況（北西より）



左：川久保SB56 カマ
下完備状況（東より）
右：宮沖SB21 完備
状況（北より）



左：宮沖SB07 完備
状況（北より）
右：宮沖SB07 カマ
下完備状況（北より）



左：宮沖SB04 完備
状況（北より）
右：宮沖SB04 カマ
下完備状況（北より）

中世遺構 1
川久保1区10画北
部全景（北東より）



左：川久保5区2面
北部全景（南より）
右：川久保5区2面
南部全景（南より）



宮仲1区1面全景（北
西より）





左：宮沖ST01完
状態(北より)
右：宮沖5区柱穴
群(北より)



左：川久保1区2面
柱穴群(北東より)
右：川久保SB21完
状態(東より)



左：川久保SB22埋
土中取調完状態
(西より)
右：川久保SB22完
状態(東より)

中世遺構 3

左：川久保 SB31 完
 融状況（南より）
 右：川久保 SB39 完
 融状況（北より）



左：川久保 SB29・
 48 炭化物出土状
 況（西より）
 右：川久保 SB29・
 48 完融状況（東より）



左：川久保 SB57 完
 融状況（西より）
 右：川久保 SB57 伊
 植出土状況（南より）



左：川久保 SK327 道
 物出土状況（西より）
 右：宮沖 SK637 道
 物出土状況（東より）



左：宮沖 SK639 石臼
 出土状況（南より）
 右：宮沖 SK1293 礮
 出土状況（西より）





左：川久保SM01人骨出土状況（東より）
右：川久保SX08 礫楯出土状況（南より）



左：川久保SX08 完楯状況（南より）
右：川久保SX08 中央土坑炭化材楯出土状況（南より）



左：川久保SLO3 完楯状況（南より）
右：川久保SLO8 完楯状況（北より）



左：川久保SLO7 完楯状況（南より）
右：宮沖SLD1 完楯状況（北より）



左：川久保1区6面水田跡完楯状況（北より）
右：川久保1区7面水田跡完楯状況（北より）

中世遺構 5

左：川久保1区8面
水田跡南部完掘状況
（南より）
右：川久保1区8面
水田跡北部完掘状況
（北東より）



左：川久保1区8面
水田跡北部完掘状況
（南西より）
右：川久保1区9面
水田跡完掘状況（北
より）



左：川久保 SD58・
59、SD60 礎出土状
況（西より）
右：川久保1区10
面水田跡南部完掘状
況（南より）



左：川久保 SD62 竈
掘状況（北より）
右：川久保 SD62 竈
掘出土状況（北東より）



左：川久保 SD62 礎
掘出土状況（南より）
右：宮沖 SD11 完掘
状況（北西より）





左：川久保1区1面
水田跡北部完掘状況
（北より）
右：川久保1区1面
水田跡南部完掘状況
（南西より）



左：川久保SD41・
42完掘状況（北より）
右：川久保1区2面
水田跡北部完掘状況
（北より）



左：川久保1区2面
水田跡南部完掘状況
（南より）
右：川久保SD43完
掘状況（西より）



左：川久保SD45完
掘状況（南より）
右：川久保1区3面
水田跡北部完掘状況
（北東より）



左：川久保1区3面
水田跡南部完掘状況
（北東より）
右：川久保1区3面
水田跡南部完掘状況
（南東より）

近世遺構 2

左：川久保1区4面
水田跡南部完掘状況
(南東より)



左：川久保1区4面
水田跡北部完掘状況
(南西より)



川久保1区近世屋敷
跡完掘状況(北東よ
り)



左：川久保ST05・06
完掘状況(東より)



右：川久保SK180完
掘状況(南より)





左：川久保SK117 礎
出土状況（南より）
右：川久保SK123 完
備状況（南より）



左：川久保SK130 礎
出土状況（南より）
右：川久保SK156 完
備状況（南より）



左：川久保SK161 礎
出土状況（南より）
右：川久保SHO2 礎
備出状況（北より）



左：川久保SK21・
22 土層（南より）
右：川久保SK27 礎
備出状況（西より）



左：宮沖3区2面水
田跡（南西より）
右：宮沖4区3面水
田跡（北東より）

縄文時代土器・石器

縄文土器 (2/3)

川久保 NR1b(26・27)

同 NR02(44)

同 2区 (50)

同 SB47(56)

同 SD61(55)

宮仲 SD10(45・52)

同 SK1348(46)

同 SD14(47)

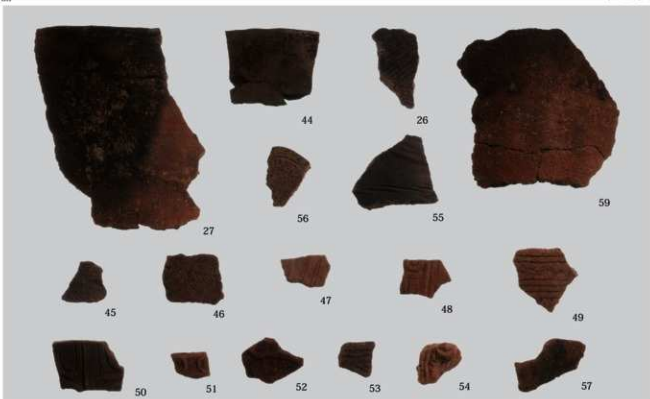
同 SB21(48・49)

同 1区 2面検

(50・51・53)

同 SB10(54)

同 1区 3面下層 (57)



磨製石斧・打製石斧

(3/4)

川久保 SK43(67)

同 SB24(68)

宮仲 1区 (70・71)

同 SB06(72)

同 SB27(69)



左：磨石 (1/3)

宮仲 SB16(73)

同 SD10(74)

右：石皿 (1/3)

宮仲 SB12(75)



錐飾・打製石鏃 (2/3)

宮仲 SB05(60)

同 3区 水田跡 (61)

同 SD18(62)

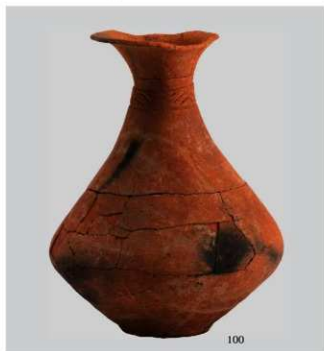
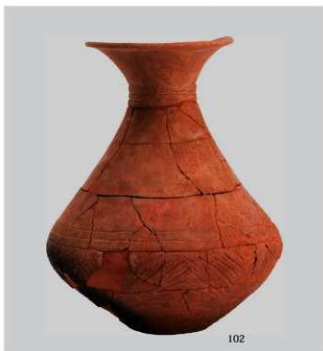
同 SB04(63)

川久保 SX01(64)

同 SX07(65)

同 1区 9面水田跡 (66)









116



120



123



122



136



118



130



129



132



131



151



150



155



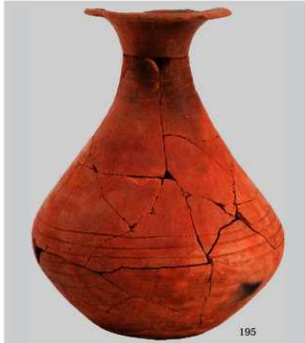
164



163











218



222



214



213



208



216



227



206



228



233



231



232

弥生時代前期末～後期土器

川久保遺跡弥生時代

後期土器 (1/4)

川久保 SB13(236～

238)

同 NR1b(14・16・

19・23・24)



川久保・宮沖遺跡

出土弥生時代中期

前葉・天王山式土

器ほか (1/3) 川久保

NR02(40)

宮沖5区横出函(58)

同 SD15(241)

同 SD17(242)

同 SK1801(243・244)



宮沖遺跡竪穴住居跡・
土坑・溝跡出土古墳
時代前期土器 (1/4)
宮沖 SB20(264)
同 SB24(269・270)
同 SK913(274)
同 SK1549(278)
同 SK1813(273)
同 SK1820(284)
同 SD10(288・297・
298・305・313・
318・323・324)



264



270



269



273



278



284



274



298



288



305



313



297



324



323



318

古墳時代前期土器 2

宮沖遺跡溝跡・川久保遺跡土器集中出土土器 (1/4)
 宮沖 SD10(329)
 川久保 SQ26(339 ~ 342・345 ~ 350・353・354・358・360)



川久保遺跡土器集中

出土土器 (1/4)

川久保 SQ26(365・

366・368～370・

376・379・382・384)

同 SQ27(393・394・

395・397・400～402)



376



368



379



365



369



384



370



382



366



393



394



395



397



400



401



402



409



415



413



411



421



431



427



439



435



424



442



444



443

川久保・宮沖遺跡水
田跡・土器集中・検
出箇他出土土器 (1/4)
川久保 SL04(334)
同 SQ03(445・458)
同 NR1b(11)
同 4区 (454・456)
同 2区7トレンチ(461)
宮沖 1区 (464)



川久保・宮沖遺跡出
土土器 (1/4)
川久保 SQ26(389)
宮沖 1区検出面
(468・473)
同 SD11(474)
同 SB03(475)
同 SB11(250・251・
254・256・258)
同 SB29(469・472)
同 SD10(322)
右: 宮沖 SB11(253)



川久保遺跡六住居跡

出土土器 (1/4)

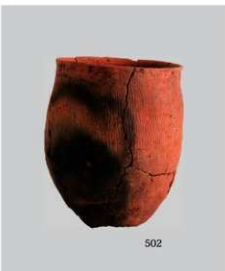
川久保 SB15(495・

499・501・502・506)

同 SB17(518・519・

524)

同 SB32(547・549)



川久保遺跡掘穴住居

跡出土土器 (1/4)

川久保 SB33(552)

同 SB36(568・572)

同 SB37(585・586)

同 SB38(588・589・

592・593)

同 SB40(598)



552



568



572



586



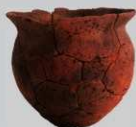
585



588



589



592



593



598

川久保遺跡竪穴住居

跡出土土器 (1/4)

川久保 SB49(606～

608・612)

同 SB50(618・619・

621・623・624)



川久保遺跡掘穴住居

跡出土土器 (1/4)

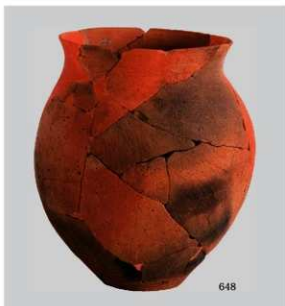
川久保 SB51 (628 ~

631・635・638・640

~ 642・645・648)

同 SB53 (653・654・

656・659)



川久保遺跡竪穴住居

跡出土土器 (1/4)

川久保 SB53(658・

661・662)

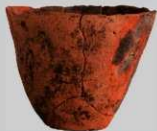
同 SB54(667)

同 SB55(669・670・

672・676～678)



658



661



667



662



669



670



678



672



676



677

川久保遺跡趾穴住居

跡出土土器 (1/4)

川久保 SB59(688・

692)

同 SB61(722)



722



688



692



1017



781



788-2



788-1



576



731

刻溝土器・凸面硯 (1/3)

川久保 SB36(576)

同 SK1706(731)

同 5 区検出面 (781)

同 SD62(788)

同 1 区 9 面 (787)

宮沖 SB17(1017)

宮沖遺跡Ⅵ住居跡

出土土器 (1/4)

宮伴 SB01(795・

800・802～805)

同 SB02(807・809・

810・811)



宮沖遺跡惣穴住居跡
出土土器 (1/4)
宮沖 SB02(820・821)
同 SB03(828・832・
834・840)
同 SB05(845・849・
851・852・855)
同 SB06(874・871・
872)
同 SB09(882・884)



宮沖遺跡竪穴住居跡

出土土器 (1/4)

宮沖 SB08(880)

同 SB09(892・887)

同 SB10(901・902・908)

同 SB12(918・919・921～924)

同 SB13(925・926・929)



宮沖遺跡竪穴住居跡

出土土器 (1/4)

宮沖 SB14(937・941・

945・947・954・969・

972・978・982・991)

同 SB15(994・995・

998・1000)

同 SB16(1004・1006

～1009)



937



969



941



972



945



982



947



978



954



994



995



998



1004



1006



991



1000



1009



1007



1008

宮沖遺跡竈穴住居跡

出土土器 (1/4)

宮沖 SB16(1011)

同 SB18(1022)

同 SB19(1023・1026・
1028・1029・1031・
1032・1036・1039・
1042・1043・1046・
1047・1049・1052・
1054)

1011



1022



1023



1036



1031



1029



1026



1028



1028



1032



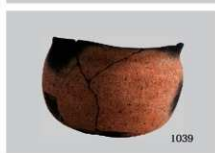
1047



1042



1046



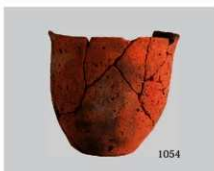
1039



1043



1049



1054



1052

宮沖遺跡竪穴住居跡

塚か出土土器 (1/4)

宮沖 SB27(1062 ~

1064・1066・1072・

1075・1079～1081・

1083)

同 SB28(1087)

同 SB04(1112)

同 1 区検出面 (1121)



1066



1062



1072



1064



1063



1080



1075



1079



1081



1083



1087



1112



1121

平安時代土器 1

川久保・宮津遺跡

穴住居跡出土土器

(1/4)

川久保 SB09(1222・

1228・1230)

同 SB18(1243・1248

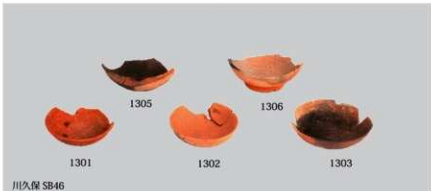
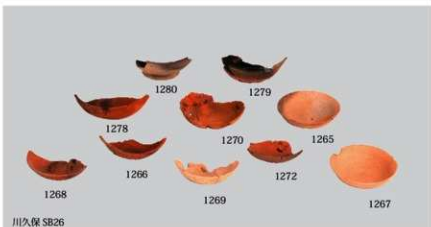
・1249)

同 SB24(1254・1255

・1259・1260)

同 SB26(1265・1278

・1280)



川久保・宮沖直跡醫

穴住跡跡塚か出土土

器 (1/4)

川久保 SB46(1303・

1306・1307)

同 SB47(1319・1320)

同 SB52(1325)

同 5区検出面 (1389)

宮沖 SB04(1356・

1358)

同 SK1481(1382)

同 SB02(1392)

同 SB10(1393)



1303



1306



1319



川久保 SB47



1320



1325



川久保 SB52



1356



1307



1358



1389



1382



7



1385



1388

栗色土器 A 杯 B・罐

軸陶器 (1/3)

川久保 2区 (1385)

同 NR1b(7)

同 2区 3 トレンチ

(1388)



1392



1393

中世焼物 1

カワラケ (1/4)

川久保 SR29(1436・1437)
 同 5 区検出面 (1485)
 同 1 区南東部検出面 (1487)
 同 SB39(1438)
 宮沖 SK449(1456)



内耳鍋 (1/3)

宮沖 1 区検出面 (1508・1509)
 同トレンチ (1507)
 同 SK81(1454)
 同 SK315(1458)
 同 SK505(1457)



山蒸碗・常滑・珠洲 (1/3)

川久保 SK112(1441)
 同 SK1011(1447)
 同 SK1099(1448)
 同 SK1260・1261(1449)
 同 SK1816(1453)
 同 SD59・60(1464)
 同 SD62(1468・1469・1472)
 同 1 区 8 面水田跡 (1476・1477)
 同 1 区 8・9 面中間 (1478)
 同 1 区 9 面 (1481)
 同 2 区 (1490・1491・1493)
 同 5 区 (1496・1499)
 宮沖 6 トレンチ (1505・1506)



吉瀬戸・大塚製品・
中国産青磁・白磁等
(1/3)

川久保 SB57(1439)
同 SK107(1440)
同 SK327
同 SK419(1442)
同 SK1677(1450)
同 SK1710(1451)
同 SK1752(1452)
同 SD08(1461)
同 SD59(1463)
同 SD62(1466・1467・
1470・1471)
同 SQ05(1502)
同 SL01(1484)
同 1区 6 面水田跡
(1473・1474)
同 1区 5 面水田跡
(1580)
同 1区 8-9 面中筒
(1480・1482・1483)
同 1区 (1475・1494・
1501)
同 1区南東部 (1504)
同 2区 (1503)
同 5区 (1495・1497・
1500)
宮沖 SK1446(1460)
同 5区 (1510・1511・
1512)



近世陶磁器 (1/3)
川久保 SK71(1563)
同 SK84(1564)
同 SK85(1565)
同 SK108(1566)
同 SK181(1567)
同 SK342(1568)
同 SD41(1569)
同 SD42(1571・1572)
同 SH02
同 1区 3 面水田跡
(1574)
同 1区 5 面水田跡
(1576・1579)
宮沖 SD18(1586)

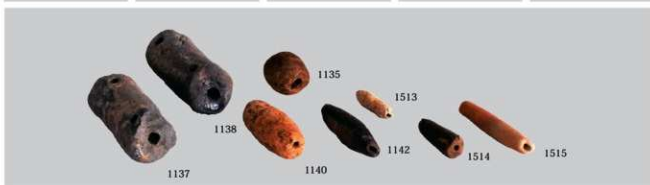


土製品・石製品 1
紡織車・石製織造具
(1/2)
川久保 Ph163(481)
同 SB15(1132)
同 SB28(1146-1147)
宮沖 5区(1145)



土睡

川久保 SB60(1140)
同 SK330(1514)
同 SK327(1513)
同 SD62(1515)
同 SQ04(1135)
同 SQ28(1142)
宮沖 SB07(1137)
同 SB17(1138)



羽口・増嘴 (1/4)

川久保 SB44(1398 ~
1401)
同 SK327(1521)
同 2区(1520)
宮沖 5区(1516)



凹石 (1/3)

川久保 SB51(1175)
同 SB42(1172)
同 SK1114(1171)
同 5区(1173-1174)



懸打杵のある礫 (1/3)
 川久保 SB19(1169)
 同 SB52(1407)
 同 SQ27(479)
 同 4区 19 トレンチ
 (1168)



左: 石鉢 (1/4)
 川久保 SB51(1177)
 中: 石臼 (1/6)
 宮沖 SK639(1536)
 右: 礫石 (1/6)
 川久保 SK289(1526)



礫石 (1/3)
 川久保 SB02(1402)
 同 SB18(1411-1404)
 同 SB23(1517)
 同 SB46(1403)
 同 SB60(1150)
 同 SK05(1408)
 同 SK327(1531)
 同 SK1756(1519)
 同 2区 (1413)
 同 5区 (1522)
 同 トレンチ (1518)
 宮沖 SB01(1152)
 同 SB10(1155)
 同 SB12(1151)
 同 SB28(1156)
 同 SB29(1154)
 同 SK105(1524)
 同 1区 (1529-1530)

石製品 3・金属製品

磁石 (1/3)

川久保 SB38(1148)
 同 SB44(1405)
 宮沖 SB04(1406)
 同 SD11(1528)



石鏝 (1/3)

川久保 SK327(1157)
 宮沖 SB02(1158)
 同 SB13(1159)
 同 SD10(1161・1162)
 同 1区 (1160・1164)
 同 1区トレンヂ
 (1163・1165)



鉄製品 (1/2)

川久保 SB09(1415)
 同 SB10(1419・1422)
 同 SB12(1414)
 同 SB18(1425)
 同 SB24(1427)
 同 SB33(1190)
 同 SB44(1423)
 宮沖 SB03(1195)
 同 SB04(1430・1432)
 同 SB05(1196)
 同 SB06(1192)
 同 SB14(1198)
 同 SB17(1194)
 同 SB19(1193・
 1199 ~ 1202)
 同 SB19・28(1203)



報告書抄録

ふりがな	なかのしかわくぼ・みやおきいせき
書名	中野市川久保・宮沖遺跡
副書名	千曲川管佐・柳沢堤事業関連 埋蔵文化財発掘調査報告書2 ー中野市内その2ー
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	99
編著者名	市川隆之
編集機関	(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388-8007 長野市篠ノ井布高田963-4 Ⅲ 026-293-5926
発行年月日	2013年(平成25年)3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
川久保・ 宮沖遺跡	長野県 中野市 豊津	202118	206	36° 46' 06" (世界測地系) 36° 45' 55" (日本測地系)	138° 19' 36" (世界測地系) 138° 19' 48" (日本測地系)	20040416～ 20041220 20050418～ 20051222 20060015～ 20061020 20070416～ 20070912	川久保遺跡 15,000㎡ 川久保遺跡 9,000㎡ 川久保遺跡 1,000㎡ 宮沖遺跡 9,470㎡	千曲川管佐堤堤 事業に伴う事前 調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川久保・ 宮沖遺跡	散布地 集落跡 水田跡 畑跡	縄文時代	陥穴2基	縄文土器、石器	
		弥生時代	土器集中15カ所(中期)、土坑20基(中期)、ビット100基(中期)、溝跡2条(中期)、焼土跡10基(中期)、竪穴住居跡(後期)1軒	弥生中期後半土器(梁形式)、弥生後期初頭土器(古田式)	千曲川沿いの低地が水田跡に利用された可能性があり、その脇の微高地で土器集中や焼土跡や土坑が検出された。弥生時代後期では天王山式土器片が出た。
		古墳時代前期	竪穴住居跡5軒、土坑3基、溝跡16条、水田跡4面、土器集中2カ所	土師器、土製品(紡錘車)、石製品(最打痕のある鎌等)	古墳跡等の低地に立地する水田跡が古墳時代前期に洪水で埋没している。
		古墳時代後期～ 奈良時代	竪穴住居跡51軒、掘立柱建物跡16棟、土坑5基、溝跡1条、遺物集中11カ所	土師器・黒色土器・須恵器、土製品(円面硯・刻書土器・紡錘車土師等)、石製品(滑石製模造具、紡錘車・砥石・石鉢・石鉢等)、金属製品(鉄鏃・鎌・刀子等)	集落跡は5世紀末～8世紀初頭頃まで連続し、竪穴住居跡は千曲川寄りまで広域に分布する。水田遺構は検出されなかった。
		平安時代	竪穴住居跡24軒、掘立柱建物跡2棟、土坑3基	須恵系土器・灰輪陶器・緑釉陶器、土製品(引口)、石製品(砥石等)、鉄製品(刀子・紡錘車・芋引金等)	9、10、11世紀の竪穴住居跡が検出され、11世紀の竪穴住居跡2軒で鍛冶炉が検出された。
		中世	掘立柱建物跡56棟、竪穴建物跡8棟、墓跡と関連遺構4基、土坑72基、溝跡29条、焼土跡34カ所、畑跡6面、水田跡6面	中世焼物、土製品(用網、石臼、土師)、石製品(砥石・石鉢、石臼、門石ほか)、鉄製品(ハサミ、鎌、短刀、紡錘車等)	耕作地が明確化し、継続的に維持される。段丘上へ水田域が拡大し、あわせて居住遺構も荒尾川土流圏を中心とするようになる。
		近世	掘立柱建物跡5棟、土坑21基、墓跡1基、溝跡15条、水田跡10面	近世焼物、土製品(鳥形土製品、上人形)、石製品(砥石・石臼)、金属製品ほか(鉄鍋・馬鋤・楔・キセル・銅銭・馬鈴・簀・櫛等)	水田域を再編成し、以後は継続的に維持される。また、洪水の少ない時期千曲川寄りの地点でキセル・銅銭・馬鈴・簀・櫛等)屋敷跡が検出された。
要 約		川久保・宮沖遺跡は荒尾川が千曲川と合流する地点周辺の左岸の段丘と氾濫原に位置する。縄文時代に段丘が形成され、弥生時代中期後半、古墳時代前期では河跡跡の低地などを利用した水田跡が認められた。洪水の少ない古墳時代後期～奈良時代にかけては千曲川近くまで竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの居住遺構が分布し、平安時代の竪穴住居跡も新給的に認められた。中世以後は平安時代に不明瞭であった耕作地が明確に捉えられるようになり、以後は継続的に利用されている。中世には部分的な水田域を狭くしながら、畑地と居住遺構が共存する景観であったが、やがて水田は段丘上へ拡大されたことが捉えられた。			

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 99

中野市川久保・宮沖遺跡
千曲川替佐・柳沢築堤事業関連
埋蔵文化財発掘調査報告書
—中野市内その2—

発行 平成 25 (2013) 年 3 月 21 日
発行者 国土交通省北陸地方整備局
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4
TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157
印刷 第一企画株式会社
〒380-0803 長野県長野市三輪一丁目16-7
TEL 026-256-6360 FAX 026-256-6385